



PL  
810  
A9  
1924  
v.1

Kawatake, Mokuami  
Mokuami zenshū

CALL NO:

AUTHOR:

PL  
810  
A9  
1924  
v.1

Kawatake, Mokuami

TITLE:  
Mokuami zenshū

EAS

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS BOOK

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY  
VOL. Also v.3,5,7,10,11,16,17

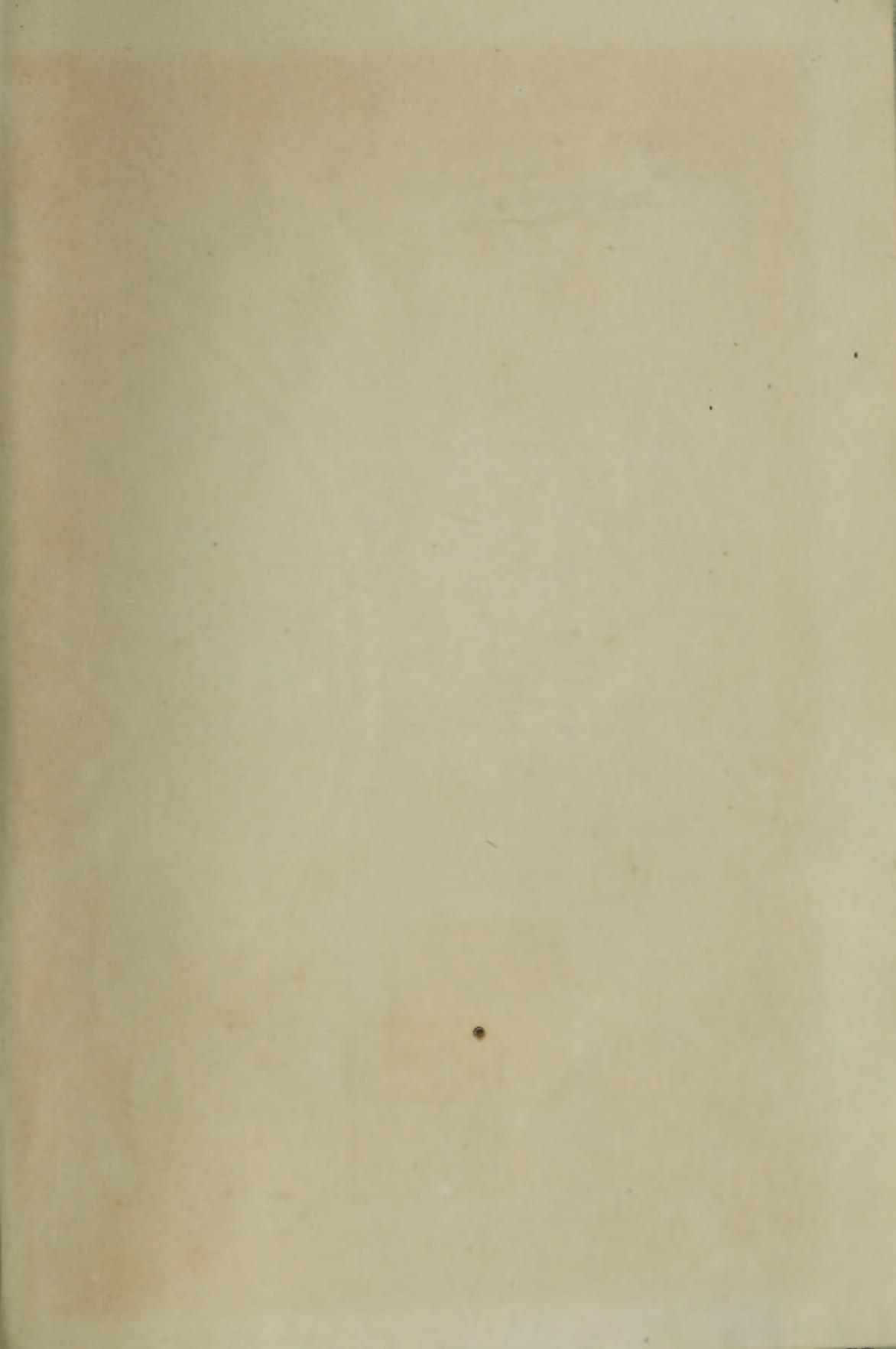
DATE CHARGED:

April 29/68

TICK AND  
INITIAL

ET





然何弥全集

第一卷



異各せるもの。

燧 罔 罽 自 翁 (ナナナ道(喜重))

借亭翁の自署也、燧罔罽は某門弟ニ與ヘシる袖簾肆ニ



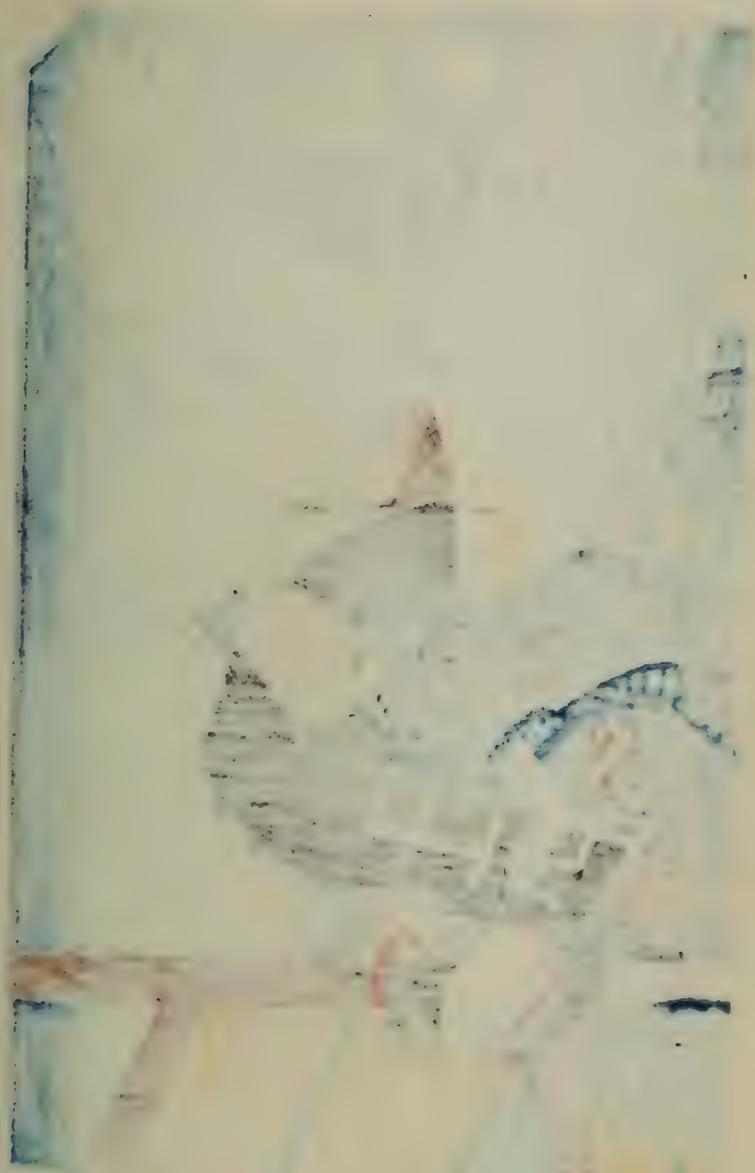
河竹默阿弥











## 凡 例

- 一、本全集は狂言作者河竹默阿彌の著作を輯録せるものにして、嘗て刊行せられたる「默阿彌脚本集」に増補修正を施し面目を一新せる復興的改版である。
- 一、編輯は大凡年代順としたが、獨立せる淨瑠璃物、所作事の類は、便宜上一卷に纏めることにした。
- 一、校訂に際しては、狂言百種及び其以前に一度印行せられたものは、多くは作者自身の校訂を経たものであるから、その印行本と原作稿本とを參酌したが、其他の諸作に於ては、原作稿本と舞臺使用本とを參酌して決定することにした。但し、風俗上差控へるのを至當とするの箇所は、主として糸女の改訂に據つて改訂した。然し、用字並に句讀、校正、解説等に関する責任は、一切編者にあることを明らかにしておく。
- 一、各作の扉に用ひたる勘亭流又は行書の題字は、作者の手蹟である。
- 一、各作に附したる解説は簡略で摘記同様のものに過ぎない。作者或は俳優との關係、史的事實等の詳細に就ては、默阿彌傳、演劇史、年代記の類を參照せられんことを希望する。挿畫の

説明は特殊なるもの以外、解説の末に附載した。尙各卷末に附した興行年表は、渥美清太郎氏の手を煩はしたものである。

一、本全集の成るにあつて、恩師坪内博士は終始懇篤なる示教と便宜とを與へられ、久保田米齋氏は装畫に、三村竹清氏は題字に、又三田村鳶魚、樋口二葉の諸先輩並に故竹柴其水を始め作者の門弟諸君が、編纂上に校訂上に、編者を裨補激勵せられたる事甚だ多い。茲に殊記して謝意を表する。

大正十三年七月中旬

編者

河竹糸女補修  
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集 第一卷

東京 春陽堂 刊行



PL

810

A9

1924

V. 1

默阿彌全集 第一卷目次

難 <small>あ</small> 有 <small>がたや</small> 御 <small>お</small> 江 <small>え</small> 戸 <small>どの</small> 景 <small>かけ</small> 清 <small>きよ</small> (岩戸の景清)……………一	舛 <small>のぼり</small> 鯉 <small>こひ</small> 瀧 <small>たきの</small> 白 <small>しら</small> 旗 <small>はた</small> (閻魔小兵衛)……………二	志 <small>し</small> らぬひ譚 <small>ものごと</small> (初日白縫譚)……………七	夢 <small>ゆめ</small> 結 <small>むすぶ</small> 蝶 <small>てふた</small> 鳥 <small>とり</small> 追 <small>おひ</small> (せつた直し)……………三五	蔦 <small>つた</small> 紅 <small>こもみぢ</small> 葉 <small>ぢ</small> 宇 <small>う</small> 都 <small>つどの</small> 谷 <small>や</small> 峠 <small>たうげ</small> (文彌殺し)……………五四	(附録) 興行年表……………八〇九
--	--	--	---	---	-------------------

挿繪目次

- ◎默阿彌の肖像と自署(卷頭、玻璃版)……………
- ◎閻魔小兵衛(着色木版、龜戸豊國筆)……………
- ◎岩戸の景清(歌川國芳筆、玻璃版)……………一頁の前
- ◎閻魔小兵衛(寫眞)……………二頁の前
- ◎白縫姫と春之助(國周筆見立繪、玻璃版)……………七頁の前
- ◎雪駄直しの序幕(龜戸豊國筆、玻璃版)……………五頁の前
- ◎長五郎と源之丞(寫眞)……………四頁の前
- ◎座頭殺し(龜戸豊國筆、玻璃版)……………五二頁の前



「岩戸の景清」は「難有御江戸景清」三立目(序幕)の返しとして新作されたもので、嘉永三年三月、作者三十五歳の折河原崎座に於ての作である。海老藏(七世團十郎)が追放赦免となつて江戸へ歸來したお目見得狂言として、「一谷嫩軍記」に熊谷と琵琶の景清とを勤めるに際し、その前曲として、またお目見得のダンマリとして附加されたものであるが、獨立したものとて取扱はれ、「海老藏出勤大出来大々當り」と豊芥子は歌舞伎年代記續編に記してゐる。一流れのまとまつた狂言として見ることはできないが、作者にとつては最初に獨立して執筆したものとせられてゐる。海老藏のその時の口上中に「……猶お土産狂言には一昨年彼地にて相勤めましたる琵琶法師の景清御覽に入れ奉ります。然るに右景清にてダンマリを一幕致しまするやう御好みに、何がなと工夫いたしましたる所、先年五代目祖父白猿向島へ隠居いたし再勤の折柄初代歌三豊國天の岩戸に見立て三枚續きに描きましてござります。が、この度二代目豊國又々天の岩戸に私を見立てましたる錦繪御評判にあづかりし由承り、これ幸ひと右の岩戸をダンマリに取仕組御覽に入れ奉ります。然れどもなか／＼五代目白猿同様と増長いたしましたる心にてはござりませぬ、たゞ錦繪に本づきましての儀にござりませれば左様思召しのほど願上奉ります」とある。これによつてこの作の由來が明らかになりてゐる。後年時として新歌舞伎十八番の中に加へられたりしたのも、かういふ來歴を持つてゐるからであらう。

書卸しの時の役割は、市川海老藏(悪七兵衛景清)、坂東彦三郎(北條時政)、尾上菊次郎(朝日)、市川九藏(秩父重忠)、市川鰻十郎(和田義盛)、岩井余三郎(衣笠)、尾上松祿(千葉ノ介常胤)、市川猿藏(江間義時)、坂東竹三郎(鴛尾義久)等。挿畫にした錦繪は國芳の筆であり、扉に用ひたのは書卸し當時の正本の表紙で、黙阿彌の手迹である。

大正十三年七月

校訂者





難有御江戸景清 (岩戸の景清 一幕)

江之島岩窟路の場

同 岩 窟の場

〔役名 平家ノ侍大將悪七兵衛景清、秩父庄司重忠、北條四郎平ノ時政、和田左衛門義盛、千葉介

常胤、江間ノ小四郎義時、長谷八郎、天城ノ猪ノ又、須ノ股運平、義盛妹朝日、重忠妹衣笠等〕

(岩窟路の場) 本舞臺一面の黒幕、上の方藪壘、下の方松の立木。總て江之島岩窟路の體。東西

の窓蓋をおろして暗くし、浪の音にて幕明く。と、花道より仕丁二人松明を照して先に立ち、後より

鎌倉の大名六人、小素袍、侍烏帽子小刀にて、各自横笛、笙、篳篥、羯鼓など樂器を持ちて出來り、

六一 此度我君頼朝公、平家追討の院宣を賜はり、先達御連枝たる蒲の冠者範頼公、まつた、九郎判官

義經公。

六二 須磨の内裡に立てこもる、平家の一門討取らんと、生田の森の岩にて、今合戦の最中と聞く。

六三 疾くより彼の地へ我君も、御出陣あるべきところ、このほどよりの御不例にて、矢尻を磨ぎしも

岩戸の景清

思はぬ延引。

次四 それ故日夜典藥も、耆婆扁鵲が醫療をたづね、お調進なすと雖も、

大五 更に藥の驗しもなく、次第に御不例甚しく、在鎌倉の大小名安氣ならざりし時も、

大六 三日三夜此方は、日月星は光りを失ひ、灯影なければ歩行もかなはず、前代未聞の天変、

大七 一時の博士に占はせしに、當江之島の岩窟に當り、金氣の光り現はるゝは、

大八 まさに不思議の一つなりと、博士の教へに案の如く、岩窟の口を磐石にて、

大九 鎖して通路留めしは、これ凡人の業ならず、

大十 辨財天女の戒にて、神慮にかなはぬことあらんと、

大十一 すなはち今日この所へ、頼朝公の御名代として、秩父の庄司重忠殿、

大十二 まつた北條和山殿始め、我々どもに至るまで、神を勇めの神事の役。

大十三 最早、奉幣祈念の刻限、

大十四 諸侯の御入りに間もあるまじ、

大十五 別當方にて相待ち申さん。

大十六 左様ござらば安西殿、

大いづれもござれ。

ト皆々上の方へはひる。とばたくになり、花道より須の股運平、水波軍兵の装へ蓑笠を着て松明を點し出來り、呼子の笛を吹く。これにてパツタリと音して、上手の藪疊を押分け、長谷ノ八郎忍びの装にて出來る、運平是を見て、

運平 長谷様。

長谷 こりや、へトおさへ、須の股運平、合圖の呼子は。

運平 はッ、火急のお使一大事、須磨へ範頼義經二手に別れて押寄せ來り、追手は範頼搦手は軍慮に敏き義經故、要害堅固といひながら如何なる手段あらんも知れず、それ故御一同方公達方、景清様をお待兼ね、急ぎ彼地へ御越しあるやう、お迎への爲め參つてござる。

長谷 む、すりや源家の奴輩が須磨の内裏へ押寄せしとな。して、勝利は何れなるぞ。

運平 いまだ勝負は分からねど、いかに要害堅固なりとも油斷大敵。して、景清様には。

長谷 む、主人景清は先達都を開きしその砌、この鎌倉へ忍び來て、先づ頼朝を討取らんと姿を替へて狙ひしかど、大望成就の時を得ず、それ故此の江之島の岩窟に隠れ、妙音天女に祈誓をかけ日に例へたる平家の重寶、小鳥丸の御劍八月の兎の血潮を灑ぎ、日月合して蝕となる天地の道理、

劔の威徳に三日三夜世界はくらがり、この虚に乗つて調伏なし、源家の根を斷ち葉を枯らさん、かねて主人の計略なり。

運平 すりやこの如きくらがりは、劔の威徳でござりましたか。

長谷 いかにも。汝は人目にかゝらぬ中、夜を日について須磨へ立越え、この地の様子を注進せよ。我

は主人ともろともに、後より須磨へ立越えん。

運平 然らば、拙者はこれより直に

長谷 片時も早く、

運平 心得ました。(トこの時以前の仕丁出て)

仕丁 様子は聞いた。(トかゝるを、長谷抜討ちに切倒し)

長谷 行きやれ

運平 はッ。

ト運平は逸散に花道へはひり、長谷は上手へはひる。とこれにて黒幕を切つて落す。

六一

(岩窟の場) 本舞臺一面に岩山の景にて、真中に七五三を張りし岩窟、この前に大なる大岩立

てかけあり。總て江之島岩窟の體。上下に錦を摺込みし幕を張り、左右に四神を飾り、舞臺前上下に  
大箒を焚き、兩窓蓋を下ろし波の音にて道具納まる。

ト波の音打上げ大薩摩になる。

夫神代の昔、天の岩戸の常闇に、八百萬神の神樂を奏し、常世となせし例に倣ひ、今鎌倉  
の天變に月日の光り蝕の如く、晝夜の別あら海に、かの常闇と岩窟の、神をいさめの庭神樂

ト神樂の入りし追上の鳴物になり、舞臺真中へ北條時政錦の袋入りの鏡を三方に載せて立ち、上手  
に和田義盛の妹朝日白き幣を持ち、下手に重忠妹衣笠青き幣を持ちある。上の方のスツボンより  
は和田義盛しでの附きし袖を持ち、下の方のスツボンより、千葉介常胤鉾を持ち、三方一緒に追  
上がる。これと同時に花道へ秩父庄司重忠錦の袋入りの曲玉を三方に載せて持ち、下手に江間小四  
郎義時、荒事の装にて白き鶏を抱へる見得にて、双方見合つて追上がる。

重忠 まことや唐土漢の高祖は、三尺の劔を以て四百餘州を切りなびけ、つひには王の位に上る。

時政 今我が君朝頼公、一張の弓の雄飛にて、君の宸襟安んぜんと、

朝日 驕る平家を追討の、御仁惠厚き御身さへ、物に障りの花に風、

衣笠 月に浮雲御不例に、都の空へ御出馬も、昨日と過ぎて今日は又、

義盛 諸山の奉幣諸寺の祈念、丹誠怠ることなけれど、

常胤 神明佛陀の守護もなく、心ならざる時も時、

義時 陰陽二精の光りを失ひ、三日三夜闇夜の如く、

朝日 かゝる不思議は世の憂ひ、

衣笠 急ぎ岩窟を開けよと、

義盛 嚴命下り神代なる、

常胤 天の岩戸を開きたる、

義時 例に倣ふ神勇め。

重忠 卽ち、君の名代として、秩父庄司次郎重忠、

時政 神事の補佐は元老たる、北條四郎平時政、

朝日 鉦女の舞も今様に、和田義盛が妹朝日、

衣笠 同じ役目も不束ながら、秩父重忠が妹衣笠、

義盛 路次の警衛非常を守るは、和田左衛門義盛、

常胤 添役として、千葉介常胤、

義時 末座に控へし某は、岩戸を開く手力雄、鈍き力も有難き、このお目見得に御最良の、惠を江間

小四郎義時、

時政 その他三浦小玉黨、

義盛 在鎌倉の大小名、

常胤 神樂の役にたつか弓、

朝日 矢なみつくろふ武士も、

義時 貝鐘ならぬ、

衣笠 笙箏、

重忠 實に勇ましき、

皆々 神いさめ。

岩うつ波にこだまして、心耳を澄ます江之島の、神の岩窟を物凄き、

トこれにて花道の時政、義時舞臺へ来る。重忠思入あつて、

重忠 あれ見られよ方々、神仙自然の岩窟へ大磐石を鎖せしは、よも凡力にはあるべからず。

時政 何さま、三日三夜の常闇に、それこれ思ひ合すれば、

重忠 夫の神代の故事に、天照神素盞雄尊の悪行を憤られ、

岩戸の景清

時政 天の岩戸へ籠りたまひ、

衣笠 八百萬の神々が、

義時 庭上左右に篝を焚き、

常胤 天の鈿女のわざおぎに、

義時 御神岩戸を開けたまふ、

重忠 それは遠つ神代の昔、

時政 これは目前人の世に、

朝日 月日の光りあらずして、

衣笠 三日三夜の常闇は、

義盛 世にも稀なる、

常胤 天變不思議。

ト 此時 鷄時をつくる。

重忠 最早長鳴鳥の聲を發せば、

義時 方々神樂の用意めされい。

ト下座にて大勢「ハア、」と答へありて、本行の神樂になり、朝日、衣笠立つて舞はうとする。この時ドロくになり、兩人眩めきたちくとなる。これにて左右の篝火一時に消える。皆々きつと思入。と、この時正面の岩窟の間より後光さす。

重忠 や、岩戸の内より赫々と、金氣の光り現はれしは、

時政 妙音天女の感應なるか。

義時 何にもせよ、いぶかしきは岩窟の内。

ト義時つかくと行き、磐石へ手をかける。大ドロくにて後光は消え、義時磐石を引き退ける。岩窟の内より景清大百日にて、錦の袋入りの小烏丸を持ち出て、前の岩へ片足踏分出し、小烏丸を抜きかけキツと見得。これにて烏澤山に舞ひ上がる。兩窓蓋を明けて明るくなる。皆々景清と顔見合せ扱ばといふ思入。景清小烏丸をしゃんとさす。これにて又兩窓蓋をおろし、元の暗黒になる。夜神樂の入りし鳴物になり、ダンマリ模様立廻りにて景清は皆々の中を縫ふ。此内に天城ノ猪の又出て景清へかゝり、小烏丸へ手をかける。景清これを振放すと、猪の又は劍の紐を持つたまゝ下の方へ轉る。景清は小烏丸を腰にさし、皆々を縫つてよろしく立廻り、よきほどに長谷八郎窺ひ出て、

長谷 重忠観念。

ト重忠へ切つてかゝるを、重忠身を躲し突きやる。義時長谷を引附ける。此の時景清は花道へ駈れて

時政  
重忠

まさしく平家の。

行く。猪の又劍の紐を持ちたるまゝつか／＼と行き組附くを、景清小鳥丸にて、拔打に切倒し、猪の又劍は下の方へ見事に轉る。これにて鳥笛になり、兩窓蓋を明けて明るくなる。昔々景清をすかして見て、

トこれにて景清ギツクリして、小鳥丸の袋にて太刀を押へるを木の頭、兩窓蓋をおろして暗くなり、景清は血を拭ふ思入。舞臺にては長谷八郎跳ね返すを、義時片足かけて見得。昔々は景清の方を見込み、引張りの見得よろしく、ドロ／＼カケリにて、

ひやうし幕

ト幕外にて、景清血糊を拭ひし劍を見る。これにて兩窓蓋を明けて明るくなり、鞘へ納めてきつと見得。鳴物になり、花道へ振つてはひる。跡シヤギリ。

岩戸の景清（終り）

年々歳々ありふれた隣同志の世話場をば仕組  
 を替へて地獄極樂しかも所は龜井戸の娑婆と  
 冥土の境町閻魔の小兵衛と名もうれた鬼の女  
 房に氣まぐれな三途おばあが筒もたせ手切に  
 取りし百兩の金に心もくらまぎれ廓をぬけて  
 若草が忍ぶ浮世の伊之助と名のらぬ先は兄弟  
 と知らぬが佛西念がぐぜいの船のだんまりほ  
 どきもとは平家の某と二十餘年の夢物語かは  
 つた趣向を三立目より第二番目へつゞき狂言

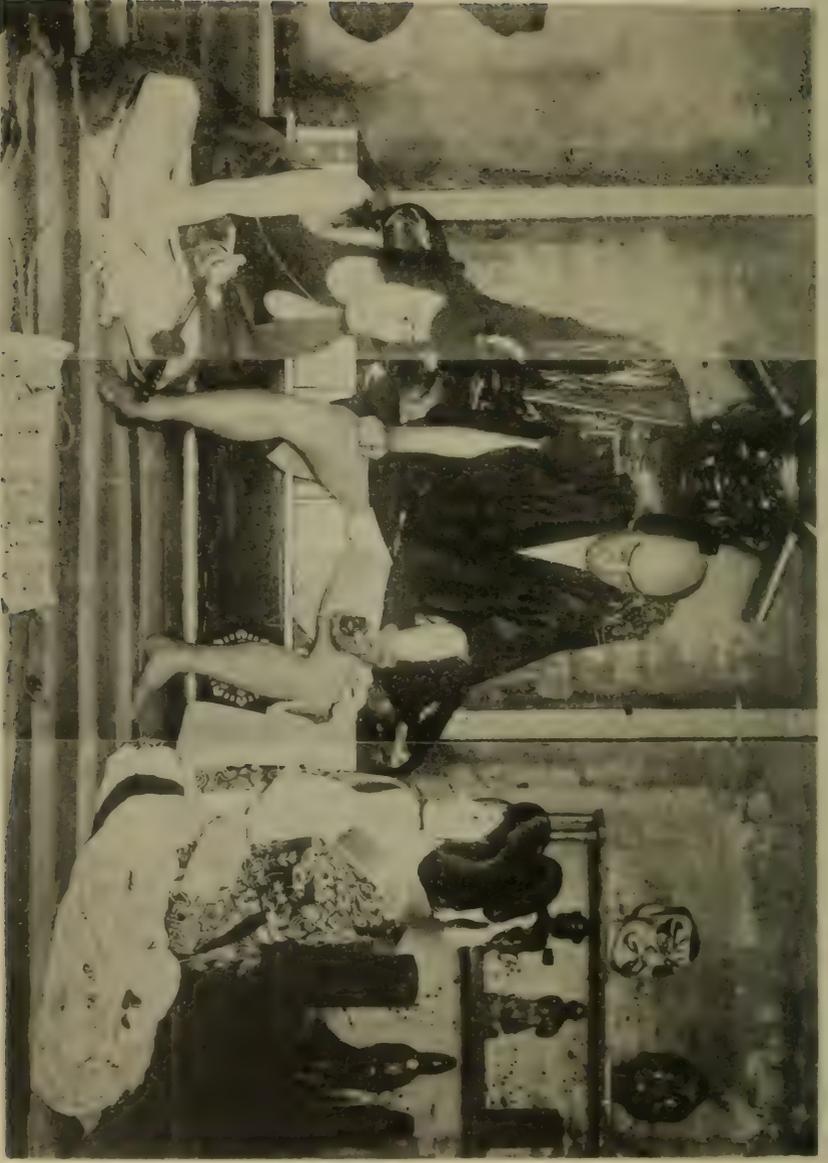
升  
 舞  
 籠  
 白  
 旗

「閻魔小兵衛」は嘉永四年、作者三十六歳の十一月、顔見世狂言の二番目として書卸されたもので、世話物に於ける處女作といふことになつてゐる。隣同志といふ趣向はさまで珍らしいことではないが、それを地獄極樂と對照せしめたところに作者の三題斷的趣向の才が認められる。それに年の暮、節分、龜井戸の神事などを巧みに取入れた寫實味は、劇としてのみならず、一種の世相史、風俗史としても亦鑑賞するに足るであらう。稿下當時世上の好評を博したのも無理はない。結末に至つて大時代になつて納まるのは、一番目の筋を受けたのと十數年來途絶えてゐた顔見世狂言常例の形式を復活せしめたものである。尙この作は作者の見聞を基礎として、構想されたものであると言はれてゐる。作者がある門弟の件に就いて龜井戸の佛師屋を訪れたところが、その佛師屋は狭い棟割長屋に住んでゐて、部屋の中には塗りかけの閻魔だの、箔をおきかけの佛像などがごちやく／＼に置かれてあつたのを、印象深く見て來たのでそれを役に立てたのだといふ。

書卸しの時の役割は、市川海老藏(佛師屋閻魔小兵衛實ハ感中次郎盛次)、八世市川團十郎(船頭浮世伊之助、梶原源太景季)、市川九藏(修行者西念實ハ主馬判官盛久)、若井条三郎(若菜屋の若草、小兵衛女房三途お婆お六)、尾上新七(三位中將重衡)、市川團之助(吳羽ノ内侍)、淺尾奥山(番頭ひね六)、河原崎長十郎(蝶々賣)等である。口繪は龜戸豊國筆の錦繪(小兵衛、西念、若草、伊之助)であり、挿繪は大正九年現左團次、幸四郎等上演の際の舞臺寫眞である。

大正十三年七月

編者誌す





弁鯉瀧白旗のまりこのにまのしらはた  
(閻魔小兵衛二幕)

序幕  
向島道行の場

(淨瑠璃) 若菜屋若草、浮世伊之助、  
濡嬉、浮寐鳩 (清元連中)

〔役名〕 閻魔小兵衛、浮世伊之助、修行者西念、三位中將重衡、番頭ひね六、貨物屋眼七、若菜屋の若い者喜助、同多助、同米吉。若菜屋の遊女若草、吳羽の内侍、蝶々賣眼玉の長吉等。〕

(源兵衛堀の場) 本舞臺後ろ黒幕、上方橋の杖、柳の立木、よき所に平家の落人三位中將、吳羽の前の人相書を立て、總て源兵衛堀夜の體。通り神樂時の鐘にて幕明く。と上下より一文獅子赤鯛豆がら柘賣りの仕出し行違ひてはひる。と花道より若い衆三人、藏前伊勢屋と記せし弓張提灯を持ち、下男の装にて、鉦太鼓を打ちながら出來り。

○ 迷兒のく番頭さんやい。

△ ひね六さんやアい。

ト呼び、後より眼七貨物屋にて出來り、弓張提灯をすかし見て、

閻魔小兵衛

眼七 おいく、そこへ行くのは、藏前の米伊勢屋の若い衆ぢやあないか。

ト是にて三人後を振り返り見て、

□ お前はたしか、貨物屋の眼七さん、どこへ行きなさる。

眼七 おいらアちつと人を捜すのだ。まあ向うへ行かう。(ト皆々舞臺へ来り)

○ そしてお前は、誰をさがしなさるのだえ。

眼七 聞いて下せえ、貴様達の所の番頭ひね六殿が、昨日おれが所へ来て、今夜年忘れの茶番があるから、心中者の衣裳と毛氈を貸してくれろと言はつしやるから、毛氈はあるが衣裳が家にないから、仲町の長岡屋で、帯から袴袴までそつくり借りてやつて、今朝返す約束だから見世へ行つたところが、昨日出たきり歸らないとのこと、ついぞ茶番などはしなさらない人だから、もし本當に心中でもされては大變だから、今日一日方々さがして歩くが、今もつて行方が知れない。見れば貴様達も、迷兒を捜す様子だが、誰をさがすのだ。

△ 左様さ、お聞きなさる通り、番頭さんが昨日から歸らないから、迷兒に出ましたのさ。

□ 聞けば、家の旦那の鮫靴の脇差を持出したさうだから、それで分かつたわえ。

○ そして横町の花屋で、櫂を一本買ったといふことだから、それぢやあ心中に、出たのかも知れな

いて。

眼七 それぢやあいよく、心中しんぢゆうに違ちがへねえが、借りかりてやつた代物しろものまで玉たまなしにされちやあ、そいつは大おほ變へんだわえ。

ト下手しりぞより喜助きすけ、多助たすけ、米吉よねきち若わかい者の裝なり、若菜屋わかなやといふ張ゆるみをさげ、鉦太鼓かねたいこをたゝきながら出いで、

三人 迷兒まいてこのく、若草わかぐささんやアい。

ト呼よぶ。皆々みなみな見て、

□ お前方まへがたは、どうか吉原よしはらの衆しゆうだが、やつぱり搜さがしものかえ。

眼七 貴様きさま達は若菜屋わかなやの若わかい衆しゆうだが、駈落者かけおちものでもあつたのか。

喜助 お前まへさんは米屋こめやの番頭ばんとうさん。お聞きなさい、お馴染なじみの花魁おいらん若草わかぐささんが、暮方くれがたから駈落かけおちさ、それで

搜さがしに出でましたのさ。

眼七 あの若草わかぐささんは、當時たうじ評判やうばんの花魁おいらんだが、悪足わるあしでもあつたかね。

多助 左様さやうさ、堀ほりの船頭せんとう浮世うきよ伊之助いのすけといふのが足あしだが、あの妓こも借金しやくきんが多いから、心中しんぢゆうでもしなけりや

こ あいゝと、内證ないしやうでも心配しんぱいさ。

米吉 もし、お前まへさんは藏前くらまへのお方かただが、お家うちにも駈落者かけおちものがありましたかね。

△ 左様さ、番頭のひね六さんが昨日出たきり、今聞けば心中の衣裳を眼七さんから借りたとのこと。

○ もし心中でもしやあしないかと、それで捜して歩くのさ。

喜助 それぢやあひよつと若草さんも、ひね六さんと心中する氣ぢやあねえか知らん。

眼七 そんなら、あのひね六さんは、お前方の家へ客にあがるのかえ。

多助 左様さ、若草さんのところへ、よつほどあつくなつて來なさいますよ。

眼七 それぢやあいよく番衆は、若草さんと心中に違えねえ。さあ、大變だ。貴様達と一緒にさか

さなくツちやあならねえ。

□ そんならこれから、向島の方を捜すがようござりませう。

米吉 然し、まだ日が暮れて間もないから、わしどもは此近所をがん張つてゐるから、お前方は向島の

方へ行きなせえ。

○ そんなら、あつちを一ぺん捜して見ませう。

眼七 おいら達は小梅から、こゝら近所を捜して見よう。何にしろとんだ人に損料物を借りられた。

皆々 迷兒のく番頭さんやアい。

皆々 若草さんやアい。

眼七 ひね六さんやアい。

ト皆々呼びながら上の方へはひる。後説教が、りの唄一くさりあつて、時の鐘はたくくにて、花道よりひね六、派手なる衣裳へおしよぼからけ頬冠り一本差し櫛を腰へさし、毛氈を肩へかけ口紅の文を持ち、走り出来り躑躅思入あつて、

ひね 今鳴る鐘は、ありや淺草寺のたしか五つ、若菜屋の若草が心中してくれいと頼みの文を、船頭の

伊之助に持たしてよこした故、あまり死にたうもないけれど厭とも言はれず、心中の衣裳を貨物

屋の眼七に借り、せりふは芝居の狂言方に書拔をかいて貰つたが、この若草はもう來さうなもの

ぢや。待たるゝより待つ身になるなどは、よう言ふたものぢやなあ。(ト又唄になり向うへ思入あつ

て舞臺へ來り。) こゝはもう源兵衛堀、河童の悴てはなけれども、こゝで待つてゐてくれるとの文、

もしひよつと所でも違ひはせぬか。もう一ぺん讀んで見よう、それがよい。(ト件の文をひろげ

見て) 何ぢや、『淨瑠璃名題。東西々々』(ト下にあて、)『淨瑠璃名題、若菜屋若草浮世伊之助』濡

嬉浮寐鳩。淨瑠璃太夫清元太兵衛連中、相勤めままする役人若井兼三郎、若太夫長十郎、市川團

十郎。『こりや若草の文と思ひのほか、どうして淨瑠璃の觸書と間違うたやら、それにしても

淨瑠璃で兼三の相手ならば、奥山でありさうなもの、團十郎とは、これもやつぱり間違ひと見え

ろわえ。

ト手を組み思案の思入。通り神樂になり、上手より以前の喜助等三人に眼七附いて出て來り、ひね六を見つけ、

三人や、見付けたく。ひね六さんだく。

眼七 何だ番頭だ。こうくひね六さん、お前はとんだ人だ。損料物を借りて心中しようとは、めつばふかいな、さあ脱ぎなせえく。

ひね六 これく、待つて下せえく。今心中に出たばかり、まだ心中はしないのだ。

眼七 ざれてたまるものか、さあく脱ぎなせえく。

多助 これひね六さん、花魁はどこへこかした。さあ在所を言ひなせえく。

ひね六 なに若草か、おれも其の若草の來るのを、待つてゐるのだ。

米吉 たは言を言ひなさんな、お前が若草さんを連れ出して、待つてゐるも氣が強え。

喜助 さあ有様に言ひなせえ。どこへやつたく。

ひね六 やあく、そんなら若草は、約束違へず駈落したのか。

多助 駈落かも凄じい。さあ在所を言ひなせえく。

ひね あゝ可愛や、おれ故、太い苦勞をしやるなう。

三人 べらほうめ、たは言つかずと、早く在所を言へ、在所を言へ。

ひね いやゝ、心中しようと文をよこしたばかり、若草の在所は知らないゝ。

米吉 なに知らねえことがあるものか、言はずば締めあけても言はせるぞ。

眼七 あゝこれ、このまゝ締められちやあ衣裳が代なしになる。裸にしてから締めるがいゝ。

三人 さあゝ、裸になれゝ。(ト皆々衣裳を脱がせる。)

ひね あゝこれゝ、それはあんまり情ない。待つてくれゝ。

眼七 やかましい、ふんばけゝ。

三人 合點だ。

ト皆々ひね六の衣裳を脱がせる。ひね六襦袢一つになる。三人在所を言へゝと、有合ふ棒にてひね六をくらはす、ひね六やうゝ逃げて下手へはひる。三人は後を追つてはひる。此内眼七衣裳を疊み風呂敷へ包み、

眼七 これゝ、衣裳は取つたが、損料を取らにやあならねえ。オ、イ番頭、待つてくれゝ。

ト眼七下手へ追ッかけてはひる。これにて前の道具を引いて取り、黒幕を切つて落す。

(向島平岩河岸の場) 本舞臺三間常足位の草土手、眞中畫心に坂道、向ふ船枚の堀、此内二

間大和葺の二階屋、軒口に平岩と記せし提灯をかけ、一面に伊豫簾をおろしあり、上の方一間出茶屋

の臺、是れに葎簾を立廻しある。下の方は松、紅葉の立木、舞臺前亂杭付の河中、半月出てをり、總

て向島平岩河岸の體。と二階の伊豫簾を捲上げる、清元連中袴羽織にて居列び、淨瑠璃になる。

いにしへを捨てばや義理も思ふまじ、朽ちても消えぬうき中に、浮氣を隅田の土手の箱、

解けた二人がふくさ帯、夢も結ばぬ假枕、

ト出茶屋の葎簾の蔭より伊之助廣袖船頭の装、若草鬮拔女郎の装、伊之助の裃を掛けて出来り、

伊之若草、

若草伊之助さん、

伊之これ、しづかに言や。(ト思入。)

水の出初の竿半誰に遠慮も棚なし小舟、もやひに搖れて散り紅葉立田にあらで綾瀬川、夢

の浮世の伊之助に、まだもえやらぬ若草が實とまことの厚氷り、行方當途も長堤よそ目にそ

れと心中も、死ぬ覺悟こそわりなけれ。

トこの文句の内兩人よろしく舞臺へ來り、

若草 今夜内證の年忘れのどさくさまぎれ、首尾よく大門を抜けて、こゝまでは逃げ延びんしたが、是からどうしなますえ。

伊之 どうと言つて見留も付かねえ。極樂を當に心中するものもこけな沙汰、當分影をかくした上話し合をつける覺悟で、あの米伊勢屋の番頭をだしに遣つて、彼奴が連れ出した積りにすつほり書いた狂言よ。

若草 そりやようざますが、江戸の内にかくれて居いしては。

伊之 なに、そこが燈臺元暗しと遠ッ走りをするより、近所にかくれてゐる方が結句知れねえのよ。

若草 さうして、どこへ連れて行きなますえ。

伊之 その行く先は案じることはねえ、おれが親父が世話をした、西念といふ同心者が、境橋に居るか、當分そこへ行くのよ。

若草 さうした所がひよつと話し合がつかず、もし吉原へ歸るやうにでもなりんと、わつちア生きてゐる氣はありんせんよ。

くどくといふも愚痴ながら、いつぞや下の巳待の夜旦那さん方藝者衆の多くのなかでござん。面白い座の持ちやうちや、好いたらしいと陰言にお前の真似を樂しみにせぬ間は

暫しばしもないわいな。假令たとへ心にこますとも粹まなお前のことなれば、苦界くがいする身を立たてるとして、義理ぎり一遍いっぺんの仇口あだぐちは結句けつご心こころのもめるほど、苦勞くろう苦患くわんに引きかへて、一緒しよに暮くす嬉うれしさ、番つがひ放はなれぬ風情ふぜいなり。(ト兩人りやうにんよろしく思入おもひいれ)

かゝる所ところへ向島むかしま、顔見世かみせだけに商人あきんども、棒ぼうの素顔すかほに掛値かかけなし、負まけぬ氣性きせうの小まじ者もの、ト合方あつかひ通り神樂かみがらにて、花道はなみちより蝶々てふふく賣眼玉うりめだまの長吉ながきち手甲てがし取とり、手拭てぬぐいを冠かぶり、大おほきなる舞度まひだに眼玉めだまの蝶々てふふくをさしたるを擔かぎ出いで花道はなみちに留とどまる。

蝶々てふふくとまれぢやなつけんけれど、日本堤にっぽんづつみで昔御むかしのみ存ぞんの仕出しだしぞめきの客きやくさん方も、格子こしで袖そでを引ひけ四つ過すぎに、それとまつた、朝あさの歸かへりに持もて、は睡ねい、眼玉めだまの蝶々てふふくの諸翅もろつば振りかたけたる戻もどり足あし、(ト蝶々てふふく賣振うりふりあつて舞臺ぶたいへ來くる)

伊之い(見みて)誰たれかと思おもつたらば、いつも土手どてにゐる眼玉めだまの蝶々てふふく屋やさん、今時分いまじぶんどこへ行いつたのだえ。長吉ながきちあいさ、明日あしたは年越としこしで龜井戸かめいどの豆時まめときだから、錢ぜにまうけをしようと思おもつて、地所ぢしよを取りに行いつて、それから寺島てらじまの平作へいさくさんの家うちへ、用ようがあつて今歸いまかへる所ところだが、お前方まへがたは堀ほりの船頭せんとう衆しゆに吉原よしはらの花魁おんな、今時分いまじぶんこゝら邊あはりにゐるからは、こいつアてつきり心中しんぢゆうだなく。

伊之いどうして、顔見世かみせさうく縁起えんぎの悪い、首龜くびかめ々々。

若草 今時向島で、心中なんぞをする野暮はありんせんよ。

長吉 こいつア一番あやまつた、扱はお前方は駈落だね。

伊之 まアそんなものさね。

長吉 二人こつそり手を取つて、こゝから直に隨徳寺、誰憚からすちんく／＼かも／＼、え、畜生め。

〽さつてもうまい舌鼓、打つは迫灘の鬼打豆よ、福は内外の目顔を忍び、連れて軒端の梅松竹で、三々九度の盃に四海なみ／＼お銚子の、變らぬ妹背色なほし、立てる屏風の蝶番ひ、女蝶男蝶のたはむれ遊び。

ト蝶々賣よろしく。是より竹の蝶を指金のやうに獨りで遣ひながら、振になる。

〽戀すてふ戀の胡蝶があなたへひらり、こなたへひらり、ひらりひらく、ひらく／＼ひらり風の蝶、味噌を揚羽の蝶花形か、八つ花形の香にめで、猿若町の色くらべ、古い文句でやつてくりよ、(トよろしくあつて、凹舎節の振になる。) 〽花に蝶々はわしや氣がもめる。來てはちらちらまよはせる、いてきちやぐんく／＼オヤヤレく／＼さうだぞく。沖のかもめがなくのも道理、水にあはずに暮らさりよか、いてきちやぐんく／＼オヤヤレく／＼さうだぞさうだぞ、さうだんべい。〽うかれていつまで長遊び、ゆるりとおしけりお樂しみ、獨りちやち

やくちや蝶々賣、羽風こぼして走り行く。

ト蝶々賣辨慶をかつき上手へ走りはひる。兩人後を見送り、

伊之あの奴め、獨りしやべつて行つてしまつた。然し蝶々は祝言の附物、いゝ辻占ちやあねえか。  
若草そりやさうと、お前の心安い坊さんの所へ行つても、窮屈でありんせうねえ。

伊之なに、氣は詰まりやあしねえが、狹え家だからどうせ樂にやあ行きやあしねえ。是から龜井戸までよつほどあるが、そんな自墮落な装ちやあ仕方がねえ。この出茶屋の中で支度をしよう。

若草わちきアどうしてよいか、分かりイせん。

伊之おれが着物をきせてやらう。いや、とんだ厄介者だ。

若草そんならおもひれ歩けるやう、着物を着せてくんなましよう。

更けて山谷に打つ紙のきぬたの音もはや絶えて、ぞつと身にしむ小夜嵐、雲足早き雨雲に  
ねぐらの闇やこもるらん。

ト兩人立上り、思入あつて出茶屋の内へはひる。これにて二階の伊豫簾をおろす時の鐘合方になり、

花道より三位中將重衡海鏡頭巾笈拵にて、吳羽の内侍さら毛髪笈拵、兩人とも胸札草鞋、藁づとを

背負ひ、柄杓を持ち出來り、

三位 今日も最早暮過ぎ、宿り定めぬ旅の空、これこの所は東に名高き隅田川、世にある人は詩歌に讀みて慰めど、今は日蔭の二人が身の上。

吳羽 落人の身の後や前、行きなやみたるうき旅路、都と聞くもなつかしき、鷗とやらの羽風さへ、もし、追手かとおどろかれ、

三位 一足づゝに消えて行く、霜の劍を踏む心地。

吳羽 お心細いはお道理ながら、人目にかゝらぬ其内に、

三位 少しも早う、今宵の宿りへ。

吳羽 我君さま、

三位 あゝこれ、さあ、おじやいなう。(ト兩人舞臺へ來り、立札をすかし見て) 何々『平家の落人三位中將重衡、吳羽ノ内侍人相書、』

吳羽 やゝ、こりやこれなる札に、人相を記しおき、

三位 訴へ出る其者には、恩賞なさんとこの立札。

吳羽 扱は我らが行く先々、草を分かつてきびしき詮議、

三位 かくまで平家を苦しむる、無得心なる源氏の輩、

吳羽 御蓮の末とは言ひながら、

三位 是非もなき身の、

吳羽 成行ぢやなあ。

ト三位中將以前の人相書きと錦の襖紗に包みし系圖を出し、

三位 それに就いても大切な、肌身はなさぬ家の系圖、よく最前落しもせなんだ。そもじも路用に貯へ

し、金子は所持してゐるやらうの。

吳羽 その路用は、妾がしかと肌身に付け、こゝに持つてゐますわいな。

ト吳羽懐中より、紫の襖紗に包みし金子を出す。此時 兩人の非人窺ひ出で、

非人 扱こそ落人、路用の金を。

ト吳羽が持ちし金を取る。三位中將驚き其手を捉へ、

三位 や、狼藉者、ゆるさぬぞ。

兩人 何を小癩な。

ト三位中將金を懐へ入れる。非人は引出さうとして系圖の一卷を引出し、

非人や、こりや巻物。

三位 南無三、系圖。

ト取返さうとするを非人系圖を下手へ放り、三位中將の懐へかゝるを支へる立廻り。此内花道より閻魔小兵衛、どてら、三尺、羽織を引かけ手拭を冠り、古き位牌を澤山繩にてからげ肩へかけ、小提灯を持ち出來り、この様子を見て舞臺へ來り此中へはひり、兩人を圍ひ位牌にて非人をくらはす。これにて非人下手へ逃げてはひる。此中三位中將は吳羽に囁き、吳羽は金を懐へ入れる。小兵衛思入あつて、

小兵 いやはや、途方もねえ奴等だ。(ト提灯にて兩人を見て) コウノ、若い旅の人、あぶねえことだ、何ぞ取られはしなさらねえか、もうノ、怖いことはないから、こゝへ來なせえ。

三位 (思入あつて) はい、どなたかは存じませぬが、危いところへおいで下され、夫婦の者が難儀をお救ひ下さりまして、有難う存じます。

小兵 はい、わしは此の境橋にゐる、閻魔小兵衛といふ貧乏佛師屋だが、眼玉は大きいが怖い者ぢやあねえが、見りやあ夫婦連れの願禮衆、宿を取りおくれ、こゝらへ野宿をする積りだね。

三位 左様でござります。勝手知れざる夜の道、狼藉に出逢ひ大切なる、いや、少しばかりの貰ひ溜を、すでに取られんと致せしを、あなたがお助け下さりました故、これ女房あなたへお禮を。

ト此の前より吳羽瘰のさし込み、段々苦しき思入。三位中將驚き、

これ女房、どうしやつた、こりや、持病がおこつたのかや。

小兵（この様子を見て）お、御内儀は瘰が起つたさうだ。やれく可愛さうに。（ト提灯を松の枝へかけ  
吳羽を介抱して）こりや大そりな瘰だ。これく、反つちやあ悪いく。これ御亭主さん、薬はな  
いか薬はないか。

トこれにて三位中將懷をさがし、人相書を取落す。

三位 はい、折悪う薬をみないたしました。

小兵 そいつは困つたものだ。おれも薬は持たず、あ、これ、だいぶ差込む様子だ。反つちやあ悪い悪  
い。

ト言ひながら吳羽の瘰を押すとて懷へ手を入れ、以前の金包を探り見て思入。

三位 これはく、御介抱下されまして有難うござります。これ女房、心をたしかに持ちやいなう。

小兵 これく歯を喰ひしげる様子だ。せめて水でも飲ませてえものだ。お、幸ひの川水、御亭主お前  
柄杓で汲んで來なせえ、早くく。

三位 心得ました。

吳羽や、こりや我君を。

ト三位中將とつかはと柄杓を持ち、前なる川水を汲まうとする。小兵衛吳羽を抱へながら三位中將を川中へ蹴込む、この音に吳羽おどろき見て、

ト寄るを小兵衛懐の金を引出す、吳羽驚き其の手へ繩るを酷く突きとばす。これにて吳羽よろ／＼と川端へ倒れるを、小兵衛同じく川中へ蹴込み川を見込む。是にて提灯の明り消え、本釣鐘忍が三重になり、下手の蘆原を押分け、西念鼠木綿の着附同じく手甲脚絆誂への頭巾、六阿彌陀緒代建立といふ幟を持出る。出茶屋の霞簀をばら／＼と倒して伊之助若草の手を取り、探りながらそろ／＼と舞臺へおりる。此中小兵衛の金をさぐり見て、につたり思入あつて懐へ入れる。西念窺ひ出で足にさはりし以前の系圖を取上げ、合點の行かぬ思入にて懐へ入れる。小兵衛位牌を搜すと伊之助に行當りびつくりなし下手へ來り、又西念に行當り思入。これにて入替り、小兵衛眞中に土手へ足を踏みかけ上手に西念幟を構へ、下手に伊之助若草を圍ひ、三方一時にきつと見得。凄き鳴物になり、四人世話ダンマリの立廻り、小兵衛件の金を落すを、伊之助拾ひ探り見て懐へ入れる。小兵衛西念の懐より系圖を引出さうとするを、西念立廻つて系圖を取り、振拂ふ。小兵衛これにて手をつき、以前の人相書を取上げ懐へ入れる。よきほどにひね六懐へながら上手より出で、思はず此中へ入り、あちこち突廻され若草を捉へ、すかし見ておどろき、

ひねや、われは。

閻魔小兵衛

ト此の聲に伊之助探りノ、ひれ六を突退け、若草の手を取り花道の方へ行く。小兵衛探りて若草の袖を捉へる。西念窺ひ寄り小兵衛を捉へ後へ引戻す。これにて若草の袖切れて、伊之助若草へ行く。小兵衛西念をふり拂ひ、懐を搜し、金包なき故おどろき向うをすかし見る。ひれ六出て出る。

小兵 だろほう。(ト大きくいふ。)

ひね (びつくりして) や。  
ト花道へ出るを小兵衛突廻す。西念この内懐を拾ひ、思はずひれ六を當てる、ひれ六も、と思入。伊之助小石を拾ひて、

伊之 えい。

ト磔を打つ、磔立身にて苦しむひれ六に當り見事に轉る。花道の兩人下にある小兵衛は袖を衝へる、西念は轍を構へる。雙方よろしく一時に木の頭、伊之助若草のがれて花道へはひる。西念小兵衛をさへ、兩人向うをすかし見る。時の鐘三重模様にてよろしく、

ひやうし幕

二幕目六切

龜井戸境町の場  
隣合地獄極樂の場

〔役名〕浮世屋伊之助、えんま小兵衛實ハ平家の近臣次郎兵衛盛次、修行者西念實ハ平家の近臣主馬ノ判官盛久、梶原源太景季、三位中將重衡、伊勢屋番頭ひね六、家主長兵衛、小兵衛子分勘太、同金八、酒屋の亭主眼六、梶原の郎等。若菜屋の遊女若草、小兵衛女房お六、吳羽の内侍、長屋の女房おわた等。〕

（龜井戸境町の場）本舞臺正面二間の居酒屋、一間中窓酒肴と書きし障子、此の脇繩簾中波、諸白と書きし立障子、上の方裏長屋の路地口、井戸札に閻魔小兵衛といふ名札、そのほかいろくろの巻札打附けあり。左右朝鮮矢來、下の方柱垣、總て龜井戸境町邊の體。幕の内より三人の若い者村の勇みの打扮にて、床几に腰をかけ酒を呑みある。傍に眼六紺の前垂片襷の酒屋の亭主にて立かゝり、下手に友七股引草鞋装の人足にて、首へ赤鯛豆箕柁を入れし籠を斜にかけ、おわた白髪は、あみの婆おはあ見すばらしき装にて赤鯛あかいわしを選び取りある。この見得龜井戸の大拍子にて幕明く。

若者 眼公、今日は豪氣かうぎに賑にぎやかだの。

眼六 へい、どうでも節分せつぶんだけ、龜井戸へ鬼おにやらひを見みに出でるせるか、お客きやくの絶たえる間まがござりません。

友七 もしく、どれも同じ赤鯛あかいわしでござります、よい加減かけんにお選よりなさい。  
わたさうでないよ、大きいのと小さいのとある、同じことなら大きいのがよい。

若一 おつかあ、いくつになつても慾が深いの。

わた (若い衆を見て) こりや尾村井の兄イ達か、お相でもしようかね。

若二 さうよ、おつかアでも女だ、野郎よりました。

若三 いつべえやんねえな。(ト茶碗を出す。)

わた それは有難う。(ト酒を呑む。)

眼六 おわたさん、此の頃はさつぱりやんなさらないの。

わた どうして、夏と違つて寒くなつては洗濯物はなし、長い銭が取れない故、白馬も呑めねえわ

な。見なせえ、まだ單衣だ、あんまり洗ひ物がねえから、今年の垢の落しじまひに、無けなしの

髪を洗つたわな。

友七 (大拍子の聞える思入にて) もしく、あの太鼓は天神様でござりますか。

眼六 あい、今日は節分故十二座の神樂があつて、晩には追灘の神事の鬼が出ます。

友七 なるほど話に聞きました、龜井戸の節分、丁度幸ひ商ひをしながら見に行きませう。

わた (豆箕、赤鯛、柎を取つて) おい、赤鯛一本に豆箕柎、これでいくらだえ。

友七 はい、それでは十六文が物だけれど、仕舞物だ、八文にして上げませう。

わたそれはお忝だが、とてもものことに、もう二つ三つ赤鯛をお負けなね。

眼七 おわたさん、お前の家は一方口だのに、どこへそんなに挿しなさるのだ。

わた 何さ、晩に茶漬を喰はうと思つて。

眼七 とんだことを言つたものだ。鹽がからくつて喰へるものかな。

わた おや、そんなにからいかね。(ト友七の籠より赤鯛を一本とり、一口喰つて)お、からいく、口がもけるやうだ。これ、口なほしにもう一ぱいおくれな。

若一 なんだのと言つて、又一ぱい香まれるのか。

若二 とてもものことに、大きいものでやんねえ。

わた それは嬉しいね。(ト茶碗にて酒を呑む。)

眼六 いや、おわたさんも常談者だ、どこの國にか赤鯛を喰ふものがあるものか。ほんに今の顔は閻魔

が鹽辛を嘗めたやうだ。

友七 いや、閻魔と申せば此の路地札に、閻魔小兵衛としてござりますは。

眼六 あれは佛師屋の職人で、閻魔を彫るのが上手で、そこで閻魔小兵衛といふのさ。

友七 はあ左様でござりますか、とんだ名のお人もあるものだ。これはおやかましうござりました。赤

鱒いわしやく。(ト呼びながら下手しもてへはひる。)

若一 さあ、もうい、加減かげんに切上きりあげようぢやあねえか。

若二 さうよ、龜井戸かみいどを一ひとぺんひやかして來こよう。

若三 勘定かんぢやうは、歸けえりに一しよ緒しよにしますよ。

眼六 よろしうござりますよ。

わた こりやあ兄あにイ達たち、御馳走ごちそうになりました。

三人 また歸かへりに寄よりやせう。

ト三人にんは下手しもてへはひる。眼六がん見世みせを片附かたづけながら、

眼六 おわたさん、濁酒にごりのいゝのが出來でたがどうだ。

わた 白馬しろうまと聞きいちやあ氣きが悪わるいの、節分せつぶんの御祝儀ごしゆぎに三合がふばかりおくれな。

眼六 勘定かんぢやうは大晦日おほみそかかな。

わた 知しれたことさ。(ト眼六がんの注ついてくれた徳利とくりを取りとて、)こりやあ有難ありがたう、どれ、あつたまらうか。

トおわたは路地口ろぢぐち、眼六がんは繩籠なやちの内うちへはひる。と、花道はなぢより二人ふたりの人足じんそく〇早桶はやかづをさし擔たひに擔かつぎ、  
長兵衛おちやうべ羽織はおり股引ひきり尻端しり折しりにて、疊たんだる役提灯やくぢやうちんを持ちもちて出來いでる。

○ モシ／＼、どうやら繩が切れさうで、ぎち／＼しますよ。

□ どうでも佛が土佛のせるか、豪氣に重たい。あれ／＼繩が切れさうだ。

長兵 なに、繩が切れさうだ。こゝでまあ佛をこぼしては始末がしにくい。まあ／＼向うの居酒屋の前へおろせ／＼。

兩人 さうしませう／＼。(ト早桶をおろすと、繩切れる。)

○ それ／＼繩が切れたわ、こゝでゆつくり締めなほすがよい。

□ もし、大家さん、こゝらで繩を貰ひなさいました。

長兵 さうしよう、幸ひ、こゝの見世で貰ひませう。もし／＼、ちとお頼み申します／＼。

眼六 (内より出来り、) はい、こつちへおはひりなさりませ。葱鮓に鱈の鹽焼があります、なんで上げませう。

長兵 いえ／＼繩を一筋下さい、今こゝの見世の前で、早桶の繩が切れて、死人がこぼれかゝりました、早く繩を下さい／＼。

眼六 なんだ、人の見世先へ死人をおろして繩をくれろ、とんだことを言ふ奴だ。名主のねえ村からでも来やあがつたか、ちつともおくことはならねえぞ、その死人をそつちへ持つて行かつせえ。

長兵 これく、そなたは居酒屋の亭主か。これ、繩が切れたからおろしたのだ。見世の前であらうが、乃至御立關の前であらうが、おろしたがどうした。死人をおろすことは法度か、さう強情を言はれては、五日でも十日でもこの死人を、この見世へおかにやあならねえ。不承ながら置いて貰はう。おいて貰はう。

兩人 さうだく、持つて行くことは厭だく。

ト口々にわめく、此時以前の者い者三人出來り、

三人 なんだく。

若一 こいつは何だ、居酒屋の前へ死人をおろしたな。

若二 そいつはとんだことだ、薄汚ねえ。

若三 早く持つて行きやあがらねえか。

眼六 ぐづくすると、うぬら打つくぢくぞ。

長兵 何だ、打つくぢく、面白、打つなら打つて見ろ。

眼六 いけふざけた奴等だ。若い衆、手を貸してくんなさい。

三人 合點だく、死人擔ぎを打つくぢく。

兩人 さあ。打たれよう。

眼六 打たねえでどうするものか。

ト早桶の棒を取つて打つてかゝる。皆々有合ふ棒にて殴き合ふ。このはずみに桶の箍切れて中よりひね六の死人經帷子の装、頭陀袋をかけたるが轉げ出る。皆々捨ぜりふにて思はずひね六を踏み散じ、見世にある手桶を取つて打ちつける。此の水ひね六にかゝり息を吹返す。皆々それを知らず、同志打に殴き合ふ。ひね六心附きたる體にてすつと立ち、喧嘩と聞いて此の中へはひり、仲裁人の思入にて、

ひね 待たつしやいゝゝゝ。(ト捨ぜりふにて止め) おれが預かつた、預けさつしやいゝゝ。

皆々 いやだゝゝゝ、いやだい。

眼六 (ひね六の装を見て) やあ、わりやあ何だ、裁人かゝ。

ひね おゝ、裁人に濁りをうつたざいにんだ。

皆々 やあ、幽霊だゝゝ。

ト膽を潰し、わつと言つて下手へ逃げてはひる。ひね六一人残り、早桶のこはれや自分の装を見て、思入あつて、

ひね 昨夜向島で横ッ腹をひどく打たれて、あゝ痛いと思つたぎり、それから後は夢現、このマアおれ

が装といひ、こりやテツキリ死んだと見える。死んだらこゝはもう冥土か。(トうろく四邊を見て) あゝ。どうでおれも心中を仕そこなつて死んだの故、極樂へは行かれまい。何にしるこゝは地獄の何といふ所だか、針の山や血の池も見えず、今では地獄も婆のやうだと見える。どうぞ早く閻魔様の近附になつて、居候にでもおいて貰ひたいものだ。

下路地より以前のおわた酒に酔ひたるこなし、白の浴衣の装にて出来り、

わた あゝ、いゝ心持だ、一人で三合やつたら、べらほうに酔つて熱くてならぬ故、絆纏を脱いだら丁度いゝ心持だ。

ひね (おわたを見て) はあゝ、もしノ、憚りながらお前さんは、三途川のお婆さんでござりまするか。  
わた なに、さんづ婆アえ、そりやあこの裏の閻魔さんの所のお上さんの渾名だよ、私アおわたといふ洗濯婆アさ。

ひね 左様でござりまするか。はあ、それではこの裏に、閻魔様がるさつしやるか。扱はこゝは地獄だわえ。もし、こゝは何といふ所でござります。

わた 龜井戸の境町と言ひやす。

ひね はあゝ、冥土の境町、それでは地獄極樂の追分と見える。さうして阿彌陀様の方はどつちでござ

ざります。

わたなに、六阿彌陀かえ、そりやあこの先の横町さ。

ひね その阿彌陀様の所へは、行かれますまいか。

わた あ、此間まで行かれたが、一昨日から道普請で往來止めだ。

ひね 南無三、それではいよく地獄へ行くのか。もし、袖振り合ふも他生の縁、どうぞその閻魔様の

所へ、お連れなされて下さりませぬか。

わた え、そりやお易いことだ。一緒に來なせえ、教へて上げよう。

ひね それは有難うござります。あ、地獄にも今は人鬼が、

わた あ、その人鬼も今に出ますよ。

ひね 扱は呵責の責めに逢ふのか。

トおわた先にひね六附いて路地口へはひる。これにて此道具廻る。

(小兵衛内の場)

本舞臺三間の間平舞臺、正面鼠壁上の方一間障子屋體。正面に大いなる彩色せる閻魔、例の所門口、佛師閻魔小兵衛といふ名札、下の方路地口、こゝに前幕の小兵衛好みの打扮

にて硯箱を置き、帳を調べる。お六世話女房半纏装にて鏡臺へ鏡をかけ、髪を撫で附ける。下手に勘太鬼やらいの赤鬼の装にて、節料理の人參牛蒡を切つてゐる。金八同じく青鬼にて、鯉節箱にかきゐる。この見得四つ竹節、柳島の題目太鼓を冠せ暮明く、

お六 こうく、お前達は臺所はい、加減にして、早く天神さまへ行きなさいな。

勘太 何さ、鬼やらいの初まる前には、八野郎が知せに来る積りさ。

金八 日の暮れねえ中に行くと、人に見られるのが難儀だ。

お六 清公は今年初めてか。

金八 あい、わつちは新婆婆さ。

お六 それぢやアどぢに逃けると打たれるよ。

勘太 なに、そりやあ私が附いてゐます、逃けることにやあ喧嘩でもなんでも、引をとつたことはねえ。

金八 違えねえ。

兩人 はムムム。

小兵 え、やかましい、静にしねえか、帳の調べが出来やあしねえ。

勘太 親分、何をそんなに調べなさるのだ。

小兵 後生樂めらが、今日はいつだと思ふ、節分だ。餅もつかねえけりやあならず、疊替もしにやあならず、いくら錢があつても足りやあしねえ。それだによつて、押上の眞濟寺から頼まれた、應舉の圖を寫したこの閻魔、正月の間に合ふやうにと此間から矢の催促、やうやく仕上前になつたによつて、あらましの勘定をして、眞濟寺から借りて來にやあ、この暮が凌げねえわえ。これお六、いつまで頭髮をせつちようしてゐるのだ、早くお節でも煮てしまはねえか。

お六 え、忙しない、もうお節を煮るばかりだわな。コウ人參や牛蒡を拵へるなら、序に脛節も。金太 姐さん、言はれねえ内にかいて置きやした。

お六 氣が利いてゐるの、とてもものに、晩に蒔く豆を炒つておいてくんた。

金太 あい〜。

小兵 いや、人遣ひの悪いかゝあだの。お、その豆で思ひだした。勘太や門口へ 柎をさしてくれ。勘太 あい〜。

お六 ほんに、人遣ひの悪い亭主だの。

小兵 ハツクシヨ、又風邪を引きさうだ。

卜路地口よりおわた先にひね六出來り、門口から、

わた お六さん、今日はお日出度う、嚙お忙うございませう。

お六 おや、隣のおつかあか、お上りよ。髪をお洗ひだね。

わた あい、洗ひばえもしねえが、かゆくつてならねえから。

小兵 いやさうでもねえ、洗ひ髪ぢやあおぢ坊主も、いやおつかあの前ぢや坊主はさしたの。

勘太 違えねえ、龍興寺の坊主は、

金太 みんなお前の喰ひ物だ。

わた なんの、そりやあ昔のことだ。

トひね六此内を覗き、びつくりなし、

ひね イヤア怖ろしやノ、あのまあ怖いえんま様、左右には赤鬼青鬼傍に帳を控へてゐる眼玉の大きいのが見る目で、淨玻璃の鏡に對つてゐる鼻の高い上さんがかく鼻に違ひない。然し繪で見たとは大きな違ひ、えんま様も裏店住居とは、地獄も今はしやれたことだ。

小兵 (この聲を聞きつけて) おツかあ、表に誰か居るぢやあねえか。

わた あい、お前に逢ひたいといふ人がある故、連れて來ましたよ。

小兵 それは世話であつた。もし、どなたかおはひんなせえ。

ひね (おつゝ内へはひりて) はいく、どうぞお助け下さりませく。

小兵 何だ、見りやあ金毘羅参りを見るやうな装をして、助けてくれ、助けてくれと。

お六 おほかた草鞋錢でもくれといふのだらう。

ひね いえく、左様ではござりません。どうぞお助け下さりませく。

お六 おツかあ、お前近附かえ。

わたし ええ、今表で頼まれたのさ。

小兵 何だか、わけが分からねえ。これ、手前達聞いて見ろ。(ト勘太、金八へ思入。)

兩人 あいゝ。(ト兩人ひね六の首を捉へ引たてる。)

ひね あい、おゆるされませく。

勘太 これさ、何もひどいことはしねえ。譯を言ひなせえ。

ひね へ、申しますゝ。何を oakくし申しませう。私は娑婆の藏前で、米伊勢屋の番頭ひね六と申し

ます者でござります。ふと吉原の若菜屋の若草といふ女郎になじみ、雨の降る日も雪の夜も通つた舉句は身の詰り、とても添はれぬことなれば、心中してと若草が頼みには非なく淨瑠璃に、名を残さうと思ひのほか、その夜女郎は船頭の伊之助といふ色男と、廊をぬけて行方知れず、心中

せうにも相手はなく、向島をまごつく中、その若草を見つけた故、引提へようとする所を、腫脹をどんとくはされて一人心中しました私、決して嘘は申しませぬ故、舌をぬかすにこのまゝに、偏にお助け下さりませ。

勘太 何だ、助けてくれ〜と、富士講が熱に浮かされたやうに、

金八 いつたい、お前は何だよ。

ひね はい、亡者でござりまする。

お六 え、氣味の悪い、早く追出なせえな。

小兵 いや待て〜、さつきからの話の様子、何でもこりやあ間違ひが。これ亡者さん、お前こゝを何處だと思ふのだ。

ひね はい、地獄ではござりませぬか。

小兵 なるほど、閻魔はあるし赤鬼も青鬼もあるから、間違つた人の目から見たら、地獄と思ふも無理ぢやあねえが、こゝは龜井戸の境町、私は小兵衛といふ御師屋職人だ。

ひね へえ、娑婆でござりますか。(ト心附き、閻魔を見て) なるほど、さうおつしやれば、あの閻魔様は木彫でござりまするね。

小兵 こりやあ押上の眞濟寺から頼まれて、わしが彫つた應舉の閻魔さ。

ひね して、この赤鬼さんや青鬼さんは。

勘太 わつちらは龜井戸の天神様の、鬼やらいの神事に出る、赤鬼に青鬼さ。

金八 これ見せえ、縫ぐるみの下が人間だ。

ひね して、又、三途のお婆さんは。

わた こゝらあたりの寺方へ、お針にはひる洗濯婆アさ。

ひね はゝあ、それぢやあわしも、亡者ではないか知らん。(ト立つて見て) おゝ今まで心附かなんだ、

足があるく。

兩人 何にしろ、足があるとは縁起がいゝく。

ひね はてな、私は死んだに違ひないが、此のやうに生返つたは、日頃最負な娘御達が、藏前の不動様

へお百度でも上げたと見える。

兩人 おきやあがれ。

お六 とんだ道化師だの。どれ、わつちア日の暮れない中、一風呂はひつて來よう。

小兵 湯へ行くなら表へ聲をかけて、ついでに肴を見つくるつて、

お六 え、承知しょうちだよ。

わた お六さん、今日けふはおひねりだぜ。

お六 ほんにさうだの。(トおひねりをこしらへ、門口かどぐちへ出て) 亡者なきものさんお話しよ。(ト路地口ろぢぐちへはひる)

小兵 何なんにしろ、お前まへも生返なまかへつて仕合せしあはせなことだ。

ひね いえ、あまり仕合せしあはせなこともござりませぬ。

皆々みな そりやなせ。

ひね はい、私わしが心中しんぢゆうしようと思つた若草わかしらめは、伊之助いのすけとたしかに心中しんぢゆうして、あの世よへ行つたに違ちがひも

ざりませぬ。なまなか生返なまかへつたばつかりに、もう逢あふことがなりませぬ。

小兵 なるほど、こりや婆婆ばばから冥土めいどへは、幽霊いづれいでも行ゆかれまい、いや、お力ちから落おちしのことだ。

わた して、その若草わかしら伊之助いのすけといふは、どんな人達ひとたちたえ。

ひね まづ役者やくしゃで例たとへて見みようなら、衆三しゆさんと八代目はちだめに生き寫うらしさ。

わた 待ちまちなよ、その八代目はちだめと衆三しゆさんに似た女郎ぢやうらうと二才にさいは、この後うしろの西念坊さいねんぼうの所ところにたしか。

ひね はあ、それちやあこの後うしろろに來きてゐますか。やれ、十萬億じゅうまんおく土どを早はやい足あしだな。

勘太かんた こゝは婆婆ばばだといふに。

ひね ほんにさうでござりました。して見ると、二人も心中をしないと見えるわえ。

金八 なに、今頃野暮に心中するものがあるものかな。

小兵 (これを聞き) むう、そんなら昨夜の二人連が。(ト思入)

ひね 若草伊之助を、何にしろ見たいものだ。

わた とてものかゝり合ついでに、私が一緒に行つて教へてあげよう。

ひね それは度々御苦勞をかけます。

小兵 おツかア、今に酒が来るよ。

わた あい、ぢき行つて來ます。

トわた先にひね六路地口へはひる。

勘太 いや、とんだ混ツ返した。

金八 おゝ、うかくする内日が暮れた。どれ行燈をつけようか。(ト行燈を出し、灯をつける。

小兵 手前達はもうよからうぜ、早く鬼やらひをしまつて來て、ゆつくり春まつし。

勘太 あい、さうしやせう。(ト麻の杖を持ち)

兩人 それぢやあ親分、行つて來やすぜ。(ト兩人花道へはひる)

小兵 こりやあ豆を蒔かざあなるめえ、え、面倒な。今おわた婆アの話では、割符を合はせた二人連、昨夜の奴等に違えねえ、殊に女郎とあるからは、云はずと知れた駈落者、弱みへ附込み片袖から文句をつけたら昨夜の百兩

ト此の時下手にて、

○ 福は内、福は内。(ト豆を蒔く音する。)

小兵 む、い、辻占だ。(トにつたり思入。鬼は外福は内の聲にて、此の道具廻る。)

(修行者西念内の場)——本舞臺三間の間平舞臺、正面一間の押入、佛壇、上の方折廻し鼠壁、この

壁に彩色の天人墨繪の佛像など張つてあり、いつもの所門口、下の方は隣りの長屋、正面に箔置の阿彌陀如來、傍に六阿彌陀寫し阿彌陀如來箔代建立願主西念といふ幟立てかけあり。よき所に蓮池を畫きし二枚折の屏風。こゝに西念前幕の修行者にて、破れたる行燈へ灯りをつけてゐる。

西念 冬至からは疊の目ほど日が延びるといふが、まだ一向に延びたが知れぬ。今日も朝から修行に出て、暮れぬ中に急いで歸つたが、もう入江町の暮六つだ、歩いては短い日ぢやが、戸棚の中に寢てゐては晝長いことであらう。どれ、(ト戸棚のそばへ行き) さあ日が暮れました、ちつとこ

つちへ出さつしやりませ。

トこれにて内より戸を明ける。中に前幕の伊之助、若草ある。

伊之 あゝもう暮れましたか、昨夜とつけり寝ないものだから、戸棚の中でぐつすりやつた。

ト伸びをしながら出る。

西念 さあ、お前もこつちへ出さつしやりませ。

若草 もうそこへ出ても、ようさますかえ。(ト若草よき所へ出る。)

西念 嘸お前方、腹がへらつしやつたろ。茶はわしが出る時に、炭團をいけかけておいた故、おほかた沸いてゐる時分、何はなくとも、まあ飯でも上らつしやりませ。

伊之 なに、八つ時分に晝飯を食つて、それから直に寝たもんだから、まだねツから喰ひたくない。

若草 わたしよりはお前さん、嘸おひもじうありんせう、構はずお先へお上りなましな。

西念 はい、ちつと行かねばならぬ所もあれば、そんなら先へ喰べませう。(ト櫃を明けて見ても)やあ、こりやお飯がちつともない。てもよう上らつしやつたな。

伊之 なに、少しもないえ、さつきまでいつぺえあつたものが。

西念 はあ、よめた。お櫃の蓋からこゝらあたりが、犬の足跡だらけだ。扱は戸の壊れから雌犬がは

ひり、お櫃を明けて食つたと見える。

伊之 それぢやア今夜、飯を炊かすばなるまい。

西念 さあ、五合ばかり鍋で、も炊きませう。(ト立ちかゝる。)

伊之 うつちやつておきねえ、そりやあおれがしよう。

若草 ほんに、知らぬながらも、わたしもともぐ。

西念 いかさま、是から二人で世帯をさつしやれば、どうで飯も炊いたり水も汲んだりせねばならぬ。

そんなら稽古がてら二人で炊いて上らつしやりませ。私は今夜柳島にお齋があるから、先で馳走になりませう。

若草 (壁に張つてある天人を見て) もし伊之さん、彼處に張つてあるは、ありやあ天人さんとやらぢやね。

伊之 さうよ、ありやあ天人よ。お、外に、まだいろくゝな佛が張つてある。

西念 さあ、この壁を張る時に、後ろ長屋の佛師屋から貰ひました下繪の反故さ。

伊之 西念さん、あの笙篳篥の音はどこだね。

西念 あれは天神様の別當所でござりませう。

伊之 いや、とんだ茶番のやうだが、正面には阿彌陀様、壁の張交には天人やら羅漢やら、笙篳篥は聞

えるし、極樂へ来たやうだ。

西念 違ひござりませぬ、はゝゝゝ。

伊之 いや、その極樂の菩薩はあるかえ。

西念 さあ、五合位はこゝにあります。(ト偏箱より貰ひ溜の米を鍋へおけ)おゝ丁度五合はかりあります。

首尾 よく飯ができましたら、此の表の居酒屋で菜の物を賣りますから、何ぞ買つて上りませ。

伊之 なんの、錢はこつちにあるよ。はあ、それぢやあ表で菜を買ひやすか。

若草 書附を取つて見ようぢやありませんか。

伊之 馬鹿を言へ、部屋ぢやアあるめえし、

西念 そんなら私は行つて來ます。いや、なんほ川舎近い所でも、吉原からは僅な路、殊に今夜は節分

故、厄拂ひやら法印やら、種々な者が裏へ來る故、必ず表は明けさつしやりますな。

伊之 そりやあ合點だ。おまへはいつ頃歸りなさるえ。

西念 四つ前には歸りませう。

若草 そんならお早う。(ト西念門口へ出て)

西念 どれ行つて參りませう。(ト花道へはひる)

伊之 西念坊も苦勞人だけ、通り者だなあ。(ト門口へ掛金をかける。)

若草 ほんに氣のおけない、よい人ざますねえ。

伊之 手前思ひついちやあいけねえぜ。

若草 堪忍しなましな、親にしてもよいやうな人を。

伊之 (思入あつて。)お、その親と言やあ、いつぞは聞かうと思つてゐたが、手前の親元は他人ださ、だが、實の親は何處だえ。

若草 さあ、私の實の親といふは、何處の誰とも知りませんが、守袋に印籠の片々を添へて捨てのりしと、養ひ親のつね々話し、それはお前も知つてのこと。また養ひ親は五歳の年、私を吉原へ賣つた後は音信不通で行方知れず、ほんの親は知りませんわな。

伊之 手前もおれも若え身空、これから先へ長く生きたら、逢へねえことあるめえから、まあそれを樂しみにしてゐるがい。

若草 ほんにさうざますねえ。五歳の年から親なし故、逢ひたうざますが仕方がおツせん。

伊之 まあ、それよりやあ夜食の支度だ、手前米でも磨ぎやな。

若草 あい、水でかきまはすのざますか。

伊之 いや、さうぢやあねえ、そんなことで裏店の何でか、あになれるものか。

若草 稽古をすれば、出来いせう、まあやらしてくんましょ。

伊之 さらば、おれがお師匠番か。

若草 もし、やさしく教へておくんなんし。

伊之 いやはや呆れ返つたものだ。どれ、政岡と出かけようか。

ト若草に手拭にて片襷をかけさせ、伊之助鍋の中へ水を入れ、捨てりふにて米の磨き様を教へる。此内門口へひね六出来り、戸の隙間より中を覗き腹の立つ思入にて、ばた／＼と足拍子を踏み、門口を無暗にたゞく、是にて兩人びつくりして飛退き、伊之助若草を戸棚の中へ匿す。ひね六夢中になり、門口をたゞき力足を踏み後ろへ倒れる。此の時路地口より小兵衛下駄穿きにて出来り、この體を見て、

小兵衛 そこへ倒れたは、おゝ、さつきの亡者か。

ト小兵衛手を持つて引起す、ひね六やはり夢中にて、

ひねえ、腹が立つわえく。

小兵衛 これさ、どうしたのだ。(ト脊中をたゞく、ひね六心附き)

ひね 闇魔さんか、ちよつと来て下されく。(ト小兵衛の手を取つて花道へ連れ行き) いやくあの家に

ゐるのが、若草伊之助に違ひない。わしを騙して連れ出させ、あの伊之助と匿れてゐるときは、ええ腹が立つわえ。これ、闇魔様、どうぞ敵をとつて下され。

小兵 何と言ひなさる、その家にゐるのが、若草伊之助に違えねえとか。

ひね 決して違ひはいたしません、どうぞ敵をとつて下され。

小兵 これさ、まあ静にしねえ。

トひね六に囁く、ひね六呑込み又小兵衛に囁き、兩人うなづき舞臺へ戻り、ひね六は路地口へはひる。

小兵衛門口へ寄つて、

もし、お頼み申しやせう、お頼み申しやせう。

伊之（思入あつて）あいく、誰だか今明けてあけやす。

ト言ひながら戸棚の傍へ來り、若草に囁く思入。小兵衛は門口より内を窺ふ。と、この時路地口より

以前のお六、草履下駄の音をがた／＼とさせて來り、

お六 そこにゐるのは、家の人ぢやあないか、何をしてゐさんすのだ。

小兵 お六か、これ、（ト囁き）よしか。

お六 どうしてまあ、めつさうな。

小兵 はて、大事な、しかけて見る。(ト合方になり、小兵衛窺ふこなし、お六門口へ来り)

お六 あの、ちつとお頼み申します。

伊之 あい、今明けます。(ト門口を明け、顔を見合せ) お、男の聲だと思つたら、こりや小粹な、いや、

お前はどこから。

お六 私や春中合せの裏長屋、小兵衛といふ佛師屋の女房でございますが、西念さんはお留守かえ。

伊之 修行先に齋があるとして、日が暮れてから出て行きました。

お六 さうでござんすか、さうしてお前さんはえ。

伊之 わつちかえ、わつちは居候さ。お上さん、何ぞ用でもありませんなら、歸つたらさう申ませう。

お六 あい、お長屋の喜左衛門さんの家に産があつた故、長屋中が寄合つて祝つてやりますから、それを届けにまゐりました。

伊之 それは大きにお世話さまでござります、歸りましたらさう申ませう、お長屋並によろしくお頼み申します。

お六 左様なら、お酒の三升もやりませう。ほんにお前お淋しからう、ちつと遊びにおいでなさい。  
伊之 有難うござります。

お六 ほんに男世帯で、嘸不自由でござんせう、裁縫でもあらはおよこしよ。

伊之 またお頼み申しませう。

お六 西念さんも獨り者故、いつでも私が仕立屋さ。もしく、お前袖口がほころびてゐるよ。

伊之 いやもう、ほころびは常不斷さ。

お六 若い者が見ツともない。ちよつとお出し、縫つて上げやせう。

伊之 なに、お氣の毒な。そして、絲や針も。

お六 いえく、私が頭に袖口ぐらゐるのほころびは、お、これく。(ト雷にさしたる針をとつて) 丁度線

色の絲がありやした。さあ、寒からうがちよつとお脱ぎ。

伊之 裸にならずと、片肌ぬいで、(ト肌をぬぎ) お、寒くなつた。自由ながらこのまゝで。(ト袖を出す)

お六 ちつとしておいでよ。(トお六伊之助の傍へ寄り、左りの手にて袖を捉へ右の手にて行燈を引寄せ、かきた

てようとしてわざと灯りを消し) これは粗相な、つい消したわいな。

伊之 え、暗黒になつちやあ大變だ。もうほころびは止しませう。

ト燧箱を尋ね、捨ぜりふにてかちくと打附ける。これを聞いて小兵衛そつと内へはひり、よき所

へ坐る。伊之助附木へ火をうつし、

さあく、附きましたく。何處の國にか不遠慮な、お長屋のお上さんとたつた二人、灯りを消して、(ト行燈へともし、ふと小兵衛を見て) や、こなたはどこから。

お六 ほんにお前はいつの間に。

小兵 ぶんばり女め、動きやあがるな。(ト伊之助に向ひ) もし、私ア裏長屋に住む、閻魔小兵衛といふ佛師屋職人の貧乏人だが、見りやあ此の長屋で顔も知らねえ小二才、一人暮しの此の家へ他人の女房を引きずりこんで、慰みものにさしツたか。間男は御定法、並べておいて四つにするぞ。

伊之 む、そんならお前が、このお上さんの御亭主か。今來て逢つたお上さん、そんな覚えはありやあしねえ。

小兵 覚えねえとは言はさねえ。人の女房と暗黒に二人ゐるのが第一不審、言はずと知れた間男だ。あ野郎、何とか返事をしやあがれ。

お六 實にお前に濟まねえが、私アほんに迷つたのさ。  
小兵 うぬ、亭主の前でよくもそんなことをぬかしたな。

ト片肌ぬいできつとなる。小兵衛の腕に犬といふ字の痣あること。

伊之 (思入あつて) あ、これで讀めた。女房を玉に美人局、扱は亭主も、(ト腕の痣を見て) や、腕の

志は。下目を附ける。

小兵 や、下小兵衛らみたへて、肌を入れる思入。

伊之 こいつあ仕事にかゝつたか。

小兵 それに似寄りの、この片袖。下前幕の袖を見せる。

伊之 すりや、その袖を。

小兵 證據にしたなら枝が咲く、さ、若い、こんな餘計の仕事があつちやあ、よもや女房と間男を。

伊之 さあ。いや、しやしたよ。

小兵 いや、こなたが、

伊之 女房の間男、

小兵 間男ならば首代貫はう。

伊之 む、してその首代は。

小兵 たんともいらねえ、たつた百兩。

伊之 なに百兩、いやお前も眼玉は大きいか、こりやあちつと見損ひだ。高が裏屋の居候、金と言つち

やあ。

小兵 いゝや、ないとは言はさねえ。袱紗包みに、小判で百兩。

伊之や、

小兵 手にあることも見ておいたが、ないと言ふならこの片袖、首代替りに詮議をせうか。

伊之 さあ、それは、

小兵 耳を揃へて百兩だすか。

伊之 さあ、

小兵 この片袖の詮議をせうか。

伊之 さあ、

小兵 さあ、

兩人 さあくく。

小兵 きりく。百兩、出してしまへ。

伊之 むう、すりやどうあつても百兩を。

小兵 出さによあ袖の出所を、詮議したなら勾引。

伊之 む。

小兵 いやでも首代出さゝあなるめえ。

伊之 (思入あつて) いや、首代出しにくいが、その片袖を賣るなら買はう。

小兵 むゝ、百兩ならば首代兼ねて、この片袖も賣つて進ぜう。

伊之 賣るとあるなら引替へに、

小兵 この片袖と、(ト袖を伊之助の前へ出す。)

伊之 (伊之助 懐より金を出し) この百兩、

兩人 どれ。(ト兩人引替へに取り、思入。)

小兵 首代たしかに受取つた。

伊之 こつちは袖を買ひきる百兩、これちやあおれが惡名も、

お六 間男沙汰も、

小兵 算用濟んだ。

ト四つの鐘鳴る。

お六 あゝもう四つか、寒くなつたの。

小兵 寐酒はあつたか。

お六 あい、とつておいたよ。

小兵 どれ、歸つて暖まらうか。(ト立上り、懐より金を出してお六に見せる。)

お六 お前またそれを取られちやいけねえよ。

小兵 馬鹿ア言へ、今ぢやあ堅氣だ。取られる金がありやあ、烏金でも貸すわえ。

ト言ひながら小兵衛、お六門口へ出る。

伊之 あ、ちぎれた袖を百兩とは、すてきに高い代物だ。

ト此時戸棚の中にて、ばた／＼と音する。小兵衛この音を耳にして、

小兵 あれこそ、たしかに。(ト内を覗くを、)

伊之 (つか／＼と来て門をしやんと閉め、) え、をと、ひ來なせえ。

ト唄になり小兵衛お六に囁く、お六うなづき下手へはひる。小兵衛は路地口へはひる。伊之助門口を明け思入あつて、

何は兎もあれ若草が、戸棚の中にあることを、氣取つた上は此家に、うかつに足は留められねえ。ちつとも早く巢を變へて、(トつか／＼と行き戸棚の戸を明ける。後ろの壁を切破りあるに、伊之助びつくりして、) や、こりや戸棚の壁を切破り、(ト此の時切破りし穴より、以前のひね六脇差をさし、ぬつと

出るや、われは。

ひね 若草が客のひね六だ。(トすつと出る。)

伊之 扱はこなたが、若草を。

ひね お、盗みだした。

伊之 なんと、

ひね これまで廊にゐる中に、われ故多くの金を取られ、鼻毛をよまれた意趣返し荷擔人頼んで隣りから、壁を破つて若草はこのひね六が盗みだしたが、われがあつては寐覺が悪い、殺しておいて若草を此ひね六が女房にする氣だ。さあ、かなはぬところと覺悟しやれ。

ト抜きかゝるを伊之助留め、戸欄の内を見て、

伊之 む、壁の後ろはたしかに小兵衛、扱は是れも彼奴がさしがね。

ひね 知れたことだわ。(ト扱打に斬つてかゝるを、ちよつと立廻つて、)

伊之 表を廻るは面倒な、破れし壁より、ハト伊之助行かうとするを、)

ひね われをやつては。

ト支へる。それより伊之助有合ふ勳化職にて立廻り、ひね六の一腰を打落し、これを取つて行かうと

するを留め、この立廻りの内にひね六を一トかせ切る、ひね六ワツと倒れる、伊之助見て、

伊之や、手の廻りにて思はぬ深手。

ひね人殺しだく。(ト聲を立てる。)

伊之え、是非に及ばぬ。

トひね六を斬り倒す、ばたくになり、以前の西念足早に出来り、門口を明けこの體を見ておどろき、

西念や、こりや伊之助殿には、人をあやめて、

伊之さ、これには段々。(ト言譯をしようとする。)

西念あ、これ、(ト四邊へ思入あつて、) ひそかにく。

ト心遣ひの思入、伊之助ひね六に止めをさす。この見得時の鐘の送りにて道具廻る。

(元の佛師屋の場) 本舞臺元の佛師屋の道具へ戻る、こゝに若草に猿轡をかけ、赤鬼の勘太、青

鬼の金八繩にて縛りある、小兵衛はよき所に焚火をしながら砥石にて脇差を磨いてゐる。此の見得時

の鐘凄き合方にて道具納まる。

勘太親方、この女はどこへやらう。

小兵 いや、こかすにや及ばねえ、野郎の来るまで二疊へでも入れておけ。

兩人 合點だ。さあ運びな。(ト兩人して若草を上手の屋根へ入れ、出て来る。)

小兵 ふん、手前達は刃物はあるか。

金八 別當所一つづ、借りて来やした。(ト閻魔の蔭より脇差を出す。)

小兵 それぢやあ野郎が来たならば、な、(ト囁き)合圖をしるべに、

兩人 下からぐつさり、

小兵 どちを働くな。

兩人 合點だ。

ト下手の揚板をあび、縁の下へはひる。小兵衛刀を磨きしまひ、焚火にてきつと見る。時の鐘下手の壁の破れより伊之助一腰を差し、窺ひ出で兩人顔見合せ、小兵衛は刀を後ろへ隠し、兩人きつと思入。

小兵 や、こなさんはさつきの、

伊之 間男でござります。

小兵 夜更さふけにどこからござつた。

伊之くづれた壁の破れから。

小兵 はて、無遠慮な。(ト伊之助のよき所へ住ふを見て) して、何ぞ用かえ。

伊之 あい、無心に來ました。

小兵 そりや何を。

伊之 (以前の片袖を出し) この片袖の身ごろをば。

小兵 なんと。

伊之 貧乏暮しの押入から此家へぬけるくづれ穴、鼠が引いたか隠したか、身幅も狭き女物、而も廓の派手模様、身ごろの合ふわつちに下せえ。

小兵 いや鼠が引いたか知らねえが、見なざる通りの裏長屋、隠しどころもねえ住居、

伊之 すりやこなさんはこの袖の、

小兵 身ごろとやらは知らねえの。

伊之 知らぬとあらば家捜しして。(トきつとなる、上手屋體にてばつたりと音する) や、あの物音は、

小兵 鼠が出る故地獄おとしさ。

ト此の時伊之助の前へ白刃二本出る、是を見て、

伊之や、この白刃は。

ト小兵衛南無三といふ思入にて有合ふ摺鉢を焚火へ置く、これにて暗くなる。

地獄落しか極樂か、劍の山よりけんのんな、

小兵や、

伊之こりやめつたに油断はならぬわえ。

ト時の鐘凄き合方になり、双方へ別れきつとなる。これと同時に上手屋體より若草縛られたまゝつかつかと出る。小兵衛伊之助を切らうとするはずみに若草の繩を切る。これにて猿轡取れ、暗かりにて危き立廻りになり、探り／＼伊之助若草へ行當り、頭を撫でゝ見て、

若草か。

若草 伊之助さんか。

ト此の聲をしるべに小兵衛斬つてかゝる。伊之助身をかはし脱れる。この拍子に若草たち／＼と下り、上手の鏡臺へ手を突き、手へ剃刀のさばりし思入にて取上げる。この中縁の下より勘太、金八出て闇を小楯に面白き立廻りよろしくあつて小兵衛若草を一刀斬る、若草アツと倒れる。この聲に伊之助、小兵衛を斬る、小兵衛立廻つて伊之助を斬る。勘太若草を引附ける。金八は摺鉢の上へこげかゝり、

そのまゝ捐針を取る、これにて焚火パツと燃える。小兵衛閻魔の上より斬りかゝる、伊之助刀にて受けるこの見得にて明るくなり、三人きつと見得。小兵衛の疵口より流るゝ血汐若草の血と一つに寄るにきつと目を附け、

小兵 やゝ、今若草を斬りし血潮と、我が疵口より流るゝ血と一つに寄りしは、むゝ。  
兩人 何と。

ト伊之助、若草小兵衛に斬つてかゝるを、勘太、金八支へる。小兵衛思入あつて、

小兵 もしや若草が左の腕に、犬といふ字の、(ト又立廻りの内、勘太、金八若草の腕を捲り痣見ゆること)扱こそ痣のあるからは。(ト又立廻つて、伊之助勘太、金八を當てる。小兵衛守り袋より印籠を一重出し、この印籠をとくと見やれ。(ト投げてやる。)

伊之 (取上げ見て) この印籠は若草が、親の形見と肌身放さず、

若草 大事にかけし片々の印籠、(ト若草守り袋より印籠を出し、合せて見る。)

伊之 時代蒔繪の雪の梅、

若草 模様もしつくり合ひたるは、

小兵 小松殿より拜領せし、

伊之 扱は平家の某と、

若草 臆の緒書きに記しあるは、

小兵 邪慳な親のこの盛次。

伊之 そんなら此方が、實父なりしか。

若草 と、さんでござんしたか。

小兵 別れ程經し娘であつたか。

ト三人顔見合せ、

三人 や、や、や。

トびつくり思入、小兵衛思入あつて、

小兵 あゝ思ひ出せば一昔、この身の懺悔聞いてくりやれ。(ト誂への合方により)今は何をか包むべき、

元我こそは平家の近臣、越中の前司盛俊が、一子次郎兵衛盛次、父前司子なきをうれひ大神を祈り

て儲けし故、腕に犬といふ字の痣あり。我またいまだ壯年の時、主馬盛光が娘をめとり間もなく

我胤を懐胎なし、産落せしは女子にて、不思議なるは左りの腕に犬といふ字の痣あるを、母は見

るよりいまはしく、心苦しく思ふ内遂にはそれが原因となり、七夜立たざるその内に果敢なく此

の世を去りし故、是非なくくも乳母の乳で二月あまり育てしが、日頃信する陰陽師我娘をつら  
つら見て、劔難の相ある上家に祟ると教へられ、不便ながらも當歳にて三條小橋へ捨つる折、親  
子の縁の盡きずして、名のり合ふべき時もがなと傍にあり合ふ印籠の上の一つを守袋へ入れ、涙  
ながらに棄てたるは早二十年の昔にて、それより平家没落して斯く淺ましき身となりはて、祟る  
と言ひし家もなく、今更棄てしを後悔なし、雨の夜雪の朝には思ひ出さぬこともない。あゝ親は  
なくとも子は育つと、よくも成人なせしよな。

ト小兵衛若草を引寄せる、若草もすがり寄り、

若草 年頃尋ねし父さんに、めぐり逢ひは逢ひながら、思はぬ深手を負ひし身に、

小兵 逢ふは別れの今の仕儀。(ト若草の顚へ手をかけ) 娘、

若草 父さん。え、おなつかしうござんすわいな。

ト若草すがり泣く、小兵衛涙を拭ふ、伊之助ほつと思入あつて、

伊之 神ならぬ身の情なや、知らぬことゝは言ひながら未は女房と約束の現在親を手にかけては、天よ  
り罰を受けたるか。棄兒と思ひし若草は系圖正しき身と知れて、今更なんと言譯も立つに立たれ  
ぬこの場の有様。

若草 名乗る甲斐なく先立つ不孝、殊には親に刃向うて薄手ながらも手を負はせ、噓や浮世の口の端に、  
伊之 かゝりや繋がる親人へ、刃を當てし申譯へト伊之助脇差を腹へ突立て、これにてどうぞ許して下  
え。(ト苦痛の思入)

小兵 (見て) あゝよしなく我が名乗りし故、あたり花を散らせしは、思へばく不便やなあ。

伊之 知らぬ先は兎も角も、親殺しの汚名を受け、

若草 死ぬる二人の身の悲しさ、

伊之 犬死なすが、

兩人 口をしい。

小兵 いや、犬死ならぬ、御身替り、

兩人 すりや、何人の。

小兵 (思入あつて) 三位中將重衡卿まつた吳羽の内侍詮議きびしき街の立札。(ト懐中より人相書を出し)  
そち達二人が面體年頃、丁度似寄に首討つて源家へ渡し若干の、恩賞受けんと邪慳にも、科なき  
者を殺さんと思ひし者は棄てたる我子、願うてもなき御身替り、二人が首にて一旦の詮議の圍み  
開かせて、何處に忍びましますか、お行方尋ぬる我心底。

わた（この以前より門口に窺ひゐて）扱は小兵衛は平家の落人、殊には重衛内侍が偽首、注進なして褒美の金子、さうだ。

ト行かうとする、路地口より西念出で、おわたを捉へ突廻して當て、下手の釜の中へ打込む。

小兵（門口を明けこれを見て）や、あなたは隣りの。（ト思入）

西念 氣遣ひあるな、盛次殿。

小兵 や。（トきつとなる。）

西念（内へはひりて）その贗首へ極書、この西念が進上申さう。

小兵 なんと。

西念 假令似寄りの面體でも、邪智深き源氏方、證據なければ受取るまい。その極はこの系圖。

下前幕にて手に入りし系圖を渡す。

小兵 や、こりや重衛公御所持の系圖、扱はこなたも由縁の者か。

西念 いかにも、最前よりの一部始終承つて驚きしは、現在血筋の人々故、

小兵 然いふこなたは何人なるぞ。

西念 名乗るも面ぶせなれど何をか包まん、我こそは貴殿の妻女の弟たる、主馬判官盛久なり。

小兵 や、盛久殿であつたるか。

西念 我十歳代のその折に一度逢うたるその儘にて、領地に人となつたる故、互ひに面は見忘れしが、

殿の懺悔に不思議の對面。あゝ、さはさりながら、名乗る甲斐なき今の身の上。

小兵 すりや、貴殿にも世を忍び、

西念 亡き一門の追善旁々、時もあらばと恥を捨て、表は殊勝な有變の僧、

伊之 (聞いてゐて思入あつて) そんなら、つながる、

若草 あの、伯父様でござりましたか。

西念 あ、現在血筋の伯父なれど、知らぬことゝてこれまでは、

伊之 他人向きにて二人とも、

若草 お世話になりしも、

西念 亡き妹の導きなるか、

小兵 あ、いかなる過去の宿業にや、

伊之 未來の苦患眼の前り、

若草 親子刃を合はせしは、

小兵 とりもなほさすこれ修羅道。

伊之 閻魔の前に寄り合うて、

若草 見るもうたてき劔の山、

西念 心の鬼に責められて、

小兵 阿鼻叫喚の苦しみより、

伊之 つらき親子の、

若草 一世の別れ、

西念 思へば果敢ない、

四人 身の上ぢやなあ。(ト四人手を取交し、よろしく思入。)

伊之 あゝ、いつまで言うても返らぬこと、憚りながら御介錯。

小兵 いふにや及ぶ、

西念 あたら若木を、尚無阿彌陀佛。

ト伊之助腹の刀を引廻す。若草うつとりとなり、よろしく手を合せる。

小兵 えい。

ト首を打落す、これをキツカケに遠寄せの鳴物を打込む。西念思入あつて、  
西念や、あの太鼓は。

ト此時勘太、金八心付き兩人にかゝるを立廻り引附ける。

小兵 最前女房お六に言附け、重衡卿吳羽の内侍捕虜となせし故、首討つて渡さんと梶原が旅宿へやつたれば、首受取りの討手ならん。さるにても此系圖、いかにして手に入りしぞ。

西念 その一卷の手に入りしは、夜前隅田の川原にて。

小兵 や、なんと。(ト思入)

西念 折しも月の雲隠れ、あたり小暗き川の岸。(ト勘太、金八かゝるを立廻りながら) 入水の者が水首にはつとさはだつ群鴨、怪しと窺ふ蘆原にて躓き拾ふその系圖、帛紗は覺えの劔先布、内やゆかしく開き見れば、系圖と共に入れありしは、秩父三十四ヶ所の守り、これにて思ひ合すれば重衡卿には順禮に、姿をやつしてお忍びありしか。

小兵 さては夜前隅田川にて、軍用金になさんすと、金に目がくれ突落せし順禮夫婦は、まさしく尋ぬる、やまよ、(トびつくりなし) 身替り首にて詮議をゆるませ、君の御行方尋ねんと思ひし事も今となり、水の哀れや兄弟も腕の痣の犬死なるか。え、知らぬこと、は言ひながら、現在この身は

主殺し。(ト腹を切らうとする、勘太、金八これを支へる立廻り。)

西念 やれ待たれよ、早まられるな。もし人違ひであるならば千萬悔いても返らぬこと、急く所ではない盛次殿。いざ此上は二人の首級、片時も早く持参あれよ。

景季 (上手の屋體にて) やあ、持参に及ばず、梶原源太景季疾よりこれにあり。

小兵 なんと。

ト小鼓の入りし合方になり、上手の屋體の障子を引抜く、内に景季長上下大小にて、左右に袴股立の郎等桶を持ち控へゐる。小兵衛これを見て、

こりや、いつの間に。

景季 最前女房が注進に、裏より忍び始終の様子。いや、疾より是に待受けたり。

郎一 重衡内侍二人の首級、

郎二 早く實驗に供へてよからう。

トこれにて小兵衛思入、西念 二人の首を景季の前へ出し、

西念 (お訴へ申せし重衡内侍が首、證據は即ちこの系圖、いざ御檢分下さりませう。(ト系圖を出す。))  
景季 (見て) ほ、お三位中將重衡、吳羽の内侍に相違ない、出かしたく。よくぞ討ちしぞ恩賞くれ

ん。やあ、申附けたる品これへ。

お六（下手にて）はあ。

ト時の太鼓にて、下手よりお六先に三位中将、吳羽の前願禮装にて出来る。

小兵（見て）これは。

お六もし、こちの人、梶原様のお情にて下しおかる、御褒美は、常々お前の尋ぬる品、ようお禮をおつしやりませ。

小兵 すりや御二方を。は、はッ、御情厚き御賜物、有難く頂戴仕ります。

西念 して御二方には、如何して、御安泰にてませしぞ。

三位 夜前隅田川原にて測らず入水なしたるが、口頃信心なし奉る、熊野三社の靈驗なるや。

吳羽 水に溺れず不思議にも、流れ寄りしは待乳の麓、折よくこれなる景季殿通行ありて助けられ、

お六 御二方のお命に、恙のないもあなたのお蔭。

小兵 は、寛仁大度の梶原殿へ、此の身の素性包むに詮なし。

西念 名乗る甲斐なき事ながら、われこそは。

景季 ためや、平家に由縁の者あらば、首討てよとある、鎌倉殿の嚴命なるぞ。

兩人むす。(下兩人思入あつて)

西念 斯くまで厚き情を受け、双向ふ刃のあるべきぞ、たゞこの上は御二方の御安泰を願ふのみ。

小兵 いかにも、是まで集めし軍用金も、凡そ員數三千兩を祠堂金となしたまひ、君にはこれより高野

へ登り、亡き一門の追善供養。

三位 ほう言ふにや及ぶ、某も疾より浮世を捨法師、

吳羽 佛へ仕ふる身は墨染め。

下三位中將、吳羽肌を脱ぐ、下は白の装に墨衣の袈裟をかける。

西念 その御供は、この西念。

景季 重衡ならぬ今道心へ、源太景季施物なさん。

ト以前の系圖を三位中將へ渡す。

三位 や、こりや失ひし家の系圖、忝ない。

小兵 是して我も安堵せり、今ぞ此身の邪道に、積悪報ふ自業自得。(ト刀を腹へ突込む)

景季 ほうお、悪に強きは善にも強し、

お六 私と共に、死出三途。(トお六死なうとするを西念留めて)

西念 こりや、死ぬる命をながらへて、

三位 夫の菩提、

吳羽 法の道連。 (此時鶏鳴く。)

景季 最早鶏鳴。

郎等 お立ち。

大勢 (下手にて) はあ。

ト 皆々四天矢筈の紋附の提灯を持出る。この時、

樂屋頭取 (立いで) まづ今日はこれぎり。

ト 目出度く打出し。

閻魔小兵衛 (終り)

梅蝶樓に  
寄する聖廟の  
梅園

菊地貞行が  
菅神の初詣に召  
れて茲へ御目見得は

若衆哉  
御攝御好任七草四郎  
若菜姫が

合卷其儘島原歌舞伎榮

柳下亭に  
比する博多の  
柳町  
女かな  
其浪枕の契情船越

此頃筑前の鐘の岬に蛙の合戦ありと聞く噂も高き額  
堂に神の御燈の蔭澤と共に消行く雪岡が無念は晴れ  
ぬ雨催ひ親子の縁も浅倉に我身を贅に秋篠が一念通  
す岩太郎の憂を三つ地の小鼓に打て替りし犬千代が  
天女の加護に富島の試合天晴なるかな豊後之介が三  
年で歸る忠義始めに青龍の兜を諫言の種員  
其頃豊後の錦ヶ獄に蜘蛛の妖怪ありと聞く嘶も臆る春  
の夜の月の照葉は影くらき松代と共に落人が身によ  
り掛る雪催ひ積る怨みの執着に小磯が嫉妬眞平が哀  
れ命を捨小舟浮世の夢も儼藏に毒藥變じ鯨九郎が鬼  
も佛に阿彌陀寺の腹切健氣なるかな多聞之介が初冠  
の手柄はじめは白雉の鏡に治世の國貞

あらいぬい舞

新春 御慶 廻

白縫譚は嘉永六年二月、作者三十六歳の時、河原崎座に書卸された。柳下亭種員の「白縫譚」を脚色せるものであつたが、異常の好評を博し、後日狂言さへ續いて上場されたくらいである。合巻又は草雙紙を作者が取扱つた標本として輯録した。篇中乳母秋篠が忠死するの件と小磯の嫉妬とは、特に舞臺効果に富み、屢々上場される場面である。

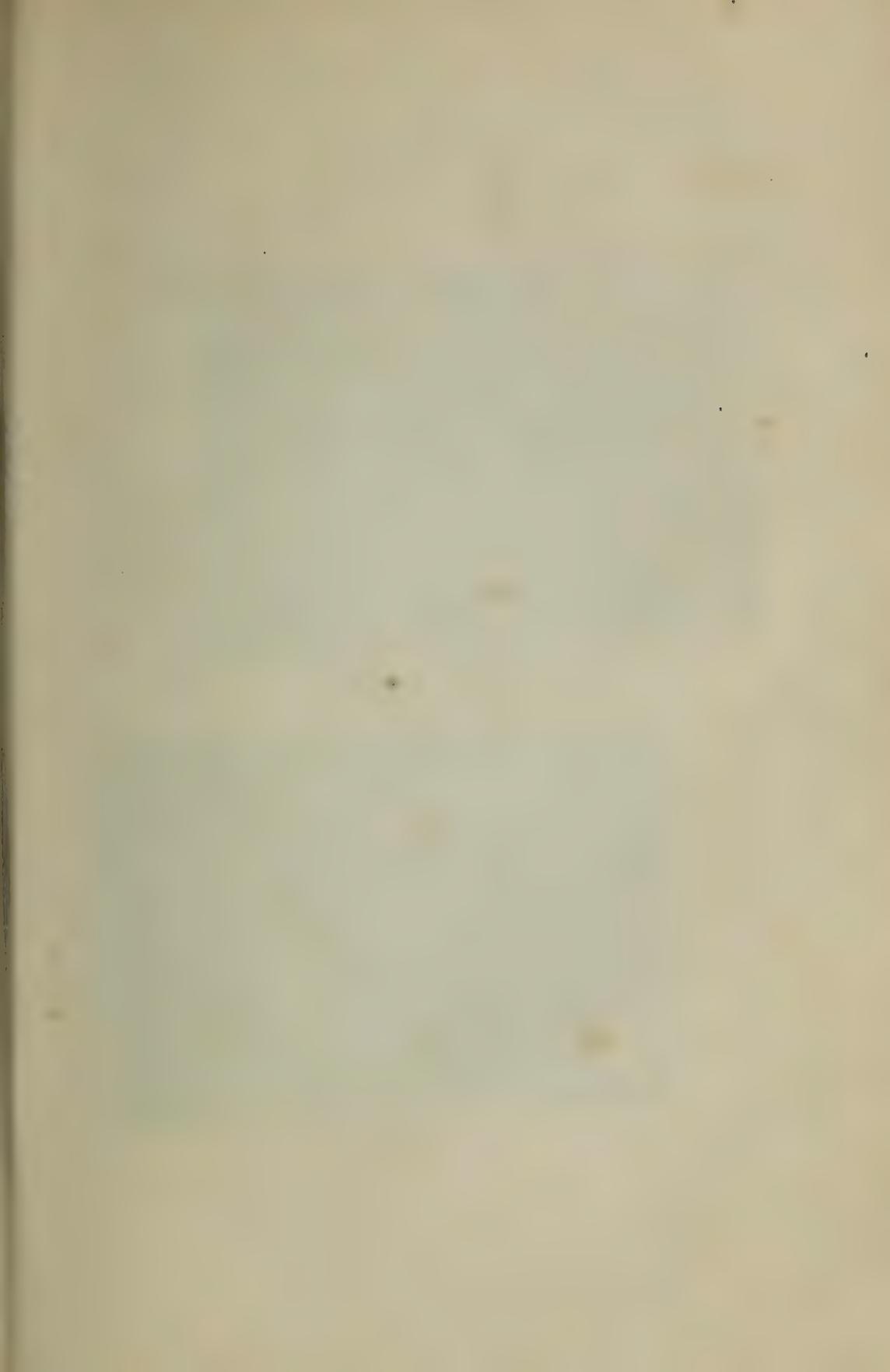
書卸し當時の役割は、坂東彦三郎(鳥山豊後)、七草官丁禮の亡霊、漁夫鯨九郎、大友刑部、嵐璃寛(菊池貞行)、乳母秋篠、漁夫浪六、坂東しうか(若菜姫)、青柳春之助、小磯、嵐璃玕(鳥山大千代後に秋作照忠)、坂東竹三郎(雪岡冬次郎)、照葉、淺尾奥山(大友岩太郎)、漁夫鯨藏、市川團之助(蔭澤夏之丞)、雪岡腰元松代、市川男女藏(淺倉三太夫)、嵐和三郎(龍川小文次)、坂東大次郎(漁夫鯨八、雪岡下部眼介)等であつた。

挿繪にしたのは、豊原國周筆の見立錦繪で、五世菊五郎の家橋時代の春之助并に先々代田之助の若菜姫である。

大正十三年七月

編者誌す





まらぬひ譚 (白縫譚——八幕)

序 幕

筑前莖ヶ岡の場  
同 鐘ヶ岬の場  
同 錦ヶ嶽の場

〔役名——漁夫春吉後に青柳春之助、大友の息女若菜姫後に白縫大盡、六部經典實は玄海灘右衛門、

鷺津七郎正吉、旅虚無僧實は鷺津六郎正時、漁夫棍作、同磯平、同浦藏、同洞六、同沖藏、同濱六、

同鳩八、同湊藏、同鱸八、同漕六、同灘藏。七草官丁禮の亡霊等。〕

〔香椎明神祭禮の場〕——本舞臺三間後淺葱敷、所々に地口行燈をかけ、上の方に朱塗りの片鳥

居、真中に誂への高札を立て、舞臺前波板、總て筑前莖ヶ岡、香椎明神祭禮の體。爰に磯平柿の

筒ッほう、漁夫の装、火きなる畚へあわび貝にて目鼻を附け引綱をあふり、浦藏、洞六、濱六、鳩八、

浦藏同じく漁夫の装にて立ちかゝり、波の音屋臺囃子にて賑かに幕明く。

皆々 何でも目出度い、舞ひこめく。(トみなく獅子を舞つて、)

浦藏 さあ、一息ついて明神さまから、濱中を廻らにやあならねえ。

まらぬひ譚

皆々 それがいゝ、一服やらかせく。(ト筵を敷き、皆々これへ住ふ。)

磯平 けふは日和もよくツて、明神さまの祭も賑かで、濱中の仕合せだ。

洞六 それく、いつぞやから此の鐘ヶ岬の沖に、夜なく光り物があつて、去年の暮から漁がさつば

りなかつたところ、

濱六 領主の殿様が此沖に沈んで居る、釣鐘を引上げたらば、その光り物もなくならうから、

鳩八 水練を得たものに、海へ這入つて其鐘の龍頭へ綱を附けて來た者には、莫大の褒美を下さるとい

ふ。

浦藏 あれ、あの通りの高札が所々に立つた其日から、光り物はあるが此の四五日、久しぶりで大漁が

あつたゆゑ、

磯平 濱中の者が生きかへつた心持で、お禮の爲に鎮守の明神で祭りをするのだから、おもひれ賑かに

するがいゝ。

澤藏 是れから何でも、獅子を濱中の家々へ、舞ひこませにやならねえ。

皆々 それがいゝ、支度をしろく。

三三 (ト濱唄) 濱唄 聖天になり、花道より梶作世話親仁の装、三方へ造酒徳利と強飯の高盛りを載せて持ち、蒔

藻島田舎やつし娘の装、重箱の風呂敷包みを提げて出来り、

菊藻と、さん、向ふの鳥居の前に、若い衆が獅子をもつて集まつてぢやわいな。

梶作 お、さうだく、早くあそこへ強飯を持って行き、喰はせてやれ。

菊藻 あい、く、さあ行きなさんせ。(ト右鳴物にて兩人舞臺へ来て)

梶作 お、濱の若い衆達、獅子がよく出来たな。

浦藏 誰かと思つたら、漁夫仲間の春吉の父さん、

磯平 妹の菊藻どのも一緒に、よくござつたなう。

皆々 さあ、く、ござれ。(ト梶作菊藻真中へ来て)

菊藻 皆さん、今日は大きに御苦勞でござんす。おいしくはあるまいが、お強飯にお煮染を持つて来た

ほどこに、澤山あがつて下さんせ。(ト重箱を出す)

洞六 そりやあ忝ない、今獅子が出来上つて、丁度煙草にしたところ。

瀧六 よつほど腹もきた山時雨、辭儀なしに馳走になりませう。

露藏 腹を丈夫にして、父さんの家へ舞ひこむぞえ。

鳩次 さうだく、菊藻さんもるるから、獅子の洞入りをやらかすがい。

菊藻 えゝも、何を言はしやんすぞいなあ。

梶作 いや、賑かて目出度いく。皆の衆も知つての通り、鐘ヶ岬の沖中に夜なくの光りもので、去年の暮から大不漁、此頃四五日空も晴れ、久し振りで漁が澤山あつたゆゑ、濱中が言合せ香椎の

明神さまへお禮がてらの祭禮、おらが家が濱行事に當つたゆゑ、強飯やら煮染やら今朝からのこ

しらへ、晩にはお造酒開きで、酒を澤山呑ませるほどに、皆早う來さつしやれや。

浦藏 それは忝けない、さうして孝行息子の、春吉はどうしましたの。

梶作 聞かつしやれ、日頃から親孝行の春吉、この度御領主の菊池貞行様がお建てなされたあの高札、

海の底に沈んで居る釣鐘へ綱を附けた者には、多くの褒美を下さるとあるを聞くと、何でも手柄して褒美を貰つて、此親仁を樂にする、此中からお船出を待兼ねて居たところ、

菊藻 けふ殿様が袖の港から、お船に召して浦々を御遊覽と聞かしやんして、何でも今日こそ手柄すると言はしやんす。何ほう小さい時から海邊に育つたとて、千尋も知れぬ海の底、止しにせいと父さ

んが留めるを聞かず、最前お船先へ行かしやんしたわいな。

梶作 こなた衆は知るまいが、あの春吉はおれが妹おれんの子、父親は様子あつて他國のもの、春吉を生み落すと間もなく、妹は死んだゆゑおれが方へ引取り、菊藻が兄にして育てゝるる義理ある

悴 日頃から顔形に似ず水練の達者、氣遣ひはなけれども、怪我でもあるまいかと案じられるわいなう。

磯平 そりやもう、案じさつしやるは尤もだが、漁天仲間で誰も及ばぬ春吉が水練、

洞六 まんまと龍頭へ綱を付け、褒美を貰ふは知れたこと。

皆々 必ず案じさつしやるな。

梶作 皆の衆が其やうに、言つてくれるで力が附いた。これ娘、おれは明神さまへこれを供へて、悴が

身に恙ないやう、お願ひ申して來るほどに、わが身は先きへ歸つて、何かの支度して待つて居や。

荳藻 あい、早うおまゐり申して來なさんせ。

梶作 そんなら皆の衆。どれ、お供へ申して來ようか。(ト右の鳴物にて梶作三方を持ち、鳥居の内へはひる。)

荳藻 さあ、皆さん、早うお強飯をあげらぬかえ。

浦藏 いやも、さつきから喰ひたくつて、喉がぐびぐび、鳴つて居る。

濱六 しかし、荳藻さんが見て居ては、少しこツ恥かしいやうだ。

磯平 え、笑はしやあがるぜ。さあ、やらかせく。(ト此時向ふにて)

蟻八 濟まねぞく。

ト濱明 聖天にて、花道より鱧八漁夫の装にて、角樽を手拭にて肩に掛け、同じ装の沖藏の胸倉を取つて出る、漕六同じ装にて留めながら出て、

漕六 これさ鱧八、今日は日出度い濱の祭りだ、いゝ加減に了簡さつせへく。

鱧八 いや、いやだ、おれが行先へ突當りやあがつた沖藏、了簡ならねえく。

沖藏 これは又迷惑千萬、貴様の方から突當り。しかし、わしが悪くばあやまらう、道中で人も見る、

まあこゝを放してくれ。(ト鱧八の手を放す。)

鱧八 いや、放さねえ、いやだく。(トまた立掛るを、漕六中へはひつて留め。)

漕六 まあく、おれに預けるく。

鱧八 いやだく、濟まねえぞく。(ト争ひながら舞臺へ来る、荊藻見て。)

荊藻 お前は鱧八さん、見ればきつう腹立てなんした様子。また沖藏さんも濟まぬ顔附。漕六さん、ど

ういふ譯でござんすえ。

漕六 其譯は、今こゝへ来る道で、鱧八に沖藏が突當つたといふ、いや、そつちから突當つたといふこ

たつきよ。

荊藻 不斷からの心安だて、もうよい加減に了簡して、仲直りをしなさんせいなあ。

浦藏 さうだく、荊藻さんの言ふ通り、心安い友達仲間、

洞六 殊に目出度い明神さまの祭りなり、

皆々 了簡さつしやい〜。

鱈八 成程けふは目出度い祭りといひ、おれも此濱へ返り新參なれば、手前達に籠められねえやうに、

酒を一杯吞ませうと、此通り持つて来る道で、沖藏の野郎が突當つたもんだから、了簡ならねえ

といふのよ。

沖藏 これさ鱈八、どうしたもんだ、出合頭に貴様から突當りながら、おれが突當つたといふゆゑ、そ

んならおれにして了簡しろと言つたなら、もういゝ加減にするがいゝぢやあねえか。

荊藻 沖藏さんの言はしやんす通り、出合頭のお互ひに言ひがゝり、元より根もない間違ひなれば、も

う大概に不承したがようござんすわいなあ。

鱈八 いや、いや、根も葉もねえことはねえ、不斷からおれが惚れて居る荊藻、口説いて見てもびんし

やんするは、沖藏めと腐りあつて居るから、われがそんなに肩を持つのが、胸糞が悪いわえ。

沖藏 これは又どうしたものだ、目出度い祭りのさいさきと誤つて居りやあ附上り、さう強情に言やあ

仕方がねえ、小いやらしいが此荊藻と、話し合をしてゐる此沖藏、おぬしが構つたことはあるめ

しらぬひ譚

え、但し、此濱ぢやあ色事をするのは法度か、岡焼餅ならよしにしろく。

鱧八 岡焼餅もすさまじい、色事法度でなくツても此鱧八がならねえわ。なんほ歸り新參でもわき土地から來た沖藏に、幅をされちやあ了簡ならねえ。おゝいやだ、今日からわれが手を切つて、荊藻はおれが女房にするわえ。

沖藏 口に門番がねえと思つて、大層な御託を吐き出したな、なんほわれが手を切るの足を切るのとぬかしても、さう自由にやならねえわ。

漕六 これさく、どうしたものだ、折角引き潮になつたに、また潮をあけて來た。まあく互ひに、四海波靜かにするがい、ぢやあねえか。

荊藻 さうでござんす、わたしのことでお二人の争ひ、聞いてゐる其辛さ、どうぞまあ了簡して、仲直りして下さんせいなあ。

鱧八 いやだく、斯う言ひ出しちやあ金輪際了簡ならねえ、いやだく。

沖藏 さう吐かしやあ是非がねえ、おれも男だ、相手になるわ。

鱧八 やかましい、其頬脣を歪めてくれべい。

ト波の音屋臺囃子にて、兩人立廻り、荊藻、漕六中へはひり漁夫皆々留める。花道より灘藏漁夫のこ

しらへ、櫛の先へ網を括りつけて出で、直に本舞臺へ來り、

灘藏 これく、二人とも此の喧嘩は、灘藏が預かつた、おれに預けろく。

鱧八 いやだく、了簡ならねえく。

沖藏 さうだく、退かつせいく。

灘藏 いゝや退かれねえ、靜かにしろく。

漕六 これく、灘藏どの、挨拶だ。

皆々 待たッせえく。(ト兩人を引分ける。濱唄の合方、聖天。)

荇藻 ほんによい所へ灘藏さん、よう留めて下さんしたなあ。

灘藏 おれも今こゝへ來かゝつて、何だか様子は知らねえが、初春早々二人が喧嘩、同じ濱生業で一つ

網を引きあふ仲、野暮らしくたゝき合もあんまり出來た話しでもあるめえ。二人ながら腹も立た

うが、此喧嘩は灘藏が、年玉がはりに貰つたく。

荇藻 あれ、あのやうに灘藏さんも、言はしやんす程に、鱧八さん。

漕六 荇藻坊の言ふ通り、これ沖藏、折角灘藏どの、挨拶だ。

皆々 了簡さつしやいく。

しらぬひ譚

鱒八 成程おぬし達の挨拶といひ、灘藏の挨拶、了簡ならねえ所だが、さう強情も言へめえ。仕方がね

え、了簡しようよ。

沖藏 鱒八がさうおとなしく出りやあ、わしが方にも何も言分はないのさ。

灘藏 さう言つてくれりやあ、口を利いたおれも花を持つといふものだ。さあ〜一つめてくれ〜。

鱒八 初春早々丸めた。

沖藏 さあ〜、めろ〜。

皆々 ヨイ〜、ヨイ〜。(ト手を打つことあつて)

漕六 やれ〜、灘藏さん、御苦勞々々。

荊藻 どうなることかと思つたに、灘藏さん、いかいお世話でござんした。

灘藏 何の禮にやあ及ばねえ、そんなら此れから明神さまへまゐつて、濱行事の梶作の家で祭の振舞を

幸ひ、仲直りの盃をさせよう。

皆々 それがい〜。(ト灘藏栗作を見て)

灘藏 これ〜、そこに居る栗作、手前は去年の暮大阪へ立つといつて、餞別を貰つてまだ行かぬか。

栗作 左様さ、わしも早う立つのでござりましたが、連れの者が女郎にはまつて、其上わしも此の濱に

お名残りが惜しいから、頭に頼んで、もう一濱働いて立つのでござります。  
灘藏 いや、蟲のいゝ男だ、何ぞおこれ。

栗作 久し振りでお前、團子でも奢つてくんないさい。  
皆々 おきやあがれ。

灘藏 そんなら是れから神明さまへ。

沖藏 みんなも一緒に。

灘藏 さあ来やれ。(ト右鳴物にて、皆々鳥居の内へはひる、引違へて梶作出で、)

梶作 先づ明神さまへ供物をして、春吉が身に恙ないやうお願ひ申したれば氣遣ひはない、是れから歸

つて、よい便りを待たうかい。(ト行かうとする、此時鳥居の内より灘藏出で、)

灘藏 これく梶作どの、ちつと用がある、待つて下せえ。(ト前へ出る、梶作見て、)

梶作 誰かと思つたれば灘藏どの、此中は逢ひませぬが、何ぞ御用でもござるのか。

灘藏 されば此頃久しく筑後へ行つて、二三日跡に家へ歸つて様子を聞けば、領主の菊池殿から浦々へ

建てられた高札、鐘ヶ岬に沈んで居る釣鐘の龍頭へ綱を附けたものには、褒美の金をやるとのこと

と、こなたの息子春吉が、菊池殿の船出を待つて、釣鐘へ綱を附けて褒美の金を貰ふとのこと、

梶作

常からかほそいあの春吉、いかに水練が達者でも、あぶねえ仕事だ、止しにさせるがよからうぜ。親切なこなたの詞、知つての通り義理ある忤のあの春吉、日頃からの孝行者、殿様のお目通りで手柄して褒美を貰うて、わしを樂にさせるといふゆゑ、いや／＼命がけの危い仕事、止しにせいと留めるも聞かず、今日菊池殿のお船出と聞いて、今朝から支度して行きましたわいの。

灘藏

何といふ、そんなら今日菊池様が船出と聞き、春吉が行つたといふのか。

梶作

待ちに待つた今日の船出、喜び勇んで行きました。

灘藏

南無三寶、今日の船出を夢にも知らず、春吉に先を越されたか、是れから直に追附いて鐘の龍頭へ綱を付け、褒美の金をせしめてくれべい。(ト灘藏身ごしらへして、行かうとするを驚き留めて)

梶作

これ、待つてくれ、忤が手柄の邪魔する灘藏、おぬしはめつたに遣られぬ／＼。

灘藏

いらざる留立て、手柄は仕勝ちだ、放せ。

梶作

いや、めつたに放さぬ／＼。

灘藏

え、面倒な、どきやあがれ。

ト屋臺囃子になり、梶作留めるを蹴散らし灘藏逸散に花道へはひる。此内鳥居の内より苅藻出で、

苅藻

これ父さん、様子は残らず聞きました、兄さんの手柄の邪魔するあの灘藏、わたしもとも／＼跡

追掛けて。

梶作 鐘ヶ岬へちつとも早う。

苧藻 そんなら父さん。(ト屋臺離子になり、梶作苧藻花道へはひる。此うち鱧八出て)

鱧八 日頃から仲の悪い春吉に先を越されちやあ、鱧八が面が立たねえ、跡から追仰け加勢して、灘藏

に手柄をさせ、褒美の金の分口を貰はにやあならぬ。

ト身ごしらへして行かうとする、此内後へ沖藏出て、

沖藏 鱧八待て。(ト鱧八振返り見て、)

鱧八 待てとは、何ぞ用があるか。

沖藏 知れたことだ、親孝行な春吉が、手柄の邪魔する灘藏が加勢をする鱧八め、わりやアめつたに潰

られねえ。(ト鱧八を留める。)

鱧八 しやらツくさいことを吐かしやあがる、苧藻が縁で春吉の肩を持つ沖藏め、邪魔だてひんぎつあ

鱧八が、さつきの喧嘩の枝ほねを、爰でびしく折つてくれるぞ。

沖藏 小癩な一言、なんほ春でも悠々と、うぬらの自由になつて居る、そんな間拔があるものか、留め

か、つたら金輪際、めつたに此場は動かさねえ。

鱒八 こま言言はずと茲こゝ放はなせ。

沖藏 いゝや、ならねえ。

鱒八 なに、ちよございな。(ト兩人りやうにんちよつと立廻り、鱒八ふか懐ふとろより錦にしきの旗はたを落おとす、沖藏おきぞう取上とげ)

沖藏 や、こりや慥こしかに大友家おほともけの重寶ちゆうほう、錦にしきの旗はた。

鱒八 南無三なむ、それを。(ト手早てはやく取とつて懐中くわいぢゆうする。)

沖藏 その赤旗あかはたを持もつてゐるからは、扱さてはおのれは大友家おほともけの餘類よるるのもの。

鱒八 それ知しられたら觀念くわんねんしろ。

ト屋臺やたい囃子はやしになり、兩人りやうにん權けんを取とつて立廻り、よき程ほどに一ひとの鳥居とりかの内うちより、漕六こくろく出でて此體このていを見みて、

漕六 おぬしは鱒八ふか、また暗嘩けんくわか。

鱒八 漕六こくろくか、加勢かせいしろ。

漕六 合點がつてんだ。

ト漕六こくろく高札かうさつを取とつて此中こゝなかへはひる。三味線みせん入り祭まつりの鳴物なりものにて三人にん立廻りたちまわりあつて、よき見得みえにて屋臺やたい囃子はやしにて此道具このどうぐ廻まる。

(鐘ヶ押の場) 本舞臺三間高足の土手、向ふ波手摺、下手より真中へ掛けて押の岩端、上手松の立木、日覆より釣枝、總て鐘ヶ押の體。灘藏大阪手甲、腰蓑の装、脇差をさして立掛り、左右より梶作、荻藻取りついて居る見得、波の音にて道具留る。

灘藏 やア、しみしつこい老耄、女郎め。留立てすると殺生は、漁夫の業なら是非がねえ、うぬらか命を取らにやあならねえ。

梶作 情知らずの灘藏め、大事の悴の一生の手柄、假令命は取られても、

荻藻 女の念力、兄さんの叶はぬまでも手柄の加勢。

梶作 やはかおのれは、

兩人 やらぬく。

灘藏 え、面倒な。

ト三味線入りの鳴物になり、梶作荻藻有合ふ權を取つて打つて掛る、灘藏脇差を抜き三人立廻り、ト  
ド灘藏高土手の上にて兩人を切り下げる、兩人苦しみながら、

荻藻 どうでも二人を、

兩人 殺すのか。

しらぬひ譚

灘藏 こま言ぬかさず、くたばつてしまへ。(ト兩人を切る、波の音にて下手より漕六出來り、)

漕六 灘藏か、大事だく。

灘藏 わりやあ漕六、大事とは。

漕六 今乾坤丸の船先で、綱引ツか、へて春吉が、海の底へ飛びこんだく。

ト捨ぜりふにて下手へ走りはひる、二人これを聞き思入、後を見て、

梶作 や、すりや春吉は、

荊藻 千尋の底へ、

灘藏 手柄は仕勝、波間を潜つて。(ト行かうとする。)

兩人 い、や、めつたに。(ト取附く。)

灘藏 何を小癩な。

ト波の音、灘藏行かうとする兩人取附くゆゑ散々に切倒し、二重より下へ蹴落し、刀を納め身こしら

へして、

入らざる支へに暫時のおくれ、是れより直に龍頭のもとへ、おゝさうだ。

ト波の音一聲になり、灘藏思入あつて後の波間へ飛込む、ドンと波の音、波煙りパツと立つ、知らぬ

につき、此道具廻る。

(鐘ヶ岬海底の場) 本舞臺一面開ほかしの浪幕、上下貝類の附きし岩組、日覆より同じく開ほか

しの浪板をおろし、總て鐘ヶ岬海底の體、よろしく道具留る。と、ドロく打上げ、大陸摩になる、

往事渺茫として夢かよと、夢か現か幻に闇々として影くらき、千尋の海の水底に、姿お

どろに異國人、羅綾の袂破れはて、物凄くもまた怪しけれ。

ト詠へドロく、唐樂の入りし物凄き追上げの鳴物になり、上手に陰火立ち、舞臺眞中へ七草官丁

禮の亡靈、百日髪、破れたる裝束異形のこしらへ、貝類のつきし岩臺へ片膝かけ、下手に春吉、藁

で結びし若衆髪、絞りの筒ッぼう、同じく脚絆厚子やうのものを着、腰袋をかけ漁夫のこしらへ、

よろしく兩人迫上がる。

丁禮 如何に小冠者承はれ、我宿世の縁あつて、汝を待つこと年久し、それゆゑ是れまで招きしぞ。

春吉 さいふは日本に見馴れぬ異人、われを待つとは合點行かず、そも先づ汝は何者なるや。

丁禮 ほ、お、いしくも問ふたり、我こそは元この地の者ならず、唐土福州の船人七草官丁禮といひし

もの。

春吉 夢にも知らぬ唐土人が、われを招きし仔細は如何に。

丁禮 その仔細語り聞かさん。(と誂への唐めいたる鳴物になり、丁禮思入あつて) 我壯年の頃なりしか、

不圖海賊の群に入り、はからず月日を送るうち、遂に彼等が頭となり數多の手下を従へて、唐日本ほんの嫌きらひなく、渡海とくかいの折柄強盜せうたうなせしに、思おもひ出せば十七年先ねんさきき、此筑前このちくぜんの沖おきに來り往來ゆきまきの船ふねを惱なやませしが、貞行さだゆきが父菊池秀行ちくきくちひでゆき、かねて手段てだてを廻めぐらしけん、思おもひがけなき闇やみの夜よに數多あまたの兵船へいせん漕こぎ出し、わが元船もとぶねを追おつ取巻とらまき不意ふいをうたれしことなれば、手下てしたの者ものは驚おどろきあわて、如何いかはせんとなす折柄せりから、秀行ひでゆきが下知げぢとして、水練勝すゐれんすゐれし灘藏なみざうといへる者ものに、乗りたる船底ふなぞこくり技ねかれ、射いる矢やは霰船あられふねには水みづ、よしや翼つばさのあればとて脱のがれがたなく其場そのばにて、手下てしたは残のこらず射いて取とられ、残のこるは我わが身みたゞ一人ひとり、されども心こころを勵ほまして乘込のりこむ敵てきを切拂きりばらへば、近寄ちかよるものもなかりしに、討手うての大將たいしやう雪岡多太夫ゆきおかたは、間近まぢかく船ふねを漕こぎ寄よせてねらひ定さだめて放はなつ矢やは、我わが額顛のこかみにはッしと立たつ、急きよ所の痛手いたでに今は早はややこれまでなりと唐土からこより、奪うばひ來りし釣鐘つりがねの船ふねにありしを引ひツかつぎ、其儘そのま海うみへ飛び入いつて底そこの藻屑もくずと成果なりはたり。其頃そのころ肥前長崎へんぜんながさきなる、連山れんざんと呼よぶ傾坡けいせいに深ふかく馴染なじみを重ねしが、彼女かれわが胤たねを宿やどしてより早はや五月いつつきにあたるころ、我われは空からしく討死うちじなす、其後そのご程ほどなく連山れんざんは年季ねんきも明あけて親里おやさとなる、兄梶作あにからさくが家いへに歸かへり生うみ落おせしは則すなはち汝なんぢ、されども流石さすが異人ことびとの胤たねを宿やどせしこと

「を恥ぢ、それを言はねば梶作夫婦も、我が子とは知るよしなし、此程夜なく、此海に怪しき光りをなしたるは、我が靈のする業ぞ、これまで汝を招き寄せ、是れを語らん其爲なり。」

ト思入にて言ふ、春吉これを聞きびつくりするこなし、

春吉 む、始めて聞きしわが素性、今が今まで梶作が、子とのみ思ひし我こそは。

丁禮 この七草官丁禮が、此土に残せし遺兒也。

春吉 すりや、肉身分けし現在の、我が父上にてあつたるか。

丁禮 絶えて久しき對面も、

春吉 父は唐土、

丁禮 わが子は日本、

春吉 海山隔てし、

丁禮 親と子が、

春吉 一つに寄るも、

丁禮 思へば、盡きせぬ、

兩人 縁ぢやなあ。ト兩人手を取交し思入あつて、

しらぬひ譚

春吉 え、お懐しうござりまする。(トすがる。)

丁禮 あ、十七年は一昔、よくも成長なせしよなあ。(ト思入あつて) かく名乗り合ふ上からは、當の敵の菊池一家を討滅し、我が此の無念を晴らしてくれよ。

春吉 云ふにや及ぶ、今より無念を受けついで、此水底に沈みある、鐘の龍頭へ綱を附け、それを功に菊池へ取入り、貞行はじめ一家一門討ち滅ぼして父上の、修羅の御無念晴らせ申さん。

丁禮 ほ、末頼もしき汝が心底、菊池一家を滅ぼすには力となるべきものこそあれ、先年滅びし豊後なる大友宗麟が遺兒 若菜姫といへるもの、錦ヶ嶽に年を経し蜘蛛の妖術うけ繼いで、これも父の敵たる菊池太宰を討たんす結構、彼れに合體なす時は、龍に翼を得たるが如し、心を合せて本望遂げよ。

春吉 それこそ幸ひ、若菜姫の行方を尋ね、廻り逢ひなば合體なさん。

丁禮 彼れが行方は遠からず、我が業通にて導き得させん。(ト此時修羅太鼓をほげしく打ち、丁禮頭へながら思入あつて) あれ、修羅の使ひのしければ、最早對面これ限り。(ト立上る。)

春吉 すりや、父上には此儘に、

丁禮 たとへ此場は別るゝとも、

春吉 大望成就なるまでは、

丁禮 影身に添ひて守るべし。

春吉 ちえ、忝けない。

丁禮 あゝ、名残りは盡きじ。(トたちくくと後へ下る。)

春吉 あし。(ト絶るを振拂ひ)

丁禮 はや、さらば。

ト大下りくになり、丁禮引抜きにて誂への骸骨になり、ばらくと碎け後の浪幕へ消える 春吉思

入あつて、

春吉 やゝゝゝ、今までありし我が父の、姿は消えて、これが形見となつたるか。

ト髑髏を取上げ、無念の思入、此時上手より以前の灘藏一腰差し、窺ひ出で、

灘藏 様子は聞いた、生けては置かれぬ。(ト抜き打ちに切つて掛るを春吉突廻して)

春吉 や、われは船底をくり抜きし敵灘藏、覺悟なせ。

灘藏 何を小癩な。(ト又切つて掛るをちよつと立廻つて、件の一腰を引取り其まゝ浴びせ)

春吉 父の敵を討ち滅ぼす、其幸先の血祭りに。(ト首を打落し) はて、心地よや、嬉しやなあ。

ト岩臺へ踏みかけ、きつと見得。大ドロくにて、岩臺のまゝ存吉を迫下げる。是にて知能に附き、日覆の浪板うち返し、杉の釣枝になり、左右の岩組杉の林に替り、正面の浪幕を切つて落す。

(錦ヶ嶽辻堂の場) 本舞臺正面二間常足の二重、茅葺本務圍の辻堂、狐格子に開け閉てあり、所

所に杉の立木、上下木の間に誂への紙帳釣りあり、後黒幕、よろしく道具留る。と山おろしになり、上手紙帳の内より六部、鼠布子の六部装にて出来る。

六部 やわく、寒いぞく、どうでも里と違つて山中は、春になつても寒さが強い、しかし木賃宿へ泊るより世間知らずの氣樂な野宿、屋根代三文出すには及ばず、枯木で飯を炊きながら清水を汲んで茶をわかし、是れで寐て錢を貰へば大名になつたよりました、そりやあさうと同行し、怪典とのはもう歸つて來さうなものだが。(ト下手の紙帳のうちを見て) まだ隣りの修行者ども歸らぬさうだ、おほかた冷え凍えて歸るであらう、どれ氣をきかして歸らぬうち、里で寐酒を買つて來ようか。

ト山おろしになり、六部一升徳利を掲げ花道へはひる。ドロくになり、日覆より心といふ字を辻堂のうちへ引いて取る、是れにてドロく、打ちあげる。本釣鐘になり、辻堂の扉を開け、若菜姫々願

禮笈摺、胸札、脚絆手柄杓を持ち出で、

### 若菜

そんなら今のは、夢であつたかなあ。(ト四邊へ思入、本釣鐘誂への合方になり、) ほんに思へば世の中に、月日の経つは夢のやう、十年振りにてはる(ふ)と坂東ならぬ西國を、廻つて歸る順禮の飾る袂の錦ヶ嶽、山また山に分けまよひ問ふ人もなく辻堂に、一夜を明す覺き旅の、道の疲れにとるると臂を枕にまどろむうち、ありくと見しは筑前の鐘ヶ岬の水底にて、菊池の爲に討たれたる唐土福州とやらの海賊、七草官丁禮が遺兒の我が忤へ、敵たる菊池を討つて亡き父が、多年の恨みを晴らしくれよと、我が子へ頼む詞のうち、大友宗隣が娘若菜姫と心を合せ、本望遂げよと言ひしは正しく。(ト思入あつて氣を替へ) あ、是れも書から山坂に、疲れし心の煩ひなるか。はて、思はぬ夢を見るものぢやなあ。

ト此時揚幕にて、松蟲の鉦の音、東の揚幕にて尺八の音聞ゆる、若菜姫これ聞き思入あつて、麓の方より鉦の音と竹の音色の間ゆるは、邊りに釣りし雨覆、宿りに歸る修行者なるか、旅は道連れ話しの伽、どれ、堂のうちにて待ちませうわいなあ。

ト山おろしの合方になり、思入あつて辻堂の内へはひる。尺八の入りに六部三重になり、花道揚幕より玄海灘右衛門の怪典、鼠の着附、手甲脚絆、草鞋、六部のこしらへにて笈を背負ひ、錫杖を突き出

來るの、これと一緒に東の揚幕より、鷲津六郎正時の修行者、同じく鼠の着附、丸ぐけ手甲脚絆草鞋、  
虚無僧のこしらへにて、天蓋を冠り尺八を持ち出来る、此時ドロ／＼になり、目覆より誂への蜘蛛  
相引きにて、舞臺前へ下る。兩人これへ思入あつて、花道よき所へ留り、

兩人はて、怪しやなあ。(ト兩人一時に笠を取り、きつと見得。誂への鳴物になり。)

怪典 松柏茂の山中の木の間を漏る、月影の、光りに見れば一つの蜘蛛、

正時 兩眼鋭く其形、尺餘りに及ぶはこれ怪物、正に變化をなすものならん。

怪典 既に西洋雜俎にも、車輪の如き蜘蛛あつて、よく人を取り喰ふとある、

正時 我が日の本にも古へより、其例ありと聞く、

怪典 彼れは其智慧深くして、虚空へ巧みの網を張り、居ながら諸蟲をこれへかくる、

正時 それを憎みて聖人は、必ず蜘蛛の巢を破る、

怪典 今海内に噂ある、白縦と呼ぶ曲者は、

正時 蜘蛛の妖術行ふと聞く、

怪典 若しやそやつが、なす業なるか、

正時 何にもせよ、

怪典 稀代な蜘蛛の、

兩人 振舞ちやなあ。

トドロくにて件の蜘蛛辻堂の内へ引いて取る、兩人是れに目を附け、思入あつて、

怪典 最早初更に間もあるまい、

正時 夜更けぬうちに、今宵の宿りへ、

兩人 さうぢやく。(ト又虫の鳴物になり、兩人本舞臺へ來り、入替つて)

怪典 あいや、御修行者どの、待たつしやりませ。

正時 む、待てと留めさつしやれたは、廻國修行の六部どの、何そ用はしござつてか。

怪典 いや別に用もござらぬが、往來も稀な此山へ、夜に入つてから登られしは、どれからどれへござ

らつしやれまする。

正時 どれからどれと定めなき、身は雲水の旅の空、昨日の暮より此所へ、野宿を致すものでござる。

怪典 それは思ひ合ふたこと、わしも四五日以前から、同行あつて此山に、やはり野宿を致してござる。

正時 すりや六部どのにも此所このところに。して、そなたの宿りは。

怪典 則ちこれなる紙帳のうち、して、そなた様には。

正時 手前てまへも同じおなじ、これなる紙帳しじょう。(ト兩人上下の紙帳へ思入おもひいれあつて)

怪典 はて、知らぬこと、て此こゝやうに、

正時 一つ所ところにをりながら、

怪典 晝ひるは互たがひひに修行しゆぎやうの身み、

正時 夜よに入いつてより歸かへるゆゑ、

怪典 顔かほも知らねば、

正時 名なも知らず、

怪典 斯かう近附ちかひになる上うへは、

正時 今いまから後のちは、

怪典 隣となり同志どうし、

正時 心こゝろ置きなく、

兩人 話はなしませうかい。(ト誑あつらへの合方あひかたになり、怪典笈くわいてんおひをおろし)

怪典 何なんにしる、火ひの氣けがなくては寒さむくてならぬ。

正時 いかさま、暖あたまらねば話はなしも出来できぬ。(ト怪典枯枝くわいてんかへだちまや落葉おちまを集あつめて)

怪典 さあ、枯枝を集めました。

正時 どれ、火を打つて進ませませう。(ト正時火打袋を出し枯枝へ焚きつける)

怪典 さあ、側へ寄つてあたりらしやりませ。

正時 いや、あたれとは忝けない。(ト兩人焚火の側へ寄り、あたりながら) 時に六部どの、こなたは何所の産れでござるな。

怪典 わしでござるか、わしは大阪の産れでござる。

正時 すりや六部どのにも大阪とか、はて懐しい、わしも難波の産れでござる。

怪典 はあ、修行者どのも難波でござるか、こりや猶々話せるわえ。

正時 して、こなたには、何時から修行に。

怪典 さあ、わしが故郷を出かけたは、一夜明くればもう一昨年、足かけ三年この土地で、何れも様の御厄介、それは、他國と違ひ御最良強い所ゆゑ、わしらがやうな者にまで、やれこれ言つて下

さるは、何と有難いことではござりませぬか。

正時 さあ、其御最良強い所と聞き、わしも早く下りたく、願ひに願つてやうくと、去年の暮に着いたれど、西も東も知らざれば、産れも同じ難波津に一つ流れのこなたを頼み、何れも様へわしが

身を、どうぞお願ひ申して下され。

怪典 そりや脱れぬ中の修行者同志、お願ひ申して遣りたいが、またわしごへもろくくにお馴染もな  
い身の上なれば。

正時 はて、一年でも先きへ来て、御最眞うけたこなたのこと、是非ともこれは頼まにやならぬ。

怪典 いや、さう言はれては仕方がない。出過ぎた奴とお叱りも、返り二歳のお馴染甲斐にお願ひ申さ  
う。(ト兩人下に居て) お聞きの通り何れも様、脱れぬ中のこの修行者、何卒わたくし同様し、

正時 永く御最眞お取立てを、憚りながら、隅から隅まで、

兩人 偏にお願ひ申し上げます。(ト兩人よろしく辭儀あつて)

怪典 さあ、斯うお願ひ申せば人丈夫、必ずお捨てなさらぬが、他國と違ふ當地の御氣性、身分を案し  
すのつくりと、まあ煙草でも吞まつしやりませ。

正時 袖振りあふも他生の縁と、いかにお世話になりました。

怪典 なに是れしきに。南無三、焼木がなくなつたわえ。

ト 怪典枯枝を取りに立上る、此時懐より鑑札をばつたり落す、正時手早く取りあげ、  
正時 や、この鑑札は。

怪典 やあ、それは、(ト怪典引つたくり懐中する。)

正時 正しく今のは黒崎の、城中出入りの慥に鑑札。

怪典 い、や、こりやあ修行者が、諸國を廻る往來切手。

正時 はてな。(ト思入) 時の鐘、焚火消える。

怪典 思はぬ話して夜も更けた。何と、もう寐ようぢやあごんせぬか。

正時 如何さま、焚火も消えたれば、

怪典 また是れからは草臥直し。

正時 足を延ばして、

怪典 紙帳越し、

正時 寐ながら話しを、

怪典 しませうかい。

ト時の鐘、山おろし合方にて兩人思入あつて、怪典は上手の紙帳、正時は下手の紙帳へはひる。と花道より以前の六部徳利を提げ、酒に酔ひたる思入にて唄をうたひながら出来り、

六部 頭に寐酒を呑ませようと、えのちらおのちら買ひに行つて、つい寒いので歸りしなに、みんな呑

んでしまつたやつさ、あゝ面目ねえことをした。(ト言ひながら舞臺へ來り) しかし酒を買ひに行つたばかり、今道端で拾つたこのきれ、(ト懷より錦の旗を出し) こりやあ厄落しに捨てた襷ぢやあねえか知らん。(トよく見て) やゝ、こりや結構な錦の旗、こいつア金目な代物だわえ。  
 (トドロくになり、指金附き誂への蜘蛛出て、六部の身體へ這ひあがるを拂ひのけて) えゝ、何だ知らぬ。  
 (ト蜘蛛を見てびつくりなし) やあ、こいつア恐しい蜘蛛だ。(ト蜘蛛また六部の身體へ這ひあがり、巢を掛ける思入) えゝ、何をしやあがるく。(ト拂ひのける。蜘蛛はあちこち身體に纏ひ、段々巢をかけ、思入、六部身體の自由にならぬこなし) こいつアおれの身體へ巢をかけやあがるか。(ト六部兩手にて巢を拂ひのけるこなしよろしくあつて) あゝ、苦しいく。(ト立ちすくみに苦しみの見事に轉る。是れと一時に、正面の辻堂より若菜姫、花櫛をさしたる、さら壬の下髪、廣張袖投帯裝にて窺ひ出、木舞臺へ來り、六部の懷より件の旗を引き出す、六部心附き) 南無三それを。(ト取りにかゝるをちよつと突廻し、旗をひるげ、木の間の月に透し見る思入) この時左右の紙帳の窓より、怪典、正時讀を出し窺ふ、若菜姫兩人を見てぎよつと思入、兩人は其まゝ隠れる、此うち六部はからだの蜘蛛の巢を取る思入あつて) 怪しい女め。

ト若菜姫に掛るを、立廻つて件の旗を六部の首に纏ひ、ぐつと締殺す。六部苦しむ。若菜姫きつと見  
 得、これにて上手紙帳をばりくくと破り、怪典大百日、黒の襪袍、丸くけ素纏一本さしにて片足出

して見得。下手紙帳を破り、正時野袴ぶつさき羽織、素綱大小にて同じく片足出し、三方一時の見得。これにて誂への鳴物になり、若菜姫思入あつて旗を取り、六部を投げ退ける、怪典、正時窺ひ寄り、此旗へ手をかける。これより旗を柳に三人ダンマリの立廻りよろしくあつて、ト、若菜姫旗を舞臺前へ取落すを、兩人一時に切つてかゝる。若菜姫その儘辻堂へ上り印を結ぶ。兩人たちげくとなる、此時ドロ、掛焔硝にて、若菜姫消える。是と一時に上手杉の空洞より鶴津七郎正吉、野袴ぶつさき羽織、素綱大小にて弓を持ち出て、きつと見得。怪典、正時心附き四邊を窺ひ、兩方より取らうとするを、正吉この中へ割つて入り、弓にて隔てる。兩人若菜姫と思ひ正吉に切つて掛る。これより鳴物替つて、また三人立廻りあつて、よき程にドロくになり、以前の蜘蛛現はれ、旗を脚へ辻堂へ這入る。三人これを見て辻堂へきつと思入。この時大ドロくになり、辻堂屋臺潰しになり、屋根の上に莫大なる土蜘蛛、この上に若菜姫傾城のこしらへにて、件の旗を立身にて持ち、後の黒幕切つて落し、一面銀張りの蜘蛛の巢になる、これにて三人きよつと思入。三方へ別れて、足を踏み出すを木の頭。蜘蛛は眼を動かし火焔を吹く。若菜姫につたりと思入。三人これを見込み、引張りの見得よろしく、大ドロく誂への鳴物にて、

### ひやしし幕

とこの幕檜林の道具幕にて、大拍子にてつなぎ、よき程に切つて落す。

## 二幕目

### 太宰府參詣の場

〔役名〕大友刑部宗連、菊池右衛門佐貞行、青柳春之助、雪岡冬次郎、浅倉三太夫、藤澤夏之丞、宇壺矢九郎、荒鐵太刀藏、雪岡の草履取眼助、茶道宗原逸齋、神土高間主膳、小婿葵之助、夏之丞の許嫁柵、腰元早藏、同紅梅、同初音、同春野等也。

〔天満宮社内の場〕——本舞臺中間中足、白木造りの額堂、向う透し障の板羽目、瓦庇、軒下に鐵行燈、前面その外ともいろ／＼の額を掛け、左右に梅鉢の紋附きし手水鉢、梅の立木日覆より同じく釣枝、總て太宰府天満宮社内の體よろしくりと、誂への出の鳴物になり、花道より貞行、椿茶筌小忌衣、小さ刀庭下駄、葵之助小姓にて袴装にて刀を持ち、春之助若衆鬘、振袖上下衣装大小、三方に蒔繪の鏡の箱を載せ、冬次郎同じく上下衣装大小、夏之丞同じく上下衣装大小、三太夫更けたるこしらへ、かみしもしやうたいきうしりから、赤巻をさぞやしむすめなり、花筒に梅の枝の入りしを持ち、早藏、紅梅、初音、春野腰元の装、四人袴大小近習の装、逸齋茶道にて附き出で花道に並ぶ、上手より主膳神主の装、矢九郎、太刀藏上下衣装大小にて出迎へ、

矢九 我が君様には、只今御參詣、

三人 遊ばされましたか。

貞行 春風一度發すれば、清香數里芳しと、實に太宰府の神社、春知り顔に盛りの梅花、

春之色香も薄き未熟者、隣り町からはるくくと、召されて爰へ入來鳥、

冬次 おなじ色香の片言に、ほう法華經も三年ぶり、

夏之 男形さへ白梅の、まだ不束な荅がち、

三太 重ねし枝も河原崎、年も老木の鶯宿梅、

柵 誰が袖ふれん耽かしき、響りも遠き谷の梅、

早藏 木振も直なしたれ梅、

紅梅 數も幾世の手まり梅、

春野 やまと山梅美しき、

初音 行方も廣き野路の梅、

○ 酒の樂寐の臥龍梅、

△ 匂ひも高き好文木、

逸齋 お茶があつけりや梅の花、宗原逸齋眞ッ盛り、

春之 わが君さまには神前へ、

貞行 皆も一緒に、

皆々先づ入らせられませう。

ト右鳴物にて此人歌舞臺へ來り、二重へ毛氈、梅を敷き、これへ貞行仕立。舞臺へ毛氈を敷き皆々上へよろしく居並び、

主膳殿様へ申し上げまする、日和も長閑に今日の御参詣、恐悦至極に存し上げまする。

矢九御先觸として、宇帝矢九郎、

太刀荒鐵太刀藏、これにて御出迎ひ仕りましてござりまする。(ト三味線入り大拍子になり、)

貞行神職はじめ兩人とも、出迎ひ太儀、例年正月二十四日、家の重寶花形の鏡、當社の神前へ捧げ

祝詞を奏し、武運長久を祈る菊池家の古例。

春之則ち花形の鏡御預り役は、身不肖なれども青柳春之助、大切に守護仕つてござりまする。

三太まこと菊池の御先祖より、筑紫累代の御家柄、民を撫育の御功、我々に至るまで、大慶に存し

まする。

冬次下世話に申す、上を學ぶ下とやら、我が君様の御仁政を感じ、

夏之民百姓に至るまで、下々を恵む御仁徳顯はれ、斯く泰平の御代の春、

○ 太刀は鞘、弓は袋にかたく納り、

□ 天下泰平とぞ、ぬ御代、

△ かやうな時節に生れ出るは、

◎ われく、ばかりか子孫の繁榮、

逸齋 鎧冑は五月幟の飾り物に見るばかり、有難いこととござりまする。

貞行 方々の悦び満足せり、それは格別、三太夫の娘 柵が、持参なしたる、是れなる梅の一枝は、

柵 はッ、其一枝は奥様の御秘藏遊ばすお庭の一本、天満宮の神前へ差上げよとの、仰附けにてござ

りまする。

矢九 荒鐵氏御覽なされ、是れにいろく、奉納の額面、あれにござる男が女をおぶつて居るは、歌舞伎

淨瑠璃に語りまする、お半長右衛門の畫面でござらうな。

逸齋 これはしたり、何を仰せられまする、あれは平の維茂が、鬼女を背負ふた所でござる。

矢九 左様でござるか、手前は春氣で、兎角目がかすんで見えます。

太刀 お待ちなされ、こちらにござる唐人が、三人で酒を呑んで居るのは、狐拳をいたし居るのかな。

逸齋 いえく、あれは玄徳張飛關羽が、桃園とやらにて、義を結ぶ畫面でござります。

太刀 左様かな、身共はまた拳の稽古でもいたすのかと思つた。(ト社内春之助額を見ることあつて、)

春之 何れも御覽なされい、あれに掛けある額面、願主雪岡冬次郎と記しござるが、殿様の御前に臣

の姓名高くあるは恐れあり。何れも、取りはづしめされい。

矢九 大刀 心得ました。(ト太刀藏久九郎、件の額をおろす、冬次郎思入あつて)

冬次 御兩所、その額面は某が奉納、此方へお渡し下され。(ト受取らうとする)

貞行 二りや待て冬次郎、其方が奉納の額、箱に籠めしは如何なる品か。矢九郎大刀藏聞き見よ。

兩人 畏つてござります。

冬次 あいや申し、箱のうちには某が、天満宮へ捧げし願書、君の御目に觸れるは恐れ。

貞行 見せともながるは仔細あらん、急いで聞け。

冬次 あいやもし、其儀は。

春之 冬次郎どの、君の上意。

兩人 控へさつしやい。(ト太刀藏冬次郎を押へる。矢九郎額の箱の蓋をあける。内より短冊出る)

矢九 はッ、箱のうちには一首の短冊。

春之 なに、一首の短冊とは。

冬次 や、箱のうちへは某が願書を認め奉納せしが、短冊と替りしとは、何とも以て合點参らぬ。

貞行 春之助、その短冊の歌讀み上げい。(ト春之助取つて、)

春之 はッ、冬かけて盛り久しと見し菊の、花もあとなき雪の下草。「こりや、まがひもない冬次郎どのの手迹の一首。」

冬次 なに、其短冊が、某が手迹とや。

冬行 短冊これへ。

春之 はッ。(ト貞行へ短冊を持ちゆく、貞行見て、)

貞行 『冬かけて盛り久しと見し菊の、花もあとなき雪の下草。冬かけて盛り久しと見し菊の、花もあとなき雪の下草。』春之助、此歌の心を判断いたせ。

春之 すりや某に歌の心を、判断せよと御意遊ばしますか。

貞行 それにてとくと判断いたせ。(ト言ふ。此時花道の揚幕にて、)

刑部 我君、しばらく。刑部めがそれへ參つて、歌の判断いたすでござらう。

ト三味線入り中の舞になり、花道より大友刑部、えんでん、上下大小にて出で、花道に留る、

矢丸 貴殿は大友刑部、

大友 只今伺候、

皆々 めされたか。

刑部 今日拙者御分家へ、御使者に参り歸宅の其後、我が君舊例の御参詣と承り、後より伺候いたし

てござる。

貞行 大友刑部、太儀にこそあれ、さゝ近うノ。

刑部 然らば御免下されませう。(ト三味線入り大拍子、刑部舞臺へ來り、眞中へ住ふ。)

春之 宗連殿には、今日の御役目、

皆々 御苦勞千萬に存じます。

刑部 青柳氏を始め、朝倉陰澤雪岡その外、何れにも御参詣の御供御苦勞千萬、只今あれより見受けま

すれば、雪岡冬次郎が奉納の額より出でたる短冊の、歌の心を判断せよとの君の上意。

貞行 判断なさんと刑部が詞、して其歌の心は如何に。

刑部 はッ、只今判断仕らん。(ト短冊を取り)『冬かけて盛り久しと見し菊の、花もあとなき雪の下草。』

む、此歌は安がらぬ、こりや我が君を調伏の歌でござる。

三太 刑部殿、何と仰せらるゝ。すりや、其短冊に記せし歌が、

夏之 我が君様を、

皆々 調伏とや。

冬次 此身に取つて露いさゝか、覺えなきことながら、何故あつて我が君様を調伏とは。

刑部 は、調伏であるまいか、冬かけて盛り久しと讀出せしは、取りも直さず我が名の冬、見し菊のと三の句へ菊といふ字を讀み入れしは、菊池の殿に雪岡の寵愛久しからんことを思ひしものを、さにあらねば其事を憤り、花もあとなき雪の下草と、菊池の家の跡絶えて、わが雪岡の下草に爲しなんものと、天満宮へ我が君を、調伏なさん祈りの歌、よも相違はあるまいが。

冬次 こは情なき刑部殿のお詞、何故あつて某が、君を調伏いたすべきや。

刑部 しらふしき其一言、汝が手迹に紛れなき此の二首、但し調伏でないといふ證據があるか。

冬次 さあ、それは、

刑部 言譯あるか。

冬次 さあ、それは。

兩人 さあ〜〜。

刑部 返答ぶちやれ、な、何と。

冬次 はッ。(ト平伏する。貞行急いで)

貞行 雪岡冬次郎それへ出い、いやさ、づつと出い。(トきつと言ふ)

冬次 は、はッ。

貞行 おのれ若年の身を持ちながら、何故あつて我を恨み、これまで扶持せし恩義を忘れ、主を呪詛なす大罪人、天命知らずの人畜めが。

冬次 はッ、お言葉返すは憚りながら、調伏なりとの御疑ひ、申すも恐れ多けれどわが不來の我が君の、御心に違ふこと度々なれば、何とぞ神のお蔭にて深き過ちあらざるやう、天満宮へ祈りの願書、箱に納めて捧けしが、この短冊と替りしは、察する所某に、意趣あるもの、仕業ならん、數代御恩を蒙むる御主君、天満宮を誓ひに立て、何とて恨み奉らん、御賢慮願ひ奉りまする。

夏之 只今冬次郎が申す通り、御家譜代と申すうち、父多太夫よりして君の舊恩深き身が、何とて左様の事の候ふべきや。

三太 御歸館の上事の實否をお糺しあり、かゝる悪事を企むものどもを、きつと御吟味遊ばされ、柵 冬次郎さまの無實の罪、お疑ひお晴し下さりますやう、

三人 願はしう存じまする。

貞行 やあ、無益の執成し聞く耳持たぬ、日頃見知りし冬次郎が手迹の短冊、わが寵愛を失ひて恨むる

由は疾く聞きたり、思へばく憎きわつばめ。幸ひのこの一枝、青柳春之助、人非人の冬次郎めを目通りにて打ちするい。(ト梅の枝を春之助の前へ投げる。)

春之 はッ、御意ではござれど、此儀ばかりは。

貞行 主命背くか。

春之 全く以て。

貞行 打ちするい。(ときつと言ふ。)

春之 はッ。(ト春之助立つて)冬次郎どの、君の上意、主君を呪ふ天罰の、汝に出て汝に返る呵責の答、

かうくくく、何と骨身にこたへたか。(ト散々に打つ。)

貞行 出来したくく。もうよいく。

矢丸 何といづれも御覽じたか、冬次郎どの、あの有様、大切なる君を調伏なしたる罰が當り、

太刀 同じ朋友の春之助どのに、梅の枝で打擲され、落花は目前犬の足あと、

逸齋 犬同然に四ツ這ひになつて、手出しもならぬあのさまは、

○ 武士の風上にも置けぬ侍。

□ 大川立派にたばさんでも、

しらぬひ譚



て落さん爲。かゝる企みをなす族は、いやさ、かゝる企みは冬次郎どのの業でないことは、某がよき證人、それゆゑ切腹に及ばぬと、留めました夏之丞が、誤りではござりますまい。

三太 いかさま夏之丞どのの詞の如く、外に悪事を企むものがあるまいとも申されぬ、御歸館の上執權たる、鳥山豊後介殿へ仰付けられ、御詮議あつて然るべう存じまする。

刑部 入らざることをさわぎ立て、假令偽筆の短冊にもせよ、其本人の出でざるうちは、疑ひ晴れぬ冬次郎、ちつと蟄して御沙汰を待ちやれ。

主膳 我が君様へ申し上げます、伺はともあれ神前へ、御参詣あつて然るべう存じまする。  
貞行 如何さま、思はぬことに暫時の暇入り、春之助は神職諸共、寶の鏡神前へ持参なし、奉幣祈念いたしてよからう。

春之 畏つてござります。

刑部 我が君様には神前へ、

貞行 方々こなたへ、

皆々 御入りあられませう。(ト下咽になり、貞行先きに此人數残らす奥へはひる。冬次郎残り思入る。冬次 あゝ恥かしき我が身の上、此程よの君の寵愛薄さを悔み、禍を脱れんと、天満宮へ祈りの願書、

何者の仕業にや、君を調伏の短冊と摺替られ、言譯さへも情なや、満座の中で打擲の邪慳の筈  
のこの梅花。(ト枝を取上げ)思へばく、(ト無念の思入れにて奥を見ながら立上り、持たる梅の花は  
らばらと散るを見て、落花再び枝に戻らず、どうで此身は)

トきつと思入 早き唄になり、冬次郎ついと奥へはひる。と、直に奥にて、

柵 もし夏之丞さま、ちよつと来て下さりませ。(ト三味線入り大拍子、柵夏之丞の手を引き出る)

夏之 これはしたり、大切なるお供先き、みだら千萬、たしなまツしやれ。

柵 さあ、其事は辨へて居るけれど人目もなし、まあ爰へ掛けて下さりませいなあ。

ト無理に床几へ掛けさせる。

夏之 斯ういふ所を入が見ては互ひの身の上、こゝ放して下されいなう。(ト行かうとする)

柵 あゝもし、御館のうちも多くの人目、今日のお供を幸ひに、よい首尾あらうと楽しんで居るものを

そりやあなた聞えませぬわいなあ。

夏之 不義は御家のきつい御法度、折を見合せ、互ひの親々より言ひ入れて、婚姻をするまでは、必ず

人目に掛らぬやう。

柵 さあ、其お詞は尤もでござんすが、斯ういふ首尾は又とござんせぬ、ちよつと来て下さんせいな

あ。

ト手を取る。

夏之 はてさて、聞分けの悪い、大切のお供先、爰は人目がしけいといふに。(ト振りきる。)

柵 ほんにもう、辛気なことではあるわいなあ。(ト夏之丞へ寄添ふ。奥にて。)

○ 夏之丞様は、どれへおいでなされた、夏之丞様々々。(ト聲する、兩人びつくり別れる。早拍子にて出る。)

夏之丞様、これにおいでなされましたか。

夏之 はッ、只今柵どのから、奥様の御言傳を承はつて居つたのでござる。

○ 御前様がお待兼ね、ちやつとお出でなされませ。

夏之 畏りました。(ト行かうとする。)

柵 あゝもし、ちよつと待つて下さりませ。

夏之 はて、奥様の御用は承知いたして居るわい。

○ さあ、ちやつとお出でなされませ。

夏之 御一緒に参りませう。(ト大拍子になり、柵留めるを振切り、夏之丞○に附いてはひる、奥より矢九郎出て。)

矢九 柵どの、これにおいでなされたか。

柵 あなたは宇帝矢九郎さま、今日は御苦勞千萬にござりまする。

矢九 これはく御挨拶、御苦勞さまでござりますなあ、と言はるゝところがどうもたまらぬな。(ト抱き附かうとして) はゝゝゝゝ、こなたさまも御苦勞でござります。

柵 矢九郎さま、是れにおいてなさりませ。(ト行かうとするを留めて)

矢九 あゝこれ柵どの、暫く、ちと其許に折入つてお頼み申さにやならぬ事がござる。

柵 して、私へお頼みとおつしやるは。

矢九 其頼みと申すは外でもござらぬ、大友刑部殿の弟御岩太郎殿が其許へ執心、何卒身共に取持ちく

れよと餘儀ない頼み、何と聞き届けては下さるまいか。

柵 何事のお頼みかと存じましたれば、不束な私を其やうにおつしやつて下さりますは、お嬉しうござ

りますすけれど、不義は御家の堅い御法度、御免なされて下さりませ。

矢九 いやく其許さへ得心なら、表向きより言入れて、岩太郎殿の直に奥方、何と色よい返事をなさ

れて下され。

柵 心に願ひがござりますれば、殿御を持ちますことはいやでござりますわいな。

矢九 どのやうな願ひか知らぬが、男を持つが不承知とは、そりや嘘々、そんなてんごう言はずとも、

色いろよい返事へんじを、これさく。(ト捉とらへる。)

柵さく あれも、しつこい、存ぞんじませぬわいな。(ト振ふ切り下しもの方かたへ逃にげようとする、此時このとき太刀藏たちざう出て聞きいて、)

太刀 どつこい、逃にがさぬぞく。

柵さく あなたは太刀藏たちざうさま、悪わるいてんごうなされますな。

太刀 いや、てんごうではない。まあお待ちなされ。これさ矢九郎やきゅうらうどの、岩太郎殿いはたろうどのに頼たのまれたは貴殿きでんと身共みども、それを出だしぬきに一人手柄ひとりてがらをしようとは、近頃ちかごろ悪わるい顔かほでござる。

矢九 いかにも身共みども一人手柄ひとりてがらに仕しようと思おもひの外ほか、ずんと手強てこほい柵さくどの、此上このうへは二人ふたりが、りで、参まゐらずばなるまい。

太刀 いかさま、二人掛ふたりがけりで参まゐらう。これ柵さくどの。武士ぶしたるものが申し出しただる一言いっげん、われく、兩人刀りゅうにんかたなに掛かけても、得心とくしんさせねば相成あひならぬ。

矢九 此場このばで色よい返事へんじをば、

太刀 柵さくどの。

兩人 何なんとでござる。(トきつといふ、此このうち後うしろへ三太夫さいふ出て聞きいて居ゐる。)

柵さく 假令たとへどのやうにおつしやつても、此事このことばかりは。

兩人 すりや、どのやうに申しても。

三太 如何にも、假令娘が得心でも、此三太夫が不得心でござる。(下前へ出る。)

柵 や、あなたは父さん。

矢九 貴殿は朝倉三太夫殿、

太刀 すりや、此場の様子をば、

三太 残らず後で承はつた。これ、大切なお供でありながら、是れに參つて自身の遊びは嗜めく、

少しも早く御前へ參れ。

柵 畏りました、左様ならばあなたは是れに。

三太 はて、行けと申すに。

柵 はい。(ト唄になり、柵奥へはひる。)

矢九 これさ三太夫殿、娘御柵どのへ、割ツつ口説いつ我れくが申すこと。

太刀 譯も聞かずに横合から、何ゆるあつて不承知とは、

三太 此三太夫氣に入り申さぬ。

兩人 何と。(ト合方。)

三太 譯は大概聞かすとも知れてある、色好みの岩太郎、女さへ見るとひろくと、武士にあるまい不行跡、お手前方も同じやうに娘を捉へて無理口説き、女房にほしくば表向き、媒人頼んで言ひ入るゝが世上の法式、それに何ぞや無理所望、左様な道知らずを掣にとること罷りならぬ、此通り立歸つて岩太郎へ傳へさつしやい。

矢九 如何にも、此趣き岩太郎殿へ申し聞けるが、何の事だ、不得心なら不得心までのことだ、道が違ふの法が違ふのと、惠方参りが酒に酔つたやうに、我々へ對して雑言過言。

太刀 畢竟似合相應の、縁談と思へばこそ、取持ちいたす我々が親切、仇にする片意地もの、岩太郎殿へ此趣き申し聞かせ、

兩人 此返報は、重ねてきつと、

三太 念には及ばぬ、かやうな馬鹿者に構はずと。

兩人 どういたしたと。

三太 どれ、御前へ参らうか。(ト唄になり、三太夫奥へはひる。)

矢九 太刀藏どの、

太刀 矢九郎どの、

しらぬひ譚

矢九 誠に手強いあの老若、とても心得はいたすまい。

太刀 一體岩太郎殿は冬次郎が、妹照葉を執心のところ、烏山豊後が梓阿呆もの、犬千代と許嫁し聞き。

矢九 其面當にあの櫓を女房に貰はうと言はれしゆゑ、口説いて見たれど親子共に片意地者、然し一旦

言ひ出した武士の詞、岩太郎殿の思案もござらう。

太刀 いかさま、殿御歸館のその上で、岩太郎殿へこの様子を、申し聞けて何かの手段、何はともあれ

殿の御前へ。

矢九 然らば一緒に、

兩人 御同道申さう。

ト大拍子になり、兩人奥へはひる、三味線入り大拍子になり、上手より刑部、下手より春之助窺ひながら出來り、

刑部 春之助どのか。

春之 宗連どの、ではない、愛しい兄上。(ト寄り添ふ。)

刑部 これ。(ト思入)替つた合方になり、兩人四邊へ思入。)

春之 かねて御身に申す通り、我が父丁禮、博多の沖にて菊池家の爲に滅びし時、矢先きに掛けたる雪

岡多太夫、早くも此世を去つたれば、折を窺ひ忤冬次郎めを討つて捨て、父の恨みを晴らさん所存。

刑部 身共とともさいつ頃、白木ヶ淵の大龜退治、その時弟岩太郎と冬次郎めが争ひし遺恨あれば、貞

行殿へ讒言なし不首尾にさせた冬次郎。

春之 天満宮へ願書の奉納、彼が下部眼助は某に同腹ゆる、竊に言附け短冊の偽筆を入替へさせ、罪に

取つて落さんと思ひしに、夏之丞めが入らざる計らひ、大事の望みも事成らず。

刑部 此上の手段といふは、これ。(ト春之助へ囁く。)

春之 すりや某が預りの、寶の鏡を押隠し、箱のうちへ某が小柄を入れ置き、態と詮議の其時に。

刑部 眼助めに言附けて、冬次郎に頼まれて、まッ斯うくに計らひしと、誠しやかに白状させ、冬次

郎に科を塗り、それから跡は身共が胸、

春之 天晴妙計、何かのことは歸館の上。

刑部 今宵夜話の折を見合せ、

春之 拙者が寢間へお忍びあつて、

刑部 肌あたゝめて、

春之互ひの睦言。(ト寄り添ふ。)

刑部あゝこれ。(ト兩人四邊を見て、刑部春之助を引寄せ囁く。此見得、大拍子にて道具廻る。)

(天満宮別當書院の場)

本舞臺常足の二重、向ふ梅鉢の銀襖、上下杉戸の出遣入り、總て別當書院の道具。貞行二重舞の上に住ひ、桐始め腰元四人、近習四人逸齋茶道にて、長柄、盃、臺の上に肴

よろしく酒宴の見得、三味線入り音楽にて道具留る。

橋 御前様、今一獻召上られませう。

貞行 館のうちと事替り、社家の庭なる梅花を香に、此頃でない鬱散いたしました。

逸齋 いやもう、愚老なども御前様の御相伴で、ほとんどよい慰みをしました。

○ 誠に梅は諸木の兄に例へ、盛りの色もまた格別、

□ 櫻は花の王と申せど、梅の馨りは奥床しいものでござる。

△ 然し、いくら梅の花が美しいとて、

◎ 御酒がなくては、お慰みになりませぬ。

早蕨 御前様へ申し上げます、梅の盛りを題にいたしましたして、

紅梅 不束な私共、

初音 腰折歌の一首も、御添削を願ひまする。

柵 こりや皆さま、よい思名し、お慰みに少しも早う。

逸齋 何と仰せらるゝ、梅を題にいたして歌を詠むとおつしやるか、左様ならば愚老が一首いたしませう。

女形 こりや面白うござりませう。

近習 さあく、何とく。

逸齋 お待ちなさい、さなきだに梅は喰ふとも種喰ふな、中に天神寐てござるかな」とは、どうで有馬の人形筆々々。

女形 何を言はしやんすぞいなあ。

皆々 ほゝゝゝゝ、はゝゝゝゝ。

貞行 騒がしい、控へい。最前から小姓どもが見えぬ、春之助を呼べく。

逸齋 畏りました。(ト立たうとする、下手の襖を明けて)

春之 春之助、只今それへ。(ト真中へ出る)

しらぬひ譚

貞行 そちや春之助、さゝ、近う参れく。

春之 はッ、殿様には御機嫌よろしく御酒宴のお催し、大慶に存じまする。(ト思入にていふ、貞行見て)  
貞行 春之助、見れば其方は常ならぬ顔附、何ぞ心に掛ることでもあるか、但し氣分でも悪いのか、どうぢやく。

春之 はッ、お目立ちまする上からは包むに詮なし、恐れながら殿様へ、窃に申し上げたき儀がござり  
する、御近習を始め腰元衆を、暫く御次へ。

貞行 承知いたしました。こりや用事あらば手を拍つ、其方どもは次へ立てく。

橋 左様ならば御前様。

貞行 立てく。

皆々 畏りました。(ト音楽にて皆々上下へはひる。)

貞行 あたりの者は遠ざけた、用事あらば近うく。(ト春之助側へ寄り)

春之 御前様へ、ちとお願ひがござりまする。

貞行 改つて願ひといふは。

春之 お叱を願ひたうござりまする。

貞行 何と申す。(ト詭への合方。)

春之 賤しき此身を明暮に、一方ならぬ御寵愛、其お情を徒になし、お暇願ふ某の胸中、御察しあつて只今より、御暇下し置かれなば有難う致しまする。

貞行 む、斯くまで深くいつくしむ情を徒に振捨て、暇を願ふそちが心底、仔細があらう、仔細を言やれ。

春之 はッ、有難きお詞、數ならぬ身を御不便加へ冥加に餘る御惠み、立身出世いたせしを友朋輩の羨み妬み、遂には冬次郎が如きものあつて、勿體なくも君を調伏、其元はといへば私ゆゑ、お暇下さいましたまはらば殿の御身に恙もなし。とはいへ是れまで片時も、お側を離れず御寵愛蒙りし身を徒事に、身を退く私か心の内の悲しさを、御推量遊ばされて下さりませ。

貞行 何事かと思へばそれ故に、俄かの暇の願ひとか、そりや叶はぬ、其方を嫉み妬むものあらば、冬次郎をはじめ誰にもせよ、皆悉く暇を取らせ、其方はいつまでも予が傍を離すことは相ならぬ、暇の願ひ無用ぢやぞよ。

春之 すりや、殿様に願ひ上げましても、御暇は叶ひませぬか。  
貞行 何として、國家に替るそちぢやもの。

春之 すりや、左程<sup>さほど</sup>までに私<sup>わたくし</sup>を。

貞行 思<sup>おも</sup>はいで何<sup>なん</sup>とせう。

春之 え、右難<sup>ありがた</sup>う存<sup>ぞん</sup>じまする。(ト貞行<sup>さだゆき</sup>ちつと手<sup>て</sup>を取り、春之助<sup>はるのすけ</sup>の顔<sup>かほ</sup>を見て、)

貞行 見<sup>み</sup>れば見<sup>み</sup>るほど。

春之 御前<sup>ごぜんさま</sup>様。

貞行 可<sup>か</sup>愛<sup>あい</sup>い奴<sup>やつ</sup>ぢやなあ。

ト春之助<sup>はるのすけ</sup>をちつと引<sup>ひ</sup>寄せる。此時<sup>このとき</sup>奥<sup>おく</sup>より、ばたく、音楽<sup>おんがく</sup>にて、矢九郎<sup>や</sup>太刀藏<sup>ちゆうた</sup>鏡<sup>かざみ</sup>の箱<sup>はこ</sup>を持<sup>も</sup>ち、夏之丞<sup>なつのおしよ</sup>、近習<sup>きんじゆ</sup>四人<sup>にんごし</sup>腰<sup>こし</sup>元<sup>もと</sup>皆<sup>みな</sup>々<sup>々</sup>附<sup>つ</sup>き出<sup>い</sup>で、

矢九 御前<sup>ごぜんさま</sup>様へ申<sup>ま</sup>し上<sup>あ</sup>げまする、一<sup>だい</sup>大<sup>じ</sup>事<sup>じ</sup>が起<sup>おこ</sup>りました。

春之 各<sup>おの</sup>方<sup>がた</sup>、一<sup>だい</sup>大<sup>じ</sup>事<sup>じ</sup>とは何<sup>なに</sup>事<sup>ごと</sup>でござる。

夏之 されば神前<sup>しんぜん</sup>へ飾<sup>かざ</sup>りたる、寶<sup>たから</sup>の鏡<sup>かざみ</sup>が紛<sup>ふん</sup>失<sup>じつ</sup>いたしてござりまする。

春之 すりや、寶<sup>たから</sup>の御鏡<sup>おんかざみ</sup>が紛<sup>ふん</sup>失<sup>じつ</sup>とや。

貞行 して、手掛<sup>てが</sup>りにもなるべき、證據<sup>しょうこ</sup>にても有<sup>あ</sup>るか無<sup>な</sup>きか、どうぢやく。

矢九 證據<sup>しょうこ</sup>と申<sup>ま</sup>すは箱<sup>はこ</sup>のうちに、小柄<sup>こづか</sup>が入<sup>い</sup>れてござりました。(ト出<sup>だ</sup>す。)

貞行 其品これへ。

矢九 はッ。(ト貞行小柄を見て)

貞行 はて、此小柄は見覚えある、いつぞや予が春之助に與へし小柄。

夏之 すりや其小柄は、春之助どの、小柄とや。

春之 や、どうしてそれが、御鏡の箱のうちにござりましたな。

トわざと驚く、この時冬次郎窺ひ居てつか／＼と出で、春之助を引附け、

冬次 御鏡の盜賊春之助、最前某に恥辱を與へしその返報。盜賊の折檻かう／＼。

ト扇にてさん／＼打つ。

貞行 待て冬次郎、おのれ蟄居の身を以て、春之助をなげ打つた。

冬次 でも、御寶の盜賊のゑ。

貞行 だまれ、寶の鏡は春之助の預り、我とわが手に盜み取り、わが小柄を入れ置かうか、たはげ者め。

春之 仕ない冬次郎殿、最前のことを遺恨に思ひ、某を罪に落さんといふこなたの企みか、そりや卑怯。

なげ武士らしく討果して恨みは晴らさぬ、察する所御鏡はこなたが盗んで其科を、某に塗付けける

企みであらうがな、さあ貞直に白状おしやれ。

冬次 やあ思ひ掛けなき其詞、此冬次郎が御鏡を盗ハしとは、それには何ぞ證據があるか、返答聞かん、さ、何と。(トきつといふ。此時下手にて、)

刑部 其證據は是れにあり、きりく歩め。

ト音樂にて下手より刑部、眼助の中間に繩をかけて連れて出で、真中に住ひ、

夏之 や、刑部殿が繩掛けられし其下部は、慥に是れなる冬次郎どの、草履取。

冬次 いかにも拙者が家來の眼助、何故あつて刑部どの。

刑部 繩掛け來りし其仔細、今神前にて此小者が、怪しき素振合點ゆかすと引ツ捉へ、拷問すれば直さ

ま白狀。さ、今一應此所にて白狀いたせ。

眼助 申しますともく、斯うなる上からは、何もかも言つてしまひます。寶の鏡は人に頼まれ、わし

が窃に盗みました。

春之 して其頼みては、

皆々 何者だ。

眼助 外でもござりませぬ。わしが主人の、冬次郎殿に頼まれました。

冬次 やい眼助、そちや血迷ふたか、何を申す、某か頼みしなんぞとは、跡方もなき偽り者。

眼助 もしく、冬次郎様、もう助からねえ、頼まれたことは言ふまいと思ひましたが、あんまり詮議が  
厳しさに、何もかも白状します、あれ程こなたに頼まれて、鏡を盗んでこなたに渡した。

冬次 なんと。

眼助 いやさ、お前に盗んで渡した鏡、受取つて置きながら、はて物覚えのわるい御方。さあ斯う白状  
した上は、命は助けて下さいますし。

刑部 如何にも、白状いたした寶の盜賊冬次郎に極まる上は、そちが命は助けてくれう。

眼助 有難うござります。

刑部 此上は冬次郎、汝が家來が明白の白状、脱れはあるまい、寶の御鏡きりく、此場へ出してしまへ。

冬次 こは情ないお疑ひ、寶を奪ひしなんぞとは、此身に取つて露聊か、毛頭覚えはござりませぬ。

春之 やあ如何やうに陳じても、現在家來が自身の白状

太刀 とても脱れぬ天の網。

矢九 但し、こなたが盗まぬといふ、證據があるか。

冬次 さあ、其言譯は。

刑部 言譯なければ盜賊か。

冬次 さあそれは、

春之 言譯あるか、

冬次 さあそれは、

皆々 さあ〜〜。

刑部 脱れはあるまい冬次郎、さあ眞直に白狀しやれ。

冬次 假令如何やうに申さるゝとも、更々覺えはなけれども、言譯なければ是非に及ばず、此場に於て

さうぢや。(ト腹切らうとする。此以前より三太夫出掛り、聞き居て)

三太 あいやもし、冬次郎どの、其切腹は叶ひますまい。(ト眞中へ出る)

貞行 其方は朝倉三太夫、疑ひうけし冬次郎が、切腹なすをなぜ留めた。

三太 はッ、殿の御詞ではござりますれど、切腹いたすは誠の武士のいたすこと。大罪人の冬次郎、切

腹は相成りますまい。

刑部 またしても入らざる留め立て、罪に伏した冬次郎、切腹するをなぜ成らぬ。

三太 はて知れたこと、盜賊ならば縛り首、殊に自身に白狀せざる冬次郎、それゆる切腹はなるまいと

留めたは某が、よもや誤りではござりますまい。

刑部 假令冬次郎が白狀せずとも、家來が白狀なしたる上は、よもや脱れはござるまい。

三太 いや、白狀合點行かぬ、其科人は身共が預り、館へ連行き一詮議。

眼助 一旦白狀したわしを、改めて朝倉様か。

三太 身共が預り立歸り、執權の烏山殿へ相渡し、きつと詮議を。とやかく妨げめされるは、却つて其身に疑ひが。

刑部 や。

三太 いやさ疑ひかゝりし冬次郎どの、御前は叶はぬ、それ何れも、引立てめされい。

矢九 心得ました。冬次郎どの、立たつせい。(ト七つの時計にて矢九郎太刀藏冬次郎を引立て下手へはひる)

貞行 最早夕陽歸館なさん。春之助夏之丞は、猶も淨めの神樂を奏し、立歸れ。

春之 畏つてござりまする。

夏之 大友刑部には、申し附くる一條あり、三太夫其餘の者は供觸れいたせ。

貞行 皆々 畏つてござりまする。

三太 左様ならば、我が君様。

春之 御機嫌よろしう、

夏之 御機嫌よろしう、

貞行 行け〜。

皆々 はッ。

ト音楽にて春之助夏之丞は奥へはひる。貞行刑部残り、三太夫先きに近習四人眼助を引立て、臈元皆々、附いて花道へはひる。

貞行 今日は何かと心配り、たゞ憎きは寶の鏡を奪ひ取つたる冬次郎め、館へ歸り禁獄させよ。

刑部 畏つてござります。斯かる變事もあらんかと春之助と申し合せ、こしらへ置きたる贖物の御鏡、

誠と心得奪ひしたわけ、則ち誠の御鏡は内陣へ祕め置き、篤と祈念いたしてござれば、いざ御落手下さりませう。(ト懐中より、錦の袋に入れし鏡を出して、貞行に渡す。)

貞行 流石は刑部、天晴の働き、出來した〜、其褒美として只今より、五百石の加増申し附けるぞ。

刑部 すりや五百石の御加増とや、え、有難う存じまする。

貞行 供觸れいたせ。

刑部 はッ。殿の御歸館。(ト向ふにて)

大勢 はあ〜。(ト貞行鏡を見て)

貞行 其方なくば大事の御寶、持つべきものは、(ト鏡を見て) 家來ぢやなあ。

刑部 恐れ入りましてござります。〔卜辭儀をする。音楽、行列三重にて此道具廻る。〕

〔境内玉垣外の場〕——本舞臺三間上手石の鳥居、下手折廻し、石垣の上に玉垣の角を見せて飾り、向ふ本社の書割、所々に石燈籠梅の立木、日覆より釣枝、大拍子にて道具留る。と、合方にて奥より冬次郎情々として出来り、思入あつて、

冬次 思ひ廻せば廻す程、最前偽書の短冊といひ、又候や寶の紛失、此身に聊か罪なくして、君の御不興蒙ること、これ皆刑部春之助が深き企みに極まつたり、日頃より殿に阿り諛ひよからぬ事のみお進め申せば、お側に久しくあるうちに、如何なる事をや仕出さん、然ある時には御家の大事、幸ひ彼れめがお供におくれて歸るは天の興へ、歸るを待ち受け討つて捨て國家の憂ひを除きし上、我れも其場で切腹せん。さりながら御寵愛の春之助を害する時は、跡に残りし兄弟へお祟りあるは知れたこと、いづくへなりと人知れず落しやらん、妹照葉は犬千代と許嫁なれば、我死するとも鳥山親子が悪しきやうには計らふまじ、落行く先きは其以前家に仕へし村岡眞平、長門國所崎の浦に住むと聞けば、かしこを指して落しやらん。委細の様子を、妹照葉へ知らせの文。〔卜懐中より手紙を出し〕今別當所の硯を借り、認めたれど誰を使ひには、何としたものであらうなあ。

ト案の思入、やはり合方にて、奥より柵出來り、

柵 あなたは冬次郎さま、まだお歸りなされませぬか。

冬次 柵どの、まだこなたさまち。

柵 はい、私は今一度あの夏之、いえさ、夏の日と事かはり、春とはいへどまだ日短か、大神さまへ  
何やかのお願ひで、つい遅うなりよした。

冬次 殿にも只今御歸館、少しも早うお歸りなされい。

柵 左様ならば私は。(ト立たうとする。)

冬次 あ、これ柵どの、丁度幸ひ某は、夏之派どのに申し談ずる用事あれば、何卒この一通御歸りの  
後妹照葉へ、お届けなされては下さるまいか。(ト手紙を出す。)

柵 そりやもうお易い御用、照葉さまへお届け申すでござりませう。

冬次 必ず共にお頼み申す。

柵 心得ました、左様ならば冬次郎さま。

冬次 柵どの。

柵 お先きへ参ります。(ト唄になり、柵手紙を持ち花道へはひる。冬次郎跡に残り)

冬次 あの手紙を照葉方へ届けやれば、是れにて安堵、(ト此時雨車になり) 幸ひ降り來る此春雨、恨み重なる春之助、かれが歸りは生の松原、暗きを便りに、小蔭に待受け只一打ち。(ト刀を抜き草履を脱ぎ、袂刃を合せ) 先きへ廻つて、(ト刀を鞘へをさめるを木の頭) おうさうだ。

下時の鐘、早めたる合方にて、冬次郎袴の股立を取りながら、花道へはひる。この模様よろしく時の鐘にて、

幕

### 三幕目

蘆屋の里賤家の場

### 同返し

生の松原殺しの場

〔役名〕 菊池貞行、賤の女すゝしる實は若菜姫、茶道逸齋、手下、旅人村岡眞平、雪岡冬次郎、青柳春之助、大友刑部、荒鐵太刀藏、下部強平、同眼助等。〕

(蘆屋の里賤ケ家の場) 本舞臺二間中足の二重、栗丸太の柱折廻し本縁附、葦葺屋根の角を見せ、前へ押出して飾り、左右四つ目垣に山吹、舞臺前土手松に山吹、竹の折戸梅の立木、總て蘆屋の里賤ケ家の體。時の鐘雨車にて道具留る。と、本釣鐘のかしら、詠へ兩吟の唄になり、よき程に雨止、花

遺あちより賤しづの女めすゞしろさら毛け結むす下げ、結けつ構こうに仕立したてたる肩入かた入れの振袖ふりそで、前帶まへおび、くり下駄くだにて、貞行ちかゆき以前いぜんの装なり、兩人にりやう蜘蛛くもの巢すと見える誂あつらへの傘からかさをさし出でる、跡あとより逸齋いつさい附いついて來きて花道はなみちにて、

賤女 春雨はるさめに匂にはへる花はなもあかなくに、

貞行 香かもなつかしき山吹やまぶきの花はな。

賤女 降りみふらずみ春雨はるさめに、高位かうゐのお方かたか知らねども、濡ぬるゝを厭いとふ御有様おんありさま。

貞行 折をりよく丁度ちやうど賤しづの女め、情なさけを假かりの雨宿りあまやど、

賤女 お供とも申まをして思おもはずも、歸かへる家路いへぢに咲さきそめし、

貞行 色香いろかを含むふく山吹やまぶきの、

賤女 花色はないろごろも主ぬしもなき、

貞行 袖そでふり合あふも、

賤女 他生たしやうの御縁ごえん、

貞行 手折たをらすこゝろか。(ト寄より添そふ。)

賤女 何なんであらうと、わたしが家うちへ。

貞行 案内あんないしやれ。

賤女 斯うお越しあそばしませ。

ト唄になり、兩人思入、雨は止んだといふ思入にて、賤の女は傘をつぼめる。貞行逸齋に持たせるといふ思入。賤の女憚りといふこなしあつて、傘を逸齋に渡して、恥かしさうに貞行の手を取り、思入あつて、兩人舞臺へ來り、暫くと貞行を門口に待たし、足早に二重へ上り花筵を敷きて、

むさくろしくとも、先づぐく是へ。

貞行 然らば許しやれ。(ト貞行内へはひらうとする。)

逸齋 あゝもし御前様、斯やうな賤しきものゝ家へ、お腰をお入れ遊ばすは、餘りぶしつけ。

貞行 よいわく、雨の降るのに濡れては歩かれぬ、此家の軒に晴るゝを待つのだや。

逸齋 いえく、雨はもうさつぱりと止みました。

貞行 えゝ無粋な奴、雨は止んでも、(賤の女の思入。)

逸齋 え。

貞行 捨て置けく。(ト唄の切れにて貞行二重へ上り花筵の上へ柱ひ、あたりを見て)予が館とは事替り、下

下の家は、わびた住居ぢやなあ。

賤女 お恥かしう存じまする。

貞行 あゝ喉のどがかわく。こりや、茶ちやをもて。

逸齋 はッ、折わりあしくお茶瓶ちやびんの者が。

貞行 こりや女をんな、それに茶ちやがあらう、早はやう持もてく。

賤女 最前さいぜんから心附こころづきましたれど、お茶碗ちやわんとてもむさくろしく。

貞行 苦くるしいない、早はやうもて。

賤女 畏かしこまりました。

ト替かつた合方あつかひになり、賤しづの女大和風呂おやまとぶろに掛かけし土瓶どびんの茶ちやを汲くみ、貞行さだゆきへ持もち行ゆく、貞行さだゆき取とつて呑のみ、

貞行 あゝ呑のみ加減かへんぢや、も一つ所望しよぼう。(ト賤しづの女汲あくんで出だすを貞行さだゆき呑のんで)思おもひがけない傘かさの無む心しん、そち

が埴生はぢふの家いへに参まり、今日こんにちの疲つかれを休やすめ過分くわぶんに思おもふぞよ。

賤女 冥加めいがに餘あまる其そのお詞ことば、有難ありがたう存ぞしじまする。

貞行 見みれば年端としはも行ゆかぬ身みで、寡婦やちめぐらしの様子かみすぢやが、そちに夫せうとはないかどうぢや。

賤女 御覽ごらんの通りとほりの一人住ひとりずみ、父母ちちはは共に先まにみまかり、未いまだ定ただまる夫つともなく便たりない身みでござりまする。

貞行 それは近頃ちかごろ不便ふびんなことぢや、思おもはず此家このやへ來きたりしも、不思議ふしぎな縁えんといふもの、予よは當國たうこくの領主りやうしゆぢ

やが、今いまの詞ことばが誠まことなら、是これより館やかたへ同道どうだうなし、側女そばめとなして召仕めしつかはん。

賤女 そんならあなたが、菊池の殿様。

貞行 いかにも、右衛門佐貞行ぢや。

賤女 ても思ひがけない、お見上げ申せば申すほど。

貞行 手活の花に手折らする、心はないか、どうぢやく。

賤女 其お詞は嬉しいが、お館には奥様はじめ多くのお伽、ことに美しいお小姓衆も澤山と聞けば、不

束なる私を、お弄り遊ばすおしやれごとでござりませう。

貞行 何の弄らう大眞實、其やうに卑下せずと、予が思ひ晴らさせてくれいやい。(トちつと引寄せる。此時

賤の女懐より誂への守袋を落す、貞行取上げ見て、)こりやこれ、慥に。

ト口をつける、賤の女びつくりして、

賤女 あれ、もし。(トちやつと取つて懐中する。)

貞行 今のは正しく白杵切。

賤女 え。

貞行 いやさ、うすき縁にあらすして、行末ながく不便を加へん。

賤女 其お詞が誠なら、どうぞ今から。

しらぬひ譚

貞行 可愛がらいで何とせう。

賤女 え、お嬉しう存じまする。(トちつと寄り添ふ。)

逸齋 いや呆れたものだ。もしノ、御前様、如何にあなたが女好きでも、身元も知れぬ賤の女を、どうしてお伽に。

貞行 こりや、そちが構うたことではないわい。

逸齋 それぢやと申して、

貞行 え、控へて居れ。

逸齋 へい。(ト思入。)

貞行 こりや女、そちが名は何と申す。

賤女 はい、すゞしろと申します。

貞行 む、すゞしろ、今日太宰府より歸館の踏次、神すゞしめか賤のすゞしろ。

賤女 天神さまが結ぶの神。

貞行 出雲にあらぬ我が國の、

賤女 心づくしの末かけて、

貞行 見捨てぬ證據の、固めをこゝで。

賤女 それぢやというて。

貞行 はて、初心な奴なあ。(ト引寄せる。賤の女側へ寄らうとして逸齋を見て、)

賤女 あれ、見てぢやわいなあ。

貞行 こりやく、無粋な奴ぢや、心を通せ。

逸齋 あの私に。(ト顔を出す)

貞行 背けい。(トよろしく言ふ。)

逸齋 あつ、是非に及ばぬ。(ト下の方を向く、兩人思入。)

貞行 これ。(ト賤の女の手を取る。)

賤女 おゝ、恥かしい。(トちつとなる。薄ドロくになり、賤の女放心せし思入。)

貞行 こりや、すゞしろ、どうしやつた。(ト賤の女心付き。)

賤女 さあ、お手ふれられしに放心なせしは、慥にあなたの懐に。

貞行 や。

賤女 いえさ、高位のあなたに賤の女が、勿體ないのでござりませう。

貞行 いや、氣きのこさいな女をぢやなあ。

ト思入、時の鐘、ばた／＼にて花道より、以前の近習四人出て、舞臺へ來り。

○ 殿、こゝに居ゐらせられましたか。

◎ 雨あめも小止せやみになりましたれば、

□ 最早もともと黄昏たそがれ、

△ 御歸館ごきやんあを遊あそばされ、

四人 然しかるべう存ぞんじまする。(ト是れにて貞行思入あつて)

貞行 お、直様歸館すじさまきやんあをいたすであらう。(ト二重より下りながら) こりや女、今日は何かと厚あつい厄やく介けい、約やく

定ぢやうせし詞ことばに違ちがひはない、近ちかきうちに館やかんへ招まねく、迎むかひの便たすりを待まちつて居ゐやれ。

賤女 有あ難がたう存ぞんじまする。(ト貞行門の外へ出る。賤の女門口まで送つて出て、御機嫌よろしう。(ト手を突く。)

貞行 面おもてを上げい。(ト賤の女の顔を見て) 見みれば見みるほど。

逸齋 え。(ト逸齋顔を出す。)

貞行 たはけものめ、(ト中啓にて頭を打ち) さらばぢや。

ト唄時の鐘、貞行思入あつて皆々附みないて花道へはひる。賤しづの女め跡あとを見送みおくり二重へ上あり、やはり時の鐘

にて、上下より女盜賊四人、各思ひの盜賊のこしらへ、蝶螺の殻へ火を點して鏡ひ出で、

女一 頭の、

皆々 姉御。

賤女 これ。(ト時の鐘、凄き合方、賤の女思入)今の様子を、聞いたであらう。

女二 あい、後で残らず聞きました、折角か、つた網の魚、

女一 どうでも煮焼が出来さうなを、

女三 迎ひの來たので手を空しく、

女四 歸してやつた頭の了簡、

四人 合點が行きませんよ。

賤女 成程みんなが言ふ通り、菊池の殿と知つたゆゑ、傘の無心を幸ひに此家へ伴ひ色仕掛け、首尾よ

くやらうと手を取つたら、身動きならねえ今の動亂、あの貞行の懐に菊池の寶の名鏡を、持つて

居るばつかりに、蜘蛛の術もいたづらに行ふこともならぬゆゑ、無念ながらも見脱して、一先づ

歸したあの貞行。

女一 それで様子が分りました。

しらぬひ譚

女二 然し頭の胸のうちに、

賤女 迎ひをよこすと言つたからは、館へ乗込み仕様はさまじい。

女四 然し姉御の今の素振、貞行殿に氣のある様子。

賤女 そりや大名高家だもの、日向臭い百姓や町人とは違つて、満更憎くねえやつさ。

女三 どうでも姉御は、

皆々 濡事師だなう。

賤女 え、よしてもくんな、濡れるといへば、どうか晩には、(ト隣の柱に手を掛けるを木の頭)ばれに

やあいゝなう。(ト空を見上げながら片手に後れ毛を搔きあげる、これをキザミにて、よろしく、)

ひやうし幕

ト禪の勤めにてつなぎ、引返す。

(生の松原の場) 本舞臺三間向ふ黒幕眞中振りよき大樹の松、左右丸ものゝ松並木、日覆より釣

枝、上下藝疊、總て生の松原の體。時の鐘にて幕明く。と雨車、時の鐘、合方にて花道より強平、笠

を冠り紺看板の中間にて、青柳の紋附きたる箱提灯を持ち、後より乗物一挺、この後より中間笠を冠

り蔭澤の紋附きし提灯を持ち乗物一挺、侍、中間附き出て舞臺へ来る。此時上手の敷疊を押分け、冬次郎袴股立にて窺ひ出で、刀を抜き強平の持ちたる提灯を切落す、禪の勤めになり、強平先きに皆々あつと言つて乗物を捨て、逃げる、冬次郎先の乗物にかゝり、

冬次 主君に阿り人を讒する、佞奸邪智の不敵の曲者、恨みの刀受取りをらう。

ト乗物越しに突込む、と、此うち強平窺ひ出で、下の乗物の戸を明け春之助を出し、囁き合つて下手へ小隠れする、駕籠の内にて、

夏之 やあ亂心なせしか冬次郎、何ゆるあつて、我に手を負はせしぞ。

ト此聲を聞いて冬次郎びっくりなし、

冬次 や、然いふは慥に夏之丞どの、南無三寶人違へ、今一挺の乗物こそ、人非人め思ひ知れ。

ト探り寄り下の駕籠の内へ刀を突込む、手こたへなきゆる戸を明け透し見て驚き、

や、最早春之助は逃げ失せしか、残念やなあ。(ト夏之丞の駕籠の戸を明ける、内に夏之丞手負の装にて刀を杖に半身出掛る、冬次郎見て、) 面目なし夏之丞どの、御家の仇たる春之助を、殺害せんと最前から爰に待受け提灯の、紋を目當に思ひ過ち斯くの仕合せ。

夏之 すりや最前の遺恨より、春之助を討たん爲の人違ひ。疵は淺い、氣遣ひあるな冬次郎どの。

冬次

忠義と思ひ仕出せしことも水の泡、却つて此方の仇となつたか、え、口惜しい。(ト此うら春之助強平窺ひ出で、此聲を知るべに春之助刀をぬき、冬次郎を一刀切る、冬次郎おどろき、) やあ、何者なれば卑怯未練の欺し討ち、奇怪なり、さあ尋常に勝負なせ。

ト禪の勤めにて強平も一腰を抜き冬次郎へ切つて掛る、此内下手より矢九郎太刀藏投身にて窺ひ出で切つてかゝり、冬次郎四人を相手に立廻り、よき見得にて月出で、冬次郎春之助皆々を見て、

や、さてこそ青柳春之助、それに荷擔の悪人ども、重なる恨み覺悟せよ。

春之

小癩な一言、觀念なせ。(ト夏之丞これを聞いて、)

夏之

人非人の春之助、深手ながらも冬次郎に、助太刀なさん、覺悟せよ。(ト刀を杖に駕籠より出る。)

春之

入らざるおのれが刃向ひ立て、何れもぬかりめさるな。

三人

心得ました、くたばつてしまへ。

夏之

何を小癩な。

ト禪の勤めになり、夏之丞よろめきながら刀を抜き六人立廻り、よき見得にて三味線入りの鳴物になり立廻りよろしく、月隠れて闇の立黒廻り、時の鐘、忍び三重にて六人よろしくあつて、又月出で、冬次郎夏之丞手負ひながら烈しき立廻り、此内上手より中間一人冬次郎の紋附きし提灯と、傘下駄を

持ち迎ひの心にて出で、此立廻りの中へ這入り、提灯を切落され、びつくりして花道へ逃り行き、傘と下駄を、花道へ落して逃げてはひる、ト、冬次郎は、太刀藏、矢九郎兩人と立廻り危くなる、夏之丞は強平と立廻り危くなる、春之助夏之丞を切り下げる、是れと一時に、上手の藪より槍出で冬次郎の脇腹をしたかゝに突く、冬次郎あつと苦しみながら槍を持つて引出す。藪の内より刑部着流し、尻端折り、大小にて槍を持ち出る、冬次郎夏之丞苦しみながら皆々と立廻り、刑部冬次郎の太股へ槍を突き立てる、春之助夏之丞の刀を踏へきつと見待。時の鐘、凄き合方、冬次郎と夏之丞は刑部を見

冬次 や、おのれは大友刑部ならずや。

夏之 春之助と心を合せ、お家に仇する人非人。

冬次 盡せし心も水の泡、却つておのれら兩人の、非道の刃におめくと、

夏之 忠義に凝つたる我々が、命を捨つるか。

兩人 思へばく口惜しい。

刑部 言ふにや及ぶ、元より阿房の貞行を猶馬鹿者に仕立て上げ、菊池の家を横領する邪魔になる汝ゆゑ、罪に取つて落さんと、かねて仕込みしこしらへ事も、行き損なつた返報を、うぬが方から仕返すの折に幸ひこの助太刀。

春之

不便や雪岡冬次郎、恨み重なる春之助が手に掛り、嘸無念にも思はうが、我また汝に恨みあるの  
 為、態と怒りを起させて首尾よくやつた謀計、様子一々物語らん。所詮行くべき冥土の旅、あの  
 世で父の多太夫へ、土産に詳しく言聞かせよ。(ト夏之丞を蹴返し、真中の石へ腰をかけきつと見得、詭  
 への合方。) わが誠の父といふは、いつぞや博多の沖に於て菊池秀行が軍配にて、汝が父たる多太  
 夫が矢先きに掛りし異國の海賊、丁禮といふ者なり、いつぞや鐘ヶ岬にて父の靈魂の告げにより  
 始めて知りたる父の敵、討つて恨みを晴さんにも、菊池秀行多太夫諸共、此世にあらねば計方な  
 く、血筋の者に仇なさんと思ふに幸ひ菊池の嫡子、右衛門佐家道の戀慕に我を引きあげ、立身出  
 世の寵に誇り、不行跡をす、め込み、忠義立てする奴輩は忍びくゝに讒言なし、此程汝が太宰府  
 へ奉納なせし願書の額面、調伏の短冊と竊に入替へ、今日社内にて貞行が詞にまかせ打擲ら、  
 父が恨みを晴らさん爲め、また夏之丞も某が、歸り道を其方が待受けをると察せしゆゑ、下部  
 へ言附け提灯を、摺替させたばつかりに、運命盡きたる夏之丞、我れに替つて敢ない最期、仔細  
 といふは此通り、何と膽が潰れたか。

刑部

我も見たる宗隣が領國を望みしゆゑ、舟岡川の合戦に裏切りなして功を立てしに、其甲斐もなく  
 宗隣が、所領は菊池が手に入つて、我は菊池の家來の如く長門の國にて僅かの所領、宛行はる。

其無念さ、春之助と心を合せ、菊池一家を討ち滅ぼし、筑前豊後はいふに及ばず、九州一圓中國まで二人が領地になさんず企て。

春之 今汝等を討ち取るは、菊池を滅ぼす軍の血祭り。

刑部 心嬉しや、

兩人 悦ばしやなあ。(ときつと思入、冬次郎夏之丞無念の思入)

冬次 え、聞けばきく程空おそろしき企みの一々、疾くにもそれと知るならば、仕様模様もあるべきに。

夏之 お家の大事も見届けず、悪人ばらの手にかゝり、命を捨つるか冬次郎どの、

冬次 夏之丞どの、思へばく。

兩人 口惜しい。

春之 やあ、此期となりて入らざる嘆言。

刑部 いくらじたばたひろいでも、足腰立たぬ不便な奴等。

春之 此世の暇を取らせてくれん。

冬次 假令深手は負ふととも、

夏之 冥土の道連れ、汝等兩人、

兩人 せめて一太刀。

刑部 だまつてくたばれ。

ト刑部冬次郎へ突立てし槍を引きぬく、冬次郎よろほひながら春之助へ切つて行く、夏之丞同じく刑部へ切つて行く、其刀を打落し、刑部刀を取つて夏之丞を切り下げる、春之助冬次郎を切り下げて、

春之 父尊靈のましとさば、怨敵雪岡冬次郎を討ち取るさまを御覽ありて、修羅し無念を晴らせたま

へ。

ト冬次郎へ乗掛り止めを刺す、時の鐘、ばたくにて、上手より以前の眼助息を切つて出来り、此體か見て、

眼助 刑部様、春之助様、これにおいでなされましたか。

強平 おぬしは眼助、どうして爰まで逃けて来た。

眼助 さればさ、三太夫めが引立て館へ歸り、囚獄のうちへ繋がれて居たを、やうやく繩を引切つて、

逃けて来ました。して、冬次郎どのは。

矢九 晝の遺恨を恨みに思つて、春之助どのと間違へて、夏之丞へ手を負はせし所、

太刀 我々始め刑部殿が、助太刀して、夏之丞も側杖に、

春之 冬次郎めを討取つて、日頃の恨みを晴らしたわい。

眼助 そいつは首尾よく参りましたな、日頃から主人を見限り、あなた方へ一味の眼助、是れから下郎

が身分をよろしう。

刑部 氣遣ひいたすな、大望成就の其上は、取立て遣はす奉公始め、申し附くる一儀がある。

眼助 して其御用は。

刑部 弟岩太郎が執心の、冬次郎が妹照葉、忠義顔にもてなして。(ト眼助に囁く。)

眼助 心得ました、お指圖通り照葉との、今宵のうちに連れ出させよう。

刑部 荒御宇壺の兩人は、館へ歸つて此場の様子、冬次郎が狼藉にて、夏之丞を殺害せしを、身共が断

附け討取りしと、詞を巧みに訴へめされ。

兩人 心得ました。

春之 強平、そちは身共より、先きへ歸つて何かの計らひ、これ。(とさゝやく。)

強平 心得ました。

矢九 然らば御兩所。

太刀 しちぬひ譚

刑部 必ずともにぬかりめさるな。

兩人 合點だ。(ト時の鐘にて矢九郎太刀藏強平眼助上手へはひる)

刑部 兩人が館へ歸り、委細の様子訴へなば、檢使の者の來るは必定、某は此場に残り事の次第を計ら

ひ申さん。

春之 某は館へ歸り、此場のあらまし貞行殿へ、詞巧みに言上なさん。

刑部 表門は檢使の混雜、道をとるかへ裏門より。

春之 心得ました。

ト身こしらへする、花道の揚幕にて人替するゆゑ、兩人囁き合ひ、刑部は上手春之助は下手へ小隠れする。時の鐘合方にて、花道より村師眞平やつし旅装、草鞋、菅笠と小提灯を持ち出來り、

眞平 今夜はもう何時か知らん、さつきの降りて道がぬかる、久しぶりで菊池のお屋敷をお尋ね申すの

で道がさつぱり知れない。(ト捨てりふにて舞臺へ來り、冬次郎の吹替の死骸を蹴つけ、びつくりして透し

見て、)わ、こりやこれ人が。(ト此うち刑部窺ひ出で、眞平の持ちたる提灯を打ち落とす、眞平びつくり思

入、春之助此うち探り、花道へ行き眞平を透し見て、)どうやら怪しい。(ト花道を見る、刑部抜きかけ

るを眞平留る、春之助花道にて小石を拾ひ礫に打つ、眞平菅笠にてうける、刑部抜きかけし刀をしやんと納め

る。双方一時に木の頭。あぶないことだ。

ト提灯をさがす心にてあたりを探る、刑部向ふを見る引けり、是れをキザミ、雨車時の鐘にて、

ひやうし幕

ト幕引附けると一緒に、春之助花道にて、以前の中間が捨て置きたる傘と下駄を探り見て思入。  
春之 また降り出す春雨に、丁度幸ひ下駄傘、夜更けぬうちに、それなり。

ト春之助下駄をばき傘をかつぐ、時の鐘忍び三重の模様、雨車にて春之助悠々と花道へはひる、鳴物  
打ちあげ、止めの木にてシヤギリ。

四幕目

烏山屋敷の場

〔役名 烏山豊後之助保忠、烏山犬千代後に秋作照忠、龍川小文治、宇壺矢九郎、荒鉄太刀藏、侍、  
中間、奴。犬千代乳母秋篠、腰元小笹、同一重等〕

〔烏山屋敷の場〕 本舞臺三間の間常足の二重、正面に床の間、三尺の袋戸棚、掛物、料紙硯箱な  
ど書割よろしく、此下雲母形の襖、上の方折廻し障子屋體。此前に月に雁の繪の衝立、下の方白窓の  
附きし板羽目、揚幕一間の冠木門、總て烏山屋敷の體。爰に小笹、一重家中腰元の装にて、檀草鉢の

しらぬひ譚

掃除をして居る、明にて幕明く。と合方しらべになり、

一重 これ小笹どの、またお上のお噂するやうなが、なぜこちらの若旦那犬千代様は、あのやうな愚し

いお生れであらうぞいなあ。

小笹 さいなう、親旦那豊後様の御發明に引替へて、もう十七におなりなさるに、乳母やくくと秋篠さ

まを、明けても暮れてもお慕ひなされ、とんと幼いお子も同然、したがお好きな事は別なりの、

あの愚しいお心に、舞や鼓のお上手さ、かほどのお智慧があるならばと、思ふ程猶おいとしいわ

いなう。

一重 犬千代さまもおいとしいが、又おいとしいは、冬次郎さまのお妹御照葉さま、幼い時より犬千代

さまのお許嫁であつたけれど、あの通りのお生れのゑ、お呼び迎へもないうちに、冬次郎さまの

果敢ない御最期。

小笹 おゝそれく、委しい譯は知らねども、御家にあつては悪いかして、其夜のうちに照葉さま力松

さまと共に、腰元がお供して屋敷を脱け出で、どこへお出でなされたやら、いまだにお行方知

れぬといなあ。

一重 嘸や馴れぬ旅路にて、艱難をなされたであらうわいな。

小笹 ほんにおいとしいことぢやわいなあ。(ト此時奥にて)

犬千 「信濃の國の住人、麻生殿の御内に。」

小笹 あのお聲は、犬千代さま。

一重 またお狂言が始まつたさうな。

ト舞への合方になり、奥より犬千代若衆、袴振袖一本差し、細き竹の先きへ、飾りに侍烏帽子を附

け、これを持ち、小文治同じく若衆、袴一本差しにて、兩人麻生の狂言をしながら出来り、

犬千 「藤六といふ下郎が主の宿を忘れて、はやしらのをして行く、けにもさありやよ、かりもさうよの。」

トよろしく振あつて、

小笹 これは和子さまには、麻生のお稽古でござりますか。

犬千 お、そなた達も面白いか。おれも面白い。小文治、そちら面白いか。

小文 面白いござります。

犬千 さあ、是れからは小文治、そち一人てやつて見せい。(ト烏帽子を小文治に渡す。)

小文 へい、私一人ていたしまするのでござりますか。

犬千 お、おれは是れで見物する。さあ、始めい。 (トこれにて小文治烏帽子を持ち、)

小文「信濃の國の住人麻生殿の御内に、藤六といふ下郎が、主の宿を忘れて、はやしものをして行く、

けにもさありやよ、かりもさうよの。」（ト是れを犬千代見ながら拍子を取り、餘念なき思入。）

犬千 あゝ面白いく、もう一遍せい。

小文 はッ、麻生殿の御内に藤六といふ下郎が、主の宿を忘れて、はやし物をして行く、けにもさあり

やよ、かりもさうよの。」

犬千 もう一遍せい。

小文 え、またでござりますか、幾度しても同じこと、もうお許し下さりませ。

犬千 いやく、おれがいやになるまで、何遍もせい。

小文 左様ならば、ちと腰元衆におさせなさりませ。

小笹 いえく、どうして私共にお狂言が出来ませう。

一重 やはりそれは、小文治どのがよろしうござりまする。

犬千 おゝ小文治がよい、早ういたせ。

小文 どうぞお許し下さりませ。

犬千 いやく、舞うて見せねば、おりやいやぢやく。（ト犬千代足摺りをして思入。）

小笹 これ小文治どの、また和子さまがおむづがり遊ばす、

一重 早う狂言をなされませいなあ。

ト唄になり、花道より秋篠着流し屋敷乳母のこしらへ、跡より中間白木の臺へ札守を載せ持ち出来る

犬千 さあ、早うせねば、おりやいやぢや。

小文 どうぞ、お許しなされて下さりませ。(ト此中秋篠舞臺へ來り、札守を受取り、中間下手へはひる)

秋篠 和子さま、只今戻りましてござりまする。

犬千 お、乳母戻つたか、よう戻つた。。(ト秋篠に縫り付き、わが身はどこへ行つたのぢやぞいの。

秋篠 今日巳待にござりまするゆゑ、嚴島の辨天さまをお移し申せし妙音院へ、和子さまの御願掛け

に参りました、見れば大分御機嫌の悪い様子ぢやが、こりやどうぞなされましたのかいな。

小笹 さあ、是れは今まで小文治どのと、お狂言をなされしところ、

一重 小文治どのがいやぢやと云うて、それからおむづがり、

兩人 遊ばしたのぢやわいな。

犬千 これ乳母、小文治が言ふことを聞かぬわいな。

秋篠 それは憎い奴でござります。これ小文治、あれ程わしが言附けおくに、なぜお相手をせぬのぢや

ぞいの。

小文 お相手はするけれど、同じ狂言を何遍もするのぢやゆゑ。

秋篠 そりや何遍なりともお相手をしたがよいのに、何ぞといふといやの應のと、お心易たてに我儘ばかり。あなたをそちは何と思ふ、人事々々のお主さまぢや、そのお主のおつしやることを、背くといふがあるものかいの。(ト秋篠小文清を叱る、犬千代同じやうに)

犬千 背くといふがあるものかいなう。

秋篠 ほんに、さうでござりますわいな。

犬千 ほんに、さうでござりますわいな。(ト背見合せ)

兩人 ほゝゝゝゝ。

小笹 秋篠どので、和子さまの、

一重 お笑ひ顔が出ましたわいな。

秋篠 おゝ、御機嫌が直りましたら、乳母がよい物上げませう。(ト帯の間より袱紗に包みし舞扇を出し)これ御覽じませ、あなたに上げようと存じ、こんな舞扇をとつて参じましたわいな。

ト犬千代に遣る、犬千代開き見て、

犬千 おゝ、こりや赤い晝ぢや、嬉しい〜。

小文 どれ、私にお見せなされませ。

犬千 いや〜、そちには見せぬ〜。

小文 ちよつとお見せなされませ。(ト小文治犬千代扇を奪ひ合ふ、小文治無理に取る拍子に、扇の親骨放れる。)

や、こりや扇の親骨が放れました。

犬千 大事の扇の骨をはなした、おりやいやぢや〜。(ト秋篠扇を取つて思入あつて)

秋篠 おゝ、こりや糊ばなれがしましたのぢや、今に乳母が離れぬやう、かゝつて上げませう。これ小

文治、なぜこのやうなわるさばかりしやるぞいの。

小文 いえ、そりやわしではござりませぬ、和子さまでござります。

犬千 いや〜、小文治、そちぢや〜。

小文 いえ〜、お前さまぢや〜。

秋篠 これはしたり、どうしたものでぢや、そなたが籠相をして置いて、な、(ト呑み込ませ) 和子さまの

せるにして憎い奴ぢや、今に見よ、大きな灸をすゑてやるぞ。

犬千 え。(トびつくりして) おれは灸は堪忍してくれよ。

秋篠 いえ、あなたではござりませぬ、小文治こぶんぢめにするてやります。

犬千 そんならおれではないか、あゝ嬉うれしやく。

秋篠 これ、爰こゝへ来て和子わこさまへ、御免ごめんなされませとお詫わびを申しや。

小文 それぢやというて。(ト小文治こぶんぢする思入おもひいれ)

秋篠 こりや、早はやうお詫わびをしやらぬか。(ト秋篠小文治あきしのこぶんぢへ目で知らせる、是こゝれにて小文治こぶんぢ呑み込み)

小文 和子わこさま、眞平御免まうひらごめんなされませ。(ト手てを突ついてあやまる)

犬千 やいゝ誤あやつたゝ。(ト鳥帽子とぼしを小文治こぶんぢの顔かほの先さきへ出して囁ささす、小文治こぶんぢおつとするを、秋篠あきしのコレ思入おもひいれあ

つて)

秋篠 さあ、あのやうにお詫わびをいたしますから、もう御了簡ごれつかんなされませ。(ト思入おもひいれあつて、こゝか小文治こぶんぢ、

このお札おふだを床しこの間に直なして置きやれ。

小文 畏かしこまりました。(ト小文治こぶんぢ札ふだを受取り立上たるを、犬千代留いぬちよとどめて)

犬千 其その札ふだはおれにくりやいの。

秋篠 いえ、是こゝれは辨天べんてんさまのお守札まもりふだ お玩具おもちゃにしては勿體もうたいないことにござります。こゝか小文治こぶんぢ、早はや

う奥おくへ持もつて行きやいな。

小文 心得ました。(ト小文治犬千代を振拂ひ、お札を持つて奥へはひる。)

犬千 あ、これ小文治、待たぬかいなう。(ト立上り)「やるまいぞく。」

ト合方にて、犬千代狂言の思入にて、追ひかけ奥へはひる。

秋篠 あ、危い、また争うてかいな、腰元衆奥へ行つて見て下され。

小笹 畏りました。(ト兩人奥へはひる、跡目送り、秋篠件の舞扇の骨の取れしを見て)

秋篠 けふは巳待に日頃から、信心をなす御城下の辨天さまへ参りし戻り、和子さまへ土産に取つて来た古代模様の舞扇、僅か引合ふ其のはすみに此親骨のはなれしは、和子の御身かわが子の上に、若しや凶事ある知せではあるまいか。あ、心に掛ることぢやなあ。

ト秋篠心に掛る思入、ばたくになり、花道より袴大小の侍出來り、

侍 はッ、申し上げます、只今御本城より御上使として、宇壺矢九郎さま荒鐵太刀藏さま、御入りでございます。此由旦那様へ申し上げて下さりませ。

秋篠 心得ました。

侍 どれ、御案内申さう。(ト侍引返してはひる。秋篠 思入あつて)

秋篠 折も折とて御本城より、俄かの御上使御入來に、もしや扇の、(ト骨のはなれしを見て思入あつて)あ

しらぬひ譚

あ鶴龜々々。(ト氣を取直し)どれ、御上使の御入来を、且那様へ申し上げませう。

ト唄になり、秋篠扇を持ち思入あつて、奥へはひる。是れにて床の浄壇となり、

〽治世にも亂を忘れぬ武者小路、智勇の譽れ鳥山か忠義を磨く支離前、宇寧矢九郎荒磯太刀藏、上意をかさに入来れば、龍川小文治出で迎へ、

ト此うち中の舞になり、花道より矢九郎、太刀藏上下大小にて出来る。是れと、一緒に奥より小文治出來り、よき所に仕ひ、

小文 これはく御上使様には、御苦勞千萬、先づ、是れへお通り下さりませう。

兩人 役目なれば、罷り通る。

〽肩臂はつて上座に通り、(ト兩人平舞臺へ來り、上手へ仕し)

矢九 して、豊後殿には在宿めさるか。

小文 はッ、如何にも在宿仕りまする。

太刀 何ゆる出迎ひめされぬのだ。

小文 只今お出迎ひ仕るごさりませう。

矢九 假令執權職にもせよ、殿の上意を蒙りて、上使に立ちし我々は、則ち殿を回しこと。

太刀 早速出迎ひあるべきを、顔出しせぬは上への失禮。

矢九 とく／＼是れへ出迎はれよと、

太刀 奥へ行つて言はつせえ。

いかつがましく罵れば、一間のうちに聲あつて、(ト奥にて)

豊後 あいや鳥山豊後之介保忠、只今それへ参るでござらう。

刀片手に豊後之介、禮儀みださず立出で、はるか末座に手をつかへ。

ト奥より豊後介繼上下一本差し、刀を提げて出來り、下手に控へ、

これは／＼、宇壺荒鐵の御兩所には、上使の御役目御苦勞千萬。

上使を敬ふ保忠が、武威に呑まれて俄かに追従。(ト矢九郎太刀藏顔見合せ思入あつて、

矢九 いや、これは／＼豊後殿、お取次でもよいことを。

太刀 執權職の御自身に、お請けめさるは御苦勞至極。

言ふを打消し、

豊後 あ、いや左にあらず、假令某執權職にあるとも、御兩所は殿の上使に立たれしからは、間七殿

と同じこと、敬ひ申すは臣下の禮儀。

しらぬひ諫

兩人 いや、これは痛み入つてござる。

〽 竹篋返しに兩人は、撥鬢天窓搔くばかり、豊後之介は威儀を改め、

豊後 して、御上使の趣きは。

〽 いふに矢九郎席を進み、

矢九 いや上使の趣き餘の儀にあらす。(ト談への合方張扇の音にて)かねて我君貞行公、御信心あらせら

る、嚴島の辨天へ、御參詣あらん爲、明日博多の港より乾坤丸にて御出船、それにつき一家中の

若殿輩残りなく召し連れられ、夫の宮島の舞殿にて武藝勸みの爲とあつて、得物々々の試合をい

たさせ、武藝のほどを試み給はん則ち殿の思召し、豊後殿の御子息夫千代殿も、今年櫓か十七と

か、武藝をお勵みなさる、盛り、それゆゑ御供を仰せ附けらるれば、御用意あつて然るべし。上

意といふは斯くの通り。

太刀 今宇壺氏の演舌ありしは、則ち上意の趣きなれど、承はれば御子息の夫千代殿はお生れつき、御

病身とも或は又あまいとやら辛いとやら、一家中噂とり々々、遂に一度人中へ出られた事のない

御様子、斯様申せば御子息を蔑するに似たれども、晴れ々しき今度の試合、後れでも取らる、

時は、親御の名までも出るといふもの。こりや御病氣を言ひ立てに、御供においでなさらぬが、

先づ大丈夫と、申すものではござらぬか、なう矢九郎どの。

矢九 何さま貴殿の言はるゝ通り、轉ばぬ先きの杖とやら、平にお供をなされぬが御身のお爲と申すもの、殊に家中の誰れ彼れも、武藝勝れし其中にも、大友刑部殿の弟たる岩太郎殿などは、音に聞えた早業手利。

太刀 かの入など、立合ふならば、一溜りもござるまい、兎角お出しなされぬが、上分別でござらう。

さみする詞を耳にもかけず、空嘯いて居たりしが、衣紋くつろけ豊後之介。

豊後 御親切なる方々の御意見、親の身に取り何程か忝くは存すれど、申さば晴れな武藝の試合、願うてもない今度の御供、よしや忤の犬千代めが、病氣で罷りあらうとも、押してお供いたさせ申す。上意の趣き豊後之介畏り奉ると、お請けの段は御兩所より、殿へ言上いたしめされい。

案に相違の返答に、字壺荒鐵顔見合せ、

太刀 いや、再應申すも異なるものながら、人並ならぬ御子息を、多くの人の中へ出し、恥かゝするは親御の無慈悲。

豊後 黙りめされい。

矢九 御子息不便と思しめさば、御供は平に御辭退めされい、我々よしなに言上なさん。

豊後 黙りめされい。

太刀 はて、かれこれと蔑なすとも、人の噂も七十五日、

豊後 だまれ。

矢九 此儀はとくと御思案あつて、

太刀 其上御請けが、

兩人 ようござらう。

豊後 黙れ、だまらつしやい。

〔豊後之介は聲あら、け、き、き〕

身不肖なれども當家の執權、烏山豊後之介保忠か、所有あつて御請を申すを、おのれ等如きに

はうや。此上にも御口出しなさらば、上使とは言はさぬぞ。

〔氣色を替へて居直れば、また懲りすまに兩人は、

矢九 さ、其御立腹は御尤もながら、かやう申すも御子息い、お身のお爲を存するから、

太刀 こりや朋友の誼と申すもの、平に二人が、

兩人 お止め申す。

豊後 やあ、まだ／＼申すか慮外者めが。こりや小文治、彼等兩人を追出しやれ。

〽言ふに小文治飛んで出で、

小文 畏まつてござります。

〽何の容赦もあらがぬ宇壺が、首筋ぐつと引捉へ、(ト小文治兩人の首筋を捉へ、強力の思入、)

やあ、おのれが役目を餘所にして、無禮過言の蛆蟲めら、最前から此胸が出したうてならなんだ。お許しが出た上からは、目に物見する覺悟なせ。

〽二人を宙に引立て、門の外へと突き出せば、(ト小文治兩人を門より外へ突出す。)

矢九 うぬ、ちよございな素丁稚め、

太刀 其分にはいたさぬぞ。

〽双方一度に小文治が、腕首とれば振りはらひ、其儘大地へすでんだう。

小文 やあ、とつと、此場を歸ればよし、うじ／＼なさば小文治が、覺えの手料理喰さうか。

〽刀の柄へ手をかくれば、手並に恐れ兩人は、

ト矢九郎太刀藏起上り、小文治を見てびっくりなし、花道へ行き、

矢九 あ、これ／＼、さりととは短氣な、誰も歸らぬとは言はぬわい、最前からの不馳走で、我等の膽は

しらぬひ譚

冷しもの。

太刀 又其上に盛り替の、太刀の魚とは大禁物。

兩人 必ず御馳走下さるな。

砂うち拂ひ、行きかけしが、

兩人 とはいふもの。(ト立歸る。)

小文 手料理御馳走申さうか。

矢九 いや、其馳走は、

兩人 喰べたも同然。

尻尾をまいて犬侍、こそくとして立歸る。(ト太刀藏矢九郎思入あつて花道へはひる。)

小文 え、言ひ甲斐のない奴等ぢやなあ。

跡を見送る小文治に、豊後之介はや、暫し、手を拱いて居たりしが、(ト豊後之介思入。)

豊後 愚な生れの悴をば、晴れの試合に出せよと、殿の上意をかさに着て、我に恥辱を與ふる所存、これに附けても一家たる、冬次郎等が非業な死も、正しく彼奴等がなせる業、思へば憎き佞人ばら、此惡企みの裏をかくには、不便ながらも悴の命を。

小文え。(ト思入、豊後之介是れに構はず。)

豊後主君の爲には、替へられぬわい。

思ひわびつゝ立上る、日影も首も傾きて、胸は思案に暮れ近き、一間のうちへぞ、

ト豊後之介よろしく思案の思入、三重にて此道具廻る。

(奥座敷の場)

本舞臺常足の二重、四間通しの屋體。

大和葺本縁付き、

正面上手一間床の間、下

手銀張りの襖、上の方後へ下げて一間の障子屋體。下の方建仁寺垣、石燈籠、四つ目垣などよろしく、

舞臺前に誂への石の手水鉢、下草の土手板、總て奥座敷の體。三重にて道具留る。と、屋體を舞臺前

へ押出し、

入相の鐘に火ともす奥の間に、

乳母を相手に犬千代が、智慧も麻生の太郎冠者、稽古の聲

ぞ優しけれ。

ト此内屋體の伊豫簀を巻き揚げ、内に短檠をともし、上手に秋篠大名の思入、下手に犬千代藤六の思

入にて控へ居る、よき所に誂への鼓、箱の上に載せある、兩人狂言詞にて、

秋篠「やい藤六、何とあしたの襟附はどうしたものであらうぞ。」

しらぬひ譚

犬千 「まづ下に白小袖を召しませう。」

秋篠 「して又中には。」

犬千 「紅梅がようござりませう。」

秋篠 「上には何がよからうぞ。」

犬千 「鬘斗目を召さつしやれたがようござりませう。(ト秋篠思入あつて)

秋篠 お、是れはよう出来ました、今の藤六の狂言詞なかに、乳母はかなひませぬ。よう／＼こち

の和子さまへ)

〽褒むれば犬千代嬉しげに、

犬千 これ乳母、おれと小文治とは、どつらか上手なご。

秋篠 そりや申さすとも、あなたがお上手でござりますわいの。

犬千 お、おれが上手か、嬉しいく。

〽餘念なき顔秋篠は、恨めしさうに打ちながめ、(ト秋篠犬千代を見て思入あつて)

秋篠 好きこそ物の上手とは、てもよう言うたことぢやなあ。(ト誂への合方になり、武藝はもとより平

習學問 何一つお覚えなさらぬ和子さまが、好きな道としてお隣の能狂言の稽古を聞き、自然に

お覺えなされしゆゑ御指南を履ひし所、一を教へて十を知る其發明に引替へて、外のことは幼兒同然、もう十七にもなりたまへば、人並々であることなら、誰あらう御家の執權烏山様の御嫡子ゆゑ、これ此やうな烏帽子を召し、(ト以前の烏帽子を取上げ思入あつて)上には炭斗目下には白、間着は何が映りよからうと、色彩に綺羅を飾つて御出仕ある筈、何をいふにも愚しいに、主の宿を忘れたる藤六下郎に劣らぬお生れ、いつがいつまで此やうに、前を落さず振袖でお育て申す此乳母が、年に似合はぬ餘所外の、利發の御子を見る度に、心の内の悲しさは、まあどのやうにあらうぞいなう。

悔みなけくも餘所ごとに、

犬千「けにもさありやよ、かりもさうよなう、さうよなう。」

烏帽子を持つて舞遊ぶ、我が育て子の愚さに愛しさまさる秋篠が、我が名のあはれ身に知りて、涙にくる、折柄に、

豊後 やあ、犬千代は何れにある、  
ト此文句のうち、犬千代以前の烏帽子を附けし竹を持ち遊び居る、秋篠よろしく思入。

犬千 はッ、御前に候ふ。(ト狂言詞にて言ふ。)

もらぬひ譚

何なにに附つけても狂言きやうげんの、あひの襖ふすまを押開おしひらき、立出たちいづる豊後ぶんご之介のすけ、見みるより乳母うははは涙なみだを隠かくし、

ト此このうち奥おくより豊後ぶんご之介のすけ出來いでる、秋篠あきしの思入おもひいれあつて、

秋篠 此このれは旦那様だんなさまでござりますか、取とり散ちらしましたる所ところへ。(ト四邊あたりを片附かたづけるを、)

豊後 あゝこれ、構かまやんなく。いやも、幼兒せまなこ同どう様な忤せがれが守もり、嘸まほつとしやるであらう。

秋篠 いえく、どういたしまして、此頃このころはいかうお辨わきまへが出來いでました。さあ、ちやつと御挨拶ごあいさつをなされませ。(ト此このうち秋篠あきしの袖そでを引ひき、教おしへる。犬千代いぬちよ思入おもひいれあつて、)

犬千 「ひやるく、とつはひやるの、ひ、」

秋篠 此このれはしたり、何なにをおつしやりますぞいなあ。

目顔めがほで叱しかれば、

豊後 あいやく、其儘そのまにせい。 (ト思入おもひいれあつて、) いやなに秋篠あきしの、ちと忤せがれ犬千代いぬちよに申まをし聞きかさにやな

らぬ儀ぎがある、暫しばしが間あひだ其方そのほうは、次つぎの間まへ立たつてくりやれ。

秋篠 何か様子ようすは存ぞんじませねど、現他愛うつたあいもない和子わこに。

豊後 さ、言いはねばならぬ一大事だいじ。

秋篠 えッ。

豊後 いやさ、大事ないことぢやゆる、暫くそちは次の間へ。

秋篠 畏まつてござります。(ト立ちあがる。)

犬千 乳母、一緒に行かうわいなう。(ト絶るを。)

秋篠 あいや、お前さまにはおと、様が、御用がござりますれば、爰においでなされませ。乳母はち

よつと奥へ行って参りますれば、おとなしうお待ちなされませや。(ト犬千代合點するを。) お、よ  
うお聞き分けなされましたなあ。(ト思入、氣を替へて) 左様なれば、旦那様。

豊後 秋篠。

秋篠 お次へ、参りまするでござりませう。(トこなしあつて奥へはひる。豊後之介思入あつて。)

豊後 こりや犬千代、爰へ。(ト招く。)

犬千 あい。

何心なく立寄つて、

これ、お前は誰ぢやえ。

豊後 そちが父ぢやわい。

犬千 え、嘘ばかり言ふ人ぢや、ち、は乳母にあるわいなう。

しらぬひ譚

豊後 あゝ其愚しい心ゆる、今日につゞまるそちが命、今某が申すこと心に留めてよく聞けよ。(ト詠への方になり) 武士たるものは一命を、君へ捧げ奉り、いつ何時の限りなく、死なねばならぬが家來の役目、それゆるそちもお主の爲に、今宵死なねばならぬぞよ。足らはぬながら我が忤助け置きたきものなれど、左ある時には佞人どもの、讒言の良にかゝり、豊後之介が自滅ばかりか、終には御家の害となる。まつたそちを殺す時は、佞人讒者を押籠めて、萬歳うたふお主の爲又二つには親の爲なりや、戦場の討死より遙かに勝つた最期ぞや。今父が手に掛ける程に、未練な死を遂げるな、天晴豊後が忤よと、褒めらるゝやう覺悟せよ。

〽言ひきかすれば、けん顔。(ト犬千代合點の行かぬ思入にて)

犬千 何ぢや死ぬのぢやえ。死ぬとは、どうするのぢやていの。

豊後 むゝ、わが親さへも辨へねば、死ぬるといふも知らぬ筈。こりや、そちが首を討つのでやわい。

犬千 はあゝ、首を討つとは。(ト天窓を手で打つて) 天窓こつきりするのたえ。

豊後 えゝ、情ない生れぢやなあ。

〽しどない我が子に打ちうなつき、

こりや、死ぬるといふは、そちが好きな舞をまふのぢやわい。

犬千 あゝ、死ぬるとは舞をまふのか、そんなら早う死にたい、く。

豊後 おゝ、死んで冥土へ行つて見よ、寂光淨土の舞臺にて、歌舞の菩薩の舞ひ奏で、伽陵賓迦の囀

子もの、いや面白いことぢやわい。

だまし賺せば、

犬千 さういふ面白い所なら、行きたいわいの、く。

豊後 よい覺悟ぢや、今父が死なしてやるぞ。

犬千 あゝ、早う死にたい、死にたいわいの。

豊後 あゝ、不便ながらも、是非に及ばぬ。

口に唱名目に涙 刀すらりと抜きはなせば、犬千代びつくり飛びのいて、

ト豊後之介思入あつて刀を抜く、犬千代見てびつくりし、

犬千 あれ乳母、こはいわいなう。

いふ聲きいて秋篠は、一間のうちを馳けて出で、

ト奥より秋篠はしり出來り、豊後之介を留め、

秋篠 まあく、待つて下さりませ。

しらぬひ譚

豊後 い、や乳母、殺さにやならぬ、留めるなく。

秋篠 いえく、是れが留めずにをられませうか。

刀持の手にすがり附き、

まあく待つて下さりませ、何の仔細か存じませぬが、此うつゝない和子さまを、手討にせうとは胸忿な、譯を聞かせて下さりませ。

身をさしつけて打恨めば、豊後之介も目をしばたき、

ト秋篠犬千代を圍ひ、豊後之介に詰寄る、豊後之介思入あつて、

豊後

生みの親にもまさつたそちに、仔細も明かさず殺さうとした無得心、其恨みは尤もながら仔細を

言はゞ得心すまじと、わざと一間へ遠ざけしが、今は何をか包むべき、科なき我が子を親の手で

殺さにやならぬ其譯は、先刻殿の上使として、心よからぬ宇壺荒鐵、權威をかさに入來り、明日、

殿殿島辨天へ御參詣、御供に列なる若者ども、彼の舞殿にて武藝を試む晴れの立合、其場へ足ら

はぬ犬千代を、差出せとの御上意は、佞人どもが進むる業、いなむ時には忽ちに上意を背くと言

ひ立て、我を押籠め罪なさん、あざとき企みと知つたゆゑ、其患企みの裏をかきお請け申して

歸せしは、不便ながらも犬千代が首を討つて持參なし、君に諫言申し上げ、佞人ばらを一々に取

りひしぐべき我が思案、そちが歎きは思ひやれど御家の大事に替へがたし、爰の道理を聞き分け  
て、どうぞ忤が命をくりやれ。

ハ理を盡したる豊後が詞、なんといらへも涙にくれ、さしうつぶいて居たりしが、やうく  
に顔をあげ、

ト兩人よろしく思入、大千代は以前の烏帽子、鼓などをもちやすびにして餘念なきこなし、秋篠これ  
を見、

### 秋篠

段々の事譯を承はれば御尤も、御家のお爲に死ぬるのは武士の身に取り何程か、冥加にかなう  
たことなれば、否まんやうはなけれども、あれ御覽なされませ、今殺されることさへも辨へ知ら  
ぬ愚なお心、何をお教へ申してもお覚えなされぬ其内に、好む道とて不思議にも、鼓を打つこと  
舞ふことは人並々にも勝れて覚え、わが身を相手に餘念なく、今の今まで舞ひ奏で、和子が好き  
ゆゑこの乳母も、いつしか覚えし舞の一手、せめて此世の名残りには、大千代さまに打ち囃させ  
乳母が一手を冥土の餞別、暫しのうちのお暇をひ、どうぞお慈悲に且那様、御猶豫なされて下さ  
りませ。

ハ思ひ入つたる有様に、豊後之介も面を和らけ、

しらぬひ譚

ト秋篠よろしく思入にて言ふ、豊後之介こなしあつて、

豊後 今に始めぬそちがまごゝろ、此愚しき忤をば十七年が其間、養育なせし功にめで、願ひに任せ猶豫なさん。心残りのないやうに、暗をひしたがよい。

秋篠 すりやお聞き届け下さりまするか、え、有難う存じまする。

涙ながらに伏し拜む、側には和子の頑是なく、

犬千 こりや乳母、おりやもう睡たうなつたわいなう。

秋篠 お、さうでござりませう、もうお睡氣のつく時分。どれく、乳母が目覺しに、舞ひを舞ふ

てお目に掛けん。

犬千 そんなら早う舞うて見せや。

秋篠 はい、只今舞うてお目に掛けます。

豊後 あ、暫しの猶豫はなすもの、遅刻いたさば我が名の恥辱。

秋篠 雪ぐば則ち和子の命、立ちまふ舞が此世の名残り。

豊後 諺ひの切れが知死期にて、打たねばならぬ小鼓に、

秋篠 憂きをみつちの乳母が身は、

豊後 辛苦にからむ、

秋篠 心の調べ、

豊後 ゆるがぬやうに、

秋篠 え。

豊後 名残りを惜しみやれ。

△ 刀を鞘に保忠は、心の奥へぞ入りにける、秋篠跡を見送りて、其儘和子を抱き寄せ、

ト豊後之介思入あつて奥へはひる。秋篠跡を見送り犬千代を引き寄せ、

秋篠 これ和子さま、ひよんな事になつたわいなあ。(ト抱き入れ思入あつて) 今父上のおつしやつたこ

と、和子の耳には入るまいが、お主の爲親の爲、こなたは死なねばならぬわいなう。

△ 言へども何の辨へなう、

犬千 お、おりやさつきから死にたいのぢや、早う死なしてくれいやい。

秋篠 あ、譯もないこと仰しやりませ、死ぬると命がござりませぬぞ。

犬千 命がなうても乳母さへあれば、おれは何にも入らぬわいなう。

秋篠 それ程までに此乳母を、お慕ひなさるゝ育て子を、どうまあ是れが殺されうぞいなう。

犬千 これ乳母、そちも一緒に死んでたもいなう。

秋篠 お、死にませうとも、和子さまばかり先立て、どうまあ跡に存らへませう。

犬千 そんならそも、一緒に死ぬるか、あ、嬉しい。

秋篠 生きる死ぬるも何の事やら、辨へ知らぬお心に、何をいっても詮ないこと、仕様模様もないわいなう。

なう。

〽仕様模様も中垣の、隣りに謠ふうたひの聲。(ト下座の謠ひになる)

〽いづるぞなごり三日月のく、都の西に急が。

お、あの謠ひはお隣りの、お師匠さまのお弟子へお稽古、出るぞ名残り三日月の、都の西に急

がんとは、折も折とて此身の辻占、殊には和子の好きな玉とり、あれを名残りにさうちや。

(トかたへの鼓を手に取つて) もし和子さま、お隣りのお師匠さままで、海士の謠ひが始まりました

ば、あれに合して鼓をお打ちなされませ、乳母が舞ひませう。

犬千 お、おれが好きな玉取りか、合點ぢやく。(ト秋篠鼓を渡し)

秋篠 時刻移らぬ其うちに、此世の名残り志度の浦、どれ、玉取を舞ひませうか。

〽どれ舞ひませうかとかい立てば、鼓調べて犬千代が、何の様子も知らばこそ、夢かうつゝ

か打ち囃す。あどなき姿見るに附け、いと歎きの彌増り、涙玉なす玉取の其故事をぞ立ち舞ひける。(ト此内犬千代鼓を調べ居る、秋篠思入あつて)

海十のかる藻に住む蟲にあらねども、我れから濡らす袂かな(ト犬千代鼓を打ち、秋篠よろしくあつて袖にて涙を拭ひ)あ、如何なる過去の因果にや、父上様はいふに及ばず、お過ぎなされし母上様も、菊池の御家に二とない御利發、どちらに似ても人並の御器量にはなるべきを、似ても似つかぬ愚なお生れ、それゆゑにこそ今日の仕儀、覺悟はそれと極めても、十七年が其間、手しほに掛けし育て子に、どうまあ別れられうぞいなあ。

名残り惜しさと果敢なさに、暫しは舞の手も亂れ、思はずわつと伏し沈めば、何の頑是もなき聲に、犬千代乳母が背撫でさすり。(ト秋篠わつと泣く、犬千代さすりながら)

犬千 これ乳母、何でそなたは泣くのぢやぞいなう。

秋篠 さあ、是れが泣かずに居られませうか。

犬千 そなたが泣くと、おれも泣きたうなるわいなう。

目をすりながら泣きければ、乳母は心を取直し、

秋篠 えもう、何で乳母が泣きませう、もうく泣きはしませぬぞえ。さあく早う御機嫌をお直しな

されませ、乳母は泣きはしませぬぞ。

犬千 いやく、泣かぬといへど乳母の目から、それく、涙がこはれるわいの。

秋篠 何の、こりや涙ちやござりませぬ。お、それく、こりや目から雨か降るのでこりやござらう、ほ

ほ、ほ。

涙隠して秋篠が、笑ふ心ぞせつなけれ。

犬千 お、そちが笑へばおれも笑ふ、は、ほ、ほ。

秋篠 お、和子の機嫌が直りましたら、今の跡を舞ひませう。

立上りても指しかぬる、扇取り犬千代が。

ト秋篠扇を持ち、立ち上り愁ひの思入にて、扇をさし、謠をうたばうとして思入。犬千代鼓を下に置  
き、秋篠の扇を取り囃しながら、

犬千 取つたら遣ろなく。(ト扇を見せびらかす。)

秋篠 あ、これ、其扇がなうては、舞ふことがなりませぬわいの、ちやつと下さりませ。

犬千 こゝまでござれ、扇を遣ろな。(ト上手へ行き扇を見せびらかす、秋篠側へ行き)

秋篠 さあ、下さりませ。(ト手を出す。)

犬千 あかんべい。(トべつかつこうをする。)

秋篠 えゝも、何をなされませうぞいなう。

扇を取れば犬千代が、側なる鼓取上げて、拍子せわしく打ち鳴らし、

ト秋篠扇を取上げる、犬千代直に鼓を取つて打ち、

犬千 さあく、早く舞はぬかいなう。

せがみ立てられ、是非なくも、

ト秋篠これにて扇を構へしやんと見得、犬千代は鼓を下に置き、頬杖を突いて見て居る、鳴物は隣りの稽古の心にて下座へ取る、

秋篠

さるにても此儘に、別れ果てなん悲しさよ(ト思入あつて) 此上願ふは神佛、一命かけて

犬千

南無や志度寺の、観音薩埵も力を合せてたびたまへ(ト秋篠思入、犬千代また扇をとり)

トやはり下座の鳴物にて、犬千代舞ふ。秋篠これを聞き思入あつて、

秋篠 おゝ、さうぢや、神や佛の眞心を憐みたまふものならば、この秋篠が命を断ち、和子の心の愚さを正しくなしてたびたまへ、南無嚴島辨財天、心願納受なさしめたまへ。

しらぬひ譚

一心不亂いっしんぶらんに合掌がっしょうなし、天女てんじよを祈いのる後うしろより、扇あふぎをかざし目を蔽おほふ和子わこを引退ひきひきけ、扇あふぎを指さして立上たちあがり、

ト此このうち犬千代いぬちよ秋篠あきしのの後うしろより種々しゆくおもひけれ思入しゆいれあつて、ト扇あふぎにて目を隠かくす、秋篠あきしの其そのまゝ引退ひきひきけ扇あふぎを指さつて居ゐ直ただる、犬千代いぬちよは腹はら這はひになり、頬杖ほづえをつき畫面ぐわめんの見得みえ、下座げざの鳴物なりものになり、秋篠あきしの思入しゆいれあつて、

かねて企たくひし事ことなれば、持もちたる劍つるぎを取直とりなほし、乳ちの下したを搔かき切り玉たまを押籠おしこめ、

ト此このうち秋篠あきしの思入しゆいれあつて、懷劍くわいけんをぬき放はなし、乳ちの下したへ突つき立たてる。

わつと一聲いっせい秋篠あきしのが、其儘そのまそこに倒たふるれば、犬千代いぬちよは只ただうろ／＼と、手負ておひの周まはりを打うちめく  
る、音おとに驚おどろく豊後之介ぶんごのすけ、小文治こぶんぢ諸共もろとも走り出いで、

ト犬千代いぬちよびつくりなして顛ふるへ居ゐる、これにて奥おくより豊後之介ぶんごのすけ、小文治こぶんぢ出來きり、

小文こぶんやあ、こりや母人ははびとには、何なにゆるあつて此この有あり様さま。

縋すがりなけば保忠やすただも、

豊後ぶんごほ、お、自害じがなせしは仔細しじみぞあらん。して／＼様やう子は、如何いかにく。

小文こぶんこれ、心こころを髓たしかに持もたつしやれ。

介抱かいほうすれば秋篠あきしのは、苦くるしき息いきをほつと吐つき、

秋篠 さあ、此秋篠が命を捨てしは、大事のく和子の爲。

豊後 何と言やる。(ト誂への竹笛入りの合方になり、)

秋篠 改めいふには及ばねど、何の因果か和子さまは、お生れだちより愚しく、五つになれば智慧附か

うか、十にならば辨へも出ようものかと年月を、待つ甲斐もなき十七年、三つ兒も同じ心にて、好きの道とて明暮に能よ謠よ鼓よと、此秋篠を友達か何ぞのやうに思召し、あどない心を苦しんで、お果てなされし奥様の御臨終の折までも、よくくお氣に掛ればこそ、妾を召してくれくも、犬千代のこと頼むぞと繰返したる御遺言。いかにお家の爲ぢやとて、和子をあなたの手にかげさせ、どう存へて居られませう、とても死ぬべき命なら、我が身は爰に終るとも魂は犬千代さまの影身に添うて、宮島にて立合ふその時に、天晴勝を取らするなら、今まで愚よたわけよと、後指をさゝれたる恥を清める其上に、手に掛けたまふに及ぶまじと、心に思ひ詰めしゆゑ、辨財天へ祈誓をかけ、此身を神の贄となし、和子の愚な魂をたちどころに正しくなし、武勇も智慧も世の人に勝る、やうになさんものと、それゆゑ死ぬる秋篠が、心のうちの苦しさを、御推量なされて下さりませ。

せぐり苦しき物語、聞くに豊後も目をしばたき。(ト秋篠よろしく思入あつて言ふ。)

豊後 ぼ、お、一命捨て、犬千代を、人となさんずそちが心底、忝けないぞや。さりながら、生れだらより愚なる忤が、何とて正しく相ならんや、あたり最期をさせしよなあ。

〽言ふに秋篠顔ふり上げ、

秋篠 あいやく、此身を神の贄となし、思ひ込んだる一念力、やはか通さで置くべきか。

〽突き貫きし懐劍に諸手をかけて一抉り、さと進む血潮をば、有合ふ烏帽子にうけ留めて、

ト秋篠 懐劍にてゑぐり、血潮を烏帽子にうけて、

これ小文治、一心凝りし我が血潮、和子に一口吞ませてくりやれ。

小文 心得ました。

〽言ふより早く小文治が、烏帽子の血潮犬千代に、無理に一口吞ますれば、うんとばかりに悶絶なす、これはと驚く豊後之介、乳母は祈念に髪逆立ち、

ト此うち文句の通り、よろしくあつて、

秋篠 南無嚴島辨財天、大願成就なごさしめたまへく。

〽物狂はしく秋篠が、天女を祈る折こそあれ、木城より駆け来る、迎ひの下部が縁先より、トばた／＼になり花道より、ねぢ切奴二人駆け来り、直に舞臺へ来り、

○ 最早殿には御出船、遅刻いたせし犬千代どの、

△ 引立て来れと、上より言附け。

兩人いざ、お立ちあれ。

〽小腕取つて引立つれば、むつくと起きて犬千代が、二人を一度にとつと投げ、夢の覺めた  
る有様に、

ト奴二人にて犬千代を引立てる、此時薄ドロくにて、犬千代兩人を左右へ投げ、きつと見得。

小文や、和子さま、お氣が附きましたか。

犬千む、我に返りし鳥山犬千代、何者なれば無禮の手向ひ、すさり居らう。

〽すされやつと呼はれば、

○ やあ、宇壺荒鐵御兩所の、仰せをうけて参りし我々、

△ 手向ひなさば容赦はないぞ。

〽又もや下部が引立つるを、振拂つて眞の當、うんとばかりに兩人は、もんどり打つて倒れ  
伏す。

ト又兩人かゝるを立廻つて、下手へやり一時に當てる、是れにて下の方へ兩人見事に轉る、豊後之介  
しらぬひ罪

これを見て、

豊後 や、常に替りし悴が倒さ。

秋篠 さては天女の加護ありしか、ちえ、忝けない。

犬千 これ乳母、よう死んでくれたなあ。

乳母にひつしと抱き付き、悲歎にくれていたはりつ。

今悶絶なしたるうち、現の如く天女の告げに、おことが忠義はよく知つたり、此犬千代の愚を悔

み命を捨て、の立願は、世に有りがたき志し、神明納受の證には、心氣力も常とは違ひ、いと健

かに覺ゆるぞや、冥土の土産に犬千代が、うけ得し力の程を見よ。

四邊見廻し縁先なる御影石の手水鉢、寄るよと見えしが拳を固め、やごゑを掛けて丁と打

てば、石はかつしと欠け散つたり、保忠思はず横手を打ち、

ト此文句の通りよろしく、犬千代石の手水鉢を打ちかく、豊後之介これを見、

豊後 ほ、お、驚き入つたる汝が力量、是れぞ乳母が一念に、天女の加護と覺えたり、武藝の程もさこ

そならん。

長押にかけたる槍おつ取り、りうくはッしと扱きつ、

ト豊後之介長押の槍を取りよろしく抜き、

今某が突きかくる、此槍先を受けて見よ。

胸先目がけ突きかくるを、有合ふ扇に丁と受け、

犬千 仰せに任せ、親人御免。

槍はね返し身構へなせば、又もや繰出す穂先をば、上段下段に受け流し、

ト大小入りの鳴物にて豊後之介は槍、犬千代は扇にて兩人よろしく槍の立廻りあつて、

飛鳥の如き働きに、保忠からりと槍投げ捨て、

豊後 凡術ならぬ無刀のあしらひ、かゝる手練のある上は、試合なすとも勝は必定、ほゝお、天晴々々。

手練をほむる保忠に、乳母は苦痛を打忘れ、

秋篠 なう有難や忝けなや、其健氣さを見る上は、和子に心は残らねど、一つの迷ひは我が忤、思へば

最前親骨の放れし扇は斯くなる知せ、今よりしては孤兒なれば、お主大事に奉公なし、父母をな  
た三人の、うけたる御恩を身一つに、必ず忠義を忘るゝな。

小文 氣遣ひあるな母者人、我もこなたの氣をうけつぎ、見事忠義を立てまする。

秋篠 おゝ、それ聞く上は此母が、最早思ひおく事なし、少しも早く此世を去り、冥土にござる奥様に

しらぬひ譚

和子の話しを申し上げ、褒めらるゝのが樂しみぞや。

褒めらるゝのが樂しみと、口にはいへど心には名残り惜しさの數まさる、養ひ君と産みの

子を右と左に抱き寄せ、放れがたなき風情なり、豊後は心察しやり、

ト此うち秋篠は犬千代小文治を側へ引寄せ、よろしく思入、豊後之介こなしあつて、

豊後 女に稀なる汝が義心、我が子にもまた其心を、習はさん爲これよりは、犬千代といふ名を改め、

秋篠の一字を取り秋作照忠と名乗らすべし。又そちが忤小文治は、乳兄弟ゆる行末とも、某思くは計らふまじ、是れを此世の思ひ出に、未來は迷ふことなかれ。

秋篠 あゝ残る方なき御恵み、嬉しく成佛いたしまする。

言ふ息さへも四苦八苦、

最早近づく此身の知死期、

犬千 今切れ果つる玉の緒に、其玉取りの一指を。

豊後 此世の名残に所望いたす。

聞くより手負は莞爾と打笑み、

秋篠 おゝ、和子の相手の仕納めに、一指舞うて冥土へ行かん。(ト秋篠苦痛の思入にて、居住ひを直し)

二人 奴 覺悟、

あはら有難の御経やな。(ト下座にて舞の鳴物になり、此時以前の奴心附き)

ト豊後之介犬千代に掛るを、立廻つて引提へる。此うち秋篠立ちかねる思入、小文治介抱なし漸く立上り、扇をさし舞ふことあつて、

豊後 今このきうの徳用にて、

犬千 天龍八部、

秋篠 龍女成辨。あ、これが此世の。

二人 奴 うぬ。

ト跳返す兩人を立廻つて投げ退ける。是れと一緒に秋篠苦痛の思入よろしくあつて、どうとなり、双方一時に木の頭、下座にて大勢、

佛法繁昌の靈地となるも、此の孝養と承はる。

ト段切れの語り、鳴物にて、秋篠扇をさした儘落入る。皆々愁ひの思入よろしく、

ひやうし幕

五幕目

嚴島廻廊の場

〔役名〕——菊池右衛門佐貞行、鳥山秋作照忠、淺倉三太夫、宇壺矢九郎、荒鐵太刀藏、小姓葵之助、

大友岩太郎、青柳春之助、鳥山豊後之介保忠其他。〕

（嚴島廻廊の場）——本舞臺三間中足の二重、瓦屋根向ふ廻廊前、表に御簾を掛け、上下腰羽日の狐格子の出這入り、舞臺一面小高き置舞臺、左右花道附際まで朱塗の高欄、雨落より浪板、東西の棧敷うちかへ、廻廊の屋根、鐵燈籠、向ふ正面前側同じ浪手摺、大鳥居の等木を出し、總て嚴島廻廊の装、打返し、廻廊の屋根、鐵燈籠、向ふ正面前側同じ浪手摺、大鳥居の等木を出し、總て嚴島廻廊の装、上手に矢九郎太刀藏前幕の装、下手に三太夫二幕目の装にて、帳面硯を控へ、左右に侍二人麻上下大小にて控へ、大友岩太郎掴み立ての若衆鬘、肩衣をはれ、股立襷にて竹刀を持ち、若侍二人麻上下大て試合の見得、波の音白囃子にて幕明く。と岩太郎兩人と立廻りあつて、兩人打ち据ゑられる。

○ 岩太郎どの、お手のうち、

△ われ〜誠、

兩人 恐入つてござりまする。

岩太 いや、左程にもおりにないに、畢竟時の張合ひといふもの、何れも必ず恨みにばし思はつしやるな

然し最早一家中に相手になるべき人はない、さすれば今の試合、隨一の手柄は斯く申す岩太郎

でござる。(ト袴を取つて、よき所に住ふ。)

矢九 岩太郎どの、日頃の御手練とは申しながら、

太刀 わけて今日は晴れの立合、お手柄のほど、

皆々 我々感心いたしてござる。

三太 中にも一の晴勝負と申すは、岩太郎殿と殿御氣に入りの青柳春之助兩人の槍の試合、兩人とも見物でござつた。

岩太 されば朝倉氏をはじめ各のお詞、痛み入つてござる。(ト三太夫帳面を見て、)

三太 最早これにて一家中、大半勝負も行き届きますれば、今日の試合もこれまででござらう。

岩太 すりやもはや試合は是れまでとな、誰ぞ今一人しつかりとした相手がほしいもの。お、思ひ出し

た、今日の立合に残りしものは、朝倉三太夫殿、貴殿と一勝負いたさう。

三太 これは岩太郎殿のお詞とも覺えず、今日の試合は若侍の面々武術勵みの爲の立合、拙者は最早老體のこと、此儀は平に御免下され。

岩太 いや、其儀は相成り申さぬ、すは戦場といふ時に、老若の差別はござらぬ。

矢九 岩太郎殿の仰せらるゝ通り、今日これへ出仕の面々、假令老衰したればとて、貴公様一人残り申

す儀はござるまい。

太刀 殊に相手は、當時御家中に鳥山殿を差措いては、肩を並ぶる者のなき刑部殿の弟御。

△ 相手に取つて不足はあるまい。

○ 是非とも此場で立合ひめされ。

岩太 いやく各待たつしやれ、三太夫殿は相手の身共が不足ゆゑ、それで立合ひめされぬのでござる。

三太 あいや、全く左様ではござらねども。

岩太 いやくさうだく、不足と申す證據がござる。只今申して聞さう。三太夫殿、これへ出さつし

やい。(ト三味線入り音楽になり、三太夫前へ出て)

三太 岩太郎殿、身共を呼出しめされしは、何事でござる。

岩太 三太夫殿覺えがござらう、先達て太宰府へ、殿貞行公御參詣の砌、是れなる宇壺荒鐵の兩所を以

て貴殿の娘柵を、身共が妻に申し受け度旨申し入れたる時、何と言はれた、岩太郎は人でなし

の人非人、聲に取ることは不承知だと申したではないか、それゆゑ今日も、相手になるが不足で

ござらう。

三太 そりや貴殿の言はるゝ通り、押附け業の嫁入り穿鑿、聲に取るが不承知だと申したが、今日立合

の相手不足とは得申さぬ。

岩太 不足でなくば此所で立合ふた上、身共が試合に勝つたなら、いや應なしに柵は、身共が妻に申し受ける。

三太 是れは又いかなこと、縁邊の儀ばかりは、親の身共が自由にも相成らぬ。

岩太 然らば縁組の儀は兎も角も、此所にて立合ひめさるか。

三太 それぢやと申して、老體の三太夫。

矢九 試合を否むは、上の上意を背くも同然。

太刀 是非とも此場で立合ひめさるか。

三太 さあ其儀は、

岩太 上意を背くか、

三太 さあ、それは、

矢九 立合ひめさるか、

太刀 立合ひめさるか、

三太 さあ、それは、

皆々 さあ〜〜。

岩太 返答ぶちやれ、な、何と。(ト此時花道の揚幕にて)

秋作 何れも暫く、其お相手これにあり、鳥山豊後之介が忤 同苗秋作照忠、只今參上仕つる。

皆々 なんと。

ト三味線入り中の舞にて、花道より秋作、前幕の装、上下衣装大小にて出で花道よき所へ留る。此時正面の御簾をあげる、眞中に貞行小忌衣指貫小太刀にて褥の上に住ひ、上手に豊後之介前幕の装、上下大小、春之助振袖上下衣装大小にて控へ、後に葵之助袴小姓、早蕨、紅梅、初音、若草腰元にて控へ居る。

豊後 其方は忤秋作、只今出仕いたせしか。

貞行 すりや其方が、多病と噂ありし、豊後之介が忤犬千代か。

秋作 はッ、某幼年より病に冒され、出仕とても 仕らず、漸く本復いたせし折柄、今日の立合に出仕

いたせよとの有難き嚴命、則ち秋作と改名なして只今出仕、遅刻の段は幾重にも、眞平御免下さ  
れませう。

岩太 はあ、すりやお手前が聞き及ぶ、鳥山の御子息犬千代、改名なして秋作とな。

貞行 岩太郎が幸ひ試合の相手、目通り許す近う。

春之秋作あきさくどの、君のお許し蒙る上は、遠慮に及ばず、急いで是へ。

秋作はッ、有難きお詞、然らば御免下さりませう。(ト鳴物にて舞臺へ來り、下の方へ住ふ。)

三太聞き及ぶ、烏山の御子息犬千代どの、存じの外なる健かな出立ち、祝着に存ずる。

秋作これはく、御挨拶恐入りましてござりまする。

早蕨何と皆さん御覽じませ、御家の執權烏山様の御子息とて、

紅梅殿御振りなら、物ごし恰好、

初音今御寵愛の青柳さまにも、

若草負けす劣らぬ殿御振り、

葵之御手練のほども嘸かしと、

五人御推量申し上げまする。

矢九何れも方も知つての通り、是れまで多病の犬千代どの、

太刃やうく、今日本復して、折角出仕めされたところ。

△ 試合の相手は誰あらう、勝誇つたる岩太郎どの、

□ 勝負の程は心許ない、

しらぬひ譚

◎ それよりいつそ御免を願ひ、

○ 立合すにしまふのが、

皆々 却つて其身の爲でござらう。

豊後 各の詞の通り尤もながら、相手に取つて不足なき岩太郎殿、よしや後れを取ればとて、聊かも

恥辱ならず、君の嚴命下りし上は、御苦勞ながら岩太郎殿、忤めとお立合ひ下され。

岩太 仰せまでもござらぬ、我が君の上意、何しに某違背ござらう。

貞行 猶豫いたさず、急いで立合へ。

三太 何れも、竹刀を持たつしやい。

兩人 はッ。

春之 御兩所ともに、支度めされい。

秋作 畏つてござる。(ト白囃子になり、諸士真中へ竹刀を直す、秋作岩太郎前へ出て)

岩太 秋作どの、貴殿は是れまで病身と承はれば、武術修業も忘りならんと思ひの外、よくぞ御出仕

めされた、今日の試合身共第一の勝と極りたる所なれば、直様拙者と立合はれよ、何も怖いこと

はござらぬぞ、身共よい程に、そろくあしらひませう、さあく是れへ。

ト岩太郎竹刀を取つて秋作へ投げてやる、秋作側へ寄り、

秋作 身不肖の拙者、御不足ながらお相手に。

ト竹刀を取る。岩太郎だしぬけに秋作を打たうとして打たれぬ思入。兩人じりく構へてきつと見  
得、三味線入り白囃子になり、兩人立廻り、始終岩太郎受け太刀になること、岩太郎びつくりなし、  
敵役顔見合せ思入、秋作ト、岩太郎の竹刀を打落し打ち据ゑる、矢九郎太刀藏竹刀を持つて一時に打  
つてかゝる。秋作兩人と立廻つて兩人危ふくなる、此うち後へ諸士八人、何れも袴股立にて竹刀を持  
ち、左右より秋作へ打つてかゝる、是れより八人を相手に立廻り、ト、秋作八人を打ちする。

貞行 手のうち見えた、皆引け。

皆々 はッ。(ト皆々控へる、矢九郎太刀藏、岩太郎と顔見合せ無念の思入。)

三太 今日(こんにち)の試合(しあひ)、第一(だいいち)の手柄(てがら)は、大友岩太郎殿(おほともいわたらうどの)と思ひの外(ほか)、烏山秋作殿(とりやまあきさくどの)、お手柄(てがら)々々。

秋作 武術未熟(ぶじゆつみじゆく)の烏山照忠(とりやまてるただ)、御賞美(ごしやうび)のお詞(ことば)、恐入(おそれい)りましてござります。

豊後 取るに足らざる忤め(せがれ)が手のうち、武運(ぶうん)にかなひし今日の試合(しあひ)、岩太郎殿(らうたうどの)必ず遺恨(いこん)にばし思はれな。

岩太 何が(なに)さて勝負(しやうぶ)は時の張合(ちやうあひ)と申す(まを)もの、然し(しか)立派(りっぱ)な御子息(ごしやく)の手のうち、随分(ずぶん)共に御自慢(ごじまん)なされい。

春之 聞き(き)しましたる、秋作殿(あきさくどの)の武術手練(ぶじゆつしゆれん)、春之助(はるのすけ)めも感心(かんしん)いたしてござります。

しらぬひ譚

秋作 重ねぬのお詞、生前の面目有難う存じまする。

貞行 鳥山秋作、近う參れ。

秋作 はッ。(卜前へ出る。)

貞行 其方が手練の程なかく、感心した。當座の褒美を遣はさう、何なりとも望めく。

秋作 是れは恐入つたる君の御説、未熟の手のうち御賞美とあつて御褒美を下されんとの嚴命、有難う存じまする、望めと御意の出でたる上は、お願いの品がござります。

貞行 お、何なりとも望めく。

秋作 外でもござりませぬ、君御寵愛の青柳春之助を、頂戴仕りたうござります。

貞行 何と申す。(卜説への合方。)

秋作 若年の某が申し上ぐるも、恐入りたることながら、君には此程御心猛々しく、いつぞやより新參に召抱へられし、青柳春之助のみ御寵愛の餘り、彼れが詞は何くれとなく用ひたまひ、御政道の事までも依怙最良の御沙汰多く、これぞお家に禍起る源なれば、今日の御褒美に、何卒春之助を頂戴仰付けられなば、有難う存じまする。

貞行 やあ、心憎きわつばが言分、予が祕藏なす春之助を、乞ひうけんとは奇怪至極。まだ其上に我を

さみなす詞の<sup>ことば</sup>一々、今一應吐して見よ、手討になすぞ。(ト小さ刀に手を掛ける、春之助留めて)

春之 あいや、其御憤りはさることながら、素性賤しき某を、君の恵みの深きゆゑ、見る人毎にこれ

を嫉み惡ざまに申すなるべし、忠義一途の秋作殿、誠と心得只今の諫言、主君を思ふ心底は斯く

こそ有りたきものなれば、聊か恨みに思ふまじ。今秋作殿をお手討ちとなしたまはゞ、いよく、

世の人拙者を憎み申すべし、何卒御憤りを止まりたまひ、御機嫌お直し下さるやう、偏に願ひ上

けまする。

貞行 詫言致さぬ憎き秋作、今一言申して見よ、其座は立たせぬ、さ、何と。

秋作 お聞き濟みなき上は、元より覺悟の秋作照忠、さあ御存分に遊ばされませう。

貞行 憎き一言、観念せよ。(ト又刀を抜かうとする、豊後之介留めて)

豊後 あいや我が君、暫く。(ト舞臺へかけ下り秋作を引附け)不忠者の秋作、身共が折檻、かうく、

かう。(ト扇にて散々に打ち)おのれ若年の身もち、親を差措き、三代相恩の御主へ、憚り多く

も諫言なすのみならず、詞を返す大罪人、殊に汝が只今の立合、誠の勝と心得居るか、總て貴人

高位の御前に於て立合なすには、刀の表を向けざる本文、武士たる身にて辨へなく、時に乗じ勝

誇り、我儘氣儘の今の振舞、親の身共が面まで汚す不所存者、目通り叶はぬ勘當ぢや、きりく

御前ごぜんを下り居さらう。

秋作 すりや、拙者せつしやめを御勘當ごかんたうとな。

豊後 長居ながるいたさば、殿とののお手を下くださるゝまでもなく、身共みどもが此場このはで討ち放はなすぞ。

三太 鳥山殿とりやまどののお詞御尤ことほごもつともながら、申まをさば忠義ちゆうぎの秋作殿あきさくどの、我が君わがきみへお詫わびの儀ぎは、拙者せつしやも共々ともどもお願ねがひ申まをさん。

さん。

豊後 御親切ごしんせつなる御詞ごことばなれど、此儘置このまゝおかば某それがしにまで、恥辱ちじやくを取とらす不忠者ふちゆうもの、必ず共かならずともに捨すて置おれよ。

春之 拙者せつしやが儀ぎより事起ことおこり、秋作殿あきさくどのの御勘當ごかんたうとは、はて是非ぜひに及およばぬ。

豊後 それ、何なにれも、秋作あきさくめを引立ひつたてめされい。

諸士 心得こころえました。(ト四人秋作にんあきさくへ立掛たちかり)

秋作 元もとより覺悟極かくごきはめし身みなれど、父ちちが勘當かんたう是非およに及およばず、此儘このまゝお暇仕いとまつかまつらん。我が君わがきみ様さまには御機嫌ごきげんよ

ろしう。

貞行 やあ詞交ことかはすも穢けがらはしい。それ、引立ひつたてい。

四人 きりくお立たちやれ。

秋作 はッ。(ト思入おもひいれ、三重時びづるときの大鼓たいこになり、諸士しよし四人秋作にんあきさくを取巻とりまき、花道はなみちへはひる。)

岩太 扱て氣の毒なは烏山豊後殿、今日の勝負より御子息を、勘當めされし御胸中、お察し申す。

豊後 これはく御挨拶、不所存なる忝めは、有つて益なく失うたとて事缺かず、それらの事は私事、

只歎かはしきは此程より、不行跡なる我が君の御身持、序ながら我が君に、御覽に入れる一品、且又申し上ぐる一條こそ候へ。

貞行 豊後之介思入、二重へ飾りし三方の上なる蒔繪の箱を真中へ直し、蓋を取らうとするを、貞行見て、

は恐れ、は、はッ。

ト三味線入り序の舞になり、貞行二重より下りて下手へ来る、是れにて三太夫始め春之助岩太郎顔見合せ、残らす下の方へ平伏する。豊後之介上手にて甲の箱に一禮して貞行に向ひ、

豊後 君御若年より御心荒々しく、よろしからざる御行跡ゆゑ、御父君秀行公御最期の砌、君の御身持正しくなさん爲、此豊後之介へ預けたまひし御甲、今改めて某が申し上ぐる一々、慎んで聞しめされよ。

ト豊後之介甲の箱を明けようとするを、貞行留めて、

貞行 あいや、青龍の甲出すに及ばず、其儀について豊後之介へ窃に申し聞かする仔細あり、春之助を

しらぬひ譚

始め残りの者どもは此場を退き、歸り申しの神樂を奏せよ。

春之 はッ、左様ござらば我が君様。

三太 後刻お日通り、

岩太 皆々 仕りませう。

ト唄、音楽になり、春之助岩太郎思入、三太夫先きに皆々附いて下手へはひる。貞行跡をとつくりと

見送り、甲の箱へ日禮して上手へ来る、豊後之介下手へ来る。

貞行 豊後之介、申し聞かす一條あり、近うく。

豊後 はッ。ト豊後之介側へ掛寄り、近習の武士を遠ざけられ、豊後之介めに仰せ聞けらる、一條

とは。

貞行 此程より貞行が、放埒情弱の身の行ひ、今其方が改めて異見なさる前方に、父の形見の甲を誓

ひに、我が存念の一通り、汝に窃に語り聞かさん。

豊後 何と御意なされます。(ト鼓の入りたる誂への合方)

貞行 さいつ頃船岡川の合戦の砌、父秀行公に打ち滅ぼされし大友入道宗隣の一族、こゝかしこに徘徊  
なし、菊池の家に仇なす企て、殊に大友刑部宗連は、其戦に裏切りなし、傾く運と現在の、兄を

我が父に討ち取らせ、大友の重寶飛龍丸の太刀を分捕りなし、菊池の幕下に隨ふ所存は、大友の所領のうち一二郡は我が物ならんと思ひの外、足利殿より秀行公にたまはりしを、無念に思へど詮方なく、折を窺ひ菊池の家へ仇を報はん豫ての大望、又新參の春之助は、博多の沖にて多太夫が爲に滅びたる七草官丁禮豆が一子にて、冬次郎は父の仇と知つたるゆゑ、此程生の松原にて冬次郎を討ち取り、大友刑部へ心を通はせ、彼にすゝめて忠義の武士を讒言なす不敵者、まつた大友宗隣が娘若菜姫、女ながらも父の無念を受繼ぎ、錦ヶ嶽の山寨に隠れ住み、より／＼味方を集むる由を仄に聞けば、貞行は阿房者と世上に流布せば、彼等に十分手段をあやまらして亂を起させ、其虚に乗つて殘黨餘類を容易く討取る我が所存、態と放埒懦弱にもてなし、衆道狂ひの色好み、此程太宰府の戻り道、蘆屋の里にて怪しき女に出逢ひしゆゑ、色に事寄せ試し見るに、所持せし守りは大友の寶白杵切、彼奴こそ正しく若菜姫と推量なせど、彼れ神變不思議の蜘蛛の妖術を行ふ曲者、容易く討取ることかなはず、時節を待つて敵を滅ほし國家安全になさんものと、心を碎く貞行が胸中、推量いたせ豊後之介、仔細といふは斯くの通り。

豊後

はッ、恐入つたる御詞、某疾くより其お心とは、推察はなしたれども、只今誠の御心慮を承はり、豊後めが心の安堵、然は知らずして我が君へ、諫言なしたる忝秋作、御憤りを幸ひに、態と勘

當たうなしたるは、殘ざん黨だう餘類よるるを詮議せんぎの爲ため。

貞行 割符わつぷを合あす汝なんぢの胸中きょうちゆう、謀まうは密ひそなるをよしとすと、猶なほ色いろ好このみ放持はなつと、世せ上じやうへ知しらす我わが計略けいりやく。

豊後 はッ、御尤ごもつともなる御詞おんことば、兎とにも角かくにも世よの中に、

貞行 誠まことの武士ぶしの身みの上うへほど、切せつなきものゝあるべきか。

豊後 わが君様きみさま。

貞行 豊後ぶんご之介のすけ。

豊後 思おもひ廻まはせば廻まはすほど、

貞行 味氣あぢきなき世よの、

兩人 有あり様さまぢやなあ。(ト兩人りやうにんよろしく思入おもひいせ、此時このとき黒具くろぐの忍しのび窺うかがひ居ゐて、)

忍しのび 其甲そのかぶとを。

ト甲かぶとへ掛かるを突廻つぎまはして、貞行さだゆき抜き打ちうちに斬きる、忍しのび見事みごとに轉かる。此途このとち端上手たんかみての唐戸からどを明あけ、春之助はるのすけ袴はかま

装なりにて窺うかがひ、貞行さだゆきと顔見合かほみあせる、

貞行 春之助はるのすけ、すゝぎを持もて。

春之 畏かしこまりました。

トかすめて浪の音、合方になり、貞行血刀を出す豊後之介鼻紙にてこれを拭ふ。此うち春之助塗鹽湯桶を持ち出で、貞行の側へ持つて来て、春之助水を掛け貞行手をそぐ、此うち豊後之介甲の箱の蓋を明けて改める。貞行手を洗ひ手拭はと思入、春之助懐中の鼻紙を捜し見て、紙なきゆゑ我が振袖の端を出す、貞行見てうい奴といふ思入にて豊後之介と顔見合せる。豊後之介箱の蓋をわしんとする。貞行袖を持ち、春之助を引き寄せる、双方一時に木の頭、貞行袖にて手を拭きながら、春之助と頬摺りをする。豊後之介箱の紐を静に緒ぶ。これをキザミにてよろしく、

ひやうし幕

## 六幕目 玉島川の場

〔役名〕 鳥山秋作照忠、漁夫鯨九郎、漁夫浪六實は村岡眞平、冬次郎弟力松、漁夫四人、刑部家來破鐘權内、漁夫鮫藏。冬次郎妹照葉、雪岡腰元松代、鯨九郎娘小磯等。〕

(玉島川濱邊の場) 本舞臺後波幕、上下山の張物、眞中畫心に松並木、下手苦舟、總て肥前國玉島川濱邊の體。爰に○△□◎の漁夫四人焚火をして居る、浪の音にて幕明く。

○ さあく、是れで船底のたても出來たといふもの。

△ 船はすつかり砂で洗つたから軽くなつた、さつさとおさうぜ。

しらぬひ譚

まだ日足は高い、一服やらうちやあねえか。

何だか春でも汐風で寒い、焚きつけて一あたり、あたらうちやあねえか。

いや、あたれとは縁起がい、當れく。(ト捨ぜりふにて四人焚火をしてあたる。)

時においら達の親分の鯨九郎どんは、今では所一番の金持だが、何と慾の深いやかましい人ぢや

あねえか。

いやも、人は倒れようが起きようがどうしようが、己れさへよければ構はねえと、あんな又無慈

悲な人はあるまい。

そりやあ其筈、この肥前の國は大友刑部様といふ、無慈悲な殿様の領分、その人に使はれる鯨九

郎どの、大抵なものぢや氣に入るまい。

其領主の大友様からお觸れのあつたお尋ね者、筑前の菊池の家來で、雪岡冬次郎といふ人の妹照

葉とやらに、弟の力松。

其二人を捉へて出せば、褒美の金は望み次第とのこと、若しこゝらへ來たならば、引捉へて褒美

の金にしようぢやあねえか。

そりやあさつき鯨振山の麓で見掛けたのが、其お尋ね者に違ひねえ、とてもこちと等の手際にや

◎ あ行くめえから、御家來の破鐘權内さまへ注進して、其褒美を貰ふ方がよからうぢやあねえか。  
それく、大取りしようより小取りをするがい、貴様がしつかりと見附けたなら、是れから直に破鐘様へ寄らうぢやアあるめえか。

○ それがい、く。もうおツつけ七つ下り、さあく船を片附けて、一緒に行かう。

皆々 それがい、く。(下船を片附け焚火を消して)

△ さあく是れでい、今まで焚火であつたまつたから、是れから褒美で暖まらう。  
皆々 違えねえく。

ト浪の音にて皆々下手へはひる。浪の音、濱唄にて花道より、照葉振袖屋敷娘の装、菅笠を持ち、松代腰元旅装、一本ざし、着流しの力松をおぶひ出て、花道にて、

松代 もし照葉さま、馴れぬ旅路の石高道、嘘おみ足が痛みまするのでござりませう。

照葉 いやも、わしよりはそなたこそ、力松を背負うて、大抵な事ぢやあるまいわいなう。

松代 今後の濱邊で承はりますれば、爰はもう肥前の國玉島川とやら、呼子の浦へはもう半道足らずとのこと、日の暮れぬうちに参られませう、お草臥れではござりませうが、もそつとお急ぎなされて下さりませ。

照葉 あいぐ、さあ、ちつとも早う行きませうわいの。(ト右鳴物にて三人舞臺へ來り)

松代 まだまあ、日足も高うござりますれば、幸ひ爰に小船が上つて居りまする、是れへお掛けなされ  
て、暫くお休みなされませ。

照葉 さうしませう、さあ力松もおんりして、松代をちつと休ませてやりやいなう。

力松 あいぐ。(ト合方になり、力松をおろして、三人船へ腰を掛けて)

照葉 思ひ廻せば世の人の、身の浮き沈み程、悲しいものはあるまいわいなう。此程殿様のお供にて大  
宰府へ御參詣の歸り、兄上冬次郎様は忠義の爲に、悪人の春之助を手に掛ければ、血筋の者にお  
崇りあらんほどに、弟力松諸共、以前の家來眞平方へ落ちよとのお知せ、そなたのすゝめには非  
もなう、屋敷を出でし其夜の騒動。

松代 如何なる事にや、口頃お仲のよい夏之丞さまを手に掛けたまひ、剩へ若旦那は、春之助どのに討  
たれたまひしとのこと、常から心よからぬ眼助めが、大友岩太郎の間者となつて、あなたを無理  
に女房にせんと、危いところをお許嫁の、犬千代さまの御家來小文治どのに助けられ、やうやう  
爰まで落延びて、わたしが兄眞平どの、今では此肥前の國で浪六とて漁夫の世渡り、これへ便ら  
ばお二人さまのお身の上、お氣遣ひはござりませぬ程に、必ずお案じなされますな。

照葉 其許嫁の犬千代さまも、健忘とやらの御病氣も御本復なされ、秋作さまと御改名なされたれど、

何ういふ事やら舅御さまの御勘當うけたまひ、是れもお行方知れぬとのこと。

松代 秋作さまも、慥か此國の邊へお出での由、風の便りに承はりますれば、お行方を尋ねやがてお

逢はせ申しませう。

照葉 何から何までそなたの親切、此上ともによいやうに頼むわいなあ。

力松 これ松代、早う兄上さまへ逢はしてくれいやい。(トこれを聞き、兩人愁ひの思入。)

松代 え、おいたはしい。兄御さまの御最期も御存じなく、其やうにおつしやるお心根。

照葉 側で聞くさへ胸潰れ、

松代 袖に涙の旅の空、

照葉 松代、

松代 照葉さま、

照葉 見へば果敢なき、

兩人 身の上ちやわいなあ。

ト思入、浪の音にて花道より、破鐘権内、半纏股引にて黒四天の捕手六人附いて出来り、

しらぬひ譚

權内 こりや家來ども、漁夫どもが注進にて、雪岡冬次郎が妹照葉力松諸共、この濱邊へ來りし由、見附次第引提へて、御主人へ差上げれば、御褒美は望み次第、必ずぬかるな。

皆々 心得ました。

權内 參れ。ト皆々舞臺へ來り兩人を見附け、扱こそ、瓜はづれの尋常さ、雪岡が妹照葉、幼いものは力松に疑ひなし、引括つて御主人刑部様へ連れて行く、さあ尋常に腕まはせ。

松代 いえ、私共は此肥前の國の阿彌陀寺へ參詣の兄弟連れ、左様なものぢやござりませぬ。

權内 いや、注進あつて慥かに聞いた落人め、それ家來ども、搦め取れ。

捕手 腕まはせ。(ト立ちかゝる。)

松代 包むとすれど、顯はれし上からは是非に及ばぬ、女ながらも此松代が、お供した御主人方、めつたに渡してよいものか。申し照葉さま、爰構はずとあなたさまは、力松さまをお連れなされて少しも早う。

照葉 心得ました、弟おぢや。(ト力松の手を取り行かうとする。)

權内 おのれを遣つて詰るものかえ。(ト支へるを松代留める、此うち照葉力松を連れ上手へはひる。)

邪魔だてひろぐ憎き女郎め、討つてとれ。

皆々 心得こころえました。

権内 身共みどもは照葉てりはを追掛おつかけて、

松代 いゝやならぬ。

権内 何を小癩こしかな。

ト禪ぜんの勤しんめになり、松代まつよ権内ごんないを留とどめる、捕手とらて三人松代にんまつよへ打うつてかゝる、権内ごんない上手かみてへはひる。松代まつよ一腰こしをぬき、皆々みなみなと立廻たちまはりあつて、ト松代まつよ皆々みなみなを追おつて下手しもてへはひる。此このうち上手かみてより権内ごんない力松ちからまつよを引抱ひつかへ、照葉てりはを引立ひつたて出でて、

逃にげるとて逃にがさうか、刑部せうぶさまへ連つれて行く、きりくうせう。

ト浪なみの音おとにて花道はなみちへかゝる。花道はなみちより秋作あきやく前幕まへまくのこしらへ、武者修業むしやしゆげふの装なり、大小だいせう菅笠すげがさを持ち出いて、此この體ていを見て力松ちからまつよを引取ひきとる、権内ごんないそれと寄よるを舞臺ぶたいへ扞おし戻もどす。

やあ、何者なにものなれば入いらざる妨さまたげ、小悴こせがれめをこつちへ渡わたせ。

秋作あきやく 様子ようすは何なにか知らねども、幼せまきものと若わかき女子むすめに此場このまの狼藉ろうぜき。(ト此このうち照葉てりは秋作あきやくを見て、)

照葉あきやく や、あなたは夫犬おつと千代ちやうさま。(ト秋作あきやく照葉てりはを見て、)

秋作あきやく さういふそちは許嫁いひなづけの、照葉てりはならずや。(ト力松ちからまつよを照葉てりはに渡わたす、権内ごんないこれを聞きいて、)

しらぬひ譚

權内 扱はおのれは豊後之介の、勘當なしたる悴の秋作、身共が手柄の照葉兄弟、こつちへ渡して觀念

ひろけ。

秋作 照葉兄弟を渡せとぬかす、おのれは慥か人非人の、大友刑部が討手のものよな。身共がこれへ來

るからは、やはかやみく渡さうか、道を開いて通すまいか。

權内 小癩な一言、身共に渡せ。

秋作 何を。

ト禪の勤めになり、船の中なる櫂を取つて立廻る、權内扱はす上手へ浴びてはひり、秋作掛けようとするを、照葉留めて、

照葉 あゝもし、逃けて行くなら留めずとも、もう御無用になされませ。

秋作 いかさま、長追ひせんも無益の至り、(ト櫂を投げ捨て)、御身等兄弟難儀の場へ、折よく某参りしも盡きせぬ縁。

照葉 あなたさまには、御病氣も御本復、御機嫌よい今日のお目もじ。

秋作 そなたといひ、力松にも、思ひがけない此場の再會。

照葉 焦れ慕うた秋作さま。

秋作 絶えて久しき照葉どの。

照葉 よう顔見せて下さりませいなあ。(ト絶つて思入) まあく、是れへお掛けなされませいなあ。

ト合方になり、秋作船へ腰を掛ける、照葉力松を船に乗せ同じく腰を掛ける、秋作思入あつて、

秋作 思ひがけなき此程の騒動、冬次郎どの、敢なき最期より、御身等兄弟まで追手をかけて行方の詮議、是れ皆佞人讒者の仕業、して此國へ来りしは、いづくを目當。

照葉 申すも甲斐なきわれく兄弟、以前の若黨眞平と申すもの、今は當國呼子の浦にて漁り渡世、是れを便りて眞平が妹松代を作うて、來かゝる道に今の追手。

秋作 我れも此程宮島にて、父豊後之介殿に勘當の體にもてなし國遠なせしも、大友の殘黨詮議の爲、御身等同胞此國に知邊あらば、それを使いて身を忍び、時節を待つて雪岡の家再興、某よきに計らひ得ません。

照葉 有難き其お詞、外に便りない兄弟が身の上、必ずともに。

秋作 氣遣ひあるな、未來を掛けて。

照葉 え、お嬉しう存じまる。(ト思入、此うち後へ權内窺ひ出で、)

權内 其間に餓鬼めは、身共が手柄に。(ト力松を引捉へる。秋作見て)

秋作 小頼な匹夫が憎き振舞、こま言ぬかさは手は見せぬぞ。

権内 何を小頼な。

ト兩人子供を争ふ立廻り、風の音砂石の降る音烈しく、日覆より大鷲出で、権内を蹴散らし、吹替の子供を掴み、下の方日覆へ舞ひ上る、権内は下手へ倒れる、秋作驚き、

秋作 や、大事の弟力松を鷲の翅にはるか空、打捨て置かれぬ小兒の命、照葉は早う知邊の方へ、

我は飛行く大鳥の、行方を慕うて、お、さうだ。

ト風の音、カケリにて秋作花道へはひる。照葉見送り、

照葉 思ひがけなく許嫁の、犬千代さまにお目にかゝり、嬉しい仰せも情ない、あのいとけない力松を

鷲の翅にかけられて、命のほども心元ない、あの松代は何して居やる、早う戻つてたもいなう。

ト向ふへ思入、浪の音、可笑味の合方、下手の苦舟より鮫藏漁夫の装、今まで寐て居たりし思入、伸をしながら出て、照葉を見附け、懐より繪姿を出し較べ見て思入。

鮫藏 うまいわく、こながら酒の酔心、ぐつすりやつた船のうち、何だか様子は知らないが、爰にま

します一人のうつつい乙女、姿なら器量なら、此繪姿のお尋ね者に生寫し、引括つては可愛さうだ、そつと捉へて褒美の金。さあ姉さん、わしと一緒に來たまへく。(ト照葉の手を取るを振り放し)

照葉 こつちの心こころの採とめるも知らず、慮りよぐわい外わいしやんな放はなしやいなう。

鮫藏

なに、慮りよぐわい外わいとは朝あさ起おきて顔かほを洗あらふことか、但たゞし金かねと錢ぜにを替かへるを詰つめていふのか、そんなむづか

しいことを言いはずとも、早はやくこつちへ來きたまへく。(トまた手てを取とらうとする。)

照葉

またしても慮りよぐわい外わいもの、てんがうしやると許ゆるさぬぞ。

鮫藏

いや、こいつがく、顔かほに似に合あはぬ手てごはい女めづつめ、情なさけをかければ附つけ上ありのよまい言こと、さう吐ぬかせ

ばこつちもぢが手てに引ひ括くつて、あの船ふねの中なかへ入いれ、おもいれ慰なぐさんで刑ぎやう部ぶさまへ連つれて行ゆく。さ

あ、うしやあがれ。(ト引ひ立たてようとする。)

照葉

え、聞きくもうるさい其その詞ことば。これ、松まつ代よは何どうして居ゐやるか、早はやう戻もどつてくれぬかいの、何どうして居ゐ

やるなう。早はやう戻もどつてくれぬかいなう。

鮫藏

なに松まつ代よに戻もどれ、そんな奴やつに戻もどられてたまるものか、邪じやま魔まのないうち、きりくうせう。

ト浪なみの音おと可か笑わみの鳴なり物ものにて兩りゆう人じん立た廻まり、船ふねの周まはりを追おひかけ廻まり、ト、照てり葉は鮫さ藏ざうを突つ倒たおし、上かみ手てへ逆さか

げてはひる。鮫さ藏ざう起あぎ上あり、眼めへ砂すなのはひりし體ていにて、

いや、おそろしい手て酷ひどい女をんなめ、目めの中なかへ砂すなを入いれをつた、あ、痛いたい目めが明あかれない、よくも

よくも砂すなの中なかへ目めを入いれ居ゐつたな。おのれ女をんなめ、遠とほくは行ゆくまい、待まちてく。

しらぬひ算

トあたりを探り、襦を取つて杖に、鯨蔵盲目の思入にて上手へはひる。禪の勤めになり、下手より松代、以前の皆々と立廻りながら出で、きつと見得、三味線入り鳴物になり、仕抜き立廻り、皆々を切倒し権内へ頸く、是れにて権内心付き兩人立廻り、鳴物替つて烈しき立廻り、互ひに手を負ふことあつてよろしく、ト、権内を切倒し、松代ほつと思入、

松代 え、口惜しや、残念や、心は逸れど多勢の追手、假令深手は負ひたりとも、大事のくの御主の御先途見届けいで置くべきか。照葉さまいなう、力松さまいなう。

トよろめき、向ふを見る、此うち捕手心付き、一人づゝ松代へ掛る。是れより静かなる鳴物にて松代手負ひの立廻りあつて、ト、皆々を切倒しどうとなる。浪の音ばたくにて、上手より照葉走り出たり、松代を見てびつくりして縫り付き、

照葉 これ松代、心を慥かに持つてたもいなう。これ松代、氣をしつかりと持つてたも、これいなう、これいなう。

ト抱き起して呼ぶ、松代やうやく目を開き、照葉を見て、

松代 あなたは照葉さま、お身にお怪我はなかつたか、あゝ嬉しい。(ト又がつくりとなる、照葉縫つて、) 照葉 是れはしたり松代、どうしたものでちや、疵は浅い、日頃の心に似合はぬこと、氣をしつかりと持ちやいなう。(ト呼び生ける、松代よろしく心付き、)

松代 照葉さま、よう仰しやつて下さりましたなあ。(ト竹笛の入りたる合方、松代思入あつて) 心は彌猛

にはやれども、此深手ではとてもお供は叶ひますまい、お心細くおほさうが力松さまをお連れなされ、日暮れぬうちに濱邊傳ひ、呼子の浦とお尋ねなされ、兄真平どの、所まで、早う落ちて下さりませ。

照葉 そなたの詞は尤もぢやが、深手に苦しむこの有様、見捨て、どうまあ行かれうぞ。まだ其上に悲

しいは、最前爰で許嫁の秋作さまにお目にかゝり、悦ぶ甲斐も情ない、追手の者が力松を、連れて行くを秋作さまが支へるうち、可愛やあの子は驚にさらはれ、行方が知れずなつたわいなう。

松代 え、そんなら力松さまは驚がさらつて、え、え、え。さりながらそれも此場のもつけの幸ひ、即坐にお命も失ふまい、足手纏ひのないうちに、あなたは此場を早うノ。

照葉 それぢやというてわし一人、どうして此場が落ちられうぞいの。

松代 え、聞きわけない、命を捨つるも苦をするも、みんなお主が大事のゑ、またもや追手の来るならば心盡しも水の泡、わたしを不便と思召すなら、どうぞ忠義を立てさせて、早う落ちて下さりませ。

照葉 成程、それ程までにいふことなら、わしは先きへ行きませう、氣をしつかりと必ずともに、死ぬ

るのぢやないぞや。

松代 いえく、死にはいたしませぬ、さゝ早うく。

と時の鐘三重にて、照葉思入あつて、東の揚幕へはひる。松代後を見送り、

もし、必ず怪我して下さりますな、お名残り惜しいは照葉さま、心に掛る方松さま、どうぞお命

恙なう。(ト刀を杖にやうくと立上り、向ふへ思入、此時権内心 付き)

権内 何を。(ト又掛るを、よろしく立廻り、権内の脇腹へ刀を突込み、権内わつと苦しむ)

松代 お別れでござりまする。

ト松代権内と一緒に苦しむ。この見得、時の鐘、波の音にて道具廻る。

(濱邊蘆原の場)

本舞臺後黒幕、左右以前の張物、眞中松の大樹、日覆より釣枝、上下小高き蘆原、舞臺まで浪板、總てこれまでの濱邊を後前に見たる體、爰に以前の漁夫照葉を取巻き居る、右鳴

物にて道具留る。

○ お觸れのあつたお尋ねもの、引括つて褒美の金だ。

皆々 さあく、一緒に來やれく。

照葉 いえく、わたしやそんなものぢやござんせぬ、どうぞ堪忍して下さんせ。

△ いや、ならぬく、落人に違ひない。

皆々 引きすつて行けく。

ト浪の音にて照葉を引立て行きに掛る。花道より浪六、二幕目の漁夫のこしらへにて、權の先きへ綱を括り附けて擔ぎ出て、舞臺へ來り、此體を見て、皆々を掻き退け、照葉を圍ふ。皆々拾ぜりふにて照葉へかゝる。浪六權にて滅多打ちになぐる。是れにて四人逃げて花道へはひる。照葉思入あつて、

照葉 どなたさまかは存じませぬが、危いところを、有難う存じまする。

浪六 何さ、禮にやあ及ばねえ、然し今頃、女中がたつた一人、こりやてつきりお觸れのある。

照葉 え。(トびつくり、此時浪六頬冠りを取り、照葉を見て)

浪六 さういふあなたは、照葉さまぢやあござりませぬか。(ト照葉見て)

照葉 ほんにそなたは眞平どの、よい所で逢ひましたわいなう。

浪六 やれく、丁度よい所へ参り合せました、あなたが此國へござつたからは、定めしわしが家を目當に。

照葉 定めて様子は聞きやつたであらう、兄上様の御最期より、刑部どの、悪心にて、われも兄弟を

此邊まで殿しい詮議、そなたの住家を便りにて、松代を力にやうく是れまで。

浪六

よろしうござります、委しい事はあとでのこと、以前のお主様の事なれば、私が命に掛けておか

くまひ申しますが、舅緒九郎は心よからぬ者なれば、打明けては申されませぬゆゑ、女房どもに

頼みまして、目袂に掛らぬやうにいたしますが、若し見咎められた其時は、お前さまを私が博

多で馴染んだ女郎だと、偽りを申します程に、必ずどのやうな事がござりますと、私次第にな

されておいでなされませ。

照葉

あいく、そりや心得てをりまするわいなう。

浪六

夜更けぬうちに、ちつとも早う。

照葉

そんなら眞平、

浪六

さあ、お供いたしませう。

ト兩人身ごしらへする。風の音、トヒヨになり、上手の蘆原より、指金の水鳥大分立つ。是れにて浪

六照葉を圍ひきつと見得、蘆原を押分け、鱈九郎白髪鬘襦袢装、火脇差しをさし、好みのこしらへに

て半身出る、此きつかけに月隠れて、本釣鉾の頭、凄き鳴物になり鱈九郎探り出で、照葉を捕へる、

照葉「アレ」といふ、是れにて浪六びつくり是れを支へる。下手より小磯世話女房のこしらへにて、提

灯を持ち出で、此中へはひる。鱧九郎提灯を打落し、四人ダンマリ模様の立廻りよろしくあつて、ト浪六照葉を連れ摺抜け花道へ行く。照葉花道にて躓く。浪六手を取りシヤンと引き起す。舞臺は鱧九郎立廻りの内に小磯を蹴飛ばし、小磯べつたり下に居る。双方一時に木の頭。これにて日覆より月出る。鱧九郎小磯を見て、

鱧九 わりや娘か。

小磯 と、さん。

ト小磯を引寄せて囁くをキザミ、時の鐘、三重にてよろしく、

幕

幕の引附けと一緒に、浪六照葉の手を引き花道へはひる。幕引附けると、浪の音にてつなき引返す。

## 七幕目

鱧九郎内の場  
呼子ケ浦の場

〔役名〕 漁夫鱧九郎、漁夫浪六實は村岡眞平、庄屋佐次郎兵衛、在所かゝあお蛸、同お倉、漁師、  
しらぬひ譚

捕手、漁師鮫藏。冬次郎妹照葉、鮫九郎娘小錢等。

(鮫九郎内の場)

本舞臺三間の間を舞臺、正面暖簾目、押入戸棚、鼠壁、上方九尺の中二階、

簀子建切り、丸太の梯子、下の方三尺の物置、庭下げあり、此下敷疊、いつもの所門目、總て漁大鮫

九郎内の體。爰に鮫藏殺りの筒ツぼう、脚絆襦袍裝にて、網をすいて居る。此傍に佐次郎兵衛お綾着

流し、庄屋にて立ちかゝり居る。此見得波の音、在郷唄にて幕明く。

佐次 これ鮫藏、鮫九郎どのに逢ひたい、家に居るか。

鮫藏 あい、親方は今奥に寢て居ます。

佐次 又起したら小言だらうな。

鮫藏 何ぞ用でもござんすのか。

佐次 いや、外の事でもないが、此間御領主大友さまからお觸れの出た、雪岡冬次郎といふ小姓の妹と、

弟が、此國に身寄りがあつて、入込んで居るといふ噂ゆゑ、誰か捕へて出さうとも、此庄屋が袋

美の歩一を取るほどに、鮫九郎どのにも其事を、よく斷つておいてくりやれ。

鮫藏 いや、おらが親方は慾が深いと思つたが、又庄屋は庄屋だけに、人に骨を折らして置いて歩一と

はよつほど上手だ。

佐次 はて、爰らが庄屋のかすり所ぢやわい。

鮫藏 何にしろ其落人を引提へ、褒美の金に有りつきたいものだ。

佐次 おれも歩一に有りつきたいものだ。(ト鮫藏懐より人相書を出して)

鮫藏 御領主さまからお觸れの廻つた、二人のもの、人相書、字は讀めねえが書を見れば、一昨日の晩出會した慥に娘に違ひない、是れに附けても此家の入智、あの浪六は前方に、菊池の屋敷に居たとやら、若しや身寄りぢやアあるめえか、こいつあ金になりさうだわえ。

ト佐次郎共衛煙草を呑みながら、

佐次 なに、風になる、又荒れねばよいが。

鮫藏 とんだ早耳だ。

佐次 いや、其風で思ひ出した、まだ言ひおかねばならぬことがある。此の呼子ヶ浦の沖中で、一昨日の晩から不知火の燃ゆるゆゑ、とんと漁がきかぬけな、何でもこりやあ村の内に、燧始深い女があつて、それで燃ゆるに違ひない、其吟味にせにやならぬぞよ。

鮫藏 さればさ、一昨日の晩から夜に入ると荒れ出して不知火が燃ゆるゆゑ、雜魚一尾かゝりはせず、漁夫仲間は大きな違ひ、これが江戸であらうなら、篝火入らずに不知火で、さぞ白魚が取れるで

あらう。

佐次 違ひないぞ。

兩人 は、ムムム。

ト波の音テンツ、になり、花道よりお蛸、お倉在所囁アのこしらへにて、手拭帯などを大分持  
ち出来り門口より、

お蛸 小磯女郎、

兩人 内かなく。

鮫藏 え、やかましい、どいつぢやい。

兩人 どいつでもない、わしらぢやわいの。(ト兩人内へはひる。)

鮫藏 誰かと思つたら、お蛸女郎にお倉女郎か。

お蛸 これは新田の庄屋さま。

お倉 お許しなされませ。(ト兩人よき所へ住ひ。)

鮫藏 あ、又おれを口説きに來たか、うつたうしい奴等だ。

お蛸 え、常談はおいておくれ、それどころではないわいなう。

お倉 沖に燃ゆる不知火のことで、今朝から歩き續けた。

お蛸 小磯女郎が内になら、ちよつと逢ひたい、呼んで下され。

鮫藏 お、合點だ。(ト奥へ向ひ) 小磯さんく。(ト奥にて)

小磯 あい、今そこへ行くわいなあ。(ト合方になり、奥より小磯前垂がけ、世話女房のこしらへ、肩へ花勝見の紋附きし手拭を掛け出で) お、是れは新田の庄屋さまに、おたこさんにおくらさん、ようお出でなされましたなあ。

佐次 いつ見ても、美くしいものぢや。

小磯 又庄屋さまの悪口ばかり。

鮫藏 いや、誰が見ても美くしい。

小磯 え、そなたまでが同じやうに。

お蛸 さあ、さういふのも無理でない、江戸から買つた錦繪の、しうかとやらに生寫し。

お倉 ほんに、濱でも評判ぢやわいなう。

小磯 え、もう、よい加減におだて、下さんせいなあ。それはさうと、お蛸さんにお倉さんは、何ぞ用でもござんすかえ。

お蛸 さいなあ、今日二人連れて来たのはな、此月の濱行事がおくら女郎とわしの所、わらい月に當つ

たは一昨日からの沖の不知火、海が荒れて漁がなし、何でもこりやお明神さまのお氣にかなはぬ  
格氣深い女があるに違ひないと、そこで今朝から村中を、詮議して歩くのおやわいなう。

佐次 それは二人とも御苦勞々々、まだまあ是れとも知れぬかいなう。

お蛸 さあ、誰もわしが格氣したといふものはないゆゑ、まだそれとも知れぬわいなあ。

お倉 ほんに、庄屋さまは覺えておいでなさいませうが、上在所の與吉どのが、よその娘と懇したを、

か、衆が見附けて修羅もやすと、海へ火の燃ゆるが一時、何が大雨大風で、沖の中のおそろしさ

あのか、衆もとう／＼海へはまつて死んでしまつた。それからとんと無かつたが、四五日跡から

また火が燃ゆるは、どうでも此村に格氣深い女房があると見えますわいなう。

鮫藏 これ、か、衆達、人事のやうに詮議するが、洗つて見たらこんな衆かも知れねえ。

佐次 いや、又そんな聲えがあるならば、ふツつりと思ひ切り、格氣を止めて懺悔したかよいせや。

お倉 あの言はしやんすことわいなあ、こちらの常伴どのは、年中病人、色事の氣遣ひはない人、格氣し

たうても當がないわいなあ。

鮫藏 お蛸女郎は怪しいぜ。

お蛸 いえく、人と違つて此お蛸は、娘の時から五助どのに附けつ廻しの口説かれて、女夫になつた戀女房、こちに格氣はないわいなあ。

お倉 したが、わしらと違つて爰の聲の、浪六どののはあのやうな好い男、亭主にしたら、格氣も出ようか、なう小磯女郎。

小磯 いえく、此在所では明神さまのお咎めで、格氣嫉妬のならぬことは、小い時から聞き傳へて居りまする、あの不知火といふは、ありや何の火でござんすえ。

お蛸 お、其火の譯は何のことやら、お倉 わしら二人も、知らぬわいなあ。

佐次 お、知らぬ筈、あれはとつと昔のことぢや。

小磯 御存じならば其譯を、お話しなされて下さりませ。

佐次 搔摘んで話させう。昔松浦姫といふのがあつた所、其御亭主に狭手彦様といふ、あ、よい男で

あつたけな、何が朝も晩も蛇の岩に取附いたやうに、吸ひついた仲であつた所、俄に御亭主が唐へ商ひに行かつしやる。さ、そこで女子の廻り氣に、わしに飽が来て唐の揚貴妃とやらに、見返るのぢやゆゑ、遣るまい、いや行かうといふ女夫喧嘩、狭手彦様は大事の金儲け、遅ら、と錢の

しらぬひ譚

三百も違ふこつちやゆゑ、とつと、船出してしまつたによつて、只手を上げて船よなうくと、呼べど叫べど雲霞、つひに其所へ立縮みに、石になつて死なつしやつた。それを祀り込んだところろが松浦大明神さま、其執着の石から出た不知火、一たい格氣深い神さまなれど、萬更一人腹も立てられず、ぢやによつて氏子のうちに格氣する女があると、かの火が誘うて行かつしやろ、因縁あらう斯くの通り。あゝ、喉がひツつく、茶を一杯下されう。

小磯 あいゝ。(ト茶を汲んで持ち來り) ほんに今のお話して、さつぱりとよく分りました。

お蛸 さあ、それゆゑに共吟味、手拭なりと帯なりと、海へ流して明神岩へ打ち上げたが、格氣嫉妬のある女、さうない人は一夜のうち、また元の磯へ流れ戻るけな。

お倉 そこで此やうに手拭やら襷やら、村中集めて海へ流し、慥な證據を見るのぢや、出しなさんせ。

お蛸 小磯女郎も何なりと、其身の身ばれぢや、出しなさんせ。

小磯 あいゝ、そんならわたしも、此手拭を上げませうわいな。(ト手拭を出す、お蛸取つて見し)

お蛸 おゝ、こりや花勝見とやらの紋附、あゝよい染の手拭ぢやの。

小磯 そりやあの江戸の土産に貰うたわいの。

お蛸 道理で藍の色がよい、さあ、是れで村中揃うたれば、直に海へ流さうではないか。

お倉 お、それがよい。

佐次 直に流しに行くならば、おれが検分してやらう。

お蛸 そんなら庄屋さま。

兩人 一緒に行きませう。

佐次 お、道行としようわい。

鮫藏 それぢやあ又不知火が、殖ゑやアしませぬか。

佐次 い、や大丈夫だ。(ト門口へ出る。)

三人 そんなら小磯女郎。

小磯 皆さん、ようおいでなされました。

佐次 さあ、行きませう。(ト浪の音、テント、にて、花道へはひる。鮫藏跡見送り。)

鮫藏 え、あの庄屋め、顔も長いが尻も長い奴だ、大分西が暗くなつて来たが、又今夜も時化するかしらぬ。

小磯 お、時化るといへばと、さんが、鮫藏に落へ行つて船を磯へ上げておくと、言附けてあつたぞえ。

鮫藏 なに船を磯へあけておけ、まアさ少し位いゝではないか。

ト小磯の手を取らうとするを振拂ひ、

小磯 えゝもう、てんがうせすと、早う行かぬかいの。(トツンとする。鮫藏思入あつて、)

鮫藏 親方は寐て暗さつしやるし、浪六どのは沖から歸らず、こんないゝ首尾はないと思つたに、えゝ

いまくゝしい。(ト言ひながら不承々々に門口へ出る。)

小磯 まだ、行かぬかいなう。

鮫藏 今行くところさ。

ト浪の音になり、鮫藏花道まで行きかけ、思入あつて下手の物置へはひる。時の鐘、床の淨瑠璃になり、

〽落人のかやにも心奥と口、小磯は窺ひ押入に、忍ぶ照葉を伴ひ出で、四邊憚り聲溜め、

ト小磯四邊を窺ひ、押入の鏡を明け、内より屋敷娘振袖の照葉を伴ひ出で、合方になり、

小磯 照葉さま、嘘お氣語りでござりませうなあ。

照葉 何の氣記りな事があらうぞいの。さうして爰に居ても、大事ないかいの。

小磯 大事ござりませぬとも、とゝさんは最前から、夜網の疲れで寐て居りますれば、めつたに目の覺

める氣遣ひはなし、鮫藏には用を言附け、今濱へ遣つたれば、これも歸るはよほどの間、誰に遠慮もござりませねば、ちとお身障らしをなされませいなあ。

照葉 そなたの親切嬉しいわいの、遂に一度これまでに、逢うたことのないわしを、連添ふ夫の縁により、内外の者の目を忍び、何かに附けて心遣ひ、何と禮を言はうやら、これ、手を合せて拜わいなう。

ト照葉手を合すを、小磯其手を挑ひ、

小磯 え、勿體ないことおつしやります。何のお禮に及びませうぞいなあ。夫浪六どのが其以前。眞平どのというた時、お勤め申して御恩をうけたお娘御、眞平どのお主なら、連添ふ女房の私ひゑやつぱり同じお主さま、他人行儀になされずと、小磯斯うせいあゝせいと、家來をお使ひなさるやう、必ず御遠慮なされますな、結句隔て、下さりますと、お恨みに存じますわいなあ。

〽恨むといふも眞實に、照葉はいと頼もしく。

照葉 それ程までに言うてたもる、そなたを何で隔てようぞ、とはいふものゝ世に落ちし、今は日陰の身の上なれば、主と思はず同胞と、思うてどうぞ行末とも、力になつてたもいなう。

小磯 賤しい此身を同胞と、思うてくれとおつしやりまするは、有難過ぎて勿體ないが、まだお詞に隔

てがござりまする。なぜ其やうな事おつしやります、そりやもう夫はもとより私も、及はすなからお力にと、思うては居りますれど、何をいふにも身貧な暮し、殊にはそでない父親ゆゑ、お世話申すも人目を憚り、戸棚の内に御窮屈、心にもない御介抱、お許しなされ、下さりませ。

照葉 いやなう、國を立退き方々と道に迷うて歩くうち、泊りの宿を取りはぐり、野山の宮や辻堂に夜を明かせしも、幾度か、其艱難にくらべては、戸棚はおろか下家でも、何のそれを厭はうぞいなう。小磯 ではござりませうが是れまでに、何の御不自由なき御身にて、いかい御苦勞なされませうが、只、おいとしようござります。

照葉 それも是れも世の成行き、まだしもわが身は此やうに、そなた衆二人に救はれたれど、それに引きかへ眞平の妹松代は途中にて、追手を防ぎ果敢ない最期、又弟の力松も、其場よりして行方知れず、もしや是れも追手の爲に、命を取られはせまいかと、思ひ過して案じられ、ほんに夜の日も合はぬわいなう。

〽おと、ひ思ひ主思ひ、俱に涙に暮近き門に様子を窺ふ鮫藏、内にはそれと氣も附かず。

ト小磯照葉愁ひの思入、よき程に、以前の鮫藏物置より出で、門口に窺ふ。

小磯 さあ、其事につき眞平どのが、今朝早うから漁をかけ、力松さまのお行方を、尋ねに参りました

れば、今に様子が知れませう、また松代どの、遺骸も、お寺様へやりましたれば、必ずお案じな  
されますな。

照葉 あ、何から何までそなた衆の、いかい世話になりますわいなあ。

小磯 はて、お主の世話を家來がするは、こりや當りまへでござりますわいなあ。

〽力を添へる折柄に、始終窺ふ鮫藏が、登音高く門口から、

ト鮫藏拔足にて、花道の附際まで行き、態と登音をさせ、門口の外より、

鮫藏 小磯さん、今歸りました。

〽聲にびつくりあたふたと、照葉を戸棚へ押隠し、錠前ぴんと胸撫じおろし、

ト小磯あわて、照葉を元の押入へ入れ、思入あつて、

小磯 鮫藏、戻つてかいなう。(ト是れにて鮫藏門口を明け)

鮫藏 一人の力で行かぬゆゑ、四郎藏と九郎作を頼んで、残らず船は上げました。

小磯 それは御苦勞でござんした、奥へ行って夕飯を喰べたがよい。もうこちらの人へ戻る時分、どれ、膳

ごしらへなとして置かうか。

〽言ひつゝ、立つを引留めて、

しらぬひ譚

鮫藏 小磯さん、ちよつと待つて下さんせ。

小磯 何の事か知らねども、用があるなら後の事に。

鮫藏 いや、急に話さにやあならねえ。まあ、下に居なせえ。

〽まあ下にと、しなだれ寄り、(ト鮫藏小磯の手を取り無理に引据ゑ、謀への合方になり。)

いつもく、同じやうなせりふばかり言ふやうだが、爰の家にお前といふ船玉さまがあればこそ、玄海灘を梶取るより、まだ取りにくい親方の機嫌を取つて辛抱する、その實のある鮫藏を、颯風さつぷうの雲より猶嫌ひ、おなじ梶子の浪六と、海より深く言交し、聲に直したむやくしさ。然し今更仕いまさらし力がねえ、是れから帆足を引直し、あの浪六めは捨小舟、三間權ですつと突出し、わしといふよい男の新造舟に乗替る、心はないか小磯さん。幸ひ四邊に人もなし、一網打つによい汐時、色よい返事は、どうぢやぞいの。

〽抱き附くを振拂ひ、

小磯 え、又してもいやらしい、夫のあるのに無體なこと、しつこう言やると親方へ、言はずには置かぬぞや。

鮫藏 お、言はつしやれ、お前よりわしから先きへ、親方に言はにやあならぬ事がある。

小磯 なに、父さんに、言はにやあならぬ事とは。

鮫藏 此の人相書の落人を。(ト以前の人相書を出す。)

小磯 え、。(トびつくり思入。)

鮫藏 何とびつくりでござんせうがな、訴人をすればすつしりと、褒美の金にありつく落人の娘が、そこ

らにあることを嗅ぎつけて置いた、此鼻をお前が嫌へば破れかぶれ。戸棚のうちの代物を、代官所へ連れて行き、褒美の金を貰はにやならぬ。

戸棚を目掛け立寄るを、小磯はあわて、押し留め、

小磯 あ、これ鮫藏、まあ、待つてくりやいなう。

鮫藏 お、待てといふなら待ちませう。

退引きならぬ鋸に、當座のがれの間に合せ。

小磯 成程今まではそなたを嫌ひ、態とつれなう言うたれど、眞實わしを思つてなら、そなたの心に臨

はうほどに、どうぞ戸棚のうちの事は。

鮫藏 さういふお前の心なら、なに、わしが言ふものか。

小磯 必ず言うてくりやんなえ。

鮫藏 さあ言はぬ替りに、ちよつとこゝで。(ト手を取るを)

小磯 あゝこれ、今というては。

鮫藏 どつこい、其手は喰ふまいわい、後にと言つて玉をこかし、跡にて酷い目に逢はせうでの。

小磯 何のこつちに、其やうな事が。

鮫藏 なければちよつと口にても。

小磯 さあ、それは、

鮫藏 いやなら女郎を、引摺り出さうか。

小磯 さあ、それは、

鮫藏 應か いやか、

小磯 さあ、

鮫藏 さあ、

兩人 さあくく。

鮫藏 えゝもう、こたへられぬ。

こたへられぬと追ひ廻す、折から沖より歸り来る、此家の入聲浪六が、何心なく家へ入る

出合頭に抱き附く鮫藏、其儘とつてすでんどう。

ト此うち浪の音を冠せ、花道より浪六襦袍絞りの手甲、脚絆、漁師のこしらへ、權の先へ網を結び附け、これを擔ぎ出來り、舞臺へ來て内へはひる。此時鮫藏小磯と心得、浪六に抱附くを、其儘取つて投げ退ける。

鮫藏 あいたゝゝゝ。(ト上り、浪六を見て) や、若親方が、ても早う歸らしやつたな。

浪六 おれが家へおれが戻るに、早からうが遅からうが、われが構つたことはねえ。

鮫藏 さ、何も構やせぬけれど、あの今日は漁がき、ましたかいの。

浪六 はて、此頃の不漁續きで、雜魚一尾かゝりはせぬわい。

鮫藏 あゝ、よつ程手ごたへがしたに、とつと水際で落してのけた。おゝ、何やら忘れたやうな、おゝ

それ、庄屋どのから親方へ言傳を頼まれた、どれ、ちよつと言つて來ようか。

〽間にあひ口もそこくに、奥へはひるも知らぬ振り。(ト鮫藏思入あつて奥へはひる。)

〽跡には妻がほたくと。

小磯 ほんにまあ、よい所へ戻つて下さんした、お前の戻りが遅いゆゑ、あの鮫藏がそれはく。  
浪六 はて、えいわいの、捨て、置きやれ。

〽あたり窺ひ、

これ、かのお方に、お變りはないか。

〽何やら濟まぬ夫の顔、

小磯 もしこちらの人、お前どうやら、濟まぬ顔附きぢやが。

浪六 これにはちつと様子のあること、小磯、まあ爰へ來や。(ト合方になり、小磯浪六の側へ住ふ。)これ

小磯、おりやわが身に見せる物がある。

小磯 なに、わたしに見せる物とはえ。

浪六 さあ力松さまのお行方が、どこで聞いても知れぬゆゑ、もしや海へでもはまりはさつしやらぬか

と、網打つ振で浦々を尋ね搜せどやつばり知れず、詮方盡きて戻りがけ、ふと目に附いたは明神

岩に、打ちあけあつた此手拭。(ト以前の浪六の手拭を出し)見知りはないか。

〽差し出せば、

小磯 え、あの、是れが。

浪六 さあ、こりやわが身のではないかいの。

〽胸にぎつくり立波の、騒ぐ心の棧取り直し。(ト小磯思入あつて)

小磯 わツけもない事言はしやんせ、こりやわたしのぢやござんせぬわいな。

浪六 ても、よう似た此模様。

小磯 いえ、こりや何ほもある染模様、これが岩に掛つたは、大方どこぞの愠氣深い女中さんが、手拭でござんせうわいな。

浪六 是れがわが身の手拭でなければ、おれも先づ安堵、とさあいふもの、其譯は、以前勤めたお主さまの不慮の事からちりぐに、おれを頼みに妹がお供をしたる御姉弟、一昨日計らすお日に掛り跡より追手の來ると聞き、どこへ作ふ當もなく、わが身に其事打明けてお匿ひ申せし照葉さま、器量勝れしその上に、もう年頃にもならつしやれば、お主といへどもしひよつと、おれが何ぞであらうかと、女心の疑ひに愠氣嫉妬があるまいかと、言はれぬ矢さきへ此手拭、それでわが身に問うたのぢやわいな。

小磯 ほ、いづにない何を言はしやんす、そりや人によつたもの、お主人事と忠義なお前、そんなこともあるまいし、又お主というたのがお前の馴染んだ女子にせよ、はて、そこが譬の男のこと。手掛け妾はあるならひ、それを愠氣する時は明神さまのお咎めで、其身も死すれば親夫にも、ひよんな歎きをかけると思へば、此手拭を見てさへも、勿體なうて怖しうて、人の事でも愠

しらぬひ譚

氣のりの字、聞いてもぞつとするわいなあ。

浪六 む、その心では若しおれに、妾といふやうなものが出来ても、格氣はせぬか。

小磯 眞實誓文、そんな心は。

浪六 そりやほんまに、

小磯 お前に嘘を言はうかいなあ。

眞實見えし女房が、詞に心奥の間より、此家の舅鯨九郎欠しながら出来り、

ト此うち奥より鯨九郎、白髪髪大綱の襦袍、漁夫の親仁のこしらへにて、煙草盆を提げ出来りて、

鯨九 あ、寐たく、夜網の疲れでがつかりと、半日餘り寐てのけた。

浪六 親仁さま、お目が覺めましたか。

小磯 さあ、こゝへござんせいなあ。

娘が手當あつ錦、蒲團の上に高胡坐。(ト小磯大綱の座蒲團を敷く、鯨九郎此上に住ふ。)

浪六 それ、お茶でも上げねえかえ。

小磯 あいぐ。

鯨九 聳どの、けふはちつと晴れようかの。

浪六 いえく、西へ雲が廻つたれば、又降りてござりませう。

鯖九 此頃の不漁つゞき、一昨日からの不知火で、沖が荒れて漁がきかず、こりや糧米櫃の底をたゝかにやあならぬ。

浪六 成程舅どの、言はつしやる通り、何ぞ金儲けに有りつかねば、此頭をつるさにやあならぬ。

鯖九 おゝ、其金儲けと云やあ、聲どん、ちつとこなたに聞きたい事がある。

浪六 これは改まつた親仁さま、何の御用でござります。

鯖九 いや、外でもない、戸棚のうちにに入れてある娘は、そちが主筋か。

浪六 えゝ。

〽思ひがけなき舅の詞に、夫婦は目と目見合せて、

さあ、あれは。

鯖九 いや、何も隠すことはない、これ此やうに人相書で、挿へて出せば褒美を遣らうと、心よからぬ刑部殿から、行方を尋ぬる菊池の家中、雪岡冬次郎どの、妹御、照葉どのであらうがな、こなたの爲にお主ならおれが爲にもやつぱりお主、打明したら金輪際、この鯖九郎が匿ふ氣、はて、人の落目を見捨てぬが、殺生をする罪滅し、聲どん、なぜ打明してはくれぬぞい。

しらぬひ譚

情なさけをかけるは底そこ巧たくまみ、ありそ海うみとも不知しらぬ火ひに、  
小磯 これ浪六なみどの、何もかもと、さんが、知しつての上うへは打明うちあけて、

あ、是れ待まちてと女房にようばうを、止とむるうちもとやせんと、胸むねに浪なみうつ浪六なみが、思案しあんを定ため、どつ  
かと坐まし、

浪六 あ、舅しゅうとどの、情なさけの詞ことばに、是これまで僞いつはる空怖そらおそしさ、何なにを隠かくさう女房にようばうに、お主しゆうの娘むすめと言いひくるめ、口くち

棚たなのうちへ匿かくまひしは、

鰭九 や。

浪六 この浪六なみが言交いひかせし、博多はかたの女郎ぢようぢゆうでござりまする。

小磯 え、え、え。

おどろく女房にようばうを、口くちで折おさ、

浪六 あ、これ、其その人相書にんさうがきのお尋ね者ものと、丁度ちやうど似寄にこりの年配としばいゆゑ、お疑うたがひを幸さいひにお主しゆうと僞いつはりあかの女めを、匿かくまひ置おきたいものなれど、女房にようばうはともあれ舅しゅうとどのに、一夜いちや流ながれの傀儡くわいめい女めを主しゆうあしらひにさせられませうか、勿體もつたいなさに打明うちあけてお話し申ます女の素性すじやう、もと浪六なみが筑前ちくぜんに、奉公ほうこう稼かぎに居ゐた時じ分ぶん、博多はかたの廓くわくで買馴染かひなじみ、末すゑも思おもはず女房にようばうに、しようならうと言いつたのを、誠まことと思おもつて断落かけおちなし、

國を隔て、來りしものを、むけに歸れと言はれもせず、どあつて聲の身の上なれば、我が家へ連れて來られもせず、詮方なさの出來心に、お主の娘と女房を僞り、引入れたのは博多の女郎、斯く我が身の罪を打明けて、お話し申す上からは、疑ひ晴らして下さりませ。

一寸のがれに三寸の舌に任せて浪六が、舅を僞るつくり言、聞く女房は誠と思ひ、小磯む、すりやお主の娘御というたは、お前が博多とやらで女房約束なさんした、傾城どのでいざんしたか。

浪六 あ、これ、さうでは。

小磯 九む、さうでなくば觸れの廻つた、冬次郎が妹照葉。

浪六 何しに、左様な。

小磯 そんならやつぱり、傾城どのか。

浪六 さあ、それは、

小磯 九 われが勤めた古主の娘か。

浪六 さあ、それは、

小磯 傾城どのか、

浪六 さあ、

兩人 さあ、

三人 さあくくく。

「さあくくくどうぢやと兩方より、問ひ詰められて詮方も、浪に漂ふあま小舟、寄邊定めぬ風情なり。(ト鯖九郎小磯上下より詰めよる、浪六じゆつなき思入)

「折から爰へ駈け來る、村の歩きが門口から、

トばたくになり、花道よりあるき一人走り出來り、門口から、

歩き 鯖九郎どのくく、代官所から急御用、わしと一緒になつとござりませ。

鯖九 え、折のわるい代官どの、使ひ、これく、今跡から行くと、先へ歸つて言はつせえ。

歩き いやく、急御用ぢやから、是非一緒にござりませ。

鯖九 え、泣く子に地頭、仕方がねえ、これ姫、羽織をくれ。

小磯 あいぐ。(ト小磯押入より羽織を出し、鯖九郎に着せる、鯖九郎羽織を着ながら)

鯖九 これ聒どの、代官所からの急の使ひ、慥に落人詮議の筋、假令何と偽つても、此國へ入込んだこ

と訴人あつて知れたれば、女郎にせい何にせい、似寄りの女であるからは、こなたの力では置は

れぬ、又この鱧九郎が匿へば、外は知らず此國では、指でも指さすことではない、それもおれが詞を用ひず、連れ出しでもするが最後、合圖の太鼓で出口を固め、此隣國の通路を留めれば、網の魚も同じこと、跡で後悔せぬやうに、代官所から歸るまで、思案極めて返事をしやれ。(ト此せりふを言ひながら門口へ出て)娘、留守せいよ。(ト門口をしめ)どれ、行つて來ようか。

慈悲も情も白砂の、道をほかく巖乘親仁、代官所へぞ出て行く。

トこれへ浪の音を冠せ、鱧九郎先きに歩き附いて花道へはひる。

舅を見送り、浪六が、

浪六 これ女房ども、堪忍してくれく、現在わが身の親なれど、心よからぬ鱧九郎どの、それゆゑ態と博多の女郎と、間に合口の一寸脱れ、それをわが身が實と思ひ、問はれる度の其苦しさ、櫓權を取らぬ法もあれ、わが身を捨て、餘所外の、女を内へ呼ばれうかいの。

小磯 さあ其實を知りながら、それとも若しやと女氣に、つい疑うたはわたしが誤り、どうぞ堪忍して下さいなあ。

浪六 お、そんなら疑ひ晴れたかいの。

小磯 晴れいで何とせうぞいなあ。

浪六 あゝ嬉しやく、それでおれも落附いたわいの。

小磯 いえ、まだ落附かれぬわいなあ。

浪六 なに、落附かれぬとは。

小磯 さあ今にと、さんが、代官所から、戻つてござんした其時に、お前何と言はしやんすえ。

浪六 何と言うたらよからうか、戻つてござるそれまでに、思案が附かねば絶體絶命。

小磯 え。

浪六 いや、斯ういふ時には酒の力、酒があるなら爛してくれ。

小磯 何の造作もない、藪際まで。(ト徳利を提げ門口へ出て) どれ、一走り行て来ようわいな。

〽徳利を提げて氣も軽く、酒屋をさして走り行く。(ト小磯思入あつて下手へはひる。)

〽跡に浪六とつおいつ、思案に暮るゝ火ともし頃。(ト浪六思入あつて)

浪六 今代官所から、舅どのを呼びに來たのは、慥に詮議に違ひなし、詞の良にかゝらぬうち、此家を

立ち退き濱傳ひ、呼子ヶ浦より小船にて、いづくの島へかお供なし、脱るゝだけは落延びん。さ

はさりながら不便なは、親には似ざる女房小磯、跡にて我を恨まんが、お主の爲には替られぬ。

〽難儀一時に降りかゝり、身に知る雨の音に紛れ、錠ねち明くれば戸棚より、照葉はその儘

轉まび出いで、(ト浪六思入あつて、戸棚の錠ざんをねち切り明あける、内うちより照葉てりはい出いで、) 照葉てりはい これ眞平しんざい、始終しじうの様子やまじは戸棚とだなにて、とつくり聞きいて居ゐたわいなう。

〽用意よういの一腰こしほつこんで、(ト浪六戸棚なみとだなより脇差わきざしを出だしこれを差さし)

浪六なみ 様子やうす御存ごぞんじある上うへは、此家このやを早く落延おちのびん。さゝ、片時へんしも早く御供おんともなさん。

照葉てりはい して是これよりは、いづれを當あてに。

浪六なみ 其行そのゆく先さきは、もし。

〽さゝやく後に鮫藏さめぞうが、(ト鮫藏窺さめぞうがひ出いで、)

鮫藏さめぞう 落人おちうとやらぬ。

〽落人おちうとやらぬと組附くみつかれ、とやせん隠かくれ身の大事だいじ、みのは幸さいひ身の防ふせぎ、

ト鮫藏組附さめぞうくみつくた振拂ふりはらひ、立廻たちまはりながら有合ありあふ蓑みのを取りあげ、

浪六なみ この蓑笠みのかさで、人目ひとめを忍しのび。

鮫藏さめぞう 何なにを。

〽又またもや組附くみつく鮫藏さめぞうを、振ふりほどいて眞しんの當あて。

ト浪六立廻なみたちまはりながら、照葉てりはいに蓑笠みのかさを着きせ、竹笠たけがさを持もつてよき程ほどに鮫藏さめぞうを當あてる。鮫藏さめぞうどうと下したに居ゐる。

しらぬひ譚

浪六 さ、ござりませ。

〽降り來る雨の足よりも、道を早めて急ぎ行く。

ト雨車浪の音をかぶせ、浪六照葉の手を取り花道へはひる。

〽引違へて脇道より、傘傾けてとつかはと、小磯はわが家へ立歸り、

ト右の鳴物にて、下手より小磯徳利を提げ、酒屋の傘をすぼめながらさし、門口から、

小磯 こちの人、今戻つたわいな。(ト内へはひる) 思ひがけのない雨でござんしたな。や、こちの人、ど

こへ行かしやんした、こちの人く。

〽尋ぬる拍子つまづく鮫藏、

や、鮫藏か。

〽聲にびつくり心付き、

鮫藏 うぬ、浪六め。(ト小磯を見て) や、小磯さんか。

小磯 これ鮫藏、こちの人は、どこへ行かしやんしたぞいなう。

〽いふに鮫藏、打ちうなづき、

鮫藏 あ、遅かつたく、お前の留守の其うちに、あの浪六が戸棚から、博多の女郎を連出して駈落せ

うといふ所を、おれが見附けてやるまいと、争ふはづみに脾腹を打たれ、氣を失つたゆる跡は知らぬが、爰に二人が居ぬからは、手に手を取つて睦じく厮落したに違ひない。これ、お前は欺され嫌はれて、是れでも悔しく思はぬか、おりや悔しくてならぬわい。

焚きつけられて、胸の火の燃ゆるを隠す夫思ひ。

小磯 そんならやつぱりお主というたは、博多の廓の傾城どのか。

鮫藏 お、傾城ともく、二世も三世も約束した、あの浪六が買馴染。

小磯 え、何故さうならば其やうに、わたしに言うては下さんせぬ、そりや聞えぬわいな。浪六どの、

思はず側なる鮫藏が、胸倉取つて引きするれば、

鮫藏 はあ、こりや悟氣の門違ひだ。

言ふも小磯は、耳へも入れず。

小磯 最前わたしがあれ程に、言うたをお前は忘れてか、てかけ妾は男のかうけ、わたしや悟氣はせぬわいな。それを振捨て行かしやんすは、餘りといへば胴慾など、思へば涙かこほれるわいな。是れがやつぱり悟氣とやらか、え、悲しいわいなく。

其ま、そこにどうと伏し、口説き歎くぞ道理なり。

しらぬひ譚

餃藏 お、尤もだノ、大方二人全頃は、どこぞでちんく鴨南登、うまい事をして居よう、此腹いせ

には跡追かけ、二人に恨みを言はつしやれ。

△ 格氣をすゝむる悪企み、小磯は心取直し、

小磯 どう思ひ直しても、傾城どのを呼返し、一つに居て貰はねば、わしが格氣をしたやうで、世間へ

どうも心が濟まぬ、こりや跡追掛けて、迎へて来よう。

△ さす傘のえもいはす、胸のもやく雨雲の、行きては戻りもどりては行き、

ト小磯よろしく思入あつて、

え、結句留めに行つたなら、格氣ちやと言はしやんせうが、是れほどまでに思ふわしに、愛想が盡きての家出なるか、假令どのやうに嫌はれても、わしや離れる氣はないわいなう。え、こりやどうしたらよからうぞいなあ。

△ 思ひ悩みにうつとりと、蟬蛻のからかさ吹きまくる、風は魔風かざはくく、俄に沖鳴

りはたゝがみ。(ト小磯いろく思入、雨車雷の音になり、小磯きつと思入、餃藏是れを見て)

餃藏 やあ、とうくほんまの嫉妬になつたか。

△ 見送る小磯は髪逆立ち、

小磯 假令いづくへ逃ぐるとも、女の一念跡追掛けて、連れ歸らいで置くべきか。

〽物狂はしくわが身をば、われとは知らぬ身をつくし、心づくしの不知火に誘はれ行くこそ哀れなれ。

ト此うち雨車ドロく、雷の音烈しく、小磯向ふをきつと見て、思はず歩むこなしにて花道へはひる。  
鮫藏 これを見てびつくりなし、顛へながら、

鮫藏 やあ、あの勢ひでは二人の奴等を喰ひ殺さうも知れぬ權幕、是れも松浦明神の、嫉妬の咎めかおそろしい、おそろしい。

〽わなく顛ふ其所へ、慾に眼もくら紛れ、いきせき歸る鮫九郎。

トやはり雨車雷の音にて、花道より鮫九郎、尻端折り、骨の折れたる傘を半すばめにさし、駈け出來り門口から、

鮫九 やい鮫藏、居るか、鮫藏々々。

鮫藏 おゝ親方か、何でござんす。

鮫九 これ、浪六は内にゐるか。

鮫藏 浪六どのは落人の、女を連れて今しがた。

しらぬひ譚

鰭九 お、突走つたか。

鮫藏 おいなう。

鰭九 風を喰つて逃けるとも、合圖を打てば近郷近在、出口を固めて網の魚、さうだ。

〽丸太梯子を攀ち登り、障子を開き二階より、はるか沖をきつと見て、

ト鰭九郎上手二階家へ上り、障子を引きぬく、内に太鼓掛けあり、鰭九郎柱に捉まりきつと見て、

あれ、沖に閃く稻妻の、光りに見ゆる二人連れ、呼子の濱へ落行く様子、鮫藏われも跡追掛け、

野郎共に加勢して、必ず彼奴等を取り逃すな。

鮫藏 心得ました。

鰭九 どれ、合圖の太鼓を打つてくれう。

〽撥おつ取つて打ち鳴らせば、四方に聞ゆる太鼓の音。

ト鰭九郎太鼓を打つ、是れにて下座、揚幕にて、同じく太鼓を合す、鮫藏大阪手甲の装になり、

鮫藏 そんなら親方。

鰭九 早く行け。

鮫藏 合點だ。

飛ぶが如くに、

ト雨車雷の音にて鮫藏權を持ち、逸散に花道へはひる。鯨九郎は太鼓を早めて打つ、これにて此道具廻る。

(呼子ケ浦夜の場) 一本舞臺向ふ二段の浪手摺、後黒幕、上手岩組の張物、松の立木、日覆より釣

枝、よき所に水の溜りし岩山、此傍に丸太造りの藁葺の濱小屋、此うちに碇綱板子など入れあり、下手一面に蘆原、總て呼子ケ浦夜の體。やはり、雨車雷の音にて道具留る。

夜嵐に降り來る雨も荒海の、音やはけしき呼子の油、もの、あいろも白砂の、光りを當てに浪六が、照葉を伴ふ目配り氣配り、やうく磯邊に歩み寄り、

ト右の鳴物はたゞにて、花道より以前の浪六、照葉の手を引き、走り出來り、直に舞臺へ來る。

浪六 照葉さま。

照葉 眞平。

浪六 嬉しや爰まで、落延びました。

一息ほつと息をつき。(ト浪六思入あつて)

しらぬひ譚

もうお案じなされまますな、是れから船にて何れへなりとも、御供をなして立退きまする。

照葉 あ、そなたの親切忝けない、よしない主ゆゑ思はぬ苦勞、取分け小磯が昨夜より、親身も及ばぬ介抱の、禮も言はずに立退きしが、嘸や跡にて恨んで居よう、殊にはそなたの舅とやらへ、博多の女郎というたゆゑ、もしやわしを女郎と思ひ、夫を竊取つて連行きしと、思ひ違ひをしやせまいかと、それが心に掛るわいなう。

浪六 あいやく、舅と違ひ女房は、それはく親切者、お主大事と思ひまして、それでお世話をいたしましたを、假令お禮をおつしやらずとも、何のお恨み申しませう、そんな奴ぢやござりませぬ。照葉 其貞節な小磯をも、よしない主のわしゆゑに、捨て、立退くそなたの心、思ひ遣られていとしいわいの。

浪六 はて、わつけもないことおつしやりませ。女房がお主に替へられませうか、いや、益ないことをいふうちに、追手に逢は、御身の大事、少しも早う船にて此場を。

爰の蘆原かしの磯邊、尋ね探せど船もなく。(ト浪六思入あつて船をさがす)  
や、こりや磯に一艘も、今日に限つて船のないは。

途方に暮るゝ折柄に、四方に聞ゆる太鼓の音。

や、あの太鼓は。

照葉 何ぢやぞいなう。(ト照葉浪六に縋る。)

浪六 あれは正しく此浦にて、事ある時に近郷の人を集める合圖の太鼓、扱は鱧九郎がわれくを、捕へん爲の合圖なるか。

照葉 えゝゝゝゝ。

浪六 陸には追手、海には船なく、進退こゝに谷りしか。

照葉 こりや、どうしたらよからうぞいなう。(ト照葉うろくと思入。)

浪六 最早浪六が絶體絶命、追手が來たら腕限り、一方切抜け御供なさん、必ずお案じなされますな。

力づくれど浪六が、如何はせんとつおいつ、口と心のうら傳ひ、夫を慕ふ一念力。

ト揚幕にて、

小磯 こちの人いなう、浪六どのいなう。

呼ばはる聲も物凄く。

浪六 むゝ、わが名を呼ぶは慥に追手、むゝ。

身ごしらへする其所へ、格氣嫉妬に小磯が執着、こけつ轉びつ走り來る、こなたは逃ぐる

しらぬひ譚

出合頭、思はずはつたと行當り、飛びのく折から稻妻に、互ひに顔を見合せて、

ト此うち兩車雷の音にて、花道より小磯髪を亂し、以前の傘の散々に破れしたさし出來り、浪六に行當り、此時雷はげしく、兩人飛びのき透し見て、

浪六 や、わりや女房か。

小磯 こちの人か。

照葉 お、さういふは小磯どの。

浪六 どうして爰へは。

〽おどろく夫に縋り附き、

小磯 え、聞えぬわいなあく。(ト誂への凄き合方になり) これ浪六どの、なぜ隠しては下さんす。

最前も最前でお主さまの娘御を博多の女郎というたのは、心よからぬと、さんへ、僞りいふと言はしやんしたが、やつぱり誠は、お主といふは剛染重ねし傾城どの、それ連退かうばツかりに、わたしに酒を買ひにやり、其間に二人逃けようとは、そりや胸慾ちやく、わいなあ。

〽悔みなけ、ば、

浪六 え、最前もあれ程に、肩を僞るつくり事と、言ひ聞かせ置いたるに、やつぱりわれは照葉さま

を、馴染の女郎と思つて居るか。

小磯 知れたことイなあ。

照葉 あゝ其疑ひは尤もぢや、今も今とて言はぬことか、追手の爲にこのやうに、眞平そちと立退きしを、もしや小磯が女氣に博多の女郎と思ひ違へ、夫を寐取り連行きしと、跡で恨みはせまいかと  
言うた口も靴かぬところ、さらく無理とは思はねど、わしや女郎ではないわいの、疑ひ晴らす  
は此照葉が、肌守りの臍の緒に、菊池の家中何某が乙の娘と書いてある、これ見て疑ひ晴らす  
やいなう。

ト照葉守りを出さうとする。

小磯 あゝもう言うて下さんすな、お主であらうと女郎さんであらうと、わたしや構ひはせぬわいな、  
一生添はうと思ひ込んだ、大事のくわたしの夫、浪六どのさへ戻つてくれ、ば、はて、手かけめ  
かけは男の働き、お主なりと女郎なりと好いた女子でござんすなら、内へ呼んだがようござんす。  
格氣嫉妬は神様のお祟りあるが怖しさに、恨む心はないわいの、さあ浪六どの、其女郎さんと諸  
共に、早う戻つて下さんせいなあ。

浪六 えゝ、まだわが身は疑うてか、人にこそよれ此浪六、女郎狂ひをするものかせぬものか、おれが

心こころも知しつて居ゐようぞい。

眞實しんじつ見みえし夫をとこの詞ことばに、

小磯 あゝ、それ程ほどまで言いはしやんすに、よもや僞いつはりりもごさんすまい、疑うたがうたはわたしが誤あやまり。これこ

ちの人ひと、堪忍かんにんして下くださんせ。もしあなた、御免ごめんなされて下くださりませいなあ。

浪六 すりや、疑うたがひ晴はれたか。

照葉 嬉うれしいわいなう。

小磯 さあ、眞實しんじつあなたがお主しゆうなら、猶更なほさらうち家へお連つれ申まをし、お世話せわをせねばならぬわいな。さあ早はやう戻もど

つて下くださんせいなあ。

浪六 其志そのこころざししは忝かたじけないが、舅しゆうとどのが照葉てりはさまを、お尋ね者もとと知しつたからは、家うちへ戻もどらばお身みの大事だいじ、

それゆゑわが身みに譯わけもいはず、お供申ともまをして立退たちいたは、一先まづいづくの果はてなりと知邊しりべへお預あづけ申まを

す心こころ、あなたのお身みさへ片附かたづかば、直すぐに歸かへつて來きる程ほどに、暫しばしの間あひだこれ小磯こいそ、どうぞ待まつてくれ

いやい。

いふに又またもや角目つのめだ立ち。

小磯 いやく、そりや嘘うそぢやく、わしを振捨ふりすて連つれて退のかうとは、どうでも女郎ぢやうらうに違ちがひない、えゝ

大事の夫を寮取られしか、悋氣嫉妬は神様のお祟りあるが怖しく、せまいと思へど女子の悲しさ。これ此やうに涙が出るわ、やつぱり是れが悋氣かいなあ。

〽かつぱと伏して泣き叫ぶ、波のあはれやさし汐の、寄せ来る如き人ごころに、

ト揚幕にて、ありやくと大聲する。

浪六 や、あの人聲は慥に迫手、見咎められぬ其うちに、少しも早く。

照葉 それぢやというて、小磯を捨てよ。

浪六 はて、小事は構はずござりませ。

〽照葉が手を取り行かんとする、夫に小磯は縋り付き。

小磯 え、假令迫手が来ようとも、こなたは遣らぬ、遣らぬわいなあ。

浪六 え、聞分のない、放せよ。

小磯 いゝや、放さぬよ。

〽はなれがたなき嫉妬の一念、忽ち沖に燃ゆる不知火。

トドロくになり、兩窓蓋をおろし、後の黒幕を切つて落し、向ふ遠見へビイドロ入り詭への不知火仕掛にて燃ゆる。

しらぬひ譚

浪六 御主の難儀も辨へぬ程の者ではなかつたが、扱は女のあさましさに、夫を恨む一念に、神の祟りをうけたるか、え、情なやなあ。

え、情ないといふ夫の顔、恨めしげに打ち守り、

小磯 え、つれないは我が夫、恨めしいは其女、假令この身に明神の、祟りをうけて死ぬるとも、女の一念二人とも、やはか此儘添はさうか。

物狂はしき有様に、仕方なく、浪六が、

浪六 これ程までに言ふものを、聞分けなければ是非に及ばず、もう是れまで、お主の爲には替られぬ。

縋る小磯をはつたと蹴倒し、刀の柄へ手をかくれば、照葉はあわて縋り留め、

照葉 あ、これ眞平、はやまつたことしてたもんや。

浪六 え、お留めなされませすな、お放しなさりませ。

留める照葉を振拂ひ、脅しの刀振りあぐれば、小磯は夫に身を差附け。

ト浪六刀をぬき振上げる、小磯これを見て體を差附ける。此うち始終ドロ、不知火燃ゆる。

小磯 さあ殺さば殺せ、思ふ男の手に掛り、死ぬる程なほ附纏ひ、いつかな添はさぬ添はしはせぬ。

怒りの涙はらくと、髪も心も逆立ちて、

さあ〜殺せ、殺しをれやい。

〽身を拵附くれば浪六が、流石夫婦の恩愛に、振上げは上げながら殺すも不便と刀を納め、宥め賺して脱れんと。

浪六 あゝ殺さうとしたはおれが誤り、何科もない女房を、どうまあ刃があてられう。さゝ、おれが悪いおれが悪いゆゑ、これ此やうに誤る程に、どうぞ心を入替て、わが身は家へ戻つてくれ。これ女房ども、頼むわいの〜。

〽手を下げ頼めば猶せきたち、

小磯 いや〜聞かぬ〜、なんほでも聞かぬ〜。

浪六 すりや何うあつても。

小磯 男を寐取りしあの女、此身の恨みを晴らさにやならぬ。(ト小磯きつとなり、照葉に立掛る、)

照葉 あれえ。

浪六 え、是非に及ばぬ、

〽髻搦んで引き寄すれば、髪も心も亂れやき、夫の刀引き抜いて照葉を目掛け振上る、白刃の稻妻篠つく雨、海はどろ〜鳴神の、物凄くもおそろしけれ。

しらぬひ譚

ト此うち浪六小磯を引据ゑる、小磯引据ゑられながら浪六の刀を抜き、照葉に切つて掛る、浪六照葉を圍ひ是れを留る立廻り、淨瑠璃の切れより雨車、雷の音物凄き詠への鳴物になり、浪六有合ふ衆を取つて立廻り、照葉正面の岩の上へ逃げて行く、小磯追掛け行く、浪六これを留めながら、三人岩を柵に立廻りあつて、浪六衆にて刀を打落し、直に刀を取り、小磯を切らうとする、照葉これを留める、是れにて小磯岩の上より滑り落ちどうとなる、此跡を浪六切附ける。これにて淨瑠璃になる。

かゝる折から數多の漁夫、松明照して追駈け來り、

○ それ、落人殿すな。

皆々 合點だ。

一度に權にて打つてかゝれば、難儀重なる浪六が、一世の瀬戸と切立てながら、

ト八人權にて打つてかゝる、浪六ちよつと立廻りながら、

浪六 さあ、照葉さまには此場を早く。

早くくとせり立つれば、照葉は詮方なくくも、濱邊傳ひに逃け行くを、小磯は跡を慕ひ行く。

ト照葉上手へ逃げてはひる、小磯起上り、此跡を追掛けてはひる。此うち浪六立廻つて、真中にきつと見得、八人左右へ別れて取巻く。

○ 邪魔になる浪六め、こいつを先きへ、

皆々疊んでしまへ。

浪六 何を小癩な。

ト誂への鳴物になり、八人権にて打つて掛り、立廻りあつて、鳴物替り、上手の濱小屋より碇綱板子など出し、これを枷に立廻りよろしくあつて、

多勢を相手に浪六が、火花を散らす其所へ、駈け来る舅の鯨九郎、手馴れし權をおつ取つて、當るを幸ひ打ち立つれば、二人が手並に船子ども、漁る千鳥の騒立つごとく、むらくはつと逃げ散つたり。

ト此うちばたくになり、花道より鯨九郎尻をからげ肌脱き、大阪手甲一本差しにて權をかい込み、走り出で來り、此中へ這入り、權にて漁夫を打倒す大まくしの立廻りあつて、ト鯨九郎は上手へ四人を追込み、浪六は下手へ追込む。

追駈けんとして立戻る、親子ははつたと行當り、(ト兩人後退り舞臺の真中へ來る)

しらぬひ譚

浪六 やあ、舅どのか。

鰭九 聾どの、怪我はなかつたか。

浪六 なに、是れしきに怪我どころか、して、こなさんには何ゆる愛へ。

鰭九 おゝ、照葉どのを助けん爲。

浪六 何と言はつしやる。(ト鰭九郎思入あつて)

鰭九 え、聞えぬぞよ、これ聾どの。(ト鰭九郎よき所へ住ふ。詠への合方になり) 最前あれ程舅がいうたを、こなたは疑うて代官所より戻らぬうち、照葉どのを連出してどこを自當に落ちる氣だ、此近郷近在は大友刑部が領地ゆる、搦めとつて差出せば、褒美の金は望み次第と、代官所より配符を廻せば、慾に目のなき世の中ゆる、我れ捉へんの鶉の目鷹の目、こなたの力で匿ひ置けば知れるは必定、この鰭九郎は日頃悪事に耽るゆる、褒美の金を餘所にして匿ひ置くとはい誰も知るまじ、それゆる最前お主なら匿はんといつたのは、可愛い娘に連添ふ聾に、忠義がさせたいばかりなるぞ、それを疑ひ照葉どのを伴ひ出しと聞きしゆる、南無三寶しなしたり、追手の爲に命や捨てんと、二人を助けん其爲に、追掛け來たる鰭九郎、かほどに思ふも水の泡、あゝ常が常ゆる子にまでも、疑はるゝが口惜しいわい。

僅に残る奥歯を嚙み、悔み涙に暮れければ、扱はさうかと浪六も、大地にはたと兩手を突き。(ト此うち鰯九郎よろしく思入にていふ。浪六思入あつて、)

浪六 あ、親の心子知らずと、左ほどにおほす心を無になし、疑ひ通して家出せしは、此浪六が一生の誤り、腹も立たうが舅どの、是れもお主を大切に思ふから皆起りしこと、忠義の二字に免じられ不孝の罪はお許しなされて下さりませ。

巧みありとも白砂に、頭を埋め詫びければ、

鰯九 さて、聲どのには疑ひ晴れ、舅が盡す真心の今ぞこなたに知れたるか、え、忝けない、して照葉どの、見えざるは、いづくへお落し申せしぞ。

浪六 今の追手に濱邊傳ひ、松浦の方へ行かれしが、案じられるは女房小磯、あなたを女郎と思ひ違へ格氣嫉妬で照葉さまの、跡を追駈け行きし様子。

鰯九 や、それは氣遣はしい、少しも早く跡追掛けてお助け申せ。

浪六 言ふにや及ぶ。

鰯九 さ、早く〜。

浪六 合點だ。

〽跡追掛けんとする所へ、こけつ轉びつ辻け来る照葉、小磯は跡を追掛け來り、

ト浪六身こしらへする、バタ／＼になり、上手より照葉逃げて出來り、跡より小磯追掛け來る、浪六照葉を圍ふ、小磯きつとなつて、

小磯男を寐取りし仇し女め、喰附いてなと怨みを晴らさん。(トドロ／＼にて照葉の側へ歩み寄る。)

照葉 あれえ。(ト浪六へ繩り附く。)

浪六 え、情ない、まだも心が解けぬよな。

小磯 いツかな解けぬ、命を取らねば心は解けぬ。

〽照葉を目掛け立ちかゝれば、中を隔つる浪六が、手出しもならぬ舅の前、それと察して緒九郎。

緒九 おのれお主へ手向ひなす、憎い女郎め、覺悟せよ。

〽腰のだんびら抜くより早く、小磯の肩先切附ければ、うんとばかりに倒れ伏す、又ふり上げる刀の下、其身を枷に浪六が、舅の腕しつかと留め、

ト緒九郎小磯の肩を一刀切る、これにて小磯下手へ倒れる、浪六緒九郎を留めて、

浪六 あゝこれ、舅どの待たつしやれ、日頃に似ざる女房が、格氣嫉妬は神の祟り、小磯の業ではござ

りませぬぞ。

鱧九む、如何にも此ほどよりの沖の不知火、何れの誰が娘ぞと、餘所事に思ひしも。こいつの嫉妬であつたるか、所詮神の祟りにて、最早命のない娘、親が手に掛け殺すがまだしも。

照葉え、是れといふも皆わしゆる、許して下され、これ親御。

〔手を合して伏し拜めば、流石親子の恩愛に、(ト鱧九郎思入あつて、)〕

鱧九あ、思へば女の嗜むべき、悟氣嫉妬の募りしゆる、神の御罰で死ぬるのは、自業自得といひながら、我が子と思へば不便でござる。これ聳どの、所詮命は助からねば、こなたへ頼み今際の名残に、娘と末期の水盃、あの世の土産にしてやつて下され。

〔言ひつゝ、四邊のあわび貝、手に取りあけて、〕

幸ひこゝに鮑貝、片思ひなる娘が盃、岩間に溜る天水を、末期の水にこなたが呑んで、残りば娘に呑まして下され。

〔貝を片手に立上り、合圖の咳二つ三つ、蘆原押分け鮫藏が、岩間へ打込む砒霜石、鱧九

郎は水汲みあけ、

ト鱧九郎立上り、思入あつて咳拂ひをする。是れにて蘆原の藻より鮫藏半身出し、岩の水溜りへ毒薬

しらぬひ譚

を打込む、鱧九郎この水を汲み、

さあ聳どの、こなたが呑んで娘へ跡を。

〽差出せば貝取りあけ、

浪六 あゝ、此世は神の祟りにて、非業に死すとも、未來は必ず、替らぬ女夫ぢやぞ、則ち是れが固め

の盃。

〽ぐつと一口呑み終れば、鱧九郎はとつくと見て、(下浪六件の水を呑む、鱧九郎見て、)

鱧九 おゝ、よく呑んでくれた、残りは娘に吞ませてやるわ。

〽持つたる貝を取落し、

南無三、これは麓相をしたわえ。

〽こぼるゝ水は毒薬に、濱邊の蟹の穴より這ひ出で、一度に死すれば浪六目を附け、

ト鱧九郎鮑貝をおとす。是れにて薄ドロく、指金の蟹出で一時に死ぬ、浪六是れを見て、

浪六 やゝ、今こぼしたる其水の、砂地へ引けば澤蟹の、穴より這ひ出で死したるは。

鱧九 それぞ毒氣のきゝめなるわ。

浪六 やゝ、何と。

〽びつくりなして立上りしが、面色替りて苦痛の體、尻邊にどうと倒るれば、照葉は悲しく縋り付き、(ト浪六立上り、毒の廻りし思入にてどうとなる。照葉介抱して)

照葉 これ眞平、どうぞしやつたかいなう。

浪六 五臓俄に惱亂なし、骨も碎くる苦しみは。若しや呑んだる今の水は。

鰭九 南蠻秘法の毒藥だわ。

照葉 浪六 え、え、え、え。(ト兩人びつくりなす。鮫藏菴籠を背負ひ出て)

鮫藏 親方、まんまと首尾よく。

鰭九 毒を喰つて、はて、い、い、い。

浪六 え、情の詞に騙されて、手盛りを喰ひしか。

〽氣を揉みあせれど毒氣の廻りに、五體自由にならざれば、無念の齒がみなすばかり、照葉

はすかさず浪六が、刀おつ取り立上り。

ト此うち浪六毒氣に苦しむ思入よろしく、照葉浪六の刀を取り、

照葉 眞平の敵、覺悟しや。

〽切つてかゝるを身を躲し、刀抜き取り突放せば、小腕とつて鮫藏が、照葉を其儘引き据ゑ

しらぬひ譚

る、鯨九郎は傍なる岩にどつかと腰打ちかけ。

ト照葉切つてかゝるを、鯨九郎刀を引つたくり、四邊の岩臺へ腰うち掛け、

躋九 やい浪六、じたばたしてもちう叶はぬ、冥土の土産に今おれが、言つて聞かせることがある。

(ト誂への合方になり、) 一昨日の夜の宵月に、ひれふる山の磯端を、通りかゝれば蘆原の、陰に男と女の聲、聞き耳立つればお尋ね者、菊池の家中雪岡が娘照葉と知つたるゆゑ、眞実の金に有り附きしと蘆原分けて出る折しも、月は隠れて薄闇かり、やらじと留めるを振拂ひ、女を連れて逃け行きし男が烈しき働きに取逆したる後影、鞆が姿に似たるゆゑ家へ戻つて窺へば、戸柵のうちへ匿ふ様子、さては鞆にてあつたるか、是れ幸ひと情をかけ足を留めさせ其上で、訴人をせうと思ふところへ、代官所よりの急使ひ、是非なく行きし其跡にて、照葉を連れて落ちしと聞き、合圖の太鼓を打鳴らし出口々々を固めさせ、擒にするは騙すに手なしと、嫉妬の念で榮りをうけ、死ぬる娘を役に立て、薄手を負はせたばつかりで、巧みのあるも知らずして一杯喰つた青榮は、浪六われをおツ殺し、主の娘のこの照葉は、刑部さまへ差上げて、望六次第の裏人を貰ひ、榮耀榮華に暮すのを、草葉の陰から見物しろ。

飽くまで憎き雜言を、聞くにこなたは膝行り寄り、

浪六 え、毒氣の廻りに五體もかなはず、大恩うけし御主人の娘を暗々擒にされしか、ちえ、口惜しや。

「悔み涙にくれければ、主の娘といふ聲の、耳に通じて倒れ居し、手負の小磯はむつくと起き。(ト小磯心附き起上り)」

小磯 え、そんなら女郎と思ひしは、やつぱり誠のお主でありしか、こちらの人堪忍して下さんせいなあ。

「われに歸れば不思議にも、沖にひらめく不知火の一度に消えて元の海、小磯は支ふる鮫藏を取つて突退け照葉を圍ひ、(ト此うちドロくになり、黒幕にて不知火を隠す)」

小磯 え、おいとしいは照葉さま、また恨めしいのは父さん、如何に褒美がほしいとて現在娘の連添ふ男を、親の手づから毒害なす、心は鬼か蛇かいなう。

「歎く娘に目もかけず、

鮫九 親子の義理を辨へて、今の浮世が渡れるものか。やい鮫藏、われは照葉を葛籠へぶち込み、刑部さまへ連れて行け、聳や娘のかたを附け、褒美はおれが取りに行くぞ。

鮫藏 む、承知しました。さあ女郎め、うしやあがれ。

襟上取つて引立つれば、

照葉 え、言はうやうなき悪人どもの、手籠めになるか、口惜しいわいなう。

鮫藏 はて、やかましいわえ。

小磯 あ、これ、照葉さまは、やらぬ。

支ふる娘がえりがみ取り、鮫九郎は氣をいらち、

鮫九 こりや鮫藏、邪魔せぬうちに。

鮫藏 お、合點だ。

情容赦もあらなはにて、くるく巻きに葛籠へ打込み、手早く鮫藏しつかと背負ひ、いちあし出して駈り行く、

ト此うち鮫藏照葉を有合ふ繩にて縛り、葛籠へ入れ、これを背負ひ波の音にて、逸散に花道へばひる。

浪六 え、暗々お主を連れ行かれしか、跡追掛けんもこの苦痛、え、口惜しいわいなう。

小磯 これ、こちの人、氣遣ひさしやんすな、手負ひながらも女の一念、お前に替り跡追掛け、取戻さ

浪六 出来した女房、少しも早く。

いで置くべきか。

小磯 合點ちやわいなあ。

〽手負ながらも一念力、跡を慕うて駈行けば、(ト小磯思入あつて逸散に花道へはひる。)

鰭九 え、親にさからふ罰當りめ、うぬ、待ちやあがれ。

〽行かんとするを眞平が、やらじと繩り留むる折柄、鰭九郎が懐より、取落したる一卷に。

ト鰭九郎行かうとする、浪六留める、此時鰭九郎系圖の一卷を落す。

浪六 や、此一卷は。

鰭九 それを。

〽取りにかゝるを振拂ふ、はずみに海へ打ち込めば、波にゆられて流れ行く。

ト件の一卷をうしろの波間へ打ちこむ。

やゝゝゝゝ、大事の系圖を。

浪六 はるかか海へ。

鰭九 これもうぬゆる、えゝいまくしい。

〽五體叶はぬ眞平が、えりがみ取つて岩角より、海の深みへ打込みて、あと白浪と、

ト鰭九郎浪六を浪手摺の内の切穴へ打ち込み、水煙リパツと立つ、浪の音三重にて、鰭九郎逸散に花

しらぬひ譚

道へ走りはひる。波の音にて藁葺の小屋、蘆原を引いて取る。雨落より一面の浪手摺を出し、よき研へ誂への岩臺を押し出す。

追うて行く折から空に降出す、雪はさながら八寒地獄、紅蓮の波の逆立ちて、呵責に苦しむ罪人より毒氣に弱る眞平が、一卷を口に啣へ波間を潜りて泳ぎ出で、傍の岩に攀ぢ寄り、苦しき息をほつと吐き、

ト浪の音烈しく、切穴より浪煙りバツと立ち、浪六好みの鬘、口に一卷を啣へ、岩臺へ這ひ上り一卷を取り思入あつて、

浪六 ちえ、残念や、只一滴の毒藥にて五體叶はず此儘に、底の藻屑と成果つる、此眞平がいまはの際に、不思議に手に入るこの一卷。

〽 緒九郎が所持なせしは、合點行かずと押し開く、後に窺ふ二人の船子。

ト此うち上下の切穴より、以前の船頭二人泳ぎ出で、岩臺の後より這ひ上り、

船頭 その一卷を、こつちへ渡せ。

〽 こつちへ渡せと組附くを、苦痛を怵へ眞平が、一度に取つて投げ退けて、

ト兩人かゝるを、浪六双方へ投げのけ、一卷を見て、

浪六 やゝ、こりや龍造寺高頼が執權、小島典膳が家の系圖。

船頭 何を。

有合ふ汐木追取りて、打つて掛るを身を躲し、手早く一卷まき納め、隙を窺ふ兩人を取つて引しき捻ぢ伏せて、(ト浪六兩人を相手に立廻りあつて、)

浪六 扱は先年博多にて、七草官丁禮が討滅ばされし其折に、討手を脱れ逃け延びし、小島渦丸とい

ひし海賊は、龍造寺の餘類と聞きしが、すりや鱸九郎にてあつたるか、こりやよいものが手に入つたわい。

船頭 その一卷を。

振りほどいて双方より、系圖を目掛け組附くを、毒氣に弱る眞平が、こゝを先途と打合ひ組合ひ。(ト此うち立廻り、文句の切れより、床と下座誂への合方になり、)

浪六 證據になるべき此一卷、菊池家へ差上げて鱸九郎を討取らせ、我が恨みを晴らさんとは思へども翅なければ叶はぬこと。

船頭 それをこつちへ。(ト立廻つて、)

浪六 此上は腹かツさばき、魂魄この土に止まつて系圖を差上げ、照葉さまの御身の上。

しらぬひ譚

船頭 なにを。(トまた立ちかゝる。)

浪六 斯かる例は後醍醐帝隠岐の國へ左遷の折柄、秦の武文といひしもの、主人の爲に命を斷ち、其一念蟹と化し、御息女を救ひしと聞く、それに倣つて命を斷ち、主人を守護なし奉らん。

持つたる刀取直し、がばと突立て引き廻せば、船子はすかさず一卷を、奪ひ取るを眞平は弓手に引据ゑ、めてに我が五臓を探り引き出し、虚空へ目がけ投げ附くれば、忽ち一つの陰火となり、怪しの鷗あらはれ出で、船子が持ちし一卷を、啣へて陰火ともろともに、西の方へと飛び行きしは。

ト此うち浪六よろしく腹を切り、臍腸を掴み投げ附ける。是れにてドロ／＼になり、焼酎火燃え、詭への鷗一卷を啣へ舞ひ上る、浪六これを見てにつたりと思入、兩人組附くを浪六切倒す、兩人左右へ見事に轉る。

あやし怖ろし、

ト大ドロ／＼になり、件の鳥と詭へのビイドロの人魂を向ふ正面へ引いて行く、是れと一時に、浪六喉をつらぬき、岩臺の上より轉り落ちる、よろしくドロ／＼三重にて、

# 八幕目大結

## 阿彌陀寺の場

(役名) 鳥山秋作、雪岡の娘照葉、龜谷光行の家臣神崎右内、同玉島左司馬、漁夫鮫藏、侍、捕手  
漁夫、鱒九郎娘小磯、漁夫鱒九郎實は海賊小島渦丸、龜谷多門之助光行等。)

(淺葱幕の場)

本舞臺一面の淺葱幕、雪の積りし松の釣枝、雪おろしにて幕明く。とやほり雪お

ろしにて、花道より黒四天の捕手○△□◎の四人蓑笠にて出來り、直に平舞臺へ來り、

○ 如何に方々、われくは此度大友刑部さまの内意を受け、雪岡冬次郎の妹照葉、まつた弟力松

が落行く先きを詮議の役。

△ また二つにはお家の執權、鳥山豊後が忤秋作、いつぞや宮島試合の折、父豊後に勘當うけ、行方

も知れずなりたる所。

□ 跡にて様子を窺へば、親子兩人言ひ合せにて、蜘蛛の妖術行ふと聞く、大友宗隣が娘若葉姫、

かれが行方を詮議の由。

◎ 鳥山親子は刑部さま春之助さまに邪魔の奴等、それゆる若しも見當らば、討つて捨てよと内意の

言附。

しらぬひ譚

○ 何にもせよ、照葉なり秋作なり搦め取つて差出せば、褒美の金は望み次第、何れも油断しめざる

な。

三人 心得ました。

○ ござらつしやい。

トやはり雪おろしにて四人上手へはひる。知せにつき、淺葱幕切つて落す。

(雪幕の場)——本舞臺あとへ下げて一面の雪幕、左右雪の積り、松の立木、同じく釣枝、よろしく

道具留る。と、誂への鳴物になり、花道より龜谷多門之助光行、刺立て椿茶筌、野袴ぶつさき羽織大

小、簑、塗下駄、竹笠を騎し出来る、跡より漁火姿の忍びの者一、二一本さしにて窺ひ出来る、ドロく

になり、本舞臺へ陰火燃ゆると、前幕の鳴舞ひ下りる、是れを見て、

光行 はて、いぶかしやなあ。

一二 光行覺悟。(ト掛るを立廻つて一を踏まへ、二を捻ぢあげる。)

光行 今龜谷多門之助光行が、管領職のお許し受け、男體せし元服に、九州船見の嚴命蒙むり、其地

の様子を探らん爲、従者も連れず只一人、來かゝる路次を妨ぐる怪しき二人の曲者に、目先きを

遮かきぎる一つの陰火いんくわ、殊ことには鷗からめの何なにやらん口に啣くはへて舞まひ下おりしは、凶事きよじか吉事きらじか何なんにもせよ、怪あやしき此場このはの振舞ふるまひぢやなあ。

ト二を投げ退ける、一跳はねかへし掛かるを、ちよつと立廻たちまつて兩人りやうじんを投なげる。本舞臺ほんぶたいへ來きたり陰火いんくわへ思入おもひいれ兩人りやうじんは後うしろより窺うかがひ來きる、光行みつゆき思入おもひいれあつて、

兩人りやうじん覺悟かくご。  
なに、菊池きくちが家臣かしん雪岡ゆきおかの若黨わかたう、村岡真平むらおかしんぺいが我われに告つぐる仔細しさいありとか、む。。(ト光行みつゆき思入おもひいれ)

ト兩人りやうじん左右さゆうより切きつてかゝるを、光行みつゆき鐵扇てつせんを持もち兩人りやうじんを相手あひてに立廻たちまりながら、陰火いんくわへ思入おもひいれあつて、物ものを聞きくこなし、

光行みつゆき何なんと、先年せんねん父秀行ふひでゆきに滅ほろぼされし異國いこくの海賊かいそく、七草官丁しちくわんちやう禮れいが餘類よらふの者もの、この四邊かたじに住居ぢゆうきよをなすと  
か。

兩人りやうじんうぬ。(ト切きつてかゝる。)

光行みつゆきされば、かねて光行みつゆきが家いへの仇かたにならんと祭まつし、寄々よりく詮議せんぎなす折柄せりから、さては此世このよを去さりし業通さふつうにて  
我が胸中きょうちゆうを察さつし、賊徒そくとの餘類よらふを知らせしよな。

兩人りやうじん何なんを。(ト又立掛またたちかるを、聞きくことあつて、)

しらぬひ譚

光行む、鷗の啣へし一卷は、其曲者の系圖とな。どれ、(ト鷗光行の側へ来る、光行一卷を取り、開き見て)こりや龍造寺高頼が家臣、小島典膳が家の系圖、ありや島山の殘黨よな。(ト聞くことあつて)なに當國阿彌陀寺にて、その曲者が我が手に逢ふとか、よくぞ知らせし村岡眞平、その功に愛て汝が主なる、雪岡冬次郎が家名相續の儀、某兄へ執成し得させん、迷はず成佛得脱せよ。

兩人覺悟。

トこれにて、ドロく陰火消え、鷗飛び行く。

トまた切つて掛るを、鳴物替つて烈しく立廻り、ト、光行鐵扇を啣え左右へ一時に當てる、兩人立ちすくみになる、光行鐵扇を持ち、思入あつて、

光行 今眞平が魂魄の、われに告げたる賊徒の餘類、討ち亡はす、(ト兩人を扇にて一時にかへす、兩人見事に轉る。)手始めなさん。

ト思入、ばたくになり、下手より、右内左司馬野袴ぶつきき羽織、大小草鞋装にて出來り、下手へ控へ、

左司 我が君、是れに、  
右内 お渡りありしか。

光行 お、左司馬右内か、待兼ねしぞ。

左司 御跡を慕ひ見え隠れに、御供なして参りし所、此あとの松原にて、君の御姿を見失ひ、右内 そこよ爰よとお尋ね申し、それゆゑにこそ思はぬ遅刻。して、我が君には、人は是れよりいづくに。

光行 當國阿彌陀寺へ参詣なせば、兩人共に供いたせ。

兩人 畏まつてござります。(ト此時一、二窺ひ寄つて)

一 光行 覺悟。(ト切つて掛るを、左司馬右内兩人隔て、立廻りて一時に引敷き)

兩人 君に刃向ふ、此奴等は、

光行 道を遮ぎる曲者なれば、斬つてしまへ。

兩人 はッ。(ト一、二が脇差を取り見事に斬る、光行見て)

光行 お、賊徒詮議に幸先よし。(ト此うち左司馬右右は刀を捨て手をつかへ)

兩人 然らば、我が君。

光行 兩人來りれ。

兩人 はあ——。

ト時の太鼓になり、行列三重やうの鳴物にて、光行先きに左司馬右内附き上手へはひる。知せに附き正面の雪幕切つて落す。

(阿彌陀寺塔下の場)

本舞臺三間の間高足の二重、三方折返し三尺の本棟附、正面明けたての月、

平瓦葺の屋根附、此端に寶鐸をさげ、總體朱塗り、極彩色鍍金金物附き、總て三重の塔下の體。左右

寺めいたる躰、此後松の立木、日覆より同じく釣枝、此道具一面に雪降りの好みよろしく道具納る。

と、雪おろしにて禪の勤めになり、日覆より雪降り、ばたくにて、花道より前幕の鮫藏葛籠を背負

ひ出来る。是れと同じく小磯亂れし髪を襟元にて結びし體、花道にてちよつと立廻り、直に本舞臺へ

來り、小磯鮫藏を支へて、

小磯 これ鮫藏、その葛籠を、どうぞわしにたもいなう。

鮫藏 え、しみしつこい小磯さん、假令何と言はんしても、親方から預つた大金になる此代物、どうし

て是れが渡されう。

小磯 そりや尤もぢやが、これ鮫藏、この小磯が一生の頼み、手を合せて拜むほどに、どうぞわしにく

りやいの、情ぢや、頼むわいなう。

鮫藏 成程それ程までに言はつしやるなら、うんと言ふまいものでもないが、はて、そこが魚心ありや

水心、この鮫藏が首ッたけ惚れぬいて居る小磯さん、お前の頼みもうんといふ其代り、またわしが頼みも、うんといふなら渡しませう。

小磯 さあ、それは。

鮫藏 それがいやなら、こつちもいやだ。(ト行きかゝるを小磯留め、思入あつて)

小磯 あゝこれ鮫藏、氣の短かい、誰もいやぢやと言ひもせぬものを。

鮫藏 そんならわしの言ふことを。

小磯 さあ、それは。

鮫藏 いやなら女を連れて行かうか。

小磯 さあ、それは。

鮫藏 言ふこと聞か。

小磯 さあ、

鮫藏 さあ、

兩人 さあくくく。

鮫藏 いやかおうかの、返事をさつしやれ。(ト小磯ちつと思入あつて)

小磯 こりやもう、是非に及ばぬ。(ト鮫藏の刀へ手をかける、鮫藏留めて)

鮫藏 こりや、脇差へ手を掛けて、どうするのだ。

小磯 さあ。

鮫藏 この鮫藏を切る氣だな。こりやもう、可愛さ餘つて憎さが百倍、邪魔立てすりやあ生けては置かぬぞ。

小磯 さういふおのれも、生けては置かれぬ。

鮫藏 何を小癪な。

ト振拂つて行き掛る、小磯足へ取附く、これを隙退ける拍子に、鮫藏どうとなる。小磯有合ふ制札を取つて打つてかゝる。鮫藏葛籠を下へ置き脇差をぬき立廻り、雪おろし三味線入り禪の勤めになり、小磯鮫藏の脇差を打落し、直に取つて切つて掛る。是れにて鮫藏塔へ駆け上る。小磯追掛け行き、立廻りあつて、ト、鮫藏扉を開き内へ逃げ込む。小磯追掛けはひると、時の鐘雪おろしはた〜になり下手より、覆面頭巾、達附、大小蓑笠にて姿を隠せし者出来る、跡より以前の捕手〇〇〇〇ひ出る、件の武士葛籠より出掛りし振袖へ目を付け、思入あつて立ちかゝる、此時捕手〇〇〇〇寄り。

捕手 捕つた。

ト打つてかゝるを左右へ投げ退け、裏向にて塔の上を見上げてきつと見得、知せに付き、いつもの山門  
追上げの鳴物になり、捕手を相手に立廻りながら、此道具ゆつくりと廻る。

(塔上の場) 本舞臺二間常足、三重塔の二重目、三方折廻し、前の分を一間鍔金物付き、折

返しの高欄、上下瓦家根、雨落より霞をせり出し、爰に小磯鮫藏立廻りの見得にて道具出る。と、雪

おろし詠への鳴物になり、雪しきりに降る、兩人立廻りよろしくあつて、ト、鮫藏叶はす高欄を越え

飛び下りし思入にてせり穴へ飛込む。小磯同じく高欄を越え、せり穴へ飛込む。此時はたくになり、

正面の扉を蹴開き、前幕の鯨九郎出で、高欄へ足を踏みかけ、きつと見おろし。

### 鯨九

え、親の邪魔する憎い女郎め、息の根止めてくれんと思ひ、駈けあがつたる此三重、鮫藏諸共

二重めより遙かの下へ飛び下りて、體は微塵に碎けしならん、是れで足手まとひはない、刑部さ

まへ落人の照葉を伴ひ褒美の金、雪岡一家の枝葉を絶ち、七草官丁禮が無念に死したる魂魄の

今ぞ恨みを晴らしてくれん。あら、心地よや、嬉しやなあ。

トよろしく思入、また知せに付き、追上げの鳴物になり、此道具廻る。

(元の塔下の場) 本舞臺元の塔の下の道具に戻る。と、爰に小磯鮫藏の脇腹へ、刀を突込みる

り居る見得、鮫藏苦しみ、

鮫藏 え、女と侮り、不覺を取りしか口惜しい。

ト小磯刀をぬく、鮫藏バツタリ倒れる、直に乗掛り止めを刺す、鮫藏アツと苦しむ、小磯これにてホ

ツと思入あつて、

小磯 あ、有難や、神や佛のお助けにて、塔の上より飛び下りしに、どこに一つの怪我もなう、殊には

邪魔なこの鮫藏、しとめし上は照葉さまを、少しも早う伴うて、何れへなりとも落延びん。お、

さうぢや。(ト葛籠へ立掛る、此時扉を開き、鮫九郎つかくと出て小磯を引き退ける) や、と、さんか。

鮫九 娘、わりやあ命があつたか。(トびつくり思入。)

小磯 もし、此葛籠のうちの照葉さまは、どうぞわたしに下さんせ。

鮫九 え、馬鹿なことを吐かしやあがれ、大金になる此の女、われに遣つてたまるものか、さあ、そこ

どけ、どけ、え、どきやあがれ。(ト小磯を蹴倒し) 是れから褒美を、貰はにやあならぬ。

小磯 いえ、何と言はしやんしても、是ればつかりは渡されぬわいなあ。

鮫九 うぬ、さうぬかしやあ命がねえぞ。

小磯 さあ、命がなくなばいざ知らず、息あるうちは遣られぬ、遣られぬわいなあ。

鯖九 え、面倒な、放しやあがれ。(ト小磯の留めるを振拂ひ脾腹を蹴る、是れにて小磯うんといつて倒れる。

鯖九郎是れを見て、此間に早く。(ト以前の葛籠の蓋を取り、引き出さうと手を差入れる、内よりその手をきつと取る。鯖九郎きつと思入。此時葛籠四方へ開き、内に秋作、前幕の装へ照葉の振袖を着て居る。鯖九郎の手を拂ひきつと見得、誂への合方になる。) やあ、わりや照葉と思ひの外。

秋作 烏山秋作照患なるわ。

鯖九 や、う、う、う、どうしてわれが此中へ。

秋作 最前こゝまで大友刑部が、下知をうけたる捕手の奴ばら、照葉を入れしこの葛籠を、奪ひ行かんとなしたる折柄、思はず此場へ來かゝりて、照葉を救ひ、猶も汝が悪逆を、見出さん爲に入替り葛籠に忍びし此秋作、何と膽が潰れたか。

鯖九 お、十が九つうまゝと、行きしを娘が邪魔せしばかり、褒美の金を失ひしか、此腹いせは秋作め、うぬが首を刑部さまへ持つて行き、褒美の金にせにやならぬ、覺悟極めてそれへ直れ。

秋作 む、は、う、う、う、身の上知らぬ其雜言、此兩腕の無くば知らず、わい等の手に合ふ秋作ならず、

馬鹿なことを。

鯖九 小癩なわッばめ、いで、其首を落してくれん。

しらぬひ譚

秋作 おゝ、見事某が首とるか。

鯖九 おんでもないこと。(ト抜きかけるを秋作留めて)

秋作 何を、(ト誂への鳴物にて、ちよつと立廻りあつて、鯖九郎錦の袷紗に包みし古城の繪圖を落す、秋作手早く

取りあげる、是れにて袷紗取れ、繪圖を見て、)何と、「島山古城の繪圖面、」是れは。

鯖九 南無三。(ト鯖九郎繪圖を取り、懐中する。)

秋作 むゝ、漁夫に用なき古城の繪圖面、所持なす上からは、汝こそは正しく木名ある曲者、さあ其本

名を名乗つてしまへ。

鯖九 いゝや名乗る名は持たねえ、古城の繪圖と見たのは僻目、こりやあ海上案内の、淺瀬を記した漁

夫の書物、呼子ヶ浦に隠れない、鯖九郎といふ立親仁だわ。

秋作 すりや、名乗る名は持たぬとな。

鯖九 知れたことだわ。

秋作 むゝ、知らぬとあらば漁夫にして、其海上の地理案内、此場に於て身共に見するか。

鯖九 さあ、それは。

秋作 但し其身の、本名名乗るか。

緒九 さあ、

秋作 繪圖を見するか。

緒九 さあ、

秋作 さあ、

兩人 さあくくく。

秋作 な、何と。

緒九 むむ。(トつかへる。此時以前の光行等出で、)

光行 さあ、最早如何ほど争ふとも、脱れぬ證據はこの一卷、見覚えありや小島渦丸。

ト以前の系圖の一卷を見せる。

緒九 や、其一卷は家の系圖、どうしてそれを。

光行 ほ、お、最前是れへ参る道にて、村岡眞平といへるもの、魂魄中有に迷ひ居て、汝が素性を委し、

く告げ、我れに與へし系圖の一卷。

右内 何と脱れはあるまいがな。

緒九 や、(トびつくりする、是れにて小磯心附き、)

小磯 え、そんなら夫眞平との、魂魄中有に迷ひ居て、恨み重なるとゝさんの、素性を委しく話せしか。

左司 お、如何にも異國の海賊、七草官が一味なりし汝こそ、

右内 誠は龍造寺高頼が、餘類なりと委しき告げ、  
秋作 扱こそ所持なす古城の繪圖面、最早脱れぬ鰭九郎。

光行 其の本名を、

皆々 名乗つたく。

鰭九 ちえ、口惜しや、斯くなる上は包み藏すは卑怯の至り、如何にも、我こそは肥前の國島山の城主  
龍造寺高頼が家臣、小島典膳が一子渦丸と言ひしもの、思ひ出せば其昔島山落城の折柄は、我  
いまだ八歳にて、乳母諸共に彼處を落延び、長門の國にて人と成り、七草官丁藤に從ひ強盜みな  
せしも二十年先き、彼れ博多にて亡ぶる折、運よく討手の船を切抜け、父が舊地の懐かしく此肥  
前へ再び歸り、住家となせど誰あつて、我を賊徒と白浪の、よせて歸らぬ身の年波、今日まで露  
顯せざりしに、今ぞ天命盡きたるか。え、殘念やなあ。

秋作 扱こそ小島典膳が、餘類のものにて、

皆々有りしよなあ。  
鱧九 斯く名乗る上からは、片ツ端から死人の山だ、観念なせ。

皆々 何を小積な。

光行 それ、ものども。

六人はッ、動くまいぞ。

ト侍六人左右よりばらくと矢袋にて取巻く、小磯つかくと行き、鱧九郎を圍ひ、我が身を桶に思入あつて、

小磯 あゝもし、まあく待つて下さりませ、悪人なれど親は親、今殺さるゝを子の身として、何と見

捨てゝ居られませう、どうぞわたしを替りに殺し、とゝさんの命をお助けなされて下さりませ。

もし、拜みます、拜みますわいなあ。(ト小磯皆々を拜み廻り、鱧九郎是れにてよろしく思入あつて、刃

を取直し腹へ突立てる、小磯びつくりして、) やゝゝゝゝ、とゝさんには、こりや何ゆゑに、腹切らし

やんすぞいなう。

ト總り泣く、竹筒入りの合方になり、

鱧九 あゝ心に連れて身は賤しと、世の諺も今ぞ知る、九州に猛威をふるひし小島典膳が嫡子と生れ

無念に滅びし君父の仇を、今日の今まで餘所になし、此の日本に生れながら異國の賊に一味なし強慾非道の惡事を行ひ、剩へ賊徒の張本丁禮が仇を報はんと、雪岡一家を附けねらひ、娘の款きも顧せず、聳の眞平を毒害なし、縁に繋がる主人の娘照葉を捉へ褒美を取らんと、極重惡人此親を親と思つて今娘が、命にかはる孝行に、先非を悔む緒九郎、身の言譯のこの切腹、大罪人の娘ながら生れ勝つた孝行者、何卒かれが命をば、お助け下され光行公、これぞ一つの御願ひ。

これ娘 われも共々お願ひ申せ。

小磯 いえく、夫に別れ親に別れ、何樂みに存へませう、照葉さまに恙なければ、此世に思ひ置くことなし、わたしも共に死出三途。

ト小磯死なうとする、ばたくにて、下手より前幕の照葉、下着装にて出來り、小磯を留め、

照葉 これ小磯、早まりやんな、まあく待つてたもいなう。(ト袖にて白刃を押へる。)

小磯 いえく、放して下さりませ、

秋作 こりや、死する命を存へて、親夫の菩提の爲、其身は尼とも姿を替へ、是れなる照葉を伴つて、鷲の蹴爪に掛けられて、行方知れざる力松が、生死を見届け、忠義を立てよ。

小磯 すりや、死ぬるにも死なれぬかいなあ。

照葉 其歎きは尤もながら、そなたばかりか此わしも、親兄弟には死別れ、又秋作さまにはお望みあつて、諸國をお廻りなさるれば、暫しのうちの生別れ、世に便りない此照葉、どうぞ力になつてたもいなう。

小磯 生き存へる上からは、夫眞平に成り替り、あなたの御先途見届けませう、必ずお案じなされますな。

照葉 え、嬉しいわいなう。

鱒九 すりや、娘が命は、お助け下されんな。

光行 お、汝が健氣な切腹に、罪はそれまで、咎はない。

鱒九 え、忝けない是れにて思ひ置くことなし、娘が命お助けありし、御恩報じは此の繪圖面、いざお取次ぎ下されい。(ト懐より以前の繪圖を出し、左司馬に渡し、左司馬開き光行に見せ)

左司 我が君、御覽なさりませ。

光行 む、龍造寺が居城の繪圖面。

鱒九 それこそ我が父典膳が、系圖と共に譲りし繪圖面、萬に一つも行末に、用ひたまはん事あらば、死しての後の何より悦び。

秋作 實に傳へ聞く島山は、九州無双の要害なりとか、もしや謀叛の族もありて、かしこに籠ることあらば。

光行 われ先陣を乞ひうけて、此繪圖面にて地理を質し、比類なき手柄をなさん。

左司 其時こそは龍造寺の、家名を君に願ひ上げ、

右内 菊池の家の幕下となさん。

緒九 ちえ、忝けない、最早近づく此身の知死期、秋作どのには介錯頼む。

秋作 お、いふにや及ぶ。(ト秋作立掛り)さりながら、情はなさけ仇は仇。

光行 異國の賊徒小島渦丸。

左司 君の御手に討ち取つたり。

右内 今ぞ此身の、

緒九 いまはの名残。

照葉 あこれ。(ト照葉を押へ秋作に向ひ)聲かくるまで、

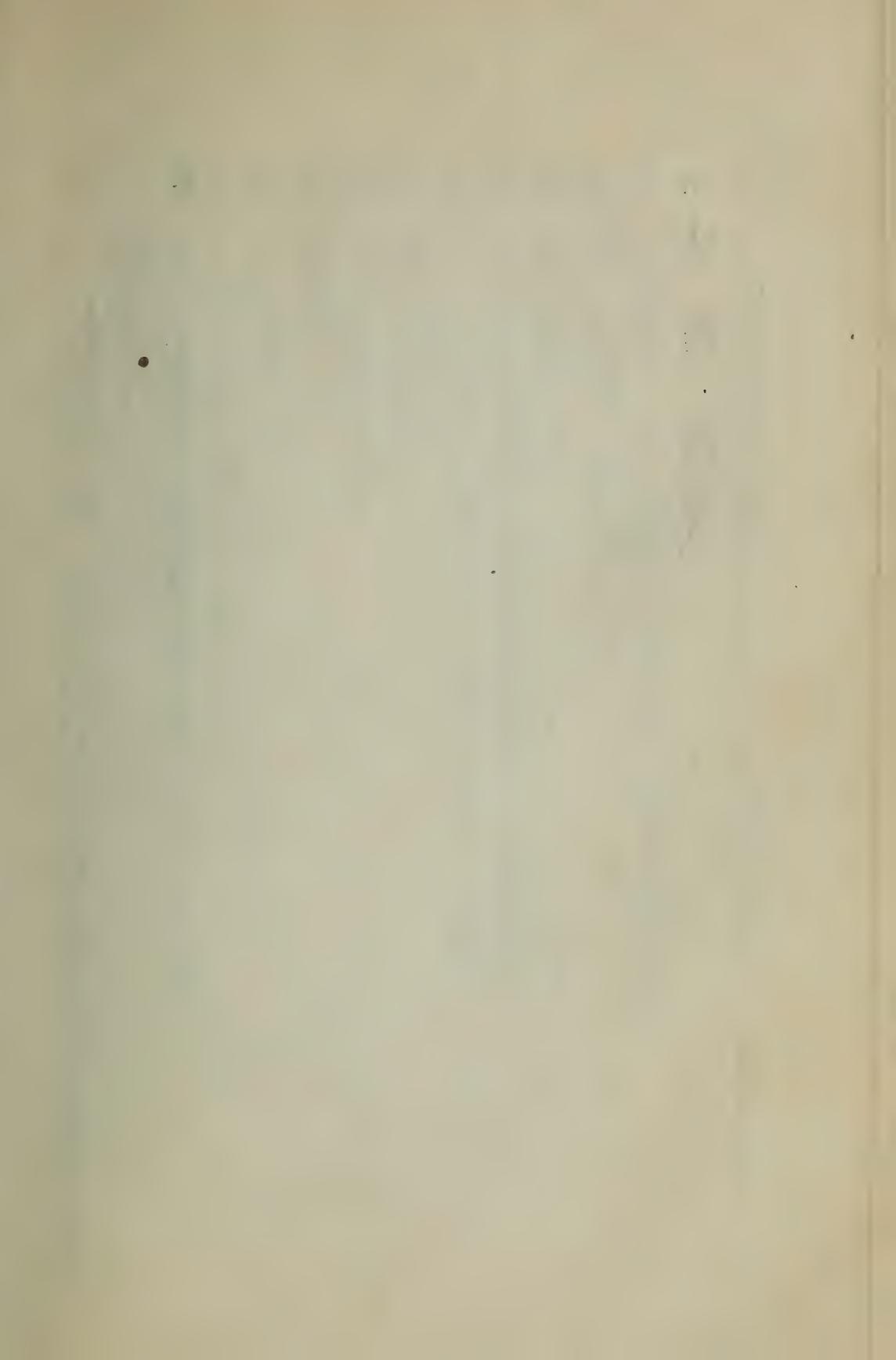
ト片足踏出し、刀へ諸手を掛け、秋作は刀を振りあげる、一時に木の頭、

介錯無用。

秋作 えい。  
トくび首うを打ちし音か、知しせらに附つき打うち込みこみ。  
のうち内うちにて、  
トひれ鱧らうひま九郎引廻す、小磯こいそハツと泣なき伏ふす。皆みな々なくよろしく、引張ひりの見み得え、カケリまにて幕まく引ひき附つける。幕まく

初日  
白 縫 譚 (終り)

しらぬひ譚



寶晉齋の秀吟に

梅が香や

花子の家も

祝かるし

此句を種に二番目へ

書綴りたる狂言は

昔噺の根なし事

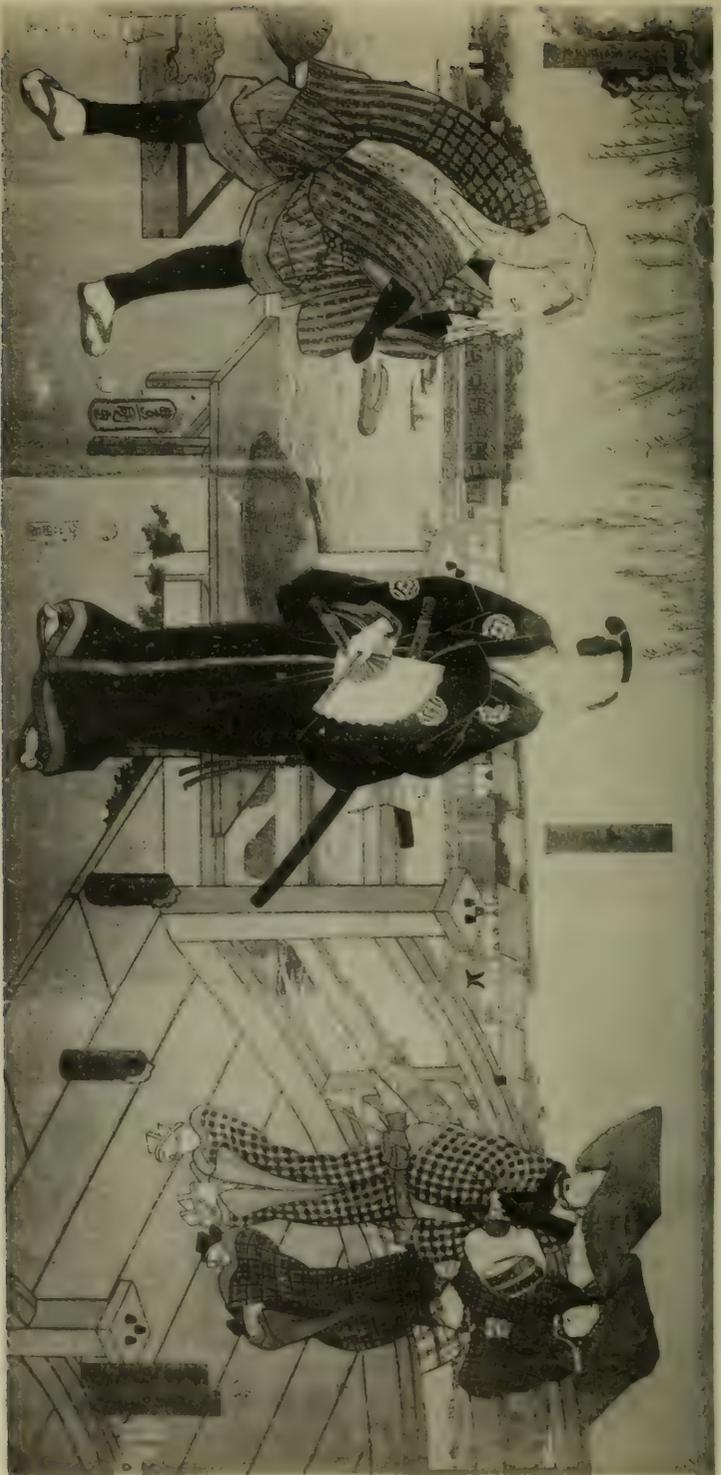
夢 怨 蝶 鳥 追

、「雪駄直し長五郎」は安政三年三月、市村座に於て書き卸された、作者四十一歳の時である。此の作は、四世坂東彦三郎が悴の竹三郎に五世彦三郎を譲り、自らは坂東龜藏と改名した時の興行に際して、二番目世話狂言として作し、「大出来大當り」との評を得た。吾妻橋でおこよを源之丞が見初めるの場は、目の覺めるばかりに美しく、或は多田の薬師の石置場で長五郎と半次とが主膳を殺害する、殺しの場などが評判であつた。が、尙此の作は作者に取つて特に記念すべきもので、作者は此の年以來河原崎座より轉じて市村座の立作者となり、其後十年間世話物作者としての手腕を揮ふに至る、その第一作であり、且つ安政の大震後、最初に江戸の舞臺に現はれた新作だからである。前版には省略した「お長隠家」の一場を増補し得たことを特記しておきたい。

書卸しの時の役割は、坂東龜藏(雪駄直し長五郎)、坂東彦三郎(阿古木源之丞)、尾上菊五郎(女太夫おこよ)、熊坂お長、甚兵衛娘お關、關三十郎(梶井主膳)、河原崎權十郎(山崎屋與五郎)、淺尾與六(小手柄半次)、駕籠屋甚兵衛、市川新升(盜賊野手の三次)、中村歌女之丞(藤屋吾妻、山崎屋娘おてる)、關歌助(尼妙貞)、坂東又太郎、小家頭喜六、荒川三左右衛門)、坂東村右衛門(山崎屋淨閑、家主市郎兵衛)、松本國五郎(山崎屋の番頭權九郎)等であつた。挿畫にしたのは龜井戸豊國筆の錦繪と、大正八年十二月市村座上演の際の寫眞で、六代目菊五郎の長五郎に坂東三津五郎の源之丞である。

大正十三年七月

編者誌す





夢結蝶鳥追 (雪駄直し長五郎) 五幕

序幕

鎌倉花水橋の場  
腰越庚申の場  
笠目谷小屋の場

〔役名〕 雪駄直し長五郎、人相見梶井主膳、阿古木源之丞、鳶の者下駄の市、女太夫おとら、山崎屋與五郎、三原傳藏、小屋頭喜六、山崎屋手代權九郎、判人佐渡七、中間可助、同角助、猿廻し佐兵衛、非人とつこの胴六、同鳥の羽藏、同ごもくのごみ太夫、同大森しゆろ八、同島田ふり七。雇ひかかアお鍋、女太夫おこよ、藤屋吾妻、松葉屋女房お高、山崎屋丁稚久太等。〕

(花水橋の場) 本舞臺三間上手より正面へかけ、橋の登り口晝心に飾り、向ふ稻瀬川の遠見、浪手摺、上の方落咄しの建看板、開帳札、柳の立木、日覆より釣枝、下の方葎養張の出茶屋、田中屋といふ掛行燈、よき所に臺を据ゑ、吹替の雪駄直し古き笠を冠り仕事をして居る、出茶屋の床几に○△□の町人の仕出三人、一、二の素見の仕出二人履物を直させて居る。總て水水橋の體、鳥追唄通り神

雪駄直し長五郎

樂がらにて幕明まくあけく。

○ 何なにと、今日けふは好よい天氣てんきぢやあないか。

△ さうさ、よつほど暖あつたかになつたから、もう藝者げいしやのはひつた船ふねが出るの。

□ 向島むかうじまへもよつほど人ひとが出る、今いまからちつとぶらついてはどうだらう。

○ それもいゝが腹はらがきたやうだ、川升かはますへ行いつて一杯はいやらうぢやねえか。

ト此内直このうちなほしは履物はきものを直なほして出だす。

おい、こりやあお世話せわだ、大丈夫だいぢやうぶかの。

△ おれがのは、まだ切きれはしないが、ついでに直なほしてくんねえ。

□ 駒形こまがたの川升かはますは大層たいそう流行はやるの、山やまの宿しゆくへも出店でみせが出たぜ。

○ あれは、菊屋橋きくやばしに居ゐたのがこつちへ來きたのさ。

△ 川升かはますより花川戸はながはどの横丁よこぢやうへ、揚屋町あひやまちの玉屋たまやの長吉ちやうきちが料理屋れうりやを出だしたから、行いつて見みようぢやあねえか。

□ それは燈臺とうだい下しも暗くらし、さつぱり知らねえ、近ちかくツてそこがよからう。

ト此内直このうちなほしは下駄くだを拵しらへて出だす。

二 おや、もう出来たか。それ、錢をとんねえ。

○ 假宅の晝見世をひやかして、三町目へ行つて見よう。

△ 大層はひるさうだから、立見は出来めえ。

□ まあ、ぶらく行つて見ようぢやあねえか。

△ どれこつちも出掛けよう、茶代をとんなせえよ。

○ さあ行かう。

ト右鳴物にて仕出下手へはひる。吹替の雪駄直し道具を片附け、出来上りし履物を二三足持ち下手へはひる。通り神樂流行唄にて、花道より、仲の町の藝者吾妻餘所行きの装、お高茶屋の女房の装、喜助供にて附き出て、舞臺へ來り、

お高 もし吾妻さん、與五郎さんが言はしやんした、花水橋の田中屋はこゝでござんす。

吾妻 さうでござんすか、ぬしは見えなさんしたか、聞いて下さんせ。

お高 あい。もし、こちらへ明神下の山崎屋の與五郎様が、お出での筈でござんすが、まだお出で

なさんせぬかいな。(ト茶見世より茶屋男出て)

喜助 いえ、まだお出でなされませぬが、追附けお出でござりませう。まあお掛けなされませ。

お高 そんなら吾妻さん、こゝへ掛けなさんせ。

吾妻 あいゝ。 (ト兩人床几へ掛ける。茶屋男茶を出す。これ喜助どん、お前一服呑んで、與五郎さんが

お出でなさんせうから、廣小路まで行つて見て来て下さんせ。

喜助 はいゝ、畏まりました。

ト喜助上の方へはひる。右の鳴物にて下手より與五郎、羽織着流し町人の装、久太の丁稚包みを背負

ひ附き出で來り、

與五 そこに居るは、吾妻ではないか。(ト吾妻與五郎を見て)

吾妻 お前は與五郎さん、よう來て下さんしたな。

お高 ほんに若旦那、さつきにからお待ち申しましたわいな。

與五 松葉屋のお高さん、けふは御苦勞でござります。これ久太、わしは觀音さまへお参り申して歸る

程に、先へ歸つてお静にさう言うたがよい。

久太 はいゝ、若旦那また吉原かえ。

與五 無駄口利かすと、早く行きや。

久太 はいゝ。(ト上の方へはひる。與五郎床几へ掛ける。)

吾妻 若し與五郎さん、今日は向島へ行く程に早う來やと言はしやんして、今までどこへ行つてござんした、大方餘所の女中さんの所へ、行て居やしやんしたのであらうぞえ。

與五 何のそのやうなことがあらう、今日お出入りの千葉のお屋敷へ出て、遅うなつたのぢやわいな。

吾妻 ほんにお屋敷といへば、其の御家中の三原傳藏さんが、身請けするというて、うるさうてならぬわいな。

お高 それ故吾妻さんが、大抵氣を揉んでござんす程に、早うあなたの方へ身請けの御相談を、なされてお上げなされませ。

與五 わしもさう思つて居れど、そなた衆も知つての通り、元わしは千葉の家中橋本次郎大夫様の忤にて、幼い時に山崎屋へ養子の身の上、親父さま與次兵衛様は世間の義理ゆゑ、表向きわしに家督を譲り、法體して淨閑と名を改め隠居といふは名ばかり、わしに越度があらば追出し、妹のおてゝに持參の附く聲を取らうといふ無慈悲の人ゆゑ、今に身代を渡されねば金の出入りは自由ならず、今日も千葉様から吳服屋の代金百兩受取つて持つて居れど、わしが儘にはならぬゆゑ、身請けの金に當惑して居るわいの。

吾妻 そのおてるさんとお前とは、小さい時から許嫁、近いうちに祝言をなさんすとのこと、それゆゑ

ゑ金の出来ぬを幸ひに、身請けをせぬのでござんせう。

與五 はて、そなたも疑ひ深い、義理ある親の言附けなれば、表向き祝言はするけれど、何のおてるを女房にしてよいものかいの。

吾妻 いえ、祝言なさんすれば、世間晴れての夫婦なれば、どうでわたしは捨てられもの、お前に別れ片時も、生きて居る氣はござんせぬぞえ。

與五 案じやんな、起請まで取り交して居る二人が仲、假令どのやうなことがあつても、替る心はないわいの。

吾妻 そのやうに言はしやんしても、殿御の心は秋の空、どうして油断かならうぞいな。

お高 お前の氣を揉ましやんすは尤もぢやが、與五郎さんに限りそんな事のないはわたしが證人、したが、身請けの手附けなりとも、早う渡したうござんすなあ。

與五 それゆゑわしもいろ／＼に、金の工面して居る程に、氣を揉まぬがよいわいの。

トばなく、鳥追通り神樂になり、花道より梶井主膳、總髪少し更けたるさんすぬなるこしらへ、大小にて羽織着流し、手代の権九郎を引立て出来る。

權九 もし、どうぞ御了簡なされませ。

主膳 いやく、了簡ならぬ、向うへ参れく。

ト右鳴物にて兩人舞臺へ来て上手へ来る 與五郎見て、

與五 これく、そなたは權九郎ではないか。(ト是れにて權九郎見て、)

權九 お、お前様は若旦那、よい所へおいでなされました。

與五 見ればお侍に引立てられ、こりやどうして譯ちやぞいの。

權九 いやも、近年にない不調法で、此御浪人に無禮をいたして此通り、どうぞお詫をなされて下さり

ませ。

與五 そりやどのやうなことが知らねど、わしがお詫びをして見ようわいの。(ト與五郎主膳の側へ来て、)

申し御浪人様、此者は私が召使ひでござります、様子は何か存じませぬが、あなた様へ對し御無

禮をいたしましたとてお腹立の體、何卒私にお免じ下されまして、御了簡下さりませ。

主膳 すりや何とおいやる、お手前は此者の主人ぢやと申すか。

與五 左様でござります。

主膳 悪い召使ひを持つて氣の毒千萬、委細の譯を申し聞かす、とつくりと聞かつしやい。(ト合方にな

り、主膳床几へかける、)身共は梶井主膳といふ者、見らる、通り浪人の世渡りに、向うの四つ辻に

て賣卜をいたし居る所、此者通り掛り、身の上を見てくれいと申すのゑ、判斷遣はせし所相違いたせしとて筮天眼鏡は元より、恐れ多くも土御門公より拜領なせし易道免許の御書を土足に掛けたる不道き奴、浪人なせど帶刀いたせば、此儘には差置かれず、此所に於て眞二つにいたす、覺悟極めてそれへ直れ。(ト刀の柄へ手をかける、權九郎びつくりして、)

權九 あ、もし、それは餘りお情ない、全く酒興の上の了簡違ひ、大事にいたせばまだ一生ある命、

斷ち賣りの鮭か鱈ではあるまいし、眞二つにされてはなりませぬ、若し若旦那どうぞお詫く。

與五 様子を聞けば一方ならぬ不調法、わしの心一杯お詫びする程に、落附いて居や。

權九 何分お願ひ申します。是れでござりますく。(ト手を合せ拜む。)

與五 申し御浪人様、委細の様子承はりますれば、申し上げやうもない不届至極の憎い奴でござります

が、何卒あなた様のお慈悲をもちまして、お助け下さりますやう、偏にお願ひ申し上げます。

主膳 其許がそれ程詫びいたすを、聞き届けぬではないが、此儘には濟まされぬ、その譯は只今申す

通り、土御門公より拜領の免許を損じては、明日より賣卜渡世が相成らぬ、そののゑ京都表へ斯

くの次第を申し上げ、此者の命乞ひをいたして、又候拜領いたすには、それく附届けの金子が

なくてはならぬが、其金子は承知でござらうな。

與五 その儀は召使ひの不調法、お詫びいたしますからは、私が身に叶ひます程ならば。

主膳 いや、何も格別な金子ではないて。

與五 して其金子は、何程でござります。

主膳 その金高は百兩ちや。

與五 え、左様なら金子は百兩でござりますか。

主膳 それ得心ならば、勘辨いたしくれう。(ト與五郎當惑の思入。)

權九 もしく、若旦那々々、人間の命は萬物の寶、百兩位には替られませぬ。どうぞ偏にお助けく。

吾妻 もうし與五郎さん、可哀さうな權九郎さん、どうぞ仕様はないことかいな。

與五 わしも助きたいは山々なれど、大枚百兩といふ金、千葉様から受取つた、百兩は爰に持つては居

れど、手籠めに遣うては親父様へ言譯が。

權九 若旦那、お前様千葉様から百兩受取つて、持つておいでなされますか。

與五 爰にしつかり持つて居るわいの。

權九 じめた。(ト大きく言ふ。)

與五 や。

權九 いえさ、胴卷でしめてお出でなさるならば、どうぞお慈悲に其の金で。

與五 それぢやと言つて、親父様へ。

權九 成程一徹な親旦那様、御尤もでござります、左様ならば其の金子を私に、暫くの間お貸しなされて下さりませ。

與五 でも大枚な百兩の金。

權九 若し若旦那、私も大家の山崎屋のお店を預かる番頭の權九郎でござります、百兩や二百兩の金であなたに難儀は掛けませぬ、どうぞお貸しなされて下さりませ。

與五 それほどに言やること、親父様へは受取らぬというて、貸してやりませう。

權九 左様なら、お貸しなされて下さりますか、え、有難うござります。

與五 念の爲めぢやによつて、慥な一札を書いてたも。

權九 畏まりました、暫くお待ち下さりませ。

ト權九郎矢立を出し證文を書く。鳥追通り神樂になり、下手より佐渡七羽織着流し股引にて出で、

五郎を見て、

佐渡 そこにおいてなさるは、山崎屋の若旦那ぢやござりませぬか。

與五 そなたは判人の佐渡七、どこへ行きやつた。

佐渡 どこへぢやあざりませぬ、お前さんを今朝から捜し歩きました。よい所でお目に掛りました。外の事ぢやあざりませぬが、吾妻さんの身請けのこと、此間からお前さまが身請けするとばかり、今に手附もお渡しなさらぬが、外から身請けの相談がござりますが、お前さまが先口ゆゑ、御挨拶を聞き切つて来いと申しましたが、どうなすつて下さいませぬ。

與五 成程此間から金の都合に掛つて居れば、是非手附を渡します程に、どうぞ二三日の所を。

佐渡 いえ二三日所ぢやあざりませぬ、先方は今夜手附を渡すと申しますこと、只今出来すはお氣の毒ながらお断り申します。

お高 若し佐渡七さん、今與五郎さんも氣の揉める事がござんす。どうぞ待つて上げて下さるせいな。佐渡 どうして、わたしが待つても、親方が不承知だから仕方がないのさ。

ト此時權九郎證文を書いて、

權九 若旦那、證文が出来ました。一、金百兩也、右は我等據なく命を買ひ求め候金子に差支へ、借用いたし候處實正に御座候、返濟の儀は其許様御入用次第早速返金申すべく候、念の爲仍て如件年號月日、山崎屋與五郎殿、借主山崎屋手代權九郎判、これでよろしうござりまするか。

與五 それでよい、さうして此金はいつまでに戻しやる。(ト證文を取る。)

權九 それは證文通り何時なりとも、御入用次第。

與五 そんなら今宵戻してたも。

權九 それはあんまり性急、せめて二三日お貸しなされませ。

主膳 こりやと、與五郎とやら、いつまで待たせて置く。不得心ならあの者を、眞二つに。

權九 あもし、只今相談最中にござります。もし若旦那々々、早く金をお貸しなされませ。

與五 そんなら明後日、間違ひなく戻してたも。(ト朋卷より百兩出す。)

權九 はい、慥に借用いたしました、直にあなたから御浪人様へ、お上げなされて下さりませ。

ト與五郎百兩を主膳の前へ出し、

與五 主膳様、權九郎のお詫金百兩、何卒是れにて彼が一命、お助けなされて下さりませ。

ト主膳百兩を受取り、

主膳 承知いたしました、百兩は千葉の封金改めるに及ばず、慥に受取り申した。はて命冥加な町人ぢやな。

與五 これ、佐渡七、此通り權九郎に百兩貸して明後日までに戻す約束、どうぞこなたの顔で、明後

日まで親方の前を頼むわいの。

佐渡 さうおつしやると、私が實に困ります、左様ならば、今權九郎さんからお取りなすつた證文を、お預り申して親方へ、言ひ延ばして置きませう。

與五 成程尤もぢやが、此一通がわしが手に無い時は、若し親父様に此事が。

佐渡 それが御不承知なら、私の方も不承知でござります。(ト主膳是れを聞き思入あつて、)

主膳 こりや佐渡七とやら、是れへ來やれ。

佐渡 へい、何ぞ御用でござりますか。(ト佐渡七こちらへ來る、)

主膳 最前からは是れで承はつたが、御身は大磯の廓で奉公人の肝煎渡世いたす男さうなが、あれに居る藝者吾妻が身請け、身共にいたさせてくりやれ。(ト是れにて皆々びつくり思入)

佐渡 ついぞ是れまで、お馴染でもないあなた、吾妻さんのお身請けか。

主膳 不審に思ふも理り、身請けの客といふは外にある。

與五 さうして吾妻が、身請けの客とおつしやるは。

ト此時上手より三原傳藏、羽織着流し大小にて窺ひ居て、

傳藏 身請けの客は、身共でござる。(ト合方になり、前へ出る。皆々見て、)

吾妻 や、お前は。

お高 あなたは、三原傳藏様。

權九 思ひがけない、此所へ。

傳藏 山崎屋與五郎、權九郎も是れに居つたか、かねぐ、吾妻に執心の傳藏、身請けいたして歸り、妻

にいたす。

與五 そんなら主膳様が、身請けするとおつしやつたは。

主膳 三原氏とは昵懇の身共、それゆゑ身請けの取持ちいたす、身請けの高は二百兩と聞く、手附け金

百兩只今相渡し、後金は一兩日中、さあ改めて受取りやれ。(ト主膳件の金を出す。)

與五 そんなら其百兩で、はてなあ。(ト思入。)

佐渡 いえもう、私はどなたでもお金の早いがよろしうござります。若し與五郎様、お聞きの通りでござ

りますから、お前様の方はお断り申します。もし、權九さん、矢立をこよつと貸して下さいま

し。

ト權九郎より矢立を借り證文を書く。

吾妻 もし與五郎さん、傳藏さんの方へ行けば、わたしや生きては居ぬぞえ。

與五 はて今身請けが濟むといふではなし、わしも今宵の内に手附の金を渡す程に、氣遣ひせぬがよい

わいの。(ト此内佐渡七證文を書き、主膳の前へ出し)

佐渡 手附金百兩の受取、お名宛は傳藏様でよろしうござりますか。

主膳 これでよし、さあ封金百兩受取りやれ。(ト證文を取り、百兩渡す。)

佐渡 へい、百兩金、慥に受取りました。(ト佐渡七財布へ入れ、懐へ入れる。)

傳藏 これ吾妻、跡は渡さずとも手附が濟めば、今日より傳藏が宿の妻も同然、身共と一緒に、さあ來

やれ。(ト吾妻の手を取る。)

吾妻 おいて下さんせ、假令黄金の山を積み體は身請けされるとも、心が得心せぬからは、お前の儘に

はならぬわいな。

傳藏 いや如何やうに申すとも、後金を渡し身請けいたせば傳藏が心の儘、否といはうが應といはうが、

我が思ひを晴らさにやおかぬ、さう心得て身共と一緒に。

吾妻 いえ、わたしが體は、今日一日は與五郎さんの揚げでござんす。

お高 わたしが預つた吾妻さん、あなたの自由にはなりませんわいな。

傳藏 む、つべこべと喧しい、是非とも身共が連れ參る。(ト立ちかゝる。)

主膳 これはしたり三原氏、身請けの濟まぬ其うちには、彼等が氣儘も是非がござらぬ、捨て置いて手附

の濟んだ祝ひ酒、小倉庵へでも行かうではござらぬか。

傳藏 そりや何方へなりとも参らうが、吾妻を同道いたさねば。

主膳 はて、野暮は當時は流行りませぬて。

ト通り神樂にて、橋の向うより角助、可助紺看板の中間にて出で、與五郎を見て、

角助 これ可助見ろ、さつき向う河岸でおいら達に突ツかゝりやあがつた、二才野郎か爰に居る。

可助 ほんにさうだ、ろくに挨拶もせず逃けてうしやあがつて、爰で女とむた附いてけつかる。

兩人 さあ、一緒に屋敷へうしやあがれ。(ト與五郎へ立ちかゝる。)

與五 あこれ、待つて下され、ついぞ見たこともない中間衆、向う河岸で突當つたの何のと、こつちは

さつぱり覺えのないこと、無體なことをさつしやるな。

角助 なに、覺えがねえ、此野郎は寐とほけて居るやうだ。

可助 目の覺めるやう、おいら達が。

兩人 性根を附けてやらうかえ。(ト與五郎へ立ちかゝる、主膳留めて。)

主膳 こりや、何か様子は知らねども、靜に申さば事は分かる、手荒くいたすなく。

角助 なに手荒くするな、うぬらが知つたことぢやあねえ。

可助 片隅へすッ込んで見物しろ。

兩人 さあ、野郎め、うしやあがれ。

ト通り神樂になり、兩人與五郎へかゝる。主膳支へる振にて、與五郎の懐の紙入を取つて懐中する仕組の立廻り、兩人主膳へかゝるを、ちよつと立廻つて兩人を投げる。兩人起上り、

角助 あゝ痛えく、うぬはどここの天狗の面か、ひよつとここか知らねえが。

可助 譯も言はずに、何でおらを投じたのだ。

主膳 おゝ、投けてもいゝ、打殺しても大事ないわ。

兩人 そりや又何で。

主膳 何でとは舌長な奴、若い男に無法な手籠め、見るに忍びず支へたる身共に對し慮外な匹夫め、手向ひいたさば手は見せぬぞ。

角助 あゝもしく、つい時の張り合ひで、

可助 あなたに慮外いたしました。

兩人 御免なされませく。

主膳 詫びるとあらば許してくれる。以後はきつと嗜み居らう。

雪駄直し長五郎

角助 はいく、嗜みますく。(ト言ひながら兩人橋の上へ行き) え、思えましい、折角呑代にしようと思つたを。

可助 いらざる奴がうせたばかり、とうく仕事はぐれ蛤。

兩人 よく味噌を附けさせやあがつたな。

主膳 どういたした。

角助 いやさ、蛤鍋でやつて来よう。(ト通り神樂にて兩人花道へはひる。)

吾妻 ほんにまあ、どうなる事かと存じましたに、

與五 危い難儀をお助け下されました、有難うござります。

主膳 何のく、其禮には及ばぬこと。さあ三原氏、参らうではござらぬか。

傳藏 参るは参るが、吾妻をこゝへ残しては。

主膳 はてさて、しつこい、まあござれと申すに。

ト鳥追通り神樂にて、主膳傳藏を連れ、橋を渡り向うへはひる。與五郎此時紙入のなきに心附き、

與五 や、今まで懐に持つて居た、紙入が見えぬわいの。

權九 なに、紙入が見えませぬ、そりや大事でござります、よく搜して御覽じませ。

與五 あの中なかには今いま權九郎ごんくわうから取とつた百兩ひゃうりやうの證文しやうもん、まだ其上そのうへに吾妻あづまが起請おこしやうも入はいつて居ゐる大切たいせつだ。あゝ、聞きえた、今いまの賣うち者ものがわしを支さへる折せり、懐ふところへ手てを入いれたが、そんならあの時とき浪人らうじんが。

權九 何なんとおつしやる、今いまの浪人らうじんがお前まへ様の紙入かみいれを。やあくく、え、憎にくい奴やつ、待まち居をれやい、泥坊どろぼう。  
泥坊どろぼう。(ト通り神樂かむらにて、權九郎ごんくわう追掛おつかける振ふりにて橋はしの向むかうへはひる。)

佐渡 時ときに手附てつけの濟すんだ吾妻あづまさん、いつまで爰こゝには。なあお高たかさん、あの子こを連つれて親方おやかたへ。  
吾妻 いえく、わたしや今日けふ一日いちじつは、與五郎あづまごろうさんの揚あげでござんす。

お高 そんなら斯かうなされませ、最前さいぜんからのもやくくで、與五郎あづまごろうさんもお氣きの揉もめることばかり、わたしの家うちで御酒ごしゆを一つ上あつた上うへ、お歸かへりなさんせいな。

吾妻 ほんにそれがようござんせう。佐渡さど七しちさん、お前まへも一緒しよに。

與五 行くことは行くけれど、紙入かみいれのことが心こゝろにかゝつて。

佐渡 はて、權九郎ごんくわうどのが追掛おつかけて行ゆかれたから、取返とりかへして參まゐりませう。

お高 きなく、思おもはず與五郎あづまごろう様さま、お一つ上あつた其上そのうへで、

吾妻 又またよい思案しあんもござんせう。さあ、ちつとも早はやう。

與五 それぢやというて、どうもわしは。

女  
兩人

はてまあ、お出でなさんせいな。

ト流行唄通り神樂にて皆々花道へはひる。下手より長五郎零駄直しのこしらへ、古き笠を冠り、番手桶を提げ出で来り、四邊へ水をまき臺の上へ坐り、籠の中より道具を出し仕事に掛る。浪の音の頭、屋根船の唄、詠への兩吟になり、橋の向うより阿古木源之丞着流し袂帯、鯨鞘の大小、一文字の編笠にて出来り、橋の上にて左右を見返ることあつて舞臺へ下りる。此内草履の横鼻緒切れる、源之丞思入あつて、

源之

はて、折悪き草履の鼻緒。(ト四邊を見廻し長五郎を見て) 幸ひの履物直し。(ト思入、又唄になり、源之丞そろく) と長五郎の側へ来て、こりや直しのもの、鼻緒が直して貰ひたい。

ト履きたるまゝ前へ出す。

長五 はい、畏りました。

ト又唄になり、長五郎臺の上にある麻裏草履を、片々取つて源之丞にはかせ、切れたる草履を取つて見る。是れにて唄切れる、跡かすめた通り神樂。

こりやまだ卸したてのお草履、どうして鼻緒が切れましたか。(ト言ひながら源之丞の装をじろく見て) 素敵に立派なお侍様だ。(ト編笠の内を覗き) はて美しいな、種貞の草双紙の白縫大盡のや

うな殿様だ。(ト又笠の中をよく見えて思入) はてな、どこかあなたは見たやうだ、お思ひ出した、おさうだ、見た筈だ。もし殿様、憚りながらお前様は、阿古木源之丞様ではござりませぬか。

ト是れにて源之丞思入あつて。

源之 む、我が名を知つたる其方は。

長五 へい、御不審は御尤も、長五郎めでござります。

ト四つ竹模様の合方、長五郎、笠手拭を取る、五十日のきたなき蟹、源之丞よく見えて、

源之 お、まことにそちは以前出入りの長五郎、思ひ掛けなき此出合ひ。

長五 躓く石も橋詰めに、

源之 切れた鼻緒が縁の端、

長五 切れざる縁の、

源之 主従、

長五 二人。

源之 長五郎、

長五 お殿様。(ト源之丞も笠を取つて)

雪駄直し長五郎

源之 はて、久々であつたよなあ。

長五 面目次第もござりませぬ。(ト兩人思入) まあ〜あなた様にも御機嫌よく、こんな日出度いこととはござりませぬ。

源之 そちも堅固で重疊々々、さりながら以前に替る賤しき姿。

長五 お聞きなすつて下さりませ、以前は神田白壁町で、人に知られた左官の棟梁長右衛門の忬の長五郎、三度の飯より色と酒、まだ其上に弄み好き、異見も馬の耳に風、打つやら買ふやら亂ちき騒ぎ、詮方盡きて親父の勘當、あつちの近附きこつちの友達、四月五月半年はごろつき歩きの居候、長い月日に短い錢、三文半錢の働きも出来ねば他人の悲しさに、末の別れは愛想づかし、身のただすみも人の軒、貰つて暮す氣散じは譬の通り三日して、忘れられねえ世渡りに、到頭非人の仲間入り、親父の罰で此さまと、朝夕我が身を悔んで居ります。

源之 聞けば不便なそちが身の上、何卒まことの心になり、其身を清うしたがよいぞや。

長五 有難うござります、私が身の上話してお履物が遅なりました、暫くお待ちなされませ。

ト長五郎直しにかゝる、源之丞紙入より小判を出して紙に包み、

源之 長五郎、取つて置きやれ。(ト出す、長五郎取つて、)

長五 へい、こりやお金。もし殿様、有難うござります。

ト長五 金を腹掛の隠しへ入れる。鳥追神樂になり、花道よりおこよ鳥田鬘着流し編笠を冠り、おとら鳥田崩しの着流し編笠、三味線を二挺合せて手拭へ包み抱へて出来り、舞臺へ来て長五郎を見て、  
こよもし長五郎さん、此間はお目にかゝりませんねえ。(ト長五郎見て、)

長五 おや、誰だと思つたらおこよさん、今お歸りでございますか、大きに御無沙汰をいたしました。

どうぞ頭によく言つておくんせえまし。おこよさん、いつもながら綺麗だね。

とら 長さん、お株で世辭のいゝこと、其口で幾人女が殺されたか知れないよ。

長五 おゝおとらか、うまくいふぜ。コウ火口があらア一服呑まつし。

こよ 長五郎さん、ちつと遊びにおいでなさいな。

とら ほんに長さん、今日はおこよさんの誕生で、赤のお飯が出来たから晩に遊びにお出でな。

長五 そいつあ有難え、御馳走になりに行きやせう。

とら 長さんきつとお出で、騙すときかないよ。

ト右鳴物にて、兩人橋の上へ行きながらおとらおこよに囁く。おこよ振り返り、源之丞へ心を残し、  
兩人橋の向うへはひる。源之丞は是れまでおこよに見惚れて居て、本意なき思入にて扉を開き、是れを

翳し跡をきつと見送る。本釣鐘しつほりとしたる合方、長五郎草履を直し、源之丞の前へ出し、

長五へい殿様、お草履が出来ました。(ト言へども耳に入らず、向うを見て)

源之梅が香や、乞食の家ものぞかるよ。

長五 大きにお待遠でござりました。

源之 晋子が秀句目のあたり、はて、あでやかな。(ト見惚れし思入、長五郎心附す、)

長五 お履物が出来ました。(トいへども返事をせぬゆゑ) もし、風様。

ト大きく言ふ、源之丞びつくりして、持つたる扇を落すを、木の頭。

源之 世話であつた。

ト源之丞草履をはきながら、やはり向うを見送る。長五郎落ちたる扇を疊んで出す、是れをキザミ、

屋根船の佃節、薄き浪の音にてよろしく、

ト幕引付けると禪の勤めになり、直に尻明けに引返す。

(唐申塚の場) 本舞臺三間後、黒幕敷、上手大きな石の唐申塚、松の立木、日覆より釣枝、

下には葎簧張の出茶屋を片附けたる體、總て小梅ヶ谷も通り。右鳴物にて幕明くと釣師の仕出其外大勢捨てりふにて行違ひはひる。三味線入り禪の勤めになり、花道より以前の源之丞、後より長五郎鐘

幕

を肩に掛け出來り、

長五 もし殿様、私に何か用がある、人通りのない所まで來いとおつしやつたが、こゝらはもう人絶えでござります。

源之 ちと其方に、折入つて頼みたい一義がある。

長五 左様なら、向うへ参りませう。(ト右鳴物にて、兩人舞臺へ來て)

源之 長五郎、其方に頼みたいことがあるが、頼まれてくれまいか。

長五 譯もおつしやらずに、頼まれろく。何でもようござりますが、立ちながらお話しも出來ません。お待ちなされませ、いゝものがござります。(ト下手に重ねた出茶屋の床几を持ち來り) さあ、是へお掛けなされませ。

源之 誰も外に人もなければ、そちも掛けやれ。

長五 左様なら、眞平御免なされませ。(ト兩人床几へ腰を掛け) さうしてお頼みとは、どんなことでござります。

源之 外でもない、取持ちが頼みたい。

長五 何とおつしやります。(ト替つた合方になり)

恥しきことながら、さいつ頃同じ鎌倉の腕近の武士、南方十次兵衛が娘お早といふ女と語りひ、夫婦の契約なしたる所、遺恨あつて倉岡某の手に掛り、親子諸共箱根に於て敢なき最期逢けたりしが、最前出逢ひし鳥追娘、眉目形風俗まで別れしお早に生寫し、似たる姿に心の迷ひ、親しき様子の詞の端、何卒そちが働きにて酒宴の相手にあの娘、身共に取持ちいたしくりやれ。長五郎、頼みといふは此通りぢや。

長五 それならさつきの女太夫に、殿様がほの字にれの字だね。

源之 長五郎、笑うてくやるな。

長五 なに笑やアいたしませんが、あの娘はちとむづかしいといふ譯は、ありや笹目ヶ谷の割下水の小家頭、喜六といふ者の一人娘で、乞食でこそあれ不足はねえから、あゝして歩くのも稼ぎぢやござりません、慰みでござります。其上親父といふは大の堅藏だから、とてもれこづくで話しは出来ません、が、先刻一緒に附いて居た年増、ありや仲間内の噂あだからあの女に吹ッ込んで娘の心を聞いて見て、娘さへうんといやあどうでもなりますから、斯うなすつて下さいまし。もう一兩金を貸して下さい、今夜娘の誕生だといつたから此装ぢやあ行けません、布子の身請けでもして土産の一つも買つて、是れから直に喜六の所へ行つて、成るだけ首尾して参りますから、

お前さんは其内小倉庵で、一口上つて待つておいでなさいまし。

源之 承知いたした。(ト紙入より小判を出し)金子は是れでよいか。(ト長五郎へ渡す)

長五 よろしうござります、是れで身装をこしらへて、直に今から参りませう。

源之 然らば身共は、小梅にて待合さん、随分共にぬかりなきやう。

長五 お氣遣ひなされますな、どうかこじ附けて参りませう。

源之 長五郎、待つて居るぞよ。

ト唄になり、源之丞は下手、長五郎は籠を肩へ掛け上手へはひる。時の鐘になり、上の方より以前の主膳編笠を冠り、下手より傳藏、權九郎、角助、可助附いて出で、四邊へ思入あつて、

傳藏 權九 梶井主膳殿。

主膳 これ、靜に言はつしやい。(ト笠を取る、木魚入りの合方)

傳藏 言合せた通り、まんまと首尾よく。

權九 是れといふも、主膳殿の働き。

角助 山崎屋の與五郎が持つて居る、紙入を抜く魂膽。

可助 こツとら二人が喧嘩を仕掛け、然し、よつほど酔い目に逢ひました。

傳藏 大儀々々、さあ是れで一杯つゝ呑んだがよい。(ト紙入より一分銀を二つ出して遣る。)

角助 こりや有難うござります。可助、これで今夜は假宅だ。

可助 まあ、どこぞへ行つて一杯やらう。

兩人 こりやあ旦那、有難うござります。

ト兩人下手へはひる。主膳 懐より以前の取りたる紙入を出し、

主膳 與五郎が此紙入の中にあるは、權九郎どんの百兩の證文、又これが佐渡七から取つた、吾妻が手

附の百兩の受取り、よつほど骨が折れたわ。

傳藏 いやも御苦勞々々、口頭から吾妻めに惚れて居れども、與五郎めに心中立して自由にならぬゑ、

主膳殿の思ひつきで、權九郎が無禮をしたと言ひかけて。

權九 道樂息子が千葉の屋敷から、受取つた百兩を詫金に借出し、其金を傳藏様か吾妻の手附に渡すと

いふ新狂言

主膳 此證文のない時は、百兩の金の行場は與五郎の科になつて、勘當され、ば娘のおてるは權九郎と

んの女房、三原殿は吾妻を引かし、どちらも失禮ながら、出來合の色事師だね。

兩人 是れは御挨拶。

主膳 さあ、首尾よく遣つた骨折り賃を、お貰ひ申したうござります。

傳藏 如何にも約束の褒美を、なう權九郎。

權九 左様々々、直に渡しませう。(ト兩人紙入より五兩づゝ出す、主膳取つて見て)

主膳 何だ此金は、一人前たつた五兩づゝか。

傳藏 當座の褒美、取つておきやれ。

主膳 當座の褒美も凄じい、五兩ばかりの端た金、こんなに糞骨を折つて詰るものか。

權九 さうしてこなたは、幾ら取る氣だ。

主膳 知れたこと、傳藏は百兩の手附證文、權九郎も百兩の證文だから、一人前安くツても五十兩宛よ

こさつせい。

兩人 なに、五十兩宛取る了簡か。

主膳 そんなにびつくりすることはねえ、百兩づゝの仕事だから、五十兩なら格安ものだ。

傳藏 そんならどうでも、五十兩づゝ出さねば、

權九 その證文を渡さぬ氣か。

主膳 知れたことよ。

兩人 それだといつて五十兩、

主膳 出すが厭なら、此證文の尻を割らうか。

兩人 さあそれは、

主膳 五十兩づゝ金を出すか。

兩人 さあそれは、

主膳 尻を割らうか。

兩人 さあそれは、

主膳 金を出すか。

三人 さあ〜〜。

主膳 春になつてもまだ日が短い、早く片を付けて下さい。(ト思入れ。)

傳藏 是非に及ばぬ、出しは出さうが今といつては持合せねば、四五日中に渡すであらう。

權九 こつちもやつぱり五十兩、都合して渡しませう。

主膳 そんならそれまで、此證文は預つて置かう。

ト二通の證文と十兩の金をば、件の紙入へ入れて懐中する。

傳藏 これさ、相談が極つたらば、今の五兩は、

權九 二人の方へ戻して下さい。

主膳 馬鹿を言はつせえ、こりや今日の立前だ。

權九 そんならそれまで返さぬのか。

主膳 當り前よ。

兩人 いや、呆れたものだ。

主膳 五十兩の金が遅いと、此證文で山崎屋のしはん坊親父に、何もかも割つてしまふよ。

ト言ひながら花道へ行きかける。

傳藏 いや恐ろしい敵役、然し當時はこなたより、

權九 外に敵役のない世界。

主膳 これ、幾ら胡麻をすつても、五十兩一文も負けないぜ。

兩人 そんならどうでも、

主膳 元直が切れるわ。

ト主膳編笠を肩へ掛けると、唄、時の鐘になり、主膳花道へはひる。舞臺は此儘道具廻る。

(乞食小屋の場) 本舞臺三間柿葺、所々にこぼれ瓦を並べたる家根附の平舞臺、正面扉障押入、眞中暖簾口、上の方一間の中二階障子立てあり、下手一間葺きおろし屋體、是れに赤かう、白かう、と書きたる障子、いつもの所門口、此外梅の立木、舞臺上手に木綿の小蒲團を敷き、喜六襦袢三尺、更けたる小家頭の装、竹の燭臺を照し、おとら箱火鉢に鐵瓶を掛け燭徳利にて燭をして居る、眞中に酒肴を並べ、佐久兵衛非人の猿廻しにてをり、ごみ太夫三味線を弾き、獨り角力のしゆる八椀の首口鬘、鳥追ひのふり七島田蠶木綿の振袖にて、兩人踊つて居る。お鍋史けたる雇傭アの装にて給仕をして居る。總て北割下水乞食小家の體。おけさの唄にて道具留る。

喜六 いや騒々しい奴等だ、耳が宿替をしさうだ、ちつと静にして吞んでくれ。

とら これさお前方、頭が静にして酒をお上りとさ、まことに氣逆上がするよ。

佐久 これく、頭が静にしると言はつしやるから、もう踊りは止めにしるよ。

八 それでも日出度い晩だから、思われ馳走になつて、思われ踊る積りだ。

七 後は又わつちが花笏踊り、和かい振事を見せようよ。

お鍋 ほんに八さんと七さんの踊りは、眞物だよ。

喜六 今夜は久し振りで、手前達の藝盡しをやつて見せるがい。

佐久 そりやお好み次第、山王の佐久兵衛が、お猿は目出度やなあ、を遣らかしやせう。

まあ藝當は跡へ廻して、うまくはなからうが氣に入つた物を喰つて、大きな物で呑むがい。

ごみ いやも、さつきからお辭儀なしに、やつつけて居りますよ。

お鍋 皆さんお氣に入つた物を、お替へなさいよ。

八 これくごみ大夫、一つ彈いて下ツし、おれが何ぞ端唄をやらかさう。

とら そりやお聞きごとだ、ごみさん彈いておくれ。

ごみ あいく、味噌漉し胴でやらかしやせう。

喜六 こりやおよからう、所望だく。

トごみ大夫三味線を弾き、鳥追ひを唄ふ思入、靜なる端唄へ通り神樂を冠せ、皆々捨ぜりふにて酒盛

になる、花道より長五郎、襦袢三尺に着替へし装にて出て來り、門口へ來て、

長五 御免なさいまし、長五郎でござります、頭はお宿かね。

お鍋 どなたか、此方へおはひんなさいな。(ト長五郎内へはひる。)

とら おや長さん、約束通りよくおいでだね。

喜六 珍らしい、長五郎よく來さした。さあ、すつと火鉢の脇へ來さッし。

雪駄直し長五郎

長五 そんなら御免なせえ。(ト賑かなる合方、長五郎上へ來り) おい仲間の手合、さつぱり逢はねえが、

みんな達者でいゝの。

佐久 長五郎兄イ、お前もお變りがなくてようござります。

皆々 兄貴、よく來なすつたね。

喜六 早速持合せだ、何にもねえが一つ呑まつし。(ト猪口をさす、おとらつく)

長五 こりや有難うござります、さつきおこよさんとおとらに逢ひ、あの子の誕生だから來いと言つたから、御無沙汰の言譯ながら出掛けたのさ。

喜六 よく來さしつた。これお鍋、長五郎に吸物を早く。

お鍋 はい、今持つて参ります。

ト奥へはひる、長五郎懐より風呂敷に包みし合巻と、羊羹の折を出し、

長五 頭、こりやあ柳下亭の作の新板に練羊羹、おこよさんに年玉。

喜六 止さつしやればいゝに、あまが大悦びだ。これおとら、長五郎に呑ませてくれろ。

お鍋 へい、お燗も吸物も出來ましてござります。

とら 長さん、お燗が出來たよ。

長五 おとら、お前にやるよ。

とら あれさ、お銚子の替り目だわな。

ト始終合方、雇ひ鳴ア吸物を持つて來り、皆々捨ぜりふにて酒盛よろしくあつて、

長五 コウおとら、今夜こつちへ出て來たは、ありやうはおぬしにちつと用があつて來たが、おこよるんはどうなすつた。

とら あの子は頭痛がするとツて、寐轉んで居なさるが、わつちに用とは何の用だえ。

長五 その用といふは。(ト喜六へ思入)

喜六 長五郎、内のあまに何ぞ用か。

長五 いえなに、用といふでもござりませんが。

とら 長さん思はせ振りな、用があるなら早くお言ひな。

長五 其の用といふは、まあ、そりや跡でいゝから、もう一べい遣らかしやせう。

ト酒を呑む、喜六思入。

喜六 用といやあ、あまの誕生日にごたくしたので、稻荷様へ參るのを忘れた。コウお鍋、提灯をつけてくれ。

お鍋 はいく。

喜六 長五郎、ちよつと参つて来るから、ゆるりと呑まッし。

長五 頭一人でいゝかえ、誰ぞ連れて行きなさいな。

喜六 なに、直そこだ。それ、みんな遠慮なしに呑んだがいゝぜ。

ト喜六提灯を持ち、下駄をばいて門口へ出る。

皆々 頭、早くお歸んなせえ。

喜六 長五郎ゆるりとさつしやい。(ト唄になり、喜六思入あつて下手へはひる。)

佐久 ときにみんな、大層馳走になつたぢやあねえか。

八 もう酒はお預けにして、おまんまと仕ようぢやねえか。

七 其事々々、その事羽織と單衣、スチャラチャヤンく。(ト踊る。)

とら まあみんなが、もう一つお上りな。

佐久 いえも、大層階酌、大橋兩國はした。

とら おやきつい洒落だ、コウお鍋さんみんなを奥でおまんまにして、又お中酒に上げておくれ。

お鍋 あいく。さあ皆さん、奥へお出でなさい。

佐久 そんなら長五郎兄貴、

長五 みんなゆるりと、

皆々 さあ〜行かう〜。(ト甚句の合方、お鍋先きに皆々わやく言つて奥へはひる。)

長五 やれ〜騒々しい手合だ。

とら 大風の吹いたあとのやうだね、長さんお燗をよくして、もう一つお上りな。

長五 いや、酒より大事の用がある。

とら 其の用とは、どんな用だえ。

長五 その用は、斯ういふ譯よ。(ト四つ竹の合方、)外の事ぢやあねえが、さつき東橋でおこよ坊とお手前がおれに話しをした時、履物を直して居た人があつたらう。

とら あの美しいお侍。

長五 ありやあ此の本所で、阿古木源之丞様といふ、御腕近の殿様よ。

とら む、さうかえ、それぢやアあの好い男の殿様が、わつちに、そりやほんの事かえ、わつちのやうな者に、それでお前、取持つてくれると、頼まれて來なすつたのかえ。

長五 自惚をいふな、手前ぢやあねえ。おこよ坊を見て、以前女房約束をした女に似て居るといつて、

首ッたけ惚れたのよ。

とら さうかえ、いゝ面の皮さ。

長五 そこでおれに取持つてくれろと頼ましやつたれど、あの通り偏屈な親分のことだらう、とても話

しは出来ないが、そこはおぬしが女同志でおこよ坊に話しをして、あの子がうんと承知さへすり  
やあ、先方は殿様、随分おぬしもれ、こになることだぜ。

とら 長さん、其の話しなら大承知だよ。

長五 これさ、おぬしばかり承知でも、おこよ坊が何といふか。

とら いゝえさ、其のおこよさんが大承知だよ。

長五 そりやどういふ譯で。

とら お聞きよ、さつきお前の見世先きにあの殿様が立つておいでの時、わつちがおこよさんに、ちよ  
つとお見、好い男だ、竹三郎に正だねえと言つたらばあの子が、わたしはこんな賤しい身、先きは  
立派なお侍さん、とても及ばぬことなれど、たつた一晚でもあのお方のお情受けたことならば、  
死んでもいゝと言つたから、おやくそれはいやなことだ、どんなに男がいゝとって此頃の麻疹  
をのがれ、一晚位のお情でわたしや死ぬのは眞平だと、思われ笑つてやつたのさ。

ト此内よき時分二階の障子を明け、おこよ此様子を聞いて居る。

長五 そんなら、おこよ坊も、惚れて居るか。

とら それだから承知だといふのさ。

長五 そいつあ奇妙だ、そんなら今夜直に殿様を、連れて来てもよからうか。

とら いゝ段ぢやあない、實はあの子はそれで鬱いで居るから、此の譯を話しやあどんなに嬉しがるか  
知れやあしない。

長五 そんなら是れから一走り、迎へに行つて連れて来るから、おぬしがいゝ鹽梅に頼むぜ。

ト長五郎下の方へ来る。

とら あれお待ち、連れて来るはいゝが、内の者の前もあり、第一親指が寐ないうちにはむづかしいから、  
今夜九つを打つたらば裏口から、

長五 やるのか、

とら そつとだよ。

長五 合點だ。そんならおとら。(ト門口へ出る。)

とら 長さん、御苦勞。

雪駄直し長五郎

長五ちやうご行いつて來くるぜ。(ト唄うたになり、長五郎ちやうごろう足あし早はやに花道はなみちへはひる。跡合方あとあひかた、おとら思入おもひいれあつて)

とら 縁えんといふものはとんだものだ、さつき東橋あづまはしで初はじめて逢あつた殿様とんさまが、おこよさんと相惚あひまれとは。(ト上手かみてを見て、おこよと顔見合かほみあせ)おや、おこよさん。

こよ おとらおさん。

とら さつきからそこにおいでか。

こよ あい。

とら そんなら今いまのれ、こしきの。

こよ 長五郎ちやうごろうさんの話はなしを聞きいて、心こころで拜まがんで居ゐたわいな。

とら おこよおさん。

こよ あい。

とら 今夜こんやはお樂たのしみ。(トおこよ恥はづかしき思入おもひいれ、早はやき唄うたにて障子しやうじをびつしやり閉しめる。)親指おんゆびに知しれないやうに、是こゝれからこつそり何なにかの支度しだく。さあ、いそがしくなつて來きたよ。

ト唄うたになり、おとら奥おくへはひる。四よつの鐘かね甚じん句ぐの合方あひかた、奥おくより以前いぜんの六人じゅうにんにお鍋なべ附つきき出來いたり。

お鍋なべ 皆みなさん、まだしづかでもい、ぢやあないかえ。

八 どうして、今鳴る鐘は四つの鐘「女房悦べ、悴はお役に立つたわやい。」

ト分らの聲色をつかふ。

七 さあ、四つだから麴町の呉服屋としようぜ。

佐久 ひらきますや(いはき升屋)といふ洒落か、そんなら、さあ〜お開き〜。

八 籠棒め、魴鱈か小鱈ぢやアあるめえし。(ト皆々門口へ出る。)

七 大層酔つて、ひよろ〜と轉びさうだぜ。

八 轉んだら起きて行かッしな。

七 「起きたら互ひに抱附かれ」サ。

ごみ 「ついでに日和を見てたもれ、」(ト猿の思入。)

佐久 「お猿は目出度やなあ。」

ト猿廻しの合方になり、ごみ太夫細帯を引きするを佐久兵衛これをひかへ、皆々囁し立て、花道へはひる。お鍋奥へはひる。右鳴物にて道具廻る。

(離れ座敷の場) 本舞臺三間常足本縁 附藁葺の二重、上手床の間下手赤壁、真中一間張交の襖

明立あり、よき所に三味線、笠掛けあり、上手一間の屋體、竹格子の中窓、此前くも手に摺鉢の水鉢、胡麻竹の手拭掛け、下手正面丸太屋根の二枚開き戸、左右穂竹の垣根、見切りの四つ目垣、上手振りよき梅の立木、總て離れ座敷の體。二重に短檠を照し、時の鐘にて道具留る、と鞠唄の合方になり、奥よりおこよ、おとら出來り、

とらもしおこよさん、お前まことに嬉しさうに、そわくおしだね。

こよおとらさん弄つて下さすな。したが、ひよつと父さんに知れたら、どうせうぞいな。

とらなに親指は酔つて寐ておしまひなすつたから大丈夫さ、今夜せえ首尾よく行けば、跡で知れた時はまたどうでもなるから、お案じでない。

こよさうして様がお出で遊ばしたら、何というてよからうぞいな。

とら何もいふには及ばぬわいな、わつちが好い鹽梅しきにして上げるよ。

こよおとらさんの恥かしいことばかり。

とらなに、子供ぢやアあるまいし、恥かしいことがあるものかな。もう九つになりさうなものだが、今夜は何だか夜が長いやうだね。

ト時の鐘靜な合方、捨ぜりふにておこよは煙草盆火鉢などを拭いて居る。おとら焜爐の火を直し土瓶

を掛ける。花道より長五郎小提灯を持ち、跡より源之丞出來り、花道にて、

長五 もし、泥濘があるかも知れませんが、氣をお附けなさいまし。

源之 忍ぶ便りはよけれども、殊の外暗い晩ぢや。

長五 かうツと、曲つた梅の木へ附いてはひつたから、何でも爰らが裏口だが、さつぱり見當が知れない。(ト舞臺を透し見て、) よしく向ふだく。さあお出でなさいまし。

ト兩人舞臺へ來て、長五郎木戸を叩く、おとら聞き附け、

とら そら來たく。(ト大きく言つてびつくりなし、) おこよさん、火入の火を見ておくれよ。今開けますよ。

ト下の方へ小聲で言ひながら、雪洞を持ち駒下駄をはき二重の脇より垣の後へはひり、開戸口へ來り、  
長さんかえ。(ト戸を開ける。)

長五 おとらさんか、首尾はいゝか。

とら 大極上々吉。

長五 殿様、おはひんなさいまし。

源之 大事ないか。

とら よろしうございます、さあ入らつしやいまし。(トおとら開きをしめ、兩人を連れて、二重の横手より舞臺へ出へ) さあ、是れへお上んなさいまし。

ト源之丞二重へ上る、おとら梅を上手へ敷き源之丞を住ませる、長五郎小聲にて、

長五 おこよさん、嘸待遠でござりましたらうね。

トおこよ恥しき思入、おとら煙草盆を出さうとして、長五郎に燧箱でなくてもよからうかと手眞似をする思入。

なに、構ふことがあるものか。

トおとら持つて行かうとして、おこよに持つて行けといふ思入、おこよ恥かしさうに源之丞の前へ出す、おとら茶を汲みおこよに出させる。源之丞始終おこよに見惚れ居て心付き、四邊を見て、

源之 長五郎、そちが話しと事替り、殊の外綺麗な住居ぢや。

長五 お屋敷と違つてむさうござりますが、其代り綺麗なものがござります。(トおこよを前へ出して) もし殿様、家の娘でござります、お近附きのためお詞を下さいまし。

源之 こりや、其やうに堅くるしくせずと、斯様に忍び参りし上は、打ち解けるがよいではないか。とら もうくくく通り者のお殿様、長さんそんな三つ指とやら、言ひ附けねえことは止して、やつば





り乞食こじき附合つきあひ、いえさ、お心安こころやすいがい、ぢやあねえか。

長五 さうよ、構かまふことはねえ。おこよさん、すつとお側そばへ行きなせえ。(ト突きやる。おこよ恥はづかしき思入おもひいれ)

源之 不思議ふしぎな縁えんで今宵こよひの厄介やくかい、こりや二本差ほんずしは野暮やばぢやなど、愛想あいせをつかすまいぞや。

こよ 冥加みやうがに餘あまるそのお詞ことば、賤いやしい伏屋ふせやへお厭いとひなう、お越こしなされしお志こころざしし、有難ありがたう存かんじます。

とら あれまだやつぱりそんなこと、然しかしお初會しよくわいのことなれば引附ひきつけのお盃さかづき、どれ、取とつて參まゐりませ

う。(ト浮ういた合方あひかたになり、おとら奥おくへはひる。)

長五 何なんと殿様とのさま、美うつくしいものでござりませうね。

源之 笠かさの内うちとはまた一入ひとしほ、色香いろかもまさる夜よるの梅うめ、早はやう折せらせてくりやれ。

ト奥おくよりおとら綺麗きれいなる臺たいへ着きを載のせ、錫しやくのちるり盃さかづき臺たいを持ち出いで、

とら もし殿様とのさまえ、今日けふはあの子この誕生たんじやうび目めで、ほんの内うちの有合ありあはせ、お一つ召めし上あがりませ。

源之 それは何なにより。長五郎ちやうらう、亭主ていしゆ役に始はじめぬか。

長五 どういたしましたして、まあくお始はじめなされませ。

源之 然しからば馳走ちそうになりませう。(ト盃さかづきを取る、おこよ酌しやくをする。祝言しゆげんの盃さかづきは女子むすめよりさすなれと、そこ

を略りやくして、わしからそなたへ。(トおこよへ盃さかづきをやる。)

こよ 有難うござります。〔トおとらついでおこよ呑む。〕

長五 そのお盃は、殿様へ。

こよ それでもあんまり。

源之 さあ、遠慮なしに、頂戴々々。

こよ お、それながら。〔ト盃を返す、源之丞又呑む。〕

源之 こりやおとらとやら、何かと骨折り一つ過ごしやれ。

とら はい、お有難うござります。〔ト盃を取る、長五郎酌をする。〕

源之 長五郎、肴をやりやれ。〔ト紙入を渡す。〕

長五 畏りました。〔ト金入より小判を出し思入あつて。〕もし殿様、額はなしかえ。

源之 え、それを取らせいな。

長五 そんなら是れを、〔ト思入あつて紙に包み。〕殿様が、お肴を。

とら おや、わつちに是れを、有難うござります。〔ト帯の間にに入れて。〕さあお盃も濟んだれば、あん

まり更けねえそのうちに。

長五 お、媒人は背の内だが、さうしてお床は。



とら あすこへ取つて置きました。(ト上手屋體を教へる。)

長五 むさくるしくとも此の一間へ。(ト長五郎源之丞を上手屋體へ連れ行く。)

とら さあおこよさん、お前も早く。(トおとらおこよの手を取りて引立てる。)

こよ あい。(ト嬉しき思入。)

とら さぞ嬉しいことだらうね。(トおこよの恥かしがるをおとら上手屋體へ突入れる。源之丞思入あつて、)

源之 どれ、樂しき夢を結ばうか。(ト唄になり、上手屋體の障子をしめる。)

とら 先づ、待女郎の役は濟んだ。

長五 こつちは色氣より慾氣だが、一兩といふ金は容易なことぢやあ手に入らねえが、うっかりして落

すなよ。

とら どうして、わつちやあ小判といふ物を、始めて貰つたよ。

長五 半分こづりを寄越しねえ。

とら おや蟲の好いこと。さあ長さん、奥で一口。

長五 極熱爛で。

とら 火傷をおしでないよ。

長五 ちけえねえ。

ト合方にて長五郎おとら奥へはひる、やはり合方にて花道より喜六提灯を持ち、出来り、花道にて、

喜六 さつき長五郎がおとらめに、娘は内に居るかと思ひ、おれが顔を見て何だか譯を言ひ兼ねたは、  
てつきり譯のあること、稻荷様へ参る振で外へ出たは、若しや娘に悪い蟲でも、附いたのでは、  
あるまいかと、案じられてならぬゆる、裏からそつと内へはひり、簾と様子を窺はう、む、さう  
ださうだ。

ト右の合方にて喜六提灯の明りを消し、思入あつて下手の木戸へはひる。時の鐘、なまめいた合方に  
なり、上手屋體より以前の源之丞おこよ出来り、四邊へ思入あつてよき所へ住ひ、

源之 君が一夜の情には、百歳の命を延ぶる今宵の契り、そちも必ず忘れまいぞよ。

こよ 勿體ないおつしやりやう、賤しい私を末かけて、お見捨てなされて下さりますな。  
源之 何の見捨て、よいものかいの。

こよ え、お嬉しう存じます。(ト此時奥にて、)

喜六 「千秋萬歳の、千箱の玉を奉つる。」

ト兩人びつくり、合方になり、奥より喜六着流し羽織に着替へ、眺への三方へ菓子を載せ持出で、

之丞の前へ出し下手へ住ふ。兩人は思入。

こよや、お前は父さん。

喜六 こりや窃にしやれ。もしお殿様、わたくしは此娘の親父でござります。

源之 すりや、其の方が此の家の主人。

喜六 喜六と申しますかたくな者、最前長五郎が娘の事をおとらに尋ね、何やら用があるを私に隠す様子、若しや娘に悪い蟲でも附いたのか、何でも仔細のあること、其場を立つて様子を見れば思ひ掛けなき御大身様のお入り、仔細の様子を承り、有難いやら勿體ないやら、嬉しうて、あの小座敷で最前から、泣いてばかり居りました。

源之 そのやうに言はれては面目次第もない仕合せ、必ず笑うてたもるなや。

喜六 勿體ないことおつしやります、不束なる娘を御寵愛の有難さ、何とお禮の申し上げやうもござりませぬ、さりながら隠すとすれど壁に耳、度重なれば人の目に立てば大事の御身の上、お手引いたせし長五郎は一筋縄にて行かぬ悪漢、若しや凶事でもある時は取つて返らぬ一大事と、さまざまに心を碎き、やうく思案を回らし、わたくしが以前懇意にいたしました、大音寺前に賣卜渡世をいたし居る、梶井主膳と申す浪人、才智勝れし者なれば彼が方へ娘を預けまして、表向き

雪駄直し長五郎

は急病で死んだと披露いたしますれば、氣の附く者はござりませねば、此親父が彼の方へ窃にお供いたしませう、其上にて兎も角も取り計らひ方もござりませう程に、此家へお出ではへ背限り、必す御無用になされませ。

源之 重々厚き其の親切、忘れは置かぬ忝けない、詞に任せ其の方が便りを必す待つて居るぞよ。

こよ 日頃に似合はぬ粹なお心、まことに父さま大明神さま〜。

喜六 御覽じませ、形は大きうても子供同然な娘、此の末ともにお殿様、お目掛けられて下さりませ。

源之 侍冥利、二腰さゝぬ法もあれ、心遣ひは無用にいたしやれ。

喜六 え、有難うござります。(ト七つの鐘)ありや七つ、夜明けまでは間もあれば、今少々御休息遊ば

して、夜明けぬうちにお屋敷へ。

源之 一先づ歸つて其の方が、便りを待つぞよ。

喜六 先づそれまでは、御機嫌よう。

源之 そちも堅固で吉左右を。

喜六 お待ちなされて下さりませ。

ト唄になり、喜六上手の屋體へはひる。時の鐘合方にて、奥より長五郎おとら出て、

長五 もし殿様、もうお目覚めでござりますか。

源之 長五郎、さぞ待遠であつたらう。

長五 なに、今まで奥で遣つて居りましたが、七つを打ちましたからお歸りがようござりませう。何の

ことはねえ、假宅の茶屋が迎ひのやうだ。

とら 長さん、野引きは法度だとさ。

長五 うさあねえ。

源之 長五郎そろく參らうか。

長五 お供いたしませう。(ト合方、所々にて鶏笛、源之丞舞臺へ下りる。おこよ大小を取つて渡しながら、)

こよ そんならどうでも、お歸りでござりますか。

源之 名残り惜しくは思へども、曉近き亂鳥、

とら 又のお出でを樂しみに、

長五 夜明けぬうちに、

源之 おこよ、さらば。(ト行かうとする、おこよ下へ下りて、)

こよ もし、(ト源之丞の袖を引く、兩人ちつと顔を見て名残りを惜しむ)

源之長五郎、もう明けるかな。

長五 すつかり東が白みました。

こよ そんならどうでも、

とら お名残の惜しくも、(トおこよを隔てる。)

長五 明けないうちに、(ト長五郎源之丞を門へ出すを木の頭。)

お出でなさい。  
トおこよ行かうとするをおとら留める、源之丞歸らうとするを長五郎隔てる。此模様よろしく、あれ

また憎やの唄にて、

ひやうし幕

## 二幕目

名越 山崎屋の場

小袋 坂裏手の場

神輿ヶ嶽 山下の場

〔役名〕 雪駄直し長五郎、山崎屋與五郎、鳶の者下駄の市、山崎屋與次兵衛、駕屋甚兵衛、小手柄  
半次、山崎屋番頭権九郎、三原傳藏。石井半三郎妻熊坂お長、山崎屋娘お照、同下女お静等。〕

(山崎屋吳彫見世の場) 本舞臺一面の平舞臺、向ふ山崎屋と記せし長暖簾、右手中棚帯地を並べ、

下に引出しの箆箱、左手反物を積みし棚の書割り、上の方書心に一間障子屋體。此前に帳場の格子、下の方いつもの門口まで書心に三間の見世附、庇に紺暖簾、奥の方紺の長暖簾、此の前に用水桶、下座の所町木戸、此間漏斗に往來の遠見、總て名越明神下、山崎屋吳服見世の體。こゝに権九郎羽織着流しにて帳場の内に帳合をして居る、丁稚立ちかゝり居る。手代の一、二硯箱を控へ、買物買ひ△□の三人前に住ひ、反物小切など取散らしある、此見得鳥追通り神樂にて幕明く。

手一 判取り。(ト丁稚受取りを持ち、)

丁稚 はアい、

手一 毎度有難うござります。(ト受取を渡す。)

○ 是れは大きいお世話になりました。(ト下手へはひる。)

手二 あなた様のは斯様な品では如何でござります。(ト反物を見せる。)

△ わつちア職人だから、銘仙より此糸城にしやせう。(ト反物を取る。)

手二 それは、とんだよい柄でござります。

□ もし、こりやあ珍らしい巾形だね。(ト切地を取つて見る。)

手一 左様でござります、當年の新形でござります。

□ 道理だうりで今いままで見みない形かただ。

△ この結城ゆふぎは二分二朱ししゆだね。

手一 左様さやうでござります。

△ それ、額がくが二つに二朱金しゆきんが一つあります。(ト腹掛はらかけの隠かくしより金かぬを出だしてやる。)

手二 是れは有難ありがたうござります、只今ただいまお受取うけとりを上あげます。

△ なに、それにやあ及びおよやせぬ。

□ わたしやあ歸かへりに寄よるから、此この中形ちゆうがたをのけて置おいておくんなせえ。

手一 畏かしこまりました。

手二 又何またなんぞ御用ごようをお願ねがひ申まします。

△ あい、おやかましようござりました。

手二 是れは有難ありがたうござりました。(ト△□の兩人下手ふたりにんしもてへはひる。)

權九 與助よすけどん、今日けふはお客きやくの絶たえる間まがないの。

手一 左様さやうさ、今朝けさから引續ひきつづいて職人衆しよくにんしゆうの客きやくばかり。

手二 何なんでも此節このせつは、職人衆しよくにんしゆうのことだ。

権九 夏仕入れは、縮緬より木綿を餘計に仕込まずばなるまい。

手一 今の内わたし共は、夜食をたべてしまひませうではないか。

手二 ちつと早いがお客の途切れだ、番頭さんお頼み申します。

手一 さあ来さつしやいよ。(ト手代二人奥へはひる。)

権九 これ小僧、突立つてばかり居すと、茶碗でも片附ける、やれく世話のやけたことだ。

ト鞠唄の合方にて、奥よりお照出來り、

お照 権九郎、與五郎さまはまだお歸りなさらぬかいの。(ト権九郎つんとして、)

権九 はい、見世番はいたしますが、與五郎さまの番はいたしません。

お照 其のやうな意地の悪いことを言はずと、どうぞ教へてたもいなう。

権九 何ちや教へてたも、お、教へて上げませうとも、教へたうてなりませぬ。

トお照の側へ寄る、丁稚見て、

丁稚 やあ番頭さんとお嬢さんと、ほうやらほく。(ト是れにてびつくりして飛び退き、)

権九 え、又しても入らぬ口を、奥へ行つて行燈の支度でもせい。

丁稚 まだ行燈の支度には、早うござります。

權九 早くッてもいゝから奥へ行けよ。

丁稚 あゝ無駄なことだに。

權九 何だと。

丁稚 そりや又怒つた。(ト丁稚逃げてはひる。權九郎お照の袖を控へ)

權九 お嬢さん、まあちよつと下においでなされ、あゝお前さまはおいとしいなあ。(ト合方になり、お照を捉へ) 許嫁ゆゑ末々は夫婦にならうと思召す與五郎さまは、吾妻といふ藝者と疾うから言交し、毎日々々お屋敷を廻るといふは表向き、内證は吾妻と二人連れ、今日は花見の芝居のと片時側をはなれぬ中、それを知らずに心中立てるは今時流行らぬ大きな野暮、外に男をこしらへて面當なされるが先づ當世、お氣があるならツイこゝらに、よい男がござりますぞえ。

ト權九郎思入、お照もこなしあつて、

お照 さあ、私も疾からその話を、聞いてゐる故よそ外に、よい殿御があつたらと。

權九 思つておいでなされますか、それは幸ひその男は、どんな男でござりますぞいな。

お照 わたしの思ふは、二丁目の役者によく似てゐるわいの。

權九 はて、二丁目の役者なら、彦三郎に三十郎、但し梅幸か竹三郎か。

お照 いえく、そんな人達ぢやないわいの。

権九 それでなければ新升か。

お照 わたしの思ふは、厭味のない、すつきりとしたよい男。

権九 そりや慥に今業平と、世間で噂の國五郎、

お照 え、もうわたしや國五郎とけじくは、きつい嫌ひぢやわいな。

権九 ほうい、してお前様のお好きなのは、

お照 あの前目の弟の、権十郎ぢやわいの。

権九 それでは、やつぱり若旦那か。

お照 さうぢやわいの。

権九 え、けじくと一緒にされたか。このまゝつまみ出されるとも、(トお照を捉へる)

お照 何をしやるぞいなう。

ト通り神樂鞠唄にて権九郎お照を追廻す、此の内花道より與五郎羽織着流しにて出來り、直に舞臺へ來り内へはひる、権九郎與五郎を捉へ、

権九 あの、うつそりの若旦那に。

與五 こりやこん權九郎らう、どうしたのぢや。(トこん權九郎らう顔かほを見てびつくりなし)

權九 や、若旦那わかだんなか。

お照 こりや、よい所ところへ。

權九 あゝ、悪い所ところへ。

與五 まだ日ひの暮くれぬに見世先みせさきで、こりやうつそりしてはるられぬわい。

權九 ほんにうつそりしてはるられませぬ。どれ、奥おくを見廻みまわつて來きませうか。

ト鞠唄まりうたの合方あひかたにてこん權九郎らう奥おくへはひる。お照思入てるおもひいれあつて、

お照 ても憎にくらしい、こん權九郎らうづら。

ト奥おくへ思入おもひいれ、らう與五郎ごよき所ところへ住すまひ、

與五 いや、憎にくらしいか可愛かはいらしいか、知しれたことかいの。

トつんとして煙草たばこを呑のみ居ゐる、お照思入てるおもひいれあつて、

お照 えゝも、可愛かはいらしいとは、そりや何なんのことぢやぞいの。

與五 何なんのことか與五郎らうは、うつそりゆる知らぬわいの。

お照 そのひざりごとはお前まへより、わたしが言いはねばならぬわいの。

與五 そりや何を。

お照 懷育ちのわたしぢやとて、よう知つてゐるわいな。(ト誂への合方になり、) 許嫁とは名ばかりにて

お側へとは寄ることなく、朝夕一つに居りながら、すけなう暮すも誰ゆゑぞ、皆吉原の吾妻ゆゑ、そりやもう婀娜とやら意氣とやら、噂の高い藝者さんには所詮及ばぬ野暮育ち、お氣に入らぬは無理ならねど、又嫌はれし身になりては、吾妻さんがないならばと恨む心を慎みて、一旦夫と申うたからは外の殿御は持つまいと、操を立つるわたしが心、少しは不便と申うてなら、三度に一度はお優しいお詞掛けて下さんせ、それ樂しみに末々は髪をおろして尼になる、わたしや覺悟でござんすわいな。

與五 すりやお照どのには、わしゆゑに。

お照 けふ母さまの命日ゆゑ、お寺參りを幸ひにお住持さまへお願ひ申し、附けて貰ひし此法名、(ト懷より紙に書きし法名を出し、) 派手な模様の振袖も、ほんの浮世の義理ばかり、墨染を着る心をやわいなあ。(トお照泣き伏す、與五郎思入あつて、)

與五 聞けば聞くほど面目なき内を外なる我が身の放埒、是れも餘儀なき譯あつて、何を隠さう吾妻といふは我が親人に仕へたる甚兵衛が娘にて、親人流浪になつてより貢ぎの爲めに甚兵衛が、藝者

に賣りし恩義に依り、辛き座敷の勤めをも少しは樂にさせんと思ひ、つい一度行き二度行きて、馴染を重ね義理づくに、引くに引かれぬ買論に、見捨てることの出来ぬも意地つく、親の許せしそなたを捨て、見替へる心はない程に、必ず恨んで下さるな。

お照 そりや、あの、ほんまに。

與五 二世も二世も連添ふ女房、何の嘘を言はうぞいの。

お照 嬉しうござんす、其お詞が未來の樂しみ。

與五 そんならどうでも、

お照 此世はどうぞ吾妻さんと、中よう添うて下さんせいなあ。

與五 それちやというて。(ト此以前より後へ下女のお静出かゝり居て)

お静 あゝもし與五郎さま、一旦斯うとお照さまが思召したる上からは、今更後へは返らぬ仕儀、只此後はお心休めに、十度のもは七度に内において遊ばすやう、憚りながら私がお願ひ申し上げますわいな。

與五 改めそなたが頼ますとも、此の心底を聞く上は、廓へ足は向けられぬわいの。  
お静 いえく、それでは。

お照却つてわたしが。

與五はて、浮世の義理は捨てられぬわいの。(ト思入)

お静ほんにまあお久し振りで、若旦那さまの御機嫌のよいお顔、お照さま、御一緒にお部屋へおいでなされませ、お煮花を入れて上げませう。

與五こりやよう氣が附いた、そんなら奥へ。

お照與五郎さん。

與五お照、おぢや。

ト唄になり、與五郎お照、お静附き奥へはひる。通り神樂鞠唄になり、花道より熊坂お長御用達女房のこしらへ、小手柄半次の久助、紺の着附脚絆胴金の脇差、小風呂敷の包みを持ち黒鴨のこしらへにて附添ひ出來り。

お長これ久助、山崎屋といふは、此向うの見世かい。

半次左様でござります、小見世ではござりますが、代物はよろしうござります。

お長さうして流行物もあるとのことぢやの。

半次何でも大丸に續いてござります。

トやはり右の鳴物にて本舞臺へ来る、此内奥より權九郎手代二人出で、  
三人 これは入らつしやりませく。

お長 御免なされませいな。

權九 さあく、すいと是れへお通り遊ばしませ。(ト是れにてお長上の方へ生ふ。牛次入口に居る) 小僧、

お茶をお上げ申さぬか。

丁稚 はいく。(ト茶臺へ載せお長牛次に茶を出す、權九郎よろしく捨ぜりふにて世辭を言ふ、お長思入あつて)

お長 私はお銚御用を足しまする、石井半三郎が家内の者でござりまする。ちとお誂へ申したいものが

ござりまして、参りましたわいなあ。

權九 それはく、手前店御最頂とござりまして、有難い仕合せにござりまする。若し隠居さま、お客さ

までござりまする、ちよつとお出でなされませ。

ト合方にて、與次兵衛隠居にて出で、お長を見てよい女だといふ思入。

與次 これはく、よう入らせられました、私事は此家の隠居淨閑めにござりまする、御用向を仰せ附けら

れまして、有難い儀にござりまする。

お長 いえもう、些細なことではござりますが、是れからお見世でお貰ひ申したうござりまするわいな。

權九 澤山御用をお願ひ申します。 (トお長懐より書附を出し)

お長 註文の品々は、是れへ記して参りましたわいな。 (ト權九郎受取つて)

權九 へいへい、何々「裾模様、御振袖、同じく搔取、錦、天鷲絨、帶地、御召縮緬、中形縮緬、紅絹、縹色裏地に、黒緇子袖口、眞綿共、右の通り、」是れは數々の御用向き。

皆々 有難い仕合せにござりまする。

與次 これ與助、お菓子を早く。

手一 はい、畏りました。 (ト手代奥へはひる。)

與次 ついでにお歸りのお食事もせいよ。

お長 いえもう、御無用になすつて下さりませ。

與次 左様ならお品物を御覽に入れますから、二階へ入らつしやりませ。

お長 斯様いたしますせう、今日はちと廻り道もござりますれば、どうぞ明日お手代衆に、初瀬小路の手

前宅までお持たせ下されませ。左様いたしますと主人にも見せまして、お取極めをいたしますわ

いな。

權九 畏りましてござりまする。私が持参いたしますでござりまする。

與次 然し、まだよろしいではござりませぬか、御酒を一つ差上げませうと、申し附けましてござりする。

お長 有難うはござりますが、ちと廻り道もござりますれば。

權九 左様なれば、明日上りますでござりまする。

半次 是れから歸りに脇へ廻れば、途中でとつぶり日が暮れよう。もし、どうぞ提灯を一張貸して下さりませ。

權九 お安い御用でござりまする。小僧よ、提灯をお上げ申せ。

丁稚 はいく。(ト下手より弓張を出し) お蠟ちはひつて居りまする。

半次 氣の氣いた小僧どんだ。(トこれにてお長立上り、門口へ出て)

お長 左様なれば、又明日。

與次 權九 よう入らつしやりました。

お長さ、行かうわいの。(ト鞠唄通り神樂にて、お長半次花道へはひる。)

與次 初春早々、あのやうなお得意が殖ゑるとは、今年は縁起がよいではないか。

權九 よいと申せばあの御新造、氣立てもよければ器量もよし。

與次 ほんに、あゝいふ女中なら、

權九 お氣がござりますか。

與次 馬鹿を言はつしやい。

兩人 はゝゝゝ。

ト鞠唄通り神樂になり、花道より傳藏序幕の装にて出て、舞臺へ來り、

傳藏 頼まう。(ト言ひながら内へはひる。)

與次 あなたは三原傳藏様。

傳藏 許しやれ。(ト右の合方にて上手へ通る。)

與次 これはく、ようお出でなされました。

傳藏 淨閑、權九郎、久々對面いたさぬな。

與次 左様にござりまする、隠居いたしましたから、とんとお屋敷へ出ませぬゆる、お目通りもいたし

ませぬ。

權九 して今日は、何ぞ御用向きでござりますか。

傳藏 いや某今日参りしは別段の儀でもないが、先月晦日に狩場の暮張り其外衣服の代金、勘定所にて

相渡せしに、又候今日も此家の手代右の代金受取りに勘定所へ参りしゆゑ、如何なる間違ひなるか質し参れと、重役共の差圖を受けて罷り越した。

與次 これは怪しからぬ儀でござります、未だ其の金子は頂戴いたしませぬが、して先月晦日にお渡しなされしとは、そりや何者にお渡しなされましたな。

傳藏 何者でもない、此の家の忰與五郎に相渡した。

與次 え。

傳藏 證據は則ち此通り、受取書を取り置いたるわ。

ト懷 中より百兩の受取書を出す、與次兵衛取上げ見て、

與次 成程これは忰が手迹。こりや權九郎、與五郎を呼べ。

權九 はい、畏りました。もし與五郎さま、ちよつとお出でなされませ。

ト合方になり、奥より與五郎出で傳藏を見て、

與五 これはく傳藏様、ようお出でなされました。

傳藏 いや、あまりようも参らぬて。

與次 これ與五郎、それへ出い。只今傳藏様がお出でにて、先月晦日にお役所にて百兩の代金をちにお

渡しなされたとあるが、受取つた覚えがあるか。(ト是れにて與五郎ぎつくり思入。)

與五 さあ、其代金は、受取りましてござりまするが。

與次 して、其金子は如何いたした。

與五 さあ、其の金子は。

與次 こりや、知るまいと思ふか横着者め、吾妻とやらいふ藝者に馴染、大枚百兩といふ金、遣ひなくしたであらうがな。

與五 全く以て。

與次 そんなら何に使つた。

ト與五郎權九郎の袖を引き、何とか言つてくれといふ思入、權九郎素知らぬ振をして居る、與五郎長非なく、

與五 其の金子は、貸しましてござりまする。

與次 して、そりや何者に。

與五 外でもござりませぬ、是れなる權九郎に貸してござりまする。其の譯と申しまするは、さる浪人に慮外をなし既に手討になる所、百兩にて其の場を扱ひ、千葉様よりわたくしが、受取り参りし

金子かねすをば、貸かしてくれと申まをしますゆゑ、人の命いのちに替かへがたく、據よんぞろなくあなたを偽いより、貸かし遣やしてござりまする。(ト言いひかけるを、權九郎ごんくわう打ち消けして、)

權九 あこれく、與五郎よごろうさまそりや何なにをおつしやります、私わたくしにお貸かしなされたなど、は、何日なにひのこと  
でござりまする、權九郎ごんくわうは存ぞんじませぬぞ。

與五 何なんの知らぬことがあるものか、あれ程ほどそなたが頼たのんだのに。

權九 是これは又また情なさけない、如何いかにその身みに火かが附つけばとて、覺おぼえのない權九郎ごんくわうに、言いひかけをさつしやりますか。

與五 言いひかけとは何なんのこと、慥たしかな證據しやうこは其その時に、證文しやうもんを取とつてあるわいの。

權九 なに、證文しやうもんがござります、其その證文しやうもん拜見はいけんしませう。

與五 さあ、それは。

權九 證據しやうこをお見みせなされませ。

與五 其その證文しやうもんを入いれたる紙入かみいれ、盜ぬすまれたゆゑ、今いまとなつては。

ト口惜くちをしき思入おもひいれ、此時このとき花道はなみちより下駄けだの市いち、紺こんの腹掛はらかけ股引ひき蕎そばの者もののこしらへにて出來いでり、門口かどぐちに窺うかがひ居ゐる、與次兵衛よじべゑ思入おもひいれあつて、

與次 うぬ、憎い奴め。(ト與五郎の襟上を取つて引附け) 藝者狂ひに遣ひ捨てしを、權九郎に罪を塗り附け、ぬくぬくそれで濟まさうとは、思へばく憎い奴、二朱か一朱のことならば不承もしようが大枚百兩、形なしにした腹癒せは、かうくく。

ト二尺さしにて打ちすゑる、奥よりお照お靜出て是れを留め、

お照 あゝもし父さん、是れには様子がござんせう。まあく、御了簡なされませいなあ。

與次 え、そちが知つたことではないわい。(ト與次兵衛お照を突きのける、傳藏又與五郎を引附け、)

傳藏 やい與五郎、おのれ金子を受取りながら、親淨閑へ渡さぬゆる、又候手代が勘定所へ参りしゆる

に我々が、重役の疑念を受け帶刀にも拘はる仕儀、これ皆おのれが仕出せしこと、自體生白けた

しやツ面ゆる藝者などが惚れるから、かゝる事も起ると申すもの、以後の見せしめ、かうくか

う。(ト扇にて打ち据ゑ突放す、與五郎口惜しき思入。)

與五 ちえ、大事の證文失なうて、身の言譯も立たざるか。是れといふも、おのれめゆる。

ト權九郎の胸づくしを取り思入。

權九 又してもく、如何に物が言ひよいとて正直正路の權九郎へ、言ひかけなさはお情ない、若旦那でもどなたでも、もう此の上は堪忍ならぬ。

ト算盤を持つて立ちかゝるを、お照お静その手に縫り、

お照 あゝこれ、そなたまでが同じやうに、

お静 お怪我があつては濟まぬわいな。

權九 えゝ、自體お前方が留めるのが、腹が立つてならぬわいな。(ト振拂ひ) いつそのことに。

ト算盤を振上げる、此時門口の下駄の市つかくとはひり、權九郎を取つて投げる。

あいたゝゝゝ。(ト與次兵衛見て)

與次 や、そなたは抱への下駄の市。

權九 何でおれを投けたのだ。

市 投けてもいゝ、打ち殺しても大事な。

權九 そりや又何ゆゑ。

市 何もかもいるものか、與五郎さまはわれには何だ、此山崎屋の若旦那、主人を打つても大事ねえか、一分一厘疵が付きやあ言はずと知れた主殺し、三尺高い木の空で冷てえ槍の田樂は、木の芽は、ゆんだがどつとはしめえ、それゆゑおれが留めたのだ、命が入らずば打たつしやい。

權九 さあ、それは。

市 え、恩知らずの兀天窓め、隅の方へ引込みやあがれ。

權 へ、い。(トしよげる。)

與次 いや大事な、打ちのめせ。今與五郎は此親が、久離切つて勘當なすわ。

與五 すりや私を。

與次 大枚百兩といふ金を、遣ひ捨てたる科により、勘當なせば主人でない。

權九 主人でなければ番頭が、打つても大事あるまいが。人の事より我が身の事、出入先きの番頭を、

抱へが投けては濟むまいが。

市 お、濟むわ。

權九 そりや又何で。

市 若旦那が勘當ならおれも爰の出入を上げらア。出入でなけりやあ町内の高が商人呉服見世、手拭

一筋買つてもお客だ、うぬらの天窓の十や二十ぶツ毀しても大事ねえ、悪くぐつ／＼ぬかしやあ

がると、屋體骨を叩ツ毀すぞ、鍵の降らねえ用心しろ。

與次 イヤア。(ト恐れる。傳藏思入あつて)

傳藏 うぬ、鳶の者の分際で武士の前をも憚らず、最前からの雑言過言、眞一つになす覺悟なせ。

市

ト傳藏ノを持ち立ちかゝる。下駄の市舞臺の眞中へ胡坐をかき、

何だ御大層な覺悟呼はり、見掛けはけちな野郎だが、餓鬼の折から役場ぢやあ、一番かけに火の中へ飛んで飛び込む向ふ見ず、どんなあほりを喰はうとち、五分でも引かねえ働きに、梯子持から段々と登つて今ぢやあ頭分、野暮に背中や手の先きへ彫物をして脅すのとは、ちつと違つた處の者、朱入りの代りは生疵の、年中絶えねえ此の體、腕から切るか足から切るか、骨を殘さすつぱりと手際を見せて切らつしやい。

傳藏

うぬ、其口を。(ト抜きかけるを、與次兵衛留めて、)

與次

あゝもしく御了簡下さりませ、彼れをお手討になされますると、跡の難儀は此淨閑、御檢使沙汰に大物入り、百兩損した上なれば、半錢も出したうござりませぬ。

傳藏

それぢやと申して。

權九

はて、主人が難儀になりますれば。

與次

どうぞ御了簡下さりませ。

傳藏

む、此家の難儀とあるからは、主人に免じて助けくれう。(ト傳藏思入あつて下に居る。)

市

へん、大方そんな事だらうと思つた。

與次 さあ與五郎、何事も皆われから、又もや難儀のかゝらぬうち、此家をとつと、出て行きやれ。

與五 (思入あつて) はい、参りますでござりまする。

市 して若旦那には、是れからどこへ。

與五 さあ以前の家來海士崎町の、駕屋甚兵衛が方へ行く心、是れに附けても實の親、治太夫様の御泊

浪に、便りない身の此の與五郎、力と頼むはそなたばかり。

市 そりやお案じなされますな、及ばすながら私が、どこがどこまでもお世話をいたします

も爰の家ばかり、日は照りませぬ。さあお供ませう、お出でなさりませ。

お照 そんなら、是れが。(ト袖にすがる。)

與五 勘當受ければ、縁は是れまで。

お照 ハア。(トお照泣伏す。)

與五 よしなき我ゆるお照どの、又二つには親御まで、お年の上には何かの御苦勞。

與次 かゝる事もあらんと存じ、拵へ置いた此の附髪、(ト硯箱の引出しより附髪を出し天窓へ附け) 昔に

かへる身は與次兵衛。

與五 随分ともに、御機嫌よろしう。

與次 え、知らぬわい。(ト與次兵衛脇を向く。)

市 慾張り親仁に構はずと、さ、若旦那ごさりませ。

ト與五郎を引立て下駄の市門口へ出る、お照お静泣きながら、

お静 左様なれば若旦那。

お照 與五郎さま。

與五 達者で居やいの。

お照 お静 ハア。(ト泣伏す。權九郎立ちかゝり)

權九 え、何をぐづく、早く行つて貰ひませう。(ト下駄の市權九郎を見く)

市 證據のねえを附込んで、いは、騙りの權九郎。(ト立ちかゝるを與五郎留めて)

與五 あこれ、何事も此身の越度。

市 それだといつて。(ト又立ちかゝるを、)

權九 一昨日ござれ。(ト門口をびつしやり締める。)

市 うぬ、罰當りめ、覺えて居ろよ。

ト唄になり、與五郎悄悄と先きに立ち、下駄の市跡に附添ひ、花道へはひる。

與次 さて、憎き忤與五郎、金子を使ふのみならず、あなた方まで御苦勞掛け、

傳藏 それも金子の行き場が分り、身共も是れにて安堵いたした。

與次 何はなくとも傳藏さまには、奥にて御酒を。

傳藏 いや、身共は是れなる權九郎に、申し談ずる仔細もあれば、與次兵衛には構はず奥へ。

與次 左様なれば御免下され。さ、娘來やれ。

お照 あい。(ト唄になり、與次兵衛お照の手を引き、お静附添ひ奥へはひる、跡傳藏權九郎残り)

權九 傳藏さま。

傳藏 權九郎、首尾よく參つたな。

權九 これであなたも私も、戀の遺恨を晴らしました。

傳藏 勘當の身となる上は、吾妻はいはずと身共が女房。

權九 お照はさしづめわしが女房。

傳藏 思へば拂ひの百兩か、

權九 種々様々の用に立ち、

傳藏 互ひの望みの叶ふといふも、

権九 梶井主膳が皆働き、

傳藏 猶も彼めに密談なし、

権九 何かは後して、

傳藏 権九郎、

権九 傳藏さま、

傳藏 その内逢はう。(ト時の鐘唄になり、傳藏は下手、権九郎は奥へはひる。是れにて道具廻る。)

(山崎屋裏手の場)

本舞臺向う一面窓が返し附きの黒塀、三尺の開きの庭口、後黒幕、見越しの松、日覆より同じく釣枝、總て山崎屋裏手の體、時の鐘合方にて道具留る。とやはり右の鳴物にて、真中の開き口より、お静お照の手を引き出て來り、四邊を窺ひ。

お静 お嬢さま。

お照 お静。

お静 あゝもし、お静におつしやりませ。

お照 どうぞ早う與五郎さまに、ま一度逢はせてたもいの。

お静 必ずお案じなされますな、是れから直にお供なし、きつとお逢はせ申しますから、ようお支度なされませ。(トお静身支度をなす。)

お照 與五郎さまが失ひしあの百兩は權九郎が、正しく巧みの様子なれど、證據なきゆる言譯立たす、越度となりしがおいとしさに、母様より貰うたる此三光の櫛の價は、百兩餘りと聞きしゆる、せめてこれをお渡し申し、お身の明りの立つやうに、どうぞして上げましたいわいなあ。

お静 是れにて金子調へば、お身の明りの立つは必定、斯ういふ内も心が急げば、(トお照に頭巾を冠せし)人の目つまに掛らぬやう。

お照 少しも早う。

お静 サ、ござりませ。

ト時の鐘合方にて、お静お照の手を引き花道へ走りはひる。是れにて此道具廻る。

(山崎屋の見世、夜半の場) 本舞臺元の見世の道具、一面に戸をさし真中に三尺の潜り戸、總て夜の體、時の鐘にて道具留る。と見世の潜りより手代の一、二、丁稚、下男二人、山崎屋といふ弓張提灯を持ち出来る、跡より權九郎出て、

權九 これく手前達は東西に別れ、早く跡を追掛けてくれ。

皆々 はいく、畏りました。

權九 何でも與五郎を慕つて行つたのだから、山下の界限を氣を附けてくれ。

手一 それぢやあ私共は、山下の方へ行きませう。

權九 おうさうしてくりやれ、いや又それともお靜が宿の、六浦の方へ行つたかも知れぬ。

手一 いや、六浦の方は淋しくツて、氣味が悪いな。

權九 そんなことを言はずとも、それ、骨はぬすまぬ、早く行つてくれ。(ト權九郎金を遣る。)

手一 是れは兩方へ一分づゝ。

手二 それでは怖くも何ともない。

權九 その勢ひで少しも早く。

皆々 合點でござります。(ト時の鐘、合方にて花道へはひる。)

權九 あ、折角與五郎を罪に落とし、お照さんを女房と思ひの外に駈落とは、いつも同じ芝居の狂言、あんまり作者も智恵がない。ちつとは娘が番頭に、惚れる趣向がありさうなものだ。

ト花道の方を見て居る。時の鐘合方ばた／＼にて、花道より、以前のお長櫛笄を抜かれし體にて變

を亂し、長橋袴一つにて走り出來り、權九郎に繩り附き、

お長 もし、盗人に前逢ひました者、お助けなされて下さりませく。

權九 え、こつちにも取込み事、それどころでは、(トお長の顔を見てびつくり) や、あなたは最前の御新造さまではござりませぬか。(トお長權九郎を見て)

お長 ほんにお前は山崎屋の、そんなら爰は。

權九 はい、山崎屋の見世先きでござります。

お長 え、嬉しやく、それでちつと落附いたわいな。

權九 今承はりますれば、盗人にお逢ひなされたとおつしやりましたが、さてはお召物は盗人に。

お長 さあ剥ぎ取られて此姿、そのみならず大勢で手籠めになさんとせし所を、ソウく、逃けて來ましたわいな。

權九 それは危ないこととござりました、何は兎もあれ爰は見世先き、先づく奥へ。

お長 どうぞ匿うて下さんせ、怖うてくならぬわいな。(トお長顔へながら言ふ)

權九 御尤もでござります、さあ、おはひりなされませ。

ト權九郎先きにお長潛り戸より内へはひり、戸をびつしやり締める、時の鐘にて道具廻る。

（同じく奥座敷の場）——本舞臺一面の平舞臺、向ふ一間の床の間、此處地袋戸棚、違ひ棚、腰張り  
の茶壁、上手折廻し障子屋敷、此前に六枚屏風、真中に夜具長持と記せし誂への長持、總て山崎屋奥  
座敷の體。こゝに與次兵衛眼鏡を掛け、丸行燈の明りにて、手箱より小判を出し算へ居る、合方にて  
道具留る。

與次 與五郎めが跡を慕ひ娘が家出せし上は、もう一族揚げねばならぬ、どうか最前見世へござつた御  
新造のやうな女にて、持參をしつかり持つて來る、女房を一人持たいたいものだ、それでないと百  
兩の穴がめつたに埋らねえ。（ト金をしまふ。やはり合方にて下手より權九郎お長を伴ひ出來り）

權九 もし旦那、最前の御新造様が、お出でなされました。

與次 なに、石井様の、（ト眼鏡の上から見て）是れは如何なされました。（トびつくりなす。）

お長 最前こなたより歸りがけ、山の内にて四五人の盗人に出逢ひまして、髪飾りも衣類も皆剥ぎ取  
られたる上、手取り足取り私を辱めんといたす所、供の者が支へまする際を見合せ摺り抜け  
て、やうく逃けて參りましたわいなあ。

與次 それはひどい目に、お逢ひなされましたな。

お長 いえもう、生きた心地はござりませなんだわいな。

権九 よくそれでも其中を、逆け延びてお出でなされました。

與次 何にいたせお襦袢一つで、嘸お寒うござりませう、幸ひこゝに娘の衣類、これをお召しなされませ。(ト上手の屋體より、誂への派手なる小袖緋鹿の子の下締を持つて來る。)

お長 有難うござりますれど、此様な御厄介になりましては。

與次 何の御遠慮に及びませう。

お長 左様なればお詞に随ひ、少々拜借いたしませうわいな。

権九 どれ、引掛けてあげませう。(ト権九郎小袖をお長に着せる。)

お長 これは憚りでござりますわいな。(トお長小袖を着て下締を締める。)

與次 帶を何ぞあげませう。

お長 いえく、是れでよろしうござりますわいな。

與次 左様なればお心任せに。お、権九郎、最前差上げようと思つたお着があらう、お爛をつけて持つて來やれ。

権九 ほんに左様でござりました。どれ、持つてさんじませう。(ト権九郎奥へはひる。)

お長 いえもう、其のやうなお心遣ひは、御無用になされて下さりませ。

與次 いえ、どうで私わたくしも喰たべますれば、必ず御遠慮ごえんりよなされますな、

ト合方あひかたにて奥おくより權九郎ごんらう、硯蓋すざりぶたと誂子てしうし、盃臺さかづきだいに盃さかづきを載のせ持ち出來いでり、お長の前ちやうまへへ置おく。

權九 生憎あいにく今宵こよひは家内かないの者ものが、出拂でばらひましてござりますゆゑ、お吸物すひものさへ差上さしあげませぬ。

與次 さあ、何なにはなくとも、お一つお上あがりなされませ。

お長 いえく、私わたくしは、一向下かうくださりませぬわいな。

與次 ではござりませうが、お女中ぢやうちゆうはお氣きをお揉もみなされますと、えてお癪しやくの起おこるもの、御酒ごしゆは何なにより

よいお藥くすり、平ひらにお一つ召上めしあがりませ。どれ、お爛かんを見て差上さしあげませう。(ト盃さかづきを取り上あげる、權九郎酌ごんらうしやく

をなす、與次兵衛よじべゑぐつと呑のんで、左様さやうなれば、憚はまかりながら。

お長 折角せつかくの思召おぼしめしゆる。(ト盃さかづきを取上とりあげる。)

權九 どれ、お酌しやくをいたしませう。

お長 少々せうくおつぎ下くださりませいな。(ト權九郎ごんらうぐつと注つぐ)是これはまあ満々なみくと、どういたしませうぞいな。

權九 もし召上めしあがられずば、私わたくしがお助け申まをしませう。

與次 いやく、其そのお盃さかづきは私わたくしが、お助け申まをしませう。

權九 いえく、私わたくしが、先約せんやくでござりまする。

お長 まあ、お待ちなされませ、此のお盃は御主人へ御返盃といたしませうわいな。

與次 それは有難うござります。(ト盃を取り上げる。)これ、權九郎つがぬか。

權九 はい、つぎますかな。(トつんとしてつく。)

與次 知れたことぢやわ、おと、と、と、こほれるわえ、一粒萬倍々々、(トこぼれし酒を額へつけ) 然し、斯う満々とは呑めぬ、權九郎助けてくれぬか。

權九 いえ、私は酒は嫌ひでござります。(ト脇を向く。)

お長 少々ならば私が、お助け申しませうわいな。

與次 それは有難い。(ト一口呑んで)左様ならば、お助け下さりませ。(トお長取つて呑み)

お長 此のやうにたべましたら、今にきつう酔ひませうわいな。

與次 たんとお酔ひなされませ。

お長 したが女子が深うたべますと、みだらになつてなりませぬわいな。

與次 いや、なつてもよろしいではござりませぬか。

權九 も一つお過しなされませ。

お長 此のお盃は、番頭どのへ。

權九 それは／＼有難うござります。

ト權九郎悦び取らうとする所を、與次兵衛盃を引つたくり、

與次 どつこい、そつちへは遣らぬぞ。こりや、おれが助けてお貰ひ申したのぢや。

權九 でも、御新造さまより私へ。

與次 主の詞に背くのか。

權九 え、忌々しい、どれ臺所へ行つて一杯やらうか。(ト合方にて權九郎奥へはひる。)

與次 先づ邪魔を拂つたわえ。(ト誂への合方になり。) さ、も一つお過しなされませ。

お長 いえもう、私はきつう酔ひましてござりますわいな。

與次 それでもまだ仰しやつた、みだらにおなりなされませぬ。

お長 是れからもそつと過しますと、何所でも構はずそれなりに、臥りますのが癖ゆゑに、お酒ばかり

は夫から、きつう禁じられましてござりますわいな。

與次 お睡くなつたら御遠慮なく、爰へお休みなされませ。

お長 さあ今に迎ひの者は參らず、夜更けて戻るは氣味も悪し、殊にきつう酔ひましたれば、どうか今

宵はお邪魔でも、お泊めなされて下さりませいな。

與次 なに、お泊りなさる、それは有難い。お睡くなつたら其儘に、お横におなりなされませ。

お長 それほどまでに御親切に、お召して下さるとは、まことに嬉しうござりまする。

與次 わしも嬉しう思ひまする。(ト側へ寄らうとするを、お長飛び退き)

お長 あれ、何をなされませぬいな。

與次 さあ、これは。(ト袖を捉へるを、お長 振拂ひ)

お長 こりやあなたには、御酒機嫌でござりまするな。

與次 いえ酒機嫌ではござりませぬ、最前見世へお出での折、縮んだ皺も伸びるほど惚れましたれど、

人様の御新造ゆゑ、無駄な事と思ひましたに今夜のお出で、我が身に取つては結ぶの神、よい年

をして馬鹿々々しいとおさけすみもござりませうが、幾歳になつても忘れぬは此道ばかりでござ

ります、どうか一夜のお情に、預りたうござりまする。

お長 不束な私をそれ程までに思召す、お志しは嬉しけれど、夫のある身でござりますれば。

與次 つい應とはおつしやられまいが、假令夫のある身でも、手籠めに逢はゞ何となされませぬ。

お長 そりやどうも、是非がござりませぬわいな。

與次 さあ、そこでござりまする、最前の盗人に手取り足取り押へられ、手籠めに逢つて御覽じませ、ばつ

と世間へ評判立ち、お内のお恥になりまする、それとは違ふ私一人、誰も知り人はござりませぬ、無理なことちやが此願ひ、どうぞ叶へて下さりませ。

お長 それぢやというて女の操、こればつかりは、

與次 どうでもならぬと、おつしやりますか。

お長 お許しなされて下さりませいな。(ト與次兵衛思入あつて)

與次 よろしうござりますく、左様ならお泊め申すことはなりませぬ、今宵も最早九つ過ぎ、今から一人でお歸りなされ、途中でどんな馬鹿者が、どんな事をしようも知れぬ、さあノお歸りなされませ。

お長 そのお腹立ちは御尤もながら、今からどうして私一人。其様なことをおつしやらずと、お泊めなされて下さりませいな。

與次 そんならすなほに言ふことを、お聞きなされて下さりませぬ。

お長 さあ、それは、

與次 但しお歸りなされますか。

お長 さあ、

與次 さあ、

兩人 さあ〜〜。

與次 色よい返事をお聞かせ下され。(ト是れにてお長思入あつて)

お長 女子の身では第一に愼まねばなりませんねど、否と申せば歸れとの、其のお詞には是非なくも、操を

捨て、お心に、随ひまするが其代り、今宵限りでござりますぞえ。

與次 そりやもう御得心さへ下さらば、跡ねだりは申しませぬ。

お長 左様ならば一間にて、(ト立上り、瘡の起りし思入にて胸を押へ)あいた〜〜。

與次 こりや如何なされました。

お長 最前思はぬ賊に出逢ひ、怖い〜と思つたので、持病の癩が起りました。

與次 それでは押して上げませうか。

お長 いえ、少し横になれば直に納りますわいな。

與次 左様なれば、少しも早く。

お長 御免なされて下さりませ。

ト唄になり、お長是非なき思入にて上手屋體へはひり障子を締る。跡に與次兵衛嬉しき思入。

與次 さてうまいわく、俄雨で四つ手網へ大きな鯉がかゝつた同様、思ひがけない今夜の獲物、あつさりとした洗ひより、こつてりしたこい汁が下戸の口には何よりだ。どれ、手料理に。(ト上手の屋體を見込む。これを道具替りの知せ)かゝらうか。

ト嬉しき思入、合方にて此道具廻る。

(元の見世先の場) 本舞臺元の見世先きの道具へ戻る。と時の鐘にて、上手より非人の一頑冠りにて酒菰を冠り、下手より二、三、四、五、何れも酒菰を冠り出來り、

四人頭。

一 これ。(ト四人に囁き門口へ寐ると、花道より半次弓張提灯を持ち出で、門口へ來り、)

半次 お頼み申します。(ト門を敲く、是れにて内より上の戸を明け、權九郎顔を出し、)

權九 はい、どなたでござります。

半次 最前参りました、石井の供の者でござります。(ト提灯を見せる。)

權九 お、是れは御新造さまのお供さんか。

半次 はい、左様でござります。もしやこなたへ、御新造さまは。(ト言ひ掛けるを、)

權九 先刻お出でなされたゆゑ、お泊め申して置きました。

半次 やれ嬉しや／＼、それで安堵いたしました。定めて様子はお聞きなされたでござりませうが、途中にて盗人に出逢ひ、御新造さまを見失ひ、内へとは歸られず、所々方々を尋ねし所、お行方が知れぬゆゑ、もしやと思つて参りましたが、先づはあり所が知れまして、是れでお供が出来ます。

權九 いや最前からお前のお出でを、御新造さまも待つてゝあつた、さあく、おはひりなされませ。

ト上の戸を下し、潜り戸を明ける。

半次 左様なれば、御免なされませ。

ト半次内へはひる。此の後より門口にて寐て居たる非人皆々續いて内へはひる、内にて、

權九 や、こいつらは何で内へ。

一 盗人に來たのだ。

權九 ヤア、押込みだく。(ト時の鐘、ばたくにて此道具廻る。)

(元の座敷の場) 本舞臺元の座敷の道具へ戻る。とをかし、みの合方にて、以前の奥次兵衛、上手

の屋體を窺ひ居て、

與次 癪を幸ひ側へ行つて押して遣らうと言つたれど、寐れば直に納るといふので、爰に待つて居たが、いつの間にか扉の聲、もう癪も納まつたと見える。どれ、側へ行つて様子を見ようか。

ト上手の障子を明ける、ばたくになり、奥より半次権九郎を後手に縛り、四人繩を持ちて引立て、一は拔身を持ち出る、與次兵衛びつくりして、

や、こりや盗人か。

ト此聲に上手屋體よりお長出で、皆々を見てびつくりなして顔へ、與次兵衛に繩る。

一 さあ、聲を立てると一突きだぞ。(ト刀を臺へ突立てる。)

與次 どうぞお許しなされて下さりませ。

一 許してやるから、金を出せ。

與次 ええ。

一 明神下で評判の此頃仕出しの山崎屋、金のあるのを聞き込んで、態々盗みにやつて來たのだ、衣類道具に目は掛けねえ、金を残らず、

四人 出してしまへ。

與次 見込まれたれば仕方がない、命には替へられぬ。(ト箱より小判の包みを出し、)こゝに小判が二十兩

是れをお持ち下さりませ。(ト出す、一取つて、)

一 馬鹿アいへ、小切見世でも三間口、こんなことぢやあきかねえわ。

二 すべよく金を出しやあよし、

三 隠しやあがると、命がねえぞ。

四 それも一思ひにやあ殺さねえ。

五 一分だめしにしてくれらア。

與次 あゝ出しますすく、左様なれば、もう二十兩、是れで御了簡下さりませ。

ト地袋の戸棚より二十兩包みを出す。

一 えゝちびくくと刻みアがるな。(ト金を取り、)コウみんな見ろ、さつきの年増があすこに居るぜ。

四人 ほんになあ。

與次 さては最前、此女中を。

一 おゝ、櫛笄から衣類持物、残らず剥いだ、

四人 盗人だ。

與次 そんなら若しや御新造の、

五人 跡をば附けて、仕掛けたのだ。

與次 あゝ思案の外で匿つた、其の甲斐もなく女中のゑ、多くの金を取らるゝとは、飛んだ目に逢うたものだ。

一 われの代りに其の女は、おれを始め四人の者が、手籠めにするからさう思へ。

與次 すりや、あの女中を、お前方が。

五人 知れたことだ。(ト半次思入あつて)

半次 いや申し盗人どの、其の女中はわしが主人、櫛笄や衣類は兎もあれ、今こなた衆の手籠めに逢

つては、お供をして来た此のわしが、主人の前へ音譯ない、是ればかりは許して下され。

一 喧しいわえ、うぬが濟まうが濟むまいが、そんな義理を構ふものか。これ、そこに酒があるぢやあねえか、持つて来い。

二 合點だ。(ト賊の二銚子と、有合ふ茶碗を持つて来る。)

一 ついでくれ。(ト賊の一茶碗にて酒を呑み居る、お長與次兵衛に縋り)

お長 もし、どうぞ此の身を穢さぬやう、あなたも共々あの衆へ、お詫びをなされて下さりませ。

與次 お、尤もだ、これ盗人どの、金を出したわしが頼み、女中を手籠めにすることは、どうぞ許

してやつて下さりませ。

一 そりやあ色より慾の世の中、金さへ出しやあ許してやるわ。

與次 そんなら此の上まだ金を、

一 出さにやあ女を、

五人 手籠めにせうか。

與次 さあ、それは。(ト詰る。お長 絶り附き、)

お長 もしあなたならば兎も角も、あの衆達に此の身をば穢されましては私には、所詮生きては居られ

ませぬ。

半次 金子は後にて主人より、御返済しませうから、何卒今宵の所をば。

兩人 お助けなされて下さりませ。

與次 乗りか、つた船、仕方がない。(ト金箱を引くり返し、)是れで身上ありツたけ。

ト出す、一残らず金を財布へ入れ、

そんなら是れで、もうねえが。

與次 小二朱が一つござります。

一 金を取つたらあの年増を、又見のがせなくなつて來た。

三人 え。(トびつくりなす。)

二 然し爰ぢやあ、金を出した親仁に氣の毒だ。

三 是れからどこぞへ擔ぎ出し、

四 世間知らずにおツけ晴れ、

五 野天で存分樂しまう。

與次 そりや又あんまり。

一 喧しいわえ。これ、なんぞ入物はねえか。

二 幸ひの此の長持。

一 そいつへ打ち込み、擔いで行け。

五 合點だ。(ト長持をよき所へ出し、お長を引立て、入れようとする。半次立ちかゝり。)

半次 假令此身は叶はずとも、御新造さまは渡されぬ。

三二 何を小癩な。(ト半次を引きすゑる。)

お長 え、情ない、人でなしに身を穢されることかいの。

一 聲を立てると一突きだぞ。

お長 あれえ。(トいふ所を四、五お長を長持へ入れ蓋をなし、棒を通し擔ぎ上げる。)

與次 その長持は遣らぬ。(ト絶り附くを、一蹴倒す、是れにて與次兵衛ウンと倒れる。)

一 それ、此間に早く。

四人 合點だ。(ト時の鐘にて四、五長持を擔ぎ、一、二、三附添ひ、花道へはひる。)

半次 あれをやつては、此の身の越度、跡追掛けて、お、さうだ。

トやはり時の鐘にて、半次花道へはひる。跡に權九郎残り、縛られたまゝうろくして、

權九 よい年をして御新造を、自由にしようと思つたばかり、右金残らず盗まれたも、いはゞ隠居の

柄、詰らぬ者は權九郎、酒も呑まずに此のやうに、とんだお相手を喰つたわえ。

トばたくになり、下手より以前の丁稚、手代の一、二若い衆出來り、

手一 ハイ番頭さん、今歸りました。や、こりや、

皆々 どうさつしやりました。

權九 泥坊がはひつて縛られたわえ。

皆々 それほとんだことでござりましたな。(ト繩を解いてやる。)

權九 いやおれよりはそこに隠居が、泥坊に蹴倒されて、目を廻してござるわい。  
手一 や、ほんに、こりや隠居さまが、

手二 何ぞ薬はござりませぬか。

權九 薬はないから、水を掛ける。

丁稚 合點だ。(ト奥へ走りはひる。權九郎與次兵衛を抱き起し。)

權九 もし旦那さま。(ト奥より丁稚柄杓の附きし手桶を提げて出で。)

丁稚 番頭さん、水を持つて參りました。

權九 早くぶツ掛けて呼び生ける。(ト丁稚手桶の水を掛け。)

三人 旦那さま。(。)

丁稚 とてものことに、(ト手桶の水を天窓からぶツ掛ける。)

與次 むう、(ト心附くを道具替りの知らせ。) ふゝゝゝ。

トすつぶり濡れて顔へあがる。三人是れを見て笑ふ。早めたる合方にて此道具廻る。

(神輿ヶ嶽裏手の場) 本舞臺一面の藪、後黒幕、松の立木、石の地藏、日覆より松の釣枝、

總て神輿ヶ嶽裏手の體。こゝに以前の長持をおろし、賊一、二、三、四、五焚火をしてあたり居る。

此見得禪の勤めにて道具留る。

二 春になつても夜が更けちやあ、やつぱり風が寒いなあ。

三 それに爰はかけ拂ひ、町家を離れた神輿ヶ嶽、

四 夜に入つてから往來は、焼場へ急ぐ早桶ばかり。

五 天狗化物盗人の、休み所にやあい、所だ。

一 何にしろ、姉御を爰へ。(ト長持の蓋をあけ)もし姉さん、こゝで一服、

四人 遣んなさらねえか。

ト本釣鐘、長持の内よりお長、以前の髪、前髪みだれて悪婆と見える好みのこしらへ、搔卷を引掛け

立ち上り、

お長 あゝ、好い心持に、ぐつすりやつたよ。

ト又本釣鐘誂への合方、長持の後より半次出で、

半次 鼻ア、うまく行つたな。

お長 ほんに、狂言のやうだの。

ト半次石地蔵を蹴倒し、臺石へ腰を掛ける、此の地蔵長持の側へ倒れる、お長これを踏臺に長持より出る、四、五直に蓋をする、お長これへ腰を掛ける。

半次 金があるだけ盗人の用心のいゝ山崎屋、どうでたゞぢやあ行くめえと、姉御を玉に御用達。

お長 石井の妻とこしらへて、堅く見せたる美人局、首尾よくいつた今夜の仕事。

一 ほんに姉御の人柄姿、熊坂お長と名の賣れた、悪婆の果てとは思はれねえ。

二 それに名に負ふ小手柄半次と、肩書のある親分だけ、供の科介はうまいものだ。

三 是れから見りやあ年が年中、うぬが稼業にして居ながら、役者などは無器用だ。

四 書拔きなしにすらくと、せりふの並んだ御用達。

五 一ぺい喰ふは當りめえだ。

お長 然し、二度とは利かねえ仕事。

一 一度で澤山、今夜の働き。(ト財布に入りし金をお長に渡す。)

お長 みんなも大きに、御苦勞だつたよ。

半次 骨折代を遣つてくれ。(ト半次懐より手を出し、火に當りながら種草をついで居る。)

お長 さあ野手や、手を出しな。

一 およい。

ト下手より手を出す、お長包みを切り、小判を左の手へ開いて持ち、にったりと思入あつて、

お長 いつ見ても、悪くねえの。

半次 いゝ手と見えるな。

お長 違えねえ。

ト小判を一イニウと賊一の手へ打附けるを木の頭、チヨン／＼／＼と、三つ程木を合せ、此の仕組よ

ろしく本釣鐘にて、

ひやうし幕

ト時の鐘につなぎ、直ぐに引返す。

(神興ヶ嶽山下夜の場) 本舞臺上の方袴 腰の石垣、此の上草土手松の立木、片附けたる出茶屋の道具、葎簧巻いて立掛けあり、日覆より松の釣枝、後一面の黒幕、總て神興ヶ嶽、山下夜の體。ここに甚兵衛白髪疊やつし装草鞋、駕舟のこしらへにて四つ手駕籠に腰を掛け、煙草を呑んで居る、△同じく駕舁にて呼び掛けて居る、時の鐘合方にて幕明く。と上下より思ひ／＼の仕出出て來り、行邊

ひてはひる。

△ へい駕籠、へい駕籠。(ト侍の仕出でて)

侍 こりや駕屋、假宅まで幾らでやる。

△ 二百五十で参りませう。

侍 何ちや二百五十ぢや、百にせい。

△ さうおつしやらすと、二百下さりませ。

侍 いやく二百出す位なら、駈けて参つて一斤取るわ、馬鹿な面な。(ト侍上手へはひる)

△ 忌々しい奴だな、今夜のやうな間の悪いことはねえ。

甚兵 もう九つ過ぎだのに、まだ米の錢を取らぬ。

△ 延起直しにちつと替へて下せえ。

甚兵 おい、(ト甚兵衛駕籠より出る、△又駕籠へ腰を掛け)へい駕籠、へい駕籠。

ト呼掛けて居る、上手より道具屋善六羽織ばつち尻端折りにて、小田原提灯を點し出来る。

へい旦那、御都合まで参りませうか。

善六 いやく、駕籠に乗つちやあ居られない。

甚兵 お安く乗つて下さいましたな。(ト袖を引く。)

善六 え、入らないといふに。(ト顔を見合せ)や、貴様は駕屋甚兵衛どのぢやあないか。

甚兵 さうおつしやるは、道具屋の善六さんか。

善六 今こなたの所へ行つた歸りだ。

甚兵 それは御苦勞さまでござりました。

善六 いや御苦勞は構はないが、放駒の香合は、どうさつしやるのだ。

甚兵 へい今日までのお約束でござりますが、どうぞもう二三日お待ちなされて下さりませ。

善六 どうして、二三日のことはおいて、半日も待たれない。其譯は外へ賣れば右から左り百兩になる代物だ、つい心安いから是れまでは待つてやつたが、あの香合の持主の質屋の方でもう待たない、丁度外に買手があるゆゑ、明日は賣つてしまふつもり、さう思つて居て下せえ。

ト花道へ行きかけるを留めて、

甚兵 いやあの香合を、外々へ賣られましては故主の身の上、わしも生きては居られぬ仕儀、どうぞ待

つて下さりませ。

善六 その言譯も是れまで幾度、今度ばかりはもう待たれぬ。

甚兵 そこそをお前の執成しで。

善六 え、しつこい、知らぬといふに。(ト留める袖を振拂ひ、善六足早に花道へはひる。)

甚兵 あ、これ、氣の短い、待つて下されといふに。(ト甚兵衛跡を追掛けてはひる。)

△ おい、甚兵衛どの、い、加減にしねえのか、仕事があると困るわな、あれ、どこまでも追掛けて行く、いや困つた親仁だわえ。

ト呟きながら又駕籠の中へはひる。時の鐘合方にて、花道より、前幕のお静お照の手を引き出來り、

お照 これお静、わしや足が痛うてならぬわいの。

お静 もう少しでござります、御辛抱なされませいなあ。

お照 それぢやというて、痛うてく、歩かれぬわいな。

お静 其のやうにお痛ければ、今に山下へ参りまして、駕籠にお乗せ申しませうわいな。

お照 どうぞさうしてたもいの。(ト右の鳴物にて、兩人本舞臺へ來る。)

△ へい駕籠、へい駕籠。もし、御都合まで参りませうか。

お静 お、丁度よい所に駕屋さん、海士崎町までお頼み申しますわいな。

△ はい、く、畏りました。

お静 いか程でござんすかえ。

△ へい海士崎町までなら、二百文でござりまする。(トお静巾着より金を出し)

お静 これを取つて下さんせ。(ト渡す)

△ 生憎お釣銭がござりませぬ。

お静 いえくお釣銭には及ばぬから、どうぞ急いで下さんせいな。

△ へいくそれは有難うござりまする、只今ちよつと相棒が、そこらまで参りましたから、呼んで

参ります間、少しお待ちなすつて下さいまし。

お静 ちつと心の急く者なれば、早う行つて来て下さんせ。

△ へいく、直行つて参ります。え、コノ甚兵衛どのは、そこらに居てくれ、ばよいが。

ト時の鐘にて△花道へ足早にはひる、跡兩人残り、

お照 これお静、こゝは何といふ所ぢやぞいの。

お静 神輿ヶ嶽の山下でござりますわいな。

お照 何ぢややら氣味の悪い所、早う駕屋が来てくれ、ばよいが。

お静 いえ、直に参りますでござりませう。

ト此以前より、後へ長五郎頼冠りにて窺ひゐて、態と下手より聲音をさせて出來り、

長五 これは、大きにお待遠でござりました。

お静 おゝ、お前は駕屋さんでござんすか。

長五 へい、今の男の相棒でござります。

お静 さうして、今のお人わえ。

長五 夜明しの濁り酒で、一杯やつて参ります。もし、何ぞお大事な物がござりますなら、蒲團の下へ

入れますから、お出しなされませ。

お照 そんなら、此包みを。(ト櫛を包みし袱紗包みを出す)

お静 あゝもし、それはあなたしつかりと。(ト渡しては悪いといふ思入、長五郎これを見て、)

長五 だいぶ此頃は物騒ゆゑ、こつちへお渡しなされませ。(トお照の懐にある袱紗包みを引出す。)

お照 あゝそれは。(ト留めるを振拂ひ、)

長五 わしがしつかり預りました。

お静 えゝ此人は、不作法な、人の物を手籠みにして、さあこつちへ返しやいの。

トお静取りに掛るを拂ひのけ

長五 喧しいわえ、物騒だから大事な物は、おれが預つてやらうといふのだ、それをぐづく吐かしやあがると敵つくぢくぞ。

兩人 え。(トびつくりなし)

お照 これお静、どうせうぞいの。

お静 よろしうござります、お案じなされますな、私が居りますわいな。

トお静こはがるお照を後へ圍ふ、長五郎思入あつて、

長五 さあ、まだ是ればかりぢやアあるめえ、見りやあ立派なお嬢さん、男を連れず夜る夜中、女ばかりで歩くからにやあ、てつきり下女が取持ちで情人の所へ行くのだらう、櫛ばかりぢやねえ、懐に金があるに違ひねえ、さあそれもおれが預らう。

お静 え、めつさうな、金などを、何で持つて居ようぞいの。

長五 うぬが持たざア、お嬢さん、おめえが持つて居なさるか。

お照 わたしや持つては居ぬわいな。

長五 持たぬと言やあ仕方がねえ、こいつア初春早々から、憎まれにやあならねえわえ。

ト手拭に巻いてある雪駄直しの庖刀を出し、口に啣えて尻を端折る。時の鐘、兩人是れを見てをどを

どする思入、長五郎庖刀を突き付け、

さあ出せ、出さにやあ是れで突殺すぞ。

兩人 え。

長五 さあ痛え目せぬうち、出してしまへ。

お照 それぢやというて櫛より外、何にも持つては居ぬわいな。

長五 何の持つて居ねえ事があらう、男を慕つて逃げるのに金を持たずに出るものか、高が二兩か三兩の櫛ばかりぢやアあるめえ。

お静 いえくさうではござんせぬ、其櫛こそは三光とて、世にも稀なる品ゆゑに、賣買にする其時は、百兩餘にもなる代物。

長五 え、(ト長五郎びつくりし) すりや此櫛は三光とて、百兩になる代物とか、こいつア満更でねえ仕事だわえ。

お静 それゆゑどうぞ其櫛を、こつちへ返して下さんせ。何を隠さう、此の娘御の許嫁せし夫の爲め、賣り代なさねばならぬ櫛。

お照 切ない譯のあることゆゑ、慈悲ぢや情ぢや其櫛を、どうぞ返して、

兩人 下さんせいな。

長五 お、櫛がほしけりや返してやらう、其代りにやあ隠して居る、金はおれに渡してしまへ。

兩人 いえく、金というては。

長五 うぬ、さうぬかしやあ痛え目させるぞ。(トお照を引き附ける。)

お照 あれえ。

トお静此中へはひり長五郎を留める。お照逃げにかゝるを長五郎追駈ける、お静これを支へる立廻り、葛西念佛になり、あちこちと逃げ廻る立廻り、ト長五郎庖刀にて過つてお照を切り下げる。是れにてアツと言つて倒れる、お静見て、

お静 あゝこりや、お照さまを。

長五 えツ、手が廻つたか。

お静 人殺しぢやく。(ト長五郎にむしや振り附く。)

長五 やかましいわえ。(ト庖刀にてなぐる、是れにてお静も手を負ふ。)

お静 人殺しぢやく。(ト聲を立てるゆゑ、長五郎口を押へ。)

長五 毒喰は皿、仕方がねえ。(ト脇腹へ庖刀を突立てる。此時お静長五郎の小指を喰ひきる。)

あいたゝゝゝゝ、ぬ小指を喰ひ切りあがつたな。

お照 あれ、誰ぞ来て下されいなう。(ト苦痛の思入、長五郎懐を捜し見て、)

長五 不便ながら、(トお照を引起し喉を突く、是れにてお照アツと苦しみ落入る。) 殺す心はなかつたに、と

三、向うへ人が。遣り過して。むゝ、さうだ。

ト上手霞簀の蔭へ小隠れする、時の鐘替つた合方、花道より以前の甚兵衛腕組をなし、悄悄と出来り本舞臺へ来り思入あつて、

甚兵 今更いふも愚痴ながら、三年跡箱根にて御主人橋本治太夫様が、殿より預かる千葉家の重寶放

駒の香合を、盗入入つて奪はれし、しかも其夜はわしが不寢番、其の失ひし越度にて治太夫様には永のお暇、元はといへばわしが科、それゆゑどうぞ詮議仕出し、御主人様の御歸參をと、朝夕願ふ甲斐あつて漸く知れし寶のあり所、詮議の日延も今日明日とせつば詰りし寶の代金、大枚百兩といふ金ゆる千辛萬苦と心は碎けど、金の出来やう手段はなし。日延が切られるれば御主人には申譯

の御切腹、わしも共々死なねばならぬ、あゝ、いづくの誰が盗みしか、恨めしいことぢやなあ。今宵も最早九つ過ぎ、明日を越すより夜の内に、申し譯にさうぢや〜。

ト捨石へ乗り松の枝へ駕籠の上の細引を引掛け、首をくゞらうといふ思入、此内後へ長五郎出掛り、窺ひ居て思入、甚兵衛思入あつて、

今夜死ぬのは厭はねど、跡に残りし娘が難儀、目かいの見えぬ孫を引受け、貧乏世帯に女の手一つ、さぞや困るであらうと思へば、是ればつかりが黄泉の障り、難儀をするも死ぬるのも前世からの皆約束、南無阿彌陀佛。

ト甚兵衛思ひ切つて飛下りようとする、長五郎つか〜と出て、甚兵衛を抱き留め、

長五 やれ待て、とッさん待たつしやい。

甚兵 いえ〜、放して殺して下さりませ。

長五 様子は残らず後で聞いた、死なうといふはよく〜の事であらうが、死なずと仕様があらうからまあ〜急かすと待たつしやい。(ト是れにて甚兵衛を抱き下す。)

甚兵 御親切な其のお詞、有難うはござりますが、死なねばならぬ譯のある事、留めずと殺して下さりませ。

長五 死しなにやあならねえ譯わけといふは、慥たしか金かねの入いる様子やうす。(ト懐ふところより件くだんの櫛くしを出だし) 此この櫛くしは白しろ兩りやう位ばいに  
はなる代物しろものだといふこと、是これをこんたに遣やる程ほどに、早はやく持もつて歸かへらつせえ。  
ト甚兵衛じんべゑへ櫛くしを渡わたす。

甚兵 そんなら此この品しなを、私わたくしに下くだされませうか。

長五 おれも知らぬが其品そのしなは、三光くわうとかいふ稀まれな櫛くし。

甚兵 え、有難ありがたうござります。是これにて寶たからを取り得えますれば、主人しゆじんを始めはじめ此身このみの仕合しあはせ、附ついては孫まごや  
娘むすめが悦よろこび、跡あとにてお禮れいも申まをしたければ、どうぞお前まへのお名所なごころを。

長五 いや其禮そのれいには及およばねえ、わしやあ居所ゐどこも定さだまらず、そんなことをいふ手間てまで、夜よの更みけねえ内早うちばやく  
家うちへ。

甚兵 有難ありがたうござります、お詞ことばに随したがひ、是これから直すぐに。

長五 益えきねえ事ことに暇取ひまどらずと、

甚兵 そんなら此この儘まま、

長五 ちつとも早はやく、

甚兵 お別わかれ申まをしませう。(ト時ときの鐘かねにて甚兵衛じんべゑ下しもの方かたへ來きて、駕籠かごを直なして居ゐる、長五郎ちやうごろう心附こころづかぬ思入おもひいれ。)

長五 無駄骨折つて殺生した、三光とやらの今の櫛、親切ごかしに渡したは、まさかの時に人殺しの罪

を首尾よく、

甚兵 え。(ト長五郎これにて思入あつて、)

長五 まだ行かねえのか。

甚兵 はい。

長五 氣を附けて行かつしやい。

甚兵 有難うござります。

ト時の鐘、詔への合方、甚兵衛駕籠を直し擔がうとする。長五郎尻を端折り身拵へする。此内序幕の梶井主膳着流し大小、小田原提灯を提げ出来る、長五郎此の明りに身を背ける、主膳舞臺へ來り、糊紅にすべりし思入にて、明りにて舞臺を見て、

主膳 や、こりや夥しき血潮の滴り。

甚兵 え。

ト甚兵衛びつくりなし駕籠を下へどうと置く、長五郎主膳の提灯を打ち落とす。時の鐘、忍び三重、主膳さてはといふ思入にて刀へ手を掛けるを、長五郎留めて、ちよつと兩人立廻り、甚兵衛此の中へ駕籠

雪駄直し長五郎

を擔ぎ出る。是れを主膳引戻し駕籠を柳に鳴物替つてダシマリ模様もやうの立廻り、長五郎ちやうごろう庖ちやうごろう刀やうにて切つてかゝる、主膳しゆぜん打ち落しおと抜きぬかけるを長五郎ちやうごろう駕籠かごの垂たれにて留とめる。甚兵衛じんべゑは駕籠かごを擔かつぎ花道はなみちへ脱のがれ行く、主膳しゆぜん長五郎ちやうごろう立廻りて主膳しゆぜんは長五郎ちやうごろうの庖ちやうごろう刀やうを拾ひろひ星明ほしあきりに見みる。長五郎ちやうごろうは駕籠かごの垂たれをすつぽり冠かぶる。是れを木の頭かしら主膳しゆぜん扱さといふ思入おもひいれ、長五郎ちやうごろう垂たれより顔かほを出だし窺うかがふ。甚兵衛じんべゑは駕籠かごをかつき懐ふところを押おさへ、逸散いつさんに花道はなみちへ走はしりはひる。是れをキザミ、双盤さうばんにてよろしく、

ひやうし幕

跡シヤギリ

### 三幕目

興泉寺町梶井宅の場

稻村ヶ崎居酒屋の場

多田薬師石置場の場

戀ヶ窪お長隠家の場

### 同返し

〔役名〕雪駄直し長五郎、梶井主膳、小手柄半次、小屋頭喜六、お長子分野手の三次其他四人、主膳弟子、居酒屋の若い者、阿古木源之丞、熊坂お長、喜六娘おこよ、其他の

(長谷観音裏手の場) 本舞臺三間の間草土手の上欄矢來、後見世物小屋揚り場の屋根を見せ、此

間へ松の立木、日覆より同じく釣枝、總て長谷の観音裏手の模様。こゝに○△□◎の仕出し四人立掛り居る、見世物の辻打ち、楊子の音にて幕明く。

○ 何と、是れから奥山へ行つて、新升亭で一杯やり、生人形を見ようではないか。

△ ほんに生人形の細工人は、肥後の熊本の人ださうだが、役者の人形などは、びつくりするやうな細工だ。

□ あの花魁の人形は、今度土鍋の施行を出した、佐野槌の黛といふ花魁ださうだ。

◎ その人形の花魁より、山の宿花川戸の、假宅をひやかさうではないか。

○ まあさう言はずと附合ひだ、一緒に行つて見物しなさい。

○ それでも吉原と違つて、木戸銭が出るわな。

△ え、しみつたれなことを言ひなさんな、お前に銭を出させようとは言はない。

◎ 銭さへ出ないことなら、どこへでも行つて見物しませう。

□ やう／＼直が出来た。さあく、込まない内に早く行つて見よう。

三人 それがい／＼。

トやはり右の鳴物にて、仕出し四人下手へはひる。やはり此の鳴物にて、花道より喜六羽織股引尻端折

り小屋頭のこしらへにて出来る、上手より長五郎序幕のこしらへにて直しの籠を肩に掛け、古竹の子笠を冠り、テイ〜と呼びながら出来る、舞臺にて行合ひ、長五郎笠を取り、

長五 もし親分、どこへお出でなさいますか。

喜六 お、誰かと思つたら長五郎か。

長五 今日は役所でござりますか。

喜六 いや今日は寺参りに出掛けたが、丁度よかつた、ちつとおぬしに用があるゆゑ、歸りに小屋へ寄らうと思つた。

長五 そりやあい、所でお目に掛りました、して何ぞ御用でござりますか。

喜六 む、其の用といふは長五郎、まあ下に居てくりやれ。

ト合方がすめて双盤になり、喜六長五郎兩人屈んで、

さて世の中といふものは、儘にならぬものだな。

長五 へい、其内にもわしなどは、儘にならぬことだらけでござります。さうして御用といふは、何でござります。ト喜六愁ひの思入にて、

喜六 外のこともない、娘おこよのことだ。

長五 へい、どうかなさいましたか。

喜六 長々しく話さずとも、おぬしち知つて居る通り、あの阿古木の殿様と一方ならぬ仲となり、あらうことか御大身のお寮間を穢した娘のおこよ、所で昨日殿様から娘の所へお文が来てな、お、これだこれだ。(ト懐の紙入より手紙を出し) 前の方は讀むに及ばぬ「ふと致し候事にて其方と枕を交し是れ迄馴染候處、御先祖の舊功に依つて數代續きし家名をば、我が世に至り穢し候段、第一の不孝と改心致し自分帶刀を捨て隠居いたし候間、其方事も是れまでの縁とあきらめ申す可く、則ち金子五兩差遣はし候。」(ト讀み掛け、愁ひの思入、長五郎こなしあつて、)

長五 そりやあとんだことになりましたな。

喜六 まだくこんなことではない、此の手紙ゆるおこよめが書置をして内を斷出し、撞木橋からどんぶりと。

長五 え、(トびつくりなす。)

喜六 身を投げて死んだわやい。(ト喜六涙を拭ふ、長五郎も思入あつて、)

長五 あ、そりやあ濟まねえことをしたく、これといふもみんなわつちが仕出したこと、嘸腹が立ちなさるだらう。斯うなると知つたならば、あの時お斷り申せばよかつた、坊主になつても奴にな

つても、お前の前へどうも濟まねえ。さあ氣の濟むやうわつちをば、どうでもしてくんなせえ。  
喜六 え、馬鹿をいへ、何で手前を恨むものだ、水子で死ぬも百年生きるも、こりやあ定まる因縁だ。

長五 それだといつて、是れがまあ。

喜六 はてさ、いは、人間の數にもならぬ、喜六づれが娘の身で、夢に見てえといつても出来ぬことだ。畢竟おぬしがあつたれば、一度ならず二度三度、お伽をしたは身の仕合せ、假令千年の壽命を一年に縮めても、お伽受けた果報者。(ト以前の紙入より紙に包みし五兩の金を出す、此時主膳より来た手紙を落す、兩人これに心附かず、殿様から下すつた手切代りの此の五兩、半分は娘が法事料、又半分はおぬしに遣るから、あれが形見だと思つてくりやれ。

ト二兩二分紙に包み、長五郎に渡すを突戻して、

長五 そりやあとんだことだ、止しになせえまし。それよりやあ其金を一つにして、立派な法事をしてお上げなせえ、あの子の爲めにござります。

喜六 その法事はおれが又、此の半分へ金を足して、どんな法事でもしてやるから、こりやあまあ娘が形見だから、手前の方へ取つて置いて下せえ。(ト長五郎の手の上へ載せ、無理に持たせる)

長五 それぢやあ、あの子の形見かね、こんなにしておくんますつちやあ、居ても起つても居られやア

しませぬ。然し折角の御親切、それぢやあまあ、お貰ひ申して置きませうかね。

喜六 どうぞ取つて置いて下せえ。

長五 おこよさんの追善に、お花でも上げませう。

ト長五郎金を腹掛の隠しへ入れる、此時下手より非人木綿やつし股引尻端折り、手拭を冠り提籠に鯛と海老を入れ提げて出来り、喜六を見て、

非人 お、頭、爰に居なすつたか、不漁で何にもござりませぬから、こんな物を買つて来ましよ。

ト喜六の前へ出す、悪い所へ持つて来たといふ思入にて、

喜六 何だ此魚は、どうするのだ。

非人 今お前さんが買つて来いと、言ひなすつたからさ。

喜六 べらぼうめ、精進物を買つて来いと言つたのだ。

ト立上つて、長五郎が居るといふ思入をして吞込ませる。此時長五郎は喜六が落した手紙を拾ひ、手早く懐へ入れる。

非人 え、はあ、さうかね、とんだ事をした。返して来やせう。(ト行きにかゝるを、喜六留めて、)

喜六 返すといつたつて生物だ、向うで受取らねえわ。かうせうく、此間六郎藏の捨の所から香をく

れた、あれが所へでも遣るがい。

非人 それぢやあ、さうしませう。

喜六 長五郎、何にもせぬが、明日の晩夜食を喰ひに来さつせえ。

長五 有難うござりまする。

喜六 貴様はまだ歸りはしめえ。

長五 へい、ねつから仕事をしませぬから、もうちつと流して歸ります。

喜六 それぢやあ是れで別れよう。

長五 急いでお歸りなせえ。

喜六 そんなら長五郎、

長五 親方、

喜六 さあ行かう。

トやはり見世物の辻打ちにて喜六非人上手へはひる。長五郎跡を見送り、以前の手紙を出し聞き見て、何々々今日阿古木御二方様拙宅へ御出で遊はされ候間、貴下にも御出でなさるべく候、喜六殿へ梶井主膳、シムウ、今の魚の様子といひ、主膳といふは出来星の此の頃流行る人相見、家は随に

興泉寺町、こいつア斯うしちやあ居られねえわえ。(ト笠と籠を持ち上手へ行きかけ、思入あつて) 跡から附いて行つたなら、結句悪いか。(ト肩へ籠を掛け) 仕事の振りで見え隠れに、狸親仁が跡を附け、化の皮をひつぺいだら、どうか元手に、(ト笠を冠り) デイくく。

トよろしく双盤にて此道具廻る。

(梶井主膳玄 關先の場) 本舞臺三間常足の二重、正面石摺の袂、左右重棧の杉戸、隅切角に三  
十郎菱の紋附の高張提灯、上手一間の附屋體、塗骨障子、下手忍び返し附の黒塙。いつもの所門  
口、是れに「周易人相指南土御門殿配下梶井主膳」と書きたる表札、總に興泉寺町主膳玄關先の體。  
爰に門弟袴一本差し弟子のこしらへにて机に掛り本を見て居る、門口に町人一人立ち掛り居る、合右  
にて道具留る。

町人 お頼み申します。

弟子 どうれ。

町人 私は、ちと先生にお願ひ申したいことがござりまして参りました。

弟子 今日(けふ)は御(ご)大身(たいしん)のお客(きやく)來(き)ゆゑ、人相(にんさう)墨(ぼく)色(しき)は休(やす)日(ひ)なれば、明日(あした)午前(ごぜん)にごさ(ご)さらしやい。

町人 左様(さやう)なら、又(また)明日(あした)上(う)りませう。

弟子 左様いたさつしやい。

町人 へい、おやかましようござりました。

ト下手へはひる、やはり合方にて花道より以前の喜六、非人と共に出来り、直に門口へ來り、

喜六 へい、お頼み申しまする。

弟子 人相なら、明日ござらつしやい。

喜六 いえ、左様ではござりませぬ。

弟子 はあ、何ぞ用事でもござつてか。

喜六 へい、今日こなた様へお出で遊ばしました、お客様の方に付きまして参りました者でござります。

弟子 左様でござるか、して何れからござつた。(ト喜六ぐつとつまり、)

喜六 さあ私は、いえ、お客様に付きまして、参つた者やおつしやつて下さりますれば、旦那さま

には御存じでござりまする。

弟子 左様なら、暫くそれにお控へなされ。(ト弟子奥へはひる。喜六四邊を見廻して、)

喜六 何と見やれ、結構なお住居ぢやあねえか。

非人 左様さね、雪駄に例へて見ようなら、爰の家は本皮の五分廣、こちとらの家は上汐に流れて來さ

うだ。

喜六 え、又馬鹿をいふかい。

ト合方になり奥の襖を明け、主膳總髮袴一本差し、弟子附添ひ出來り、眞中に住い、

主膳 お、是れは喜六どのか、ようござつた。さあ、是れへ通らつしやれ、

喜六 いえ、お構ひ下さりませぬ、これが勝手にござります。

主膳 はて、外の家とは違ふ、其の遠慮には及ばぬこと、さあ、入らつしやわ、(ト喜六おつ、

内へ入り、下手につくばふ)これはしたり、それでは却つて挨拶が出來ぬ。(ト主膳大事ないといふ)

入、喜六呑み込み、よき所に住み、さて、今朝はどうやら降りさうでござつたが、思ひの外の天気に

なつて、御兩所さまにも一入のお慰み、喜六どのにもよくこそござられた。

喜六 いやもう、お手紙を拜見いたしますると、取ら物も取あへず参りましてござりまする。(ト非人の

魚籠を取つて、主膳の前へ持ち行き、)旦那さま、何ぞと存じましたが、さて差上げるものもござり

ませぬ、是れは途中で調へました清いのでござりまする、お珍らしくはござりませぬが、お家へ

でもお上げなされて下さりませ。(ト主膳これを見て、)

主膳 これは、無用になされいで結構なお土産に預り千萬忝ない、いやもう此節の不漁では何も

ござらぬ、只早不鹽と申すは野菜ものばかり、早速調味いたさせるでござらう。

喜六 冥加に餘りましたこととござりまする、してお殿様は。

主膳 只今奥で御寢なつてござる、今朝よりの御酒宴でまだお目覺めには間もござらう、女中方も庭先で搦草をいたしてござれば、暫時手前居間でお話しなされ。

喜六 有難うござりまする。これく、手前はもうよいから先へ歸れ。

非人 左様なら、先へ歸りましてもよろしうござりまするか。

喜六 大きに御苦勞であつた。(ト非人門口へ出て、)

非人 どれ、廊でもひやかして行かうか。(ト非人下手へはひる。)

主膳 これく、此のお魚を臺所へ持つて参り、こしらへ置けと申し附きやれ。

弟子 畏りました。

主膳 さあ喜六どの、手前の居間でお待ちなされ。

喜六 宜しうござりまするか。

主膳 大事ござらぬ、さあ斯うござれ。

ト唄になり、主膳先きに喜六附いて奥へはひる。此の唄を借り、花道より以前の長五郎出來り、門口

の表札を見て、

長五 梶井主膳、へんこいつだな。(ト思入あつて笠を取り籠を側へ置き、門口をすつとほひらうとして、) 待て

待て、ひよつと親仁がまだ來ねえと、どんな目に逢ふも知れねえ。どうしてやらう。む、さう  
ださうだ。(ト門の外より丁寧に、) へい、お頼み申しまする。

弟子 どうれ。(ト奥より以前の弟子出來り) 何だ、直しか。

長五 へい、只今こなた様へ、年の頃五十ばかりのお方さまで、お供に魚籠を持たした旦那様が、おい  
で、はござりませぬか。

弟子 お、只今お出でなされたが、何ぞ用か。

長五 へい、雪駄の鼻緒が切れたから、直せとおつしやりましたから參りました。

弟子 あ、さうか。(ト喜六の雪駄を取つて見て、) いや、こりや鼻緒は切れて居らぬが。

長五 え、何でござりまする、裏金があまくなつたから、直してくれろとおつしやりました。

弟子 そんなら直して置きやれ。(ト長五郎に渡す、とつくを見て、)

長五 これだ。(ト思はず大きく言ふ。)

弟子 それか。

長五へい。(ト心付き)これでござりまする。(ト此時奥にて手を打つ。)

弟子へい。(ト長く返事をして奥へはいる、長五郎内を窺ひ思入あつて、件の雪駄をきつと見て)

長五 焦茶鼻緒の一枚雪駄、おれを一番、ト雪駄を打付け、遣りやあがつたな。

トきつと見得、唄になり此道具廻る

(主膳宅庭外の場)——本舞臺三間の間、通しの黒堀忍び返し付き、真中に三具の庭口、開きにて出ば

ひり、總て主膳宅庭外の體、合方にて道具留る、と下手より二人腰元装にて、日傘へ嫁來土筆などを入れ、是れを持ち出來り、

腰一 これみどりどの御覽じませ、私は此やうに、土筆をたんと摘みましたわいな。

腰二 お、ほんに、これは澤山に、よう其のやうに摘ましやんしたな、私は又嫁來にはかり氣を取られ、

土筆はとんと氣が付きませんなんたわいな。

腰一 これから此嫁來と土筆を、お浸しと三杯酔にして、お上へ差上げませうわいな。

腰二 それはさうと、もうお日覺めの時分であらうわいな。

腰一 ほんに、餘程の間であつたわいな。

腰二さあお目覺めのないうち、

兩人 参りませうわいな。

ト合方にて兩人庭口より内へはひる。下手より長五郎窺ひく出来り、塀の穴よりあちこちと覗き、庭口を押して見る。開き明くゆゑ旨いといふ思入にて、  
長五 こいつは妙だ。(ト開きをあげ内へはひる。合方にて道具廻る。)

(主膳奥座敷の場) 本舞臺三間の間、中足の二重大和葺の本縁附き、向う太鼓張りの通ひ口、上

手床の間、下手地袋戸棚、違ひ棚、此の上に渾天儀、筭竹、易書など書割り、上手丸窓の附屋體、下手手水鉢石燈籠、後へ寄せて中窓の屋體、上下柴垣、よき所に梅の立木、日覆より同じく釣枝、屋體前側障子建切りあり、總て主膳奥座敷の體、よろしく道具留る。と誂への獨吟になり、よき程に障子引抜く、内に源之丞着流しにて褥の上に住ひ、おこよ着流し屋敷姿のこしらへにて、源之丞の膝にもたれ居る。此の時舞臺へ番ひの蝶飛び交ふ、是れを兩人見て居る。よろしく獨吟一くさり切れて、

源之 これおこよ、あの春草に蝶々の中睦じく飛交ふありさま、何としをらしいことではないか。  
こよ あの蝶々を見るにつけ、賤しい身にて勿體ない、あなたのお寐間を穢せし私、ひよつと愛想が盡

きようかと案じ過して此の胸が、わたしや痛うござんすわいな。

源之

それは入らぬ取越し苦勞、其の苦勞をさすまい爲め、此家の主膳に申し附け表向きにて妾となし、我が屋敷へ呼んだ上は、モウきなく、思はぬがよい。さあ入らぬ苦勞を仕ようより、亂れし髪を取り上げて、愁ひを拂ふ玉筥、機嫌直しに一つ吞ひや。

こよ

いえ私よりあなたのおぐしが、きつう亂れて居りますん。ちよつと私が、(ト立ち上り、後へ廻らうとして)撫付けても大事ござりませぬかいなあ。

源之

大事なこともなく、身に罰が當りはせぬかや。

こよ

あの、悟らしいことわいなあ。(ト源之丞を抓る)

源之

あいた、ムムム。

源之

ト又獨吟になり、おこよ源之丞の髪を撫附け、前へ廻り、これでよいと思入あつて、下手手水鉢にて、水鏡にて我が髪を撫附ける。此間源之丞後よりそつと覗く、水に源之丞の顔の映る心、おこよ振向く、源之丞おこよの手を取り、元の所へ来て兩人顔見合せ、につこり笑ひ手を取る。これにて

二人

獨吟一げいに切れると、奥にて、

二人

もうお目覚めでござりませうわいな。

ト此聲に兩人びつくりして双方飛退き、源之丞袴の上へ住ふ、おこよ下手に住ひ、しやんと兩人行儀よくして居る。合方になり、奥より腰元二人銚子、盃、廣蓋に着を載せ持ち出で来る。跡より主膳以前の装にて出來り、おこよ源之丞の體を見て、

主膳 これはお二人様にはどうなされました。はあ、よい中の戀いさかひ、御前おたしなみなされませ。

源之 いやくさういふ譯ではない、なうおこよ。

こよ はい、いつでも斯う、ちやんといたして居りますわいな。

主膳 は、は、は、は、どうでござりますか。さ、腰元衆、おこよさまをお側へく。

腰元 畏りました。(トおこよを源之丞の側へ連れ行く。此時喜六平舞臺下手へ出て、)

喜六 お殿様、喜六めにござりまする。

源之 お、喜六か、よく參つた。

こよ ほんに父さま、何時の間に。

主膳 いや、今日御兩所さま御來駕に付き、豫て申合せ置きし一儀の様子も承はりたく、且は殿にも

御安堵あるやう、手前方へ招き置きましてござりまする。

源之 それはよく心附いた。さて、いつもながら息災にて重疊々々。

喜六 有知う存じまする。

源之 して、かの儀どうぢやなく。

喜六 さればでござりまする。只今はこれへ参りまする道にて長五郎めに出逢ひ、仰せの通りたばかり果せ、金子も彼れに遣はしました所、涙をこぼして有難がり、何の苦もなく事は十分。主膳様恐れ入りましてござりまする。

主膳 いやあのやうなる族は、早く遠ざけるが上分別。先づは首尾よく参つて手前も大慶、殿にも御安堵、おこよさまにも、嘸お嬉しうござりませう。

こよ こんな嬉しいことはござんせぬ。何とお禮を申さうやら、父さん、ようお禮を申して下さいなあ。

喜六 いやもう主膳様のお計らひにて、長五郎めを掃いてしまひ、まことに大船に乗つたやうな心持でござりまする。

源之 手前とても同じこと、是れまで彼れには幾度となく合力いたしたれど、止む事知らぬ彼れが性質、合力いたすは厭はねど、若し朋友共の目に掛り、どんな大事にならうかと案じ居つたわい。

喜六 いったい性來の悪い奴ゆゑ、どんな大事を引出さうも知れませぬ、萬一御家にでも拘はりますやうなことでも出来て御覽じませ、おこよは元より私めが、死んでも足りはいたしませぬ。

主膳 喜六どの、言はるゝ通り根が悪い奴ゆゑに、好い鳥がかゝつたと心得、時折厭がらせを申しては金銀を貪り取り、着もかぶりもいたさず、只酒と博奕に遣ひ果し、種が盡きれば幾度となくうろさく参るが彼れらが附日、さてノノ非人といふものは。

ト言ひ掛けて喜六の顔を見て心附き、煙草に咽せしこなしにて紛らかす。おこよ俯向く。源之丞顔を背ける。喜六庭の梅の木を見て、

喜六 あゝ、梅がよう咲きましたな。

源之 まことに今が満開ぢや。

主膳 いや、此の花をお香に、御前一つ召上りませ。(ト盃をとつて源之丞にさす。)

源之 おゝ、一獻過さう。

こよ どれ、お酌をいたしませうわいな。

トおこよ酌をする。此時下手柴垣を破り、長五郎以前の装、頼冠りにてつかくと出で、縁側へ腰を掛け俯向いて居る。皆々びつくりする。主膳、おこよ源之丞を圍ひ思入あつて、

主膳 これ手前は何だ、何用あつて是れへ参つた、見れば冠りものも取らず、用事あらばなぜ玄關より案内を乞はぬのだ、梶井主膳が圍ひ内、仕儀によつては其の分には差許さぬぞ、不届き奴めが、

トきつと言ふ、長五郎主膳を見て、

長五 へい、お玄關から参りますも存じて居りますが、御遠慮申してお庭から参りました。

主膳 して、われは何處から來た。

長五 どこからも來ねえ、小屋から來た。

ト頬冠りを取りきつと見付、東上總の合方になり、皆々ぎよつと思入。

源之 や、そちは長五郎か。

喜六 どうして爰へ。(トいふを長五郎喜六の胸倉を取つて引寄せ)

長五 この死損ねえ親仁め、わりやあさつき何と言つた。(ト揺り動かす、喜六頭へ居る)涙をこぼして誠にやかに、阿古木の殿から娘の所へ金を添へての手切文、娘心に突き詰めて書置をして其晩に撞木橋からどんぶりと、へん、訝な所へ身を投げたな。さつきうぬに逢つた時ちらりと睨んだ交魚、どうやら話しが生臭いと、かん附く途端に落散る手紙、それで分つた小刀細工、誰が踏んだか知らねえが、此長五郎の手を切るに二兩二分とはあんまり安い。百や二百はぶらくとぶら附

いて居る此仕事、あすが日おれが喰えこんで、口が這つた其時にやあ、三千石の御知行を、もし殿様、棒に振るのは何でもねえ。危ねえ事と氣が附いて、それでおれを掃いたのか、いやさ、袖にしたのか。これ、尋常の手下だと思やあがるか老翁親仁め。此一件は割らにやあならねえ、まあうぬよりア手短かに、あの阿魔ツちよを。(トおこよの方へ立ちかゝる。)

こよ あれえ。

ト上手の屋體へ逃げ込む。源之丞刃を取り抜きかけけるを主膳留める。喜六長五郎の足へ取附くを蹴返し、きつと見得。

長五 何だ殿様、お前わつちを切る氣かえ。有難え切られよう、さあ切れるなら切つて見る。

ト源之丞また抜き掛けるを主膳留め、

主膳 これは御前御短慮千萬、先づく手前にお任せなされませ。

源之 む、恩を仇なる憎い奴、了簡ならぬ所なれど場所といひ主膳が詞、此場は此儘助けくれるぞ。

長五 大方そんなことだらう、何のツケに、斬れるものだ。

源之 うぬ、其舌の根を。(立ちかゝるを主膳又留めて、)

主膳 はて、何事も拙者が胸に、お構ひなくと、殿には一問へ。

源之 え、言はうやうない人外めが。(ト早き唄になり、源之丞腰元附き奥へはひる。)

長五 さあ、どうもこいつもびくくするな、是れから阿魔をそびいて行つて、此一件を割らにやあならねえ。(ト立ちかゝるを主膳隔てゝ)

主膳 何か様子は存ぜぬが、立ち騒がすと靜にしやれ。(ト詠への合方になり、主膳半舞臺へ下りて) 今承はれば其方は、小屋から來たと云ふが、さては非人だな。

長五 お、非人だ、それがどうした。

主膳 なぜ非人ならば非人のやうに、切髪をば包み隠し地輻の外から物を言はぬ。忝けなくも土御門の免許を受けし梶井主膳が、何で地輻を穢したのだ。

長五 なに、地輻を穢した、こいつア可笑しい、今奥へ逃げ込んだ阿魔ッちらよと、此の親仁は何だ、こいつらあ非人ぢやあねえか。これ耳の穴をさらつてよく聞きやあがれ、此長五郎は非人でもな、親の腹を飛出す時から、デイ／＼とは泣きやあしねえ、鹿の角の切口を掌へつけても産れはしねえ。いつ何時でも金せえ出しやあ足の洗へる御身分だ、こいつらがやうに孫子の代まで非人をすゐるのとは譯が違はア、十千萬兩金を積んでも、生涯清くなれねえこいつらぢやあ穢れねえか、いやさ、おればかりが穢れるか。さあ、ぐつとでも言つて見やあがれ。(ト主膳思入あつて)

主膳 は、ゝゝゝ、そりや其方が悪い了簡、假令非人にもせよ乞食にもせよ、人相を見てくれいとて姿  
を替へて参る時は、それと知つても知らぬ振りにて見て遣はすが則ち情、こりや人助けと申すも  
のぢや。其方とても其如く、なぜ身装を拵へて梶井主膳を頼みに來ぬ、事と品に依つたなら、そ  
ちが望みを叶へてやらう。

長五 なに、装をこさへて來たら、おれが望みを叶へて遣る、これ、おらあ錢貰ひにやあ來やあしねえ  
よ。

主膳 これさ、さう聲高に申さずとも、まあ靜に言ふがよい、錢貰ひには來まいなれど、少々はお  
れが貰つてやるから、晩にでもそつと來い。

長五 いやだ、二朱や一分の口腐れ金で、こんたはおれを追ッ拂ふ氣だらうが、さう旨くはいかねえ。  
一元手にあり附くほど、金を出すなら知らねえこと、左もねえことなら止しにさつせえ。

主膳 はてまあ、さう言はずとも、人のいふ事を聞くがい。

長五 聞いた所が無駄なことだ、金を取らねえ其代り、出る所へ是れから出て、阿古木を始めうぬらま  
で、掛替のねえ命を取るから、首を洗つて待つてゐろ。(トすつと立つて行きかける。主膳思入あつて)  
主膳 こりや待し。

長五 なに、待て、へほ將棊をさしやあしめえし、待てとは何た。

十膳 望みの通り、金を遣らう。

長五 こいつあ、ちつと分つたわえ。(ト合方替つて)

十膳 これ長五郎、今聞きやあ聲高に首を洗つて待つて居ると、片袂とつての強面、そんなことにびり

附いて、金を遣らうといふではない。今でこそ人相見、土御門から免許を受け梶井十膳と名乗れ

ども、以前はおれも上州で少しは知られた長脇差、銀張り丁半こまめくり、のすり驅も度重なり、

唐丸駕籠で道中を、仕飽いた果が構ひを喰ひ、今日は奥州明日は越後と姿を隠して歩くゆゑ、異

名を取つたのぶすま竹右衛門、流れくつて此の鎌倉で見やう見真似の人相見、山師の女鬮門権へ

も少しは腕に覚えがなけりやあ、此世の中に渡られねえ。斯ういふからにやあ長五郎、手前が來

たのは無駄にはしねえ、欲しかあ金もやらうから、此のいさくさを任してくりやれ。

ト主膳世話にいふ、長五思入、

長五 お前のいふのを黙つて聞きやあ、元はい、男だから此一件を任せろと言ひなさるのたね、そりや

あい、男でもあらうが、口でばかり任せると言つたとて、どうもさうは行き難い、氣の毒ながら

こりやあ任し難いよ。

主膳 すりや、いよ／＼任されねえか。(トきつと言ふ。)

長五 知れたことさ。

ト鼻であしらふやうに言ふ。主膳こなしあつて地袋戸棚より、前幕に拾つた庖刀を拭に包みしまふ

長五郎が前へ置き、

主膳 任せられずば、是れを見やれ。(ト長五郎取上げ見て、びつくりなし。)

長五 や、此庖刀は。

主膳 覚えがあるか。

長五 むう。

主膳 知らねえとは言へめえな。(ト長五郎の顔を覗く。長五郎きつくりと思入。合方替つて、昨夜夜更けて

山下を、通りかゝつて思はずも、のりにすべりしぬかり道、

長五 雨氣ついだか叢雲に、日常も知れぬ眞ッ闇黒。

主膳 便りに持つた提灯の、燈火を打消す曲者が、

長五 取落したる庖刀の、

主膳 此柄にあり／＼名前口、

長五 そんならそれで、此の双物を、

主膳 おぬしが所持と知つたのだ。

長五 むう。

主膳 何と、覺えがあらうがな。

長五 こいつあ一番當てられた。(ト長五郎思入、主膳こなしあつて)

主膳 は、は、は、覺えがあるなら長五郎、黙つておれに任せて置け、今夜殿のお供をしてお屋敷まで

お送り申し、其節金子を貰つて遣らう、聞けば腹からの非人でもねえとのこと、足の洗へる體な

ら綺麗になつたがい、ぢやあねえか。何にしろ暮れてから、多田の樂師の石置場で、おれが歸り

を待つて居やれ。

長五 ようござります、男は當つて碎けろだ、お前にすつぱり任せやせう。

主膳 すりやおれが顔を立て、任せてくれるか。

長五 くだくは言はねえ、いゝやうにしてくんせえ。(ト庖刀を懐へ入れて立上り、腰の草履を出して) 詰

らねえことの言ひが、りから、大きな聲をして、おやかましくござりました。

ト門口へ出て、喜六を見てにつたりと思入あつて、

そんなら先生。

主膳 長五郎、

長五 頼みましたよ。

ト手拭で塵を拂ひ肩へ掛ける、これをきツかけに唄になり、花道よき所まで行き、主膳を殺さうといふ思入、氣を替へて花道へはひる。ばたくにて、上手屋體よりおこよ脇差を持ち出る、跡より源之丞走り出で、おこよを留め、

源之 これおこよ、何ゆる死なうとしやるのぢや。

こよ どうぞ放して、死なして下さりませ。とても生きては居られませぬわいな。

ト泣き落す、此時喜六前へ出て、

喜六 お、娘、尤もぢや、尤もだく、そなたが死ぬには及ばぬ。お殿様への申譯は此の親仁が、さうぢや。

や。(ト主膳の脇差へ手を掛ける。)

主膳 こなたまでが同じやうに、狂氣でもさつしやつたか。

喜六 いえく、狂氣はいたしませぬど、人でなしめがあつたやうに殿様への窓口を、ぢつと御辛抱なされますも、元の起りは親子ゆる、勿體なうて冥加なうて、どうまあ生きて居られませう。産れ替つ

て人となり、一日なりと此御恩を、報いたうござりまする。

こよ わたしとても同じこと、お慕ひ申したばツかりに、お家に拘はる大事となりしも、天道様の咎御  
罰、どうぞ死なして下さりませいなあ。

源之 その歎きは尤もなるが、包み隠せしことならば、今となつて某に濟まぬといふこともあらうが、  
元より承知のことなれば、其の言譯には及ばぬこと、委細は主膳に頼み置けば、心遣ひは無用に  
しやれ。

主膳 假令如何やうに申さうとも高の知れたる長五郎、主膳が居れば大丈夫、殿の御身分に拘はるやう  
なことは決してござらぬほどに、おこよさまにも喜六どのにも、安心いたされたがようござる。

こよ さうおつしやるほど、  
喜六 勿體なうて。(ト兩人 刀へ手を掛ける。)

主膳 はて、急いては事の破れとなる、たゞ何事も身共が胸に。

ト主膳喜六を下にすゐる。源之丞おこよの脇差をもき取り下に居て、

源之 主膳、困つた奴ぢや。

トおこよ源之丞に縋り泣く、主膳はちつと思案の思入、喜六手拭にて涙を拭ふ、此見得よろしく唄に

て道具廻る。

(居酒屋の場) 本舞臺三間の間、藁にて拵へたる風除け、松の立木を取合せ、日覆より同じく釣  
枝、上の方九尺の居酒見世、足附の腰障子、眞中に幅廣の床几、爰に半次脚絆一本差し、紺の半合羽  
旅歸りのこしらへにて床几に片足掛け、刺身、鍋にて酒を呑み居る。側に居酒屋の若い者立ちかゝり  
居る。通り神樂にて幕明く。

半次 おい番公、はしら豆腐をもう一つ下ツし。

若者 はい。

半次 序にこはだのぬたもよ。

若者 畏りました。(ト若い者屋體の内へはひる。半次酒を呑みながら)

半次 あゝ一人ぢやあ旨くねえ、誰ぞ相手がほしいものだ。

トやはり通り神樂にて、花道より以前の長五郎頬冠りにて出来り、半次を見て、

長五 おい、そこに居るのは半次ぢやあねえか。(ト手拭を取る。半次見て)

半次 おゝ長五郎か、一三日逢はなんだな。

雪駄直し長五郎

長五 丁度いゝ所で逢つた、今手前の所へ行くとこだ。

半次 何ぞ用か、まあ爰へ掛けさツし。

長五 掛けると言つたとて、此の装ぢやあ。

半次 むゝ、さうだ。(ト半次合羽を脱いで、これを引ツ掛ける。(ト渡す、長五郎合羽を着て)

長五 こいつア有難え。そりやあさうと、一本きめて何所へ行つたのだ。

半次 手前も知つて居る人魂三次が、構ひを喰つて上州へ、行くのを送つて行つた歸りよ。(ト長五郎、

の内四邊へ思入)これ長五郎、なぜ掛けねえのだ。

長五 掛けてもよからうか。

半次 誰が氣が附くものだ。

ト是れにて長五郎居酒屋の内へ思入あつて、床几へ腰を掛ける。此時居酒屋の内にて、

若者 中臺の二合は直しだよ。(ト大きく言ふ。長五郎びつくりして飛び退き)

半次 えゝ、何をびつくりするのだ。

長五 それでも誰か直しだと。

半次 馬鹿アいへ、お爛直しだ。

長五 おきやあがれ。(ト長五郎手拭を冠り、床几へ腰を掛ける。)

半次 おい番公、熱くしてもう二合掛けて下ッし。(ト内にて)

若者 畏りました。

半次 さあ長五郎、一杯やりや。(ト茶碗をさす。)

長五 右難え、丁度氣を附けてえ所だ。

ト半次ついで遣る、長五郎酒を呑む。若い者小血物と烟銚子を持ち出來り、

若者 はい、お誂へでござります。(ト置いてはひる。)

半次 こはだのぬたをやつて見さッし、とんだい。

長五 一夜明けると、冷てえものが好くなるの。(ト兩人捨ざりふにて酒を呑みながら)

半次 そりやあさうと長五郎、おれに逢ひてえとは何の用だ。

長五 用といふは外でもねえ。(ト四邊へ思入あつて) 此間ちよつと話して置いた阿古木の話の一件よ、

おれが度々無心に行くを驚陶しく思やあがつて、おれを掃く狂言に、ふつと喜六親仁に逢つた所、  
殿様から手切の文が來て、それを見て娘が突き詰め、撞木橋からどんぶりと、身を投けて死んだ  
から、是れまでの事と思つてくれと、涙をこぼしておれへの話し、此の狂言の作者といふは、梶

井主膳といふ、興泉寺町の人相見と、知れたは喜六が落した手紙、大方斯うだと嗅ぎ附けて主膳が家へ仕掛けた所、案の定阿吉木の殿と死んだといふ娘が居るゆゑ、一元手に仕ようと思ひ振りこんで行つた所、ちつとこつちに引けがあつて、素手で主膳に任して來たが、金が欲しくばやうから多田の藥師の石置場で、待つて居るとの主膳が詞、慥におれをばらす所存、向ふもおれが邪魔だらうが、おれも又主膳があつちやあ、ぐづりに行くに邪魔になるゆゑ、こつちちはらしてしまひたいが、元が上州の長脇差、ちつとは覺えのある奴ゆゑ、おれ一人ぢやあむづかしい。そこで手前の手を借りて今夜主膳をばらしてしまひ、直に阿吉木へぶツつかり、たんまり金をのする積り、禮は言はずと二つ山、半口乗つちやあくれめえか。

半次 むう、そりやあい、尻尾をめつつけたな、おれも此頃取られてばかり、金になる仕事なら、半口乗つてばらしてやらう。

長五 それぢやあ兄貴、乗つてくれるか。

半次 慾と徳なり二つには、友達仲の手前の頼み、假令命を捨てればとて、おれも男だ、いやとは言はねえ。

長五 有難えく、それでこそ友達だ。

半次 丁度旅行きを送つて行くので、差して来たのがもつけの幸ひ。

長五 これから直に先きへ仕掛けて。(ト立ちかゝる。)

半次 もう一杯やつて行きやな。

長五 いや、酔つちやあならねえ。

半次 それぢやあおつもりに仕よう。おい番公、勘定は幾らだ。

若者 はいく。(ト奥より若い者出来り)はい、七百廿四文でござります。(ト半次二朱を出し)

半次 それ、赤ッぺらだよ。

若者 はいく、只今お釣錢を上げます。(ト内へはひる。時の鐘。)

半次 今打つ鐘は丁度入相、暮れるを待つて、

長五 梶井主膳をばらした上、

半次 阿古木の屋敷へぐづり込みやあ、

長五 三千石に拘はる仕事、

半次 表沙汰にやあならねえことゆる、

長五 少なすくなも五十と七十、(ト此時酒屋の若い衆百錢を持って来て)

若者はい、百お釣錢を上げます。(ト出す、半次取つて、)

半次 長五郎、百だ、とよ。

長五 む、い、辻占だ。

半次 さあ。行かう。

ト時の鐘、通り神樂にて長五郎半次花道へはひる。若い者道具を片附け屋體へはひる。右の鳴物にて道具廻る。

(薬師前石置場の場)

本舞臺向う奥深に多田の薬師の門、左右町家の遠見、舞臺前上下に丸物の

石積み上げあり、雨落到川の波板誂への切穴。日覆より椎の木の釣枝。總て稻瀬川薬師前石置場、

夜の體。時の鐘、合方雨車にて道具留る。と花道より○△□○の題目講の仕出し大勢、長提灯も

持ち、太鼓を叩き、出來り、

皆々 南無妙法蓮華經々々。

○ さあ、大變々々、雨が降つて來た、急いで行きませう。

△ もう二三町行くと、傘を借りる家がある。

□ 濡れた所がもう少しだ、急がすと勸化をしませう。

◎ それく大難四ヶ度小難數知れず、祖師さまの御難に比ぶれば、何でもないことだ。

○ それでもつづ濡れに濡れちやあ、まことになんぎやう法蓮華經だ。

△ え、勿體ないことを言はつしやるな。

皆々 南無妙法蓮華經々々。

トやはりわやく太鼓を叩き上手へはひる。ばたくになり、花道より長五郎、半次印の附きし番傘を相合にさし、足早に出來り、直に舞臺へ來て、

長五 半次、きつい降りはねえぜ。

半次 お、西の方が切れ上つて來た。(ト傘をすぼめ)

長五 今道々も話す通り、若しおれが危ふくなつたら、だしぬけにばらしてくれ。

半次 そりやあおれだ、案じるな。(ト長五郎上手を見て)

長五 やあ、提灯は慥に主膳だ。

半次 それちやあおれは石の間へ。

長五 合圖をするまで隠れて居ろ。

半次 台點だ。

ト時の鐘合方、半次上手石の間へ隠れる。長五郎身こらへする。上手より主膳着流し大小蛇の目の衆、足駄がけ、中間赤合羽竹笠にて、箱提灯を持ち出來り、

主膳 こりやく、もう送るには及ばぬ、其方は屋敷へ歸りやれ。

中間 左様ではござりますが、それではお提灯が。

主膳 いや、苦しくない、此方へ渡しやれ。

中間 左様なら、これでお別れ申します。

ト中間提灯を主膳へ渡し、引返してはひる。長五郎前へ出で、

長五 主膳さま、今お歸りでござりますか。

主膳 お、長五郎か。

長五 さつきから待つて居りました。

主膳 嘸待遠であつたであらう、大方そちが待つて居ようと、お送り申すと直に其の儘、お暇申して歸つて來たのだ。(ト四邊の石へ腰を掛ける。)

長五 左様でござりましたか。して、わしが事はどうなりました。

主膳 段々殿にもお話し申し。金子は身共が受取り参つた、然し少々の金子では、そちが爲めにもならぬゆゑ、身に附く程貰つて来た。

長五 そりやあ有難うござりまする。さうして、どの位、

主膳 十や二十の端たでなく、延金で遣はさう。

ト立ち上り、一腰をすらりと抜いて長五郎の目先へ突附ける。長五郎びつくりして飛び退き、

長五 まあ、待つておくんなせえ、さう伺もいきなりに、抜いてかゝらすともいゝぢやあござりませぬか、途方もねえ氣の短え人だ、まあ、待つておくんなせえ。

主膳 助け置いてやりたい奴ぢやが、大勢の命にやあ代へられねえ。假令百金二百金遣つたとて、それで、おのれが足でも洗ひ、人交りのなるやうにいたす所存のものならば、百や二百はくれても遣るが、負けた時には又屋敷へぐづりに来る氣と見て取つて、金の代りに此刃金、覺悟いたしてそれへ直れ。

長五 これは、お前、そりやあ何をいふのだ。高の知れた雪駄直しの長五郎、百の二百のとそんなに金はどうなるものか、ちつとばかりくんなさりやあ、それでこつちも足でも洗ひ、元の人間になつて人交りがしたさゆゑ。いつまでこんなざまをして、居てえことはござりませぬ、實に今ぢやあ

我が身で我が身に愛想が盡きました。(ト長五郎わざとしつぱりとなる。主膳思入あつて。)

主膳 ムウ、それぢやあ何か、非人の其身に愛想が盡き、足を洗つて眞人間になりてえとか。

長五 左様にござりまする。

主膳 あゝ見上げた男だ、さうなくては叶はねえ。そんなら是れから足を洗ひ、元の左官になつて来い、

元手位は貸してやらあ。

長五 いえもう、足洗ひ金さへありやあ、直に眞人間になります。

主膳 其の足洗ひ金を貸してやらうか。(ト斬つてかゝる。よろしく立廻つて長五郎主膳を留め。)

長五 こりや、どうでもおれを、切る氣だな。

主膳 知れたことだ、口先きばかりの嘘方便、そんなことを喰ふやうな主膳ぢやあねえわえ。

ト振放して切つてかゝる。時の鐘誂への合方にて立廻り、よき程に、半次右の薩より出で、主膳を一かせ斬る、主膳たぢくとなり、三人きつと見得、知らせに附き月を引出す。

こりやわいらは言合せて、おれがあつちやあ邪魔なゆゑ、殺す心か、しやらつくせえ。

長五 如何にも仕事の邪魔になる、まだ其上に山下の、始末を知つた梶井主膳。

半次 生けて置いちやあ後日の妨げ、それで半次も共々に、待つて居るとも知らずして、

長五 うかく、來たが運の盡き、覺悟極めてくたばつてしまへ。

主膳 何を小癩な。

ト誂への船の唄、稽古笛のあしらひ、好みの鳴物にて三人石置場の石を小楯に、長五郎出刃刀を出して二人立廻りよろしくあつて、ト主膳蹟くところを長五郎、半次左右より疊かけて主膳を仕留め長五郎乗つかゝつて止めを刺す、半次四邊を窺ひ、長五郎主膳の紙入を出し、金入の金を紙入の中にある序幕の證文へ打ちあげ、引ッ括つて腹掛の隠しへ入れ、出刃刀の糊紅を拭ひ、

長五 べらほうに骨を折らしやあがつた。

半次 どうだ、ちつとはあるか。

長五 二十兩ばかりあつた。

半次 そいつあ話せるな。

長五 半次、此死骸を川へぶち込んでくれ。

半次 合點だ。(ト主膳の死骸を川へ打込む、水の花げつと立つ)え、手を糊紅だらけにした。

長五 川で洗やな。

半次 違えねえ。

雪駄直し長五郎

ト石を傳ひ、眞中の切穴の所にて手を洗ふ、長五郎思入あつて、

長五 半次危ねえぜ、落ちるなよ。

半次 なに、大丈夫だ。

長五 さうか。

ト言ひながら半次を川の中へ蹴込む、水の花、水鳥ばつと立つ、長五郎川の中をきつと見込む。本鏡、長五郎につたり思入あつて、

わごい事を仕度くもねえが、實は手前の女房を疾うからおねがはらして居らあ、それゆゑわれを  
生かして置いてちやあ、枕が高く寐られねえゆる、それでどんぶりやつたのだ。(ト雨車になり、四邊の  
傘を取つて、これから二人しつほりと、(ト傘を開き、印しを見て足が附いてはといふこなしあつて、傘を  
すほめ川の中へ打ち込む木の頭、畜生め、濡れにやあならねえ。

ト川の中を見てにつたり思入、雨車、佃にてよろしく、

ひやうし幕

ト時の鐘のつなぎにて直に引返す。

(戀ヶ窪お長隠家の場) 本舞臺三間の間平舞臺、柿葺の屋根、引窓開閉、眺への紐附き、向ふ押入戸棚、鼠壁、荒神棚造酒徳利、下手鼠入らず、米櫃の書割、此下籠、釜、茶釜、臺所道具よろしく上の方一間障子屋體、いつもの所門口、下の方芥溜物置の小屋根、是れを傳ひ屋根へ人の乗ることあり、總て戀ヶ窪お長隠れ家の體。爰に熊坂お長單衣を下へ着たる悪婆、好みのこしらへ、上着を辻番の火箱へかけて寐ころび、角行燈にて小本を見て居る。是れを子分一足を採み居る。同じく二摺鉢の上へ組板を載せ河豚をこしらへ居る、三火鉢へ火をおこし四は釜の下を焚附けて居る、此見得通り神樂、四つ竹節にて幕明く。

二 權次や、しつかり焚かねえか、煙くツていかねえぞ。

四 なんほ場末だつて、まだ蚊は出ねえぞ。

三 薪が生だから、さつぱり焚附かねえ。

二 姉さん河豚が出来たが、何にしようね。

お長 さうよなう、一夜明けると葱もいやだの、湯河豚にでもしようか。

二 それがようござえやせう。

一 柚醬油ぢやあ呑めるねえ。

雪駄直し長五郎

お長 今いまに出來できると呑のませるから、居ゐ睡ねりをせずと揉もんでくんな。

一 居ゐ睡ねりをする氣きはねえが、自然しぜんとしんが睡ねると見みえて、つい手ての方がお留守あそになつて濟すみません。

お長 うまく言いつて居ゐるよ、大方おほかた昨夜ゆうべの廓なつかの疲つかれだらう。

一 いや是これは驚おどろいた、姉あね御ご、圖づ星せ當じりましたぜ。

三 河豚かづでなくツてまあよかつた。

二 人ひとを馬鹿ばかにして居ゐるやあがる。(ト子こ分ぶんの四前よんまへへ出でて、上か手ての揚あげて見みて)

四 姉あねさん、今こん夜やはあるが、あしたの朝あさの薪まきがねえぜ。

お長 無なかア明日あした、薪屋まきやへ粗そ朶だをませせて二百にひゃくばかり、持もつて來こいと言いつてくんな。

四 いつも四百よひゃくか二朱買しゆかふに、昨夜ゆうべの仕事しごともありながら、二百にひゃくとはしみつたれだね。

お長 さういふどぢだからいかねえよ、今いまはツぽと遣つかつて見みろ、直すに足あしの附つく仕事しごとだ、人ひとの噂うわさも七十五

日にち、こなれた時じ分ぶんに内會ないけいで、勝かつた積つもりで遣つかつて見みろ、誰たれも氣きの附つく氣遣きづかひはねえよ。

二 成程なるほどこいつあさうだ、昨夜ゆうべのものを今け日ふ遣つかやあ、足あしの附つくは知しれたことだ。

三 ところを二朱買しゆかふ薪まきを、二百買かやあ、摺つみ金きんで持もつて居ゐようとは、神佛かみほとけでも御存ごぞんじあるめえ。

一 是これだから姉御あねごなさア、二十年にんじゅう來らいして居ゐながら、いまだに誰たれもかぎ附つけねえ。

お長 嗅ぎ附けられてたまるものかな。

ト二河豚を平鍋へ入れ火鉢へかける。四一升徳利と燗徳利猪口などを蝶足の膳に載せ、持つて来る、時の鐘合方にて花道より、野手の三、頬冠り尻端折りにて出来り、直に舞臺へ來り。

野手 姉御、内かえ。

お長 誰だ、野手か。

野手 もし姉御、大變だぜ。

お長 大變とは何だな。

野手 ばれやしたよ。

四人 なに、ばれたとは。

野手 昨夜の仕事の足が附いたか、此界限を捕手の衆が、網を張つて居る様子、うか／＼しちやあ居られやせぬぜ。

二 soいつあ爰にやあ居られねえ。

三 今夜のうちに装を替へ、

四 奥筋へでも突ツ走らうか。

一 一 ふけ支度をしざあなるめえ。(ト此うちお長やはり麻痺本を見てゐる 野手はお長の側へ来り)

野手 もし姉御、おめえも奥筋へ行きなさるか。

お長 「行かねば此身が立たぬといふに。」

野手 わゝ、さうだとも、行くなら直にみんなと一緒に。

お長 「行くは行くが、まあ静に。」

野手 静どころではねえ、うか／＼しちやあ居られねえ。

お長 「えゝ、静にしやいの。」(トお長本を見て居るを、野手氣が聞き)

野手 人を馬鹿にして居るぜ、草雙紙の文句のことか。

お長 えゝ、ぎやあ／＼とうるせえ奴だの。(ト本を側へ置く)

野手 これさ姉御、本どころぢやあねえ、づきが廻つたから、ふけにやあならねえ。

お長 胸二に役が多いから、ふけるのもよからうよ。

二 姉御は株で茶にして居るが、こちとらはひく／＼ものだ。

三 ちつとも早くふけてえが、何しろちやんころなし。

四 昨夜貰つた骨折代は、今朝から小皿で取られてしまひ。

一 路用の金の當がねえが、どうか法の附けやうはあるめえか。

野手 路用の金なら案じるな、奥州までは通し駕籠で、好きな酒を吞まして、おれが一緒に連れて行かあ。

二 手前も親からの悪黨だから、當りのねえ事もいふめえが、御大層な事を言つていゝかえ。

野手 いゝといふ事よ、まあおれが隠しにのつて居なよ。(ト思入あつてお長に向ひ)もし姉御、今聞く通りわつちを始め、こいつらも影を隠す積りだが、奥州まで行く路用の金を、ちつとばかり貸しておくんせえな。

お長 うつたらしい奴等だの。(ト煙草の箱の引出しより金包を出し、金を算へて紙に包み)さあ持つて行きな。ト投つて遣る、野手取上げ算へ見て、

野手 もし姉御、たつた是ればかりかえ。

お長 なせ、それぢやあ不足といふのか。

野手 五人の天窓へ十五兩ぢやあ、一人前が三兩づつ、三兩や五兩の端た金ぢやあ、百里の道は行かれやせぬ、昨夜の仕事がそつくりあらう、刻まず綺麗に、貸してくんなせえな。

お長 何だ、綺麗の汚ねえのと、それぢやあ不足なら止しねえな、無理に遣らうとは言はねえよ。

ト野手きつと思入あつて、

野手 あい、よしやせう、貰ひやすめえ。(ト金を投り出し、胡坐をかき、)これが權兵衛か八兵衛とか、野手  
氣な人から貰ふのなら、素一分でもいたでえて行くが、熊坂お長といふ盗人から貰ふなら。

ト大きな聲をする。

二 これさ野手や、何を言ふのだ。

四人 姉御に向つて。

野手 何のいゝわえ、うつちやつて置け、盗人だから盗人といふのだ、路用の金を器用にくれさあ、え  
つちらおつちら奥州まで、もう高飛はよしにすらあ。まだひよツこの小野郎だが、親の代から悪  
事を見習ひ、夜盗かつさき人殺し、この兇状は廻しの上三日晒しの板附と、極つた科も口一  
で助かる仕様は胸にある、どれ、遊び所で安樂に、直の知れねえ飯を喰はうか。

ト野手すつと立ち、出にかゝるを四人留めて、

三 これ、險相替て、どこへ行くのだ。

野手 どこへ行かうと、おれが勝手だ。(ト門口へ出る。)

お長 これさ、みんな打捨つて置きな、抱いて這入ると脅しを掛けて、二十と三十取る氣だらうが、そん

なことに脅されて、金を出すやうな女ぢやあねえ、うつかり抱いて背負込むなよ。  
野手 背負ひ込むか背負ひ込まねえか、細工は粒々。

お長 何だと。

野手 思案を極めて待つて居るよ。(ト唄になり、時の鐘にて野手花道へはひる。跡四人思入あつて)

二 もし姉御、三の野郎が訴人をしやあしめえか。

お長 何のつけにするものか、なに彼奴も命が惜しいわな。

三 さうでもあらうが、何だか不氣味だ。

お長 怖かあ、是れを路用にして、何處ぞへ影を隠すがい。(ト件の金子を遣る。)

四人 さうして姉御は。

お長 何處へ行くものだな。

四人 いゝかえ。

お長 いゝよ。

四人 そんなら姉御。(ト大きく言ふを)

お長 野暮な聲だの。

四人 どれ、ふけようか。(ト時の鐘、四つ竹の合方にて、四人花道へはひる。お長思入あつて。)

お長 少しの事をびくくくと、意氣地のねえ奴等だの。しかしあいづ等がふけてしまふと、足手纏ひがなくていゝ。(ト件の金を出して見て)成程金といふものは、身に附かねえものだが、一晩たゝねえ其うちに、何やかやでめいつてしてしまひ、もう七十兩になつてしまつた。(ト包んでまた煙草箱の引出しへ入れる。時の鐘雨車になる。)おや、降つて来たやうだが、引窓がゐいて居やあしねえか。(トお長立つて来て)案の定、明けッ放しだ。(ト柱に結びし引窓の紐をぐつと引く、紐の片々切れる。)あゝ、いめへましい紐が切れた、しかし障子の方で仕合せ、明日誰そに附けて貰はう。

トお長件の紐を柱へ結び附ける、時の鐘四つ竹の合方、雨車はげしく、ばた／＼になり、花道より、前幕の雪駄直し長五郎、頼冠り尻端折りにて、走り出来り、直門口を明け、

長五 お長、内か。(トお長見て)

お長 おや長さん、おめへ一人かえ。

長五 むゝ、足を洗ふから水を下ツし。

お長 あいよ。(ト手桶を門口へ持つて行く)嘸雨で困つたらうの。

長五 二三町でぐつすり濡れた。

お長 傘はないのかえ。

長五 買ひたくツても四つ過ぎゆゑ、傘屋は知れず、駕籠屋はなし、めつぱふに困つたよ。

お長 あんまり、駕籠に乗る風でもあるめえ。

長五 見くびるな、おれだつて駕籠ぐれゐるに乘らなくつてよ。

お長 擔ぐ方が錢になるよ。

長五 馬鹿いふな。だが、こゝろ籠棒に不自山なところだ。

お長 隠れて居るにやあい、所だが、實に場末は不自山だなう。(ト長五郎足を洗ひ内へはひる)

長五 何だか冷たくつてならねえ、薪を二三本くれねえか。

お長 生憎薪がねえよ。(ト長五郎火箱の積んであるを見て)

長五 あの火箱をたゝツ毀して焚かう。

お長 詰らねえことを言ひねえな、たゞぢやあねえよ。

長五 しみつたれた事を言ふな、五十か六十四文出しやあ、いくらでも買へらアな。

ト言ひながら火箱を踏み毀し、火鉢にて焚き、着物を干しにかゝる。

お長 長さん靜にしなよ、大家さんがやかましいよ。

長五 其そのくれへな事ことを恐おそれるお長ちやうでもあるめえ、實じつに手て前めの肚ど胸きょうにやあ惚ほれた。どうして〜、おれな  
んざアかなはねえ。

お長 あんまりおだて〜おくれでないよ。是これでも元もとはお屋敷やしき生なまれ、お人柄ひとがらに育たつたも、油氣あぶらけなしの水みづ  
髪かみに黄楊わうやうの木櫛きしのかけ流ながし、人ひとに惡婆あくばと言いはる〜も、ほんのわつちやあ附燒つけやき灸い、お前まへにみんな仕し  
込こまれたのだよ。

長五 へん、そりやあ人が違ちがふだらう、谷七やつ郷がうの其そのうちには、脚絆きゃはんをかけにやあ歩あるけねえ、印いんの附ついた兜かぶと  
狀持じやうもち、小手柄こてがは半次はんじに仕込しこまれたらう。

お長 何なんのあんなどち野郎やらうに、どちといやあお前まえ、片附かたつけると言いつたがどうしたえ。

長五 どんぶりと遣やつてしまつた。

お長 え、そりや何處どこで。

長五 多田ただの藥師やくしの河岸かしツ端はたで、梶井主膳かぢゐしゆぜんといふものを遺恨ゐこんがあつて殺ころすのに、おれ一人ひとりちやあかなは  
ぬゆるゑ、半次はんじをおだて〜手傳てつだはせ、血塗ちまみれ仕事しごとに積上つみあげた、石置場いしおきなから手てを洗あらふところを川かみへ蹴けり  
込んだが、丁度命ちやうどいのちの引汐ひきしほに流ながれ〜て今頃いまごろは、百本杭ももほんに掛かつて居ゐようよ。

お長 それぢやあ是これから枕まくらを高く。お〜、寐酒ねさけがあるが氣きはないかえ。

長五 氣のねえどころか酒と聞いちやあ、御遠慮なしだ。所で替澤をいふやうだが、肴はあるかの。

お長 旬は外れたが、湯河豚があるよ。

長五 そいつあ妙だ、附けてくんねえ。

お長 一升あるからゆつくりおやりよ。(ト燗をつける。)

長五 有難え、おい鼻、といつちやあまだ早いかな。

お長 どうでもない、わな。

長五 寒くツていけねえ、宿六の下馬か襦袍はねえか。

お長 何かあるだらう。(ト押入より出して来て) 長さんこれでもない、かえ。

長五 何だ、こりやあ洗つてあるの、畜生め、うら木に勝る元木といふぢやあねえか。

お長 喋べると、風を引くよ。

長五 はい。お、燗が出来た、ついでくりや。

お長 おや、茶碗でかえ。(トついでやる。)

長五 大きい物でぐいぐいやらにやあ、腹の中へしみ渡らねえ。

お長 しみ渡るまでにやあ、餘程だらうね。

ト此時向ふの荒神棚へ、指金の鼠出て、御酒徳利を落す、是れにてぼつたりと殿しき音する、長五郎  
びつくりして茶碗を落し、立ち上つて、

長五 やあ、あの音は。(トきつと言ふ、お長見て、)

お長 荒神棚へ鼠が出て、お御酒徳利を落したのだよ。

長五 おきやあがれ、びつくりした。

お長 國に盜賊家に鼠、脱れぬ中だが、脱陶しさに、鼠取りを喰さうと、買つて置いてさつはり忘れたの  
ト煙草箱の引出しより鼠 取薬を出して、見物に見せて其處へ置く、長五郎は茶碗の割れたるを取上  
げ、

長五 今の音にびつくりして、茶碗を落して割つてしまつた。

お長 是れから二人一緒になるに、二つ割とは氣になるの。

長五 いや、氣に掛けるにやあ及ばねえ、丁度幸ひこの割れで、互ひに呑んで取替へれば、取りも直さ

ず二三九度。

お長 成程いは、今夜は婚禮、堅氣のものなら上下に、綿帽子といふとこだが。

長五 媒人なしの氣散じは、この蝶足か落の臺、

お長 かけた茶碗の盃に、

長五 長柄くわえは爛徳利、

お長 酒も一升夫婦の固め。(ト此内 兩人 件の茶碗の割れにて酒を呑み、左右へ取替へ思入あつて、)

長五 しかし互ひに 兇状持ち、明日にも悪事のばれた上、喰ひ込んだら命の終り。

お長 どうで終ひは板附に、身は野晒しの小塚原、

長五 夫婦並んで往生と、胸に覺悟はしながらも、

お長 命があつての物種のゑ、

長五 脱れるだけは策を替へて、

お長 別れ／＼にふけるとも、

長五 縁が盡きずば此の如く、(ト茶碗を出す。)

お長 割れた茶碗の一のになり、(ト片々を合せる。)

長五 丸く暮らすか、但しました、

お長 焼かぬ昔の土塊と、

長五 消えてしまふか、

お長 後日の證據に、

長五 割れた茶碗を片々づ、

お長 夫婦の固めに、

兩人 持つて居ようか。(ト兩人茶碗の割を、掛守りへ紙に包んで入れる。此時、時の鐘。)

長五 ありやもう九つ。

お長 表をしめて。(ト顔見合せ、思入あつて氣を替へ)

長五 火の用心でも、氣を附けようか。

お長 人を馬鹿にして居らあ。

ト時の鐘、誂への合方になり、花道より小手柄半次頬冠り、前幕と違つた着附、尻端折り安下駄をばき、番傘をさして出て来る。

半次 今熊のところ、此着物を借りて来たが、思へばく長五郎め、おれは何も意趣を受ける覺えはねえが、こいつは必定手下の奴等が常からの話し、よもや彼奴に限つてはと、思つて居たがこつちの自惚、きつと野郎が。家へ歸つての様子にしよう。(ト門口へ来て) お長く、今歸つた。

長五 や、あの聲は。

お長 あゝこれ。

トお長 長五郎に囁く。長五郎うなづき、三尺帯をしめ、上手の揚板をあげ、縁の下へ隠れる。お長は四邊へ思入、此うち半次門口を叩き、用水桶にて捨てりふを言ひながら足を洗ふ。

半次 お長や、明けてくれ。トこれにてお長寢て居たる思入にて、

お長 あい、誰だ。

半次 おれだ。

お長 内の人か、待つて居たよ。(ト起き上り門口を明ける。半次は傘の雨を拂ひ内へはひる。) 大分遅かつたの。

半次 手めへ、もう寐たのか。

お長 あい、今まで待つて居たけれど、丸つを打つたから、どうで今夜は歸るめえと、火箱を抱いていい心持に、とろ／＼とした所だよ。

半次 おれも雨が降つて來たゆる、泊つて來よと思つたが、小降りになつたから歸つて來た。

お長 何の歸らずとも、いやさ、よく歸つて來なすつたの。

ト半次よき所へ住ひ、前にある長五郎の手拭を取上げて、

半次 お長、この手拭は誰がのだ。

お長 え、そりやあ。

半次 九字菱つなぎの手拭は、長五郎が持つて居たが、野郎は家へ来て居るか。

お長 え、いゝえ。

半次 今夜來にやあならねえ筈だが。

お長 なぜにえ。

半次 腐れ合つて居るからよ。

お長 そりや誰と。

半次 誰でもねえ、手めへと。

お長 何だとえ。(ト誂への合方になり)

半次 疾うから耳へ這入つて居れど、慥な證據を見ねえうちは、迂闊なことも言はれぬゆゑ、人の笑ふ

も合點で知らぬ顔をして居たが、今夜出先きの始末といひ、おれが歸らぬ其うちに、此手拭かあ

るからは、野郎を家へ引込んだらう。間男したらしたと言へ、切つたり張つたり野暮はしねえ、

話し合でくれてやるわ。(ト是れにてお長思入あつて)

お長 そりやあお前何を言ふのだ、九字菱つなぎはいくらもある、仕入染めの安手拭、是れを證據に間男とはあんまりこりやあお情ない、如何に思案の外だといつて、わつちも熊坂お長と云はれ、少しは人に知られた體、雪踏直しや紙屑拾ひを、何のつけに情人にしよう、人のしやくりか知らねえが、詰らぬ事を言ひなさんな、小手柄半次と賣り込んだ、お前の名前にか、はるよ。

半次 その小手柄の名前へ泥を、塗られたからは、洗ひ落さにや面が立たねえ。

お長 そんならどうでも長五郎と、間男したと言ひなさるのか。

半次 知れたことだ。

お長 む、(ト合方きつぱりとなり、河豚をこさへた出刃庖刀を半次の前へ置き) 重ねておいて四つにされる、相手は元よりないけれど、それも疑ひうけたが不承、新内節や淨瑠璃の、文句のやうだが此世は愚か、未來までもと思つて居る、大事の亭主のお前の顔が、立たずばこれでわつちを殺し、どうぞ男を立つておくれ。(トお長思入にて言ふ。半次も思入あつて)

半次 それぢやあ手めへは長五郎と、いよく間男しねえといふのか。

お長 したかしないか掛替の、二つとはない命をば、捨てるがわつちの身の潔白、殺した跡で不便だと永い月日に思つたら、三文花に線香の、一本位はあけておくれよ。

トお長わざと愁ひの思入にて言ふことあつて涙を拭ひ、半次に背中を向け覺悟の體。半次心の解けし思入にて、

半次 人の噂に若しかと思ひ、外に遺恨のある奴ゆる、疑つたのはおれが誤り、堪忍してくれ、これお長。

ト半次お長の背中を叩く。

お長 そんならわつちの疑ひは。

半次 さつぱり晴れた。

お長 ほんにかえ。

半次 知れたことよ。(ト此時縁の下にてばたくと音する。)や、縁の下で何かばたく。

お長 裏の下見が毀れたから、大方犬が這入つたのだらうよ。

半次 忌えましい畜生だな。(ト酒肴を見)む、酒があるな。

お長 早くお前が歸つたら、一緒に遣らうと買つて置いたが、あんまり歸りが遅いから、先へ寐酒に遣

つたのさ。

半次 そいつあ有難い、おれも一杯やつて寐よう。

お長 どれ、ついでで上げようか。

半次 面倒だ、冷でもい。

お長 それぢやあ是れで。(トお長一升徳利の口より鼠取の薬を入れ、振りながら) 大きい物にしようの。

ト湯呑を出すを、半次捨ぜりふにて取り、お長徳利よりつぐ、半次ぐつと呑んで、

半次 あゝ、いゝ心持だ。(ト茶碗の中を見て) や、此茶碗にやあ何だかこなが。

お長 え、おや、どうせう、葛を入れた茶碗だよ。

半次 葛酒とは珍らしいな。

お長 ほんに、水ならいゝけれど。

半次 いや、それは眞平だ、今夜しつかり呑んで来た。

お長 何處でそんなに呑んだのだえ。

半次 多田の薬師の河岸端、石置場からどんぶりと、すんでの事に土左衛門と、名前目を替るところ、

折よく小船に助けられ、熊の所で襦袢を借り、命を拾つて歸つて来た。

お長 そりやあ、あぶない事だつたが、お株で何處でか呑みなすつたらう、お前は酔ふと性がないから

家へ歸つて呑んでおくれ、不斷わつちが言つて置くのに、何處でか意氣なことでもあつて、のろ

けかよろけでどんぶりと、川より女にはまつたらうに、其しが隠しにまじノと、歸りを待つて案じて居る女房をとらへて間男の、何のかんのと無理を言ひ、出ても行つたら其女を家へ入れる氣だらうが、さう旨くはいかねえから、いやでも女房のわつちの酌で、もう一杯呑んでおくれな。(ト湯呑へまた酒をつぐ)

半次 そんな氣樂なことぢやあねえ、今夜の始末を聞いてくれ。

お長 まあ、呑んでからお話しよ。

半次 む、(ト酒をぐつと呑んで) 阿古木の屋敷の一件で、梶井主膳といふ奴を長五郎がばらすのに、

彼奴の力にいかぬゆるおれが手傳ひはらしてやり、遺恨を今夜晴らさした、其恩のある此半次を石置場から船附の、深みへ彼奴が蹴込みやあがつた。

お長 え、。(ト態とびつくり思入。)

半次 それゆるこいつあ噂の如く、彼奴が手前の間男で、おれを騙して殺したなど、惡推量で疑つたの

よ。

お長 そりやあまあ、ほんの事かえ。如何に乞食をすればとて、あんまりな恩知らず、以前が左官仲間ゆる、人交はりの出来ねえものを、ほんに友達同様に、一つ鍋の物せえも喰ひ合ふ中のお前をば

主膳を殺す玉に遣ひ、大分後日の難儀を思ひ、それで川へ突き落したのだらう。話しに聞いてもわつちやあもう、悔しくツて悔しくツてならねえよ。是れといふのも不斷から、油斷のならねえ男だとわつちが言つたを聞入れず、あんまりお前が乗つたから、こんな目に逢つたのだ。あゝいふ義理を知らねえものが、人の女房を盗むのだよ。しみぐ憎い奴だなう。

トお長 思入。

半次 其替りにやあ此意趣は、きつと返して遣らにやあならねえ。(トきつと思入、又縁の下にてはたばたと音する。)また縁の下で。うぬ、畜生め。(ト立掛り、鼠取の毒廻りしこなしにてひよろ／＼となる。)

お長 え、あぶねえ、何うしたのだよ。

半次 どうした事か手足が痺れ、胸苦しいので、こたへられねえ。

ト苦痛の思入、時の鐘、すこき詠への合方になり、お長半次の苦しむをちつと見てうなづき、門口へ掛金をかけ、

お長 お前、手足がしびれるかえ。

半次 五臓六腑をしほるやうだ。

お長 鼠ばかりと思つたに、人にも少しはきくさうだ。

半次 なに、人にきくとは。

お長 今呑ました酒のことよ。

半次 え、さては五體の痺れるは、

お長 一服用ひた藥の效驗。

半次 して其藥は、

お長 鼠取り受合藥さ。

半次 え、え、え、え。(トびつくりなし、どうとなる。)

お長 きくかきかぬか常談半分、ためしに呑ました岩見銀山、わつらもよつほどいたづらものだの。

半次 さては亭主に、毒藥を。

お長 何の亭主も氣が強い、一人で居ては世間の聞え、三尺棚でも名前主、ほんの大家のほくよけと、

まさかの時は身の科を冠せる積りで女房になつたが、飽きが來たゆる一思ひ鼠取りで暇をやる、

是れまで盗みを働いて、尻尾の出ぬうち死ぬのが仕合せ、手足をちめて往生しなよ。

半次 うぬ、其口を。

ト半次毒氣に弱り、ひよろ／＼しながらお長にむしや振り附くを、振拂つて解けかゝりたる引窓の紐

をつかひ、誑への立廻り、ト、半次首へ紐を纏ひ、此の端を上手へ投る。長五郎縁の下より手を出し、ぐつと引く。半次立身にて苦しき、落る。半次此時お長の後より抱留め居る小指を喰切る。上手縁の下をばれ上げ、長五郎片足踏み出し、引窓の紐の端を肩へかけ、きつと見得。時の鐘。やはり凄き合方、長五郎半次を見て、

長五 息は留つたか。(トお長半次の鼻へ手を當て、思入あつて、)

お長 大丈美だよ。(ト是れにて長五郎繩を放す、半次はつたり倒る、お長指を見て、)あ、痛へ、小指を喰切りやあがつた。

長五 手前も小指を切られたな。

お長 とんだ奴に心中立つたの。

長五 何にしろ、この死骸はどこぞへこつそり。

お長 埋めにやあ此ま、こゝへ置き、丁度折よくあるこそ幸ひ、河豚に中つて死んだつもり。

ト半次に蒲團をかぶせる。

長五 こいつあ河豚より大當りだ。

お長 當るといふは、縁起がいのの。

ト時の鐘、此うち花道より野手先きに、黒四天の捕手六人附添ひ出来り、門口へ来て明けようとして明かぬゆゑ、戸を叩き、

野手 姉さん、ちよつと明けておくんなせへ。

お長 お、野手の三か。(トお長何心なく門口を叩ける、捕手十手を振上げ、)

捕手 とつた。(ト是れにてお長門口をびつしやりしめ、長五郎は行燈を吹消す。時の鐘。)

お長 さては野郎め、訴人をしたな。

野手 此身の科を脱れんため、うぬが悪事の訴人をした。

お長 臆病者め、覺えて居ろよ。

ト長五郎身拵へなし、手拭にて巻きし庖刀を出す。お長は探り寄り、煙草箱の引出しより金を出し、懐へ入れ、以前の出刃庖刀を持ち、兩人ちよつと囁き合ひ、長五郎籠より引窓をわけ、屋根へ出る。これと一緒に野手捕手に囁き、松の登り木より同じく屋根へ登り、思はず行き合ひ、

野手 長五郎か。

長五 何を。

ト兩人立廻る。此物音に構はず、お長悠々と身拵へする。野手立廻りのはずみ、引窓をわけて下

へ出る。是れにて捕手屋根へ上る。野手は下にてお長と立廻る。此時引窓明く、上を見上げて、

野手 屋根のは正しく、長五郎。(トお長また見て、)

お長 落行く先は、滑川の渡しを越えて西へ行き、

長五 左へ取つて極樂寺。

ト是れにて下は探りの立廻り、上は捕手皆々かゝり、誂への鳴物になり、烈しき立廻り、ト、皆々を道つて後へ下りる、また窓明く、野手見上げて、

野手 落行く月影、

お長 野手の野郎め。(トちよつと立廻り、きつと見得。此の仕組よろしく道具廻る。)

(お長内裏の場) 本舞臺上手二間 柿葺の庇を見せたる屋體。前面は腰羽目附き一面の中窓、後打破る誂へ、是れに續いてよき程の芥溜、あとへさげて物干、續いて路地、向ふ下見にて見切り、總てお長内裏の體。芥溜より足掛りにて、屋根へ人の上る誂へ好みの通りよろしく、時の鐘、凄き合方にて道具留る。と上手の中窓を蹴破り、内より長五郎出刃庖刀を腰にさし、尻端折りにて前へ出る。是れに續いて以前の捕手路地口より出來り、長五郎を取巻き、捕つたと掛る、是れを誂への鳴物に

なり、思ひ／＼の仕のきの立廻り、屋根の上下にて好みの通り存分大立廻りあつて、どつこいと留よる。知せに附き月隠れる。是れにて長五郎よろしく措脱け、花道へ脱れ行き、俯伏しになる、舞臺の皆々うろ／＼と探り合ふ、此時窓の内より、

捕手 熊坂お長は刃捕つたり。(ト此聲に長五郎すつくと立トリ、思入あつて、)

長五 え、喰ひこんだか。

トきつくり思入。爰へ花道より捕手兩人つか／＼と走り來り、長五郎を舞臺まで押戻す。爰へ上下より捕手ばら／＼と出て、折重つて繩をかけ、其儘起き上るを木の頭。長五郎無念の思入。合方鐵棒の音にて、

ひやうし幕

### 四幕目

#### 海士崎町駕籠屋の場 雪の下會所の場

〔役名〕—雪駄直し長五郎、駕籠屋の甚兵衛、下駄の市、荒川三左衛門、家主市郎兵衛、米屋仁兵衛、尼妙貞、道具屋善六、葉山彦助、同家來傳八、駕籠昇九郎助、山崎屋與五郎。熊坂お長、甚兵衛娘お關、

藤屋晋妻、座頭浪市其他

(海士崎町駕籠屋の場) 本舞臺三間の間申足の二重、藥葺本縁付き、向う暖簾口、上手鼠壁、下手押しとだな、三尺の佛壇、圍爐裏、自在竹、よき所に半琴を立て掛け、軒口にかごやといふ掛行燈、いつもの所門口、採療治浪市といふ名札、上の方一間の附屋體、三尺戸明け掛け、内に四つ手駕籠入れあり、下の方掛けの竹垣、此の屋體本縁の下へ這入る詭へ。總て鎌倉海士崎町駕籠屋の體。爰に市郎兵衛羽織着流し家主のこしらへにて、四つ手駕籠に乗り、これを籠昇〇〇の二人にてかつぐ稽古をして居る、側に九郎助の駕昇草鞋の紐を通しながら見て居る。此見得さんげくの合方、初午の躰子にて幕明く。

○△ はい駕籠、はい駕籠。(ト平舞臺を、二三通行つたり來たりする。)

九郎 え、此の野郎も不器用な奴だ、まだ掛聲の息が合はねえ。

市郎 こんな駕籠に乗つては、酒手を遣る氣はないな。

○ へ、大家さん旨く言ひなさるね。

△ わつちらが稽古の駕籠よりか、乗つたこともねえくせに。

市郎 何ほ海士崎町の家主でも、さう安く言はねえものだ、町内でも小目を利く、三人役の市郎兵衛だ、

此間も勘定くつれに、組合と親方を連れて、すつとお駕籠で假宅だ。

九郎 そいつあ大洒落でござりましたね、何ぞ儲け口がござりましたか。

市郎 地面の賣買があつて、歩一とひろめと判賃で、二兩ばかりになつた所から、つい存れ出したのよ。

九郎 駕籠でおいでなさるなら、かつがして下さればよいに。

市郎 そこに如在はなけれども、こつちの内から乗つて行くと、直に小指へ知れるゆゑ、そこで外から乗つて行つた。

○ どうで大家さんの、乗んなさる駕籠屋なら、

△ 氣の利いた駕籠屋ちやアあるめえ。

市郎 さうよ、やつぱりおぬし達のやうな、間拔けな駕籠屋だ。

○ それぢやあこんなに、

○ △ 落しやしたか。(ト態と駕籠を曲げ、市郎兵衛を落す。市郎兵衛平舞臺へどうとなり。)

市郎 あいた、ムムム。

ト腰を擦り居る。やはり右の鳴物にて、奥より甚兵衛着流しにて出來り、

甚兵衛 これは大家さま、どうなされました。(ト市郎兵衛を介抱なす。)

市郎 いや甚兵衛か、酷い目に逢つたわえ。新米の若造が稽古をするから乗つてくれと、軋むゆる乗つた所、如何に錢を取らぬといつて、眞ツさかさまに落しをつた。

九郎 大家さんも御大層な、忠信の淨瑠璃ちやあるめえし。

市郎 いや、あるめえし所か、實に胸板をはッしと打つた。

甚兵 それは危ないことでござりました。これ手前達もどうしたものだ、稽古をするなら外ですればよいに、家の中でするといふがあるものか。

○ それでも大家さんが、やれ擔げ、それ擔げとおつしやるから。

市郎 なに、おれがそんなことを言ふものか。

甚兵 はて、もうよろしうござります。(ト留めて、)して大家さまには、何ぞ御用でもござりましてか。

ト市郎兵衛思ひ出せし思入にて、

市郎 お、お觸れがあつて來たのだ。

甚兵 なに、お觸れとは。

市郎 外でもない一昨日の晩、山下で殺された山崎屋の娘と下女、段々お調べになつた所、三光とやらいふ世に稀な櫛を持つて居たとのこと、そこで殺した者は物取りとお上でも目くしが附き、又下

女の口に喰切つた小指が残つてあつたゆゑ、例でも小指のない者と櫛を持つて居るものを、見當らば縛つて出せと、代官所から裏々へまで、言ひ渡せとある嚴しいお觸れ。

トこれ聞き、甚兵衛きつくり胸に當る思入。

甚兵 すりや山下で殺された、山崎屋の娘御が、世にも稀なる三光の。そんなら、あの折。

市郎 え。

甚兵 いやさ、折々仕事の歸りがけ買物をした山崎屋、はて氣の毎なことだなあ。(ト甚兵衛ちつと思入。)

市郎 世間を廣く歩くこなた衆、随分ともに氣を附けさつしやい。どりや、番屋へ行つてあたりうか。

九郎 わしらもそろ／＼見世を張らう。とつさん、お前は休みなさるか。

甚兵 さ、ちつと差掛つた用があれば、誰ぞ相棒を拵へてくれ。

九郎 あい／＼。大家さん、御一緒に参りませう。

市郎 そんなら甚兵衛どの、必ずお觸れを忘れさつしやんな。三光の櫛を持つて居る者が、山下の人殺し

だよ。

甚兵 承知しました。(ト思入。)

市郎 あゝ、今打つたので腰が痛い。(ト言ひながら門口へ出る。九郎助先に○入駕籠を擔ぎ出る。)

九郎 〇△ 大家さん、お駕籠はどうだね。  
市郎 いやも、眞平御免だ。

ト右の鳴物にて市郎兵衛先きに、九郎助〇△跡に附き下手へはひる。甚兵衛跡を見送り思入あつて、合力になり、

甚兵衛 あ、知らぬ事とはいひながら、一昨日の晩山下で切羽詰りし身の難儀を、盗人どのに助けられ、金の替りに貰つた櫛、さる屋敷から拂ひ物と心にもない嘘さへも、正直者と人さまが御存じゆゑに疑はず、首尾よく賣れた代金百兩、そでないこともお主の爲め、只香台が欲しいばかり、今にもあれ此の事が露顯なさば、人殺しの繩日に逢ふは厭はねど、娘吾妻が與五郎さまと深い中ゆゑ娘の爲めに、許嫁のお照さまを殺したかとの疑ひは、言譯なすとも明りが立たぬ。それと知つては少しも早く、凶事のない内香台を故主へお渡し申したい。あゝ、この道具屋の善六どのは、早く持つて来てくれ、ばよいに、待遠しいことぢやなあ。

ト門口を覗きなどして氣の急く思入。又さんげくの囃子になり、花道より善六道具屋にて、羽織はつち尻端折り、香合の箱を風呂敷に包み、これを背負つて出來り、

善六 甚兵衛さん、お内かね。(ト内へはひる)

甚六 お、善六さんか、待つて居たく。

善六 大きに遅くなりました。(ト下手に住ひ) 急いで来ようと思つたところ、似寄の品で、いやさ、荷口があると仲間から知らして来たゆゑ、つい慾で廻り道をして来ました。(ト言ひながら風呂敷包のより香合の箱を出し) さあ、お約束の胡蝶の香合、改めて下さりませ。

ト甚兵衛ちよつと紐を解いて見て、

甚兵 いやわしが見た所が知れぬ品、お前のことゆゑ間違ひもあるまい、さあ代金を受取らつしやれ。

ト懐の財布より百兩包みを出し善六へ渡す、善六封を切り改め、

善六 慥に受取りました。

甚兵 念の爲め、受取りを書いて下さりませ。(ト硯箱に紙を添へて出す。善六受取を書いて)

善六 これでようござりますか。

甚兵 ようござるともく。(ト受取を煙草入に入れる。善六は金を朋卷へ入れ)

善六 いや、自由ながら今言つた荷口の事で仲間へ廻れば、直にお暇いたします。(ト善六立ちかゝる)

甚兵 これは、茶さへ進ませぬのに。

善六 そのお茶よりも山吹色で。

甚兵 え。

善六 いやさ、山下で茶漬ッて行かうか。(トとばくさと右の鳴物にて下手へはひる。)

甚兵 はて、そッかしい男だな。

ト稽古唄になり、花道よりお關やつし世話女房のこしらへ、風呂敷包みを持ち出で來り、直に本舞臺へ來り、

お關 父さん、今歸りましたわいな。

甚兵 娘戻つたか、早かつたノ。して旦那様には、お替りないか。

お關 何のお替りもない御様子で、後方までに香合が手に入りますと申し上げたら、それはノお悦びなされて、今日の日限りの間に合ふは、そち達が働きゆゑ、後方三左衛門を取りに遣はすと、おつしやつてゝあつたわいな。

甚兵 おゝさうであつたかく。いや後ともいはず、たつた今、もう手にはひいつたわいの。

ト出して見せる。

お關 そんなら是れが、香合とやらでござんすか。あゝ嬉しやく、是れでお主様の御歸參も叶ひ、お前の忠義も立つといふもの、こんな嬉しいことはござんせぬわいな。

甚兵 此の悦びに引替へて、さ、一つ叶へは又一つと、娘吾妻が身請けの金。

お關 これも大枚二百兩。

甚 娘、あゝふさぐなあ。

ト甚兵衛は今に綱目に逢ふといふ思入、さんげくにて、花道より侍八が納戸の牛合羽一本差し、緋の脚絆草履にて出来り、門口から、

侍八 甚兵衛さん、ちよつとお目に掛りたうござります。

甚兵 はい、何ぞ御用でござりますか。

侍八 お聞き申したいことがござるから、會所まで来て下さりませ。

甚兵 えゝ。(トぎつくり思入。)

お關 こつちにも急な用があれば、なあ父さん。(ト止せといふこなし。)

甚兵 いや、行かすばなるまいわいの。(ト甚兵衛覺悟の思入。)

お關 さうして、お前の留守にひよつと。

甚兵 旦那さまからお人が参らば、お渡し申してくりやいの。(トそつと香合を渡す。)

侍八 さあ手間は取らせませぬ、早く来て下さりませ。

甚兵 はいん、(ト門口へ出て) そんなら娘、行つて来るぞよ。(トお關を見てほろりと思入。)

お關 早う歸つて下さんせ。

甚兵 おゝ、(ト門口をびつしやりしめ) あゝ、歸れ、ばよいが。

これは。

傳八 御説議がある。うせう。(ト手荒く引立て、花道へはひる。跡にお關心に掛る思入。香合を見て)

お關 此の香合が手に入つて、悦ぶ中に父さんの、忌はしいあの顔色、案じるせるかさつきから、顔へ  
る程の胸騒ぎ、この浪市もまだ歸らず、あゝ何ぞ凶事でもなければよいが、心にかゝることぢや  
なあ。

ト案じる思入、さんげくばたぐにて、花道より市郎兵衛走り出來り、

市郎 お關どののは、内かく。(トあわて、内へはひり、うろくする。)

お關 はい、爰に居りますわいな。

市郎 大變々々、(ト坐つたり起つたりして) あわてさつしやんなく。水でも茶でも、一杯くりやれ。

ト胸を叩き居る、お關茶を汲み持つて來る、市郎兵衛ぐつと呑んでむせる。

お關 お静かにおしりなさんせいな。

市郎 えき、あわてさッしやるなく。

お關 いえく、あわてはいたしませぬが、大變とは何でござすんぞいな。

市郎 何だ所か、甚兵衛どのが、人殺しの盗人だとして、今縛られて行つたわいの。

お關 えき、(トびつくりなし) そりやまあ、ほんのことでござんすかいな。

市郎 ほんの事ともく、一昨日の晩山下で山崎屋の娘を殺し、三光とやらいふ櫛を盗み、それを横丁

の伊勢五の家へ百兩に賣つたとのこと、所で上から殿しいお觸れに伊勢五から訴へ出で、そこで

人殺しと知れたさうだが、日頃正直な氣に似合はず、とんだことをしてくれて、又おれの厄介だ。

お關 すりや父さんが一昨日の晩、貰つて來たと言はしやんした、三光とやらのあの櫛は、盗み物であ

つたかいな。如何にお主の爲めちやとて、人もあらうに山崎屋の、娘御を殺すとは、ひよんなこ

として下さんしたなあ。(トお關ッツと泣き伏す、花道の揚幕にて)

妙貞 うしやあがれく。

トさんげくになり、花道より妙貞坊主登、黒の頭巾のこしらへにて、二幕目の浪市の小按摩を引摺り、跡より仁兵衛羽織着流しにて附添ひ出來り、

妙貞 さあ、うぬが内は何所だか、鼻で嗅いで案内しろ。

仁右 若し妙貞さん、あんまり手荒くして疵でも附いたら、逆捻を喰ひませうぜ。

妙貞 仁右衛門さんも氣の弱い、何構ふものかね。さあ、うしあがれ。 (ト本舞臺へ來り) 海士崎町

の駕籠屋だと云ふから、大方うぬが内は爰だらう。

浪市 どうぞ、御免なされて下さりませ。 (ト此聲を聞き、お關、市郎兵衛表を見て)

お關 やあ、そなたは浪市、どうしやつたぞいの。

浪市 姉さん、堪忍して下さりませ。

妙貞 さあ、きりくと内へはひれ。 (ト妙貞浪市を引摺りて内へはひる。仁兵衛も跡よりはひる。)

市郎 こりやまあお前方、年端も行かぬものを、手籠めにして、どういふ譯でござります。

仁右 御免下さりませ、私は雪の下の米屋仁右衛門と申すもの、是れなるは妙貞と申す尼御でござりま

すが、此の座頭どの、事に附いて、斷りに上りました。

お關 斷りにお出でなすつたとは、どんな悪いことをいたしましたか、さあ、それをおつしやりませ。

おつしやりませ。

市郎 あ、これ、まあく靜にさつしやれ。わしは此長屋の家主、市郎兵衛と申すものでござるが、何

を浪市がわるさをしましたな。

妙貞 わるさもわるさ、

兩人 盗みをしました。

お關 え、。(トびつくりなす)

市郎 これは椿事ちうよう、今親仁が盗みをして縛られて行つたばかり、又跡釜に替とは、こりや

主はこつばいだわえ。(トこれを聞き、仁右衛門妙貞思入あつて)

仁右 そんなら何とおつしやります。此の浪市の親父めち、やつぱり盗みをしましたとか。

妙貞 親が親なら子も子とて、目も見えぬくせに盗みをするとは、いけッ太い餓鬼めだな。

仁右 さあ、盗んだ物を出してしまへ。

妙貞 出さじやあ、親の見る前で。(ト妙貞立ちかゝるを、お關留めて)

お關 まあ、お待ちなされて下さりませ、盗みくゝとおつしやりますが、何を此の子が取りました

ぞいな。

仁右 盗んだ品は、浪市が懐に隠して居るわしが紙入、尼御の巾着。慈悲をすれば何とやらで、年も行

かぬに此様に按摩をするとは不便なこと、きかぬ療治を合點で、来る度毎にいつでも呼ぶ、定得

意のわしら二人。

妙貞 上下揉んで三十二文の、極りの外に八文か十二文は餘計やり、時分時には飯までも喰はせてやつた恩を仇、親兄弟が言ひ附けて、させることか知らないが、目界も見えぬ身を以て、盗みをするとは死太い心。

仁兵 可愛さ餘つて憎さゆる、年甲斐もなく引招つて、

妙貞 斷りに來ましたのさ。

ト是れにてお關すつと寄つて、浪市の懐へ手を差入れ、紙入と巾着を引出す。浪市其の手に纏るを振拂ひ、

お關 これ浪市、此の紙入や巾着は、こなたほんまに盗みやつたのか。(ト浪市じゆつなき思入にて)  
浪市 はい、つい出來心で盗みましたわいな。

お關 え、おのれはなあく。(ト浪市を引倒し、疊へ招附ける。市郎兵衛これを留める、)  
市郎 あこれ、お關どの手荒いことをさつしやるな、怪我でもさしてはならぬわいの。

お關 いえく構うて下さりますな。(ト市郎兵衛を振拂ひ、)これ浪市、何でそなたは此様な、さもない事をしやつたぞいの。(ト替つた合方になり、)身貧に暮せどそなたには、何不自山もさせぬやう、

出来ぬながらも此姉がすゝぎ洗濯賃仕事、その禮受けて着類は元より辻駕籠擔ぐ其兵衛の、内に似合はぬ半琴まで、買つて遣りしも欲しがらぬ、又稽古の爲めと此春から、療治に出すも僅ても貰うたお錢を積み溜めて、早う官位を取らせたさ。斯程に思ふこの姉の心も無足に盗み事、親兄弟も一つかと疑ぐらるゝが面目ない、今でこそ辻駕籠擔ぎ、軽い身ながら元は武士、譬にもいふ高楊枝、その日の糧に困ればとて、人さまの物塵一葉掠めし事のなき身さへ、言譯ならぬ今日の仕儀、父さんといひそなたまで、盗人の名を取るといふは、口惜しいくゝわいの。さあ、どういふ譯で盗みをしやつた、言譯あらば言やいなう。

浪市

さあ、それは。(ト言ひ兼ねる思入。)

お關

仔細を言はねば姉が折檻、かうくゝくゝ。(ト有合ふ杖を取つて浪市を打ち据ゑる。市郎兵衛捨ぜりふにて留める。) さあ、きりくゝと言やらぬか。(ト是れに浪市顔を上げ、思入あつて)

浪市

もうし姉さま、言うては悪いことなれど、お前の恥になる事ゆゑ、盗みし譯を申します。 (合方替つて) 三年跡に父さまのお主様が、失うた大事の寶の在所が知れ、それを買ふには大層な金が入るとて朝夕に、困る話を聞くに附け、せめて療治の代なりと金の足しにと思ふゆゑ、今日も朝から方々を呼んで歩けど呼び手はなく、妙貞さまのお家へ上り、療治をなして歸りがけ、足に

さはつた巾着に、ふつと浮んだ盗み心、袂へ隠して又それから米屋の旦那を揉むうちに、見えぬ目にて四邊を窺ひ、探る手先きに紙人のさはるを幸ひ懐へ隠す所を見咎められ、憎い奴ぢやとお二人さまに引かれて歸る此身の苦しき、盗みをすれば命まで、取らるゝ事とは聞いては居れど、わしや殺されても父さんや、お前の苦勞が助けたく、ひよんな事をしたばツかり、親兄弟に悪い名を、附けたはどうぞ許して下され。もし仁右衛門さま、妙貞さま、親兄弟の言ひ附けで、決して盗みはしませぬ程に、憎い奴ぢやと思召さば、此の浪市を。(ト四邊を探り、杖を取上げ)この杖で打ち殺して疑ひを、どうぞ晴らして下さりませ。さあ打つて下され、打ち殺して下さりませ。

ト浪市仁右衛門妙貞の前へ杖を出し思入。此のせりふの内お關は泣き伏す。市郎兵衛仁右衛門妙貞も顔見合せしくくと泣き、此の時三人ワツと泣き出す、涙を拭ひながら、

仁右 あゝこれく、さういふ譯と聞く上は、どうまあこなたが打たれるものか。

妙貞 年甲斐もなく此のやうに、手荒くしたが面目ない。これ姉御、どうぞ、

仁右 堪忍して下さりませ。(ト兩人お關にわびる。お關思入あつて、)

お關 そんならお疑ひは晴れましたか。

妙貞 晴れたともく。さつぱりと、

妙貞 晴れたわいの。

お關 まだお疑ひは晴れまして、晴れぬはこの子の盗みの科。

仁右 あこれ、盗みとは何の事、此の紙入や巾着は此子にわしらが遣つた品、なあ申し、妙貞さま。

妙貞 それ／＼、それを盗んだの何のとは、こちらがみんな覺え違ひ、悪名附けた代りには、門跡さまへ納めようと、溜めて置いた三兩二分、これを添へて遣りませう。

ト懷より紙入を出し金を包んで、浪市の前へ置く。

仁右 いやお前がさういふお心なら、わしも爰に得意から、拂ひを取つた金が五兩、これも一緒に遣りませう。(ト仁右衛門財布より紙包の金を出し、同じく浪市の前へ置く。市郎兵衛これを見て)

市郎 したり、(ト手を打ち)成程世界には鬼はないものた、親兄弟の其の爲めに盗みをしたと聞かしやつて、取られた物に輪をかけて、金まで添へて遣らつしやるとは、さりとて見上げた二人の衆、家主感心いたしました。然しわしも見ては居られぬ、僅なれども一兩二分、掃除代の残りかあれば、是れをば添へて丁度十兩。(ト市郎兵衛紙入より一兩二分出し、同じく並べる。)

仁右 お家主さまの御助力にて、

妙貞 數よく金も揃うたれども、

市郎 さあ、お隣どの、

四人 受取らつしやれ。

お關 いえく、是れを受けましては、どうも、心か、

市郎 はて済むも済まぬも入らぬわい。悪いことはわしが言はぬ、思召をもどかずに、お賞ひ申してお

くがよい。(ト是れにてお關思入あつて、)

お關 左様なればお賞ひ申します。これ浪市、ようお禮を申しやいの。

浪市 あい、皆様有難う、

兩人 存じますわいなあ。(トお關は金を頂き、浪市は手を合して拜む。)

市郎 やれく、是れでさつぱりと浪市の明りは立つた、是れから親仁の甚兵衛どの。

お關 どういふ譯か會所へ行き、様子を聞いて來たいにも、餘儀ない事で待合はす人があるゆゑ行くこ

とならず。

市郎 いや、必ず案じさつしやるな。日頃正直な甚兵衛どの、てつきり是れは何かの間違ひ、つい一走

り會所へ行き、様子を聞いて來ようわいの。

仁右 大家さまがお歸りなら、

妙貞 わたし共も御一緒に、

市郎 道までお連れになりませう。(ト三人立ち上がる。)

お關 左様なればお二人さまにも、もうお歸りでござりますかいな。

仁右 いやも、思はぬことで大きに長居、

妙貞 これをば縁に、姉御にも、

お關 はい、お禮ながら上りませうわいな。(ト三人門口へ出て、)

市郎 そんならお關どの、

お關 どうぞ様子を、

市郎 直に知らせに歸つて來るぞよ。(ト三人花道へ行く。) 何とお二人さま、あの浪市は年に似合はぬ、

孝行者ではござりませぬか。

仁右 いやもう私共も腹立ちまぎれ、憎い奴ぢやと思ひましたが、

妙貞 哀れな話しを聞きまして、

市郎 家主までも涙の相伴。

仁右 盗んだ時は閻魔の子も、

妙貞 今となつては地藏の子、

市郎 まことに孝行な、やれ、駕籠屋の子。

兩人 は、ムムム。

市郎 さあ行きませう。(トテンツ、くになり、三人花道へはひる。お關跡見送り)

お關 これ浪市、堪忍してくりやいの。(トしをれ居る浪市を抱きしめ、さういふ心と知らぬゆゑ、一途に

盗みをしたと思ひ、杖を以ての今の折檻、どこも痛みはせぬかいの。

浪市 いえく、わしは何ともなけれど、心にかゝるは父さまが、縛られて居やしやるとのこと、何で盗

みをしやしやんしたぞいな。(ト浪市お關に絶る。)

お關 様子知れねど、父さまは、盗みばかりか人殺し。

浪市 え、なに父さまが人殺し。(ト浪市思はず大きな聲する。)

お關 あこれ、ひそかにしやいの。

トお關四邊を窺ふ、浪市は口を押へる。此見得時の鐘さんげくにて此道具廻る。

(雪の下會所の場) 本舞臺三間の間、常足の二重、本庇三尺の式臺、向う一面の鼠壁、前側

白木の障子を建切り、式臺の左右駒寄せ、上の方一間中窓の前側、此前に用水桶を二、積重ね、下の方一間板羽目の前側、これに觸書の張札、總て雪の下會所の體、爰に仕出し大勢立ち掛り、會所の内を窺ひ居る、これを番太鋸棒にて追つて居る、さんげくにて道具留み。

番太 さあく、通りませうく。

ト仕出わやく、捨せりふにて、やばり立ちかゝり居る、此内花道より以前の善六香合を風呂敷に包み、これを背負ひ出て來り花道にて、

善六 無駄だと思つた甚兵衛が、思ひがけなく金が出来、放駒の香合をどういふ譯か買はうといへど、

眞の品を知らぬゆる似寄りの品をおツはめて、百兩取つて質屋へ設し、利分を取つた其の上に、儲けは背負つて居る此の正物、こいつを賣つて其の金で京大阪から大和巡り、暫く影を隠して來ようか。(ト平舞臺へ來り仕出しに向ひ) もし、會所に何ぞござりまするか。

○ 熊坂お長といふ泥坊と、駕籠屋の甚兵衛といふ親仁が縛られて居ります。

ト是れを聞き、善六びつくりなし、

善六 なに、甚兵衛が縛られた、さてはさつきあの金の。

ト思入、此以前より後に長五郎の吹替頼冠りにて顔を隠し、善六の風呂敷包へちよつとあたり、思

入あつて、引渡つて逸散に花道へ逃げてはひる。仕出し替々わや／＼いふ。

泥坊々々々々。(ト善六跡を追掛けはひる。)

○ 成程、お仕置場の巾着切。

皆々 油斷のならぬことだ。

番太 通りませう／＼。

ト是れにて仕出し替々捨ぜりふにて左右へ別ればひる。番太も下の方へはひる。合方になり、正面の障子を左右へ引抜く、二重上手に前幕のお長腰繩にかゝり、鰻飯の井を控へ、爛徳利、茶碗、手酌にて酒を呑み居る。下手に以前の甚兵衛同じく腰繩にて俯向き居る、後に傳八控へ、眞中に柴田彦助羽織大小役人のこしらへにて控へ、下手に宿老二人控へ居る、

彦助 こりや甚兵衛、有體に申せ、いくら汝が知らぬといつても、三光の櫛を賣つたからは、人殺しの目くしは抜けぬぞ。

甚兵衛 いえも、此身に覺えのあることなら、何で御苦勞掛けませう。只今も申します通り、其の夜山下を通り掛り、拾ひましたに相違ございませぬ。

彦助 幾度いつても同じことばかり、さりとて死太き奴。それ傳八、拷問なせ。

傳八 畏りました。さあ、どうで先きのねえ身體、一日なりとも娑婆に居る内、樂をするのが其身の徳、痛い目せぬうち言つてしまへ。

甚兵 それぢやというて、知らぬことをば。

傳八 知らぬと言へば、かうくくくく、(ト傳八甚兵衛を十手にて打据ゑる。甚兵衛よろしく苦痛の思入、こゝろ、有體に申し上げろ。

甚兵 如何程お責めなされても、知らぬことは申されませぬ。

傳八 成程われは強情な奴だ。

彦助 やい甚兵衛、一體汝は何處の生れで、是れまでどこに住居をなしたぞ。

甚兵 はい、何をお隠し申しませう、産れは即ち下總八幡、千葉の御家中何某様へ夫婦勤めの若黨奉公、仔細あつて三年跡より、此鎌倉の海士崎町で、駕籠屋渡世をいたして居ります。

ト此中お長は脇を向き、構はず酒を呑んで居る。

彦助 して又汝が子といふは、お關といふ娘と、浪市といふ座頭ばかりか。

甚兵 まだ其外にお松といふ、姉めが一人ござりましたが、是れはしかも十四の年、同じ屋敷の若黨と密通なして行方知れず、其の後一度の便りもせぬ、不幸な娘がござりました。

トこれを聞き、お長思はず持つて居た茶碗を落し、甚兵衛を見てぎつくり思入。

彦助 すりや三年前までは、千葉の屋敷に奉公せしとか、それはともあれ只今にては、海士崎町の駕籠屋風情が、櫛の價の大枚百兩何事に使つたか。

甚兵 さあ、それは。

彦助 其の日暮しの身を以て、如何いたした。

甚兵 さあ。

彦助 金子の行場を言ひ兼ねるは、いよく以て怪しき甚兵衛、手酷くこれにて拷問なせ。

傳八 畏りました。(ト甚兵衛を引附け、十手を振上げる、お長思入あつて、)

お長 あもし、其の拷問待つて下さんせ。

傳八 何と。(トお長彦助に向ひ、)

お長 お役人様へ申し上げます、好きな酒にうかくと、餘所事に聞いて居ましたが、今御詮議の人殺しは、其の爺さんぢやあござりませんよ、外に殺した者があります。

彦助 なに、外に殺した者があるとは。

傳八 して、殺した奴は、

お長 外でもない、わつちさ。

ト以前よりお長楊枝を尋ねる思入あつて、割箸を二つに折り楊枝に使う。

甚兵 え、(ト思入)

彦助 すりや、其の方が仕業よな。

お長 まだ、こんなことおやあねえよ、わつちが悪事を言ひ立てたら、紙轢や捨札が何本あつても書

き切れめえ、口數多く人さまに御厄介を掛けずとも、亭上殺して兇狀はお定りの曝しもの、果

ては野末の露霜と消えるも高き木の空で、遠音に響く廓の騒ぎ、近く聞ゆる焼場の念佛、戀と無

情を右左、寐耳に聞いて往生する氣さ。(トお長よろしく思入にて言ひ、氣を替へて) おや、わつちと

したことが、重い口からべら／＼と、似ても似附かぬ親仁の聲色、僅のお酒に酔つたさうだよ。

彦助 いや、此の白狀合點が行かぬ。なぜ汝が殺したのに、甚兵衛が櫛を持つて居たぞ。

お長 そりやあわつちが捨てたのを、あの爺さんが拾つたのだ。

彦助 いや、さうは言はせぬぞ、物も欲しさに人も殺さう。殊には世にも稀なる櫛、何で其の場へ捨

て置いた。

お長 こりやあなたでもないお尋ね、着類や道具に目を掛けるは、そりやあ駈出しの泥つくさ、女でこ

それ熊坂のお長と異名を取つたわつち、金より外に取りやあしないよ。

彦助 でも殺したといふには、何ぞ汝が方に證據があるか。(ト是れにお長ぐつと詰り)

お長 さあ。

傳八 證據は下女が死骸の口に、残つてあつた小指の先き。

彦助 まことに汝が殺したなら、小指があるまい、それを見せやれ。(トお長思入あつて)

お長 それ、とつくりと御覽じろ。(トお長前幕にて半次が喰切りし小指を見せる、彦助見て)

彦助 む、さてはいよ、人殺しは、

傳八 熊坂お長であつたるか。

お長 小指の證據に疑ひが、晴れたらどうぞ爺さんを、許してやつておくんなさい。

彦助 如何にも繩目は許しくれうが、櫛を賣つたる科あれば、落着までは家主預け。

傳八 これ、甚兵衛の家主は居らぬか。(ト下手より市郎兵衛出て)

市郎 へい、是れに控へ居りまする。

彦助 其の方へ、きつと預けるぞ。

市郎 へい、畏りまゐりました。

彦助 それ、繩目を許してやれ、

傳八 はッ。

ト甚兵衛の繩を解いてやる。甚兵衛これまで俯向き居て、此時顔を上げ、お長に向ひ、

甚兵 思ひがけない此身の疑ひ、脱れましたも、(トお長の顔を見て、)や、こなたはどうやら、お、さう  
だお、さうだ、姿形は替れども變らぬ者は幼顔、見覚えのある我が娘。

お長 あ、これ、(ト言つては悪いといふ思入)此の爺さんは何をいふのだ、そりや廣い世界だからお前の  
娘にこの顔が、にたか焼いたか知らねえが、わつちの方にやあ覚えはねえよ、今更いふも愚痴ッほ  
いが、十四の年からぐれ出して、人の物は我が物と、先づ手初めが板の間から、ゆすり騙に美人局、  
噂が悪さに巢を替へて枕搜しの旅稼ぎ、一度が二度と功を積み追落しやら家尻切り、人殺しさへ  
幾人か太る度胸に細る首、たうとう仕舞ひが大それた、亭主殺しの熊坂お長。然しこんな莫連下  
も木の股からも生れねば、親兄弟もあつたれど、音信不通に今では他人、ほんのわつちや一人身  
さ、親兄弟のないのが仕合せ、あつたら共に縛り繩、足手纏ひで、行くのに邪魔だよ。

ト甚兵衛に名乗つては悪いといふ思入にていふ。甚兵衛も思入あつて、

甚兵 さてはそれゆゑ、此身の科を。

お長 え、又しても餘計な口を、聞けば聞く程屑が出る、何にも言はず、此の場を早く。  
甚兵 とはいへ、此の儘見捨て、は。(トお長の側へ行かうとするを、市郎兵衛引留め)  
市郎 これはしたり甚兵衛どの、御免になつた上からは、長居は恐れ、少しも早く。  
甚兵 それぢやというて、

彦助 やあ、ぐづくと立兼ぬるは、われはお長に身寄りのものか。

甚兵 さあ、

傳八 身寄りの者なら、縛り上げるぞ。

甚兵 え、

傳八 きりくと立たぬかい。

甚兵 はい、立ちますでござります。

ト甚兵衛式臺へ下りる。お長 懐より紙包みの金を出し、式臺へ投り、

お長 それ爺さん、何か落ちたよ。

甚兵 え、(ト取上げ心得ぬ思入)これは。

お長 十四の年まで育てられた、不孝娘の恩返し、

甚兵 すりや、此の金を、

彦助 なに、金とは。

甚兵 さあ、かねて噂のお長どの、悪に強きは善にもと、何にも言はぬ所ない。

お長 何の我が子に、其の禮が。

傳八 なに、我が子とは。

お長 さあ、我が子にしてみてもいゝわつち、不便と思はゞもし爺さん、逆まながら一遍の、ト言ひ掛け氣

を替へしこれも今更いらぬ愚痴、わつちに構はず少しも早く。

市郎 さあ甚兵衛どの、行きなせいな。

甚兵 そんなら、是れが、(ト又お長の側へ行かうとするを、)

彦助 えゝ、まだ行き居らぬか。

甚兵 はい、只今参ります。

ト合方きつぱりとなり、甚兵衛先きに市郎兵衛附いて下の方へ行きかける、お長跡を見送り思入あ

つて、

お長 あこれ、爺さん。

甚兵え、(ト振返る) お長ちつと顔を見て、愁ひの思入にて)

お長 煩らつてくんなんなよ。(トはろりと思入)

甚兵はア——。(ト甚兵衛泣き伏す。お長は彦助を見て氣を替へ、注いであつた茶碗の酒をぐつと呑み)

お長 あゝ、冷たくなつた。

ト顔を背ける。市郎兵衛は甚兵衛を介抱せず、此の見得。唄、時の鐘にて、此道具廻る。

(元の駕籠屋の場)——本舞臺元の世話場の道具、時の鐘、さんげくにて道具留る。と花道の揚幕に

大勢 泥坊々々。

トいふ、ばた／＼になり花道より長五郎頬冠りにて吹替と同じこしらへにて、香合を包みたる風呂敷包みを引つ抱へ、逸散に逃げて出来り、内へ駈込み、門口をしめてほつと思入。

長五 すんでの事につかまるところ、爰の内助かつた。(ト四邊を見て) 誰も居ねえか、こいつア妙だ、

(ト長五郎尻をまくつて胡坐をかき) 昨夜お長が捕られたから、浮々としては居られぬゆゑ、上方筋へふける積りで路用の足しに盗んだ包み、何ぞ金目な品ならいゝが、(ト包みを明け掛け) 何にしろ

眞ッ暗だ。

ト此内時の鐘、やはり合方にて花道より荒川三左衛門羽織袴股立ち大小にて、忍び提灯を提げ出來り、直に門口へ來り、

三左 頼み申す。ト是れにて長五郎がつくりなし。

長五 南無三、表へ誰やら。トうるたへて件の風呂敷包みを持ち、縁の下へ隠れる。

三左 頼み申す。ト奥にて。

お關 はい、どなた様でござります

ト合方にて、奥よりお關行燈を提げ出來る、三左衛門門口を明け、

三左 荒川三左衛門でござる。

お關 これは、三左衛門様、さあ、是れへお通りなされませ。

三左 許しめされ。ト三左衛門上の方へ通り住ふ。

お關 最前からあなたのお出でを、お待ち申して居りましたわいな。

三左 夕刻との約束ゆる、遠慮いたして只今參つた。して甚兵衛どのには、在宿でござらうかな。

お關 はい、父さんは、ついそこまで。

三左 すりや、彼の品を取りにでも。

お關 いえ、其の品は私が慥に預かり置きましたれば、只今お渡し申しませう。

三左 なに、最早手に入つたるとか、それは重疊な儀でござる。一昨年より段々と上への日延べも今日限り、其日限に手に入つたとは、未だ主人の御武運が盡きざる所か忝ない、これと申すも外ならず、甚兵衛どの、忠義ゆゑ、いや、お手柄なことでござつた。

お關 有難う存じます。(ト二重佛壇の内より香合の箱を出し) いざ、お受取り下さりませ。

ト出す三左衛門扇を開き、此上へ箱を置き、

三左 陪臣の身で御家の重器、披見は恐れ多けれど、使ひの役目一通り中改めて受取り申す。(ト三左衛門塵手水を遣ひ、香合の箱の蓋を明け中を見てびつくりなし) すりや此の品を、御家の重寶放れ駒の香合と、存じて是れを取り得しか。

お關 え、何とおつしやります。

三左 こりや似ても似附かぬ、偽物なるわ。

お關 え、(トびつくりなす、三左衛門思入あつて、)

三左 かゝる事とは御存じなきゆゑ、後刻香合差上げんと、旦那様には取次の重役衆へ言上あれば、今

更それが僞物なりと何とて言訛が相成らうぞ、私ならぬ婚儀の妨げ千葉家の瑕瑾と相成れば、且  
那様には御切腹、そののみならず御子息の與五郎様の御身にまで、かゝりや繋がる拙者と追腹、  
かほどの大事になる程の大切なる寶をは、女風情に預け置き他出いたすうつけ者、この通りを  
上なさん。(ト三左衛門すつと立つて行かうとするを、お關縫り留め。)

お關 其のお腹立ちは御尤ながら、これには定めて様子のあること、どうぞ父さまの歸りなすまで、お  
待ちなされて下さりませいな。

三左 今宵につままるお主の大事、人でなしの歸るをば、ぺんくだらりと、相待ち居らうた。

お關 そこをお慈悲に暫しの内、

三左 慈悲も情も常のこと、

お關 ではござりませうが、

三左 此期に及んで、

お關 もし。(ト袖にすがるを振拂ひ。)

三左 益なきことだわ。(ト門口へ出る、お關提灯へ明りを附けて出しながら。)

お關 くだどうも願ふは、今宵のお詫びを。

三左 最早拙者は取次いたさぬ、人がましくば甚兵衛に命を捨てよ。

お關 え。

三左 言譯いたせ。

ト門口をびつしやりしめる。唄になり、三左衛門足早に花道へはひる。お關はハアと泣き伏す、時の鐘替つた合方になり、花道より三幕目の奥五郎着流しにて出来り、

奥五 今そこで摺れ違ひしは親人の家來三左衛門、血相替へて急ぎの様子、どうやら心にかゝれども、問ふことならぬ我が身の上、若しや失ふ香合のことではないか、それさへも知らぬ不孝の身の放埒、何にもせよ甚兵衛に、逢うて様子を尋ねて見よう、さうぢやく。

ト舞臺へ來り、門口より内を窺ふ、此時奥より浪市出来り、

浪市 これ姉さん、様子は奥で聞いて居ましたわいの。(トお關に縋る、お關浪市を見て思入あつて、)

お關 父さんといひ、そなたまで、心にもない盗みをするも、元はといへば此の品ゆゑ、いくせの苦勞も僞物にて、今となつては水の泡。

浪市 お主の爲めと思つたも、お役に立たねば盗人の名を取つたのが口惜しい。

お關 お、尤もぢやくが、これもみんな因縁づく、盗人の名を取つたのも、元をたゞせばわしの

ゑに、血筋を引きしそなたの因果。

ト此時に縁の下より長五郎そろくくと出かけ、思はず上の話耳に入りし思入。

浪市 なに、盗人の血筋とはえ。

お關 今まで包み隠せしが、不便やそなたは盗人の、胤に生れし子ぢやわいの。

浪市 えゝゝゝゝ。

ト浪市驚く、長五郎心得ぬ思入。お關きつとなり、胡弓入りの合方になり、

お關 思ひ廻せば十三年前、千葉のお家の御領分、下總八幡に居た折に、父さんは旦那様のお供をなし

て鎌倉住居、跡はわしと母さんで淋しさまさる片在所、然も小雨の降る晩に女ばかりと偏つて忍

び入つたる盗人が、わしを捉へて刃物三味脱れ難なくそれゆゑに、言ふに言はれぬ恥かしい憂さ

目は見れど其人の、顔も知らねば名は勿論、明け行く鐘に立ち退きし跡に残りし、(ト立つて佛壇

の下を明け、中より脇差を出し持ち來り、)此の脇差、模様は岩に白浪の、高彫なせし出と目貫。

浪市 そんなら其の時、あのお前が。

お關 恥しいが盗人の胤を宿して産みしはそなた。それを氣病に母さまは一年立たず果敢ない病死、そ

れからそなたを里に遣り、成人なして内へ呼び、世間を憚り弟の積り、實はわたしの子ぢやわいの。

浪市 それではわしの父さまは、行方も知れぬ盗人かいな、こりやまあどうせう、何とせうぞいな。

お關 これに附けても愛しいは、お年寄られた父さんが紛失なせし千葉家の重寶、放駒の香合を求むる價に差迫り、死なうとせしを助けられ、貰うて來たる其の櫛は三光とやら世にいうて、稀なる品に賣代なし、其の僧にて求めたる放駒の香合は、似ても似附かぬ偽物にて詮議の日延も今日限りゆる、お主様には御切腹、又父さんは其の櫛のゑ人殺しとて繩目の恥、殺されしは誰あらう、與五郎様の許嫁お照さまのゑ妹の、吾妻の縁に殺せしかと世間の口が恥しい、三方四方の言譯に人殺しをも身に引受け、書置きなして死ぬ覺悟、心掛りは片輪なそなた、跡に残すが未來の障り、そればかりが悲しいわいなう。

トよろしく思入あつて言ふ。此内門口の與五郎、これを聞き、はツと思入あつてどうとなり、俯伏になり居る、浪市も思入あつて、

浪市

いえくお前は死なずとも、ぢい様の代りなら、わしを殺して下されいの。

お關 おもよう言やつたく、そなた一人は殺しはせぬ、二人一緒に自害して、わしが手を引き冥土の旅、死出の支度をする間、三途の川の白浪と名附けし唄を此世の名残に、(下壁に立掛けある牛琴を取つて浪市の前へ置く、浪市探り見て思入)生死知れざる夫琴へ、暇乞ひにも回向にも。

浪市 わしが作りし白浪の、

お關 名前は父御の世渡りを、

浪市 よそへて附けし端唄をば、

お關 唄ひ仕舞ふが此世の名残、

浪市 泡と消え行く、

お關 白浪ぢやなあ。

ト詠への琴唄獨吟にて浪市琴を弾く、お關泣きながら上着を脱ぎ脇差を抜き、寐刃を合せんと行燈を持ち来る。此明りにて長五郎そつと以前の硯箱を引き寄せ、巻紙に書置を書きかける、唄一くさりあつて切れる。本釣鐘 ばたくゝになり、花道より吾妻手拭を吹流しに冠り、走り出來り、與五郎に頭く、これにて與五郎すつと立上り、狂氣せし思入。

吾妻 や、與五郎さまか。

與五 そなたは誰ぢや、(ト後の藪の竹を抜き取り)おゝ、行列ぢやくゝ。

トつかゝと花道へ行く、吾妻追ッかけ行き、

吾妻 もし、お前はお氣が。

トこれをキツカケに又文句になり、舞臺にては矢張寐刃を合せ書置を書き居る。花道にては與五郎花道揚幕の方へ行かうとするを吾妻支へる。ト唄の切れ、ばたくにて、與五郎逸散に揚幕へはひる、吾妻跡を慕つてはひる。本釣鐘、お關思入あつて、

お關 無情を告ぐる鐘の音に、いつもの唄も身にしみて、哀れ催す其の一節。

浪市 これに附けてもぢい様の、

お關 跡のお顔が思ひ遣られて、

ト又唄になり、長五郎そろくと下より出る、お關浪市の後へ廻り切らうとして切兼ねる思入、泣く泣く刀を振上げる、唄一杯に切れ。

南無阿彌陀佛、(トお關刀を振上げる。此の時長五郎お關の手を捉へる、お關長五郎を見て、)

お關 や、お前は何處から、

長五 何處からでもねえ、盗人だ。

兩人 え、(トびつくりなす、)

長五 繩目にかつた甚兵衛どの、きつと助かる見込みがあるが。

お關 それぢやというて、

トお關浪市を殺さうとするを、長五郎白刃を取つてどつかと坐し、

長五 急がずと思案をするがよい。(ト刃物を取り鞘へ納める、此時お關長五郎をよくく見て)

お關 死ぬる覺悟のわたしら二人を、とゞめさんした、

兩人 盗人さんは、

長五 その盗人も追掛られ、断込み這入つた縁の下、とんだ達摩のまじく、と夜の更けるのを待つ内に、思はず聞いた二人の話し、其の孝心と貞女の操に、初めて我が身に愛想が盡き、今から心取り直し、改めるもこなたゆるゑ、二人の命を助けにやならぬ。親に代り死なうとは尤なれど無分別、死ぬる親が助かつて歸つた所が娘や孫が、死んだと聞けば年寄つて何しに生きて居られうぞ、いつそ、それよりばつさりと首の落ちるが一思ひ、そこを助ける言廻しは盗人だけに大得手もの、又寶の日延も今宵の内、果報は寐て待つ盗人の晝寐も當の相がたり、死ぬるばかりが孝行や浮世の義理にもなりますまい。人の物をば我が物とする生業にも、禪と義理は缺かれぬ浮世の習ひ、急かすと相談さつしやいな。

ト長五郎よろしく留める。時の鐘やはり合方、花道より其兵衛出來り、門口にて内の様子を窺ふ、お

關思入あつて、

お關 御親切なる盗人さん、して父さんを今宵の内、

長五 助ける仕様は外でもねえ、わしを縛つて訴人をさつせえ。

お關 そりや又、何ゆゑ。

長五 一昨日の晩山下で、金と思つて娘を殺し櫛を取つたは、わしが仕業だ。

トお關これを聞き思入あつて、

お關 そんならもしや、其の時に、

長五 如何にも此の家の甚兵衛どの、金の切羽に死なうとなすゆゑ、見兼ねて遣つた其の櫛の情が却つ

て仇となり、人殺しとの疑ひで縄目と聞くが氣の毒さに、命を捨てる身の覺悟。

お關 とはいへそれも父さんの、難儀を救ふお前の情、どうして訴人が、

長五 ならずば是れから名乗つて出で、甚兵衛どのを助けにやおかぬ。

ト此の内門口の甚兵衛思入あつて、

甚兵衛 いや、それに及ばぬ、甚兵衛は縄目を許され、疾くよりは是れに。(ト甚兵衛内へはひる。)

お關 こりや、父さんには、

浪市 ようまあ家へ。

甚兵 戻りか、つて最前より、様子は残らず聞きました。一度ならず二度までも、親子の命救はれし重なる恩の盗人どの、え、忝なうござります。

長五 して又、こなたはどうして縄目を。

甚兵 許されたはわしよりも、先きへ會所へ捉はれ居たる、熊坂お長といふ女、山下にての人殺しは即ち我と自身の白狀、それゆゑ脱れし我が縄目。(ト此れにて長五郎合點の行かぬ思入)

長五 合點行かぬは何故に、覺えなき身で、お長が科を。

甚兵 身に引受けしは仔細あつて。何を隠さう二十年以前、家出なしたる我が娘。

お關 え、すりや家出せし姉さんが、お前に代つて。

甚兵 さあ、積る盗みの數々に、どうで命のない身とて、我を助けし一つの孝。

ト長五郎是れにて思入あつて、

長五 すりや長五郎が名乗つて出で、こなたの縄目を助けた上、是れまで積る悪事の終り、お上の成敗受けようと思つた事も今にては、後の祭りとなつたるか、むむ。

ト思入あつて、長五郎お關が持つてゐた脇差を抜き、腹へ突立てる。兩人びつくりなし、

甚兵 や、こりや何ゆゑに、

兩人 こなさんは。

長五 死ぬるは元より覺悟のこと、生きてこなた家親子には言譯ならぬ此の身の悪事。(ト長五郎苦痛の思入れ。竹筒入りの合方になり)今更名乗るも面目なさに、甚兵衛どのを助け、繩目に掛つて行く時に残し置かんと書いたる一通。(ト書置を出し、讀んで此の身の罪科を、許して下され、女房舅。

お關 なに、女房

甚兵 舅とは。

長五 仔細は即ち、此の書置。(ト此れにてお關取上げ、開き見て、

お關 なにく、)われら事十三年以前御身の家へ忍び入り、一夜の枕交せし後鎌倉へ下り打過ぎ候所、測らずも今宵廻り合ひ、盲目の悴こそ我が胤なりと、其の夜忘れし脇差の白浪の目貫にて相知れ、驚き入り候。(ト讀みかけびつくりなし。)や、そんなら其の夜の盗人は。

長五 此の引窓の長五郎。

お關 假令盗人さんにもせよ、胤を宿せばわたしの夫。

浪市 わしが爲めには實の父さん。

長五 人でなしをばそれ程に慕つてくれる女房悴、それと知らねば情なや、女房に持つた其女は手前

が姉の熊坂お長、重なる縁の舅どの、難儀を掛けしも、皆我ゆゑ。

甚兵 して又それは、如何なる譯にて。

長五 仔細はやはり其の書置。(ト是れにてお關又書置を開き見て)

お關 「まつた、三年跡箱根にて、三原傳藏に頼まれ、南方十次兵衛様の預りたる、千華家の重寶放

駒の香合を盗み取り候も、やはり我等に御座候。」

甚兵 どれ、(ト又甚兵衛書置を取つて)「その上昨夜山下にて、娘を殺せしその利を脱れん爲めに櫛を遣

り、甚兵衛へぬりつけし、重なる罪の言譯に名乗つて出で、人らしく相果て申す覺悟に御座候。」

や、こりや、香合といひ長五郎どのが、ム、。

長五 さ、十三年が其間、片輪な忤を養育の、思あるこなたへ難儀を掛けしも、皆長五郎が仕業、何

面目に存へて此の言譯がならうぞい。

甚兵 其の義理ならば死なすとも、最前我が手に入つたる香合。

お關 いゝえ父さんあの品は、似ても似附かぬ、まつかな贋物。

甚兵 なに、贋物とや、やゝゝゝ。(トびつくりなす)

長五 あいや其香合の正眞は、最前此家へ駈込わ折、盗み取つて則ち爰に。(ト以前の香合を出し)これぞ

此の身の一つの言譯。(ト甚兵衛受取り)

甚兵 此品手に入る上からは、御主人様の御身は安泰。

お關 それに引替へ十三年、待つたお前の此の姿。

甚兵 死なずと仕様もあらうのに、

お關 早まつたこととして下さんしたな。(ト長五郎思入あつて)

長五 あ、いやく、是れまで積る悪事の數々、名乗つて見ればこなたの主人、與五郎様の許嫁お照とのを殺せし上は、取りもなほさず主殺し、三尺高い木の空で人手にかゝらにや死なれぬ體、我手に死ぬは身の仕合せ、必ず歎いて下さるな。

トばたくになり、花道より以前の三左衛門走り出來り、直に舞臺へ來り門目を明け、

三左 甚兵衛どの、在宿なるか。

甚兵 や、三左衛門様か。

三左 最前此の家を歸りしところ、香合詮議の日延三十日の御免を蒙り、旦那様にも御助命故、こなたに逢つて寶の様子、委しく聞かんと參つてござる。

甚兵 いや、その香合は仔細あつて、唯今手に入り、即ちこゝに。

ト香合を出す、三左衛門受取り、開き見て、

三左 まことに是れぞ御家の重寶、ちえ、忝い。(ト押しいたゞき)これに附けても心が、りは、唯今

これへ参る道にて、廓の者の噂を聞くに、吾妻どの、行方が知れず、與五郎様が連出せしとて、追手をかけて捉へし上、吾妻が身請けをなせばよし、左もなければ勾引しと、上へ訴へ出るとの

こと。

お關 すりや、與五郎様が妹を、連れて墮落ちなされしとか。

甚兵 何にもせよ吾妻が身請けは、假初ならぬ二百兩、その數ほどには足らねども、最前會所でお召から貰ひし金が七十兩。(ト以前の金包みを出す)

浪市 わしが貰うた、さつきの十兩。

お關 合せて丁度八十兩。(ト最前の金を出す)

長五 残りの金は主膳を殺し、盗み取つたる二十兩。(ト反故に包みし金を出す)

三左 や、此の書物は、(ト反故に眼を付ける、お關甚兵衛一枚づゝ取上げ、開き見て)

甚兵 與五郎様が權九郎へ、貸したる金の借用證文。

お關 今一通は傳藏が、吾妻を連れて身請けの手付證文。

甚兵 その手付こそ與五郎様が、騙り取られし即ち百兩。

お關 此の百兩を添へる時は、身請けの高の二百兩。

甚兵 これにてお身の曇りも晴れ、

三左 失ふ寶が戻りし上は、

お關 治太夫様、

甚兵 與五郎様、

三左 お二人様に恙はなし、

三人 ちえ、忝い。

ト此時本釣鐘を打込み、長五郎苦痛の思入。

お關 最早近づく知死期時。

長五 坊主はゐるか、小僧は居るか。

お關 それ、父さんが、(ト浪市を長五郎の所へ突きやる。)

浪市 わしや父様の、お顔が見たい。(ト長五郎浪市を引寄せて)

長五 尤もだ、あ、眼を明してやりてえわい。盗人ばかりか生き乍ら畜生よりも淺ましい、まだ其

の上に主殺し、おれの因果が子に廻い、不便な生れであつたなあ。

ト長五郎愁ひの思入、三左衛門わざと氣をほげまし、

三左いで、此の上は片時も早く、お主へ香合、(ト立上る) 此の時後へ道具屋善六窺ひるて、

善六その香合を。

トかゝるを三左衛門引据ふる。此の時善六懐より百兩包みを落すを、甚兵衛取上げ見へ、

甚兵こりやこれ、百兩。

善六南無三、(ト取りにかゝるを、三左衛門立廻つて捻上げる。)

甚兵これにて櫛を買戻せば、

お關父さんの身に構ひなし、(ト三左衛門善六を投げのける。長五郎苦痛の思入にて、)

長五むゝ、(ト反るをお關介抱なし、)

お關あ、もし。(ト抱き起す、浪市絶り附きて、)

浪市とゞさま。

トきつといふ、これにて長五郎眼を明き、浪市を見てにたりと笑ひ、がつくりとなるを、木の頭お關、浪市左右より絶り泣く。甚兵衛金を持ち、片手にて伏しをがむ、善六又かゝるを三左衛門引据ふる。

る。此の引張りよろしく、本釣鐘の送りにて、

ひやうし幕

# 大 切

## 稻瀬川道行の場

(淨瑠璃)

胡蝶に狂ふあづま與五郎

千鳥に慕ふおこよ源之丞

梅柳戀道連

(富本連中)

〔役名〕阿古木源之丞、山崎屋與五郎、荒川三左衛門、三原傳藏、中間二人、若衆一人、下男二人、おこよ、藤屋吾妻。

(業平橋邊の場) 本舞臺一面の淺葱幕、柳の立木、日覆より釣枝、業平橋邊り夜の體の禪の動  
めにて幕明く。ト花道より○△の下男の装にて、山崎屋といふり張を持ちたる下男を先きに立て、  
鉦太鼓を打ちながら出る。

○ 迷兒のく、與五郎さんやい。

△ 若旦那さまやアい。

雪駄直し長五郎

ト舞臺へ来る。上手より□◎の二人中間の装にて、子持筋の箱提灯を持ち、鉦太鼓を打ちながら出て

迷兒のく、若旦那さまやアい。

奥さまやアい。(ト兩方舞臺にて行合ひ)

もし、そこへお出でなさるは、お屋敷様のやうでござりますが、迷兒をお尋ねなさるのかね。

さうサ、わしらは本所の阿古木の屋敷の者だが、若殿様と奥様が行方が知れないから、尋ねに出

たのさ。

さうでござりまするか、内の息子どのがちと不始末で、餘所へ下けられて居りましたが、是れも行

方が知れませぬ、

それもちならようござりますが、氣が違つて断出したのだから、もしもの事でもあるまいかと

思ひますのさ。

それは困つたものだ、わしらの屋敷のも、殿様と奥様が行方が知れぬので、屋敷は亂ち騒ぎさ。

これ、こなたの懐に持つて居る、書物はそりや何だの。

これは出入り屋敷から來た、註文書でござりますが、今途中で受取つたばかりでござります。

○ どのな註文だか、爰で讀んで見ようぢやあないか。

◎ どれ、わしらも一服呑みながら、読んで見たいものだ。

△ 何だか長さうなものだから、助けて下さいまし、東西々々。(ト皆々下に居て、觸書を開き)

○ 淨瑠璃名題――

△ 淨瑠璃太夫――

◎ 相勤めまする役人――、(トそれく讀むことある。)

□ は、あ、そりやア、慥に淨瑠璃の役人觸れた。

△ そんなら狂言方で、間違へて寄越したと見えませう。

○ 何にしるお互ひに、旦那さまを捜しませう。

◎ それがよい、わしらは是れから寺島の方を捜して見よう。

△ わたし共は、龜戸の方へ行きます。

□ そんなら是れで別れませう。

○ 迷兒のく、與五郎さまやアい。

◎ 迷兒のく、殿様奥さま、さんしよさまやアい。

皆々 何を言はつしやる。

ト右の鳴物にて、兩方へ呼びながら別れてはひる。知らせに附き淺熱幕を切つて落す。

(土手下の場) 本舞臺三間中足草土手の二重、上の方登り坂、二重より下手へ小高き草土手、是

れも登り坂畫心に飾り、正面今戸橋邊向川岸灯入りの遠見、舞臺上手一間臺葺道祖神の宮、此の前に蛇の目傘を開きあり、よき所に柳の立木、日覆より釣枝、舞臺前菜の花の土手板、下の方草土手、淨瑠璃臺、これに富本連中居並び、總て隅田堤土手下の道具にて納る。と雨車、風の音にて、直に淨瑠璃

になる。

先の世と定まる身こそ嬉しけれ、契りも今宵限りぞと覺悟を死出の友鳥、可愛と啼くはいとしさの戀ぞ積りし二人連、濡れた同志の雨宿り、

ト本釣鐘、合方になる、宮の扉を開き源之丞着流し一本ざし、おこよ丸鬚臺、兩人對の装櫓の枝を後へさし、毛氈を肩へかけ、開いてゐる傘を持ち兩人前へ出る、知らせなしに日覆より望月出る、兩人これを見上げて思入。

臆とは誰が名附け、ん春の夜の、雨の小止みに洩る月の影さへ薄き縁ぞと、思ひ惱みて行先きは冥土とやらの新世帯、一つ蓮の撞木葉に南無阿彌陀々々、南無仇し野の小夜嵐身にし

みじみとしめ泣きの、蛙も哀れ添へぬらん。(ト兩人よろしくあつて)

源之

これおこよ、不思議な縁にて馴れなじみ、夫婦とまではなつたれども、媒介なせし長五郎が悪事

あらはれ、草を分けて行方の詮議、捕はれとなる時は、源之丞が身に拘はる大事。

こよ

御大切なお身の上を、斯うしたことにさせました元の起りは賤しいわたしが、嘘偽りで冥加ない

お屋敷を穢したゆゑ。

源之

此事露顯なす時は數代續きし阿古木の家、没收されては先祖へ立たず、とても生きては居られぬ

身の上、そなたは存へ立ち歸り、我がなき跡にて追善供養、必ず共に頼むぞよ。

〽お顔をぢつと打ち守り、そりやお情ないおつしやりやう、賤しい身をも顧みず、よしある

あなたを見上げたる、橋の名さへも吾妻と聞くも嬉しの森の露、濡れにし袖の乾く間も泣き

の涙に取纏り、かき口説くこそまことなれ、折から來たる人影に、二人はハツと心附き、

こよ

人里はなれし森蔭へ、ちつとも早う。

源之

おぢや。

〽手に手を取りて蓮華寺の、森を目當にたどり行く。

ト源之丞おこよ上の方へはひる。ばたくカケリになり、與五郎紫の病鉢巻片肌脱ぎかけ、笹の枝

をかつき出て、花道に留る。

狂ふは我が身ならずして、菜種に狂ふ蝶と蝶、吾妻請出せ、請出せ吾妻、浮名に立ちし戀中を任せぬ事の物狂ひ。

ト花道へ来てどうとなる、ばたくにて跡より吾妻着流しにて走り出で、

吾妻はあとに後れ咲き、亂れし袖に取り附きて、なう情なやうつなや、吾妻の顔も見忘れてと、忍び涙の草雫、あれ、思ひ人は川柳と、駈け行く袂ひかる、袖、人の見る目も憂や辛や。

ト兩人よろしくあつて舞臺へ來り、

吾妻 もウし與五郎さん、氣をしづめて下さんせ、道行く人が笑ふぞえ。

與五 何ちやと、笑ふ、お、をかしいく、さうしてわが身は誰ぢや。

吾妻 情ないこと言はしやんす、わたしは藤屋の吾妻でござんす、とつくりと顔を見て、正氣になつて下さんせいなあ。

替る姿のあさましや、もしわしぢや、吾妻ぢや與五郎さん、氣を鎮めて下さんせ、あれ蟲さへも、番ひはなれぬ揚羽の蝶。こちも比翼の諸翅、未來までもの中々を今更むこゝ振捨て



ト與五郎又笹の枝を持ち駈け出す、權九郎留める、吾妻これを隔てる、此の内與五郎一散に二重より下手へはひる、吾妻も續いてはひる。

更行く鐘の無常音、堤傳ひに源之丞、覺悟の一腰つかの間も、離ればせじとおこよは取附き、

ト時の鐘はたく、上手より源之丞一腰を持ち出で抜かうとする、跡よりおこよ出で、是れを留め。

こよもウし殿様、これ程申すにお聞き入れなく、あなたお一人死なうとは、お胴慾でござります。

源之左程までに切なるそちが志、此の上は二人一緒に最期を急がん。

こよそんなら聞き分けて下さりますか。

源之如何なる前世の約束にや、倦きもあかれもせぬ中を、

こよ此世で添はれぬ因果同志。

源之思へば深い、

兩人惡縁ぢやなあ。

覺悟の上も今更に、放れがたなき女氣に、男心も亂れ鏡、刃もなまる風情なり。

同じ思ひの番ひ蝶、夢かうつゝの與五郎を、吾妻はいたはり縋り留め、

トばたくにて二重の土手より、奥五郎吾妻出で舞臺へ下り、  
吾妻もし奥五郎さん、是れ程いふに夢現、お前は正氣にはならぬかいな。

ト此様子を源之丞おこよ見て、

源之 二人の衆の様子を見れば、若き男の狂人姿。

こよ さうしてお前方は、何處のお人でござんすえ。

吾妻 はい、わたしや吾妻というて、吉原で藝者の勤め、是れなるは山崎屋の奥五郎さんでござります。

源之 すりや噂に聞く、山崎屋奥次兵衛が養子奥五郎とな。

こよ どうして又其のやうな、狂氣にはならしやんしたのぢやえ。

吾妻 様子をいへば長いこと、實の親御さんの次太夫様が、失はしやんした、香合とやらの間違ひで、

お命にも拘はると聞かしやんして、狂氣なさんしたのでござります。

こよ さういふ事なら私が、守袋に入れてある、有知い此のお守。

トおこよ守袋より詠への守を出す、源之丞取つて、

源之 こりや能勢の妙見宮の、祓符の守、少しも早う。

疾しや遅しと奥五郎が、額に守押し當て、南無妙見大菩薩、病即消滅不老不死と、唱ふ

る奇特に狂亂の、心しづまり四邊をながめ、

ト與五郎に守をいたゞかせる、ドロくにて與五郎放心するを、皆々介抱する。與五郎心附きたる思入にて、

與五 や、そなたは吾妻、どうしてこゝへ。

吾妻 もし、お心が附いたかいなあ。

與五 そんなら、わしは。

吾妻 さあ、親御様のお身の上の事を聞かしやんして、狂氣なされたのぢやわいなあ。

ト與五郎これにて源之丞を見て、

與五 あなたはたしか、阿古木の若殿源之丞様、合點の行かぬ此のお姿

源之 噂に聞けど始めて逢うた山崎與五郎、面目もない此の身の上。(ト源之丞件のおこよの守の封を開き

見て)おこよが守に添へたる書附、なにく「治承元年三月三日の誕生、南方十次兵衛娘さく、し

思ひ出せし事こそあれ、某南方十次兵衛が娘お早と言交し、其折からの物語り、十次兵衛事四

十二の二つ見ありしが、親の命に拘はるゆる、妙見宮の守を添へ、捨兒となせしと聞きつるが、

若しやおこよは。

こよ 其のお詞に違ひなく、妙見様の御門前に、捨て、あつたを喜六どのが拾ひ上げ、娘となして育てられましたわいな。

源之 すりや、まこと非人の種ならず、武士の娘と知れたる上は。

こよ あなたのお身に凶事もなく。

源之 もう死するには及ばぬわいの。

與五 仔細は委しく存じませねど、お身の曇りの晴れたる御様子。

與五 お目出たう存じまする。

妹背はなれぬ二つ蝶、廓日記を假宅へ拙き筆に寫しける。

ト段切れ、知らせに付き、淨瑠璃臺を消す。禪の勤めになり、上の方より二幕目の三原傳藏出來り、傳藏 後で様子は見ておいた、身共が手附を渡した吾妻、よい所でつくはした。さあ、身共と一緒に

うせ居らう。

ト傳藏吾妻を引立てる、源之丞突廻して刀にて當てる。やはり禪の勤め、花道より荒川三左衛門忍び提灯を持ち、足早に出て舞臺へ來り、

三左 それにござるは、山崎屋與五郎さま。

與五 さういふそちは、親人の家來三左衛門。

三左 與五郎さまには狂氣なされ、家出ありしと聞きしゆるお行方尋ね参りし仔細、御主人次太夫様の  
失はれし放駒の香合の儀に付き、召捕られし駕籠屋の甚兵衛、疑ひかゝりし三光の櫛を與へし長  
五郎、悪念發起し切腹の節、三原傳藏に頼まれ放駒の香合を盗み、まつたお照を殺し、三光の櫛  
を取つたる次第まで懺悔なして、まことの香合再び彼れが手に入りしを、次太夫様へ差上げたれ  
ば、御安堵なされ與五郎様。

與五 すりや、親人様の御身の明り立ちましたか、ちえ、忝ない。(ト此時傳藏心附き)

傳藏 それ知られたる上からは、與五郎覺悟。(ト傳藏立掛るを、三左衛門引附け)

三左 香合の盜賊三原傳藏、身共が繩打つて屋敷へ引く。

傳藏 南無三。(ト逃げようとする三左衛門引附け、取繩を出し傳藏へ繩を掛ける。) 思えましい。

源之 おこよが身の上の明り立てば、屋敷へ歸り改めて、源之丞が宿の妻。

三左 與五郎どのにも吾妻の身請け。

吾妻 世間を晴れて女夫の盃。

與五 山崎屋の家名の相續。

こよ 三方四方の御家の納り。

源之 目出たいく。

ト此時上手より紺看板の中間大勢、子持筋の箱提灯を持ち、ばらくと出て、

中間 殿のお迎ひ。(ト前へ並ぶ。頭取上下にて出て、)

頭取 先づ今日は是れぎり。

ト目出度く打出し。

雪駄直し長五郎 (終り)



前座は伊丹屋重兵衛が故しゆうの爲の  
 人殺しよしないことゝ氣も筑田鬼藏  
 小兵衛が質入の茶入を詮議に町髪結ひ  
 結ぶ元結惡縁に二世を掛たる後の月  
 尾花才三が戀中は材木町の白木屋お駒  
 時菊月狂  
 御最辰御好 怪談御伽草  
 後座は座頭の文彌こと官金ゆゑに身を  
 果す恨みは忽廻り来て仁三が強請に  
 居酒屋ぞつとおしづが死靈のたより敵  
 同志と白無垢に一對そろふのちの雛  
 契情古今が色客は柴居町の黒木屋彦三

世 界 緘 二 組 三 組

鶯紅葉白宇都谷峠

座頭文彌殺しの「宇都ノ谷峠」は安政三年九月、作者四十一歳の時市村座に書卸された。全篇を通じて哀愁に富み陰惨の氣の横溢してゐる作で、世話物中の代表作である。殊に鞠子の宿から殺しに至る一幕は興味の中心でもあり、その描寫は精細を極めてゐる。また、この作者に取つてのスタイルム、ウント、ドラックとも稱すべき市村座時代（即ち小團次との結託時代）の最初の作である點に於ても記憶せられねばならないし、小團次の寫實的藝術によつて幕末の頹廢的劇境に一味の革新的氣勢を示した、その第一聲である點からも輕視すべき作でない。年代記には「當新狂言は元祖金原亭馬生の座頭殺しのはなしの仕組み、……鞠子宿藤屋文彌重兵衛仁三出合ひ、宇都ノ谷峠殺し……柴井町重兵衛宅文彌幽霊怪談の場古今大當り、古今彦三心中文彌幽霊この所怪談大出來大當り」とある。小團次が殺しの場で文彌から仁三に替るその手際が鮮やかで巧みであつたとか、幽霊になつて出たり消えたりする所に業事師としての特色を發揮したとかの話が傳へられてある。

書卸しの時の役割は、市川小團次（文彌、仁三）、坂東龜藏（伊丹屋重兵衛）、尾上菊五郎（文彌姉お菊後に古今、重兵衛女房おしづ）、坂東彦三郎（佐々木桂之助、彦三）、河原崎權十郎（尾花才三郎）、市村羽左衛門（文彌妹おいち）、淺尾與六（尾花六郎左衛門、坊主小兵衛）、中村歌女之丞（腰元小牧、白木屋お駒）、關歌助（佐野松屋清兵衛、國侍鹿子島新吾）、中村鴻藏（判人善六、大阪者太郎兵衛）、嵐吉六（こぶ市、下刺萬治）、市川新升（筑田鬼藏）等。

挿畫にしたのは、龜戶豊國筆の錦繪である。

大正十三年七月

編者誌す

(筆國豊戸龜—場のし殺)



彌文頭座

次圖小川市

座敷文彌殺しの「字種ノ答呼」は安政三年九月、作者四十一歳の時山村屋に書かれた。全篇を通じて哀愁に富み陰鬱な氣の籠籠としてゐる中で、昔話の中へ代表作である「藤子御守の箱から殺しに至る一幕は興味を惹きつけ、その描寫に其趣を極めたるが、この作者に取つてのスタイルは、ワント、オウゴンとも稱すべき山村屋時代へ移る小彌次との前代時代の最初の作である點に於ても遺憾を感ぜられねばならぬ。小彌次は舊習的雅風によつて従来の質實的劇壇に一味の革新的氣勢を示した、その第一聲である點を以て稱讚すべき作でない。年代記には「當彌次は元祖座敷屋馬生の座敷殺しといふことあり、藤子御守屋文彌重兵衛仁三出合の、字種ノ答呼といふ柴井町重兵衛宅文彌御座敷に駕古今た語り、古今彦三心中文彌幽霊の、奇怪談火島屋も當り」とある。小彌次が既に座敷で文彌より仁三に替るその手際が鮮やかで明かであつたよ、座敷に於て出たり入たりする所言葉事柄としての特色を發揮したとかの話が傳へられてある。

昔御しの時の役割は、市川小彌次(文彌、仁三)、坂本龜藏(伊丹屋重兵衛)、尾上菊五郎(文彌姉お菊後に古今、重兵衛女御おしづ)、藤原彦三郎(佐々木桂之助、彦三)、河原崎源十郎(尾花才三郎)、市村羽左衛門(文彌妹おいさ)、津島屋六(尾花六郎左衛門、垣玉小彌次)、中村歌右之丞(腰元小牧、白木屋お駒、藤原助)、市川新升(清兵衛、國傳貞子具喜君)、中村萬蔵(判入藤六、大坂者太郎兵衛)、嵐吉六(お吉、下村萬治)、市川新升(筑田進藏等)。

挿畫にしたのは、龜戸豊國畫の挿畫である。

大正十三年七月

編者 忌 寸

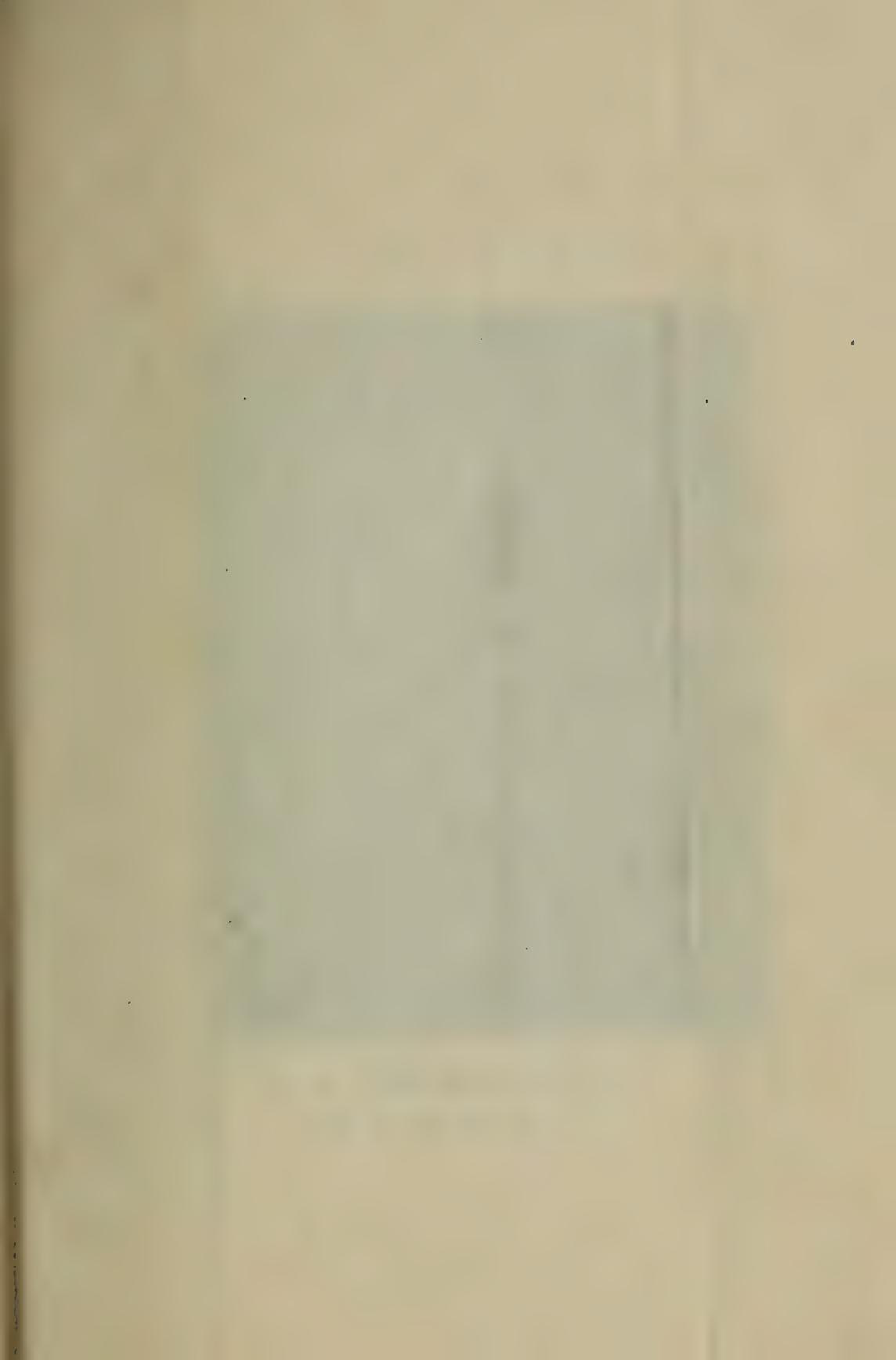
(筆國豊戸繼一場のし殺彌文)  
峠谷都宇



彌文頭座  
大園小川市

衛兵十屋丹伊  
磯島東坂

三仁の婆提  
大園小川市



薦紅葉宇都谷峠 (宇都谷峠座頭殺し) 五幕

序 幕

櫻川 佐々木家の場  
柴井町 伊丹屋の場

〔役名〕 伊丹屋十兵衛、佐々木桂之助、尾花六郎左衛門、筑田喜藏、尾花才三郎後に髪結才三、望月丹下、佐野松屋清兵衛、女衛源六、田川伴藏、鳴子曳六、伊丹屋丁稚三太、茶道兵才。十兵衛女房おしづ元伊筒屋の抱勝山賞ハ六郎左衛門娘おしづ、佐々木家の腰元小牧賞ハ白木屋お駒、佐々木家の妾千種等。〕

(佐々木家堀外の場) 本舞臺正面一面の練堀松の釣枝、真中に用水桶、總て佐々木家堀外の體。  
△○○の中間三人、提灯六尺棒を持ちて立ちかゝり、時の鐘にて幕明く。

△ 筆助、可内、何と今夜も雨氣と見えて、暖かなことではないか。

○ 時候は寒いはうが順だが、夜更になると拾ちやあ冷えつくやうだわえ。

□ その冷えくとするところへ、用意の江戸一、(ト袂より三合徳利を出して)それく、これさへあ

りやあ夜明まで、何のことはない。

△ ツイとろくと寐るといふのか、いや覺東ねえ番人だ。

○ 手前のやうに酒の好きなものは親達の勘當、すでに御家老の筑田喜太夫様の御子息喜藏様が、御納戸金を二百兩遣ひ込み、御追放にならしやつたを知つてゐるか。

□ その二百兩も色狂ひといふでもなく、ばつと遣つたといふ噂もないが、

△ 派手なお噂は聞かねども、今日此頃は以前お邸に勤めてゐた、中間の坊主小兵衛とかいふ者の世話になつてござるといふが、手に覺えた内職はなし、えて、とゞのつまりが、斬取り強盜は武士の習なごと、手前勝手な道理を附けて、悪いことを仕出すものだ。

○ この頃の物騒といひ、屋敷奉公はしても、劍道の道は少しも知らず險難性だから、中々泥坊を捉へようなどいふ手札ができるものか。

△ さうあきらめて見りやあ、二本差しても犬脅し、案山子に劣つた男だなう。

□ 筆助はともあれ、おぬしア鼻衆にまかれて、二本棒だらう。

○ その二本棒は樂しみだが、その傍で毎晩一合酒といふのも、氣晴らしになるやつよ。

△ そんなら、一合はずまうか。

兩人 又味噌を上げようと思つて。

△ 何にも言ふな、元締の肩へ乗つて来いといふに。

兩人 おんぶとあれば、何時でも。

△ 火の用心々々。

ト三人は上手へはひる。此の時凄き合方になり、練舞より見越の松用水桶を傳はり、筑田喜藏頼冠りにて、口に更紗包みの茶入の箱を啣へ出来り、本舞臺へおり、身繕ひをして、

喜藏

佐々木家の重寶花形の茶入、この預りは豫て遺恨ある尾花六郎左衛門、茶入紛失なす時は切腹、身共はこれを賣代なして此の身の有附、どれ人目にかゝらぬその内に、塀を替へて工夫を付きよ  
うか。

ト思入あつて行きかける。此時後ろへ尾花六郎左衛門溢蛇の目の傘にて顔を隠し窺ひみて、此時喜藏の鎧を取つて引戻し、ちよつと立廻り、ト喜藏脱れて花道へ行く。これにて、

六郎

曲者。

トいふ。喜藏小石を取つて打附ける。六郎左衛門は傘にて受ける思入あつてきつと見送る。此の見得風の音にて道具廻る。

(佐々木家千種部屋の場) 本舞臺常足の二重、正面一面の金模、二重真中に千種妾の打扮にて住ひ、この傍に蒔繪の煙草盆、文庫の上に鼻紙及び守り本尊を黒の厨子に入れ經巻を載せてある。平舞臺に腰元二人、他に二人の腰元襷がけにて茶道兵才に向ひ、各紅葉の折枝を持ち立廻つてゐる、白囃子にて道具納まる。と又立廻つてト、兵才打ちすゑられる。

兵才 まるつたく。

腰一 何と兵才殿、女子でこそあれ、覺えの手の内。

同二 これにも懲りず、御自慢なされますかえ。

兵才 いやもう恐入りました。然し負くるは勝の習ひとやら、無手ながらかうして。

ト兵才腰元の一へ粗付く。一これを振切つて突退ける。又立かゝるを二後より兵才の眼を隠す。兵才手を取らうとするを、兩人してしつかと押へつける。兵才足なばたくしてもがく、

千種 (思入あつて) お、女中方、お手柄々々、これにて縛しめ暫く、窮命。(ト文庫の紐を投げてやる。)

二人 心得ました。(ト兵才を縛る。)

腰二 重ねぬくの恥辱をとりし兵才殿、我々へ降参なせば、

皆々 この窮命は許しまするぞ。

兵才 え、情ない、女子と侮り生捕らるゝとは。

腰一 以後の見せしめ、お中の口まで引ばつて参じませう。

同一 こりやよい所へお氣が附かれました。憎さも憎し、何ぞ仕置をいたしませう。

同一 その思ひ附はいつそのこと、墨塗りにいたしませうか。

千種 それも一興、兵才殿の面體を、反故染にしてもだいじない。

腰一 かしこまりました。さあお許しの出たからは、觀念したが、

皆々 よいわいなう。

兵才 桃栗觀念恥かきねん、わしは殘念、もう御免。

腰三 へらず口を利くからは、それ墨塗りぢやく。

皆々 かしこまりました。(ト硯を取る。)

兵才 これはたまらぬ。

ト兵才逃げたす。此時花道より望月丹下出來り、この様を見て、

丹下 これはく打揃うて何事をしめさるのぢや。扱は女中衆達の手籠めに逢ひし兵才どの。さりと

面白をかしい御殿の有様、ちと身共へもお聞かせなされい。

腰四 いえく、あなた方の御存じないこと。

皆々 思ふ存分折檻をいたしまする。

兵才 存分にされてはたまらぬ。丹下殿女中方へ、お詫をお願ひ申しまする。

丹下 いやはや卑怯千萬。何かは知らねど身共に免じて、御了簡なされて遣はされい。

腰二 丹下様の御挨拶、この後兵才殿が劍術の、悪口さへ言はれぬとあれば。なあ吳竹どの。

同一 それく、武藝を蔑する兵才殿。是に懲りてきつとたしなみめさるゝなら、皆々へも執成し、

丹下 拙者もお詫いたすほどに、

三人 お許しなされませいなあ。

千種 丹下殿のお口添へ、いよく降参とあるならば、

兵才 いやもう降参所か坊さんでござる。お女中方、これ、頭に免じて坊主眞平御免下されい。

皆々 おほゝゝゝ、(ト笑ひながら紐を解く。)

兵才 やれく、面目次第もない。(ト下手へ下る。)

丹下 兵才殿たしなませえ。くれう身共が参り合せて其方の仕合せ、拳も鈍き茶道の身で劍術は無益の

沙汰。身共などは斯く兩腕をたばさみ、立派に御知行頂戴いたしてこそ、弓馬槍刀の心掛なうて

はならぬ。尤も千種の方は剣術御執心とあつて附々の女中にまで御指南なさるゝと承はるが、兵才殿が此の爲體、感心仕ツてござる。

腰一 いやもう、拙き業も女子の一心、

一二 お恥しう存じまする。

丹下 又拙者もよい折柄なれば、千種の方へ御稽古を願ひたう存じまする。なんとお叶へ下さるか。

千種 未熟の手の内、どういたしましてお立合ひなりませうや。ほんの申さば、戯同様なことではござりまする。

丹下 その戯れが大執心、幸ひこれに紅葉の折枝、色づくところが又一しほ、さゝ是へく。

千種 そのやうにまでおつしやるを、辭退致すも不興とやら。腰元衆、丹下殿のお相手に出やいなう。

腰一 最前から望む所と存じをれど、お許しもない其内に。

同二 此の方より願ひましては、失禮と存じまして、控へてをりまする。

同三 たつて御所望なれば、千種の方の仰せの通り、そち達の内望月様のお相手に。

一二 かしこまりました。(ト立上らうとするを、丹下思入あつて)

丹下 あいや暫くお控へなされい。拙者が相手と申すは千種の方、我が手の内は鈍くとも、免許を受け

たる祕事口傳の儀もござる。それとも御意にかなはずば、是にござる桔梗どの、身が相手になら  
つしやれ。

腰三 どういたしまして未熟の私、あなた様のお相手なごとは、思ひもよらぬことでござりまする。

丹下 なるほど、こりやさう思はつしやるも尤もぢやが、望月丹下も夜叉鬼神ではござらぬ。女子を相  
手に致すからは、ずんどあしらうて遣はさう。(ト言ひながら立つて、その腰元の後ろより) かう組  
みつかれたら、どうぢや〜。

ト押へ付ける。これにて他の腰元三人丹下へかゝる。兵才これを好きしほと下手へ來り、月の備へ物  
の團子、枝豆などを取つて喰ふ。この中丹下さん〜に打すゐられる、こゝへ兵才薄のつばなを持來  
り丹下の耳へ入れる。丹下はこれにて耳の穴をほじりながら兵才を追廻す、その中丹下は薄の花活を  
引つくり返し水流れるこなし、腰元四人は丹下をめつた打にする。兵才は花活を取つて顔を突込み、  
花道へ行く。

丹下 まるつた〜。

皆々 こりや丹下様、御卑怯でござります。

トその中に兵才は花道へはひる。と、花道より尾花六郎左衛門出來り。

六郎 後の月見に奥殿の賑ひ、實に泰平の瑞相、(ト舞臺へ來り)こは千種の方には、まづ御健勝の體、大慶至極に存じ奉りまする。

五人 あなたは尾花六郎左衛門様。

六郎 いづれも打揃うて、當日の賀儀祝し申さん。

千種 月を祝して今日の出仕、互ひの満足。

六郎 取分けお次で窺ひまするに、望月氏を始め腰元衆の武藝のお試し、感心仕つてござりまする。

丹下 身共は未だ獨身でござる、相應な縁談がござるかな。

六郎 これはけしからぬ、つんほウ話した。

丹下 兎角女は眉目形、女に力は入らぬこと。

六郎 あは、少々氣逆せと見ゆる。

皆々 おほ、おほ。

丹下 これさく身共が申すこと間違つた儀は申さぬ。そのやうに笑はるゝな、をかしうはござらぬ。

腰一 それく、それが違うてをりますぞえ。(ト大きな聲にていふ。)

丹下 あの、相應な縁談があると申すか。

腰二もしく、丹下様はどうしたとか、きつウお耳が遠うおなりなされましたなあ。

同三あまり打ちすゑた故、顛倒なされて、俄の聾。

同二ほんにさうでござんしたか、笑止なことでござんすわいなあ。

千種 いやくそりやさうではあるまい、年の加減餘病の業とか申すことか。

腰四 千種様へ申上げます。お耳の遠いその譯は、あの兵才殿が薄のつばなを振廻し、その時丹下様のお耳へつばながはひりましてから、俄の聾でござりませう。

腰二ほんに、それで聾になりましたか。

皆々 争はれぬものでござりまするなあ。

六郎 いかさま、物の譬には聞き申せしが見るは始めて、丹下殿を打ちすゑしはあつばれ感心、まさかの時は一方の、防ぎともなつて頼もしい。

千種 未熟の教へも武家のたしなみ、生兵法は怪我のもと。

六郎 いやく左にあらず、女ながらも武家のたしなみ、誠や人間は病ひの器、どうか直して遣はした

い。  
ト此中丹下耳の穴をほじる、皆々へこなしあつていろくをかしみの思入。千種の方は六郎左衛門の

顔色を見て、

千種 丹下殿の病ひより、疾より見ればこなたの顔色常ならず、息つかひも苦しき様子、服薬せずばかなふまい。養生が肝要なれば心得違ひの、いや、薬違ひのないやうに。

六郎 こは有難きその仰せ、いかにも持病の悩みはあれど、なに、これしきに屈せぬ某、別に替りはなけれども、老少不定は時を嫌はず、こゝらが常の心得かと存じまする。

千種 お、聞及ぶそなたの氣質、忠義ばかりか何事も、義は鐵石のまことの武士と、君にも日頃御噂、随分其の身を大切に、國家の礎朽ちせぬやうに。

六郎 心の磐石くたくるとても、忠義の魂變ぜぬそれがし。

千種 勇ましきその詞、これより直に君の御前へ。

六郎 拙者も同道。

千種 尾花殿。

六郎 望月様は、これにゆるりと。

千種 さ、皆もいつしよに。

六郎 まづ、

皆々 お越しなされませう。

ト唄になり、皆々奥へはひる。丹下獨り残り思入あつて、

丹下 何の事ぢや、身共一人置きざりにして、べちやくしやべつて奥へ行きしが、たゞ不思議なは耳

のあんばい。がんに致して聞えねども、わざと聞える體に見せかけ、その座を繕ひおけば、尾

花を始め千種の方、それと知らぬは身共が頓智發明と申すものぢや。これを思へば世の中に利口

な者は身共一人、此上は諸事萬端引受けて、普請奉行お金力、役徳は皆すり込み、小牧を口説い

て身共が女房、さううまく行けばよいが。

ト手を組み思案のこなし、奥より田川伴藏、鳴子曳六出來り、

兩人 丹下さま。(ト言つても聞えぬ思入。兩人思入あつて、)

伴藏 望月氏何をうつかり、田川伴藏、

曳六 鳴子曳六、豫て申し談じたる一件も、大半上首尾、

兩人 (猶だまつてゐるので、) もし、丹下様。(トきつと言ふ。)

丹下 (心附き、兩人を見て、) 是は各、唯今出仕めされたか。

伴藏 いかにも左様、貴殿は何やら考へて、御思案の大福餅、旨いことをやらるゝな。

曳六 その分口わけぐちなら身共みどもへも。(ト言ひかけるを、)

丹下 いや、斯かやうでござる。手前儀てまへぎはちと仔細しさいあつて、耳みみを遠方えんぽうへ遣つかはしました。唯今ただいま何かと御意ごいなされたが、少しも聞きえませぬて。

伴藏 それはお氣きの毒どく、申まをし談だんする一儀ぎもあれど、聾つんばうとなられては、

曳六 お年としも若いわかが聾つんばうとは、あんまり聞きえぬ御病體ごびやうてい。

伴藏 「丹下たんげ殿どのは三十さんじゅうになるやならずにつん、しうとは、嚙か聞ききたうあらうのに、」

丹下 「なぜ聞きかせては下くださんせぬ。」(ト淨瑠璃じやうるりを語かたる。)

兩人 え、何を馬鹿ばか々々くしい。

ト丹下たんげの香中せんかをたゞく、これにてぎつくりし、耳みみの聞きえるこなし。

丹下 あ、嬉うれしやく。

兩人 何が嬉うれしうござる。

丹下 唯今ただいま御兩所ごりやうしょがどつさりたゞくそのはずみ、つかへし耳みみがなほりました。

曳六 すりや貴殿きでんのお耳みみが、元々もとくに聞きえるやうにおなりなされたとか。

丹下 さればのこと、はずみに打うつたがもつけの幸さいひ、蟻ありの囁ささくも聞きえまするて。

伴藏 それは重疊、然らば豫て筑田喜藏殿と心を合せ、尾花親子諸共に何ぞれかぞれ、罪にとつて落せし上、彼等二人をほんでんごく。

曳六 佐々木の家で兩人が重役になる上は、心のまゝと思ひの外、あの喜藏殿は、御納戸金二百兩虚妄せしを、尾花親子に見出され、門前より阿房拂ひ。

伴藏 それ故猶々遺恨重なる尾花親子、筑田氏が計略を以て、昨夜寶藏へ忍び込み、丹下 あこれ、(トあたりを窺ひ) 六郎左衛門が預かる所の、花形の茶入を盗み取る手筈、首尾よく奪ひ取られしか。

曳六 その儀も上首尾、然し今朝より紛失せし、噂もなきは合點行かぬ。

伴藏 それが即ち智謀拔群なる六郎左衛門、御家の瑕璋と相なる故、事穩便に計らふ手段。丹下 それで様子は残らず知れた、先刻出仕の六郎左衛門、彼れが語音を探り見ん。

兩人 それこそ妙計。

丹下 これ、(ト制して) 御兩所ごさげ。

兩人 心得ました。

ト唄、調べになり、丹下先に兩人奥へはひる。花道より尾花才三郎出來りて、

才三 恐れ多くも我君の御寵愛深く、未熟なる某へ殿様のお髪上を、仰せ付けられしは此身の面目、今日式日のことなれば、刻限よりも早けれども、取次の御茶道當番は誰人ならん。何はともあれ心急ぎ、御詰所にござらねば、萩の間へ推参いたさう。さうぢやく。

ト奥へ行かうとする。此時奥より佐々木の腰元小牧出來り、互ひに行違ひ思入あつて、

小牧 あなたは才三郎様、唯今御出仕遊ばしましたかえ。

才三 いかにも、疾より出仕はいたせども、茶道衆もござらねば、其取次を相待つところ、小牧どの、憚りながら、お尋ねなされて下されぬか。

小牧 そりやもうお心易いことなれど、そのやうにお急きなされずともよいほどに、まあお下にごさんせいなあ、

才三 それぢやくと申して。

小牧 はて大事ござんせぬ。御用のお邪魔はいたしませぬ。御殿の様子はよう存じてをりまするぞえ。

才三 いかさま、晝夜お附の小牧どの、こりや尤もであつたわいなあ。(ト下にゐる。)

小牧 もし才三様え、ちとお願ひがござりまするが、おかなへなされて下さりまするかえ。

才三 いやもう男女のへだてはあれども、傍輩の此方様 身にかなうたことなれば。

小牧 嘘ぢやござんせぬかえ。

才三 嘘偽りは大嫌ひ、してお頼みのその仔細は。

小牧 あの百人首の歌に、「瀬を早み岩にせかるゝ谷川の、割れても末に逢はんとぞ思ふ」と申しまするは、どういふ心でござんすぞえ。

才三 そりや崇徳院の御製、一つ流れの水なれども、物にへだゝり離れぐゝになるにもせよ、いつか又一つになるといふ、待ち詫びたる戀歌の心と思はるゝわいなう。

小牧 てもしをらしい、一つ流の御奉公いたしまして、人目の關にへだゝるとも、末は女夫になられま  
するかえ。

才三 そりや、その人々の心々さ。

小才 さうして、あなたのお心はえ。

才三 そりや人としてこの道を嫌ふは、木石とか申すものゝ、手前共は大の無骨、親のゆるさぬ不義徒ら、左様なみだらは致さぬ心さ。

小牧 して、親々のお許し受くる其時は。

才三 いやでござる。(トきつと言ふ。)

小牧 そりやあなたお胴慾でござります。私の心を知らぬか何ぞのやうに。少しは不便と思召し、御座り量なされて下さりませいなあ。

才三 武士たる者へ、異なることのおつしやりやう。はて、迷惑千萬な義でござる。

小牧 あれ、又そのやうなことおつしやつて、氣強いばかりが武士とは申しませぬ。戀も情も知る人を仁者とか申しまする。

才三 仁も過ぎればたはけとやら、木石と言はれうとも、その身を堅固に致さねば、不義者の汚名を受け、掟を破る不忠の科、戀の道こそ知らずとも、弓馬の道なら心を碎く某へ、重ねてかやうなみだら千萬、申し出せば其の身の破滅、たしなみめされ小牧どの。

小牧 (立ち上る才三の袂を捉へて) そりや又あんまり。

才三 あいや無骨の某、必ずお氣にさへられな。

ト才三郎振切つて奥へはひる。小牧思入あつて、

小牧 思ひこがる、才三さん、氣強いばかりが殿御の常か、なまなか言出し此の儘に、かなはぬ戀とあきらめても、心の内が恥しい。なんとしたらよからうぞいなあ。

ト歎息したる思入、奥より丹下鏡ひ出で、

丹下 それにごさるは小牧殿、見るは眼の青障るに煩惱、聞けば聞きばら、なまなか耳が聞えずば、こなたの歎きは聞かねども、いまの述懐、才三がことはすつぱりと、思ひきつたがよさうなも  
のぢや。

小牧 さうおつしやるは、丹下さま。

丹下 丹下此度はぬさも取りあへず、こなたの戀路をかなへんと、思ふ心は手向山。

小牧 その御親切はお嬉しう存じまするが、もう何事もふつ々おつしやつて下さりますな。

丹下 言ふは言はぬにいや増す戀路、才三ばかりが男ではあるまいし、某とても獨身なれば、結ぶの神の引合せ。これさ、つんとしては譯が分からぬ。戀知り男になびきをらぬか。

小牧 (丹下の手をかげようとするを振拂つて) 御本性でおつしやることか知らねども、この中までは喜藏殿の御難題、お屋敷を追放より、やれ嬉しやと悦ぶ甲斐もなさけなや、相手皆つてあなた様、みだらなことをなされると、御重役のお方でも容赦は致さぬ。御人體にもないそのお顔で、色の戀のと、ちとおたしなみなされませ。

丹下 こりや、だいぶ手強う出掛けたな。よし々おぬしがさういふ心なら、可愛さあまつて憎さが百倍、刀にかけても口説き落さう。

小牧 てもまあ、お役がらにも似合はぬ仰せ、お掟を背く不義の成敗、そのお刀でなされますか。

丹下 その掟を存しながら、何故又才三にうツほれた。

小牧 え、存じませぬ、知らぬわいなあ。

ト言ひながら突退けて顔をびつしやり打ち、唄になり奥へはひる。丹下残つて、

丹下 どう言へばかういふと、日々手しづいあの小牧、是といふのも才三めに心を通はすとち女め、今にほえ而かゝしてくれる。

トばたくになり、奥より才三郎剃刀を持つて逃げて来る。後より佐々木桂之助、殿の打拵にて長管を持ち出来る。これに以前の四人の腰元、伴藏、曳六の近習兩人、何れも留めながら出る。

桂之 予が面體へ疵を附けた不届き奴、常ならぬ式日に血をあやして衣服をけがし、濟まうと思ふや、あまりと申さは奇怪至極。

才三 恐れながら思はぬ龜相、幾重にも御宥免願ひ奉る。(ト平伏する。)

丹下 (思入あつて) 恐れ多くも御主君の面體へ疵をつけて、御宥免で濟まうと思ふか。

伴藏 左様々々、平日主君を輕しめたる罰は目前。

曳六 今更お詫を申すとて、この大罪が脱れうか。

丹下 こりや我君のお手おろさるゝまでもなく、いで某が成敗仕らん。(ト立ちかゝる。)

桂之 丹下控へい。

丹下 あ、いや〜御前、不届至極の尾花才三、御家の控以後の見せしめ、しばらく首はお定り、その太

刀取りは某が。

桂之 いや、その成敗は予が致す。

丹下 すりや、御前様が。

腰元 お手づから、あの才三さまを。

桂之 いかにも、新身の試しも自業自得。

丹下 さすがは君の思召し、恐れ入つたる御成敗、斯く罪も極るからは、大小挽ぎとり繩附にして廣庭

へ引きするい。

曳六 かしこまつてござる。

ト兩人才三郎の大小を取り、下緒にて後手に縛る。

桂之 言はうやうなき人非人め。それ、廣庭へ引立てい。

伴藏 はッ。君の上意、お立ちなされい。

才三 あ、斯くなり行くも生者必滅。

丹下 引かれ者の小唄ぢやなあ。

ト皆々よろしく思入、此見得にてよろしく道具廻る。

(廣庭の場) 本舞臺高足の二重、本縁附、上手障子屋體、上下網代塀、下手萩の下草、調べにて

道具留る。と、こゝに紺看板の中間三人竹箒と手桶とを持ち、掃除してゐる。

何と折平、當家の殿様は御仁心なお人ぢやと聞いたが、人の噂とは大きな違ひだなう。

御酒の機嫌か知らねえが、お側にござる尾花才三様を、お手討になさるといふのは、あんまり短

氣なお仕置だなあ。

剃刀で疵を附けた位なら、人をそこなふ殿様でもねえが、それには何ぞ言譯の、ならねえ失敗が

あるのかもしれないねえぜ。

あの才三様も、今年が厄年でもあらう。

二十四五といふ奴は、男の大厄だ。

あたり尾花を枯らすのだなあ。

○ え、洒落どころぢやあねえ。掃除ができたら來やれ。

ト箒手桶をさげて下手へばひる。合方になり、奥より以前の腰元四人出來り障子屋體へ向つて、

腰一 千種様、それにおいで遊ばしまするか。

同二 我君様よりの仰せ付。

同三 御臺様の御口上で、

四人 ござりまする。

千種 (屋體の内にて) 御臺様の御口上とな、それへ行つて承りまするでござりませう。(ト上手の障子を

明ける、と内は總て部屋の様、二重へ來り手をつかへて) お取次御大儀、して御臺様の御口上とは、

いかに仰せ出されました。

腰一 先程よりあなた様のお願ひ、老女千年様を以て申入れたるところ、

同二 尾花才三郎役目の越度とは申しながら、我君の御怒り強く、

同三 再三お諫め申せどもお用ひなく、庭前に於て君の御手討と事極り、

同四 唯今これへ引出し、御成敗との、

四人 儀でござりまする。

千種 すりや、いよく死罪と極りましたか。

腰一 さるによつて御臺様の仰せには、千種の方より願ひの趣き、殊勝なる思召しを感じたまひ、  
同二 暫く猶豫のその内に、經文讀誦致せよと、仰せ出されました。

千種 はッ、有難きその仰せ、生死不定の世の中なれば、我人ともに果敢ない身の上、定業とは申しながら、今を盛りの尾花才三、散り行く命も過去の因縁、せめて未來の十産にもと觀音菩薩の功力によつて、成佛得脱致せんと願ひ出しが、お聞濟みの上からは、時刻を待つて讀誦せん、それなら尊像經卷 諸共、これへ持つて來や。

四人 かしこまりました。

ト經机に載りたる經卷尊像をよき所へなほす。千種の方は塵手水をして經卷をいたゞく。と上手にて、大勢の聲にて「歩め」と聲し、以前の近習二人才三郎を引立て、後より丹下附添ひ出来る。

近習 下にをらう。

ト以前の二郎めいゝ土俵を擔ぎ、菖蒲草の侍手桶を持ち出来る、丹下土壇の指圖をし思入あつて、  
丹下 千種の方には、是においでなされましたか。御覽の通り尾花才三郎は死罪と極り、見る影もないこの爲體、何とみじめな様ではござらぬか。

千種 不慮の儀に就き果敢ない身の上、一倍不便に思ふ故、御臺様へお願ひ申し、せめて未來の土産に  
もと、御經讀誦いたしまする。

丹下 へえ、それは御奇特、然し此の期になつて此方様が、經文を讀まれても、何の爲めになりませう。  
譬に申す牛に經文、無益なこと、いらざるお願ひお止まりなされいさ。

千種 丹下殿控へめされ、無益と申すはこなたの雜言、御臺様の仰せによつて、普門品をさづくるに、  
止まれとは誰人が申しました。

丹下 さあ、それは。

千種 常ならぬ御臺様の仰せなれば、聞捨てならぬ今の一言、御臺様へ申上げ、きつと事を正しませう  
か。

丹下 さ、それは、

千種 人の愁ひを悦びなさるか。

丹下 さうではなけれど。

千種 なければ讀誦の批判なさるか。

丹下 なかく、左様な。

千種 然さなくば言い譯わひ。

丹下 さあ、

兩人 さあくく。

千種 言い譯わひなければ、この座ざをとくく、

皆々 お立たちなされい。(トきつと言いふ。丹下たんげこなしあつて、)

丹下 でも、繩な附つきをこのまゝに。

千種 科し人じんなれば讀よ誦じゆ濟すむまで此こ方なたへ、預うかる上うへは氣き遣やひなし、下しも部たも引ひ連つれはや、お次つぎへお立たちなされい。

丹下 ぐつとまつて、然しからば科し人じんお預うけ申ます。是これを思おもへば才さい殿ぞの、死し花はなの咲さく果く報はう者もの、羨うらやましいと言いひ

たいが、忌いはしいこの繩な目め、不ふ淨じやう者もののその傍そばにべんくとるようより、下しも部たどもは身みについて參まれ。

れ。

中間 心こゝろ得えました。

丹下 然しからば科し人じんは千ち種しゆ様さま、繩な附つきのまゝお渡わたし申ます。

千種 御ご念んに及およばぬ。

丹下 どりや、休き息そく致いたすであらうわえ。(ト丹下たんげ先まに中ちゆう間かん附ついてはひる。)

腰一 邪非道の望月丹下も、其理に服してこそくと立退きますれば、

同二 寸善尺魔のない中に、お經文を讀誦あつて、才三様の未來の迷ひ、

同三 お晴らしなされてあけましたら、其の悦びはいかばかり、

同四 名僧知識の引導より、尊いことで、

四人 ござりませう。

千種 これにて普門品を、唱へますのであらうわいなあ。

腰一 左様なれば私共は、その由を御臺様へ、

千種 御苦勞ながら、

皆々 後ほど御目にかゝりませう。

ト腰元四人奥へはひる。千種の方あたりを見廻し經卷を取つて、

千種 實に果敢ないは人の命、露霜よりも保ちがたし。

才三 明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半の暴風もこの身にあたる私へ、お經文をお授けなされて下さると

は、有難い結縁と存じまする。

千種 武士の恥あるものと思ひなば、最期に未練はあるまじきが、煩惱の絆に迷ひ、見苦しき死を遂げ

んこと末代の恥辱、さるによつて普門品の威徳を以て、未來永劫成佛なされや。

才三 ことは忝きその御詞、死するに未練はござらねども、我君の御怒りによつて、御手討に相なりまされば不忠の汚名、せめてのお慈悲お情には、切腹仰せつけられなば此身の本懐、かくまで厚きあなた様のお情を以て、この儀お執成下さらば此世の望み更になし、何卒お願ひ申し上げまする。千種 尤もなる願ひなれど、死するを執成す謂なし、とてものことに助命を願ひて歸り花、世を忍ぶお心はないかいなう。

才三 一旦罪の極まる上は、助命を願ふ未練はござらぬ。

千種 さればのこと、こなたに未練がないにもせよ、未練を残すものがある。

才三 そりや誰人が。

千種 外でもない、この千種、私ぢやわいなう。

才三 何と。(ト思入)

千種 さあ、觀音經の終らぬ中死急ぎをなされずとも、まあこゝへ來てお經を受けたがよいわいなう。

才三 やはりこのまゝ、これにて聽聞仕らん。

千種 (經卷を持つて)「妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五」、お前は二十四、

才三 や、(ト思入)

千種 (また經をしやんと持ちて)、「爾時無盡意菩薩即從座起偏袒右肩合掌向佛、」

ト經を讀みながら、だん／＼土壇の内へはひる、是にて才三郎だん／＼押されて土壇の外へ出る。種これに構はず附廻しのやうに舞臺の中央へ来る。才三郎これを不思議に思ひ、

才三 千種様には、こは、何事をなされまするぞ。

千種 (經を止めて)何事とは胸慾な、日頃から戀したれど儘ならぬ身の情なさ、空に月日を送るうちお前様には不慮の御最期、とても逢はれぬことなれど、御豪様へお願ひ申し、觀音經を授けんと言うたはみんな偽り事、人目を拂ふ上からは、お命を存へてお屋敷を立退き、夫婦になつて下らんせいなあ。(ト碎けたる思入にて言ふ、才三郎こなしあつて)

才三 さうとは知らず死ぬるいまはに、佛道の教を受けんと思ひのほか、言語に絶えしその詞、狂氣の沙汰か但し又、それがしを嘲弄めさるお心か。

千種 勿體たい、お主様は兎も角も、觀音様を欺いても、あなたに逢うて本心が明かしたいはつかりに。

才三 聞くもなか／＼けがらはしい。そもこなた様は賤しき身でありながら、殿様の御不便を蒙わり朝

夕の活計、その御恩を忘るゝのみか罪ある我へ戀慕をしかけ、なほく罪を重うせんと、こりや何者に頼まれしか。縛の身でないことなら不義の大罪殿へ注進致さんに、今にも死する某が見脱すは寸志の情、この後とても心を改め、我君を御大切にいたさねば、天罰其身に報いまするぞ。ちえ、見下け果てたる不所有者、情ないお人ぢやなあ。

トきつと言ふ、千種は恥入りたるこなしにてうつむく。此時四つの時計鳴る、中間及び丹下いできたりて、

丹下 今うつ時計は巳の時刻、千種様の御用向も終りなば、土壇の中へ歩まつせえ。  
才三 疾より覺悟の尾花才三、何時なりとも、早く死刑に行はれよ。

丹下 おゝよい覺悟だ、科人を引きすゑい。

中間 はあゝ。(ト才三郎を元の所へ引立てる。丹下あたりを見廻し、)下にをらう。

丹下 さあこれからは身共が役目、死罪の場所へ女は無用、千種様には最早用事もござるまい。奥殿へお越しなさい。

千種 そのお指圖なら入らぬ世話、申し残せしこともあり、その一段聞き切るまでは、御臺様へお答へがならぬわいなあ。

才三 あいや、その儀は某一言半句、御返答は仕らぬ。唯心にかゝるは殿様の御身の上。千種の方には君のお傍へ、少しも早く。

千種 斯くまで忠義なこなさんを、刀の錆にかけるとは、あたら花を散らすのぢやなあ。

ト千種の方は思入あつて奥へはひる。才三郎眼を閉ぢ覺悟の思入、下手より前の近習二人出来る。

伴藏 丹下殿には刻限違はず、見張りの御役目御苦勞千萬。

曳六 それがしも死罪の場所へ罷出しは、朋友よりの誼、御前よしなに、

兩人 お執成し下されい。

丹下 各方は身共次第、死罪と極まる才三殿、今改めて申すではござらぬか、朋友の某なれば申聞けん。罪ほろほしだ、よく聞かつせえ。元來貴殿は親御の權威を鼻にかけ、第一家中の者を眼下に見下し、蔑にいたされたを、今思ひあたつたであらう。

伴藏 身共などはお髭の塵を取らぬ故、さして出世は致さねども、此身は安泰といふものだ。曳六 奥女中へ取入つて、ごま第一の不忠のお手前、とうく終ひが縛り首。

丹下 はて、天道は正直、悪いことは出来ぬものだ、むゝはゝゝゝ。(ト嘲笑ふ。)

柱之 (上手階子の内にて) やあ、かましい、丹下控へい。

丹下 はッ。(ト驚き控へる。障子明くと小姓二人を従へて桂之助ある。) 才三郎をお手討の用意、申付置きましてござりまする。

桂之 丹下、その方は文武兩道は申すに及ばず、諸事萬端の掛引、人に勝れて才あるもの、さるによつて予が心にも適ひし故、傍近く召使ふが、嘸満足であらうな。

丹下 冥加にかなひ、有難い仕合せに存じまする。

桂之 それに引きかへ、才三めはさして功なき愚者、助命致すも無益の者。

丹下 御意の通り功なき者を、御扶助遊ばさるゝは無益の至り、彼等如きを則ち、祿盗人とか申すので、がなござりませう。

桂之 いかさま、さうであらう。

丹下 これなる才三亡命の上は、我君様へお願ひがござりまする。何卒御聞濟み下さりませう。

桂之 其方の願ひとあらば、何事なりともかなへくれん。

丹下 先以て大慶に存じ奉る。そのお願ひと申しまするは餘の儀でござらぬ。唯今彼れが相果てませうれば、毎朝のお髪上の儀は、これにをりまする川川作藏、鳴子曳六の兩入へ仰せ付けられ下さりませう。

桂之 其方が推舉なれば、苦しくない。順役申し付くるぞ。

丹下 はッ、こは有難き仕合せ。御兩所我君の御説、嚙御満足でござらうの。

伴藏 貴殿の御推舉を以て、身不肖なる我々へ、右のお役目仰せ付けられ、

曳六 此の身の面目、有難う存じ奉りまする。

丹下 さあ御兩所、我君の御許容ある上は、重役方へお役目披露、少しも早く此の場を退出。

伴藏 はッ、左様ござらば我君様。

曳六 丹下どの。

兩人 御前よろしう。(ト兩人下手へはひる。丹下思入あつて)

丹下 いざ我君、御猶豫あつては臣下の者、他聞の憚り、以後の政事が相なりますまい。才三如き不忠

の族お手討に遊ばされしとて、不仁の君と嘲りもござるまい、片時も早く御手討に遊ばされませ

う。

桂之 (平舞臺へ下り才三郎の傍へ行き、思入あつて、)こりや才三、予が籠致せしをば、自分の才智と心得、

物にたかぶり日毎の増長、あまつさへ唯今の越度免れぬところ、その仔細は家に仇なす汝が相好、

未然を察する某なれば、予が手にかくる觀念いたせ。

才三はッ、大罪犯せし才三郎、いかなる刑に行はるゝとも憎むべき謂れなし、不肖なる某が勿體なくも殿様の、お手にかゝるは身の仕合せ、さはさりながら今年まで、御扶助を受けし御恩も送らず、相果てまするが心外に存じます。

桂之やあ、この期に及んで忠義だて、聞く耳持たぬ覺悟なせ。

才三疾より覺悟仕ッてござりまする。

丹下はて、いゝざまだ。やい不忠者の尾花才三、自體うぬらが日頃からいけッし、けたしやツ面をひけらかす故、女子供が附廻すをよい事に心得、そは附いてをる故に、今日のやうな大事が出来いたす。それも身共がいらぬ世話、はてさて笑止千萬。(ト桂之助のためらふを見て、)さ、我君、御猶豫あらず、新身のお試し。

ト桂之助頷き、白鞘を抜き、才三郎の眼先へ突きつける。才三郎首をさし出、観念の思入。

桂之覺悟はよいか。南無阿彌陀佛。

ト言ひさま丹下の首を打落し、返す刀にて才三郎の縛を解く、才三郎心得ぬこなしにて、

才三これは。

桂之是にて成敗相濟んだ。兩人の者、早まるれ。

ト千種、小牧、奥にて「ハア、しと返事して出来る、才三郎、こなしあつて、

才三 合點行かざる我君の御賢慮、罪ある某を御手討になさるべきを、縛ばかり切り解き、御助命ト  
さる其の仔細は。

桂之 まッ斯く爲すも、勸善懲惡、

才三 ちえ、有難うござりまする。

千種 もはやお許しある上は、

小牧 御安堵なされ、才三殿

ト千種才三郎へ大小を渡す。才三郎一腰をとる。

桂之 予が額へ疵つけしを越度なりと、すでに死刑に行ふべき旨、嘸不仁なる某と恨みつらん、其の  
儀も承知いたせしをれど、これ幸ひと纏うつては罪科脱れず、斯く庭前へ引出せしは、仔細あつ  
てのことぢやわえ。

才三 して其仔細とは、何のやうな儀でござりまするな。

桂之 才三郎、近う。

才三 はッ。(ト桂之助の傍近く寄る。)

桂之 その仔細別儀でない、今曉七つ時そちが親六郎左衛門が預りおく花形の茶入、寶藏へ秘めおきしを奪ひ取つたる曲者あり、これまさしく此程追放なせし筑田喜藏が族の仕業なれども、この事表だつて詮議いたさば家の瑕瑾、事荒だてなば其の品の、知れざることもあるんと存じ、兎や角せんと思ふ内、そちが僅の越度を言ひたて、罪に落して追放致す、何卒暫らく汚名を受け、忍び忍びに寶の詮議、役目と申すは此の儀ぢやわい。

才三 すりや、父六郎左衛門がお預かりの、花形の茶入紛失とな、え、ム、ム、ム。(トびつくりする。)

六郎 (上手より出来りて、) 我君これに渡らせたまふか、恐れながら昨夜お夜詣引けて後、もはや七つに程近き故、愛宕山圓福寺へ參詣なして歸る途中の練堀外、怪しき曲者松ヶ枝を傳はりおりるを捉へしが、宵の小雨でぬかり道、思はず通りし隙を窺ひ、行方知れず曲者を取逃したる身どもの越度、なれども此事他聞を憚り、何氣なき體にもてなし、殿様へまツかくと申上ぐれば有難くも、汝に詮議いたせよとの御誕なるぞ。

才三 はッ、未だ若年未熟なる某なれど、大切なる御寶詮議の、役目を蒙る上は千辛萬苦なすとも、尋ね出し奉らん。

六郎 その花形の茶入に、添へたる包みは鴛鴦切、色情に溺れ不淨をそぐ其時には、必ず凶事ある試

しもあれば、若年の其方へ心得の爲め申傳へん。

桂之いや、六郎左衛門、若年の才三なれども、かねて色情に溺れぬ心底、篤と見届けおいたれば、心遣ひには及ばぬぞ。

才三 すりや、某の心底を。

千種 今こそ明かす手段と申すは、死ぬるいまはのこなた様へ普門品に事寄せて、不義をしかけしこの千種、恥しめられしまごゝろは、あつばれ君の御眼力。

小牧 私とても同じこと、お指圖受けて恥しい、戀に事寄せあられない、あのゝものゝと申しましたを、必ず笑うて下さりませぬ。

才三 さばかり深き殿様の思召しとも存じませぬ、千種殿、小牧殿、無禮の雑言御容赦下さりませ。

六郎 斯くまで深き君の御賢慮、これより直に御暇賜はり、落着くところは其の以前名使つたる若黨作平、唯今にては柴井町に酒店を出しをるとのこと、彼れに頼つて身を忍び、寶の在所を詮議いたせ。

才三 かしこまつてござりまする。然らば、これより。

ト桂之助思ひ入、近習に持たせし手箱の中より金を出して、小牧に渡し、

桂之 茶入求むる用意の金子。(ト才三郎へ渡す。)

才三 重ねくの御恵み、左様ござれば御前様、千種様にも御機嫌よろしう。

六郎 悴、もはやお暇いたすからは、暫しの間町家の住ひ、必ず怠ること勿れ。

才三 長居はおそれ、あなたも堅固で。

六郎 そちも達者で。(ト苦痛のこなしにて、名残りを惜しむ。)

桂之 六郎左衛門一世の別れ、悴才三へ暇乞ひの盃しやれ。

六郎 なに、一世の別れとは。

桂之 (六郎左衛門をとくと見て、) 六郎左衛門、そちや切腹いたしをらうな。

才三 なんと御意遊ばしまする。

桂之 我心中を見ぬくこと、フラソコの中を見るが如し、始終の様子を察せしところ、眼中のどよみ、

語音の狂ひ、呼吸のいきの合はざるは、汝切腹なせしに相違なし。

六郎 む、(ト思入あつて、) おどろき入つたる御眼力、いかにも茶入失ひし申譯には、まッ此の通り。

ト肌をぬぐ、襦袢血に染み、白布にて腹帯をしてゐる。才三郎びつくりなし傍へ寄つて、

才三 すりや親人には、申譯のその爲に、御切腹なされしか、ほ、ほい。

六郎 縛り首にも及ぶべきところ、切腹なすは武士の本懐 我に心残さずとも、紛失の茶入草ね求めて

歸參なし、再び尾花の榮えを見せよ、草葉の蔭にて相待ちをるごよ。

才三 茶入紛失なしたる故、親人にもこの生害、この盜賊は父の敵、日ならず詮議し出して御無念お晴らし申さん。

六郎 出かしたく。

才三 われも門出に、別れの盃。

ト手水鉢の柄杓を取つて水を汲み、六郎左衛門に出す。六郎左衛門苦しげに水を一杯呑み、才三郎殘りをぐつと呑みほし愁ひの思入。此内桂之助、小牧、千種この體を見て愁ひの思入。六郎左衛門こなしあつて、

六郎 最早近づく此身の知死期、息ある内に門出々々。

才三 はッ。(ト身繕ひして行きかゝる、下の方より作藏つかくとして出て、)

作藏 死罪と極まる才三郎の命を助け、紛失なしたる花形の茶入を詮議の役、はてゆるかせな御成敗。

桂之 他聞を憚る一大事。それ。(ト才三郎へ目くばせする。)

才三 (心得て) 大事を知つたる川川件藏、動くまいぞ。

伴藏 何をこしやくな。(トかゝる、この時曳六窺ひ寄つて。)

曳六 才三、観念。(ト切つてかゝるを、立廻つて兩人をぐつと引敷く。)

桂之 其奴ら兩人は、喜藏丹下に荷擔のもの。

兩人 何を。(ト跳ね返す、又立廻つてよきほどに。)

桂之 斬つてしまへ。

才三 はッ。(ト兩人を斬倒す。)

桂之 見事。

ト六郎左衛門につたりと思入あつてがつくりとなる、才三郎寄らうとして顔をそむけ、刀の糊紅を拭

ふ。千種は感心のこなし、小牧才三郎へ見惚るゝ、千種小牧と入替つて文庫を持たせる。と、時の鐘

謎への小鼓にて、双方よろしく、

ひやうし幕

ト幕引附けると、直に尻明けに引返す。

(柴井町伊丹屋の場)——本舞臺三間の間常足の二重、塗家作り、軒口に伊丹屋と印したる紺暖簾、

八重桔梗の紋附けあり。正面暖簾口、下手酒樽の書割、一升樹、五合樹其の他漏斗などつき場の道具、いつもの所門口、下手黑板板、石の重りをしたる用水桶、兩社大神宮と印したる祭禮の提灯を立てあり、總て酒屋の店が、り。神明の祭りの體。聖天の鳴物にて慕叩く。と丁權三太徳利に酒を計つてある。中間、寺の下男、長屋の唄アなど、がや／＼言ひながら買ひ物をしてゐる。

三太 もし／＼お上さん、澤庵は賣りきつてしまつた。

鼻 え、この小僧としたことが、それだから早くおくれといふのに。

三太 お前ばかりのお客ぢやアあるめえし、しづかにしてくんねえ。

鼻 洩ツたらしめ、口ばかりまめな奴だよ。

○ これ／＼丁稚、手前ばかりで手が廻るまい、こゝの家には番頭も主人もをらぬか。

三太 番頭さんは出番で、若い者は屋敷廻り。

□ そんなら、評判の内儀に店へ出て貰へ。

△ さうだ／＼お上さんの顔でも見りやあ、いくら待たしても堪忍してやるから、早く呼べといふに。

三太 お前もい、氣な人だ。お上さんの顔を見よう／＼と思つて、その油揚を狐にでも取られるたらう。

△ 晝日中、狐がるものかえ。

トこの時さし金附の鳶一羽下り來り、寺男の持つて來た團持の油揚をさらつて行く。

皆々 そりやく、鳶が。

△ え、さらやあがつたな。どうするか見やあがれ。(ト空を見上げて下手へはひる。)

◎ さあ、早く一合くんねえ。

三太 あい／＼。(ト徳利をとつて酒をつぐ。)

◎ つぎを氣を附けてよ。

三太 下司ばつた人だ。

○ こゝの家へ來ると、咽喉がくびく／＼する、五分ばかりはずまう。

□ ときにお中間さま方も、こゝの家へ酒を買ひに來さつしやるが、土さんは美しい器量でござるの。

○ 左様々々、新橋きつての評判さ、それで、わしらも愛宕下から、ひやかしながら來たのさ。

○ ほんに男といふものは御苦勞なことだなう。こゝのお土さんは、元は吉原の井筒屋の花魁で、勝

山とかいふ全盛の太夫さんぢや。

◎ そんなら、仲の町張りと見えるの。(ト茶碗酒を呑む。)

○ 小僧さん、こんなにお客を待たさずとも、こゝへお土さんをよんで、皆さんに見せてお上げな。

三太 神明様の見せ物ぢやアあらめえし、よく見たがる人達だの。おい／＼お上さん、ちよつと見世へ来ておくんさい、お上さん／＼。

しづ あい／＼、今行くわいなあ。(ト奥よりおしづ世話女房の打扮にて、絲巻の絲を巻きながら出来る。と皆おしづに見とれるこなし。)ほんにお前一人で困つたであらう、お剩錢でも上げるのかえ。

三太 何さ、お剩錢ぢやアあござりません、こゝへ来てゐる折公が、お前さんの顔が見たいといふから、それでお呼び申したのさ。

しづ これはしたり、お客様へむかつてどうしたものでぢや。皆さん御免なされませ、身體ばかり大きうても腕白者で困ります。

□ 何さ、子供だもの、しやうがない。然しにこりと笑つた所を見りやあ、腹も立たねえのよ。

しづ ほんにまあ、御常談ばつかり、おほ／＼。

△ さあ／＼、いつまで見ても飽きはない。

皆々 先様はお代り／＼。

三太 代はお戻り／＼。

ト皆々から錢をとつて錢箱へ投げ、仕出徳利岡持などを捉げ、捨セリフにてわや／＼下手へぼひる。

しづ 三太や、そなたもよう働はたらきやるが、お客きやくでもかまはず、氣きにあたるやうなことはかり言いうてからに、そのたんびに冷汗ひやあせをかくわいの。

三太 なんの氣きの弱よわいお上かみさんだ、笑わらつてゐると直すに貸かしになるから、何なんでも現金げんきんに賣うるのが、一番勝ばんからだぜ。

しづ そこらはだいぶ賢者かしこもぢやと、褒ほめにやならぬわいなあ。そりやさうと、今いまのお客きやく様に帳面ちやうめんへ附つけるのはないかや。

三太 何なにさ、ありやあみんな現金げんきんばかりさ。それといふのもね、お前まへさんの顔かほが見みたいといつて、愛宕あたご下した、西にしの久保くぼ、鐵砲洲てつぱうすからも。(ト手てを鼻はなの先さきへ出だす。)

しづ あゝ、びつくりする。

三太 どんく買かひに來きますぜ。どうでもお前まへ様さまは、こちの家の福ふくの神かみだねえ。

しづ そなたの言いやる通り、福ふくの神かみなら苦勞くらくをせぬが、私わたくしが廓くわくを出でても、まだまア身請みうけの殘金ざんきんが濟すまぬので、こちの旦那だんなもいろくくと心遣こころづかひばかりあるとこへ、わたしの弟おとの才三郎さいざうらうが浪人らうじんなして掛かり人ひと、今朝けさ足あししに行ゆきやつたが、もう今いまに見みえる時分じぶん、お茶ちやの支度しだくでもしておかうかいの。

三太 そりやあ私わしにも出で來きるが、今言いまはんしたお前まへさんの事ことで金かねが濟すまないから、旦那だんなさんも案あんじると

言はんすが、家にお金がなくともひとりでに、たんとできることがあるぞや。

しづ 何ぢやえ、たんとお金ができるとはえ。

三太 ほしけりやあ私が出してやらう。待たんせく。(トあちこち思入、おしづ不思議に思ひ)

しづ え、何をしやるやら、阿房なことをして叱られまいぞえ。え、もう、しんきな、お茶の支度で  
もしませうか。

トおしづ奥へはひる。三太は手桶の柄杓を持つて門口の用水の傍へ行き、

三太 聞き及ぶ中山寺の觀世音、無間の鐘をつく時は、海川へはまる所のお金が集まるとのこと、鐘に  
もせよ、石にもせよ、桶にもしろ、志すところは無間の鐘、此の世はひるにせめられても、だん  
ないだんない大事ない。

ト無暗に用水桶の石をたゝきながら、空を見上げて思入。屋體ばやしになり、伊丹屋十兵衛、千木箱  
と泥生婆をさげ、佐野松屋清兵衛女郎屋の亭主、女衞の源六附いて出て来る。

清兵 もしく、そこへ行きなさるは、伊丹屋十兵衛さんではないか。

十兵 (振返つて見て) これは誰かと思つたら、佐野松屋の御亭主に判人の源六さん、お前様は神明様へ  
御參詣でござりますか。

清兵 どうして、そんな優長なことぢやない。お前の所へ来たのさ。

源六 丁度いゝ所で逢ひました、こゝは門中、

十兵 まあ、家へ行つて話しませう。

清兵 そんなら十兵衛さん。

十兵 さあ、おいでなせえ。

ト三人舞臺へ来る。此時三太は無性に柄杓を持つて石をたゞきある。十兵衛これを見て、

十兵 これ三太手前何をしてゐるのだ、お客様がおいでなさるに、家へはひつてお茶でも汲まねえか。

三太 わつしアいま、無間の鐘を撞くところだ。

十兵 えゝべらほうめ、家へはひれといふに。

三太 だんないゝ、大事ない。

十兵 何をいふのだ。

ト叱りつける。此時空より以前の蔭、舞ひさがりて、油揚を三四枚ばらゝと落とし、清兵衛、源六の

頭上へ落ちる、三太あわてゝ、

三太 そりやこそ、金だゝゝ。(ト拾ふ。)

兩人 なに、金とは。

ト兩人 きよろ／＼して、あたりを見廻す。源六すべつて油揚をとつて不思議のこなし、十兵衛は呆れて、

十兵 もし／＼、その油揚は意が落したと見えます、羽織も頭も油だらけ。

兩人 違えねえ、こりやあ油揚だ。

十兵 まあ／＼、内へおはひりなせえ。(トこれにて兩人身體を撫で／＼内へはひる) その油揚を拾つて、何にする。捨てしまへ。

三太 お上さんにやらうと思つたが、こりやあ油揚だから狐に化かされたか。

十兵 しつかりしろ。(ト春中をたゞく)

三太 あい、しつかりした。(トしやんとする。)

十兵 あゝ、ぬけ作め。(ト引寄せて囁く。)

三太 おつと、よし。

ト下の方へはひる。十兵衛内へはひり、門口をしめる。

十兵 おいでそう／＼蔭がさらつた油揚で、お羽織もどこもかしこも汚れました。

清兵 かう十兵衛様、羽織どころか、私か顔をよごしちやあ濟しますめえ。今考へて見りやあ、やつばり鳶にさらはれたやうなものだ。

源六 もしく旦那、そのお腹立は御尤もでござります。まあ私も参りましたから、あなたのお顔の立つやうに談じませう。

ト此時奥よりおしづ小土瓶に茶碗二つ、口取の菓子鉢を持つて出来り、

しづ 源六さん、親方さんも御同道で、ようござんした。

源六 あ、花魁ぢやあねえ、お上さん。すつぱりと、廓詞がぬけましたね。

しづ はい、親方さん、まだ御挨拶もいたしませぬ、どなた様も御機嫌ようおいでなされますか。その節は何かとお世話になりました、今に御恩は忘れませぬ。まあお茶一つ。

清兵 あい。

トおしづ兩人に茶を出す。兩人とつて、源六思入あつて、

源六 ときに十兵衛さん、今日はちつと野暮な事を言ひに來ました。ほかのことでもない、こゝにゐる勝山さんの身の代、聞けばお前の主人の家の娘、是非身請がしたいといふ故、忠義な事實銘な人だと思つたから、この親方様へもだんくお願ひ申して、二百兩の所を百兩金取つて殘金百兩貸

して上げたも、こりやあほんの男づく、達引といふものでござりませぬ。かう今までべん／＼と引張るわけぢやアありさうもねえもんだ。お前方は人を馬鹿にしなさんのかえ。

ト角日だつて言ふ、十兵衛思入あつて、

十兵 もし源六さん、お話しづくのことだから、御損亡をかけるやうな私でもござりませぬ、商人の店先、私も大なり小なり暖簾をかけてゐる眞面目な酒商賣、不義理を致すやうなことは、天道様をかけて致すことぢやあござりませぬ。問屋の仕切り何やかや、手延びになつてお氣の毒でござります。

ト言譯に困るこなし、おしづ以前よりふさいだる思入あつて、

しづ 親方の手前を思へばこそ、源六さんもかれこれとおつしやるものゝ、實にこちらでも朝夕苦勞致してをりますること、どうぞお前のおとりなしで、いつ幾日といふ手堅いことにいたしましたら、私の心積りもござりまする。な、親方さんえ。

清兵 (煙管の吹殻をたゞきなながら) 源六をこゝへおいて言ふぢやあねえが、奉公人を女護の島ほど抱へて、おく佐野松屋清兵衛、今まで勝山がことに何一つ不足もなし、第一勤めがいゝから、とてものこゝとに好いた所へ、やるのが双方によからうと思ふから、十兵衛さんに身請をさして丁度半年、私や

あかう見えても涙もろいが、又錢金のことなら容赦も勘辨もねえことは、此の勝山がよく知つてゐる。その又おれを不義理にするとは、勝山といひ源六も、日先の見えねえものぢやあねえか。源六 十兵衛様、あの通り親方の言はつしやることを、無理が無理でねえか、黙つてゐちやあ分からねえわな。此の百兩の金も、相手が十兵衛だ、石に判だと思ふから私が請合つて、貸して上げた百兩、今日の明日のとべんくんだり、旦那へ對して私が中途でやりくつたやうに思はれて、痛くねえ腹を探られるやうなものだから、旦那をお連れ申して、野暮に大きな聲をしても、白い黒いを分けにやならねえ。

十兵衛 だんくのびくになつたは、申譯もない御無沙汰、かれこれ申したところが、御承知もなりにくうござりませうから、どうぞ當月晦日まで。

清兵衛 いや、その晦日も十四日も聞き飽きた、安請合に請合つたとて、大まい百兩といふ金がさうちよつくらにできるものかな。吉原から小三里の道を歩いて来たからは、十兵衛様手短にかうしやせう。お前の金ができるまで、勝山を家へ預からう。金ができたらいつ何時でも、駕籠を持つて迎ひに來なせえ。それが手附かすの話だ。

源六 なるほど、こりやあ近道だ。十兵衛さん、その積りにしやせう、それがいゝ。

ト源六立ちかゝるを十兵衛思入、おしづ兩人の間へほひり思入あつて、

しづもししくそのやうにおつしやらすと、又御相談のいたしやうもござりまする。親方さん、源六さん、廊へ行けなら参りませうが、どうも今とおつしやつては、なあ十兵衛さん。

十兵衛 そりやあもう耳を揃へて百兩の、金がなければ連れて行かうとおつしやるが、さう自由にもなり  
ますまい。

清兵衛 そりや又どうして。

源六 何故ならない。

十兵衛 さればでござりまする。身の代金は二百兩、内金百兩お渡し申してござりますせ。

清兵衛 その百兩取つてあるから、勝山をこゝへよこしたではないか。

十兵衛 さゝ、それぢやによつて、十兵衛がしつかりと傾かりました。

源六 して後金の百兩を、べん／＼だらりと引つばるから、玉を連れて返るのに、それでもこつちが誤  
りか。

十兵衛 誤りどころか、得手勝手といふものだ。

兩人 そりや又何故に。

十兵 玉を引上げ、渡した金の百兩は。

兩人 や。

十兵 清兵衛さん、あまり勝手がすぎませうぜ。

源六 もしく親方、こいつあたいぶ手重くからんでまゐりませうぜ。

清兵 源六、何もかも胸にある、百兩位はほしきやア今でも返してやらあ。

源六 そんなら金子を。

清兵 佐野松屋の清兵衛、百や二百の端金は、ちよつと出るにも御所持だわ。(ト胸巻より包金を出し、)

これを取つたら言分あるまい。

十兵 ありますね。

兩人 まだあるかえ。

十兵 半年あまりの雑用ざらひ、お前の出やうがそでないから、耳を揃へて貰ひたい。

清兵 どういへばかういふと、横つたふしに出かけたな。

十兵 何もよこしまは申しません、あまりと言へば因業故。

源六 なに因業だえ、因業でも巾着でも、取らにやあならねえ身請の金、耳を揃へて請取らにやあ、代

官所へ引立て、砂利を摺んで恐れながらの根くらべ。

清兵 ぐづく言はずと、引立てる。

源六 さあ、勝山さん、歩みなせえ。(トおしづへ手をかけるを、十兵衛へだてよ)

十兵 さうはならねえ。

兩人 ならずば金か。

十兵 さあ。

兩人 引立てようか。

十兵 さあ、それは。

兩人 金を濟すか。

十兵 さあ。

三人 さあくく。

ト詰めよつておしづを引立てにかゝる。この以前より尾花才三郎下手より出で門口に窺ひみて、この時つかくと内へはひり源六を突廻し、清兵衛をへだてよ、

才三 其方達は内儀を捉へて、こりや何とする。

源六（呆れて）見りやあお若いお侍。

清兵 何とするととは知れたこと、貸した金の濟方に、私が所へ連れて行くのさ。

源六 それを不承と思ふなら、百兩といふ金を立てなせえ、よもやお金はむづかしさうだ。

清兵 大小さしたお侍、めつたに口出しはできませんまい。

才三（思入あつて）いかにも、金子遣はさう。

兩人 そりや、あのまことに。

才三 後とも言はず、唯今呉れう。

兩人 えゝ。（トびつくりする。才三郎懐中より包金を出し）

才三 掛矢形の封印なれば、中改めて受取りやれ。

清兵 まことに百兩。見ず知らずのあなたからは受取りにくい、なう源六。

源六 左様々々、十兵衛さんも男なら、百兩出して貰ひませう。

才三 こりや町人、身が所持の金子は不通と申すか。

兩人 さうではなけれど。

才三 然らば金子受取つて、宛名は十兵衛、請取が申受けたい。

清兵 さうおつしやることならば、唯今請取を認めませう。それ源六、(ト矢立を渡す。源六、頼人より紙を

出し、さらく)と認め清兵衛へ渡す。清兵衛讀んで紙入より實印を出し、三判押しして)へい、身請の殘金

百兩の請取、お渡し申します。これで金子は濟みました。(ト金を懐中する)

源六 長居はおそれ、旦那、急いで汐留から船としませう。

清兵 むら田がおれの馴染だ、源六行かうか。

源六 皆さん、おやかましようござりました。(ト兩人門口へ出る)

才三 兩人待て。(ト思入あつて言ふ)

源六 へい。御用でもござりますかえ。

才三 殘金百兩相渡せば、此方は身請の客ぢやぞ。

兩人 へい。

才三 その身請の客の店先で、遊女屋渡世なすものが、立騒いで濟まうと思ふか。

兩人 へい。

才三 そのまゝにては歸さぬぞ。(トきつと言ふ)

兩人 え。(トびつくりしてへたる)

才三 と申す所なれど、言はゞ日出度き身請故、このまゝに差し許すぞ。

兩人 それははけつこうな思召し。

才三 えゝ、きりくゝとうせをらう。

兩人 へいくゝくゝ。(トあわてゝ門口へ出て)

清兵 やれくゝ嬉しや、得手かういふ終ひは酷い目に逢ふものだ。それをこのまゝ打たれもせず、

源六 濡手で百兩しめるとは、もし旦那、お禮がしつかりござりませうね。

清兵 此の禮はお定まり、五分の禮だ。

源六 いや五分とは有難い。

清兵 その禮はこれだ。(ト以前薦のさらひし油揚をつまんで出す。)

源六 この油揚が禮とは。

清兵 はて、五分(昆布)に油揚といふわ、

源六 えゝ、油揚とは一兩かえ、あんまりひどいね。

清兵 それぢやあいつを何にもやらす、五分たゞ(昆布鱈)とはどうだ。

源六 いや、悪い洒落だ。はゝゝゝ。

ト兩人足早に花道へはひる。十兵衛後を見送りて、

十兵衛 若旦那、何とお禮を申しませうか、思ひがけない大まいの百兩、あなた様より拜借致しまして、

面目次第もござりませぬ。

しづ 兄弟とはいひながら、今は流浪の才三殿、お前の金を借受けては、どうも私が濟まぬわいな。

才三 姉者人、その心遣ひは御無用になされませ。今更いふに及ばねども、お前が幼いその時に、氏神

の祭禮の折から勾引されて苦界の勤め、故主の娘と十兵衛殿が身請なしたる姉者人、後金の催促に詮方盡きたる今日の手詰、見るに忍びず用立てたる百兩は、紛失なしたる寶の茶入詮議の爲めの用意金、まだ手がりのあるではなし、その心遣ひは無用になされませ。

しづ 兄弟の義理を思ひ、その志しは嬉しいが、今にも寶の詮議して在所知れなば金の入用

才三 それちやというて現在の、姉者人に二度の勤めがさせられませうか。寶は身のさし合せ、一寸延びれば廣い世界、それがしとても流浪の身の上、殿へお髪を上げたを幸ひに、今より町髪結と姿を替へ、竊に寶の詮議をなさん。もし手がりのことあらば、その時必ず十兵衛殿。

十兵衛 其の儀はお氣遣ひ下されませぬ。私も後金の百兩の心當りのないではござりませぬ。其の仔細と申しまするは、元私は大津の生れ、親共は身貧な暮しの黒木賣り、兩親ともに歿りし後弟を連

れて御當地へ立越へ、私は親旦那様へ若黨奉公、弟の彦三は材木町の白木屋へ養子に遣はし、私は朋輩どもと口論いたし御暇を願ひしに、有難い親旦那の御助力にて酒屋渡世の身がら一身、稼ぎ溜めたる百兩にて、身請なしたる女房が後金の心當は、以前親どもが召使ひましたる藤助と申す者、唯今にては京都にて相應なる暮しをして、書狀の便りもいたしますれば、それへ頼つて百兩の金借用いたす心積り、兩三日の中には上京致さんと存じましたが、直に明朝出立致しませう。これおしづや、明日早く旅立するから、留守を必ず頼むぞや。

しづ そりやもう家のことは必ず案じなさんすな、然し旅の用意もなければ、明日といふのもあんまり急で、せめて二三日支度して、曆を選んで立たしやんせいなあ。

十兵 いや、もし寶の手が、りが急に知れまいものでもなし、思ひたつたが最上吉日、是非とも明日は早く旅立ち。

才三 そんならどうでも、立たつしやりますか。道中無事に戻られるやう、神明様へ參詣して來ませう。  
(ト下手へ來て、) 然し、あんまり性急で、なれぬ旅では。

ト此の時奥より三太丸盆に茶碗を三つ載せ持つて出る。

三太 もし、なれた風味の甘酒、祭り祝ひに一つあがらんかえ。(ト三人の前へ出す。)

十兵 お、よく氣が附いた。ひとよ酒といふからは、今宵を直に立祝ひ。  
しづ 暫しの別れ、奥でゆつくり。

三太 うまいなく。

十兵 三太、おぬしも呑んだか。

三太 お初穂をやらかしました。

十兵 すばやい奴め。(ト思入あつて)ほんに、才三様へおみやげを。(ト以前の千木箱を出す。)

才三 千木箱は飴でござるか。

しづ 雨では今宵は、

才三 定めし、しつほり、

十兵 旅の支度を、

三太 立振舞に、

ト三太十兵衛の前へ顔を出す。十兵衛頭を打つ。才三郎は門目を明ける。これを木の頭。

才三 降らねばよいが。

ト才三郎空を見上げ十兵衛頭へ手をあげる。おしづ十兵衛の手を持つて顔をそむける。これをキガマ、

賑やかなる唄にて、よろしく、

ひやうし幕

## 二幕目

芝片門前文彌内の場

〔役名〕座頭文彌、白木屋彦三、坊主小兵衛、筑田喜藏、髮箱才三郎、佐野松屋清兵衛、女術源六、綿屋の若い者與助、座頭でく市、こぶ市。文彌母おりく、文彌妹お菊、同妹おいち等。〕

(文彌内の場)

本舞臺一面の平舞臺、所々へ瓦をおきしこけら葺の屋根。正面三尺の備壇、これ

に鴛鴦切の袱紗打敷にかけあり、此の脇一間反故張りの障子。下手は折廻し鼠壁、上方葺下のし下屋、いつもの所門口。下の方後へよせて裏長家の雪隠。下座の前黒塀、門口にもみりやうじ鎮治灸點、文彌といふ木札。總て芝中門前文彌内の體。こゝに文彌母おりく、世話婆の打扮にて綿を摘みある。傍に綿屋の若い者與助煙草を喫みある。下手に文彌妹おいち、素麴櫃の上にて手習をしてゐる。此の見得稽古唄にて幕明く。

りくもし與助さん、この十袋は明日まで待つて下さりませ。

與助 あい、明日中てようござります。摘獲は此間のと一緒に七百五十持つて来ました。

ト財布より錢を出しておりに渡す。  
りく これは有難うござります。

與助 おいち坊、よう手習の精がでますの。

いち いえ、私や一向精はでませぬわいな。

與助 いや、いつ来て見ても、よう精が出ます。

りく 仕合せと手習ひが好きでござります。お恥しいことながら私は手習ひが嫌ひで、一字一點讀めませぬ故、せめて子供等には手を書かせたり、姉めも小さい時から仕込みましたお蔭には、人なみには書きます。親の慾目かおいちめも、年よりは良うできますやうに思はれます。

與助 できるとも、なか、十歳や十一で、このやうに書くものはない。

りく 有難うござります。これ、與助さんがお褒めなさる、精を出さねばならぬぞや。

いち あい、よく精を出しますから、どうぞ私にもお金さんのやうな、お机買うて下さるせいな。

りく お、春になつたら、よいのを買うてやらうわいの。

ト花道より小兵衛出來り門口へ來て、

小兵 婆アどん、今歸つた。(ト内へはひる。)

りく 何なんと思おもうて歸かへらしやつた。

小兵 何なんと思おもつて歸かへるものだ、おれが家うちだから歸かへつて來きたのだ。

りく あんまり、おれが家うちくというて下くださんすな。こゝの家うちは文彌ぶんやの名前なまえ、何なん一つ持もつても來こえずに、

あんまり大たいそうなことを言いはしやんすな。

小兵 言いはねえでどうするものだ、十年ねんじゅう此方こなた餓鬼がきめらの足手あしでを延のばした其その上に、うぬにも暑あついめ寒さむい

めさせず、餓うじいめをさせねえのは、誰たれが蔭かげだと思おもやあがる。

りく えゝもおいて下くださんせ、そりやこつちで言いふことぢや、賃綿ちんわた摘とんだり人仕事ひとしごとしたり、夜よの目めも窸さ

ずに精出せいだして、子供こどもを始めはじめこなたまで、私わしが過すごしておいたのぢやわいな。

小兵 僅わずかな仕事しごとを鼻はなにかけて、亭主ていしゆの箔はくを剥はがしやあがるな。

ト小兵衛鐵砲てつぱう箆へらより秤ばかりを出だし、これを振ふ上げ打うたうとするを與助よすけ留とどめる。

與助 これはしたりどうしたものだ、若い者わかものぢやアあるめえし、よい年としをしてお互たがひに、夫婦ふうふ喧嘩けんわは

ともない。もうよい加減かけんにしなせえな。

りく いえもう、人様ひとさまの笑わらひ草ぐさになるのが厭いやでござります故ゆゑ、言いふまいと思おもひますけれど。

小兵 言いひたくなくば何故なぜだまつてゐねえ、この梅干婆うめぼしばいアめ。

りく なにを、この藥鐘親にめ。

與助 これさく、もうよいかげんにしなせえと言ふに、この子が怖がつてゐるわな、さういつまでも言つてゐられると、私も歸るに歸られねえ。中にはひつた不承に五合買はうから、それで丁簡して下さい。

りく いえく、お前さんにお錢を遣はしましては、濟みませぬわいな。

與助 なにさ、たんとは買はない、酒が五合に肴が二百、兩方てたかゞ一朱、(ト財布より一朱を二つだし  
小兵衛の前へおき) これで了簡して下さい。

小兵 こんなことをなすつちやあお氣の毒でござります、併し折角の思召し、お貰ひ申しておきます。  
(ト金をいたゞき) 婆アどん、中なほりにお角力酒屋へ行つて、何ぞ見つくろつて来て下さい。

りく え、も忙しいのに、よく人を遣つてからに。(ト言ひながら味噌澁を持ち行きかける)  
與助 どれ、そこまでいつしよに行かう。

小兵 これは與助さん、とんだ御厄介になりました。

與助 もう喧嘩は止しにせえよ。(トおりく與助門口へ出て) いや、困つた代物だ。  
りく あれだから喧嘩は絶えませぬ。

與助 尤もなことだ。さあ行きませう。(ト兩人花道へはひる。)

小兵 よくつべこべとしゃべりやあがる婆だ。コレお市爛のできるやうに、奥へ行つて火を起して  
いてくれ。

いち あい〜。

ト稽古唄になり、おいち奥へはひる。花道より筑田喜藏、浪人装にて出來り、

喜藏 文彌といふ座頭の家が、小兵衛の家だといふことだが、どうぞのてくれ、ばよいが。(ト本舞臺一  
來り門口より内を覗き、がらりと明けて、) 小兵衛家にゐるか。(トブツとはひる。)

小兵 喜藏様か、びつくりした。

喜藏 此間から突當てようと、手前が後を追つて歩いた。

小兵 何ぞ用でもあつてかえ。

喜藏 用も用、大用だ。(ト上手へ住ひ、) 外でもない、此間手前に頼んだ彼の品は、幾何の質に入れたの  
だ。

小兵 彼の品に何かえ、お前の盗んだ茶入のことかえ。(ト大きな聲でいふ。)

喜藏 あこれ、しづかに言へ。

小兵 あの花形はながたの茶入ちやいれなら、百兩りやうに置きおした。

喜藏 なに百兩りやうにおいた、いや太え奴やつだな。持主もちぬしに半金渡はんきんわたし、どこの國くににか五十兩上借りやうじやうかりりをする奴やつがあるものか。

小兵 ないとは言いはねえ、こゝにありやす。(ト煙草たばこを呑のみながら、煙管きやんにて鼻はなをたたく。)

喜藏 いけしやあくとした奴やつだ、どうしてくれう。(ト喜藏きざう悔くやしき思入おもひいれ)

小兵 どうともお前の勝手まへかたにしなせえ、堅氣かたぎな者の代物しろものなら僅わず一分ぶつの上借うよかりでも、言立いひだてによりやあ盗人ぬすびと同然ぜん、それとこれとは違ちがひやす。而も佐々木ささきの家いへの重寶ちゆうほう、直足ちよくの附つく代物しろものを承知しょうちで質しちに置おくからア、まさかの時ときは一緒しよに行く氣き、抜き損そこなやあ首仕事くびしごと、五十兩りやうぢやあ安いものだ。

喜藏 すりや、盜物ぬすもの故高ゆゑたかをくり、上借うよかりをしたといふのか。なるほどこれは悪い奴わるやつだ。(ト佛壇ぶつだんの袱紗ふくさを見て、)あみの佛壇ぶつだんの打敷うちしきは、茶入ちやいれを包つんだ袱紗ふくさだが、何なんで家うちへ残のこしておいた。

小兵 あれを附つけてやつたところが羽織はおりの紐ひもと同じおなじことで、百ももにもふめやあしねえ故ゆゑ、そこで婆おやアの氣き休やすめに、打敷うちしき代がはりにやつたのき。

喜藏 流石さすがは年としの功こうだけあつて、百ももの錢ぜににも抜目ぬけめはないな。仕方しかたがない、五十兩りやうはきれいにわれにくれてやるが、おれも酒さけと假宅かりたくで、此この頃ころはちやんころなし、改あらためて十兩りやうばかり小遣こづかひを貸かしてくり

やれ。

小兵 そりあありせえすりやお貸し申しますが、上借をした五十兩は、半月ばかりに取られてしまひ、二朱の金にも困る仕儀、丁度幸ひお前を玉に、十か二十になる仕事があるが、半口乗つてくんないさらねえか。

喜藏 そりやあ金にせえなることなら。して、その仕事は。

小兵 家の婆アが盲人めに官位を取つてやりてえと、喰ふものも喰はねえで溜めた金が十か二十、私にかくして出来た様子、盲人を騙して引出す積りだ。

喜藏 どういふ法でその金を。

小兵 そりやあ私が胸にあります。然しこゝで話しもあるめえ。

喜藏 どこぞで一ぱいやりながら、

小兵 あら筋を話ませう。

喜藏 そんなら小兵衛。

小兵 若旦那、さあ行きませう。

ト稽古唄にて兩人下手へはひる。花道より文彌の姉おきく、島田娘の打扮にて、袋に入りし三弦を抱

へ出来る。後より女街の源六つき出来り、花道にて、

源六 もし姐さん、それぢやあお前の家は向うかえ。

きく はい、あれが私の家でございますわいな。

源六 揉み療治の看板の出てる家だね、よし／＼、後方親方を連れて説文に來ます。

きく どうぞ只今も申します通り、廊へ行くといふことは文彌にはおかくし下され、お屋敷へ御奉公に

參ります積りに、おつしやつて下さりませいな。

源六 そりやあ必ず案じなさんな、わつちも親方も俄や茶番が好き故、ちつとは狂言心がありやすか

ら、りやんこの積りで迎ひに來やす。

きく 左様なれば、また後程。

源六 面談いたすでござらう。(ト肩を張つて堅く言ひ、) おきやアがれ、もう侍になるやつサは、、、。

ト源六は引返してはひる。おきくは舞臺へ來り、

きく かゝさん、今歸りましたわいな。(ト内へはひる。)

いち (奥より出來りて、) 姉さん、今日はお早うござんしたな。

きく お、おいち、かゝさんは奥にゐるやしやんすか。

いちいゝえ、かゝさんは父さんのお酒を買ひに、行かしやんしたわいな。

きくすりや父さんが歸らしやんしたとか。えゝも折の悪い 何處にゐやしやんすぞいな。

いち 今までこゝにゐやしやんしたが、見えぬからは又どこぞへ。

きく どうぞへ行つて下さんすればよいが。

トおきく案じる思入、合方にておりく味噌と徳利をさげ、口小言を言ひながら出来り 門目を明け

おきくを小兵衛と思ひて、

りく さあ、呑みたくば呑んだがよい。(ト肴と徳利を突出す。)

きく (びつくりして) 母さん、私やお酒は嫌ひぢやわいな。

りく おゝ娘か、ほゝゝゝ、今親父殿といさかうた故 腹立まぎれに見違うたわいの。これおいち、

親父殿はどこぞへ行たか。

いち あい、内にはゐやしやんせぬわいな。

りく どうぞもう、歸つてくれねばよいが。(トおきくに向ひ) それはさうと、今日はどうぞであつたの。

きく あい、悦んで下さんせ、今日はいつもよりお客も多く、さる旦那様から御祝儀をお貰ひ申しまし

たわいな。(トおきく帯の間より巾着を出し、紙包の金と錢を出す。)

りくそれはよいことをしやつたの、わしも今日は綿の摘貨、草双紙の綴代、何やかやで一分あまりになつたわいの。(ト佛壇の下段より小文庫を出し、内より錢と金を出し見せる。)

きくどうぞ早うお金を溜めて、文彌の官位がとつてやりたい。忘れもせぬ三歳の年、私が抱いてつい落し、石に打附け情なや兩眼ともに潰せしあの子、せめて望みの官位でもとつてやらねばこの姉の、どうも義理が濟まぬわいな。

りくはて、それとても約束事、その替りには若い身で恥も厭はず茶見世へ出て、淨瑠璃を語つて人様に、合力受けるも文彌の爲め、そなたの蔭で今日のを入れ、十五兩餘になつたわいな。

ト文庫の金包へ金を一つにする。

きくとはいへ、座頭の官位でさへ、百五十兩入るとのこと。

りく身貧な暮しで大まいの、

きく金の出来よう當もなし。

りくはて、何としたら、

兩人よからうなあ。(ト兩人思入、おきく思ひ出せしこなしあつて、)

きくこれはしたり、私としたことが、大事の撥を茶店の床几へ忘れて来たが、かゝさんお前大儀なが

ら、ちよつと行て来て下さんせいな。

りくお、あの撥を失うては、明日から生業の障りになる。つい一走り行て来ようわいの。

きくついでながら身替りの地藏様へ、私の替りにお参り申して来て下さんせいな。

りくおい。歸りに神明前の泉市様へ寄つて、草双紙をとつて来る程に、ちつと遅うならうわいの。

ト言ひながら門口へ出る。

きくそんならゆるりと、行てござんせいな。

りくどれ、行て来ようわいの。

ト四つ竹節になり、おりく花道へはひる。おきく文庫を佛壇の下へしまふ。又稽古唄になり、花道より髪結才三郎手拭の片襷下駄がけ、鬘盥をさげ髪結の打拵にて出来り、直に門口へ来て、

才三をばさん、お家かね。(ト門口を明ける。)

きくおや、髪結の才三さんかえ。母さんは今愛宕下まで行きましたわいな。

才三さうでございますか。(ト内へはひり)おきくさん、御面倒ながら、どうぞ油手拭を洗濯して下さ

りませ。

きくはい、(かしこま)畏りましたわいな。

才三 嘸油染みてお困りでござりませうが、一人者の悲しき洗人がござりませぬから、お頼由します。

きく ほんにお一人では嘸お困りでござりませう、早うよいお上さんをお持ちなさんせいな。

才三 いくら持ちたくつても、誰と女房になるものがござりません。(ト佛壇の袷紗へ目を附け思入あつて) もしお菊さん、ぶしつけなことを言ふやうだが、お前さんのお家に合しては、あの佛壇の打敷は立派な切でござりまするが、ちよつと拜見いたしたうござります。

きく あい、これでござんすかえ。(ト袷紗を取つて見せる)

才三 (裏表を見て) こりやあ結構な品だ、表は古代の鴛鴦切、裏は燃えたつ飛龍紋、まさしくこれは、

(ト思入あつて) 異なることをお聞き申しますが、この打敷は久しくお家にござりまするか。

きく いえ、その袷紗は此間父さんが、どこでやら買うて來なさんしたのでちやわいな。

才三 むう、して親御さんの御生業は。

きく さあ、父さんの生業は。(ト言ひ兼ねる。)

いち 紙屑屋でござんすわいな。

才三 へ、い左様でござりまするか。こりやあ結構な品だ、大切になされませ。(トおきくに返し) 左様な御面倒でも、早く洗つて下さりませ。

きく 直すぐに洗あらつてあけますわいな。

才三（門口へ出て、）はい、おやかましうござりました。（ト合あひか方かににて、花道はなみち附つけ際ぎはまで行ゆき思おも入ひいれあつて、）はて心こころ得えぬは今の打うち敷しき、世よにも稀まれなる鴛うしどり鴦ぎせ切きは紛ふん失じつなせし花形はながたの、まさしく茶ちや入いれを包つみし袱紗ふくさ、此家このやの内うちにあるといふは、もしや寶たからの盜たう賊ぞくが。（ト振ふり返かへり見みる途端とたんに、おきく門口かどぐちを明あけ見みて、）

きく まだ、おいでなさんせぬか。

才三 いえ、唐櫛たうぐしの掃さう除じゆをしてゐました。どれ、もう一精ひとせい出だしませうか。

ト稽古唄けいこたになり、才三さい郎らう合が點てんの行ゆかぬ思おも入ひいれにて考かんがへながら花道はなみちへはひる。おきく後あとを見送みおくり門口かどぐちを閉しめ、

きく これおいち、そなたにちつと頼たのまにやならぬ事ことがあるわいの。

いち 姉あねさん、わたしにお頼たのみとはえ。

きく さ、そなたに頼たのみは。（トあたりへ思おも入ひいれあつて、）奥おくでとつくり話はなさうわいの。

いち そんなら姉あねさん。

きく 妹いもうとおじや。

と寺鐘てらかねになり、おきくおいちの手てを引ひき奥おくへはひる。寺鐘てらかねを打うち上げ床ゆかの淨瑠璃じやうるりになる。

世の中の善きも悪しきも見えぬ眼に、突く杖の木は直なれど、心のがみし座頭の坊、孝子文彌を右左り、なさけ容赦もあられなく、

トこれへテンツ、を冠せ、花道より座頭文彌下駄にて杖を持ち、これをでく市こぶ市の二人同じく座頭の打扮にて、文彌を引立て、出来る。後より白木屋彦三羽織着流し町人の打扮にて、捨ぜりふにて留めながら出来り、花道にて、

こぶやい、汝は憎い奴だ、市名も取らぬ分際で四分の者に突きあたり、ろくすつほうの詫もせず、  
でく盲人の法を知らぬからは、誰が弟子だか師匠へことわり、きつと仕置をせねばならぬ。

文彌 そのお腹立は御尤もでござりますが、突きあたりしはあなた方より。いえ、私の不調法、幾重にもお詫いたしますほどに、どうぞ御了簡なされて下さりませ。

彦三 どういふ譯か知らないが、最前から二人して可哀さうに打ち打擲、もうよい加減にお前方も了簡しておやんなさいな。

こぶ え、この人は大きにお世話な、仲間の法ですることだ。素人の知つたことおやあない。  
でく了簡しろならしまいものでもないが、たゞ了簡がなるものか、いけ馬鹿々々しい。

兩人退かつしやい。

ト兩人 又杖で打つを、彦三留めて、

彦三 これさくお前方もさりと執着い人達だ。いかに眼が見えぬとて、このひがひすな座頭殿をめたむしやうに打鼓き、ひよつと打ちどこでも悪くつて、もしものがあつたなら、假令官位のある身でもその分には濟みさうもないもの、人の留めるその内によい加減に了簡しなさい。わしも中へはひつて酒の一つも進ませせう。どうぞ了簡して下さい。

酒と聞いているは二人とも、元より眼のなき座頭の坊。

こぶ そりや、何と言はつしやる、わしらが了簡することなら、お前が酒を買はつしやるとか。でく どのお方が知らないが、さりと眼の明いた御挨拶、お前に免じて、

兩人 了簡しませう。

彦三 すりや了簡して下さるとか、それは早速忝けない。(ト紙入より金を出して一分紙に包み) 少しばかりだが、これで歸りにいつばい呑んで下さりませ。(トでく市に渡す。)

でく (探り見て) これはく有難うござります。こぶ これく、いくらあるく、りやんこかく。でく どうしてく、額だわく。

こぶ なに額だ、どれく。 (ト探り見て、) こいつは話せるな。  
でく 晩に橋向うへ泊りに行かう。

こぶ そのことく。こりやあ旦那有難うござります。

彦三 何の禮に及ぶものか、さあく早く行かつしやい。

でく はいく。何とこぶ市、見ず知らずの者に一分出して下さるとは、このやうな旦那はあんまりな  
いの。

こぶ はりとは、氣の利いた旦那様だ。

〽慾に心のくら闇も、金の光りに座頭の坊、杖突きたて、急ぎ行く。(ト兩人花道へはひる。)  
〽後を見送る彦三に、文彌はおづく前へ出で、

文彌 これはく何れの旦那様でござりますか、あなたさまのお蔭にて、今の難儀を脱れました。え、  
有難うござりまする。

彦三 さてく祝儀座頭といふものは、意地の悪い憎いもの、めつたむしやうにお前を打つたが、どこ  
ぞ怪我でもしはせなんだか。

文彌 いえく、どこも何ともござりませぬ。

彦三 いやく、だいぶ身體に泥がついてある。

〽衣類の砂を打拂へば、(ト彦三文彌の砂を拂ひやる。)

文彌 これは憚りでござりまする。もうよろしうござりまする。

彦三 さうしてお前の家は、この近所かえ。

文彌 はい、この向うが私の家でござりまする。

彦三 なるほど、採療治の札が出てゐますの。

文彌 左様でござりまする。いやも穢うはござりますが、ちよつとお立寄り下さりませ、母にお禮を申さしたうござりまする。

彦三 なに、その禮には及ばぬことだが、お前の籠相でないことを、家の衆に話して聞かさう。

文彌 左様ならお立寄り下さりませ。どれ、御案内いたしませう。

〽勝手覚えし我家の門、文彌は彦三伴ひて、(ト文彌本舞臺へ來りて、)

母さん、今歸りました。

〽聲に姉妹立ちいで、(ト奥よりおきくおいち出來りて、)

きく お、文彌戻つたかいの。

いち 兄さん、だいぶおそうござんしたな。

文彌 姉さん、妹、して母さんは。

いち 今愛宕下まで行かしたわいな。

文彌 お、さうであつたか。さ、旦那様、これへお通り下さりませ。

トこれにて彦三内へはひる。

きく これはどなた様でござりますか、ようおいでなされました。

彦三 御免なされませ。(ト上手へ通る。)

〽お菊はふつと彦三の、とりなり見ればしとやかに、山ありけなる當世風、てもよい殿御こ

見とれるる、文彌はそれと氣も附かず、

トこの内彦三は上手へ住ふ。おきくは彦三を見てうつとりと見とれてゐる。

文彌 (思入あつて)これ姉さん、あなたにお禮を申して下され。今家へ歸る道にて、四分の衆に突當ら

れ、おのが鹿相をこつちへ塗りつけ、市名をとらぬ身を以て何でわしらに突當つたの、詫の仕や

うが悪いのと杖をもつて打ち打擲、酷い目に逢ふ所をこの旦那様の御挨拶で、無事に歸つて來ま

したほどに、ようお禮を申して下され。

きくそれはまあ、何と御禮を申さうやら。(ト彦三をちつと見て恥しき思入)あなた、有難うござりますわいな。

彦三 いやも、同じ盲人のその中でも、祝儀座頭は檢校や勾當なぞが貸金の催促に歩く故、意地の悪い者とは聞けど、あまりと言へば無理難題、見兼ねてわしが中へはひり、やうく濟まは濟ました。が、見なざる通り着物もよごれ、綻も切つたれど、必ずこつちの悪いのではない程に、そのことを話さうと、それ故一緒にまゐりました。

きくそれはまあ御親切に、有難うござりますわいな。

文彌 これく姉さん、まだその上に四分の衆に、御酒代迄もあなた様が、お出しなされて下されました。母さんがお留守故、姉さん、お前二人前、ようお禮を言うて下さりませ。

きくあいぐ、お禮が申したうてならぬわいの。これくおいち、そなたもお禮を申しやいの。

いち あいぐ。

きく重ねぐのあなたの御恩、有難うござりますわいな。

文彌 有難うござります。

いち 有難うござりますわいな。

きくまだくそのやうなことでは濟まぬ。あなた有難うござります。

文彌 いやも、有難うござります。

トおきく文彌あちこちして、とゞ兩人向ひ合ひ、

兩人 え、有難うござります。ト互ひに辭儀をする、おいち見て、

いち 兄さん、そりや姉さんぢやわいな。

きくほんに、文彌か。

文彌 姉さんであつたか、は、ムムム。

〽これも他生の縁ならめ、

彦三 いやも、そのやうに禮を言はれては、逆上せ上つてなりませぬ。

文彌 これおいち、お茶でも上げぬかいの。

いち あいぐ。(トおいち茶を汲み、茶臺へ載せて出すを、)

きくいんぐ、私(わたし)が上げるわいな。(ト茶臺をとつて恥かしさうに)あなた、お茶を一つお上りなされま

せいな。

彦三 いやも、必ずかまうて下さりますな。(トこの内文彌あたりを探り、煙草盆を探り取つて)

文彌 これくおいち、お煙草盆をあけぬかいの。

いち あいく。(トおいち取つて出さうとするをおきく引きとつて)

きく 私があけるわいの。はい、お煙草をおあがりなさりませいな。

彦三 え、も、構うて下さるなといふに。

いち (おきくに隠して、そつと茶を汲みて) はい、お茶一つお上りなさりませいな。(ト茶を出す)

彦三 (取つて) これはく、まだありますのに。

きく (また茶を汲んで) も一つおあがりなさりませいな。

彦三 またお茶でござりますか。もうくこのやうには呑ませぬ。

きく それでは私のは、お厭でござりますか。

彦三 いえく、さうではなけれども。

文彌 これはしたり姉さん、もうよい加減になされませ。彼方が御迷惑の様子ぢやわいの。それはさう

と旦那様、母が歸られましたならば是非お禮に上りませうが、あなた様はどちらさまでござります

か、お名前を承りたうござりまする。

彦三 それはいと易いことなれど、なにこれしきの事に、お禮を受ける覺えもなければ。

きく いえくゝあなたのお名前を、わたしもちつと。どうぞ、お聞かせなされて下さりませいな。

彦三 そのやうに言はるゝを、言はぬのも却つていかゞ、わしは木村木町の白木屋の養子、彦三といふ者ぢやが、必ず禮には来て下さるな、却つて迷惑しますわいの。

文彌 すりや、あなたは材木町の、白木屋の若旦那、

きく 彦三様とおつしやりますか。

トおきく索麩櫃の上の手習草紙へ彦三の名を書留める、彦三もおきくへ思入まつて、

彦三 いや先刻からよほどの間、得意まはりがおそなはれば、もうお暇いたしませう。

文彌 でもござりませうが今暫時、何はなくともお養花でも。

彦三 いえくゝ、先刻から何ばいもくゝ、お茶は御馳走になりました。

きく 左様ならば、もうお歸りでござりますか。

彦三 これを御縁に、この邊へまるつた折はおたづね申さう。

文彌 どうぞ、お立寄りなされて下さりませ。

ト彦三立上る、おきく本意なき思入、おいち彦三の草履をなほし、

いち はい、お履物。

彦三 これは憚り、(ト彦三門口へ出て、おきくへ思入あつて、) あ、あたたら花をば。

きくえ。

彦三 いやさ、話しにその中まるりませう。

△心残して彦三は、見返りく歸り行く、

ト彦三思入あつて行きかけ、振返りおきくと顔見合せ、心を残して花道へはひる。

△影見ゆるまで延上り、見送る姉を見えぬ目に、知らぬ文彌はこなたへ向ひ、

トおきく門口の柱へすがり、うつとりと向うを見送りある。おいちば煙草盆茶碗を片附けある、文彌

探りく上手へ向ひ、

文彌 もし姉さん、信心はしようもの、今日の難儀を彦三様の、お情故に助かりしも神や佛の皆御利益

何と有難いことではござりませぬか。もし姉さんく、なぜ物を言はつしやりませぬ。

いち もし、姉さんは門口に、今のお方を見送つてゐなさんすわいな。

△言ふに盲目の勘もよく、扱はと悟る弟に、姉はうつとり心も附かず、

ト此中文彌扱は彦三に心有るかといふ思入、おきくは延上り、影の見えぬ思入にて、

きく あゝ姿といひ心といひ、てもまあ、よい男ぢやなあ。

文彌 姉さん、よいとは何が。

きく さあ、よいというたは、お天氣ちやわいな。

文彌 はあ、さうでござりましたか。いや、よいと申せば彦三様は、聲柄といひ、よい男でござりま

せうな。

きく よいとちよく、とんと錦繪に書いた、彦三郎のやうちやわいの。

文彌 それでお前も。

きく え。

文彌 いや、彦三郎は最辰でござりますな。

きく いくら最辰に思つたとて、私などが及はぬこと。殊には廓へ。(ト帯の間より書置の文を出し思入)

文彌 や。(ト合點の行かぬ思入)

きく さあ苦勞忘れにせめて一幕、どうぞ見たいものちやわいな。

〽お菊は胸のもつれ髪かき上乍らしほくと、外面に出て妹を招けばさとも走り出で、

トおきく思入あつて門口へ出て、おいちを招く、おいち心得つかくと門口へ出て、

いち 姉さん、何でござんすえ。

〽言ふをおさへて囁けば、

そんなら、さつきの話しの後を。

大きく内では文彌に憚りあれば、何かは隣りで、妹おじや。(ト兩人下手へはひる。)

〽手を引連れておとゞいは、隣りの家へ忍び行く、知らぬ文彌はこなたへ向ひ、  
文彌 もし姉さんく、あゝ又門口ではないか。

〽言ひつゝ、門口探り見て、

こりや門口でもないが、もしや今の彦三様のあとでも追うて行かれたか。おいちやくく、はあ、これも一緒にいたさうな。あゝ人の心は知れねども、彦三様には姉さんもどうやら心のある様子、とはいへあなたは、白木屋の若旦那とあるからは、所詮及ばぬことなれど、男と違つて女の身は氏なうて乗る玉の輿、どういふ縁で末始終願ひの叶ふまいものでもない。私も願ひの官金を早う溜めて官位を取り、最前いぢめた四分の奴等を見返してやりたいものだ。えゝ、見返す暇はなかつたもの、はゝゝゝ、どれ、汚れた着物を着替へませうか。

〽勝手覚ええし戸棚の内、着替への布子取出す、拍子に落ちる黒羽織。

ト文彌戸棚より布子を出す、この時黒の單羽織落ちる、文彌取上げ、

こりやお師匠様から貰うた羽織、(トちよつといたゞき傍へおき、)いや布子より、今日はまだ、溜つた金を見なかつた。どれ、一寸お目にかゝらうか。

文彌はあたりに人のなき、折を幸ひ佛壇より官金取出し算へ見る、身の樂しみも寸善尺魔、喜藏小兵衛のわるものが課し合してあわたゞしく、門の戸開けて駈込む小兵衛、逃がしはせじと喜藏が引附け、

ト此中文彌思入あつて佛壇より以前の文庫を出し、中より金を出し算へながら嬉しき思入。此中下手より小兵衛、喜藏出来り、門口より窺ひ囁き合ひ、わざとバタ／＼と聲音をさして、小兵衛内へ逃込むを喜藏引つとらへて、

喜藏 うぬ、逃けるとて逃がさうか。

小兵 どうか御免なされて下さりませ。

聲にびつくりあたふたと、文庫を羽織でうち隠し、

ト文彌あわて、文庫の蓋をなし、あり合ふ黒の羽織を冠せ、

文彌 おゝ、さういふ聲は、お、親父様ぢやござりませぬか。

小兵 文彌か、面目ないく。

文彌 こりや、どうなされたのでござります。

喜藏 どうも致さぬ、此奴めは身が紙入を抜きとつた。

文彌 え、すりや親父さまには。

喜藏 盗みをひろいだ。

聞くに文彌は小兵衛にすがり、

文彌 これ親父様、何か様子は知らねども、まづは詰つたことあつて貧の盗みでござりませうが、情ないこととして下されましたなあ。

わつとばかりに泣きふせば、小兵衛はわざと哀れけに、

小兵 これ文彌、とんだ權太のせりふだが、常が常故この小兵衛が慾にふけつて盗みしかと、思ふであらうがさうではない、これまで婆や子供等に苦勞を掛けたも取る年に、眼が覺めて見りや面目なく、せめて我身の言譯に、親子三人喰ふものも喰はずに溜めると噂に聞く、その官金の足しにもと思つた所が出来ぬは金、所詮この身はわるものと名をとつたる上からは、お上のお仕置受けるとも、そなたに官位が取つてやりたく、盗めば直に天の網かゝりや繋がるそなたにまで、苦勞をかけるが面目ない。

〽身をかきむしる後悔も、嘘偽りと文彌は知らず、

文彌 すりや親父様には是までに、うつて替つて私を不便と思つて官金の、足しに盗みをなされしとが、その思召しが千萬兩、もうく金子は入りませぬほどに、盗みし品をお返し申し、お詫申してこの後は、さもししいことはふツつりと、思ひとまつて下さりませ。

〽涙ながらに眞實の異見、してやつたりとうなづき合ひ、

ト文彌小兵衛にすがりいふ。小兵衛、喜藏うまいといふ思入。

小兵 おゝそなたの異見に附いて、盗んだ品はお返し申さう。もしお侍様、今お聞きなされる通りの譯せつないことでござりますれば、どうぞお許しなされて下さりませ。

喜藏 盗んだ品を返すことなら、忤に免じて許してくれう。

小兵 それは有難うござりまする。サアお受取り下さりませ。

〽怪しの紙入取出せば、喜藏は中を改めて態とびつくり仰天なし、

ト小兵箱古びし紙入を喜藏に渡す、申を改め見て、

喜藏 さあ、ないわく、金入の中へ入れおいた金子が見えぬが、扱は手早くもこかしをつたな。

小兵 めつさうなことおつしやりませ、こかした覚えはござりませぬ。

喜藏 なに、ないことがあるものか。

文彌 して、その金子はいかほどでござりました。

喜藏 さあ、その金高は、(ト喜藏いくらに言はうといふ思入、小兵衛は二十兩に、へと二本指を出す、喜藏吞込み)

お、入れおいたは二十兩だ。

文彌 え、(トびつくりなす、小兵衛心得思入あつて)

小兵 いえ、金入の中にござりましたは、百足小判と文錢ばかり、金といつてはござりませぬ。

喜藏 お、そのほかに封金にて、高野へ納める祠堂金が二十兩入つてあつた。さあ、きりくと出して

しまへ。

小兵 いくら出せとおつしやつても、盗まぬものは出されませぬ。

喜藏 うぬ盗人たけぐしいと、出さぬといつてその分におかうか。

〽我手の平を打叩き、音を聞かする打擲に、小兵衛は苦しき聲を出し、

ト喜藏自分の手をたゞき、小兵衛を打つ體に見する。小兵衛打たれる思入にて、

小兵 あ、痛い、さう打たれては死にます。どうぞ堪忍して下さりませ。

喜藏 そんなら金を出してしまへ。

小兵 それぢやといて。

喜藏 出さずば、うぬ、まツ二つに。

〽鯉こひし口くちならせば文彌ぶんやはおどろき、

文彌 まあ、お待ちなされて下さりませ。(ト喜藏きざうを留とめ、)これ親父様、命いのちに替かへる寶たからはない、取とつたら取とつたと詭言わびごとして、早はやう金かねをお出だしなされませ。

小兵 さあ、取とつたものなら出だしませうが、元もとより取とらぬ二十兩りやう、達たつて取とつたとおつしやるなら、此こ身のめんばれ、すつぱりと、切きつて疑うたがひお晴はらし下くだされ。

喜藏 む、よい覺悟かくごだ、どれ眞まこと二つにいたしてくれう。(ト喜藏きざう又また錐こ音ねをさせる。)

文彌 あ、これ、お侍さむらひさま様、必ず早はやまつて下くださりますな、私わたくしには義理ぎりある親おや、殺ころさしましては。

ト文彌ぶんや喜藏きざうを留とめる。兩人りやうにんうまいといふこなしあつて、

喜藏 む、義理ぎりある親故殺おやゆゑころしては濟すまぬとあるなら待まつてもやらうが、取とられし金かねはいか致いたす。

文彌 その二十兩りやうは私わたくしから、あなたへお返し申まをしませう。

喜藏 取とられし金かねさへ返かへすことなら、此この方ほうとして事は好このまぬ。さあ、その金子きんすを受取うけとらう。

文彌 たゞ今差いまさし上げますでござりまする。(ト文彌ぶんや思入しりああつて、)もし旦那様だんなさまえ、あなた様へ私わたくしがお願ねひか

ござります、と申すは外でもござりませぬ、唯今上げます二十兩の内五兩ほども足りません、その金とてもおろそかに溜めた金ではござりませぬ。日の不自山な私に官位が取つてやりたいと、お年寄られし母さまがすゝぎ洗濯縫仕事、その片手間に信綿や草双紙の繕さへも廻らぬ絲のきしみがち、見兼ねて姉が茶見世へ出て、一錢二錢の合力受け語る哀れな淨瑠璃も、身につまさるゝ三の切、これもみんな我身故と、眼は見えねども心に見え、こぼるゝ涙吞込みて、吹く笛の音もかれぐに、苦勞身にしむ秋の夜の風も厭はず療治にあるき、親子三人夜の日も寐す稼ぎ溜めても朝夕の煙の代に半なり、残るは僅端錢、昨日は五十今日は百微塵積つて山とやら、やうやう溜めた十五兩、(ト文庫より錢と金を出し、布子と羽織も列べて)足らぬところは私が著替布子に師匠から貰うた黒の夏羽織、薄い世帯のその中で、年月溜めた此の金を親の爲めとて一時に、出すを不便と思召し、これにてどうぞ親父さまの命を助けて下さりませ。もし、お願ひでござりまする。

この年月の艱難も水の哀れや官金に、布子を添へてふし拜む文彌が心ぞいぢらしゝ、  
ト文彌布子の上へ金をおき喜藏を拜む。兩人うなづきて、

喜藏 木綿布子にべんべら羽織、五兩の質には高いものだが、そちが心が不便故、これで命は助け

れる。

文彌 すりやお助けなされて下さりますか、ちえ、右難うござりまする。

〽騙らるゝとも知らずして、悦ぶ我子を尻目につけ、小兵衛はハツと空涙

ト文彌悦ぶ。喜藏金をとつて懐へ入れる。

小兵 はあゝ。(ト泣く眞似をして) あゝ世の中におぬしのやうな、孝行な者がまたとあらうか、親甲斐もないこの小兵衛を親と思つてこの年月、艱難苦勞して溜めた金ををします着類まで、添へて助けてくれるとは、子とは思はぬこれ文彌、そなたの眼には見えまいが、おりや手を合してをがんでるるわいの。(ト文彌の鼻の先へ足を出し、をがむ。)

文彌 あゝ勿體ないことおつしやりませ。親のことを子がするはこりや世間の當り前、それを禮をおつしやつては、却て罰があたりまする。

小兵 なんの、これが罰どころか、をがますにはるられぬわいの。

ト尻を捲つて文彌の鼻の先へ出す。文彌拂ひのけようとして尻を探る。小兵衛はおどろき飛退く。

喜藏 あゝ盗みをひろく人でなしの、子には稀なる親孝行、五兩足らぬもこのまゝに、許してくれるも子のお蔭。(ト喜藏門口へ行く。)

小兵 その子の爲めと盗んだる、紙入故に目串がぬけず、騙りとらるゝ二十兩。

喜藏 どうしたと。(トきつと言ふ、文彌眞中にて喜藏を留め、)

文彌 あもし、何事も私を不便と思つて。

喜藏 むゝ、そちに免じて許してくれる。

文彌 有難うござりまする。

喜藏 あゝ、命冥加な親仁だなあ。

命冥加と言ひ捨て逃足早き門の口、小兵衛は衣類を小脇に抱へ、拔足さし足立出て、

ト喜藏門口へ出る。小兵衛布子と羽織を引抱へ門口へ出て、

小兵 喜藏さん、うまく行きやした。

喜藏 さうよ、思つたよりうまく行つた。

小兵 然し、高野へ納める祠堂金とは、あんまりまるむきであつた。

喜藏 何だ、布子と羽織を持つて来たのか、可愛さうにおいてくれればいゝに。

小兵 どうで官金を取つたからは、もう家へば歸らねえ。四百がものでもとらねえのは損だ。

喜藏 いや、慾どうしい奴だ。

小兵はて、年を取ると誰でもさうだ。

〽始終立聞ぐ文彌はひつくり、(ト文彌何心なく門口にて二人の話を聞きびつくりして)

〽尻邊にどうと倒るゝ文彌、聲におどろき兩人は、後をみ見ずに走り行く。

ト文彌はあきれてどうとなる。外の二人は驚き尻を端折り逸散に花道へはひる。文彌は起上りて、あゝこれ、待つて下され、親父さま。

〽駈出す拍子門口の柱へばつたり仰向に、はすみを打つて倒れしが、起上つて齒齧みをなし、ト文彌つかりと行き、門口へ突きあたり倒れ、起上つて悔しき思入。

えゝ、所詮追ひかけ行つたとて、眼の見えぬ悲しさは鼻の先にゐられても、それと知りぬ身の因果、いかになさぬ仲ぢやとて、あまりと言へば情ない、かういふこと、知らぬ故、母さまや姉さまの、いくせの思ひでやうくと溜めて下された十五兩、斷りなしに遣うては濟まぬ事と思つたれど、義理ある親の命づく、どうも子として見てゐられず、よしや後にて母様にお叱り受けなば其時は、我身の命を捨てゝもと覺悟極めて遣ひし金。あゝ眼かいても見えぬ者をだまし、騙りとらとは親父様、お前は鬼か蛇かいの。

「身をかきむしる悔み泣き、かくとは知らず立歸る姉は不思議と門口より、内の様子を窺ひ  
ゐる、文彌はやうく泣く眼を拭ひ、

ト此中文彌よろしく思入下手より以前のおきく、おいち出来り、門口にて内の様子を窺ひゐる。

あ、此の事を母さまや姉さまに言うたなら、何故父様のいふことを眞實にしたと仰しやうが。  
よい衆の身の上なら、僅な金であらうけれど、その日暮しの身の上では、又と出来よう當もなし  
親兄弟の丹精を無足にした申譯、口でまだく言はうより、いつそ淵川へでも身を沈め、さうぢ  
やさうぢや。

「けつさうかへて駈出るを、おきくは門の戸開けて入り、(トおきく此時内へ入りて、)

きく いや、その覺悟には及ばぬわいの。

文彌 や、お前は姉さん、(トびつくりなし逃げようとする。)

きく あ、これ逃けるに及ばぬ、門口で様子はあらまし聞きました、必ずきな、思やんな。父様に  
騙られしその金よりも輪をかけて、たんとお金ができたほどに、死なうなど、いふ悪い了簡出し  
やんなや。

文彌 それぢやというて母様や、お前が折角溜めた金、どうもわしや言譯がない。

いちもし兄さん、姉さんが又澤山お金を上げると言はしやんす故、そのやうなこと言うて下さんすな。  
私や悲しうなつてならぬわいな。

涙ぐめば、

文彌 お、よう言うてくれた、嬉しいぞよ。とはいへ私に姉さんが、今の金に輪をかけて下さるとは、  
そりや偽り、私に力をおとさすまいため。

きく いえ、偽りではさらさない、今に百兩渡さうわいの。

文彌 え、(トびつくりなし) そりやまあどうしてその金か。

きく さあ、まだそなたには話さねど、さるお屋敷の奥様へ拙い藝の淨瑠璃がお耳に入つて所望され、  
今日お屋敷へ上る積り、貧しい暮しに支度もなかと、衣類はもとよりさし物まで、皆お上から  
下されしまだその上にお手當とて、金子百兩下さる約束、今に駕籠にてお屋敷から、迎ひの衆が  
来る筈ぢやわいの。

文彌 そりやまあほんのこととござりますか、これといふのも口頃から、親を大事兄弟を憐れんで下さ  
るお心故、天道様の皆お恵み、そのあまりにて此身の仕合せ、え、有難うござりまする。

歎きの内の悦びも裏表なる姉弟、嬉しいに附け悲しいに附けて涙ごさきだてり。折からこ

こへ吉原から駕籠をつらせて佐野松屋、

花道より佐野松屋清兵衛、女術の源六附添ひ、後より駕籠昇四手駕籠を擔ぎ出來り、

源六 はい、御免なさいまし。

清六 あゝこれ源六、屋敷から來た積りぢやあないか。

源六 ほんに、さうであつた。(ト大きな聲して)頼まうく。

いち あい、どちらからおいでになりました。(ト門口を明ける。)

源六 私かえ、身共は、屋敷から迎ひに參つた。

きく (門口へ出て來て) これはくむさくろしい所へ、ようおいで下されました。さあ、あれへお通

り下さりませいな。

清兵 左様なら御免なせえ。(ト言ひかけるを源六袖を引く) いや、罷り通る、許しやれ。

ト兩人おきくと額き合ひ上手へ通る。文彌思入あつて、

文彌 もし、姉さん、どなた様がおいでなされました。

きく 今言うたお屋敷から、迎ひにおいでなされたのぢやわいの。

文彌 それはまあようおいで下されました、私は文彌と申す盲人にて、即ちお菊の弟にござりまする。

清兵（侍の思入にて） すりや、その方がお菊殿の舍弟でござるか、以後は入魂に頼みます。

源六 もし旦那、上手さうな按摩さんだ。いや、座頭殿でござる。

きく これおいち、お茶をあけぬかいの。

いち あい／＼。（ト茶を汲み、兩人へ出す。）

清兵 いや、かまやるなく。

文彌 して姉様が御奉公に出ますのは、どなた様のお屋敷でござりまする。

源六 あい、奉公に出るのは吉原さ。

文彌 え。

清兵 あいや、吉原の近所にて、え、見返り播磨守と申す大名でござる。

文彌 へ、え、吉原の近所に、そのやうなお屋敷がござりましたかな。

源六 あるとも／＼、吉原の近所故、世間では吉原御殿と申すわ。

清兵 而も、尾州侯の五軒長屋に習ひ、五十軒などいふがあれば、

源六 また、世繼長屋、稻毛長屋などいふお長屋もあるて。

文彌 へ、え、左様でござりますか、してあなた方は。

清兵 私でござるか。いや、身共でござるか、身共は稻荷九郎助と申す奥用人でござる。

源六 拙者は朝日如來次と申す、御錠口番でござる。

文彌 これからは私もお屋敷へ出ますれば、御懇親にお願ひ申しまする。

源六 ときに姐さん。いやお菊どの、遠方のことなれば、支度を早くなされ。即ちこれは上より下さる

襦袢小袖、(ト手拭をとつて出す。)

きく これは、結構な品を、有難う頂戴いたしますわいな。

清兵 まづ何は兎もあれ、もの、取極なれば、請狀を致すでござらう。(ト懐より年季證文を出す。)

源六 文彌殿は名前主のことなれば、印形を出さつしやい。

文彌 かしこまりました。(ト文庫の内より印形を出し渡す。清兵衛證文へ判を押し。)

清兵 文言はよむに及ばぬ、お定りの年季證文いや奉公人請狀、約束の手當金即ち百兩渡し申す。

ト朋卷より百兩包みを出し、おきくに渡す。

きく これは有難うござります。さあ文彌、これはそなたへ。(ト百兩を文彌に渡す。)

文彌 や、こりや姉さん、小判でござりますな、生れて始めて百兩といふ金を持つて見ました。え、有

難うござりまする、(ト金を頂き、)もし姉さん、何はなくともお前の身祝ひ、お二人様へ御酒一つ。

大きくそれも調へておいたわいの。これおいち、その鯛の鹽焼をこゝへ持つて來やいの。

トおきくけれおりの買つて來た、味噌渡の中の肴へ思入する。

いちあい、このぬたでござんすかえ。

大きくあ、それではない、こちらぢやわいの。(トおいちに呑み込ませる)

いちあいく。

ト呑込み、八寸の膳の上へぬたの小皿を載せ出す。おきく、五合徳利の酒を燗徳利へうつし、土瓶へ入れる。源六思入あつて、

源六 いや、これは御丁寧な、御無用になさればよいに。九郎助殿御覽なされ、この鯛の鹽焼は眼の下

一尺八寸もござりませう。

清兵 いかさま、これは見事なことだ。

源六 こちらは何だ、ひらめの刺身に口取物、臺重は鮑に初茸、此又鮭の照焼は唾のたまるほどうま

うだ。

清兵 こゝらでこんな料理をするは、神明の車屋であらう。これはく、大そうな御馳走だ。

大きく(徳利を出し)さあ、お燗がよろしうござります。お一つお上り下さりませ。

清兵 どれ、お辭儀なしに御馳走になりませう。

きく おいち、お酌をしやいなう。

いち あい〜。(トおいち酌をする、兩人よろしく呑む。)

文彌 お口には合ひますまいが、澤山召上つて下さりませ。

清兵 いやも、御酒と申しお肴と申し、申分はござらぬ。

源六 ちよつとお近附にけんじ天皇と致さう、いや、仕らう。(ト文彌に猪口をさす。)

文彌 私は一向不調法でござります。(トよろしくのんで) 是は御返盃にいたします。(ト源六へさし、)

御用人様へ伺ひますが、姉はお屋敷へ上りまして、何御奉公を勤めます。

清兵 お、姉御はお仕立がよい故、ぶツつけ仲の町へ出す積りだ。

文彌 何とおつしやります。

清兵 いや、仲の町ではない、中奥へ出す積りだ。

文彌 へい、お俱でござりますか。

源六 左様さ、突出しの時には、蕎麥も配るのさ。

文彌 いづれ其中母と一緒に、御禮ながら上りませうが、お年寄様は何とおつしやいます。

清兵 あゝ、家での年寄は遣手のお爪。

文彌 へゝえ、お爪さまとおつしやりますか。

源六 いや／＼お年寄とはお局の事、おゝお局ならば、岩藤どのと言ひます。

文彌 左様でござりますか、して御中老様は。

清兵 中老はおますにおきん。

源六 あ、もし、何をおつしやります。中老は尾上どのでござります。

文彌 それでは、芝居でいたします、鏡山のやうなお名でござりますな。

源六 さあ、お局と中老は、何處の屋敷でも同じ名でござる。

文彌 左様でござりまするか。(ト此中おきくはら／＼と思入あつて、)

きく まあお話は跡にして、も一つお上りなされませいな。

清兵 いや／＼先刻から數獻過し、殊のほか酩酊いたしました。

源六 身共は殊に肴をあらし、ゲツプウの出るやうだ。

清兵 もはや夕景におもむけば、支度がよくは同道いたさう。

きく はい、もうよろしうござりますわいな。

源六（思入あつて）いや、これは見事々々、今までとはうつて變り、御殿模様の鹿の子入り、やの字塗は又格別だ。

聞くに文彌は、ぞくぞく悦び、

文彌 あゝその見事な御殿風を、一目なりとも見たいものぢや、これおいち嘘やそなたは羨しからう。いちいえノ私や、（ト言ひかけるをおきく目で押へる）あい、姉さんのあの装を、お前にちよつと見せたいわいの。

文彌 あゝ見たうてくならねども、見ることならぬ因果の身、せめてのことに探つてなりと。

立寄る文彌にお菊はびつくり、四邊見まはし佛壇の打敷取つて膝に當て、

ト文彌探り寄る、おきくびつくりして、佛壇の以前の袱紗をとつて膝にあて、

きく これ、こゝを探つて見やいの。

手を持ち添へて膝の上、袱紗の模様をさぐらすれば、

文彌（思入あつて）これはまあ、結構さうな縫模様、一目なりとも見たいものだ。（ト文彌膝の所に顔を寄

せて、もし姉さん、この小袖は抹香の匂ひがしますの。

きく え。こりや抹香ぢやない、匂ひ袋ぢやわいの。

〽弟をくろめる詞のあや、傍であぶくくるわの亭主、

清兵 さあ、太う酩酊致したれば、日の暮れぬ中に同道致さう。

きく はい、唯今参りまするほどに、暫く門口でお待ち下さりませいな。

清兵 然らば御馳走の酔ざまし、風に吹かれて相待ち申さう。

源六 後のいつばいが利いたかして、ひよろくと致すやうだ。

〽わすかな酒にひよろくと、酔うた装して門の外、後におきくはしよんほりと、せき來る

涙呑込みて、

きく これ文彌、わしが御奉公に出るからは、母様のお力はおいちが年が行かぬ故、眼は見えいでもそ

なたばかり、どうぞ今の百兩で官位をとつて、これまでにいぢめた衆を見返した上、言ふまでは

なけれども、お年寄られた母さんを、大事にかけてたまいの。

文彌 そりやもうお前がない後は、眼は見えいでも母様の、お世話はわしがしますほどに、必ず案して

下さるな。

きく 就いてはおいちも母さんや、この兄さんに世話やかさす、素直に御用をたしませうごや。

いち あい、母さんや兄さんの御用は素直にいたします程に、存になつたら腰折の人形買うて下さんせ。

きく お、買うてやりませうともく。春にならずと此の頃に、よいのを買うて届けるぞや。  
いち 嬉しうござんす。

きく そんなら私やもう行きますぞ。

文彌 あ、これ、一目母さんに、その装を見せて行かしやんせ。

きく 豫て母さんは御存じ故、逢はいでもだいじない。殊には段々取る年に涙脆うなつた故、定めて家  
にゐやしやんしたら、生別れでもするやうに、(トホロリして) 結句逢はぬがよいわいの。

文彌 いかさま、こゝに母さんがゐられたことなら、泣かつしやる、私も悲しうて、名残りをしうござ  
りまする。

文彌が泣けば妹も、共に泣く音の哀れさを、身に知る雨の袖袂、

ト文彌おいちしくくと泣く。おきくも名残をしき思入にて、

きく あ、もうく、そのやうなことを言うてくりやんな、心が残つて悪いわいの。どれ、日の暮れぬ内  
行きませう。

文彌 あ、これ姉さん、お前は常に瘡持なれば、お師匠様に貰うたる熊膽入りのこの丸薬。(ト文庫より  
薬包みを取り出し) これをお前に上げるほどに、形見と申うて下さんせ。(トおきくに渡す。)

きく あゝこれ、形見とは氣にかゝる。

文彌 おいや、形見ではない、そりや饞別。

何の心も附かずして、門出を祝ふ饞別を形見と言ひし一言は、後にそ思ひ知られける。

ト此中おきく心にかゝる思入にて門口へ出る。おいちつかノ一と行つて、

いち 姉さん、もう行かしやんすか。(ト袖にすがる。)

きく さつきのことを頼むぞよ。

いち あい。はあゝゝゝ。(ト泣くを)

きく あ、これ。(ト目で押へる、おいら口へ袖をあてる。おきく清兵衛に向つて。) これはお待ち遠でござりま

したわいな。

清兵 いざ、お支度がよくは、それ、鋌打これへ。

源六 はあ。

氣鱗四つ手の駕籠の垂れ、上ぐる間おそしと乗りうつれば、

トおきく心の急く思入にて駕籠に乗る、文彌門口へ送り出て来て、

文彌 そんなら姉さん、御機嫌よろしう。

きくそなたも達者で。

文彌 あゝ、どうやら死別れでもするやうに。

いち 私わたしも悲かなしうござんすわいな。

清兵 あゝこれ、目出度めでたい門出かどでに。

源六 涙なみだは不吉ふきつ。

きく弟おとうと、さらば。(ト駕籠かごの垂たれをばらりとおろす。)

清兵 それ、乗物のりもの上のけい。

源六 はあゝ。

ハッとはかりにかき上あぐる、駕籠かごにおきくは忍しのび泣なき、廓くわをさして急いそぎ行く。

ト若い者わか駕籠かごを昇あげ、清兵衛せいべゑ、源六げんせり立て花道はなみちへはひる。

いち おゝ、もう表おもてが暗くらうなつた。どれ、灯あかしの支度しだをしませうか。

ハとつかはおいちが奥おくへ行く、後あとに文彌ぶんやは金かねおしいたゞき、

文彌 あ、姉あねさんのお陰かげにて、思おもひがけないこの百兩ひゃくらう、母かさんにお目めにかけなば、嘸なお悦よろこびなさること

であらう。早はやうお歸かへりなさればよいに。

〽待つ間ほどなく母親が、歸る日暮の急ぎ足、(ト花道より以前のおりく足早に出來り)〽  
りくやれ〜目が短かうなつた。今しがた七つを打つたに、もう足元が暗うなつた。(ト言ひながら門口へ來り)〽あい、今戻つたわいの。(ト内へはひる。)

文彌 や、母さんお歸りなされましたか、お待申してをりました。

りく 待つてゐたとは、何ぞ用でも。

文彌 さあ、外のことでもござりませぬが、姉さんがお屋敷へ、御奉公においてなされました。

りく なに、おきくがお屋敷へ奉公に出た。

文彌 お前さまも、御存じぢやござりませぬか。

りく いや〜そのやうな事は知らぬ。今聞くが始めてぢやわいの。

文彌 はて、合點の行かぬ、御存じのやうに言うてゝあつたが。

りく して、その先は何様ぢや。

文彌 さあ、吉原の近所にて、見返り播磨守様といふお屋敷ぢやわいの。

りく はて、そのやうなお屋敷は、聞いたこともないわいの。

文彌 それでも先のお屋敷から、立派な刺繍のお小袖やお手當金も百兩下され、而も紙打の乗物でお迎

ひにおいでなされました。嘘でない證據は、此の金。(ト文彌金を出し、おりに渡す。)  
刺繡の小袖で鉞打に、乗るのは立派な御奉公、殊には大まい百兩のお手當までも下さるとは、願  
うてもない身の仕合せ、それを私に隠すは不思議、こりや、たゞ事ではないわいの。

文彌 え。(トびつくりなす。)

おくしてノ證文へ、判でもしやつたか。

文彌 はい、請狀とやらへ判をしてやりました。

おく その證文の文言は。

文彌 お定まりちやと申します故、つい承はらずにしまひました。

おく え、目かにも見えぬ身を以て、譯も聞かずに證文へ、何故印形をおしてやつた。母が歸つた上の  
事と言ひ延べてはおかなんだ。お屋敷なればよけれども、どんな所へおきくをば、連れて行つたや  
ら知れぬわいの。

文彌 すりや、お屋敷ではなかつたか、ほい。

はつとばかりに氣も半亂、どうとなりしが起上り、

程は行くまい、後おひかけて。(ト行かうとするを、おりに留めて)

りくえ、とりのほせて、これ文彌、日も見えて何處をあて。

文彌それぢやというて。

りくはて、待てと言は、待ちやいなう。

争ふ中へ妹おいち、文たづさへて立ちへだて、

ト文彌行かうとするをおりく留める。此の時奥よりおいち文を持出て、兩人を留めて、  
いちあゝもし、母さんも兄さんも、必ずお案じなされますな、姉さんの行先は、私が知つてゐますわいな。

文彌お、おいち、そなたが知つて居やるとか。

りくして、行く先は何處なるか。

兩人早う言うて聞かしやいの。

いちあい、姉さんの行先は、このお文に書いてありますわいな。

差出す文を文彌は取上げ、

文彌え、この文を讀んだなら、定めて様子が分からうが、何をいうても見えぬ此眼。

りく眼は見えながらこの母は、皆目讀めぬ盲目同然。

文彌 こりやどうしたら、

兩人 よからうぞいの。

途方に暮るれば、おいちはさかしく、

いちちし母さん、私が讀んで上げませう。

文彌 あゝさうぢや、そちばかりは眼が見える。早う讀んで聞かしやいの。

りくどれ、灯りを點けてやらうわいの。

母はこちく火打箱、燈火つくれば書置を、おいちは聞き聲張上げ、

いち二筆書き残しり、左候へば弟文彌事幼き時に我身が背負ひ縁より落し石にて打ち、終に三つの

年よりして盲目となり候故、物の色さへ知らぬ不便さ。成人するに従がつて過越し方を思ひ出し、

盲目となせし身の詮に、せめて官金調へて行末樂に致させ度く、御前様にも御苦勞かけ、丹精

いたし候へども、はかなくしく調ひ申さず、いかゞはせんと思ふ折節、今日愛宕下にて御祝儀を

下されし御方は、吉原の遊女屋にて佐野松屋の旦那様故、切ない譯をお話し申し、百兩に此身を

ば苦界へ沈めり、何卒この金子にて、文彌に官位を御取り下され候やう、くれぐれも願ひ上げ

りたゞ心にかゝり候は眼の不自由な弟に、まだ年行かぬ妹を残し、御前様にお世話かけ候段、

それのみ心ぐるしく存じり、まだ、申し置き度きこと御座候へども、はかどらぬ筆に書残し  
り、あら、日出度くかしく、御母様へきくより。」

「傍の二人は呆れはて、

文彌 扱は屋敷へ奉公と、僞り言うて姉さんには、苦界へその身を沈められしか。

りく お、出かしたとは言ひながら、なぜ一言此の母に、相談かけてくれぬぞい。

文彌 お、さうぢや、この金持つて姉さんを廓から取り返さん。(ト行かうとするをおりく留めて)

りく あ、これ、そなたは知るまいが、印形なした上からは、たとへその金倍にしても返さぬのが廓の

法

文彌 すりやもう取返すことはならざるか。目が見えぬばかりに、現在姉を廓の勤め。あ、この眼

が明きたいノ。

「悔み歎けば母親が、(ト文彌眼を明きたき思入、おりにこなしあつて)

りく その明きたがる兩眼を、つぶせし姉が言譯なれば、志しを無足にせず、官位を取るが姉への孝

行。

文彌 とは言へ、座頭の官位さへ、百五十兩入るとの事。

りくその足らずめは京都へ上り、そなたの師匠一老さまへ、お願い申さばかなふは必定。  
文彌 そんなら、これから京都へ上り、あ、その行く道の路用の金が。(ト當惑の思入。)

りく それぞ幸ひ、溜めたる金を。  
文彌 さあ、その金は親父さまに、騙られましたでござりまする。  
りく え、すりや、あの人でなしに、や、や、や。

聞いてびつくり母親が、呆れ果てたる表の方、

ト此中下より以前の才三郎出で、門口にて窺ひゐて、此時、

才三 いや、その道中の路用の金は、わしがお貸し申しませう。

言ひつゝはひる才三を見るより、(トおいち見て)

いち や、そなたはさつきの才三さま。

文彌 縁もゆかりもない者に、

りく 路用の金を貸さうとは。

才三 唯は貸さぬ、質がとりたい。

文彌 そりや、いかなる品を。

才三 あ、あの佛壇にかけてある、鴛鴦切の袷紗が望み。

りく すりや、あの袷紗を。

才三 五兩の質に預かりたい。

「金とりだせば母親が、袷紗をとつて才三に渡し、

ト才三郎懐ろより金を出しおりの前へおく、おりに佛壇の袷紗をとり、才三郎に渡して、

りく はて、物ずきな、何で袷紗を。

才三 望むはこつちの詮議の當。

文彌 え。

才三 さあ、まとまらずともその金を、路用になして、少しも早く。

文彌 え、有難うござりまする。

「え、有難やと親と子が、勇み悦ぶ表口、隙もあらばと窺ふ小兵衛、おいちはその日早く

見附け、

ト此内下手より以前の小兵衛うそくと出来り、門口を覗く、おいち見て、

いち あれ、父さんが。

文彌 えよ。(トおどろく拍子に、懐中より金包をばつたり落す。)

小兵 落ちたはまさしく。

ト小兵衛つかくとはひる。文彌金のうへべつたりと坐り、

文彌 いえ、何でもござりませぬ。(ト才三郎小兵衛を見て)

才三 寶の盜賊。(ト捉へようとする。)

小兵 南無三。(ト此時おいち行燈を吹消す。)

闇はあやなし、

ト才三郎小兵衛にかゝるを、おりく支へる。小兵衛は門口を出る、文彌探り寄つて、門口をしやんと締め、ホツト思入。双方よろしく、三重、時の鐘にて、

幕

### 三幕目

鞠子宿藤屋の場  
宇都谷峠殺の場

〔役名〕伊丹屋十兵衛、座頭文彌、提婆の仁三、薩摩侍鹿子鳥新吾、大坂者太郎兵衛、日光の百姓

出津村の勘太、江戸ッ兒が熊、藤屋の亭主四郎兵衛、江戸ッ兒消炭の龜、どんどろ坂の兵藏、藤屋の女房おむら、同下女おいね、同おせん等。

(藤屋店頭の場)

本舞臺三間の間常足の二重、正面藤屋といふ紺の長暖簾、上手間平戸の戸欄、

下手茶壁、講中の掛札。上の方一間海鼠壁、丸の内に御泊宿鞠子宿藤屋と記しあり。下の方一間出格子、總て東海道鞠子宿藤屋店頭の體。二重に藤屋の女房おむら、掛硯りた控へ帳面を附けてゐる。下女二人ば留女にて、一人の田舎道者を引張りゐる見得にて幕明く。

いね もし、あなた、お泊りぢやありませんか。

せん 奥座敷が明いてござります。

兩人 さあ、お泊りなされませぬ。

道者 こりやあ美しい如え達、喰ひ物はどうでもい、が、晩にお酌をしてくれるか。

せん いえ、鞠子の宿で名代の藤屋、そのやうなことはいたしませぬわいな。

いね 女郎衆なら呼んであげますぞえ。

道者 馬鹿なことを言つたものだ。長旅をするものが、そんな事をしてなるものか。

いね 左様なら外へ行つて、お泊りなされませいな。

道者 え、野暮な奴だな。(ト下女二人の背中をたつき、上手へはひる。)

せん え、好かない道者面だよ。

むら おいねや、奥の八疊は江戸のお二人連と、大阪のお方ばかりかえ。

いね いえく、京のお方も、薩州のお侍様も、御一緒でござりますわいな。

せん それにまだ年の若い按摩さんが、おいでなさんすわいな。

むら 江戸のお方は勇み衆故、間違ひのできぬやう、時々座敷を氣をつけてくわいな。

いね そりやもう如在はござんせぬ。今も見舞うてまゐりましたわいな。

ト馬士唄になり、花道より百姓勘太、草鞋菅笠にて小さな包を背負ひ出来る。

せん あなたお泊りぢやござりませぬか。(ト袖を引く。)

勘太 夜通し歩くわけにもいかねえから、泊りは泊るが定宿がある、駄目なこんだ引かつしやんな。

せん どちらが御定宿でござりますか、手前は鞠子の藤屋でござります。

いね お風呂も丁度わいてをります、お泊りなされませいな。

勘太 え、此の女どもは油断のなんねえ、おれが定宿がその藤屋だ、どうしてそれを知りをつた。おれ

を泊めてえと思つて、鞠子の宿の藤屋でござるなど、其の手は喰はない、おいたがえ。

いね 何で嘘を吐きませうぞいな。あれ御覽なさいまし、鞠子宿藤屋と壁に記してござりますわいな。

勘太 (壁をよくく見て) はあ、そんならこゝが名代の藤屋かな。實は定宿でもなんでもないが、後立場で教はつて来たのだ。

むら それはようおいでなされました。まあおかけなさりませいなあ。これお茶を持つて来なよ。

ト奥にて「あいし」と返事して、小女盆へ茶をのせて持来り、おせん盥へ水を取る。

小女 お茶をおあがりなされませ。

むら お荷物はこちらでお預かり申しませう。

いね お笠はこれへかけておきますぞえ。

せん おみ足をお出しなされませ。

むら 直にお風呂を召しますか。

いね 御飯を直に召上りますか。(ト皆々口やかましくいふ)

勘太 (耳をおさへて) あゝこれく、さうべちやくちやと言はれては、逆上せてなんねえ。どうぞ静して下せえ。ときに旅籠錢はいくらだ。

むら はい、東海道はお定り、二百文でござりますわいなあ。

勘太 書辨當はつきますかね。

むら お望みなら差上げませうわいな。

勘太 大きさはどの位だな。

いね どのやうにでも、結んで上げませうわいな。

勘太 梅干と澤庵をいれて、尺二寸廻り位に結んで下せえ。

せん かしこまりましたわいな。

勘太 それ極めたら草鞋を脱ぐべい。(下草鞋を脱ぎ足を洗ひながら)間違はぬやうにして下せえ。

せん いえく、間違ひはいたしませぬわいな。

勘太 好いのなら、間違つてもだいじない。

小女 この人は慾ばつた人だ。

むら これはしたり、お客様に向つてどうしたものだ。さあ、あなた奥へおいでなさいまし。

勘太 どりやお世話になり申さう。

むら これ、御案内申しや。

小女 あいぐ。

ト小女先に立ち勘太奥へはひる。と花道より十兵衛脚絆草鞋一本差し、合羽をつけし割掛の荷を擔ぎ菅笠を手に持ち出來りて、

十兵 やれく日が短くなつた。今日は府中まで行けるだらうと思つたが、鞆子泊りで丁度好い。

いね (十兵衛の近寄るのを見て、) もし、お泊りぢやござりませぬか。

十兵 あい、泊るのだが、一人旅だがいゝかえ。

いね あなた方なら、よろしうござりますとも。

せん さあ、おあがりなさりませいな。

十兵 それぢやあお世話になりませうか。

いね お荷物をごちらへ遣はされませ。

せん お泊りでござりますよ。

トおむら出て、十兵衛の荷物をおいれより受取る、十兵衛腰をかける。おせん盥を持來り、草鞋をとり十兵衛の足を洗ふ、奥より小女茶を汲んで來る。

小女 はい、お茶をおあがりなさりませ。

十兵 あい、おかたじけ。(ト取つて呑む。)

むら 今日はお天気でよろしうござりましたが、どちらからお立でござりました。

十兵 掛川から立ちましたが、大きにおそくなりました。

むら いえく、それではお早うござりましたわいな、お客様にお氣の毒でござりますが、今晚はお泊り

が多うござりまして、お座敷が込み合ひます故、お合宿にお願ひ申したうござりますわいな。

十兵 そりやあだいいござりませぬ。私も一人だから、賑やかなはうがよろしうござります。

ト足を洗ひ上る。

むら お一人故、お大事な品はお預かり申しませうわいな。

十兵 なに荷物の中は着替ばかり、お預け申すほどの品でもござりませぬ。

いね お風呂がよろしうござりますが、直におめしなさいませうか。

十兵 ちと風氣故、湯は止ませう。

いね 左様なら、お座敷へ御案内致しませうわいな。

十兵 どれ、草臥を休めようか。

三人 さあ、おいでなされませいな。

ト宿場の騒ぎ唄にて、この道具廻る。

(蔭屋座敷の場)——本舞臺一面の平舞臺、正面床の間、上の方一間次の間仕切りの襖、下の方一面に障子立きり、角行燈をおいてある。こゝにから熊、消炭の龜江戸ッ兒の勇み装にて、しがみ火鉢にあたり茶を呑みある。上手に降摩侍新吾大髻の頭にて、懐中鏡にて鬚を抜きある。此の脇に大坂者太郎兵衛小さな板にて底まめの薬をねつてある。下手に勘太煙草を呑み、この傍にどんどろ坂の兵藏江戸近在の若い者の打扮にて、小楊枝を遣ひある。この模様にて道具留る。

熊 もし大阪の肥つたお方え、お前何を練んなさるのだ。

龜 え、意地きたなしめ、喰物なら、喰はうと思つて。

太郎 いや、わしは底まめをとがめて、えらう難儀をしましたさかい。吹殻を練つて附けますのぢや。

熊 底まめなら、いゝ薬があつたツけ。

太郎 さよかな、どないな薬がありますな。

熊 節分の柀を黒焼にしてつけるといゝ。

勘太 はあゝ、柀が底まめの薬になりますかな。

熊 なるどころか、底まめでも手の豆でも、豆一通りの妙薬だ。

新吾 くやく、若い者、豆一通りの薬とあるからは、四つ目屋の代りには相ならぬかな。

熊 そりやあもう、豆まめと名のついたものなら、何豆なにまめにでもきゝます。

兵藏 何で柀ひらぎがそんだにきくだんべい。

熊 知らねえか、豆まめなら柀ひらぎ、(豆殻柀)と言いはア。

龜 株かぶウ言いつてやあがらあ。

皆々 はゝゝゝゝ。(ト笑わらふ、新吾腹しんごはらを立たつて)

新吾 うぬ、武士ぶしたるものを嘲てうろ弄ういたして、ふとかい奴やつだ、頭びんた打ち斬きるぞ。

熊 はあゝ、眞平まっぴら御免ごめんなせえ。びんた打ぶちきられてたまるものか。

龜 これだから、つまらねえ口くちをきくなといふのだ。もし旦那だんな、どうぞ御了ごれう簡けんなすつて下くださりませ。

新吾 以來いらいきつとたしなみをらう。

ト睨にらみつける。この時奥ときおくより提婆だてばの仁三にさん上方商人じやうほうしやうじんの打うち扮はにて、手拭てぬぐいを持ち、湯上ゆあがりの體ていにて出い來きる。

仁三 どなたもお風呂ふろがようわいてをりますが、どうでござります。

大郎 おゝ京きやうのお方かた、どこへおいでぢやと思おもうたら、風呂ふろへおいでゝあつたかな。

仁三 今いまよう空すいてをりますが、お這は入りなされませぬか。

大郎 いや、私わしは底そこまをとがめて、よう風呂ふろへ這は入りませぬわいの。

熊 もし、底まめの薬なら、

龜 また四文と出かけるか。

勘太 なるほど、お江戸のお方は性懲もないことぢや、は、は、は。

ト下手よりおいね先に十兵衛出來り、

いね もし皆様、お狭うござりませうが、もうお一人お願い申しますわいな。

新吾 くやく、外の者の頼みなら罷りならぬ所なれど、おぬしが頼み故承知いたす替り、わい共が頼

みも承知いたすであらうな。

いね そりや魚心ありや、水心でござりますわいな。ほ、ほ、ほ。さあ、あなた此方へおはひりなされま

せいな。

十兵 へい、どなたも御免なされませ。

仁三 さ、御遠慮なう火鉢のねきへお寄りなされ。

十兵 有難うござりまする。

いね 左様なら、皆様お願ひ申します。

新吾 くやく、わい共が頼みも承知であらうな。

いね知りませぬわいな。

トおいね奥へはひる。がら熊十兵衛を見て、

熊 龜や見や、この旦那は江戸ッ兒だな。

龜 さうよ、江戸に違えねえ。

熊 どうでも江戸面は違ふな、きりゝしやんとしまつてゐらア。

龜 これ、わき國の人もゐらあ、あたり障りになることを言ふなえ。

熊 言つてもいゝや、違ふから違ふと言ふのだ、上方の贅六などゝ一つになるものか。もし旦那え、

お前さんは江戸でござりませうね。

十兵 左様でござります、私は柴井町の者でござります。

有難え、江戸兒が來たので話しが出來らア。もしわつちらア神田暨大工町で、大工でござります  
が、何事も胸に思つてゐることができず、がらくゝするのでがら熊と申します。又この野郎はつ  
まらねえことをぶつゝと憤りやすから、消炭の龜と言ひやす。地震この方長い錢をとつたとこ  
ろから、伊勢參宮に出かけやしたが、京、大阪で耗つて仕舞ひ、つまらなく江戸へ歸る道さ、何  
と皆さん、今夜は落嘶しの三十石のやうに、國々の嘶でもしようぢやござりませんか。

仁三 はあ、そりやよい思ひ附ぢや、どうで宵から寐られもせず。

太郎 さよぢや、どこの方か知れもせぬ方と、こないに合宿するといふも、いはゆる他生の縁とやらぢやなあ、申し。

勘太 さうでござる。一樹の影のいちごの流れとかいふことがござる。

兵藏 そりやあ爺さん、権現堂の切れた時かね。

勘太 大方さうだんべい。

十兵 これはずんほウ話しだの、あは、あは、あは。

新吾 くやく、お手前は大阪の者ぢやさうなが、大阪はどの邊でござるな。

太郎 私でござりますか、大阪心齋橋通り、南へ入り北へ下る東へ三軒目で、加賀屋太郎兵衛と申しまする。

新吾 はあ、太郎兵衛か、やと申すはお手前がことか。

太郎 御常談おつしやりますな。

十兵 (勘太に向ひ) もしお前さんはどちらでござりまする。

勘太 わしやあ日光身籠山の麓、土井遠江守様御城下より三里の在、出津村百姓どんどろ坂の勘太郎と

申します。

十兵 はあ、日光在でござりますか。してお上りでござりますか、お下りでござりますか。

勘太 伊勢參宮に上りでござります。

熊 おい、そつちの勇みの兄イ、何處だ。

兵藏 おらか、おらあ江戸さ。

熊 何だ、江戸だ。受取りにくい江戸だな。

龜 引を立てにやあ、通用はむづかしい。

熊 兄イ、お前江戸は何處だ。

兵藏 竹の塚さ。

熊 道理でをかしいと思つた。もしお侍様え、あなたアどちらでござります。

新吾 わいどもは薩州鹿兒島アの者なるが、劍道修業の爲めに日本六十餘州、武者修業にありく者なるが、

熊 まつぴら御免なされませ。(ト此中仁三日記帳を附けてある。十兵衛見て、)

熊 まつぴら御免なされませ。(ト此中仁三日記帳を附けてある。十兵衛見て、)

十兵 もし、そこに帳をつけておいでなさるお方、お前様はどちらでござりまする。

仁三 はあ、わたいでござりますか、わたいは京都下立賣松原上る所で、小間物を生業致します、仁兵衛と申しますものでござります。

熊 もし、京のお方え、帳はいつでも附けられらア、こゝへ来て話でもしなせえな。

仁三 は、有難うおますが、日記を附けます故、その晩に附けませぬと、つい附落してなりませぬ。それにまだ當宿へ狀をことづかつて参りました故、ちよつと届けて参りまして、ゆつくりとお話しいたしませう。

熊 それぢやあ早く行つて來なせえ。

仁三 (帳面を懐ろへ入れ、手紙を持つて、) さよなら、直行つて参じます。どなたもお話しなされませ。

ト下手へはひる。

新吾 くやく、若いのが、宵の間に盲目がをつたではなかつたか。

熊 あい、飯は宵に喰ひやした。

新吾 え、くやく、盲目が、をつたではなかつたといふこつちや。

熊 分からねえ、めしは喰つたといふに。

十兵 あゝもし神田のお方、その盲目とおつしやるは盲人のことでござりまする。

兵藏 盲人とは何のことだ。

龜 大方唐人の親類だらう。

兵藏 盲人とはめくらのことだ。これでも引をたてずば通用はしますまいか。

熊 附目でいふから分からねえ。

太郎 ほんに、あの宵にゐられた按摩さんは、何處へ行かれたらう。

勘太 たしか、隣り座敷で療治をしてゐましたつけ。

熊 如在ねえ、唯は通さねえな。(ト奥へ向ひ)おい、按摩さんく。

文彌 (奥にて)はいく、お療治なら今しまひますと参ります。

熊 面白え話があるから、そんな引けたことを言はねえで、早く來なせえ。

文彌 唯今しまひますと、直まゐります。

熊 もし、柴井町の旦那え、何處が何だのかんだのといつても、江戸ぐらゐるなところはございませぬ。

十兵 そりや江戸ばかりいゝといふ譯もないが、唯しも故郷ほどいゝ所はないもので、大阪の方は大阪、

京の方は京、江戸で生れたものは實に江戸がいゝのさ。

熊 いゝの何のといつて、較べものになりやあしねえ。もし大阪の肥つたお方え。

太郎 いやも、その肥つたお方は置いて貰ひたいな。

熊 そんなら、どぶつなお人かね。

龜 なほ悪いや。

熊 もしお前、江戸へ行きなすつたことがあるかしらねえが、江戸から見りやあ、京大阪などはくだ

らねえ所だ。

龜 これさ、くだつてもくだらなくつてもいゝぢやあねえか、腹を立つと悪いわえ。

熊 腹を立つたつてかまふものか、江戸に較べりやあくだらねえ所さ。

太郎 なるほどお前の言はしやる通り、私も今度お江戸見物して來ましたが、實にえらいところぢやて。

熊 天下のお膝下だ、えらからうが。

太郎 いやもえらい犬の糞ぢや、どこもかしこも犬の糞で、あれがほんの武藏國江戸ぢやない、嘔吐ぢ

やがな。

熊 なんだ、この土左衛門め、途方もねえことを言やあがるな。これ、犬も喰へものがあるから糞も

たれらあ、茶粥ばかり喰やあがつて、鰻の頭を賞翫するとことは譯がちがわア。初醉が三分し

ても片身は犬にくれてやらあ。悪くごたくぬかしやあがると、横ぞツ方を蹴破つて風穴を明け

るぞ。

太郎 いや、どえらいたんくはぢやな。

熊 何がどうしたと。(ト熊立ちかゝるを、皆々捨セリフにて留める。)

十兵 これさ、つまらない事を言募つて喧嘩をしてはみつともない。お互ひに旅のことだ、まあく不承しなさい不承しなさい。

熊 何さ、大きな聲をしたくもござりやせんが、あんまり江戸馬鹿にしやがるから。

龜 これ、いゝかけんにしろえ、柴井町の旦那が、口をきいておいでなさらあ。

熊 旦那、大きに有難うござりまする。

勘太 いやも、誰でもめいゝの國を悪く言はれると、腹の立つものぢや。然し何處がえゝの、彼處がえゝのと言うたとて、えいと説うたらわしらが國、日光を見ぬ中は、けつこうとは言はれぬ。

十兵 これはしたり、又お前が初めなさるか。

新吾 わい共いまだ日光は見ぬが、結構なのは國元の武者小路、江戸の大名小路よりはるかに立派ぢや嘘ぢやと思ふなら、今から薩州へ行って見て来るがいゝ。

熊 誰が見に行く奴があるものか。

龜 え、だまつてゐろと言ふに。

十兵 さあ、もうくく喧嘩はしつこなしく。

ト合方きつぱりとして、奥より文彌、風呂敷包みを腰へ結び、さぐり乍ら出來り、

文彌 だいぶ、お賑やかでござりますな。

熊 お、按摩さん來なすつたか。さあ、こつちへ出ねえ。

文彌 はい、出ましてもよろしうござりまするか。

熊 いゝどころか、座頭の中座敷、すいと出なせえ。

文彌 左様なら御免なされませ。(ト前へ出る。)

熊 按摩さんといふものは、勘のいゝ者だが、お前などはまあどこが、いゝと思ひなさる。

文彌 はい、どこもよろしうござりまする。

熊 おつウ、胡麻をするの。

文彌 いえもう胡麻とやらではござりませぬが、眼の見えませぬ一徳は、どこでも同じこととござりま

する。

新吾 くりや座頭の坊の申す通り、關東の若い者なども、盲目であつたらよかつたに。

熊 大きにお世話だ。

勘太 いや、この按摩さんは如在ねえ按摩さんだ。

十兵 どうか療治も上手さうだ、ちつとばかり肩をつかんで貰ひたい。

文彌 かしこまりましたごりまする。

十兵 どなたも御免なされませ。

文彌 (十兵衛の後ろへまはり肩を揉みながら) 旦那、お前さんは江戸でござりますな。

十兵 あい、わしは柴井町さ。

文彌 はあ、柴井町の旦那といふはお前さんでござりましたか。それぢやあ私は御近所でござります。

十兵 お前どこだえ。

文彌 片門前でござりまする。

熊 もし柴井町の旦那え、この按摩さんで洒落ができました。

十兵 はあ、何といふ洒落が出来ました。

熊 按摩旅を見ず、といふのだ。龜、どうだよからう、眼が見えねえから按摩旅を見ずさ。

龜 そりやあ分かつたが、心は何といふのだ。

熊 分わつらねえ野郎やろうだ、いつでも隣となりの娘むすめがさらつてゐらあ、鳴なは瀧たきの水みづ、按摩あんま旅たびを見みず。

龜 あんまにわりい洒落しやれだな。

熊 悔ふしくば誰たれでもやつて見みねえ、これでも随ずい分ぶん苦くるしんだのだ。

太郎 私わしも一つ洒落しやれませう。あんまと首尾しゆびよく寶藏ほうざうへ忍しのび込こみ、とはどうだね。

熊 べらほうに長い洒落しやれだ。

兵藏 短みじく言いへば、あんまの天人てんじんかね。

熊 面白おもしろくねえの。

勘太 そんなら、座頭ざとう附つけてあんま(も)をくふといふのはどうだんべい。

熊 こりやあ小父せぢさん、下したにはおけねえ。

勘太 二階にかいへでも上あるべいか。

熊 どうとも勝手かたてにしなせえな。

新吾 わいども、一つ洒落しやれ申まをさう、あんまに杖つゑない胴慾どうよくだとは、どうぢやく。

十兵 これは秀進しういっでござります。

熊 旦那だんなも隅すみにはおけねえわえ。

新吾 然らば真中へはじけ出ようか。

熊 はじけ出られてたまるものか。

皆々 はゝゝゝ。

文彌 あんまり皆さんが、あんま〜とおつしやるので、私は嚏をしつゞけで。ハツクシヨ。どうか風を引いたやうでござります。

十兵 旅で煩らつてはいかない、振出しでも呑みなせえ。

文彌 ありがたうござりまする。

太郎 ときに、もう寐ながら話しとしてはどうでござりませう。

兵藏 それがようござりまする。私などは無口だから、黙つてゐるせい、睡くなりました。

熊 何にしろ、床をとつて貰はう。

トから熊手をたゞく、奥よりおいれおせん出来り、

兩人 はい、御用でござりまするか。

熊 おら達はどこへ寐るのだ、床をとつてくんな。

せん はい〜かしこまりました。あなたと大阪のお方とお侍様は、こちらへおいでなされませ。

太郎 どうでも江戸さんとは、のがれん仲かな。

熊 又寐ながら喧嘩をしやせう。

勘太 これ、わしどもはどこへ寐るのぢやな。

いね お前さんは按摩さんと御一緒に、このお隣りへお休みなされませ。(ト十兵衛に向ひ) あなたは京のお方と、こゝへお休みなすつて下さりませ。

十兵 あいゝ承知しました。

兵藏 おらあどこへ行くのだな。

せん お前さんはお江戸でござりますから、お江戸のお方と御一緒によろしうござります。

兵藏 有難え、江戸は江戸連れだによ。

龜 何でもない、から、早く行つて寐よう。

兩女 さあ、おいでなされませいなあ。

ト宿場の騒ぎ唄にて、わやくとおせん先に新吾、太郎兵衛、熊、龜、兵藏等下手へはひる。おいねは勘太郎を連れて上手へはひる。この中始終文彌、十兵衛の肩を揉んでゐる。

十兵 やれゝ、大風の吹いたあとのやうだ。

文彌 やうやく静かになりました。

十兵 ときに、按摩さんもういゝ、しまひな。

文彌 いえまだ、下を揉みませぬ。

十兵 下はいゝから早く行つて休みなせえ。それ、五十あるよ。(ト財布より錢を出し渡す)

文彌 いえ、これでは多うござりまする。

十兵 なに少しばかり、とつておきねえ。

文彌 それは有難うござりまする。

いね (出來りて) さあ、按摩さん、お前はこちらへござんせいなあ。

文彌 はいゝ。左様なら旦那様、お休みなされませ。

十兵 大きに御苦勞であつた。

いね どれ、手を引いて上げようわいな。

トおいれ文彌の手を引き上手屋體へはひる。下手よりおせん夜着蒲團を持つて來て敷き、

せん 旦那、お床を延べましてござります。お休みなされませいなあ。

十兵 あいゝ、京のお方はまだ歸んなさらねえか。

せんはい、まだお歸りなされませぬわいな。

ト言ひすて、はひる。時の鐘鳴る。十兵衛床の上へ上り、鼻紙を出して枕へ當てながら思入あつて、十兵衛あゝ世の譬にもある通り、旅は辛いものだといふに、とりわけ辛いこの十兵衛、せつばつまつた金の無心に、わざと京までのほつたところ、當にしてゐた藤助が死んで間もなき初七日に行合はして、向うよりこつちが先へ力落し、南無阿彌陀佛もしんそこから、つい二七日三七日と二十日餘りも逗留したれど、馴染も薄い女房に金の無心を言はれもせず、詮方なきにすこゝと歸りは歸つて來たけれど、家へ歸つて女房に京三界まで駈け歩き、其の算段ができぬかと思はれるのが面目なく、江戸へ段々近附くのが却て苦勞に夜の目さへ、合はぬ此身の胸算用。あゝ寐つかれずとも横になり、どれ、足でも休めようか。

ト十兵衛夜着を着て寐轉ぶ。下手の障子を明けて仁三出來り、

仁三 もうお休みなされましたか。

十兵 (床より顔をあげて、) 御免なせえ、今寐ました、だいぶおそうござりましたな。

仁三 いやもう、夜といふものは知れにくいもので、手紙一本でいかう暇どりしました。

十兵 さあ、早くお休みなさい。

仁三 どれ、ふせりませうか。

ト仁三寐轉ぶ。時の鐘。はた〜になり、下手より新吾おいねを追ひかけ出来り袖を捉へて、新吾 おのれ、逃けるると逃がさうか。

いね あれ、お放しなされませいな。

新吾 いや〜放さぬ〜、おのれ武士たる者に約束の變替いたいて、濟まうと思ふか。

いね いえ〜、そのやうなことを申した覚えはござりませぬわいな。

新吾 なに、ないことがあるものか、それが不承知なことならば、こゝへ今夜泊りはせぬわ。

いね いえ、もうどのやうにおつしやりまして、私は存じませぬわいな。

トおいね新吾を振拂ひ奥へ逃げてはひる。新吾捨せリフにて追ひかけはひる。仁三顔を上げて、

仁三 いやも旅籠屋といふものは、とつともう夜通しさう〜しいものぢや。もし江戸のお方、お休みなされましたか、もし〜。あゝ晝の勞れでよう寐られたやうぢや。(ト床の中で腹這ひに起き、十

兵衛の寐息を考へ〜)どりや一服喫みませうか。(ト煙草をつぎ、火入れへ手をかざし見て)あゝ火入の火が消えてしまつた、くさいが行燈でつけようか。(ト行燈の灯で點けようとして火を消し)こりやしまつた、行燈まで消してしまつた。

ト時の鐘、凄き合方になり、仁三起上り脚絆を穿き身拵へをする。十兵衛頭をあげ窺ひある。仁三は足をして十兵衛を跨ぎ、上手へ行かうとして十兵衛の包みに頭つき、取りのけようとするを十兵衛此の包みを押へて、ぐつと引く。仁三びつくりなして逃げようとするを十兵衛捉へようとし、仁三振拂ぼうとして立廻り、十兵衛仁三を押へて、

十兵衛 盗人が這入りました。皆さん起きて下さい。御亭主灯りを、早く。

トばた／＼になり、下手より藤屋の亭主四郎兵衛手燭を持ち、おむら其外以前の人々、思ひ／＼の寐起の装にてうるたへながら出来り、

皆々 だろぼう／＼。(ト拵セリフにてあちこちなす。)

熊 だろぼうはどつちへ逃げやした。

新吾 わいども頭打ちきつてやらうと思つたに。

十兵衛 いや、お案じなされますな、盗人は私が押へてをります。

太郎 やあ、こりや關東のお方か。

勘太 お手柄でござりました。

四郎 これは／＼江戸のお客様、ようとり押へて下さりました。

むら 皆さん、お座敷に粗相はござりませぬか、お改め下さりませ。

太郎 さうぢやく、めんくの荷物を改めねばならぬ。(ト皆々よろしく荷物を改める。)

新吾 やあ、ないわく、わい共の大小がない。

太郎 さうおつしやれば、わしが越中禪が見えない。

熊 大方この野郎が盗んだに違えねえ。

龜 構ふことはねえ、たゞきしめろく。

兵藏 棒しぼりにして、肥溜へたゞツ込め。(ト皆々わやくいふ。)

四郎 まあく、お静になされて下さりませ。

勘太 何にしるお侍様の、大小がなくなつては大變だ。

新吾 武士たるもの、魂を、盗むといふがあるものか、ふとかい奴め、覺えてをれ。

ト有合ふ枕にて仁三の頭をうつ。これにて額へ疵つき、仁三手拭にて押へる。

十兵 これはしたり旦那様、額へ疵が附きました、手あらいことをなされますな。

新吾 やあ、大小を盗んだ故、打殺してもだいいない。

むら あゝもし旦那様、あなたのお腰は後ろへまはつてをりますわいな。

新吾（後ろへ廻りし大小を前へ廻し）やあ、これは後にあつたか、然らば何も粗相はない。

太郎 たゞ、私が禪が見えぬばかりぢや。

四郎 もし、お前様の鉢巻にしておいでなさるのは、そりや禪ぢやござりませぬか。

太郎 やあ、こりや手拭と間違つたと見える。

十兵 それぢや此奴が盗んだは、私が所持の包みばかりか。（ト風呂敷包みをとつて見せる。）

熊 何にしろ太え奴だ。どんな面だか、面を見てやらう。（ト仁三の顔を上げ見て）やあ、こいつア背に

泊つた上方者だ。

太郎 いや、油断もすきもならぬことぢや。

四郎（前へ出て）いえ、皆様御苦勞をかけまして、甚だ申譯もござりませぬが、今日は據なく、私が

留守故、かやうな者を泊めましてござります。（トおむらに向ひ）これだから平生言はないことぢ

やない、おれが留守なら氣を附けると、言つておくのに。

むら それぢやというて、商人風のお方ぢやもの、盗人と知れるものかいな。

四郎 その盗人と知れぬ者を、知るのが旅籠屋生業ぢや。

むら 知れぬものを知れとは、そりやお前が無理ぢやわいな。

四郎 うぬ、亭主に口答へするな。

十兵 これさく御亭主、夫婦喧嘩は後にして、早く盗人の片を附けて下せえ。

四郎 はいく、よろしうござります。皆様への申譯に、篋巻にして阿部川へはふり込みます。

熊龜 こいつア面白い、手傳つてやらうく。

仁三 (顔を上げ、江戸口調にて) もし、どうぞ堪忍して下さりませ。今日から心を改めまして、決して盗

みはしませぬから、命ばかりはお助けなすつて下さりませ。

十兵 (これを聞き、合點の行かぬ思入にて) もし、皆さんお聞きなされましたか、上方者だと思つたら、

こいつア江戸ッ兒でござりますぜ。

勘太 ほんに、今の言葉のやうす。

太郎 江戸なまりに違ひない。

仁三 (思入あつて) へい、何をお隠し申しませう。生れは江戸でござりますが、身性がわるさに喰ひ詰

めて、せうことなしに故郷を立退き、今では、五十三次でほんのよすがの旅稼ぎ、護摩の灰でこ

ざります。

新吾 やあ、扱はおのれは護摩の灰か、當年四十三歳に罷りなれど、護摩の灰は初めて見た。

十兵 五十三次を股にかけて、稼いで歩く護摩の灰が、着替ばかりのこの包みを、何で目がけて盗んだのだ。

仁三 いえ、私が目がけましたは、お前様の荷物ぢやあござりませぬ、襖をへだて、隣りにゐる座頭さんの包みでござりまする。實は神奈川からつけて来たが、どうもこれまで間が悪く、今夜といふ今夜こそ仕事をしようと思ひのほか、柴井町の旦那様の荷物へ足のさはつたが、此身の不運捉へられ、悪いことはせぬものと、眼が覺めましてござりまする。

十兵 むゝ、そんなら隣りの座頭どのゝ、包みを目がけて附けて来たのか。

仁三 今夜で三晩めでござりまする。

熊 うぬ、眼も見えねえ按摩のものを、取らうとは太え奴だ。

龜 江戸ッ兒の面を汚しやあがつた代り、袋だゝきに敲きしめるぞ。

四郎 あもし、まあ〜お待ち下さりませ、こゝで打殺してもいたしますと私の迷惑、皆様のお腹癒せには、簀巻にして阿部川へどんぶりとやりませすから、どうぞお静になされて下さりませ。

仁三 (十兵衛に向ひて) もし、柴井町の旦那様、盗人とは申しながら何一品とりませねば、あなた様のお執成で、どうぞ命の助かりますやう、お慈悲でござりまする、お願でござりまする。

トしをくといふ、十兵衛思入あつて、

十兵衛 何と皆さん、憎い奴でござりますが、御連中に何一品無くなつたものもなければ、所謂罪を憎んでその人を憎まずとやら、どうか御堪忍なすつて、助けてやつては下さりませぬか。

太郎 いやもう、捉へたお前がその心なら、堪忍せいで何としませう。

勘太 兎角世の中は堪忍が第一、されば昔奈良の堪忍と駿河の堪忍とが相談して、中に天神が寐てござつたといふ譬がある。

兵藏 何を言はつしやるのだ。

十兵衛 もし、鹿兒島の旦那様、あなたも御堪忍下さりますか。

新吾 わいども了簡のならぬところなれど、お手前に免じ了簡致し申す。

十兵衛 神田のお方も、よろしうござりませうな。

熊 簀巻にするなら手傳つてやらうと思つたが、皆さんが御承知なら、御多分にやあ漏れますまい。

十兵衛 ときに宿の御亭主、皆さんも御承知故、お前もどうぞ了簡して、助けてやつて下さりませ。

四郎 いえもう、お前様の御挨拶と言ひ、皆様が御得心なら、何の事を好みませう。

むら そんなら、お助けなされて下さりますか、やれく嬉しや、家から科人を出すことかと、大てい

案じたことぢやござりませぬわいな。

四郎 これ、よく聞けよ、皆様方が御不承知なら、いやでもおうでも寶卷にして、阿部川へ打込む所、

危い命を助かつたも、柴井町の旦那を始め、皆様方のお蔭故、よくお禮を申すがよい。

仁三 (皆々へ向つて) へい、柴井町の旦那様、どなた様も此御恩一生忘れはいたしませぬ。え、有難う

ござりまする。(ト仁三ひれ伏す。十兵衛思入あつて)

十兵 人間僅五十年、半分寐て暮す時は二十五年の命だから、この後心を改めて、だいに命を持つが

い。

仁三 (顔を上げ、涙を拭ひて) いえもう、これに懲りぬことはござりませぬ。寶卷にされて阿部川へ打

込まれて御覽じませ、罪の深みに浮みもやらず、底の藻屑となるころ、旦那様のお情であぶな

い命を拾つた上は、悪い心は阿部川へ寶卷にして流してしまひ、今日から此身は生れ替り、心の

がまぬ肩に棒、當てゝなりとも堅氣になり、三尺店でも持ちましたら、きつと御禮に上ります。

十兵 なにその禮には及ばねど、これからあなたが心を入替へ、堅氣になるのが何より、必ず人とな

らつしやい。

仁三 あ、しんみも及ばぬそのお詞、有難涙がこぼれます。(ト涙を拭ふ。)

四郎 いや、夜更よふげとは言いひながら、油断ゆだんのならぬ壁かべに耳みみ。

むら 夜明よあけけぬ中うちに少すこしも早はやく。

仁三 さやうなれば、皆みなさま様方がた。

十兵 縁えんがあつたら、

仁三 その内うちお目めにかゝりませう。

ト仁三にさしをくと下手しもてへ行き、ちよつと舌したを出だし、肩かたで笑わらつて下手しもてへはひる。

四郎 扱さて々く柴井しばい町の旦那だんな様、あなた様さまのお蔭かげにて、何なに一品ひつしなとられもせず、

むら 此このやうな有難ありがたいことは、ありませぬわいな。

勘太 いやも、御亭主ごていしゆより泊とまり一同どう、厚あつうお禮らいを申まをさねばなんめえ。

太郎 同おなじ江戸えどさんでも、がら熊くまさんとはえらい違ちがひぢや。

熊 何なんだ、えらい違ちがひとは、どう違ちがふといふのだ。

新吾 まあ、物ものに譬たとへて見みようなら、泥龜すつみにお月つき様、下駄げだに焼味やきみ噲そかな。

熊 どつちが鼈すつまんで、どつちがお月つき様さまだえ。

兵藏 そりやあ言いはずとも知しれたことだ、お前等めへらが鼈すつまんさ。

熊 何だ、この竹の塚め、髓とは誰がことだ。(ト立ちかゝるを、皆々留める。)

十兵 これはしたり、又つまらねえことを言つて、喧嘩をするのか。

四郎 まあく、お静になされて下さりませ。

太郎 お前方は寄ると觸ると、言ひ争うては喧嘩ばかり、

新吾 物に譬へて見ようなら、犬と猿のやうだ。

熊 どつちが犬で、どつちが猿だえ。

十兵 また始めたのかな。

新吾 さあ、お手前がきやつきやといふから、猿でもあらうかい。

勘太 なるほど、思ひなしか猿に似てゐるやうだ。

熊 何だ、猿に似てゐる、この唐變木め、途方もねえ事をぬかしやあがる。有難くも尊くも江戸の大

芝居の役者で、中村瀧藏といふ大立者に似てゐるのだ。

太郎 そないな役者がありますかいな。

熊 あるかないか、目を明いて見やがれ。

四郎 まあく、お待ちなされませ。その瀧藏といふ役者があるかないか存じませぬが、まあ、あるとし

て御了簡なされませ。

熊 何だ、あるとしてとは、をかきな白だね。

むら まあ、よろしうござります。家の人は芝居が嫌ひ故、役者はよんと存じませぬが、その鴻藏は能い男で、私などは大最辰でござりますわいな。

熊 いや、お上さん、お前は眼の明いた人だが、御亭主は盲目同然だ。なんであんな御亭主を持ちなすすつたのだ。

四郎 これは御挨拶だ。

十兵 いや、盲目と言へば、隣り座敷の按摩さんはどうしましたらう。

太郎 この騒ぎに出て来ぬとは。

勘太 どうかいたしはしませぬか。

ト勘太襖の隙より覗く。これにてこの道具少し廻りて、上手の屋體を見せる。内に文彌すつぱり蒲團をかぶり寐てゐる。

はあ、蒲團をかぶつて寐をべつて申す。

十兵 まさか、寐入つてゐるもしまい。

熊 どれ、行つて起してやらう。

ト熊上手の障子屋體へはひり、蒲團を引きめくる。内に文彌包みを抱へ、うつむきゐて、

文彌 あゝ、どろぼうがはひりました。ト慄へゐるを、熊手をとつて、

熊 これさ、もうどろぼうはるねえよ。

勘太 安心してこつちへござらつしやえ。

文彌 はい、左様なら、もう盗人はをりませぬか。やれ、嬉しや、それで落着きました。

トさぐり、真中へ出る。

十兵 それぢやあお前もさつきから、寐てるたのではなかつたか。

文彌 どういたして、寐るところぢやござりませぬ。最前からの様子をば襖越しに聞かしまして、怖うて

怖うてなりませぬ故、蒲團をかぶつてをりました。いや手前の申すことばかり申して、柴井町の

旦那様え、あなたのお蔭で助かりました、有難うござりまする。

十兵 定めて聞いてゐなすつたらうが、お前をつけて来たさうだが、何と怖いことぢやないか。

文彌 皆様方と違ひまして、目の不自由な私故、一倍怖うござります。どうぞ柴井町の旦那様え、あ

なたのお側へ寐かして下さりませ。

十兵 さあ〜遠慮なしに、こゝへ来て寐なさい。

文彌 有難うござります。

四郎 ときに皆様方、まだ七つ前でござりますれば、御安心なされて、一寐入りお休みなされませ。

むら どうぞ明朝は、御ゆるりとお立ちなすつて下さりませ。當所の名物でござりますれば、とろゝを差上げたうござりまする。

新吾 わいども、とろゝは大好物、麥飯なれば猶えいが。

熊 おれもとろゝは大好きだ。

太郎 左様なら柴井町の旦那。

勘太 お蔭で難をのがれました。

兵藏 大きに有難うござりました。

十兵 明朝お目にかかりませう。

四郎 さあおいでなされませ。

ト皆々下手へはひる。後十兵衛、文彌残り、

十兵 さあ〜按摩さん、こつちへ寄んなせえ。いや、按摩さんといふと言ひ憎ひが、お前の名は何と

言ひなされるえ。

文彌 はい、私は文彌と申しますが、して、旦那様には何とおつしやります。

十兵 私は伊丹屋十兵衛といつて、居酒屋生業をしてゐます。

文彌 へえ、十兵衛様とおつしやりますか。

十兵 聞けばお前は片門前だといふことだが、旅稼ぎに出なすつたのか。

文彌 いえ、師匠の用事がござりまして、京へ上ります者でござりますが、覺えたこと故療治をしなから参ります。

十兵 何にしろ、眼の不自由な身で、京まで行くは物騒なことだ。

文彌 左様でござりまする。こつちは少しも存じませぬが、今の奴も神奈川からつけて参つたさうでござりまする。(トこれにて十兵衛南無三といふ思入あつて)

十兵 こりやとんだことをしたわえ。

文彌 ど、どうなされました。

十兵 あゝ下司の智慧は後からと、今こゝの家の亭主が簀卷にして阿部川へ流すと聞いて不便になり、合宿衆に詫言して護摩の灰を助けてやつたが、神奈川から鞠子まで附けて來たとあるからは、路

用を遣つて來た仕事、これから心を改めて、盗みは一切しませぬと、涙をこぼして言つたのも大方此の場を退かう爲め、先へ廻つてこなたをば、待伏せなすに違ひない。早くこゝへ氣が附いたら、彼奴を縛つて問屋場へ四五日の中預けて置き、その間にこなたを立たせればよかつた。今更言つても死んだ子の年、えゝ悔しいことをしたわえ。

ト十兵衛悔しき思入、この中文彌苦勞なるこなしにて、

文彌 そりやお前様のおつしやる通り、待伏せしてをるに違ひはござりませぬ。ひよつと彼奴にこの包みを取られた時は、生きても死んでも。

十兵 え。

文彌 いえ、行くことも歸ることもなりませぬ。もし伊丹屋の旦那様、あなたは御了簡深いお方故、どうか此の難儀をば、脱れようはござりませぬか、お考へなされて下さりませ。

十兵 さあ、別に考へようもないけれど、人によつては七つ立とか六つ立とか、又泊りも何時と極めてする人があるが、お前は是れまでどうであつたえ。

文彌 はい、目の不自由な者故、朝は大概五つ立、暮れは七つ半に泊ります。

十兵 むゝそれぢやあ、彼奴も神奈川からこゝまでこなたをつけて來る中、立や泊りも知つてゐよう。

どうで網を張るからには五里六里と先へは行くまい、一里か二里の近い所に、五つに立てば一時早く六つから待つてゐるであらう。(ト思案して)それぢや文彌さんかうしなせえ、今夜ももう七つ前後、直に今から立つたなら、夜が長いから夜の中に五里ぐらゐは行かれよう。夜が明けたなら駕籠に乗り、酒手を惜しまず急がしたら、九里と十里の違ひにならう。さうしたことなら脱れられよう。

文彌

(思入あつて)なるほど先へ乗越しましたら、どうか脱れられませう。それに附けても旦那様、お

慈悲深いをお見かけ申してあなたへお願ひがござりまする。眼の不自由なその上に、東海道は始めて故、とてもものことのお世話序に、どうぞ京まで御一緒に連れなされては下さりませぬか。

十兵

それはお前が言はずとも、わしが上りのことならば一緒に連れて行つて上げるが、何をいふにも

こつちは下り右と左りに仕方がないが、長い道中は兎も角もつい鼻の先の岡部へ行くに、二里九町といふ丁場にて宇都谷といふ峠があるが、眼明なら知らぬこと杖一本つき外せば、崖から谷へ眞逆さま、眼前人の難儀をば見捨て、行くは本意でない、わしも心の急ぐ旅なれど、折角お前の頼み故その峠だけ送つて上げよう。陰徳あれば陽報ありと、お前を助けておいたなら、悪く此の身に報いもしまい。

ト十兵衛文彌を助けたら、その報いで金ができようかとの思入。文彌嬉しく、

文彌 それはまあ御親切に有難うござりまする。あなたのやうなお慈悲深いお方に逢ふも、信心致す神や佛の皆お助け、首尾よく京へ上りまして江戸へ歸りましたらば、どのやうなお禮でもいだしませうほどに、お連れなされて下さりませ。

十兵衛 なに、それにやあ及ばない。峠まで送つて進ぜるから必ず案じなさんな。

文彌 それなら送つて下さりませ、え、有難うござりまする。(ト文彌悦ぶ、十兵衛手をたゝきて、)  
十兵衛 女中衆々々。(ト呼ぶ、奥よりおせん出来り、)

せん はい、何ぞ御用でござりまするか。

十兵衛 いや、ちと急な用があつて、早立せねばならぬ故、梅干でも澤庵でも早い御馳走、有合せでよ  
いから、湯漬を二膳出して下さい。

せん はい、かしこまりました。

トおせん奥へはひる。この中十兵衛、文彌は脚絆など穿き、支度をする。

文彌 あゝ、何だか心がわくわくと、忘れてもせねばよいが。

十兵衛 よく氣を附けて、支度をしなさい。

文彌 はいく。(ト脚絆を穿きしまひ、手をたゞき)女中衆々々。

せん (奥より出来り)はい、御用でござりますか。

文彌 今頼んだ湯漬はまだかな、早くして下さい。眼の悪い者を連れて行くのだから。

十兵 これはしたり、眼の悪いとはお前のことだ。

文彌 ほんに、さうでございました、はゝゝゝ。

ト合方にて奥よりおせん膳部を二膳持ち、おいれお櫃と土瓶を持ち來り、兩人へ出す。

せん まだ御飯を炊きませぬから、お茶漬でござります。

いね お急ぎ故、お煮花で上げますわいな。

十兵 私は茶漬が嫌ひ故、茶をかけずに下さい。

兩人 はいく。(ト兩人給仕をし、十兵衛文彌飯を喰ふ。)

十兵 これ、しづかに喰ひなさい、急ぐ時には支へるものだ。

文彌 なに、大丈夫でござりまする。(トいふ内に、文彌せきこんで胸に支へし思入にて苦しむ。)

いね 胸へお支へなされましたか。

せん お茶でもおあがりなされませいな。

十兵 それだから静しづかに喰くひなせえといふのだ、(ト背せをたゞく、これにて胸むねの通りし思入おもひいれ。)

文彌 あゝ、ひどい目に逢あうた。(とおせん茶ちやを汲くんで出だす、文彌ぶんやとつてぐつと呑のみ、) あツつムム。

いね まあ、お評しやうかにおあがりなされませ。

文彌 どうして、静しづかにしてゐられるものか。(ト文彌ぶんや又急またいそいで飯めしを喰くひ、胸むねへ支つかへ苦くるむ。)

十兵 また支つかへたのか。(ト背せ中なかを叩たたくを木きの頭かしら。)

文彌 はあ、もう一膳ぜん下ください。

ト箸はしをしやに構かまへ、茶碗ちやわんを出だす。十兵衛じゆべゑよく喰くふといふ思入おもひいれにて、

ひやうし幕

と山やまおろしにてつなぎ、直すじに引返ひつかへす、

(宇都谷峠うつやたうげの場) 本舞臺ほんぶたい正面しやうめん高二重たかじゆう、この後うしろ更さらに高たかき二重じゆう一面めんに畫心えきこころに岩いは粗ぐ、杉たらしの立木たちぎには蕨つた

絡からみあり、上手前かみてまへの方に古ふるびたる辻堂つじだう。向むかう一面めんに遠山とほやまを望のぞみ、夜よるの遠見とほみ。下しも手に宇都谷峠うつやたうげの蕨つたの細ほそ

道みちといふ古ふるびたる傍はう示し杭かひ。總すべて東海道とうかいだう宇都谷峠うつやたうげの體てい。時ときの鐘山かねやまおろしにて暮ま明あく。と上かみ、下しもより○△

の狩人かりど二人ににん出來いでりて、

○ やあ、山中やまなかの五郎平ごろうへいぢやないか。

△ おゝ、さういふは鹿谷しかたにの四郎介しろうすけか、もう何時なんどきであらうな。

○ 一番ばんどり窺のぞいたから、七つでもあへんべい。

△ この間あひだはさつぱり逢あはなんだが、替かることもなかつたか、ちよつと尋たづねに行いかうと思おもふが、書出ひらるのがおつくうでな。

○ さうよ、狩人かりうどと洗坊せうぼうは書出ひらることのないもんだ。

△ いや、泥坊どろぼうと言いへば、此頃このころは海道筋かいどうすぢは物騒ぶつさうだといふことだ。

○ そりやあ用心ようじんせずばなるまい。

△ 何なんの取とられるものもないくせに。

○ かう見みえても大金持たいきんもちだ。

△ はあ、痴氣せんきでかな。

○ 違ちがひない、はムム。

△ どれ、夜明よあけまでにもう一働はたらきしようか。

○ そんなら五郎平ごろうへい、

△ 早く歸らつしやい。

ト上、下へ別れてはひる。時の鐘、合方、微めて山おろし、梟の聲にて花道より十兵衛、小田原提灯を提げて先に立ち、後より文彌風呂敷を斜に脊負ひ、菅笠をもちて出來り、

十兵衛 これから路が險しいから、氣をつけて歩きなせえ。

文彌 有難うござりますが、眼は見えませぬが、杖があるだけ大きに歩き好うござります。

十兵衛 私が先へ立つて行くから、よく提灯で見て來なせえ。

文彌 いえ、私は提灯があつてもなうても、同じこととてござります。

十兵衛 ほんにさうであつたな。(ト兩人話しながら本舞臺へ來り、文彌石に躓き草鞋の紐切れる。) あゝこれお

ぶない、躓いたのか。

文彌 はい、躓く拍子に力がはひつて、草鞋の紐を踏み切りました。

十兵衛 そりやあ、大變なことをした。買ふにも家はなし。(ト思入あつて) よしくこゝに錢さしがある

から、これで結んでおきなせえ。(ト十兵衛財布より緋を出し文彌に渡す。)

文彌 はい、どうか療治ができればようござりますが。

十兵衛 ゆつくりと直しなせえ、その中一服やつてゐるから。

ト十兵衛提灯を辻堂の軒へかけ、縁側へ腰をかけ、摺火打にて煙草をのみる。文彌草鞋の紐を繕にて結びながら、

文彌 まだ新しい草鞋の紐が、ぶツつり根から切れるといふのは、どうやら心にかゝることぢや。

十兵 何の氣にすることがあるものだ。險岨な路を歩いては、草鞋は直に切れるわな。

文彌 なるほど、さうでござりませう。(ト文彌草鞋をなほし穿く。)

十兵 どうか、それで穿けさうか。

文彌 まづ間に合せに結びつけました。

十兵 そりやあよかつた、さあくこゝへ来て、一服喫みなせえ。

文彌 有難うござりました。(ト手拭にて手を拭き、煙草入を出し煙草をつぎ)一つおかし下さりませ。

十兵 そりやあさうと文彌さん、さつきから聞かうと思つたが、神奈川から護摩の灰がお前をつけて來

たといふが、背負つてゐる包みの中には、何ぞ大事なものであるのかえ。

文彌 (思入あつて)へい、御親切な旦那様故、何をお隠し申しませう、背負つてをります包みの中には、

金かはひつてをります。

十兵 いや失禮なことをいふやうだが、お前が持つてゐる金ならば、僅な金であらうのに、何でそれを

神奈川から、護摩の灰がつけて来たか。

文彌 旦那様方の御身分では、僅な金でござりませうが、私などの身にとりましては、大まいの金でござります。

十兵 む、大まいの金とは、いくらそこに持つてるなさる。

文彌 へい、百兩持つてをりまする。

十兵 え、(トびつくりして)はて、大そう持つてるなさるの。(トぞつとして、金のほしくなりし思入にて)してまあ、お前は何しに京都へ。

文彌 はい、今出川の惣録へ、官位を取りにまわりまする。

十兵 あ、若いとは言ひながら大まいの金を持つて、眼も見えぬ身で唯一人、東海道を上らうとは、さりととはあぶないことだの。

文彌 いえもう、人の氣の附かぬやう、汚れ腐つた古襦袢の中へくるんでおきまする。もし途中にて泥坊に出逢つた時は身ぐるみ脱ぎ、路用も別に胴巻へ五兩入れてござりますれば、それを渡して襦袢だけ呉れろといふたら、氣も附くまいと思ひの外、神奈川からつけて來るとは餅は餅屋、怖いことではござりまする。

十兵 かういふ怖い目をせすに、江戸で官位はとられぬものか。

文彌 いえ江戸でも官位はとれますが、わざ／＼京まで参りますは、今出川の惣録で今一老を勤めまするは、この文彌が師匠にて、もし官位でも取るならば五十や七十の金ならば貸してやらうと言はしやる故、此の百兩に五十兩借りて官位を取る積り、それ故どうも私が、参りませねばならぬ仕儀、連があつては却つて邪魔と、人の心の附かぬやう、泊り／＼で療治をいたし、一人で京へ上ります。

十兵 さういふ譯なら仕方がない。私も知らぬが盲人の、官位は高いものださうだ。譬にもいふ檢校千兩、して百五十兩で取る官位は、何といふ官位だね。

文彌 へい、座頭の官位でござりまする。

十兵 はあ座頭の官位が百五十兩とか、唯一口に座頭の坊と口ではいふが、百五十兩とは、はて高いものだな。

文彌 いえもう知らぬお方は、盲人の中では座頭が低いやうにおつしやりますれど、なか／＼以て容易に官位はとれませぬ。

十兵 はて、とんだものだ。(ト此中十兵衛始終文彌の包みへ思入あつて金のほしきこなし) 知らぬ先は鬼も

角も、聞いて見ればけんのはこなたが背負つてゐるその百兩、今夜のほどは厭れても、その百兩を盗まれたら、こなたは何とする心だ。

文彌 この官金を盗まれますれば、私が運ももうこれまで、生甲斐もないことなれば、淵川へでも身を投げて死ぬより外はござりませぬ。

十兵 いやく、そりやあ悪い了簡、人間一生は塞翁が馬、悪い事のあつた後ではまたよい事のあるものだ。よしや金を盗まれても死なうなどとは思ひなさんな。其又金に利息をつけ、禮狀添へてこなたの所へ返しに來ないものでもない。死は一旦にして安しとやら、必ず死なうと思ひなさんな。こればかりは私が意見、仇に思つて聞かつしやんな。

文彌 御親切な御教訓、きつと忘れはいたしませぬ。有難うござりまする。

十兵 とんだ意見で大きにおくれた。さあ白まぬ中に少しも早く、

ト時の鐘。十兵衛軒の提灯をそつと消し袂へ入れる。文彌杖をついて行きかゝるを、十兵衛思ひきつて風呂敷包みを取らうとする、文彌びつくりしてその手にすがり、

文彌 こりや十兵衛様、な、な、何とさつしやります。

十兵 (ぐつとつまり) さあ、此の行先でこのやうな、護摩の灰が出ようも知れぬ。氣を附けて行かつしや

い。(ト包みを放す、文彌胸を撫でおろして)

文彌 あゝ、私や又ほんまのことかと思つて、びつくりいたしました。

十兵 (これでは行かぬといふ思入にて) いや文彌さん、こなたにちつと頼みがあるが、何と聞いては下さるまいか。

文彌 へい、御恩になつた旦那様、身にかなうた事ならば、

十兵 すりや、聞いて下さるか。

文彌 して、そのお頼みとおつしやるは、

十兵 さあ、頼みといふは外でもない。その百兩の金が借りた。

文彌 えゝ。(ト文彌びつくりなし、逃げようとするを十兵衛捉へて)

十兵 さゝその驚きは尤もだが、まあ私が言ふことを一通り聞いて下され。(ト誂への合方になり) 何を包まう、私は元さる屋敷の若黨にて友朋輩と喧嘩なし、既に命にかゝはるところ旦那様のお情で命助かり町家の暮し、その御主人の娘御が勾引されて廊の勤め、御恩送りに身請せし金の残りにつまりし所、その金貸して下されたは、その娘御の御舍弟にて金は殿より預かり金、一つよければ又二つと借りたる金を調達せねば、御舍弟様の御難儀故、金の工面に京都までわざ／＼上れば

その先の、主人が死んだ後へ行き、鶯の嘴にすくくと歸る途中で入用の金を持てるこなたに逢ひ、どうも見のがすことがならず、いつそ取らうか借りようかと最前からとつおいつ、種々の思ひで言ひ出す無心、長うとは言はぬ程に、僅三月か四月の中私に貸して下さらば、その百兩に利に利を添へて、きつとこなたに返さうほどに、無理なことだが文彌殿、どうぞその金貸して下され。

ト十兵衛思入にていふ、文彌術なき思入にて、

### 文彌

段々の入譯を聞けば聞くほど切ない譯、貸せとおつしやる此の金は、護摩の灰につけられて今宵取られてしまふところ、お前様のお蔭にて無事に我手にある百兩、義理にもお貸し申さねばならぬ金をば義理をかき、お斷りを申しますは、あなたよりもこつちに又切ない譯のあつてのこと、三歳の年より眼の見えぬ私を不便に思はれて母や姉の艱難苦勞、この百兩の官金も姉が苦界へ身を沈め、私にくれたる身の代金、官位もとらず途中にて人に貸したの盗まれたのと言うては江戸へ歸られませぬ、さうなる時には御意見を背いて死なねばなりません。もし十兵衛さま、旦那さま、お慈悲深いあなた故、こゝの所を幾重にもお聞分け下さりまして、どうぞお許し下さりませ。

ト文彌思入にていふ、十兵衛も氣の毒なる思入にて、

十兵 さういふ譯の金と聞いては、よしや貸さうと言はれても義理にも是は借りられぬ。今言つたことは水にして、聞かぬ昔と思つて下さい。

文彌 (嬉しき思入にて) すりや旦那さまには、この金を思ひきつて下さりませうか。

十兵 おゝ思ひきるともく、すつぱり思ひきました。

文彌 えゝ、それで安心いたしました。

十兵 とてものことに安心ついでに、私はこゝで別れませう。

文彌 そりや又何故でござりまする。

十兵 一旦無心を言ひかけたれば、私が送つて行つたなら、こなたは却つて怖からう、丁度こゝは峠の下口、これから先は足場もよければ氣をつけて行かつしやい。

文彌 そんならどうでもあなたには、

十兵 別れて歸るがこなたの安心。

文彌 とは言へどうやら、

十兵 怪我せぬうちに、

文彌 え、

十兵 急がしやれ。

ト十兵衛花道へ行きかけ、思入あつて拔足にて下手へ返り窺ひある。文彌花道の附際まで行き、向うへ思入あつて、

文彌

旦那様、大きに御厄介になりました、お静においでなされませ。もし十兵衛様、旦那様。(ト向う

へ思入あつて) あ、もうおいでなされたやうだ。(ト思入あつて) 人の心は知れないものだ。眼の

見えぬ身を不便に思ひ、こゝまで送つて下されしお慈悲深い十兵衛様が、打つて替つて百兩の官金貸してくれとの頼み、聞けば餘儀ないお主の爲め、以前が武士とあるからは、もし切り取りで

もさつしやらうかと、思へばどうやらぞつとして、身の毛もよだつやうであつた。これから下りとあるからは、夜明けぬ中少しも早く、道を急いで、おゝさうぢや。

ト時の鐘、山おろし。少し凄みの合方になり、文彌上手へ行きかゝる。十兵衛後ろより脇差を抜き、切らうとして悪いといふ思入二三度あつて、ト後ろから思ひきつて一刀あびせる。文彌これを知ら

ず二足三足行き、がつくりとなり、糊紅肩先へ滲むを、文彌探り見て、びつくりして、  
やあ、こりや。(ト倒れる。)

十兵 文彌どの、堪忍して下せえ。

ト又一刀切る。文彌起上りちよつと立廻つて、

文彌や、こりや十兵衛様、いやさ十兵衛どの、こりやあなたは私を殺して、此金を取る氣だな。

十兵衛わつつくどいつ入譯を話したとても貸さぬは道理、さら／＼無理とは思はねど、その百兩の金がないと大恩受けたお主の難儀、道にそむいたことながら、私も以前は若黨奉公武士の祿を食んだからは、切取りなすも武士の習ひ、お主の爲めには換へられぬ。その替りには一周忌おそくもあなたの三年までには、金こしらへて身寄を尋ね、敵と名乗つて討たれる心、京三界まで駈け歩き都合のできぬその金を持つてゐたのがあなたの因果、欲しくなつたが私が因果、因果同志の惡縁か殺す所も宇都の谷峠、しがらむ葛の細道で血汐の紅葉血の涙、此の黎明が命のをはり、許して下され、文彌どの。

ト又一刀切りつけ、包みを奪ひ取り、中より金財布を引出すを文彌しつかと捉へて、

文彌すりやこなさんはこの金を、取らうばかりに親切らしく、眼界の見えぬ私を連出し、人里放れし宇都の谷にて、殺して金を取る氣だな、斯ういふことのあらうとは知らぬ江戸には母人や廓へ行かれし姉者人が、今日は彼處明日は何處と、指折り算へて待ちわびるその陰膳の高盛が、枕飯と聞かれたら、嘸や歎きはいかばかり、これ皆こなたがする仕業、かゝる非道な心と知らず、世に

頼もしき人と思ひ、佛頼んで地獄とやら、こなたは鬼か獄卒か、呵責の刃受くればとて、やはかこの金渡さうか。

十兵 おゝその恨みは尤もだが、こなたを連出し殺さうなど、初手から企んだことではない。

文彌 えゝ聞かぬ、慾にふけて盗みをするのぢや。伊丹屋十兵衛は人殺しぢや、誰ぞ来て下され。

ト文彌大きな聲するを、十兵衛口を押へて、

十兵 あゝこれ、聞譯のない文彌殿、慾にふけてつてむごたらしう何でこなたが殺されう、お主の爲にする殺生、約束事とあきらめて、許して下され。ト手を放し、又切りつける。

文彌 伊丹屋十兵衛は人殺しぢや。ト財布をかせに兩人立廻り、ト文彌したゝかに切られ、えゝ、

殺さば殺せこの恨み、生替り死替り、五百生が其間蟲けらにまで生を替へ、恨みを晴らさでおくべきか。

ト風の音になり、文彌すつくと立ちて物凄き體、

十兵 むゝ、恨まば恨め、お主の爲め、もうかうなつたら是非がない。

ト文彌を切倒す、文彌よるぼひながら財布を持つたまゝ辻堂へ逃込む。十兵衛續いてはひる。横手板羽目の崩れ穴より、吹替の座頭糊紅にて這ひ出で、後る向にて縁より落ちる。と其穴より十兵衛財布

を口に啣へ半身出し、刀を振上げきつと見得、又吹替とちよつと立廻り、よき所へ切倒し止めをさし、ほつと思入。財布の金を押しいたゞき懐へ入れ、刀の血糊を拭ひ鞘へをさめなどして、座頭の死骸を見て不便なといふ思入にて、

あゝ人の心と飛鳥川、流れ寄つたる合宿で、眼界の見えぬ不便さに、こゝまで送る親切もお主の爲めに入用の金子を所持すばかりに、うつて替つて非道にも、おれが手にかけて殺すとは、人の心も大空も替り易いが慣ひとは、はてあぢきな世の中ぢやなあ。(トホロリとして涙を拭ひ)せめて死骸は往來の、人の目棲にかゝらぬやう。

ト文彌の死骸を辻堂の蔭へ入れ、血の附きし手を手拭にて拭き、その手拭を捨てようとして思入あつて袂へいれ、菅笠割掛を取つて行かうとする。此の時上手敷を押分け、提婆の仁三頼冠りにて十兵衛をきつと見、つか／＼と出て腰を捉へ引戻す。十兵衛びつくりして振拂ひ、行かうとするを立廻つて菅笠と荷物よき所へおき、仁三手拭をとり兩人きつと見得。仁三十兵衛の懐より財布を引出し、これをかせに立廻りよろしくあつて、十兵衛財布をとり懐中に入れ、仁三を捉へようとする。そのはずみに腰の提煙草入を仁三に取られる。十兵衛手早く荷物と菅笠とを持ち、つか／＼と花道へ行く途端に、どんと本鐵砲の音するに、十兵衛笠をかざしちよつと下にある。仁三見事に尻ギバをするを木の頭。十兵衛ほつと思入あつて、

あゝ、狩人か。

ト十兵衛割掛を肩へかけるをきつかけに、鶏笛、馬士唄、山おろしになり、仁三胸を明け、腹をいぢつて見てホツと思入。十兵衛は花道へはひる。双方見合つてキザミ、

ひやうし幕

## 四幕目

材木町白木屋の場  
裏借家才三内の場  
柴井町伊丹屋の場

〔役名〕伊丹屋十兵衛、文彌の亡霊、白木屋彦三、坊主小兵衛、筑田喜藏、髮結才三郎、白木屋は兵衛、番頭丈八、座頭こぶ市、下剃萬次、白木屋の若い者松六、同杉八、丁稚善太。十兵衛女房おしづ、白木屋お駒、下女おかつ等。〕

（白木屋の場）本舞臺三間常足の二重、白木屋といふ掛暖簾、正面赤壁、状差し、真中暖簾口、押し入れ、上手一間千本格子の屋體、いつもの所門口、下手種々の材木、板割の書割、天水桶、總て白木屋店頭の體。二重に番頭装の丈八、帳合をしてゐる。舞臺に杉六、松六若い者の装にて、煙草を喫みゐる。角兵衛獅子の鳴物にて幕明く、

松六 こう杉八、こつちの家の智さんは柴井町の伊丹屋十兵衛様の弟で、小さい時から貰ひ受けて、行く行くはお駒さんと妻す積りで旦那様はおいでなさるが、算筆と言ひ男ぶりなら言分のない智さんを、どういふことかお駒さんが嫌ひなさるは、分からねえぢやあねえか。

杉八 さうよ、あの又美しいお駒さんを、智の彦三さんの方でも嫌つて、此間から花川戸の假宅佐野松屋の花魁、古今とやらに惚れ込んで、たしか今日で三日居續けをしてるさつしやるは、どういふ了簡であらうの。

松六 布でも今に大もめが、できねばよいと思つてるのよ。

杉八 いやも、家のごたつくのは厭なことだなう。

丈八 これく手前達は、寄ると觸ると内外の人の噂ばかりすつ、悪い癖だ。さあく一服喫んだらば早く河岸上をしてしまはぬか。

松六 はいく、今行くとここでござります。

杉八 さあく来さつしやいく。

ト兩人下手へはひる。花道より丁稚善太、髪結装の才三郎、鬘盤を提げ、後より萬次下刺にて毛受と砥石を持ちて出来り、

善太 さあ〜髪結さん、早く来てくんなく〜。

才三 今行くよ、横町の伊勢屋をしまつて直に行くから、番頭さんにさういつておいてくんな。

善太 何さ、番頭さんちやあねえ、お駒さんが襟を刺つて貰ひてえから、早く呼んで来いと言ひなす。

た。早く来なせえ〜。

才三 お駒さんが呼んで来いとか、それぢやあちよつくら行かざあなるめえ。こゝろ萬や手前へ伊勢屋

へ行け。

萬次 あい、先へ行くから、早く来なさいよ。

才三 今直に行くよ。

萬次 お駒さんちやあ、直にやあ来られまいの。

才三 無駄を言はずと、早く行けよ。

善太 さあ、早く来なせえ。(ト萬次は花道へ戻つてはひり、善太は才三をひつぱり舞臺へ来て)はい、番頭さ

ん、番頭さん、髪結さんを連れて来ました。(ト門口へはひりながら大きな聲にて言ふ。)

丈八 このべらほうめ、大きな聲でびつくりさせをつた。

才三 番頭さん、今日は結構なお天気でございます。

丈八 お、髪結かみゆひどんか、待つてゐた、髭ひげだけちよつとやつて貰もらひたい。

才三 お前まへさんかえ、こう子僧こそうどん、お前まへお駒こまさんが呼よんで来いと云いつたぢやあねえか。

善太 番頭ばんとうさんだといふと、髭ひげにおそれて来こねえから、お駒こまさんが呼よぶといふ計略けいりやくはこの善太ぜんた 何なにと磨もがつぶれたか、ばたくばつたり。(ト不器用ぶきように見得みえをする。)

才三 え、忌々いまくしい、一ぱいはめられたか、仕方しかたがない。さ、やりませう。(ト剃刀かみそりを磨もぎにかゝる。)

丈八 仕方しかたがないとは御挨拶ごあいさつだ、小僧水こそうみづを汲くんで来い。

善太 あいぐ。

ト丈八ぢやうはち真中まんなかへ坐すわる。善太ぜんた金盥かなたらいへ水みづを汲くんで来くる。才三さいざ捨すてセリフにて髭ひげを剃そりにかゝる。奥おくよりお駒こま振ふ袖そで、娘むすめの装なり、下女げよおかつ附つき出いで来きり、

かつ 髪結かみゆひどん、先刻さうごにからお駒こまさんが待つておいでなさるに、何なにをしてござんしたえ。

才三 おかつどんか、何なんだお駒こまさんが待つてゐなさるえ、そりや私わたしちやあござりますまい、外ほかの者ものたらうね。

お駒 才三さいざさん、いえ才三さいざどの、さつきにから待つてゐるに、外ほかの者ものとは何なんのこゝらぞいの。

丈八 もしお駒こまさん、お前まへさん髪結かみゆひを待つてゐるとおつしやるが、何なんの御用ごようでござります、

お駒 さあ、その用といふはな。

かつ お駒さんが御用とは、襟が剃つて貰ひたいとおつしやつてなあ。

お駒 さあ、その襟よりはまだほかに。

才三 何だ、襟が剃つて貰ひたいえ、嘘ばかり。私ぢやあねえ。聲さんの彦三様にたんと剃つてお貰ひなされませ。

お駒 そりや何を言はしやんす、どうして私が彦三さんに。

丈八 お駒さん、お前はあの聲さんは、お厭かいな。(トお駒の方を向かうとする。)

才三 どつこい、髭を剃つてゐる中は、こつちの顔も同然、自由にやあなりません。

ト顔を持つてこつちへ向かせる。

善太 え、いゝ氣味だく。

丈八 何をこいつが。

才三 これさ、動いちやあいけませんよ。

かつ もし才三殿、お駒さんのお心を知つてゐながら、何を言はしやんすぞいな。

才三 お駒さんの心かえ、私アよく知つてゐます。浮氣者の情なし、初めの中は兎や角と親切らしく言

つたのを、眞面目に受けたが大きな間抜け、こつちの思ふ半分も先ぢやあ思つてくれないのが、  
浮氣女うはきをんなのみんな持前もちまへ、ねえもし番頭ばんとうさん。

丈八 それく、いくら男をとこの方ほうで思おもうても、そこらあたりの女子をんなごの方ほうではつんくと、ちつとはこちの  
心こころの中うちを、汲くんでくれたがよいぢやござりませんかえ。(ト又お駒こまの方ほうを向むかうとする。)

才三 これはしたり、さう動うごかれちやあ、切きりますよ。

丈三 おつと切きられてたまるものか。(ト正しやう面めんを向むく。)

お駒 いえく、そんな恨うらみを受うける覺おぼえはござんせぬ。私わたくしが心こころの言い譯わけを、

かつあもし、それをこゝでおつしやつては、な、邊あたりに人目ひとめ。(ト言いつては悪わるいとの思おもひ入いれ。)

才三 何なんの人目ひとめどころか、許嫁いひなづけの髻びこさんだもの、随分ずぶん伸のをよくなさるがいゝのさ。

お駒 あれ、またあんな。(ト思おもひ入いれ。)

丈八 これく、才三、髻びこ様の彦三ひこさぶ様とお駒こまさんが仲なのよいのが、何なんで貴様きさまは腹はらが立たつのだ。

才三 いゝえいさ、髻びこさんばかりならようござりますが、お駒こまさんにやあ此この頃ころまた蟲むしがつかましたよ。

丈八 なに、蟲むしがついたとは。

才三 あい、蟲むしさ。(ト才三元さいげん結むすをひねつて、)こんな蟲むしがついたのさ。(ト丈八ぢやうぱちの襟えりへ入いれる。)

丈八 あゝ氣味の悪い。これ、てんがうせすと、早う剃らぬかいの。

才三 はいく、ちつとしておいでなさい。

かつ もし、才三殿。えゝも、言ひ度うても。

ト丈八へ思入、才三丈八の耳を兩手で塞ぎ、

才三 おかつどん、何が言ひたいのだ。

かつ その言ひたいのはな。(ト言ひかける、丈八思入。)

丈八 これさく、何故おれが耳を押へるのだ。

才三 いえさ、耳が剃れたか、押へて見たのさ。

丈八 てんがうせすと用がある、早く剃つてしまつてくれ。

才三 はいもう、眉毛を剃付けるとしまひでござります。危いから目をしつかりと塞いでお出なさい。

丈八 よしく、それしつかりと瞑つてゐるぞ。(ト丈八目を塞ぐ。)

かつ もし丈八どの、それでは何處も見えまいがな。

丈八 どうして、さつぱり見えはしない。

かつ 見えぬその間に。(ト思入あつてお胸才三へ囁く。)

お駒 かうちやわいな。

才三 そんなら、今夜私の家へ。

お駒 必ずその時私が言ひわけ。

かつ 待つてゐて下さんせえ。

才三 はい、合點でござります。(ト浮かれて、丈八の片眉毛を剃り落す、善太見て)

善太 やあ、番頭さんの眉毛が半分なくなつた、ハイ〜。(ト手を拍つて笑ふ。)

丈八 何、おれが眉毛がどうした。(ト撫で、見ておどろき) やあ〜、こりや眉毛が半分紛失した。

才三 ほんに、これは思はぬ粗相、眞平御免なされませ。

丈八 やい〜おのれは〜、白木屋の白鼠忠義一途の番頭たるべき丈八が眉毛を、半分剃落して濟ま

うと思ふか。

才三 いえもう申譯もない不調法、然し眉毛が片方残りましてもをかきなものは、とてもことに兩方

から剃落してあげませうか。

丈八 白痴面め、おのれ人を嘲弄しをるか。うぬどうしてくれう。(ト立ちかゝる、善太見て)

善太 やあ、をかしい、片方の眉毛で力みをる、これがほんのかたくかただ。(トツクをうつ眞似をする。)

丈八 おのれまでが同じやうに、たゞきのめしてくれう。

善太 そりや、怒つたく。

ト善太逃げて奥へはひる。丈八算盤にて才三郎を打たうとするをお駒とめて、

お駒 これ丈八、わしが才三殿に襟を刺つてくれと頼むはずみに、そなたの眉毛をつい落した故、私が  
詫言するほどに、堪忍してたもいなう。

丈八 いえく、お前さんが詫をなさるが一倍腹が立ちます。お放しなされませく。

かつ これく丈八殿、髪結どんもさうぢやというてなれば、もう堪忍してやらしやんせ。

丈八 いやく、了簡ならぬく。

才三 もしく、どうぞ御了簡なされて下さりませ。

かつ あれ、あのやうにあやまつてぢやわいな。さあ才三どの、お前は早く歸らしやんせ。

才三 はいく左様なら、私はお暇いたませう。(ト才三鬘盥を持ち門口へ出る。)

お駒 これ才三どの、必ず晩に。

丈八 なに、晩には。

才三 いえさ、晩ほどお詫にまゐりませう。

ト才三花道へはひる。三人は捨セリフよろしく、奥より善太出て、

善太 おかつどんく、旦那様がお呼びなさる、早く來なせえく。

かつ あいゝ忙しない、今行くわいな。(トおかつ、善太奥へはひる。)

お駒 これおかつ、わしも一緒に行くわいなう。(ト行かうとするを丈八とめて、)

丈八 どつこい、逃がさぬく、ちよつとお待ちなされませ。

お駒 丈八としたことが、こ、放しやいなう。

丈八 いえく放されませぬ。お前様に言はねばならぬことがござります、下においてなされませ。

お駒 いえく、そなたに何も聞くことはないわいなう。

丈八 お前さんがなうても、私の方にたんとござります、まあ下においてなされませ。(トお駒を無理に坐

らせて、)もしお駒さん、お前さんはおいとしいなく、小さい時から許嫁の彦三様はお前を嫌ひ、

この頃は假宅へ居續け、山の宿の佐野松屋の古今といふ女郎に陥り、内を外なる身持放埒、親且

那も今に愛想を盡かし、追出しなさは知れたこと、あんな水臭い男は思ひ切り、心立のよい聳

をとつて、親旦那に樂をさせるが、孝行といふものでござりますぞえ。

お駒 なるほど、そなたの言やる通り、不束な私故嫌うてござんす彦三様、疾うから私や思ひきつてる

るわいな。

丈八 そんならお前は、聳さんと思ひ切り、外に思ふ男でもござりまするかえ。

お駒 さあ、恥しいことながら、私が思ふは、つい、こゝらに。

丈八 私が思ふは、つい、こゝらには。(トいろく思入あつて)もしお駒さん、思ふ男といふは、この丈八でござりますかえ。

お駒 何のそなたに、阿房らしい。

丈八 なに、阿房らしい。というて外に男は見えず、やつぱり私ぢやく。え、有難い忝い、さうい

ふお前の心と知らず、もう言はうかくと口までぞろぞろ出かけても、言出し兼ねてをりました。有りやうはお前の顔を見る度に、氣も心もうきくとして、どうもなることぢやくござりませぬ。

あらうことか白木屋の番頭とも言はれる者が、どうぞ此の戀かなひますやうにと、夜々芝の神明様へ跣足参りをいたしました。その御利益でお前の方から、氣があるとは、え、有難い。

トお駒の袖を捉へるを、お駒振拂つて、

お駒 え、も何のことぢやく、悪いことしやんな。

トお駒逃げるを追廻す。花道より彦三少々酔つたる體にて出來り、門口へ來て、わざと咳拂ひをして

内へはひる。丈八心附かずお駒と心得彦三を捉へる。

彦三 これ、丈八、何をしやる。

丈八 (びつくりして) や、お前様は若旦那様。

お駒 (びつくりして) ほんに、あなたはいつの間に。

彦三 お駒どの、商人の店先で不行儀千萬。いやさ、番頭殿とお樂しみぢやの。

お駒 いえく、どうして私が。

彦三 いやく、お樂しみく、は、は、は。何ぢややら私も酔つて、さつぱり分からぬ。これお駒、水

一つたも。

お駒 あい。く。(トお駒奥へはひる。)

彦三 これ番頭殿、そのやうに面目ない顔せずと、私が戻つたこと親父さまへお報せ申したも。

丈八 はいく、かしこまりました。折角うまくやりかけた所を、悪いところへ。

彦三 どうしたな。

丈八 どれ、お報せ申してまゐりませう。

ト丈八奥へはひる。お駒水呑茶碗を盆へ載せ、持つて出で、

お駒 はい、お冷水を持つて参りました。(ト前へ出す、彦三取つて)

彦三 お、大儀々々、(トぐつと呑み) あ、酔覚めの水、甘露々々。

ト思入、奥より白木屋庄兵衛更けたる打扮、羽織着流しにて出で、

庄兵 何ぢや、悴が戻つたとか。(ト言ひながら住ふ。)

彦三 親父さま、唯今歸りましてござります。

庄兵 お、彦三戻つたか、見れば酒機嫌の様子、得意廻りに一昨日から出で、今日で三日戻らず、そり

やも若い者のこと故、假宅にでもゐるのならばよけれども、口頃實體なそぢ故、もし神隠しにで

もなりはせぬかと、たいてい案じたに、よう無事で戻つて來やつたの。

彦三 親父様、私はあんまりようも戻りませぬ。

お駒 (思入あつて) もし若旦那、父様があなのやうに機嫌ようおつしやるに、あんまりようも戻りませぬ

とは、何事でござりますえ

彦三 はて、知れたこと 家にゐては親父様の澁い顔や、そなたの愛想のない顔を見るが厭さに、得意

廻りをかこつけに此頃の夜泊り日泊り。勿體ない、十年以來御恩を受けた親父様、いや恩を受け

たとはいふもの、こつちから頼んだといふではなし、そつちの勝手に小さい時から養子に貰は

れ、但一つ不足なく育てられたは世間いつたい、こりや當然といふもの。その上望みもないこのお駒と夫婦にすると言はれるが、いやで／＼そなたの顔を見る度に、むしづの出るほど厭でござります。何の阿房らしい、この身代の一つや二つ貰うたとして、町人は一夜檢校、もしもの事でもある時は、箸も持たぬを食も同然、それ故片時も此の家にゐることが、私はいやになりましたござります (ト思入にていふ。庄兵衛思入あつて、)

庄兵衛 これ彦三、最前からの悪口雑言、酒の上ちやと思つて聞いてゐたが、そんなら眞實娘や親に。

彦三 ふツつり愛想が盡きました。

お駒 もし彦三さん、御酒の上ではありながら、言ひたいがいな愛想盡し、そりやも不束な私が、御氣に入らぬは知れてあれど、何の恨みで父さんに、愛想が盡きて此の家を、お前は眞實出やしやんすのかいな。

彦三 おゝ出るともく。何の隠さう、吉原の佐野松屋の古今といふ女郎に馴れなじみ、引くに引かれぬ深い仲、此家を出てその女郎と夫婦になり、假令肩へ棒を當て、しつけぬ生業してなりと、氣儘に浮世が渡りたうござります。どうぞ親父様、私を御離縁なされて下さりませ。

庄兵衛 成程娘が氣に入らずこの親にも愛想が盡きて、家にゐるが厭ならば離縁しまいものでもないが、

柴井町にゐるそちが兄御、伊丹屋十兵衛殿から貰うた忝なれば、十兵衛殿に逢つた上、はて、厭なものなら不縁のもと、勝手に暇をやりませう。

彦三 そんなら私の、望みの通り。

庄兵 お、離縁せいで何とせうぞい。

彦三 それ聞いて、落付きましてござります。

ト花道より十兵衛羽織装にて出で、舞臺へ來り、家へはひらうとして門口に窺ひゐる。此中奥より丈八、おかつ出で、

丈八 もし旦那様、お前様やお駒さんに、愛想が盡きたといふ道樂息子の彦三殿、定めてお前様も愛想がお盡きなされましたならば、何の十兵衛殿に御相談は入りませぬ。望みの通り、とつと、追出しておしまひなされませ。

彦三 誰かと思へば丈八殿、こなたにも今までは何かと世話になりました。急に此家が厭になり、離縁を望む彦三を、とつと、追出せとは忝い、禮から先へ言ひませう。

かつ もしお駒様、様子は残らず承りました、目頃おやさしいお心に打つて替つた若旦那様、御離縁なされたいとおつしやるは、もしやあなたの。

お駒 あゝこれ、不束な私に愛想の盡きるは御道理なれど、日頃から御不便がる父様を捨て、家出を  
一ししたいとおつしやるは。

かつ どうも合點がまるりませぬ。

彦三 はて知れたこと、親父様始め内外の者に愛想が盡きて離縁して出て行くに、仔細もございもある  
ものか。

丈八 いや呆れたものだ。大恩のある親旦那にふて勝手の罰あたり、傍に聞いてるてさへ悔しくつて悔  
しくつてなりませぬ。私が一走り迎ひに行つて、十兵衛どのを呼んで來ませう。

ト丈八立ちかゝる。十兵衛門口にて聞いてゐて思入あつて、

十兵衛 あいや、お迎ひには及びませぬ。伊丹屋十兵衛、丁度これへ参り合せてをります。

ト門口をあけて十兵衛はひる、皆々見て、

彦三 ほんに、お前は兄者人。

庄兵衛 おゝ十兵衛殿、いつの間にござつた。さあくこちらへ入らつしやれく。

ト十兵衛通らうとして丈八を見て、

十兵衛 これは番頭さん、此間は御目にかゝりませぬ。

丈八 十兵衛様、よくおいでなされました。すつとお通りなされませ。(ト氣の毒さうにいふ。)

十兵 左様なら御免下さりませ。(ト十兵衛よきところへ住ひ) 搦庄兵衛様、その後は久々お日にかゝりま

せぬ、御機嫌よう。お願さんにもお變りなく、お日出度うござります。

庄兵 十兵衛殿にもお達者で、お互ひに悦びます。こなたには大阪からいつ戻られました。

十兵 へい、やうく一昨日歸りましたばかり、私旅行中は何かと御厄介にあづかりまして、御禮の

申上げやうもござりませぬ。

庄兵 いやも、別條なく戻られて、このやうな目出度いことはござらぬ。さうして大阪表の用向は調へ

て戻られたかな。

十兵 有難うござります。右の金子は思ひがけなく、いえ、もう首尾よく調達いたして歸りました故、

御禮旁々今日上りまして、唯今お店先で委細は承りました。詳しい様子は存じませぬが、十一

の年から御思になつた、あなたへ對して彦三めが唯今のふて勝手、このお家に愛想が盡きて離縁

したいなど、まるで氣違ひ同然な奴、打ち打擲も致し度うござりますが、こゝでいたさばお

家の恥、私が宿へ連歸りまして、きつと性根をたゝきなほしますが、もし役に立たぬ根性ならば

十兵衛に思案がござりますれば、どうぞ私に弟めをお預けなされて下さりませ。

庄兵 いかにもこなたへ預けませう、何をいふにも若い者のこと、とつくりと彦三の了簡を聞いた上、厭のものならば厭のやうに、兎も角も相談ませう、直に彦三を連れて行かつしやれ。

十兵 有難うござります。これから同道いたして歸ります。やい弟、おのれはまあ天魔の見入りしか、情ない恐ろしい根性になりをつたな。まあ何事もこゝでは言はぬさ、おれと一緒に柴井町へ歸りやれ。

彦三 行きますともく。愛想の盡きた家に半時たりともゐるのは厭だ、大手をふつて出て行きます。丈八 あれ、あの通りの無頼漢。十兵衛さん、とつと、早く連れて行かつしやれ。

十兵 はいく、いやもどなたもお腹の立つは御尤も、もしお駒さん何れ一兩日の内お詫に下ります。ほんにお前さんに上げようと、駿河細工の絲箱を買つて来て、急いで忘れてまゐりました。その時持つてまゐります。旦那様へよろしうおつしやつて下さりませ。

お駒 そんなら、もうお歸りでござんすか、口頃に替る彦三さん、合點の行かぬ今日の仕儀。かつ どうやら御様子のあるさうな事、憚りながら十兵衛様、御思案なされて下さりませ。

十兵 御親切に有難うござります。さあ弟、御挨拶申して行きをらぬか。  
彦三 出て行く家へ何の挨拶、然しこれまで養育の恩も送らず、剩へ心にもない、いや、どうとも勝手

にするがいゝ、顔を見るのもふつくしいやだ。(ト言ひながら門口へ出る。)

十兵 (も門口へ出て) こりや、口數利かすと行きをらぬか。

彦三 でも、挨拶をしろとお前が。

十兵 えゝ、口強情な。左様ならば旦那様。

庄兵 十兵衛殿、しづかに行かつしやれ。

丈八 (門口へ来て) さあ、きりくゝと歸つて貰ひませう。

彦三 ろろと言つても、ゐるものかえ。

十兵 はて、黙つて行けといふに。おやかましようござります。

ト思入あつて行きかける。彦三つぶやくを叱りながら兩人花道へはひる。

丈八 やうく行きをつた。もし旦那様、あのやうな悪い奴は逆出しておしまひなされて、そこら

あたりにもます實體な孝行な聲さんを、お取りなさるがようござります、なあお駒さん。

トそつとお駒の手を取る、お駒振袖にく丈八をたたく、庄兵衛思入あつて、

庄兵 これ丈八、最前私が屋敷方へ送つた、材木の帳面を調べかけておいた、わがみ奥へ行つて調べて

おいでくれ。

丈八はいく、畏りました、どうで私が貰ふこの身代、お駒さんも得心で。

庄兵や。

丈八いや、とつくり帳の調べをいたしませう。(ト奥へはひる。)

庄兵これ、娘こゝへ來や。

お駒あい。(トもぢくしてゐる。)

庄兵はて、こゝへ來やれといふに。(ト合方になり、お駒おかつと顔見合せ、お駒傍へ來る。)

みは何と思やるか、口頃孝行にした彦三が、この頃の身持放埒、離縁を望む心底は何か様子のお

りさうなこと、わがみは彦三が家を出ても淋しいことはないか。これ、黙つてゐては分からぬ。

どうでもわがみは彦三が氣に入らぬか。

お駒はい。(ト苦しき思入、おかつはさう言つては悪いといふ思入。)

庄兵 十二の年から養子に貰うたあの彦三、夫婦になるのが厭になつたのは、もしや外に好いた男が、

いや、そんなことがあるまいものでもなければどら、まゝにならぬが浮世の中、これ、親一人子一

人ぢやぞよ、外に便りのない此の親に、必ず、苦勞をかけてたもるなよ。

かつ 御尤もでござります。お駒様に限り、そのやうなことはござりますまいけれども、また私かといつ

くりと、お心の内をお尋ね申して見ませうわいな。

庄兵 女房が死んでから氣儘に育てた一人娘、あまい親ぢやと笑はせてたもるなよ。

お駒 もつたいない、父さんのお言葉、

かつ 必ず仇に思召しまするな。

お駒 ほんに思へば世の中に、

庄兵 苦勞は絶えぬものぢやなあ。

ト時の鐘にて、よろしく道具廻る。

(裏借家才三内の場)——本舞臺三間の間平舞臺、正面崩れたる鼠壁、錦繪などを張りし襖を立てたる一間の押入。上手一間折廻し崩れ壁。下手一つ籠勝手道具あり。よき所に神棚、いつもの所門口。此の外崩れし板塀、總て材木町裏借家の體。こゝに角行燈を灯し、才三以前の装にて寐轉び、下刺萬次と合巻を見てゐる。さんげくにて道具留る。

才三 さつき伊勢屋で借りて來た草雙紙は、龜井戸の國貞の繪で面白さうだ。

萬次 こりや種員の弟子の柳水亭種清の作で、五月雨濡仲町、小三金五郎さ。

才三 ほんに草箋紙で思ひ出した。今夜横町の寄席が大寄で、玉輔、扇橋、馬生三人の摺合咄だ、予前四つまで聞いて來ねえか。

萬次 そいつ有難え、本當にやつておくんなさるか。

才三 なに、嘘をつくものか、さあ行つて來さッし。(ト吹煙草入より百錢をだしてやる。)

萬次 こりや有難え。お前酒をさう言へと言ひなすつたから、買つておいたが、お客でもあるのかえ、こゝにあります。そんなら行つて來ますよ。

ト萬次はよき所へ徳利を置いて、花道へはひる。才三思入あつて、

才三 いつぞや殿様のお眼鏡にて、表向御追放と偽り、紛失なせし御家の重寶花形の茶入、詮議せよと有難きお指圖、お髪を上げたを幸ひ町髪結となり、日は淺草明日は深川と、所を替へて茶入の詮議、寶紛失の夜より行方知れざる筑田喜藏が中間小兵衛、たしかに寶の紛失も彼等が仕業に疑ひなし、この程芝にて計らずも、茶入の袱紗は手に入りしが、まだ兩人が行方知れず、どうぞ早く詮議の手蔓に、取りつき度いものぢやなあ。

ト思案の思入。花道よりおかつぶら提灯をさげ、お駒の手を引き出來り、

お駒 そなたの教へた通り、琴の御師匠さんへ行くと父さんに嘘いうて家を出たが、早う才三さんに逢

はせてたもないなう。

かつ 向うの角の長屋が才三様のお家でござります。さあおいでなさりませ。(ト兩人舞臺へ來り、門口より覗き)もし才三さん、お内でござりますか。

才三 お、おかつどんか、さつきから待つてゐました。(ト門口を明ける。)

かつ よう待つてゐておくんさいました。お駒さま、おはひりなされませ。

ト兩人内へはひる。才三は門口へ掛金をかけて三人よろしく住ふ。

才三 よくおいでなすつた。さあ、こつちへおいでなさい。

お駒 才三さんお前に逢はうと、父さんに嘘いうて、やうく家を出たわいな。

才三 こんな汚ない所へ、お坐りなすつたことはあるまいが、まあゆつくりとお話しなさい。

かつ 却つてこれがお願さんの、お楽しみでござりますわいな。

お駒 才三さん、お前も知つてござんす通り、此間から彦三さんの夜泊り日泊り、今日久しぶりで戻るか否や父さんや私へ愛想盡し、離縁してくれいと言はしやんす所へ、兄さんの十兵衛さんがござんして、連立つて家を出て行かしたわいな。

才三 そんなら彦三殿は、白木屋の家を出る所存で、兄十兵衛の所へ行つたと言やるか。

かつ 日頃親御様へ御孝行な彦三様、俄にお心の變つたは、お駒様とお前様の仲を御存じの上の、御縁ではあるまいかと存じます。

才三 彦三殿の兄の十兵衛は、元私が親父様の家來なれば二人が仲を覺り、主筋の義理を思ひ泣風立てず離縁する彦三が實の心底、盃こそせね幼きより、許嫁せし彦三が女房お駒、言はずと知れた御夫の才三、添ふに添はれぬ二人が悪縁。

お駒 そんならお前は、彦三さんの義理を思ひ、私を捨てるお心かいなあ。

才三 捨てる心はなけれども、浮世の義理が立たぬわいなう。

お駒 情ないこと言はしやんす。今更お前に捨てられては、私や死ぬより外はござんせぬわいなあ。

ト才三にもたれて泣く。

かつ お小さい時お屋敷へお上りなされて、彦三様とお許嫁のことは御存じない故、才三様も深いお仲におなりなされたことなれば、親日那様へお話し申して、仕様もやうもござりませうほどに、心すきな／＼お思ひなされまするなえ。

萬次 (はた／＼にて花道より走り出来りて) おい／＼才三さん、もう寐なすつたか、大變だ／＼。

ト門口をたゞく。

才三 何だ、萬次か、大變とは何のことだ。(ト兩人を後へ寄せ、門口を明ける。)

萬次 大變といふのはね、横町の髪結の親方の家に夫婦喧嘩があつて、皆々行つてゐるからちよつと顔を出しなさい。(ト手を取り、引つ張る。)

才三 なに、親方の所に喧嘩がある、今こつちにちつと用があるから、手前いゝやうに言つてくれる。

萬次 いゝえ、それぢやあ悪いから、ちよつとおいでなせえく。(ト引張る。)

才三 仕方がねえ、行くよ。今穿物を穿いて行くわ。

萬次 穿物は何でもようござります、さあ早くおいでなせえく。

才三 忙しねえ男だ、今行くといふに、

ト才三穿物を捜す振りにておかつに囁き、門口へ出る。萬次引張り花道へはひる。お胸おかつ見送り、門口をしめる。時の鐘になり、花道より筑田喜藏五十日、髪冠り着流し大小にて、小兵衛は白髮鬘一本差にて出來り、

喜藏 裏家住居の才三が家へ忍んで來てゐる白木屋の娘、日頃の思ひを晴らさうといふ、小兵衛めが思ひ付き。

小兵 當百四枚で下痢の野郎をうまく欺し込み、才三めをつり出させ、あとへこつそりしけ込む魂膽、

ちつとも早く行かつしやれ。

ト兩人舞臺へ來り、門口より窺ひ覗き合ひ、そつと門口を明けてはひる、内の兩人見て、かつどなたでござります、此方の主人は出られまして、私共は餘所の者でござります。

小兵（門口へ掛金をかけて、）やかましい、黜つてうしやあがれ。

兩人（兩人をすかし見て、）あれ、盗人が。（ト大きくいふ。喜藏刀を抜きて、）

喜藏 聲をたてると、一突だぞ。（ト刀を突立てる。）

兩人 えゝゝゝゝ。

ト逃げようとするおかつを小兵衛引附ける。喜藏はお駒の帯を捉へる、帯ずるゝと解ける。

喜藏 腰元小牧、筑田喜藏を見忘れはしまい、久しぶりであつたなあ。

ト帯の端を捉へきつと思入、お駒喜藏を見ておどろき、

お駒 や、ほんにお前は喜藏さん、どうしてこゝへ。

かつ そんならもしや、お駒さんが忍んでおいでを聞きつけて。

喜藏 佐々木の屋敷にゐる中から、附けつ廻しつ口説いても、得心しない腰元小牧、尾花才三にうつほ

れて、追放された後を慕ひ、屋敷を下つて親の家、才三も今は町髪結ひ、二人が仲のむやくしさ、

いつか一度は此の念を晴らさうと思ふ中、今夜手前が家を抜け、此の家へ忍んで来ると聞き、實に迎ひをかけ才三めを、旨い手段で追ッ拂ひ、これからおれの隠れ家へしよびいて行つて自由にすゝるのだ。

お駒 え、かういふことゝ知つたなら、此家へ忍んで来まいもの。これおかつ、どうせうぞいなう。かつよろしうござります、私がついてゐます。めつたに手籠にはさせませぬ。

小兵 やかましい、邪魔をしやあがるな。

おかつ いえ、そこ退かしやんせ。

小兵 え、うるせえ奴だ。

ト小兵衛おかつを蹴倒す、おかつ脾胃をあてられ、ウンと倒れる。

お駒 あれ、おかつが。(ト立ちかゝる。)

喜藏 ちつとしてゐるといふに。

ト引きすゐる。小兵衛こなしあつて、

小兵 もし喜藏様、邪魔のない中女めを、早くしよびいて行かつしやりませ。

喜藏 お、合點だ。さあ、おれと一緒にしやあがれ。

お駒 いえく、何でおのれの自由にならうぞ。

喜藏 え、やかましい。

ト喜藏お駒をかい込む。お駒あれえくともがく、喜藏懐より手拭を出し猿轡をかける。小兵衛は門口に窺ひゐる。その中おかつム、と心付き、これを見て、

かつ お駒さまは、やらぬく。

ト喜藏の足にすがり附く、小兵衛臺所より薪を持來り、おかつの帶際をとって引据ふ、

小兵 邪魔をしやあがると、かうだぞ。

ト小兵衛おかつを續けうち打つ。これにておかつ苦しみ、喜藏の足を放す。此間に喜藏お駒を抱へ門口を出ようとす。花道よりバタ／＼にて才三走り出來り、門口を明けようとして明かぬ故内の様子窺ふ。内より喜藏門口を明けるを才三すかし見て、

才三 や、お駒を手籠に、何者なるぞ。

喜藏 誰でもねえ、筑田喜藏だ。

才三 なんと、(ト才三内へ入り、喜藏を附廻し、お駒を圍ひ)お、珍らしや筑田喜藏、扱は屋敷にゐる中よ、心をかけし腰元の、お駒を手籠めのこの場の有様。

喜藏 いかにもうぬが言ふ通り、思ひをかけたお駒故、何といつても連れて行くのだ。

小兵 此の家へ忍んで来ることを、ちらりと聞いたを幸ひに、下刺野郎の質迎ひで、汝を釣出しその後  
の明巢へしかけて寝鳥をさす、小兵衛様の指金だ。腹が立つなら勝手にしろ。

才三 お、存分にする。まだ其の上に、二人の者に詮議がある。(トつかく)と行き押入より一腰を出す)

小兵 こりやをかしい、何で二人に、

兩人 詮議があるとは。

才三 仔細は其身に覚えがあらう、佐々木の重寶花形の茶入、盗み取つたる筑田喜藏、此のほど芝にて  
手に入れたる鴛鴦切のこの袱紗。(ト二幕目で手に入れし袱紗を出して見せ) 小兵衛が持參と聞いた  
るからは、二人が仕業に疑ひあるまい。さあ眞直に、白状いたせ。

トきつと言ひかけ、ぶるく震へ出す。

お駒 もし才三さん、何でお前はそのやうに。

才三 や、折も折として此の病ひ、え、え、え。(ト身體を押へ梅しき思入、兩人見て)

小兵 何だく。やい才三、何でぶるくふるへるのだ。

才三 此程よりの瘡の病ひ、寶詮議の緒に取付きながら、身動きならぬこの業病、思へばく口をし

い。

ト震へる思入、小兵衛聞いて才三を蹴倒し足にて踏む。アレとお駒寄るを喜藏引附けきつと見得。

小兵衛さあ野郎、動かれるなら動いて見ろ。詮議々々とぬかしても、身動きはなるめえが。  
喜藏やい才三、無念口をしいか、い、態々、我が尋ぬる花形の茶入は、この喜藏様が盗んたのだ。  
才三すりや推量に違ひなく、汝等兩人が仕業よな。

小兵衛盗んだ譯を言つて聞かさう、よく聞きやあがれ。御日那喜藏様が預かりの、御納戸金二百兩遣ひ込んだを、われが親尾花六郎左衛門に、見出されて殿へ披露したばツかり、喜藏様は門前拂ひ、それが無念さ、六郎左衛門が預かつてゐる寶の茶入、ひん盗んだ越度にて六郎左衛門は腹を切り、くたばつたので意恨は五分々々、とてもものに惚れてゐる、以前の家來庄兵衛が娘のお駒を取持つのも、おれが手で茶入を質に入れた金を山分にした恩返し、仔細といふはこの通りだ。憎まば憎め遠慮はねえぞ、こりや敵役の當然だわ。

ト踏みにじる。才三その足を取つて跳れ起き、小兵衛を投げのけ、きつと見得、喜藏驚き、喜藏や、才三郎がこの體は。

才三お、瘡の病ひと言つたは偽り、企みの次第を聞かう爲め、茶入の盗賊一人とも繩打つて屋敷へ引

く、さあ尋常に覺悟なせ。

喜藏 そんなら病ひと言つたのは、茶入の在所を聞く手段か。

小兵 (立上りて) それ知られた上からは、生けてはおけぬ、覺悟ひろけ。

才三 小癩な一言、茶入の在所を白狀なせ。

喜藏 面倒な、疊んでしまへ。

ト三人刀を抜き、よろしく立廻り、ト、才三喜藏を一刀切る、喜藏ハツと苦しむ。お胸鬘の剃刀を取り喜藏へ突いてかゝる。小兵衛たちとなり、正面の壁へ行當る。これにて壁ばらりと壊れると、小兵衛はその壊れより後ろへ逃げてはひる。才三はその後を追かけてはひる。此中お胸は喜藏と立廻りあつて、

喜藏 こりやお駒め、故主の喜藏を切る氣だな。

お駒 夫の助太刀、覺悟しや。

喜藏 小癩な女め、くたばつてしまやがれ。

ト兩人立廻つてきつと見得になり、尙兩人立廻りの中にお駒も傷を負ふこと、ト、お胸喜藏の脇腹へ剃刀を突込む、喜藏ハツと苦しむ、この模様にて道具廻る。

(借家裏手の場)——本舞臺三間一面屋根附の崩れたる鼠壁、上の方松の立木、下手崩れたる屋根を見せたる物置、總て今の借家裏の體。上手に才三刀を振上げ、下手に小兵衛傷を口ひたる體にて刀を差附けてゐる。

才三 さあ小兵衛、茶入の在所、きりく白狀してしまへ。

小兵 いや知らねえ、覚えはねえ、よしまた知つてゐるとても、うぬに知らせてなるものか。

才三 言はずばかうして。(ト小兵衛を一刀切る。)

小兵 人殺しだ。

ト聲を立てる。才三小兵衛の口を押へ、立廻つてきつと見得。これより兩人立廻りあつて、才三小兵衛を切下げる、小兵衛苦しみ倒れる。才三落ちたる煙草入を見付け、中より出かゝりし書物を取り、開き見て、

才三 や、こりやは茶入の質入切手、これさへあれば、え、忝い。(ト煙草入のまゝ懐中する。時の鐘にて

後ろの壁の崩れより、お駒剃刀を持ちて這ひ出る、才三見て) や、お駒には傷を負つたか。

お駒 才三さん、茶入の在所は知れましたか。

才三 今小兵衛が取落したる、煙草入に入れあつたる、寶の茶入の質入切手。して喜藏めは。

お駒 假令悪人なればとて、現在故主の喜藏殿を、我が手にかけては主殺し、その言譯は。

ト刺刀を喉へ突き立てる。

才三 すりやお駒には、命を捨てよ。

お駒 悪人なれども喜藏殿を、手にかけてたる上からは、親へ難儀のかゝらぬやう、此の身を捨てよ。

才三 あつばれ心底、それでこそ武士の娘、寶の茶入手に入れて、殿へ差上げその上にて、後より追付

死出三途。

お駒 いえく、此の場の罪は死行くこの身に引受ければ、お前は寶を手に入れて、御歸參なされたる

の後に、幾萬歳の御壽命過ぎ未來はどうぞ。

才三 云ふにや及ぶ、未來永々替らぬ夫婦。

お駒 そのお詞が未來へ土産。

才三 心残さず成佛しやれ。

お駒 嬉しうござんす。

才三 見捨て、行くは本意ならねど、片時も早く寶の質受。(ト行きかゝる。)

萬次 (窺ひ出で)うぬ、才三め。

ト才三へかゝる、才三よろしく引附ける。お駒思入あつて、

お駒　これが別れか。

才三　ふびんやお駒。

お駒　早うお前は。

才三　合點だ。

ト才三萬次を投げのけ、逸散に花道へ走りはひる。お駒落入る。これにて道具廻る。

(柴井町伊丹屋の場) 本舞臺三間常足の二重。正面鼠壁、真中暖簾口。上方障子屋體。下の

方三尺の袋戸棚、へだて四つ目垣、此の脇小庇附の伊丹屋勝手口といふ腰高の本障子。總て柴井町居

酒屋裏手の體。上手の屋體に、十兵衛女房おしづ病鉢巻にて病み勞れし體、木綿夜具の上に括枕に

もたれある。二重に以前の十兵衛行燈を點けてある。時の鐘、門附の合方にて幕明く。

しづ　旦那殿、また日が暮れるのかいな、あゝ日の暮れるが厭でならぬわいな。

十兵衛　それでもどうも仕方がねえ、そんなことを言はずとも精出して薬を呑んで、早くよくなつてくれ

ろよ。

しづ いくら藥を呑んだとて、どうで助からぬ私の病ひ、此の苦しみをしようより、一日も早く死にたいわいな。

十兵 馬鹿なことを言つたものだ。假令死にたいと言つても、命があれば死なれるものぢやあねえ。病

ひは氣から起きると言ふから、氣をはきく持つがい、何ぞ喰ひてえものでもねえかの。

しづ いえく、何も喰べたうはござんせぬ。え、早う死にたいわいな。

十兵 はて、困つたものだなあ。

ト暖簾口より以前の彦三出來りて、

彦三 兄者人こゝにござりましたか。姉者人お粥でもあがらぬか、拵へて來ませうか。

しづ 彦三どの、もうく、必ず構うて下さるな。

十兵 今も何ぞ喰へと言へば、何も厭た兎角早く死にたいくとばかり、實におれも當惑するよ。

彦三 御尤もでござります、其の御苦勞なさる中へ、又御苦勞をかけます私の不行跡、而日次第もご

ざりませぬ。

十兵 兄弟の仲に何そんな、氣の毒なことはなけれども、合點の行かぬ汝が心底、小さい時に白木屋へ貫はれ、十二の年から大恩受けた養ひ親の庄兵衛どの、常から孝行な者、實體な者と不便をかけ

られたおぬしが、打つて替つた今の仕儀、是には何ぞ様子がなくてはならぬ筈、兄弟の仲に遠慮はないほどに、包ますかくさず其の仔細を、言つて聞かせてくれまいか。

彦三

事を分けたる兄者人のお詞、假令どのやうなことがあらうとも、言ふまいと思つたなれど、言はねば明りの立兼ねる此の身の言譯、一通りお聞き下さりませ。(ト思入あつて、) 何をおかくし申しませう、十二の時から大恩受けた庄兵衛様、末は夫婦と約束のお駒どの、お前の故主尾花の御子息才三郎殿と言交し今は互ひに深き仲、この彦三がある時は言はずと知れた密夫も同然、一人は恩ある養父の娘、相手は縁ある故主の御子息、この身さへ退く時は浪風立たすと思案を極め、心にもない身持放埒、愛想を盡かされ離別の望み、こゝに一つの難儀といふは、ふつと馴染んだ吉原の佐野松屋の古今といふ女郎、ほんの座興に二度三度、今では退くに退かれぬといふ其の譯は、弟の行方を尋ぬる古今、頼る方なき女の一人身、力と頼むと切なる心底、據なき義理詰故、色には染まねど孝心の道につながる悪縁は、定りごとく、兄者人、お許しなされて下さりませ。

十兵 詳しい様子を聞いて見れば、こりやさうなければならぬところ、大恩のある白木屋の家へ紙を付  
けず離縁をするとは、若い者には似合はぬ心底、出かしましたく。

トこの様子を聞きおしづ思入あつて、

しづ彦三殿ひこさうどのが小さい時ときから、許嫁いひなづけのお駒こまどのと言交いわかはしたのは私わたしが弟才三郎おとこさいらう、それ故科ゆゑとがもない身みに疵きずを附つけ離縁りえんする彦三殿ひこさうどの、面目めんぼくないやら切せつないやら、そんな事ことを聞きくに就つけても、一日いちにちも早はやく死しにたいわいの。

十兵 又またそんな愚痴ぐちを言いふと、一倍病はいやまひが重おもくなる。苦勞くろうの絶たえぬは浮世うきよの中なか。さうしてその古今こきんとやらの弟おとこといふは、何處いづくの何なんといふ者ものぢやぞ。

彦三 その古今こきんといふは芝しばの片門前かたもんぜんで、至いたつて貧まうしう暮くらした者もの、文彌ぶんやと云いつて盲目まうもくの弟おとこに官位くわんゐが取とらせ度たく、佐野松屋さのまつやの家うちへ百兩ひゃくりやうに身みを沈しづめ、その百兩ひゃくりやうの金かねを持もつて、弟おとこの文彌ぶんやは京都きやうとへ上のぼつたそれ限りで、風かぜの便たよりも音信いんしんもなく、行方ゆくへが知しれぬと苦くるしい話はなし。

十兵 (聞きいてぎつくり思入おもひいれあつて) 何なんといふ、そんならその古今こきんの弟おとこは、文彌ぶんやと云いふ座頭ざとう、あの文彌ぶんやといふか。

彦三 左様さやうでござります。

十兵 え、(トびつくりする。彦三合點ひこさうがてんの行ゆかぬ思入おもひいれ。)

彦三 兄者人あにぢやひと、何故なぜそんなにびつくりなされます。

十兵 おれがびつくりしたのは、(ト思入おもひいれあつて) お、さうだ、その古今こきんとやらが、嘸まづ頼たよりないことであ

らうと思つて、それでびつくりしたのだ。(ト言ひまざらす。)

しづ あれ、また肩がつかへて来た、苦しやく。(ト苦しき思入。)

彦三 姉者人、私が肩を揉んであげませう。

しづ あ、彦三殿、どうで助からぬ病ひ、捨て、おいて下さんせ。

彦三 でも、そのやうに切ないのを。

十兵 いやくおぬしが揉んでは却つて氣がつまる、おれが揉んでやるから、おぬしは店へ行つて、藥

を煎じて来てやつてくれ。

彦三 はいく、どれ藥を煎じて來ませう。(ト彦三は暖簾口へはひる。)

十兵 (上手へ来て) どれくおれがそろく擦つてやらう。お、だいぶ支へて來た、これぢやあ切ない

筈だ。いつたいそなたの病ひは、こゝが斯うといふ取りとめた事のない、名の附けやうのない病

ひだと醫者殿の話し、何でも氣をしつかりと持ちさへすれば、斯ういふ病ひはなほるものだ。

しづ いくら氣をしつかり持つてら、毎晩々々夜半になると、枕頭へ血だらけな座頭が來る故、怖い怖

いと思ふので、こんな病ひになりました。

十兵 (びつくりして) なに、毎晩々々座頭が來る、さうしてそりやあいつ頃から。

しづ 十月の二十日の晩から、

十兵 なに、十月二十日の夜から。南無阿彌陀佛々々。(ト小声に言つて眼を拭く。)

しづ あ切ない、肩がつかへて苦しいく。

ト苦しき思入。時の鐘。花道より座頭こぶ市、安下駄を穿き笛を吹きながら出て、

こぶ 按摩鍼の療治。

ト呼びながら舞臺へ来る。十兵衛聞付けて、

十兵 丁度いゝところへ按摩が来た、餅屋は餅屋だ、揉んで貰ふがいゝ。おい按摩さんく。

こぶ はいく、お呼びなさいましたか。

十兵 おい此方だ、療治をしてくんな。

しづ これを聞いて、いゝく、旦那殿、私や按摩と聞いてもぞつとする。止しにして下さんせく。

十兵 何だ、按摩はいやだ、そいつアおえねえ、折角呼んだからちつとばかり。

しづ いゝく、どうぞ堪忍して下さんせ。

十兵 さうか仕方がねえ。おい按摩さん、折角呼んだが病人が厭だといふから、氣の毒だが錢はやるか

ら歸つてくんなせえ。

こぶ いえ私わたしあ錢ぜに貰もらひぢやあなし、たゞ錢ぜにはお貰もらひ申まをしません、然しかし口明くちあけだからたゞ歸かへるは厭いやでござり  
ます、どなたでもようござりますから、ちよつとでも揉もませて下さいまし。

十兵 何なんだ口明くちあけだから、縁起えんぎが悪いから揉もませてくれろ、なるほどこりや尤もつとだ、そんなら仕方しかたがねえ、  
おれをちつとばかり揉もんで下さい。こちらへはひんなせえ。

しづ 旦那だんなどの、私わたしは座頭ざとうさんを見るも厭いや、そこの障子しやうじをしめて下さい。

十兵 おいいく。(ト屋體やたいの障子しやうじをしめて、) 今藥いまくすりができるから、ちつとの中辛抱うちしんぼうしてゐるがい。(ト十  
兵衛べゑ二重下ぢゆうしもて手の障子しやうじを明け、勝手口かてぐちへ來きたり障子しやうじを明けながら) さあ按摩あんまさん、あぶねえよ、手てを出だしな。

こぶ はいいく、有難ありがたうござります。

ト十兵衛按摩べゑあんまを中なかへ入れ、障子しやうじをしめて二重ぢゆうの横手よこてへ出る。この時ときこぶ市手いちてをひかれながらよき所ところへ  
連れられて來くる。

十兵 座頭ざとうさん、大きおほに御苦勞ごくろう、一服ひくお香のみなせえ。

こぶ (思入おもひいれあつて、) はいいく、お療治れうぢをしまつてにませう。

十兵 さうか、おれも一昨日をと、ひたひ旅たびから歸かへつて、まだ草臥くたびれがぬけねえから、足あしをちよつと揉もんで下さい。

ト枕まくらを出だして横よこに寐ねる。こぶ市足いちあしを揉もみにかゝる。

こぶ もし旦那、今御病人があるとおつしやつたが、お上さんでござりますか。

十兵 さうさ、女房が病氣で困るのさ。

こぶ それは嘸お困りでござりませう、そして一昨日旅から歸つたとおつしやりますが、どちらへおいでなさりました。

十兵 據ねえ用で、上方へ行つて來ましたが、一人旅といふものは面白くないものさ。

こぶ いえも、一人旅は不自由なものでござります。

十兵 座頭さん、お前上方の方へ行きなすつたことがあるかえ。

こぶ はい、上方まではまるりませぬが、駿河までは参りましたよ。(ト言ひながら段々強く揉む思入。

十兵 あいたゝゝゝ、痛えゝ。座頭さん、もうちつと靜に揉んで下さい。

こぶ はいゝゝ、かしくまりました。

十兵 座頭さん、お前駿河はどこまで行きなすつた。

こぶ はい、宇都谷峠まで行きなすつた。

十兵 や、(トびつくり思入、こぶ市膝のあたりをぐつと掴む思入) あいたゝゝゝ、あゝ痛えゝ。(ト跳び起き) 座頭さん、お前めつほふかないな、ひどい揉みやうをするぢやあねえか。

ト薄ドロく、寐鳥、凄き合方になり、こぶ市すつぼんにて文彌に替り、十兵衛の足を撫つてゐる手  
をきつと取つて、

文彌 まだノ、こんなことぢやあない、骨は骨、皮は皮、揉んでノ、揉み殺すのぢや。(トきつといふ)  
十兵 (見ておどろき) や、唯の座頭と思つたに、扱はそぢは文彌だな。

文彌 宇都谷峠の、恨みの一念思ひ知れ。

十兵 お、尤もだノ、主人の爲めに、據なく、そなたを殺して取つた金、口惜しからうが文彌殿、親

兄弟もあらうから、その人達へ恩金は、利に利を添へて戻さうから、こらへて成佛して下され。

文彌 い、や浮ばぬ、成佛せぬ。恨みを晴らさでおくべきか。

十兵 お、尤もだノ、許して下せえ。こらへて下せえ、南無阿彌陀佛々々。

ト大ドロくにて文彌十兵衛をさいなむ思入あつて、文彌後退りにて消える。十兵衛はアツと苦しみ  
倒れる。暖簾口より彦三薬鍋を持ち出で、思はず十兵衛に躓きびつくりして、

彦三 や、お前は兄者人、どうなされた。もし兄者人々々。(ト引起す、と十兵衛心附きて)

十兵 南無阿彌陀佛々々々。(ト眼を閉ちて思入)

彦三 是さ兄者人、氣をしつかり持たつしやりませ。

十兵 (眼を開きて、) おぬしは彦三か。

彦三 兄者人、どうなされました。

十兵 (氣を替へて、) おれとしたことが、女房の介抱でがっかりして、持病の癩が起つたのだ。

彦三 さうして、もう癩はなほりましたか。

十兵 もうさつぱりとよくなつた。(ト言ひまぎらしてほつと思入。)

しづ 障子の内にて、あゝ切ない、苦しやく。

彦三 あれ、姉者人が。

十兵 また苦しいか。(ト障子を明けて介抱し、) これもやつぱり文彌が祟り、いやさ、たゝいてやらうか。

あゝ情ないことだなあ。

ト時の鐘、ばたくになり、花道より番頭丈八走り出来り、舞臺へ来て裏口の障子へ行當り、

丈八 あゝ、居たわく、これく、こゝを明けて下さい。

彦三 はいく、どなたか、明いてをります。(ト行つて障子を明ける、これにて丈八はつたり内へ倒れる。)

えゝびつくりいたしました。や、そなたは丈八ぢやないか。

丈八 はい、丈八でございます。あわてさつしやりまするなく。あいたゝゝゝ。

十兵（も来て）これは丈八殿、何の御用で今時分。

丈八今時分来たその用は、大變でござるく。

兩人なに、大變とはどのやうなこと。

丈八大變といふは、娘御のお駒さんが才三の家で、主人の息子筑川喜藏と中間の小兵衛を殺し、自分

も喉を突いたれど急所をよけて死にきらず、御役人方へ委細の様子を白状した故、疵人なれど主

殺しなればお駒さんは囚人、白木屋の家は亂ちき騒ぎでござるわいの。

十兵 そんなら、お駒どのは主殺しの囚人とな、やゝゝゝ。

彦三 詳しい仔細は知らねども、かういふ事のないやうにと、此の身一つに思案を極め、離別したのも

水の泡となつたか、ほい。

ト當惑の思入。ドロくになり、文彌行燈よりよろしく現はれる。おしづこれを見て、

しづ あれまた座頭が、あれえ。（ト苦しみ、どうとなる。）

彦三 なに、座頭とは。

ト彦三の眼には見えぬ思入、十兵衛駈けより介抱、

十兵 これおしづやア、氣をたしかに持つてくれ。これ、弟、水を一口、早くく。

彦三はいく。

ト彦三茶碗へ手桶の水を汲む。此時丈八何心なく文彌を見附けて、

丈八や、幽霊だ。

ト着物を頭からかぶる。これにて彦三持つてゐる茶碗を落す。十兵衛文彌を見て手を合せるを、一時に木の頭に。

彦三とんだ、粗相をした。

ト合點の行かぬ思入にて四邊を拭く。十兵衛は口の内にて念佛を唱へる。文彌は段々正面の壁へ薄くなる仕掛け、これをキザミ、大ドロくにてよろしく、

ひやうし幕

### 五幕目大切

柴井町伊丹屋の場

品川宿海禪寺の場

鈴ヶ森提婆殺の場

(淨瑠璃)

古今彦三の名を假宅に

心中玉露白小袖 (富本連中)

〔役名〕 伊丹屋十兵衛、提婆の仁三、文彌の亡霊、白木屋彦三、尾花才三郎、文彌母おりく、桂庵婆お百、彌次馬の喜太、居酒屋の若い者彌太、丁稚三太。十兵衛女房おしづ、佐野松屋古今等。

〔伊丹屋の場〕 本舞臺上手へ寄せて三間常足の二重、正面紺暖簾左右腰羽目、此上法度書の張出し、下手九尺平舞臺、酒肴と書きし三尺の立障子、内に小血物を載せし臺、盤臺に鮎のどて、軒口は

河豚、蛸などつるし、後ろに酒樽舞臺前下手に三人の仕出○△□床几へ腰をかけ、小血物にて酒を呑みゐる。下手に番公肴をこしらへゐる。若い者彌太、丁稚三太角盆を持ち給仕をしてゐる。總て柴井町居酒屋の體。角兵衛獅子にて幕明く。

彌太 おわらいく、

○ おいゝ小僧どん、ぬるいから熱くしてくんな。

三太 はいゝゝ(ト燗銚子を取つて)中臺のお二人さん、お爛なほしだよ。

△ おいゝ若い衆、鮪鍋をもう一枚と、刺身を少しばかり作つてくんねえ。

彌太 はいゝゝ入口のお二人さん、鮪鍋が一枚にお刺身が一人前出ます。

番公 あいゝゝ、鮪鍋はお二人前だの。

彌太 知れたことだアな、

○ もし、お前さん方は、大師へでもおいでなすつたのかえ。

△ いえ、私等わたしらは海晏寺かいあんじの紅葉もみぢを見みに行いきましたのサ。

□ 今日けふはお天気てんきがいゝから、嘸賑さそいぢややかでござりましたらう。

△ いやも、大そう人ひとができました。

○ いや、大そう人ひとが出るといへば、四五日後じつあとに材木町ざいもくちやうの白木屋しろきやのお駒こまといふ娘むすめが、引廻ひきまはしに出でたと

いつて、見物けんぶつが大そう噂うはさをしてをりました。

△ 私わしなぞも見みに行いきましたが、お慈悲おじひなもので、死しんだ故捨札ゆゑすてふだばかりで濟すみました。

三太 もし、その白木屋しろきやはこつちの家の親類しんるゐでござります。

○ はあゝ、こつちの家の親類しんるゐか、めつたなことは言いはれないものだ。

△ 悪わるく言いはねえでよかつた。

彌太 はい、お肴さかなができました。

三太 お爛かんもよろしうござります。

ト彌太鍋やなべと刺身ししみを持もつて來くる。三太爛かん銚子ぢょうしを持もつて來くる。皆々みなみな捨すセリフにて酒さけを呑のみゐる。甚九じんくの合あ方角兵衛かたかくべゑ獅子ししの鳴物なりものにて、花道はなみちより提婆だいばの仁三にさそぼろなる装女なりをんなの半纏はんてんを引ひつ、額ひたひに疵きずのある惡漢わるものの打扮うちへ、酒さけに酔よつたるこなし、彌次馬やじまの喜太きだ同じくそぼろなる装なり、素面しらふにて仁三にさを肩かたへかけて出來いたり、

仁三 これ、そんなに引張るな。下馬の直が下らあ。

喜太 あぶないから一緒に来いといふことよ。

仁三 べらほうめ、おらあ酔やあしねえ。(ト言ひながら居酒屋を見て、)こよう待ちや、こようで一べいやつて行かう。

喜太 今角力酒屋で呑んで来たばかりぢやあねえか。もういゝ加減にしや。

仁三 酒ばかりはいゝ加減にできるものかえ、もう五合引つくり返さにや浸み足らねえ。

喜太 おらあ呑まねえから堪忍してくれよ。

仁三 手前呑まざあ、飯でも喰はッし。

喜太 先へ行くのにおそくならあ、歸りにしやな。

仁三 まあ、いゝから入れよ。

彌太 あ、おわらひく。(ト呼立てる。)

仁三 何だ、おわらひく、べら棒め、をかしくもねえことが笑へるものか。

彌太 いえ左様ぢやござりませぬ、手前は居酒屋でござりますから、おはひりなさいました、申したの  
でござります。

仁三 入れと言はなくつても、今入るとこだ。

彌太 店は込みやつてをりますから、奥へいらつしやりませ。

仁三 大きにお世話だえ、どこへ行かうとおれが勝手だ。(トひよろくする。)

喜太 これサ、店は込んでるから奥へ行けよ、若い衆が困らあ。

仁三 手前おつウ肩を持ちやあがるな。(トひよろくとして○の足を踏む。)

○ あいたゝゝゝ。

喜太 それ見ろ、人様の足を踏んだ。もし、喰え酔つてゐますから御免なさいまし。

○ なに、よろしうござりまする。

仁三 よくなくつてどうするものだ。足を出してゐるから踏んだのだ。大事の足なら踏んべしよつて懐

へでも入れておけばいゝに。

喜太 これさ、詰らねえことを言ふな。うぬが粗相をしておきやあがつて。もし、どうぞ堪忍して下さいまし。

いまし。

○ その御挨拶には及びませぬ。ほんの出合頭でござります。

仁三 おつウ言やあがるな。

喜太 え、黙つてゐろといふに。

ト兩人二重へ上り胡坐をかき、懐から手を出しおたつてゐる。

彌太 御酒はいくつかけませう。

仁三 いくつといつて高が二人だ、四升も五升も呑みやあしねえ。まあ二合かけて下ツし。

彌太 お肴は何にいたしませう。

仁三 何にすると言つたつて、何があるか知れるものか。先づお肴を承はらうか。

彌太 お暖かなものでは、鐵砲鍋に鮪鍋、お刺身に煮魚、はしらのお吸物にこはだのぬた、鰯の魚田もできまアす。

仁三 よくしやべる奴だな。もう一ぺん言つて見や。

彌太 お暖かなものでは、鐵砲鍋に鮪鍋、お刺身に煮魚、はしらのお吸物にこはだのぬた、鰯の魚田も

できまアす。

仁三 先づ、はしらのお吸物にしよう。(ト向うの肴を見て)こう若い衆、向うに吊してあるなア何だ。

彌太 へい、鐵砲でござります。

仁三 お臺場へでも持つて行けばい。(ト又見て)あの隣りの首縊りを見たやうな、赤いものは何だ。

彌太 あれは、蛸たこでございます。

仁三 なに、蛸たこだ。(ト目を据すゑて見て) 若い衆わかしう、あの蛸たこの足あしは何本なんぼんある。

彌太 御常談ごじやうだんおつしやりますな。

仁三 知らねえから聞くのだ、何本なんぼんあるよ。

彌太 八本はっぴんでござりまする。

仁三 疣いぼはいくつある。

彌太 そりやあ知しれませぬ。

仁三 分わからねえ奴やつだな。

喜太 手前てめえが分わからねえのだ。

仁三 あの柱はしらの脇わきに立たつてゐる、禿頭はげあたまは何なんだ。

三太 番公ばんこうさん、お前まへを禿頭はげあたまだとよ。

番公 これでも昔むかしは青あをかつた。

仁三 おい、昔むかし青あを禿頭はげあたまは、ありやあ何なんだ。

彌太 あれは番公ばんこうでござりまする。

仁三 番公はんこうの羨附にっけはできねえか。

彌太 御常談ごじやうだんをおつしやりませ。

喜太 これ、忙いそがしいや、早はやくさう言いつてやりやな。

仁三 それぢやあ先まづ、はしらのお吸物すひに鮭さろの刺身さしみ、鐵砲鍋てつぱうなべにこはだのぬただ。

彌太 かしこまりました。奥おくのお二人ふたりさんは、はしらのお吸物すひに鮭さろのお刺身さしみ、鐵砲鍋てつぱうなべにこはだのぬただ

二合ごまかゝりますよ。

番公 あいゝゝ合點がつてんだ。

仁三 おいゝゝ若わかい衆しゆう、この野郎やろうは呑のまねえから、飯めしをいつしよに持もつて來くて下くだッし。

彌太 はいゝゝ。

喜太 おい飯めしはいゝよ。おらあ今いま喰くつて來きたから。こゝう手前てまえ豪氣ごうきに手てを廣ひろげるが、おれの懐ふところを當あてにす

るな。おらあ一文もんもねえよ。

仁三 いゝと言いふことよ。手前てまえにはこは背負せはせやあしねえ。落着おちついて飯めしでも喰くえ。

ト彌太やた吸物すひ刺身さしみなどを盆ぼんへ載のせ、爛鉄子かんでうしを提きげ來きりて、

彌太 へい、お待遠まちどほでござりました。

仁三 待遠どころか、べらぼうに早かつた。

喜太 さあ、おらあ呑まねえから、大きいものでさつさとやれ。

仁三 酒はづれはしねえものだ。一ぺい呑め。

喜太 呑まねえといふことよ。

仁三 野暮な奴だな。(ト仁三茶碗を出す、喜太ついてやる、仁三ぐつと呑んで)あゝ、いゝ酒だ。(ト刺身を喰ひ)  
喜太 や喰つて見ろ、このきはだはめつほふにうまい。

喜太 そりやあ芝肴だ、わけはねえ。

彌太 へい、お誂へでござります。

ト河豚鍋を持つて来る。兩人捨セリフにて酒を呑む。仕出も此中酒を呑みながら、仁三を見て氣味悪  
き思入、

仁三 何だ、人の面アぢろ／＼見やあがつて、おれが面がをかしいか。

喜太 誰も何とも言やあしねえ。

仁三 なに、言はねえことがあるものか。(トこれにて仕出はそこ／＼にしまつて)

△ さ、おい、若い衆、こゝはいくらだえ。

彌太 三百七十二文でござります。

○ こつちはいくらになるえ。

彌太 四百二十四文でござります。

○ あい、勘定はこゝへおくよ。

△ 八文足りないが、一朱でまけてくんな。

彌太 へい、よろしうござりまする。まあお静かにおいでなさいまし。(ト皆々門口へ出る。)

○ いやも、とんだ生酔が来やあがつたので、うまい酒をまつくした。

△ 何だか、風の悪い奴だ。

○ あんな奴には、掛り合はないことだ。

仁三 何だと。

三人 そりや聞えた。逃けろ。(ト皆々下手へ逃げてはひる。)

仁三 此奴らア待ちやあがれ。(ト立ちかゝるを。)

喜太 これさ、うつちやつておけよ。

仁三 なに、彼奴らに掛り合ひをつけて、勘定でも吹ツかける處よ。(ト言ひながら酒を呑み、河豚鍋を喰つて。)

この鐵砲はめつほふにうめえ、だまされたと思つて喰つて見や。

喜太 おらあ河豚は喰はねえ。

仁三 何故喰はねえのだ。

喜太 命がをしいや。

仁三 しみツたれなことを言ふな。どうで覺の上ぢやあ死ね、え身體だ。

喜太 これ、何をいふのだ。(ト喜太仁三の袖を引く、仁三思入あつて)

仁三 おい／＼若い衆、もう二合かけて下ツし。(ト燗銚子を出す)

彌太 はい／＼。(ト受取り、はひる。)

喜太 まだ手前呑むのか。

仁三 いゝやア、うつちやつておけ。ドレお燗の來る中寐て待たうか。

ト仁三ひどく酔ひし思入にて、下の方へ寐る。喜太思入あつて、

喜太 もし若い衆、堪忍してくんねえよ。ひどく喰え酔つてゐるから。

彌太 いえ、どういたしました。

喜太 (仁三をゆすぶりて) これ、起きろよ／＼、先へ行るのがおそくならあ。起きろと言つたら起きね

えか。(ト又ゆすぶり) いめえましい、とう／＼寐ねてしまつた。(ト有合ふ障子の衝立を仁三の前へ引寄せ身體を隠し) おい若い衆、お邪魔たらうがちつとのうち、こゝへ寐ねかしておいてやつてくんねえ。おらアちよつと行つて來るとこがあるから、もし此の野郎やろうが起きたなら、先へ行つたといつて、そして勘定を取つてくんせえ。

彌太 かしこまりました。

喜太 それぢやあ若い衆頼んだよ。

彌太 よろしうござりまする。

喜太 どれ行つて來ようか。(ト甚九の合方にて喜太は下手へはひる。後時の鐘になる)

彌太 とんだ尻残りをおいて行かれた。(ト表へ思入あつて) おゝ今の間にすつぱり日が暮れた。

番公 灯りの支度をしたがい。(ト是にて彌太、三太灯棚と店の八間へ灯りを點ける) 今夜は肴がよく賣れ

たから、もう仕舞つてもいいのだが、旦那だんなに悪いから看板へ灯りを入れておくがい。

三太 あい／＼。(ト表の行燈へ灯りを入れる)

彌太 おい、金公、今夜はたしか湯が早仕舞だつたの。

番公 増上寺で御法事が始まつたから、今夜から早仕舞だ。

彌太 それぢやあ今の中、一風呂へひつて来ようぢやあねえか。

番公 生酔ひはいゝかえ。

彌太 大丈夫、眼の覺める氣遣ひはねえ、もし眼が覺めたら六百二十四文だから、小僧貰つておいでく

れよ。

三太 あいゝ。六百二十四文だね。

彌太 忘れるなよ。さあ行つて来よう。(ト彌太、番公の兩人は下手へはひる。)

三太 どれ、洗ひ物でもしておかうか。

ト三太下手にて徳利、皿などを洗つてゐる。四つ竹節にて花道よりお百肩入の半纏、布子、紺の足袋  
垢擦りの附きし手拭を被り、桂庵婆アの打扮にて、文彌の母おりくを連れ出來り、

お百 をばさん、お前の行く所は向うの酒屋だよ。

りく 左様でござりますか。

お百 まあ行つて御覽、どんなにいゝお家だらう。(ト言ひながら本舞臺へ來り) はい、御免なさいまし、

おや小僧どん洗ひ物か、噤冷たからうの。いつもながらよくお働きた、お前のやうに働く者はこの柴井町に一人もないよ、ほんに小僧どんの親玉といふのだ。また鮪の胴骨があつたら、葱の青

みと除けておいておくれよ。ときに旦那はお家かえ。

三太 あい、奥にゐなさるよ。

お百 大門のお百婆アが雇女を連れて参りましたと、ちよつとさう申しておくれ。

三太 あい／＼。(ト奥へ向ひ)もし旦那え、よくしやべる料庵の婆アさんが参りました。

十兵 おい／＼今そこへ行くよ。(ト合方になり、奥より十兵衛煙草入を提げ出來り)お、おつかあおいで

か。

お百 (腰をかけて)旦那、此間はお眼にかゝりませぬが、めつきりお寒うなりましてござりまする。お

障りもござりませんでお日出度うござりまする。先日は澤庵を有難うござりまする。早速かくや

に致しまして、お前さん、親父さんと二人で久しく樂しみましたりましてござりまする。ほんに此間の若

い衆はどうでござりまするか、お前さん、ふだんお世話になります旦那の所故、どうぞよい奉公

人と捜しましたところ、お前さん、あの若い衆はまことにまめでそして正直で、お前さん、よ

く働きます。こちらのお家へ悪い奉公人をお世話いたしては濟みませぬ。まだお前さんお禮も申

しませんんだが、先達は親父どんが、深川までお使に参りましたそのお禮に、お金をお貰ひ申し

まして有難うござりまする。まことにあんなことをなされましては、お前さん、お氣の毒でござり

まする。まあお聞きなすつて下さりませ、お前さん、御存じのお酒好故お貰ひ申して歸りますと  
お前さん、直に五合買つてくれと申しますから、お酒は旦那で酒でもお貰ひ申して呑むがよい、  
それよりはそのお金で禪でも買ふがよいと申しましたを、お前さん、たうとうお酒にして下さいま  
した。まことに困り者ぢやあござりませぬか、お前さん、酒を呑むお錢はござりませんが、禪  
を買ふお錢がござりませんで、お前さん、お恥しいこととござりますが、三年この方禪無しでござ  
ります。お前さん、勿論禪の禪では間に合ひませぬ、お前さん、越中禪にいたしました  
も、二布なければできません、お前さん、御存じはござりますまいが、大の痴氣持で、罌丸が大  
きうござりますから、お前さん。

トお百首を振りくしやべる、十兵衛呆れし思入にて、

十兵 ころくおつかあ、もういゝゝ。なるほど小僧が、おしやべりだと言つた筈だ、實にお前は口  
まめだ。

お百 いえく、これでも皆さんが、無口だくとおつしやります。

十兵 いや、無口どころか八口位だ、はゝゝゝ。

お百 ほんに私としたことが、自分の勝手なことばかり申しまして、お前さんの肝腎のお話をいたしま

せなんだ。此間お頼みなされました、雇女のよいのがござりましたから、お前さん、直に連れて参りました。(トおりにへ思入あつて) このお婆さんでござりますが、以前は相應に暮したお人でござりますが、お前さん、不仕合せで此間から月雇女に出なさいますが、年をとつてゐなさいます故、臺所の世話はしたくないと申して、ござりますが、その代りお裁縫はどんなことで、出来ますわいな。

りく (思入あつて) これは、旦那様でござりますか、お初にお目にかゝります。年を取りましてござります故、お役には立ちますまいが、どうかお使いなされて下さりませいな。

十兵 あい。年恰好も丁度よければ、そつちさへよくば頼みたい、今言ふ飯を炊いたり、水を汲んだり、臺所の用をするものは他に爲手があるし、又裁縫もたいがい外へ出せば、小僧の仕着衣統び位はして貰はずなるまい。唯お前に頼むは内の者が眼が悪い故、手水に行つたり何やかやするに、男の手では氣がおけて却つて病氣に障る故、その世話をして貰ひたいのだ。

りく それは嘘お困りなされませう、私も年久しく眼の悪い者の世話を致しましたが、それは、手のかゝるもの、慣れましたことなれば、ようお世話いたしませうわいなあ。

十兵 どうぞ面倒を見てやつて下さい。都合がよくば、今夜からゐて貰ひたいが、どうだらうね。

お百 直にゐて貰ひたいと、旦那様がおつしやるが、お前の方の都合はえ。

りく はい、何も用事はござりませぬから、直に居りましてもよろしうござります。

十兵 それぢやあどうぞさうして下さい。

りく かしこまりましてござります。

お百 これ、をばさん、こゝのお家は大事のお得意、お前氣を附けて勤めておくれよ。お定りは一分二

百だが、湯銭はもとより、そりや古いもの、一枚位は、お心の附かない旦那ぢやあないから、必

ず大事に勤めておくれよ。左様なら、明日宿書は持つて上ります。おや、私としたことが、お上

さんのお見舞も申さず御免なすつて下さいまし、小僧どん又澤庵の出しおきがあつたら、かくや

にするから除けておいておくれよ。をばさん大事にお勤めよ。旦那おやかましう。はい、左様な

ら。

トお百よろしく思入あつて、花道へはひる。三太後を見送り、

三太 よくしやべる婆さんだ。

十兵 いつものながら幕なしには困る。さあ、をばさん此方へ上んなせえ。

りく 左様なら、御免なされませいな。(トおりくは二重真中へ上る。)

十兵 今聞けば、をばさん、お前も眼の悪い人の世話を、久しくしたと言ひなすつたが、お前の家に眼の悪い人でもあつたかえ。

りく はい、悴が眼が悪うござりました。

十兵 む、その息子といふのは盲人かえ。

りく 左様でござります。三つの年に怪我をいたし、兩眼ともつぶしまして、按摩をいたしてをりました。

十兵 して、お前の家はどこだえ。

りく 片門前でござりまする。

十兵 え、(トぎつくり胸に思ひ當る思入あつて、)して、その息子さんの名は何と言ひなさるえ。

りく はい、文彌と申しまする。

十兵 え、(トびつくりなし、)思ひがけない。してその息子は。(ト十兵衛は因果が廻り來たかとの思入ありく(涙を拭ひて、)お話し申すも涙の種、お聞きなされて下さりませ。その悴文彌ことは、しかも昨年

十月初め、官位を取りに京都へ百兩持つて上りましたを、今に歸つて來るであらうと一月待ち二月待ち、待つに甲斐ない一年越し、何の便りもござりませねば、占やら巫女やら御籤も幾度か取

りましたれど、心の迷ひに生死判らず、その官金も文彌の姉が苦界へ沈めし身の代金、便りに思ふ姉弟二人に別れてその後は、十一になる妹と年老い朽ちし私ばかり、足手纏ひの妹を知邊へ預けて雇女奉公、惜しからぬ身をながらへて苦勞致すも、文彌が生死を聞いて死にたうござります故、旦那様、御推量なされて下さりませ。(トおりに涙を拭ひある。十兵衛衛なき思入。)

十兵衛 あゝ年とりし身に尤もだ。何にしろ氣の毒なことだが、してそのお前の息子どのが、金を入れておいたのは、胴巻か財布かえ。

りく はい、私が着てをります、この小紋の餘り切で、財布を縫うてやりましたが、それへ入れてまゐりました。

十兵衛 (ぎっくり思入あつて) はあ、小紋の財布か、それぢやあその息子殿は、所詮再び歸るまい。一年この方便りのないは、たしかに所持の官金故間違ひがあつたに違ひない、旅へ出た日を命口に、訪ひ弔ひをしてやんなせえ。(トホロリと思入、おりくはツツと泣き伏し)

りく 左様なら、悴めは死にましてござりませうか。

十兵衛 萬に一つ無事か知らぬが、まあ死んたらうと思はるゝ。

りく あゝ、自由になりますことならば、此の身と替つてやりたいに、後へ残つて子供故死ぬにも死な

れず愛目を見ますは、何たる因果でござりませうぞ。

十兵 頼りに思ふ子に別れ、嘸お前も便りなからう、ふとしたことで思ひがけなく、さあ、かうして雇女におくといふのも、何ぞの縁であらうから、これから此方の家にあるて女房の世話をして下さい。その替りには私がまた、文彌さんになり代りお前の世話をしようから、雇女に來たと思はずにお前の家にある積りで、暇があつたら寺詣り物見遊山も氣任せに、行きたい時に行きなさい、小遣錢も上げるから心を樂に持ちなさい。

りく 馴染もない私を御親切に、そのやうに言うて下さる旦那様、嘸や娘が聞きましたら悦びますでござりませう。便りのできまことならば、文彌にもこの事を言うて聞かせたうござりまする。

十兵 あゝ、その文彌さんのことは言ひなさんな。これからお前を親と思つて私が世話をしますから、必ず／＼案じなさんな。さうしたことから少しは佛も、

りく え、

十兵 いやさ、佛いぢりは年寄の役、線香でも上げてやんなせえ。

りく 何から何まで有難うござりまする。

トおりに手拭にて涙を拭ひ、ひれ伏す。十兵衛不便なといふ思入。此の時御立の蔭に寐てゐた仁三眼

の覺めし思入にて、

仁三 あ、——(ト伸びをしながら起上り、衝立を除けて、) あ、好い心持に酔つてぐつすりやつた。

小僧 水をいつべいくんな。

三太 はいく。 (ト下手より朝顔茶碗へ水を汲んで持つて来る。)

仁三 (取つて呑んで、) あ、うめえ。 (ト呑みほして、この水の味ばかりア、下戸の奴等は一生知ら

ねえ。(トあたりを見て、) 喜太野郎め、先へ行きやがつたか、おほかた勘定はしやあしめえ。(ト十

兵衛に向ひ、) もし、旦那、火を一つ貸しておくんなせえ。

十兵 さあく、お附けなさい。(ト煙草盆を出す。)

仁三 雁首で引寄せ煙草を喫みながら、) もし旦那、勘定はいくらでござります。

十兵 はい。これ小僧、店の者は何處へ行つた。

三太 湯が早仕舞だから、抜けない中にはひると言つて行きました。

十兵 あの、それぢやあ、御勘定はいくらだか。

三太 いえ、その生酔の勘定なら、六百二十四文でござります。

十兵 これはしたり、お客様をどうしたものだ。御免下さりませ、形ばかり大きくても、まだ子供でこ

ざります。

仁三 なに生酔だから生酔だといふのだ。子供は正直でいゝ。それぢやあ勘定は六百二十四文だね。

十兵 左様でござります。

仁三 どうぞ御面倒でも、お剩錢をおくんなせえ。

十兵 はい、二朱でござりますか、一分でござりますか。

仁三 二朱でも一分でもいゝ、金はお前に預けてあらア。

十兵 何もお預かり申した覚えはござりませぬが。

仁三 なに、ねえことがあるものか、去年お前に預けておいた、百兩の中で六百二十四文引いて、残り

をわつちに返してくんなせえ。(トきつといふ)

十兵 (きつくりして) や、(ト思入あつて) これ、をばさん、奥に病人一人あるから、奥へ行つて世話を

してくんなせえ。小僧や、をばさんを案内しろ。

三太 はい。

りく 左様なら、御免下さりませ。(ト合方にて善太先におりく附いて奥へはひる。十兵獨仁三に向ひて)

十兵 もし、御酒の上かは知らないが、此方に何も預かつた覚えのないに預けたとは、どこと私に預け

なすつたのだ。

仁三 何處でもねえ、宇都谷峠で。

十兵 やあ。(トびつくり思入。)

仁三 何と覚えがあらうがな。

十兵 む。

仁三 十兵衛さん、お久しうござりやした。(ト世話に言ふ。)

十兵 む、さういふこなたは。

仁三 忘れなすつたか十兵衛さん、去年の十月鞠子の藤屋で簀巻にされて、阿部川へ打ちこまれるを、

お前さんの情で其の晩助かつた、私ア提婆の仁三といふ旅を抹ぎの護摩の灰さ。

十兵 (仁三の顔をとつくと見て、額の疵にその時の面差變つて見忘れたが、言はれて見れば覚えぬ、鞠

子で一つに泊つたお人。)

仁三 (こゝにお前がるようとは、夢さらおらア知らなんだ。今日友達の交際で、喰つた上へ又喰ひ、た

うとう倒れてお店の邪魔、酔が覺めたか聞いた聲、はて誰だらうと延しり、見りやあ尋ねてゐた

お前、どこでどう廻りあふか、悪いことは出来ねえものだ。(ト家の内をぐるぐると見て) 三間間口

の居酒屋、思つたよりやあ立派な暮し、これぢやあ金を預けておいても、まあ女心といふもの  
だ。

十兵 最前から聞いてゐれば、二言目には十兵衛に金を預けたと言ひなさるが、私にはどうも合點が行  
かない。

仁三 とほけなさんな十兵衛さん、宇都谷峠の辻堂でうめえ仕事をしてゐながら、知らねえ顔をしなさ  
んな。

十兵 宇都谷峠の辻堂で、うまい仕事をしたなどは、そりやあいつたい何の事だ。

仁三 何のこつたもねえものだ。しらで言つたらお前の爲めに悪からうと思ふから、隠してやるのにそ  
つちから、白ぼくくりやあ言つて聞かさう。あの晩藤屋を迫出され、せう事なしに宿はつれの  
賽の神の古宮でごろりと寐たが寐附かれず、煙草をくらつてまじくと、夜の明けろのを待つと  
ころへ通りかゝつた二人連、ばれた仕事の埋草に、覗いて見りやあこなたと座頭、こいつアおれ  
をはく氣だなど、後から附いて行つて見りやあ、情こかして峠へ連出し、ばつさりやつて而も百  
兩、護摩の灰も及ばねえ素人衆にやあい、肚胸だ、長い短い言はねえから、由分けにして五十兩  
きれいにおれにくんなせえ。

十兵 又してもく、此の身に覺えもないことを、こりや言ひかけをさつしやるな。

仁三 わゝ、それぢやあお前はどうかあつても、知らねえと言ひなさるのか。

十兵 さあ、知らぬことは何處までも。

仁三 いゝや、知らねえとは抜けさせねえ。たしかな證據を見せてやらう。

ト仁三腰より夫の提煙草入をとつて、十兵衛に突きつける。十兵衛びつくりして、

十兵 や、その煙草入は、(ト取りにかゝるを、仁三持ちかへて、)

仁三 どつこい、それから御覽じろツさ、黒棧留の三度形、而も金具は八重酸獎、定紋附の道中提、

の煙草入はお前のだらう。

十兵 その金物はいくらもある、鹽町仕入れの安煙草入れ、こりやあ世間にまゝある品。

仁三 それぢやあ、これも知らねえとか。

十兵 この十兵衛が所持といふ、たしかな證據のないものを。

仁三 よく知らねえといふ人だ。こよう、これを見な。(ト煙草入の段口より請取を出して、)此の煙草入の技

口に、入れてあつたは京から江戸へ、手紙を出した島屋の請取り、名宛は伊丹屋十兵衛様、かう  
いふたしかな證據があつたら、知らねえとは言へめえが。

十兵 む、(トぎつくり思入あつて) 八重酸漿の紋附は鹽町仕入の金物故、私ばかりとも言へないが、その請取があるからは、いかにも私が煙草入、したがそりやあ京から歸りに、たしか伊勢路と落しました。

仁三 その落したといふのが、もう日串の抜けねえ初まりだ。いくらこなたが白をきつても、地藏の顔も三度形、この飛脚屋の請取やあ知らねえとは言へめえが、後前揃はぬ言葉の文夢か現か宇都谷で、いかに座頭を殺せばとて、人を盲目にした仕方、所は鳶の細道だがさりととは太え臍ツ玉、夜盜の上に人殺し、その兇状も八重酸漿、この段目の上らぬ中命替りの煙草入、五十兩ちやあ安いものだが、黙つて言ひ直で買ひなせえ。(トきつといふ十兵衛思入あつて)

十兵 そりやあ落した煙草入を、拾つてわざ／＼この江戸まで、持つてござつたこなさん故、それ相應の禮ならばしまいものでもないけれど、身に覺えねえ人殺し、泥坊なぞと脅されてはその禮さへもできませぬ。といつたらそれを證據にして、訴人をすると言はれうが、私は兎もあれこなさんは、商人めかして旅かせぎ、叩いたならばどのやうな埃りが立たうも知れぬ身の上、いらざらん世話よりも、おのが頭の護摩の灰、追つた方がよさうなものだ。

仁三 (尻を捲り、十兵衛に詰寄り) やかましいやい、黙りやあがれ。そりやあ汝が言はねえても江戸を喰

詰め旅へ出て、護摩の灰をするからア、夜盗かツさき家尻切り、時代な文句ア言ひたくねえが、暗え所へも幾度か、ひゃあかぎれの切れた身體、どうで始終は刀の錆、犬の餌食になるおれと、おぬしア一緒に入る氣か。(ト手強く言つて氣を替へ和らかに) そりやあ悪い筋だ、譬にもいふ此世の地獄、素人と違つて私らア、行きやあまんざら羽目通りで、干物の頭を嬉しがり、嚙ちるやうな、こけでもねえ、娑婆にゐるより樂々と一疊敷に住居して、髪は日髪にいっけその掛つた着物を着る株だが、それでも行く氣は少しもねえ。ましてお前は素人のこと、こゝあ一番考へものだぜ。(ト和らかに十兵衛の顔を見る、十兵衛ちつと思案の思入、仁三又手強く) これ黙つてゐちや分からねえ。否とか應とか撈撈しろえ、背負つて立たれぬ兇狀持でも、うぬ等に頭を押へられ此のまゝ、素手ぢやあ歸られねえ。さういふ羽目になつたからにやあ、汝が悪事を言ひつけて案内がてら一緒に行かう。おれが身體を捨てたところが高が無宿の喰詰者、三間間口の居酒屋奉公人の四五人も、使ふ旦那と板附に列んで掛かりやあ本望だ。さあ、この二品を證據にして訴人をするぞ、覺悟しろ。

ト仁三きつとなつて立上る。十兵衛思入あつて、

十兵衛 そんならどうでもこなさんは、その二品を證據にして、この十兵衛が訴人をする氣か。

仁三 知れたことだ。(ト十兵衛を見る。十兵衛當惑の思入、仁三思入あつて和らかに) とさあ見す知らすの者ならば、言はにやあならねえところだが、鞠子の宿で命をば助けられたお前故、打明話をしなさりやあ、殺した科も私が背負ひ、五十の所は二十でもうんといふのが根が江戸ッ兒、實ア私も喰詰めて長く江戸にもゐられぬ身體、九州路に知邊があるからそれを頼つて行く積り、何をいふにも路用に困り、どうしようかと思ふ矢先、思ひがけねえお前に逢つたは、こゝで路用を借りろといふ、天道様の言は、お指圖、寐覺の悪いこの二品、いくらかくらは言はねえから、路用の金を貸して下せえ。

十兵 むう、すりや、鞠子の宿で逢つたを縁に、路用を貸してくれとあるなら、そりや貸すまいものでもねえ。

仁三 そんなら貸してくんなさるとか、そいつア有難い。首尾よくそれで九州まで、脱れて行きやあ仕合だが、もし又途中で提りやあ宇都の谷峠で座頭を殺し、金を取つたも私が仕業と、どうで斬られる身體だから、御恩送りに背負つて行きやす。その替りにやあさうなつたら、見舞ぐらゐは入れてくんせえ。

十兵 何にしろこなさんも、いつがいつまでさうしてゐたら、トゞの仕舞は身の詰り、これから下へ行

つたなら心を入替へ堅氣になり、生業でもさつしやるがよい。澤山のことはできまいが、少し位は用立ませう。

仁三 そりやあ右難うござります。實に私も九州へ行きやあ堅氣になる氣だが、持つて生れた病ひ故父もや彼方で悪事をして、江戸へ逃けて出て來たら、お邪魔ながら二階へでも、匿つておいてくんなせえ。その時必ず十兵衛さん、見ねえ顔はならねえよ。

十兵衛 そりやあ私も男だから、碎けてお前が頼みなさりやあ、世話をしめえものでもない。

仁三 さうお前が言つてくんなさりやあ、下へ行くにも氣が丈夫だ。善は急げといふからにやあ今夜直に立ちたいが、先立つ物は路用の金、二三十兩貸してくんなせえ。

十兵衛 かうなる上は得心づく、いかにも貸して進ませうが、生憎金が今手元に。(ト言ひかけるを)

仁三 いけ常談を言ひなさんな、この屋體骨で二十や三十、なにねえことがあるものか。

十兵衛 さあ、見かけは五十や百兩には困らぬ顔をしてても、内證で質をおくのが商人、二季の拂ひや五節句に困る時には神奈川の、伯父のところへ融通をすれば、旅へ出がけを幸ひに、私と一緒に神奈川の伯父の所まで行つて下さい。三十兩が五十兩でも金を借りて進ませう。

仁三 そりやあ思召は有難いが、神奈川までは一晩泊り、お前に足を運ばすのが。

十兵 丁度ほかに用事もあれば、今夜の月を幸ひに、これから行つたら黎明には、神奈川迄は行かれよう。

仁三 それぢやあお前に旅立を、送られて行くやうだ。

十兵 まあ何にしる支度をする中、一べいやつて待つて下さい。

仁三 丁度さつきの持越しで、熱くしてやりてえところだ。

十兵 酒も肴もそこにあるから、心置きなく呑みなせえ。

仁三 そいつは何より有難い。(ト十兵衛仁三を切つてしまはうといふ思入にて立上り)

十兵 その呑む酒が。(ト末期の水といふ心)

仁三 え、ト振返り顔を見合せる、十兵衛氣を替へて軽く)

十兵 酔はつしやんなよ。

ト唄になり兩人よろしく、此の道具廻る。

(伊丹屋奥の場、本舞臺三間の間平舞臺、正面暖簾口、上手は佛壇、地袋月欄、下手鼠壁、上手折廻し障子屋體、いつもの所門口、下手勝手口、こゝにおしづ眼病みの物にて床の上は夜着にもたれ

てゐる。おりく背中を擦りゐる。此の見得にて道具留る。

しづ もし、をばさん、大きに聞いて來ましたから、もうようござんすわいな。

りく そのやうに御遠慮なされましては、却つてお目にさはりますわいな。(ト擦りながら) してまあ、

あなたは何日からして、このやうにお煩ひなされましたぞいな。

しづ さあ、忘れもせぬ去年の十月、而も二十日の明方より風邪を引いたが初にて、一年あまりのぶら

ぶら病ひ、かて、加へて風眼にて、此間より兩眼とも、明くことならぬ盲目同然。

りく それは嘸まあ、御不自由でござりませうわいな。

しづ 今聞けばお前の息子さんも、眼が不自由でござんしたさうな。

りく 左様でござります。三つの年に目を潰し、長々苦勞をかけし上、行方知れずになりましたが、大

方死にましてござりませう。

しづ 頼りに思ふ子に別れ、嘸力なうござんせうな。

りく 御排量なされて下さりませいな。(トやはり合方にて、奥より十兵衛出來りて)

十兵 お、雇女のをばさん、御苦勞であつた。つい忙しいので忘れてゐたが、まだ藥が一帖残つてあつ

た、どうぞ煎じてくんなせえ。

りくかしこまりましてござります。煎じやうは常の通りでござりますか。

十兵 お定りの一ぱい半入れて、一ぱいに煎じるのだ、生薑が二片入りますよ。

りく はいく。どれ、お煎じ申しませうわいな。

トおりにく枕頭にある薬包を持つて奥へはひる。十兵衛おしづの傍へ来て、

十兵 おしづ、どうだ少しはいゝか。

しづ はい、大きによろしうござりますわいな。

十兵 そりやあ何にしてもいゝことだ。そりやあさうと、おれは今夜急な用で神奈川まで行つて來ねは

ならぬ故、家を氣を附けてくれよ。

ト戸棚より紺の脚絆、一腰を出し、脚絆を穿きかける。おしづこれを聞き扱はといふ思入あつて、

しづ もし旦那、今夜神奈川へおいでなさんすは、どうぞ止しにして下さんせいな。

十兵 いや、おれも夜る夜中行き度くもないが、是非行かねばならぬことだ、丁度羅女の來たを幸ひ、

あのをばさんに頼んでおけば、何も不自由なこともあるまい。直歸つて來るから氣を附けてるて

くれ。

しづ いえくどうあつてもお前さんは、片時も放されぬわいな。

トおしづ旬よひ寄より、身拵みこしらへする十兵衛じゅうべゑの袖そでを捉とらへ留とどめる。

十兵衛 それだといつて、免のがれられない急きふな用ようで行いくことだ。何なにも女郎ぢやうらう買かひにでも行いくといふのぢやあなし、わる留とどめをするにやあ及およばない。

しづ いえく留とどめねばならぬわいな、それとも達たつて今宵こんよひの内行うちゆかかねばならぬことならば、私わたしもいつしよに連つれて行いつて下くださんせいな。

十兵衛 そりやあおしづ分わからねえといふものだ。達者たつしやなものなら知らないこと、病人びやうにんを連つれて何處どこへ行いかれるものだ。

しづ (むつとせし思入おもひいれにて) なるほどさうでござんせう。病やみほうけた私わたしをば連つれて行いく氣きはござんすまい。

十兵衛 こりやあ汝おぬしあ、あぢなことをいふナ。

しづ さあ言いはねばならぬ十兵衛じゅうべゑ殿どの、お前は私わたしを置おき去さりに、捨すてる心こころでござんせうがな。

トきつと言いふ。

十兵衛 (思入おもひいれあつて) 何なにを馬鹿ばかなことをいふのだ。今いまでこそ女房じやうばうなれ、以い前は恩おんあるお主しゆうの娘御むすめご、假令たとへとんなことがあらうとも、汝おぬしを捨すて、濟すむものが。

しづ いえくさうでござんせぬ。お前は捨てる心でござんす。

十兵 とは又何故。

しづ お前の心が水臭い故。

十兵 なに、水臭いとは。

しづ 連れ添ふ女房に身の大事、なぜ明かしては下さんせぬ。

十兵 何と言やる。

ト稽古笛の入りし合方になり、おしづ探りく佛壇の下段より小紋の財布を出し、

しづ お前の心が水臭いといふのは、即ちこれでござんす。

ト財布を十兵衛の前へ出す、十兵衛びつくりして、

十兵 や、これをどうして。(ト思入い、おしづ思入あつて)

しづ いつぞやお前が上方から戻つてから、佛壇の下段は決して明けるなど、言はしやんすほど見度う

なり、夫の言葉を背いてはそでないこと、思ひながら、お前の留守に下段の内明けて見ればこの

財布、何故これが見せともないか不審な事とそのまゝに、様子も聞かず二年越し、最前雇女のをば

さんが話を聞けば財布の合紋、扱はいつぞや上方にて調達なせしといふ金は、眼かいても見えぬ文

彌殿を。

十兵 あゝ、これ。(ト仁三、おりにくへ憚る思入、おしづ小聲にて、)

しづ お前は殺して取らしやんしたかと、ぞつと身の毛も立つ怖さ、隠すことほど現はるゝと、お前の命にかゝはる財布、絡む紐の女房に何故匿しては下さんす、現在殺せし文彌殿の母御が来た故身の大事と、眼界も見えず病みほうけし私を捨て、逃げようとは、思へば情ないことぢやなよ。

トおしづは十兵衛に縋り泣く、十兵衛は表と裏へ憚る思入あつて、

十兵 その恨みは尤もだが、これには深い様子のあること、仔細をいふにもこの財布の裏と表に鶺鴒の眼、逃げも隠れもせぬほどに、今夜一夜やつてくれ、あとでとつくり仔細を話さう。

ト言ふにも構はずおしづ十兵衛を捉へる。合方段々凄みになり、おしづへ文彌の亡霊の乗りうつりし心にて、十兵衛を恨めしさうに見上げて、

しづ え、恨めしい、お前はなあ、私がこの眼の潰れしも元はと言へばお前故、文彌殿がいくせの思ひで調べたりし官金を、取らうばかりに邪慳にも宇都谷峠で殺害なせし、その一念に此の身の苦しみ、而も十月二十日の夜、明方近き小夜風にふるへ附しが病の因、つひにこの眼の潰れしも文彌殿の一念で、わが身を苦しめこなさんにもちめを見する死霊の祟り、晝夜六度の熱の差引、骨は

骨皮は皮、揉み碎かるゝ苦しきも、これも誰故こなたさん故、えゝ恨めしい十兵衛殿。

トおしづ物凄くいふ、十兵衛ぞつとせし思入にて、

十兵衛 あゝこれ、おしづ何をいふのだ、そなたは熱に浮かされたのか。

しづ 何の熱に浮かされよう、大事のく夫故、片時こなたの傍放れず、みぢめを見せねばならぬわいなう。

十兵衛 えゝ、病ひの業とは云ひながら。つまらぬことを言つてくれるな。

ト十兵衛おしづをちつと抱きしめ、仁三とおりにくへ憚る思入、おしづ振拂つて立上りきつとなり、

しづ いゝや言はねば腹が癒ぬ。宇都谷峠で文彌殿を、殺害なせしは伊丹屋十兵衛。(ト言ひかける。)

十兵衛 (おしづの目を押へて) えゝ又しても入らぬ口、此身に覚えもないことを夢か現か情ない。

トちつと思入、おしづ振拂ひ、

しづ 十兵衛は、人殺しぢやく。

トこれにて十兵衛捉へるを振拂ひ、ちよつと立廻つておしづの口をぐつと押へ、

十兵衛 ちえゝ、お主の娘でなくばなあ。(トおしづ十兵衛の手を振拂はうとするを、十兵衛抱締るはずみに目を押へし手過つて喉へかゝりぐつと締める。これにておしづ眼を明き苦しき、十兵衛をきつと見る。十兵衛びつ

くりして、) やゝ、こりや女房を。(ト手を放す、おしづひよろ／＼としてよろしく倒れる。) 手が廻つてか、敢ない最期、ホ、ホイ。(ト十兵衛びつくりしてどうと倒れる。)

仁三 (奥にて) 十兵衛さん、まだかえ。(ト十兵衛この聲を耳にし、二枚折屏風でおしづを匿し)

十兵衛 あい、今そこへ行きますよ。(トばた／＼にて、奥より彌太走り出来り)

彌太 もし旦那、雇女婆が裏口から、血相かへて駈出しました。

十兵衛 扱は大事を。

彌太 (屏風の内を見て) や、こりやあお上さんが。

十兵衛 あゝこれ、(ト押へて囁く。)

彌太 すりや、雇女の跡追っかけ。

十兵衛 ちつとも早く。

彌太 合點だ。

ト時の鐘にて、彌太逸散に花道へ走りはひる。奥より仁三出来りて、

仁三 さあ、支度がよくば行きやせうぜ。

十兵衛 大きに待遠であつた。

ト脇差を取つて立上る。此時薄下口くにて上手障子屋體へ座頭の影うつる。仁三見て、

仁三や、あの人影は。

ト行燈をぐるりと廻す。破れ穴あり、これにて人影消える。

仁三 どうやら座頭に。

十兵 え。

ト仁三ぞつとして身震ひをする。これといつしよに、十兵衛脇差をしゃんと差す。これを道具替りのしらせ。

仁三 あゝ、風でも引かにやあいゝが。

ト仁三尻をぐるりと捲り、小楊枝を使ふ。十兵衛屏風の内を見て愁ひの思入よろしく。時の鐘の送りにて、此の道具廻る。

(品川宿海禪寺の場)——本舞臺三間正 面黒幕、卒塔婆を結込みし玉椿垣、正面低き草土手、種々の石塔、上手に小高き石地藏、草井戸柳の立木、舞臺上下、真中に石塔、下の方草土手の淨瑠璃臺。

總て南品川海禪寺墓所の體。雨車雷の音にて道具納まる。とばたく、にて花道より古今島田臺、  
白の小袖、淺葱のしごき赤合羽を着て竹の笠をかざして出る。あとより彦三同じく白の小袖淺葱の帶  
おしよぼからげ、毛氈を肩へかけ俵を冠り走り出る。と突然ドンと落雷のしたる音して舞臺の柳の木  
に火花を散す、古今花道へどうと倒れるを彦三介抱して、

彦三 古今、心はたしかか。

古今 彦三さん。

彦三 これ。(ト留める。これより富本連中の淨瑠璃になる。)

心中と噂を白の晴小袖、帯も淺葱の縁ぞと放れぬ手と手彦三が、肩にかけたる毛氈は何處  
やら寒き秋の雛、古今の髪も寐亂れしよさの枕にひびきたる砧の槌も末枯れて、葉末に消ゆ  
る草の露、置きまどはせて佇めり。(ト兩人よろしく舞臺へ来る。)

これ、古今、恐ろしい今の雷で、持病の癩でも起りはせぬか。

古今 いえく、どうで死ぬる此身なれば、怖いことはござんせぬ。

彦三 思へば浮世に捨てられた二人が身の上、死出三途の晴着にと、對に仕立てた白小袖。

古今 蓮の臺で女夫の樂しみ、早う殺して下さんせいなあ。(ト思入。本釣鐘)

更渡る鐘の音くらき夜嵐に今死ぬる身も肌寒く、ぢつと寄添ふ眼もうるみ、愚痴な女に未練な男、こんな因果な悪縁を出雲と伊らの神さんが結び違へて馬鹿らしい。添ひ送けられぬ仇中で何故このやうに可愛いと、力の限り抱きしめ涙果てしはなかりけり。

彦三 今更いふも愚痴なことだが、白木屋を家出せう爲め心にもない吉原通ひ、ふつと上つた佐野松屋、そなたの顔を見てびつくり。

古今 いつぞや芝で弟の、難儀を救うて下さしたその時に、いとらしい親切なお方ぢやと、思ひこがれた彦三様。

彦三 様子を聞けばそなたの身の代百兩の、金を持つて出た弟の、文彌の行方を尋ぬる力と頼まれ、退くに退かれぬ浮世の義理。

古今 馴染重ぬる其中に、色や浮氣を取りおいて、眞實惚れて片時も、思ひきられぬ耳ひの因果。

彦三 白木屋を離別したその後は兄貴の家に掛り人、金のできやう當もなく紋目物日ちそなたの身揚り。

古今 呼ばる、だけは呼びとけても、お前と深うなつてより、爲になるお客は放れ、果は二人が身の詰り、弟の生死も定まらず、生きて甲斐ない私が身の上。

彦三 思案工夫もせん方盡き、一緒に死なうと覺悟を極め、この品川の海禪寺は彦三の菩提所、こゝで

死ぬるが本望故、弟子になると嘘言うて、座敷を借りて最期の支度。

古今 首尾よく廓を抜け出て、一緒に死ぬのは嬉しいが、後に残つた母さんに歎きをかける不幸の罪。

彦三 ふとした事の義理詰から、かうした仕儀になつたのも、

古今 前生からの約束事、

彦三 思へば、深い、

兩人 悪縁ぢやなあ。

顔と顔ををすりよせて、そもや初會の其夜から、男ばかりか氣にほれて、やるせないほど呼びたさに、焦れてかけたる待人の來ぬに木櫛の恥かしく、心で解けた結島田、まだ年のある其中に女夫にならばどうしてと、算へ暮して灸する日まで互ひに言交し、悦ぶ甲斐も情なや、冥土とやらへ早く行て添ひとけるのが樂しむと、思ひつめたる女氣に男心の亂れ焼刃になまる風情なり。(トよろしく思入あつて)

彦三 よしなき歎きに時移り、人目にかゝらば互ひの身の上。

古今 早うお前の手にかけて下さんせいな。

彦三 覺悟はよいか。

古今 南無阿彌陀佛

いざと二人が座をしめて、覺悟ながらも惚れた同志、輪廻の絆しめからみ、これか此世の別れかと、またもや下に手執る月の雲間に浮名残るらん。

トこれにて富本連中を消し、彦三は一腰を抜き、

彦三 南無阿彌陀佛

ト古今の胸先を突かうとする。ドロ／＼にて彦三の腕痺れる思入。彦三又突かうすると、ドロ／＼にて兩人ちよつと放心する。正面の石塔の水鉢より、文彌の亡靈現はれ、陰火燃える。これにて兩人心附き、四邊を見て、

はて心得ぬ。思はず腕の痺れしは、やつぱり木練の氣おくれか、覺悟はよいか。

古今 さあ／＼早う。

彦三 南無阿彌

ト又突かうとする。ドロ／＼にて文彌の亡靈刀を留める思入。彦三思はず刀を落すを古今見て、

古今 未練でござんす彦三さん、死におくれる其中に、追手の者に捕へられなば二人の恥、いつそ私が。

ト落ちたる刀を取つて死なうとする。始終ドロ／＼、文彌留める思入。古今刀を落す、彦三見て、

彦三 やゝ。最期を急ぐ際となり、二人の腕が痺れるは。

兩人 はて合點の行かぬ。(ト心得ぬ思入、文彌の亡靈思入あつて、)

文彌 おなつかしや姉者人、縁につながる彦三殿、死なうといふは無分別、こゝばかりに日は照らす、何處の裏にも身を忍び、頼りない母者人や幼い妹の身の上を、必ずく頼むぞや。

ト手を合せる、これにて兩人初めて文彌の亡靈を見ておどろき、

彦三 やゝ、さういふ聲は。

古今 弟文彌、どうしてこゝへ。

文彌 必ずく二人の衆、どうぞ知氣をとゞまつて、呉れと頼むは母者人や妹がこと、名残りは盡きじ  
早おさらば。

トドロく烈しく、文彌の亡靈卒塔婆の中へ消える。兩人びつくり思入あつて、

彦三 扱は今のは、弟文彌が亡靈にてあつたるか。

古今 そんなら弟は長旅にて、此の世を去りし亡魂の、

彦三 この場へ現はれ思はずも、二人が最期をとゞめしか。

古今 不便な弟が、

兩人 身の上ぢやなあ。

ト思入、禪の勤めはたくにて、花道よりおりく走り出で舞臺へ來り、兩人に躑きびつくりして、  
りくもしく御免なされませ、心の急きます者でござります、お免しなされませ。

ト此時月出る。古今おりくをすかし見て、

古今 や、お前は母さんぢやござんせぬか。

りく (びつくりして) ほんにそなたは娘のお菊、よい所て逢ひましたなあ。

古今 思ひがけない、どうしてこゝへ。私や恥しいく、堪忍して下さんせいなあ。

彦三 (思入あつて) いつぞや芝にて文彌殿が、難儀を救ひしその時は、而も留守にて逢はざりしが、扱  
は古今が母御なるか。

りく さうおつしやるはその時に、忤文彌が御恩になつた彦三様、思ひがけないと申さうか。

彦三 面目ない姿でお目にかゝりました。

りく 合點の行かぬ、彦三様といひ娘がその装、そんなら、二人は。さうしてこゝは。

彦三 この彦三が菩提所、品川の海禪寺。

古今 どうしてこゝへ夜夜中、お前は一人ござんした。

りく 私にもさつぱり合點が行きませぬ。これ娘悦びや、今日といふ今日文彌の敵が知れたわいの。  
古今 何と言はしやんす、弟の敵が知れたとはえ。

彦三 してくそれは、何處の何者。

りく さあ、その譯といふは今日晝間、柴井町の伊丹屋十兵衛といふ居酒屋へ、雇ひ奉公に行たところ、  
その十兵衛といふが、駿州宇都谷峠で、文彌を殺した奴でござるわいの。

兩人 えゝゝゝゝ。(トびつくり思入)

りく 不思議なことには、十兵衛の佛壇の下に文彌が持つて出た、小紋の財布が匿してあつたので、敵  
といふが知れた故、そなたに早う知らさうと吉原へ行く道を違へ、さまよひ來た此の墓原、思は  
す二人に逢ふといふも、これもやつぱり文彌が導き。もし彦三様、娘古今に力を合せ、文彌の敵  
十兵衛を、討たせてやつて下さりませ。(トこれにて兩人心苦しき思入)

古今 そんなら文彌は、宇都谷とやらで、人手にかゝり敢ない最期、その弟の敵といふは、  
彦三 縁につながる彦三が實の兄、十兵衛殿であつたるか、ホイ。(ト當惑の思入)

りく 何とおつしやる、あの伊丹屋の十兵衛といふは。

古今 力と頼んだ彦三さんの、兄さんでござんすわいな。

りくえ、え、え、え、え。(トびつくりする。彦三思入あつて、)

彦三 深い様子は知らねども、御主の爲めに、十兵衛殿、なくてかなはぬ金の入用、扱は宇都谷峠にて

金を持ちたる弟文彌を、金がほしさに手にかけて、奮ひとつたに疑ひなければ、現在文彌の敵な

がら、この彦三の兄なれば助太刀かなはぬ弟の敵。さあ古今、兄の代りに彦三を、此の場に於て

潔よく討つて未來の弟が、迷ひを晴らして呉れいはい。

古今 いえ、え、え、敵の弟彦三さん、知らぬこと故力と頼み、夫婦の縁まで結んだお前、どうして敵

と討たれませう、とても添はれぬ敵同志、冥土へ行つて弟へ、その言譚をするほどに、お前の手

にかけ私をば、早う殺して下さんせいな。

彦三 いや、え、え、それでは道ならず、やつぱりそなたが彦三を。

古今 いえ、え、私を、彦三さん。

彦三 いや、そなたが。

古今 い、え、お前が。

兩人 早う殺して下されいの。

ト兩人刃を互に突附ける。おりに聞いて、

りく かつぞや芝にて文彌の難儀を、助けられたる恩義と言ひ、娘古今が力と頼み、夫婦の縁を結んだと聞くからは、討つに討たれぬ文彌の敵、

古今 知らぬことゝて助太刀を、頼んだ夫は敵の弟。

りく 思ひまはせば淺ましい、血で血を洗ふ、

古今 夫婦兄弟。

彦三 因果同志の、

三人 寄合ひぢやなあ。

ト三人手を取りハア、と泣く。此の見得寺鐘にて、よろしく道具廻る。

(鈴ヶ森の場) 本舞臺向う一面の黒幕、敷疊み、真中に題目の大石塔、上手に石地藏、下手に駒の捨札、所々に松の立木。總て鈴ヶ森夜の體。時の鐘、雨車、波の音にて道具留る。と上手より以前の十兵衛半合羽、脚絆、草履、一本差し、小田原提灯を提げ、仁三尻端折り番傘を相合にさし出て、

十兵衛 今までのい、天氣だつたが、ばらく降りでまつくらになつた。

仁三 もう何時なんどきだらうね。

十兵 さうさ、品川しながはが引過ひきすぎだから、九つ半ほんでもあらうか。

仁三 夜よが更あきけたせるか、べらほうに寒さむい。

十兵 どうか、雨あめもあがつたやうだ。

ト雨車あまぐるま止とみ、仁三傘にさかさをすぼめ、下手ししての捨札うてふたを見て、

仁三 まつくらで知しれねえが、この捨札うてふたは何なんだしらぬ。

十兵 なに、そりやあ材木町だいまくらぢょうの白木屋しろぎやの娘むすめの捨札うてふただ。

仁三 あ、噂うはさのあつた主殺しころしかえ。

十兵 存命ぞんめいならば磯形いそがただが、死しんだが増ましか捨札うてふたばかり、南無幽霧頓なむうきとん生なま菩提俗名ぼだいぞくな北駒きたこま南無阿彌陀佛なむあみだぶつ々々。

トちよつと捨札うてふたへ回向まがうする。

仁三 お前まえ知しる人ひとかえ。

十兵 あい、私わしが弟おとの縁えんにより、白木屋しろぎやは親類しんるいさ。

仁三 この捨札うてふたを見るみにつけ、悪わるいことはしたくねえ、どうて始終しじうは廻ましの上うへ、ばつさりやられ、板前いたまへ、

と覺悟かくごはしてゐるけれど、紙幟かみうぼりや捨札うてふたを見るみると、身みの毛けがまたつやうた。あ、鶴龜つるかめ々々。

ト身震ひする。

十兵 誰しも命はをしいものだな。(ト十兵衛わざと提灯の明りを消し) 南無三、躓いて灯りを消した。

仁三 こいつアまつくらで、牙きにくい。

ト仁三行きかける。十兵衛後ろから一腰を抜き切らうとする。仁三刀の光りに振り返り十兵衛と顔見合せる。十兵衛ひらりと刀を後ろへ匿す、仁三これを見て、

十兵衛さん、お前さん何で抜きなすつた。

十兵 え、さあ灯りがありやあい、けれど、くらやみぢやあ險難、それ故脅しに抜いたのだ。

仁三 いや、さうぢやアあるめえ。お前おれを切る氣だらう。

十兵 なんと。

仁三 神奈川まで行つたなら、金を貸さうと連れ出して、人通りなき鈴ヶ森、文彌もどきにはつさりト。こゝでおれを切る氣だらうが、その手は喰はねえ、止しにしやれ。

ト仁三傘を持ちきつとなる十兵衛思入あつて、

十兵 む、さう推量の上からは、何を隠さうお主の偽、文彌を殺して奪ひし百兩、一旦は役に立てし故再び金の才覺なし、身寄の者に返せし上敵と名乗つて討たるゝ心、まだその金も揃はぬ中、我

身の大事を知つたるこなた、無心合力したところが一度や二度ではよも聞くまい、度重なれば現はるゝ悪事千里の人殺し、お上の成敗受くる時は、金も返さず身寄の者に討たるゝこともかなはぬ故、神奈川までと連出したは、こゝで此方を殺さう爲め、訪ひ弔ひはせうほどに。

ト十兵衛下にゐて言ひかける。

仁三

おきやあがれ。(ト十兵衛を蹴倒す、十兵衛どつと倒れ兩人きつと見得) うぬ大それたべてんしめ、上部は堅氣の商人風、内證拵ぎの人殺し、その身の悪事を隠さうとおれをこゝで斬る氣だらうが、うぬらが腕ぢやあ殺されねえ。もうかうなつたらうぬが身も、娑婆と冥土の生別れ、娑婆の仁三が引導を渡さぬとても駒の上、拔身の槍の供揃へ、天下いづばい淨玻璃の鏡に寫る紙幟、その身の素性を散し書、所も名におふ鈴ヶ森、犬の餌食になりやあがれ。

ト兩人きつと見得。

十兵衛 さういふそなたを先馬に、冥土の旅の一里塚、此の松並木の露霜と覺悟極めて往生しやあがれ。

仁三 何を小癩な。

ト波の音になり、十兵衛抜いて切つてかゝる。仁三傘にて立廻り、仁三上手の地藏を蹴倒し臺石を小楯に上へ上り傘を開き、十兵衛下より刃をさしつけきつと見得。鳴物替つて仁三一刀切られて倒れ、

十兵衛上手にて刀を振上げて見得、これより仁三糊紅になり手負ひの立廻りよろしくあつて、トッ十兵衛仁三を切倒し、とゞめに咽喉を突く。仁三突かれたまゝに十兵衛の鬚を掴む。此時十兵衛立上る。仁三咽喉へ刀の立ちしまゝ一緒に立上る、十兵衛掴み手をもぎ放す。仁三ひよろゝとして刀をさしたまゝ仰向けにばつたり倒れる。十兵衛ほつと思入あつて、

十兵 不便ながらも十兵衛が悪事を知つたがこなたの不運、やがて冥土で言譯なさん、成佛得脱してくりやれ。南無阿彌陀佛々々。

ト回向なし刀の血糊を拭ひ、シヤンと差し行かうとする。ばたくにて上手より彦三、古今出来り十兵衛に行當り、ちよつと立廻つて十兵衛真中に兩人左右へ別れ、きつと見得。この時二十日の月出で、三人顔を見合せびつくりして、

彦三 や、兄者人か。

十兵 さういふそちは、弟彦三。

古今 そんならお前が十兵衛様か。

十兵 して、この女中は。

彦三 廓で馴染を重ねし古今。

十兵 すりや文彌殿の姉なるか、してく二人が此のなりは。

彦三 廓の金にはつまるの慣ひ、若氣の至りに忍び出で、心中なさんとせしところ。

古今 亡き弟にとめられ、一先姿を匿さんと、大森在へ行く途中。

十兵 折も折、時も時、こゝで逢ひしは此身の願ひ、何を隠さうお主の爲めいつぞや宇都の谷峠にて、

そなたの弟を殺せし十兵衛、敵を討つて佛へ手向けよ。まつた弟彦三は兄弟ひとつでない證據、

この場で古今に助太刀致せ、唯残念なは文彌殿を殺して取りし百兩を、返せし上と思ひしも、才

覺ならぬ今日の今、こればかりが心残りの。

トはたくになり、上手より尾花才三郎麻上下大小、中間箱提灯を持ち出來り、

才三 やあ十兵衛こゝにありしか、首尾よく茶入の質受なし、本地へ歸參の尾花才三、殿のお覺え日出

度くして、拜領なせし金子百兩これで先頃の方が、我へ返せし百兩も又もやそちへ返し與ふぞ。

ト才三郎懐中より袱紗包みの證文を出し渡す。十兵衛開き見て、

十兵 やゝ、こりや金子と思ひのほか、これなる古今が年季證文。

才三 その金高も即ち百兩、それを古今へ渡しなば、そちが望みもかなふ同然。

十兵 すりや才三様にも一部始終を。

才三 唯今姉に承つたり。

十兵 扱は女房おしづには。

才三 一旦死せしも我所持の、身替り不動の利益にて、姉者人には蘇生なしたり。

十兵 はあ、忝い、今ぞ此の身の本望成就、文彌殿の官金も元はそなたの身の代金、此の證文は百兩

替り、いざ此の上は弟の敵、二人が對の白無垢も敵討のこれ晴着、さあ立上つて我を討て。

彦三 とは言へ、現在兄者人。

古今 縁につながる私がどうして。

十兵 討たねば古今彦三とも、文彌へ義理が立つまいが。

兩人 それぢやというて、

十兵 きりり討たぬか。

兩人 さあ、

十兵 さあ、

三人 さあ、

十兵 (思入あつて) 討たずば、いつそ。

ト十兵衛腹へ刀を突き立てる。

才三 やゝ、こりや十兵衛には。

兩人 早まつたこととして下されたなあ。

十兵 悔むは無用、十兵衛が命を捨てるは豫ての覺悟、これにてどうぞ文彌殿を、殺せし罪は許して下され。

才三 あつばれ健氣なそちが生害。

彦三 浮世の義理とは言ひながら、

古今 思へば果敢ない、

兩人 縁ぢやなあ。

才三 古今が身請濟む上は、彦三諸共白木屋の、家名相續いたせし上、一子出来れば伊丹屋の、後見なして家名を立てよ。

十兵 残る方なき御計らひ。

三人 ちえゝ忝い。

ト此時黒装束の捕手四人ばらくと出て、

捕手 人殺し、動くな。

十兵 何を。

ト此時樂屋頭取出て、

取頭 先づ今日はこれぎり。

と目出度く打出し

宇都谷峠（終り）

宇都谷峠



(附録)

主なる興行年表

岩戸の景清

年時	座名	名題	役割	景清	時政	重忠	義時	義盛	常胤	衣笠	朝日
嘉永三年三月	河原崎座	難有御江戸景清	ありがたやおえどのかひきよ	市川海老藏	坂東彦三郎	市川九藏	市川猿藏	尾上松緑	市川十郎	尾上菊次郎	岩井三郎
明治三十八年九月	歌舞伎座	難有御江戸景清	ありがたやおえどのかひきよ	市川壽美藏	市川猿之助	市川九藏	市川雷藏	中村三郎	市川文次	尾上菊次郎	市川八郎
明治四十一年一月	新富座	難有御江戸景清	ありがたやおえどのかひきよ	市川九藏	尾上幸藏	市川團吉	市川雷藏	中村三郎	市川文次	尾上菊次郎	市川八郎
大正五年十一月	市村座	難有御江戸景清	ありがたやおえどのかひきよ	尾上菊五郎	なし	中村吉太郎	坂東三守田勘彌	中村東藏	尾上菊次郎	河原太郎	河原太郎
大正八年一月	歌舞伎座	難有御江戸景清	ありがたやおえどのかひきよ	市川段四郎	中村右衛門	市村羽門	片岡市藏	市川中車	市村龜藏	中村福助	片岡我童
大正十二年二月	帝國劇場	岩戸だんまり	いよと	河村菊江	田中勝代	守田勘彌	坂東三郎	橋本(吳羽)	小原小春	鈴木福子	東日出子
閻魔小兵衛											

興行年表

年時	座名	名題	役割	若菜姫	春之助	小いそ	秋篠	浪六	豊後之助	鱈九郎	秋作
嘉永四年十一月	河原崎座	舛鯉瀧白旗	市川海老藏	市川團十郎	岩井兼三郎	岩井兼三郎	市川九藏	尾上新七	市川團十郎	河原崎	
文久三年十月	守田座	善惡浮世繪草紙	市川市藏	中村芝翫	津東三郎	津東三郎	中村鶴助	米次郎	岩井兼三郎	市川團十郎	
明治二年三月	市村座	善惡浮世繪草紙	市川權十郎	片岡我童	岩井松之助	岩井松之助	市川美藏	津次郎	市川團十郎	市川團十郎	
大正三年三月	新富座	善惡浮世繪草紙	市川左團次	松本幸四郎	坂東秀調	坂東秀調	段四郎	市川美藏	市川團十郎	市川團十郎	
嘉永六年二月	河原崎座	しらぬひ譚	坂東しうか	坂東しうか	坂東しうか	嵐璃寛	嵐璃寛	坂彦三郎	東彦三郎	嵐璃寛	
安政三年一月	大坂角座	けいせい白縫譚	嵐璃寛	中村玉七	藤川友吉	嵐璃寛	嵐璃寛	三郎	片岡市藏	中村市藏	
文久二年一月	守田座	繰返米升	津東三郎	尾上菊次郎	尾上菊次郎	尾上菊次郎	市川團次	大川團次	片岡市藏	中村市藏	
明治元年五月	守田座	心筑紫白縫物語	津東三郎	津東三郎	津東三郎	尾上菊次郎	尾上菊次郎	中村團次	中村團次	中村團次	
明治三年五月	中村座	宿櫻しらぬひ譚	津東三郎	津東三郎	津東三郎	尾上菊次郎	尾上菊次郎	中村團次	中村團次	中村團次	
明治五年七月	澤村座	彩絲模様白縫	坂東しうか	坂東しうか	坂東しうか	中村芝翫	中村芝翫	仲太郎	仲太郎	仲太郎	
明治十三年一月	中島座	雙筆白縫書語録	勝川又吉	尾上幸藏	澤村巴	中村芝翫	中村芝翫	坂東太郎	坂東太郎	坂東太郎	
明治十九年二月	市村座	しらぬひ譚	中村福助	河原崎	中村芝翫	中村芝翫	中村芝翫	片岡我童	片岡我童	中村福助	

白縫譚

明治二十二年六月	桐座	しらぬひ譚	澤村源之助	な	し	な	し	坂東秀調	な	し	市川	市川團次
明治二十年七月	歌舞伎座	しらぬひ譚	岩井松之助	中村雁治郎	坂東秀調	な	し	中村福助	な	し	片岡市藏	市川團次
明治三十三年三月	新富座	しらぬひ譚	し市川小若	尾上幸之助	な	し	又中五郎村	尾上菊松	嵐吉太郎	澤宗之助	澤宗之助	市川團次
大正四年十月	帝國劇場	しらぬひ譚	な	し	し	尾上梅幸	な	し	尾上松助	な	し	宗澤十郎
大正七年九月	歌舞伎座	しらぬひ譚	な	し	し	中村歌	な	し	市川中車	な	し	中村福助

雪駄直し

安政三年三月	市村座	夢結蝶鳥追	坂東龜藏	坂東彦三郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	關三十郎	淺尾與六	河原崎中村
文久二年三月	守田座	蝶小蝶鏡寫繪	市川小團次	市川市藏	尾上菊次郎	尾上菊次郎	嵐雛助	權十郎	津坂東三郎
明治七年八月	喜昇座	喜久富比翼蝶々	坂東鶴藏	松尾猿之助	大黒家昇若	大黒家昇若	坂東三八	尾上尾上坂	東市三郎
明治十三年十月	中島座	花蝶姿繪合	關三十郎	勝川又吉	澤村巴杖	澤村巴杖	壽三郎	尾上幸藏	坂東佳好
明治十七年十二月	新富座	身重荷市大注連	尾上松助	尾上登美松	中村かゝる	澤源之助	大谷門藏	市川左川	川中村歌
明治二十七年一月	歌舞伎座	夢結蝶鳥追	尾上菊五郎	尾上菊五郎	尾上榮三郎	坂東秀調	片岡市藏	尾上松助	市川伊三
大正七年一月	明治座	夢結蝶鳥追	市川左團次	市川壽美藏	市川松蔦	し	市川中車	片岡市藏	し

興行年表

大正八年  
十二月  
市村座  
夢鳥蝶鳥追  
尾上菊五郎  
津坂  
五東  
郎三  
中村時藏  
な  
し  
中村吉  
門  
中村東藏  
市  
男女  
藏  
市川米藏

宇都谷峠

年時	座名	名題	役割	文	彌	仁	三	重兵衛	彦	三	古今	才三郎	おしづ	小兵衛
安政三年九月	市村座	蕙紅葉宇都谷峠	つちもみぢのやたうひ	市川小團次	市川小團次	坂東龜藏	坂彦三郎	尾上菊五郎	河原崎五郎	尾上	尾上	尾上	尾上	尾上
慶應二年六月	守田座	蕙紅葉宇都谷峠	つちもみぢのやたうひ	市川小文次	市川小文次	中村福助	中村福助	坂東玉三郎	尾上梅幸	尾上	尾上	尾上	尾上	尾上
明治六年十二月	澤村座	宇都谷峠噂怪談	うつのみやのやたうひ	坂東太郎	坂東太郎	大谷門藏	橋東三郎	澤村千鳥	尾上	尾上	尾上	尾上	尾上	尾上
明治十一年八月	大坂中座	蕙紅葉宇都谷峠	つちもみぢのやたうひ	坂東太郎	坂東太郎	市川瀧十郎	實川雁正	嵐狂丸	橋治	實川	實川	實川	實川	實川
明治十六年八月	新富座	小夜砧宇都谷峠	さよとぎぬのやたうひ	尾上菊五郎	尾上菊五郎	市川左團次	市川左團次	市川	市川	市川	市川	市川	市川	市川
明治三十年九月	東京座	花薄宇都谷家話	はなうすのやまなし	市村家橋	市村家橋	市川染五郎	市川染五郎	市川	市川	市川	市川	市川	市川	市川
大正四年九月	市村座	蕙紅葉宇都谷峠	つちもみぢのやたうひ	尾上菊五郎	尾上菊五郎	中村吉門	中村吉門	中村	中村	中村	中村	中村	中村	中村

大正十三年七月廿八日印刷  
大正十三年七月卅一日發行

『默阿彌全集第一卷』

非賣品

補修

河竹糸女

校訂  
編纂者

河竹繁俊

發行者

和田利彦

東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷所

大橋光吉

東京市小石川區久堅町百八番地

著者權印



印刷所

博文館印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地

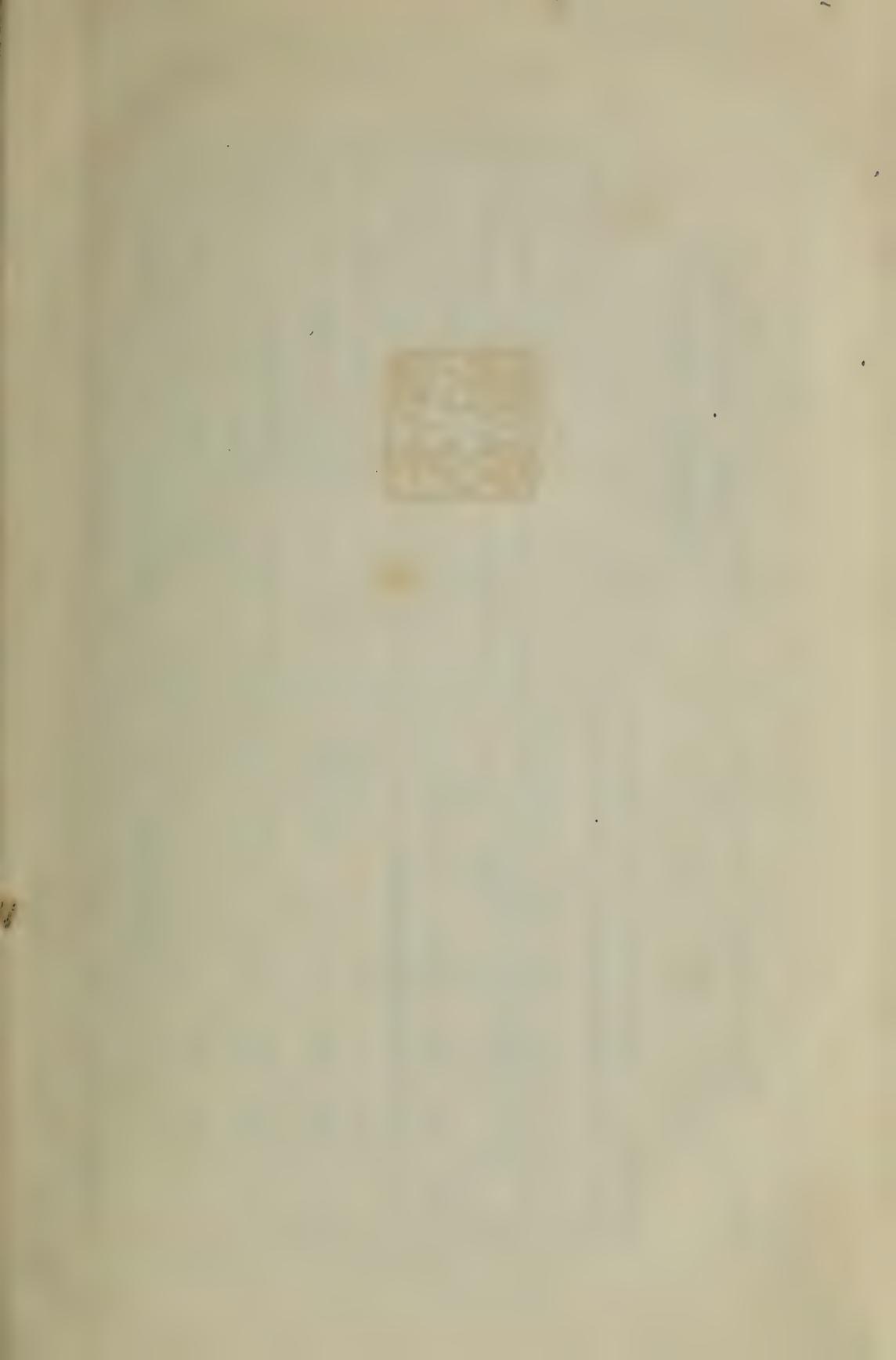
上演、轉載等の場合は藏版

者の許諾を得られ度候。

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行所

春陽堂







神田神保町  
電神田(25)296



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03056 2417

